
暗中模索で色々探求

ありすきゃろる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗中模索で色々探求

【Nコード】

N3790M

【作者名】

ありすきやるる

【あらすじ】

世の中には色んな人がいる。友達が欲しい人。友達なんていらな
い人。恋人より友達が欲しい人。友達だけで十分な人。恋人だけで
十分な人。変な価値観を持っている人。よくわからない人。ホント、
様々色々多種多様。この物語は、変わってるのか普通なのか、よく
わからないキャラたちが、時には協力し時には敵対しながら、自分
たちの価値観をぶつけ合い、自分たちの求める何かを探していく。
そんなテキストな、青春群像劇(?)でありたいなあ。と、思っ
て
ます。

プロローグ

そこは闇でした。一寸先も見えないような真っ暗闇でした。そこに九人の男女がいました。

ある男は疲れたようにこう言います。

俺は彼女じゃなくて友達が欲しいんだよ。彼氏彼女の関係とか、そんなの無理だつて。

ある女は強がるようにこう言います。

私は友達なんていりません。……まあ、あいつは例外ですけど。

ある女は力強くこう言います。

わたしは友達が欲しかったのに義妹が出来ちゃった。でも、友達作りを諦めたわけじゃないよ。

ある女は自信なさげにこう言います。

私には親友だけじゃない。他にも私を大切に思ってくれる、大切な人がいるはずなんだ。

ある男はニコニコ笑いながらこう言います。

友情は最高だよ。愛情とかいうドロドロしたものとは比べものにならないくらいいいものだね。

ある女はクスクス笑いながらこう言います。

愛情は何よりも尊いわ。友情とかいうくだらないものとは比べものにならないくらい素晴らしいものよね。

ある女は宣戦布告するようにこう言います。

私は絶対に生涯契約をします。誰がなんと言おうと、絶対に。

ある女は自分に言い聞かせるようにこう言います。

私たちは幼なじみで親友です。それで十分。別にそれ以上を望んで
いるわけじゃない。

そしてある女は、首を傾げて尋ねます。

あなたたちの言っていることは、よくわかりません。

私にわかるように、説明してください。

これは、そんな物語

辞書（あゝさ行）（前書き）

辞書じしょ

- ・ 気になったとき読む。
- ・ 登場人物と舞台設定が書かれている。
- ・ 外見的特徴とは、その人物の外見や雰囲気を感じ浮かべるヒント的な何か。だと思う。
- ・ テキトーである。
- ・ 自動追加機能あり。
- ・ キャラが増えると勝手に追加されるよ。

辞書（あゝさ行）

あかしつよし
明石剛

- ・私立八尾比丘尼高校3 - B所属。
- ・私立八尾比丘尼高校生徒会長。
- ・気が弱い。身長が低い。すぐに謝る癖がある。
- ・いつも人の顔色を窺って生きているような優柔不断な草食系男子である。
- ・そんな彼が生徒会長になった経緯は、友人に勝手に候補にさせられた。他に立候補者がいなかった。結果、生徒会長である。
- ・外見的特徴は、子犬。
- ・一部の女子生徒からは、子供、弟、マスコット、的な存在として愛でられている。
- ・他の生徒会メンバーは、全員女子生徒であり、俗に言う、ハーレム状態である。
- ・金銀砂銀の数少ない男友達である。

あまきはるとおる
秋春透

- ・南奈美、秋春守の父親であり、穂波さんの元夫。
- ・家族と仕事を両方頑張ろうとするお父さんでしたが、残念ながら穂波さんに捨てられた可哀想で影が薄い父親。
- ・現在は胡桃割市の東部付近で、秋春守と二人暮らし。
- ・外見的特徴は、四十代後半の普通なサラリーマンタイプ。
- ・穂波さんに未練たらたら。
- ・娘はやらん！とか言うタイプ。

あまきはるまもる
秋春守

- ・友情至上主義者という肩書きもち
- ・主人公？

- ・南奈美の双子の兄もしくは弟である。
 - ・私立八尾比丘尼高校2・B所属。
 - ・将棋部所属
 - ・友情という縁が何よりも楽と考えている。
 - ・作りやすく切れやすく、後腐れもないということ、あらゆる関係を友情で結んでいる。
 - ・彼にとっては家族も友達の一つである。
 - ・その反面、愛情というものを毛嫌いしている。
 - ・あんな呪いみたいにネバネバしていて拭っても拭っても取れない汚れみたいなものを大切だとか信じている奴とは相性が悪い。
 - ・彼にとって友達は、自分に利益がある人間である。
 - ・そういう考えを前面に出すと友達ができにくいと、理解しているので、そういう考えを表にはあまりださない。
 - ・友達は、たくさん。
 - ・笑顔を浮かべていると、友達ができやすい、さらに幸せになれるということ、年中無休で作笑顔を浮かべている。
 - ・穂波さんの教育により、友達とそれ以外を契約というもので分けている。
 - ・契約を結んでいるのが友達であり、結んでいないのがそれ以外。
 - ・とはいえ彼の契約は歪んでいる。相手に許可を取らない手法。契約には程遠いともいえる。
 - ・16才。誕生日は秋。
 - ・外見的特徴は、身長168前後の狐タイプ。
- あたし（あたし）
- ・ナナシノゴンベエ。名前を求める亡霊。
 - ・もはやその存在はオカルトレベル。
 - ・氷山つららから生まれた別人格であり、氷山つららとは違う別の何かである。
 - ・それは幽霊に似ている。

・多重人格とは違い、互いに互いがどういう存在かを理解し、対話することができる。

・まあ、多重人格もよくわからんけど。

・冰山つららの、友人であり敵でありアドバイザーであり冰山つららである。

・幼少時代の冰山つららが生み出した、想像上の友人の成れの果て。
・自らの存在が作り物であり、いつか消えることも、いつの日か冰山つららが自分が必要なくなるということも自覚している。

・自覚しているが、消えてやるつもりは毛頭ないらしい。

・ずっと冰山つららと一緒にいたい。いわば、冰山つららが桜木さくらに対して思っていた願望を、受け継いだ人格ともいえるが、歪みはその比ではない。

・いまいちわかりにくい存在であり、その存在を固定し理解する事は作者でさえ不可能である。

・というわけで、とある例え話で説明を逃げることにする。

・私はダイエット中です。それなのに目の前にはケーキが。ああ食べたい。ああでも食べたら太る。だから私は絶対に食べないぞ！でも食べたい。

・その時私の心の一部が囁きます『別に食べてもよくない？ 一個くらい食べても平気だよ。食べたらその分動けばいいんだよ。だから。食べちゃえ』

・それがもう一人の『あたし』

・外見的特徴は、冰山つらら。

・口癖は神経を逆撫でする『クスクス』笑い。

・それが入れ替わりのポイントでもある。

あゆみちゃんとのぞみちゃん（あゆみちゃんとのぞみちゃん）

・小学二年生の女の子。

・あゆみちゃんのお母さんと、のぞみちゃんのお父さんが最近再婚した。

- ・つまり最近友達から姉妹になった。
- ・あゆみちゃんは嬉しいらしいけど、のぞみちゃんは複雑らしい。
- ・色々子供だつて複雑なんです。
- ・胡桃割市西部に住んでいます。
- ・外見的特徴は、普通な小学生タイプ。
- ・出番予定未定。

石川さん（いしかわさん）

- ・私立八尾比丘尼高校2 - A所属
- ・脇役。女性
- ・Aの前ではBの悪口を言って、Bの前ではAの悪口を言う。
- ・そんなタイプの人間。
- ・自分の悪口も言われているが、自分も言ってるんだから、当然といえは当然でしょ。
- ・そんなタイプの人間。
- ・外見的特徴は、気が強そうなりリーダータイプ
- ・登場予定未定。

岩手先輩
いわてせんぱい

- ・私立八尾比丘尼高校3 - B所属。
- ・将棋部所属。
- ・脇役。男性。
- ・新潟と仲良しで、よくつるんでる。
- ・新潟に彼女がいるという裏切りを、彼はまだ知らない。
- ・金銀砂銀に対して普通に接する数少ない人物。
- ・外見的特徴は、野球部タイプ。
- ・出番予定未定

各務七味
かがみしちみ

- ・私立八尾比丘尼高校3 - B所属の女子生徒。

- ・料理部部长。
- ・おにぎりを作るのが得意で、その美味しさは、おかずは邪魔だからいらぬ。と、思ってしまうほど。
- ・作り方は不明。見ている人がまばたきをした瞬間に、作り終えている。
- ・外見的特徴は、長身で、腰まである長い黒髪、目は細く、凜々しさを感じさせる。
- ・その外見に似合わず、声は女の子の子にして可愛らしいと評判である。
- ・評判であるが、本人は恥ずかしく思っているので、あまり喋らない。
- ・胡桃割市東部の神社が実家であり、その巫女さんでもある。
- ・隣の小町にある、金銀砂銀の実家の神社とも親交があり、幼い頃から金銀砂銀を知っている。幼馴染っぽい。
- ・昔は金銀砂銀の事を『銀ちゃん』と呼び、女の子だと信じて疑わなかった。
- ・今は金銀砂銀を『砂銀君』と呼び、恋のアプローチを行なっている。

かがわともひろ
香川智弘

- ・私立八尾比丘尼高校2 - B所属。
- ・将棋部所属。
- ・秋春守の友達。
- ・桜木さくらが好きという噂だが、気が弱く全く行動に移せない。
- ・外見的特徴は、気が弱い文系タイプ。

かなえしあつ
鼎菜

- ・私立八尾比丘尼高校OG。
- ・私立八尾比丘尼高校文芸部先代部長。つまり、桜木さくら、氷山つららが一年時の文芸部部长。

・桜木さくらたちの二つ上の先輩にあたるが、年齢は四つ上であり、若葉紅葉、神社神裂と同年。

・高校で留年したわけではなく、ある事情で、小学校、中学校で一度ずつ留年した。

・桜木さくら、冰山つらはもちろんのこと、クラスメートとの交流もほとんどなかった。

・文芸部部室で様々なジャンルの本を読み漁り、文芸部の部費で自分の読みたい本を買い漁ったりしていた。買った本は全て文芸部の本棚に置いてきたのでまあいいじゃないか。

・外見的特徴は、知的、冷たい、無表情、何を考えているかがわからない。

・なんか近寄りがたい存在だったため、在学中彼女と会話した生徒はほとんどいないが、何かと目立つ生徒だったので、本人の知らないところで噂になっていた。

・例えば、夏場に涼しい顔して大盛りカツカレー（持参）を食べていたとか。階段の上り下りで息を切らしていたとか。自販機にお釣りが残ってないか確かめていたとか。廊下で盛大に転んだのに、何事もなかったように歩き出したとか。寝言で死ねばいいのと言っていたとか。誰もいない空間に話しかけていたとか。超能力が使えるとか。靈感があるとか。童話が好きとか。不治の病とか。昔人を殺したことがあるとか。

・噂の真偽は不明。ただ、体育には体調の問題で一度も参加しなかったという噂は事実であり、保険医猫猫子猫は少なからず彼女とも交流があった。

・進学も就職もせず卒業。

・卒業後現在、どこで何をしているかは不明。

かみやしろかたむき
神社神裂

・完璧で天才な姉という誇大広告持ち。

・胡桃割駅から上り方面、つまり北方面に三つ四つ行ったところに

ある、優秀な大学に通っている。

・自宅は胡桃割駅から下り方面、つまり南方面に三つ四つ行ったところにある。

・20才。大学三年生。

・若葉紅葉の、親友であり友達であり悪友でありアドバイザーでありアドバイザーされる側でもある。

・家庭の事情により、現在一人暮らし先を探し中。

・それにより、家庭の問題に対してはしばらく考えないことにしたので、暇といえば暇。

・なので妹に似ている氷山つららを構ってあげようかなあ。とか思っている。

・外見的特徴は、面倒見がいい優秀なお姉さんタイプ。

かみやしろのかんな
神社神無

・出来損ないの妹。

・高校二年。

・『神無と水無の放課後』 『彼女達の平々凡々な日常』の主人公

・出番無し。

きたもとのしほり
北本十糸

・私立八尾比丘尼高校3 - B所属の男子生徒。

・実質二人しかいない放送委員の委員長。

・幼い頃父親に見せられた、とある熱血教師物語ドラマの影響で、放送室を占拠したいという夢を持つ。

・小学一年の頃、その夢を果たし、放送室を占拠。教師に怒られたり、友人たちに囃し立てられたり、親にぶん殴られたりされた。それが楽しくて毎年占拠を繰り返す。

・中学三年の頃になると、すでに教師も友人も親も、あまり相手しにくれなくなった。なぜなら彼は放送室に勝手に入り、鍵を内側から閉めて、数時間居座るだけなのだ。しかも、放送に関しては頼め

ばちゃんとやってくれる。ただの、放送室の主みたいな扱いであった。

・夢つてのは、叶えると途端つまらないものになる。というのは彼が信じる世界の真理である。

・八尾比丘尼高校でも、もちろん放送室を占拠。入学してからまだ三日しかたつていない、早業であった。が、あまりにも行動が早く、保険医猫猫子猫と、クラスメートの明石剛以外はその偉業に気づかなかった。

・明石剛の泣き落としで放送室から出て、猫猫子猫に鉄拳制裁を食らった後、八尾比丘尼校長から直々に『放送室を自由にする権利』
『放送委員長の資格』をもらい、それ以降、彼は放送室を占拠していない。なぜなら、放送室は彼のものになったのだからだ。

・というわけで、職員棟二階にある放送室は、彼の部屋がもちこんだマンガやお菓子、ゲームなどであふれている。

・三年になるまでは、その一件で友人となった明石剛や、馬が合った金銀砂銀と、副委員長と、放送室でよく駄弁ったりしていた。

・毎年放送室を占拠していたときには味わえなかった幸福を、彼は今、感じている。

・外見的特徴は、バカなことにも付き合う、気のいい男。

・叶えたい夢と、手にいれたい願いは違う。というのが、最近彼が信じる世界の真理である。

・ちなみに、副委員長と交際中である。

金銀砂銀 きんぎんざぎん

・私立八尾比丘尼高校3 - B所属。

・将棋部部长。

・外見的特徴は、男宝塚タイプ。

・女っぽい男。

・声も高めなので、中性的な自分をおもしろがって、男と女を演じ分けている。

- ・そのため髪も長めにセットされている。
- ・服装ではなく、人格を着替えて遊んでいるという感じである。
- ・現在はそういう自分を楽しんでいるが、昔は女っぽい自分に対して色々悩んでいたらしい。
- ・猫猫子猫とは、その時々々お世話になったらしい。
- ・男女共に好かれ、嫌われている。
- ・若葉紅葉に一目惚れした感があるが、そんなこと初めての経験なので、あたふたあたふた。
- ・実家が神社なので、大学はそっち系に行くことが決まって推薦をもらえることが確定している。
- ・なので、受験生だけど結構暇。

胡桃割市くわみわりし

- ・この小説の主な舞台となる街。
- ・ひょうたんの形をしてる。
- ・くびれのところに駅がある。そこから西部、東部と分けることができなくもない。
- ・西部には、私立八尾比丘尼高校、無駄に広い自然公園、氷山つらが育った養護施設くるみわり園、若葉家、桜木家、氷山つらが住んでる『胡桃マンション』、くるみデパートなどがある。
- ・東部には、秋春家、鈴乃音家、喫茶店『CAT・S BELL』などなどがある。
- ・東部には住宅街が多くて、西部には教育機関が多いという噂である。
- ・小学校が五つあり、中学校も三つくらいあり、高校は二つ。選びたい放題である。大学ないけど。
- ・くるみデパートは、行けばなんでも揃うといわれているくらい大きいデパートである。
- ・くるみデパート内部にある鈴専門店『鈴の森』は鈴乃音鈴音御用達の店である。

- ・報告終わり。

小梅杏 こじゅめあんず

- ・私立八尾比丘尼高校図書室司書。
- ・たまに現文の授業もやる。
- ・やる気が微塵もない。
- ・だるい。眠い。あとよろしく。
- ・の三段法である。
- ・図書室で毛布被っていつも眠っている。
- ・クーラーも効いてるから夏場も快適。
- ・図書室業務は南奈美にほとんど任せているので問題ない。
- ・文芸部顧問であるが、特に何にもしない。
- ・外見的特徴は、二十代後半の司書タイプ。服装は基本的に、高校指定のジャージ。
- ・メガネ装備。
- ・教師とは思えない態度であるが、私立八尾比丘尼高校の大半の教師の態度は、そんなもんである。

小町 こまち

- ・胡桃割市の北側に位置する隣町。
- ・三途家、南家がある。
- ・小学校、中学校、大学がある。しかし高校はない。不思議がいっぱい。
- ・年中無休の大きな図書館があることで有名である。

冰山小雪 こおりやまこゆき

- ・冰山つららの実母。
- ・色々な事情により冰山つららをくるみわり園に預けた。
- ・すでに死去。享年34才
- ・遺書という形で、生涯唯一信頼できる人物に冰山つららを託した。

- ・おそろく地獄に堕ちている。
- ・本人もそう望んで自殺した。
- ・首を吊ってぶらぶらりー。

冰山つらら（こおりやまつらら）

- ・自身がない彼女という肩書き
- ・主人公？
- ・私立八尾比丘尼高校2 - B所属。
- ・文芸部所属。
- ・桜木さくらの親友。
- ・現在は一人暮らし。
- ・人格の根っこの部分で、人に対して恐怖を感じている。
- ・その恐怖が、『あたし』が存在できる温床である。
- ・桜木さくらと桜木押花以外とは、まだうまく付き合えない。
- ・が、そんな自分を変えようという気持ちはある。
- ・まずは、養親とうまく付き合えるようになるうと、夏休み後半は実家に戻った。

- ・神社神裂には心を許しつつある。
- ・16才。誕生日は冬。
- ・外見的特徴は、身長162前後、短めな髪で、人に慣れていない子猫が威嚇してるみたいタイプ。
- ・ホラー系はダメ。
- ・特に、自分と一緒に捨てられた西洋人形が『メリーちゃん』だったので、『メリーさん』はもはや人事ではない。
- ・『あたし』という存在が、自分でもわからなくなってきた。

冰山吹雪こほひやまふぶき

- ・冰山つららの養母。
- ・冰山小雪の姉。つまり冰山つららの本来なら伯母にあたる人物。
- ・冰山小雪の遺志をくみ、冰山つららを養子として迎えることにな

った。

・胡桃割市から離れた場所に家があるので、桜木さくらと同じ高校に通いたかった氷山つららは、そこで生活するのを嫌がり、一人暮らしとなった。

・氷山つららがこちらに心を開くまで、ゆっくり待つつもりである。
・月に一度は、氷山つららの生活を見に行っている。

・外見的特徴は、30代後半の、落ち着いた和風なお嬢様タイプ。
・実際、家柄があるお家のお嬢さんなので、お茶とか点てたりできる。

・とはいえ、氷山つららを養子に迎えた時点で家からは勘当されている。

・そのため、氷山つららは祖父母に会ったことはない。
・会わずつもりもないし会うつもりもないので、会うことはない。

こおりやまひゅうが
氷山氷河

・氷山吹雪の夫であり、氷山つららの養父。

・婿養子である。

・なかなか子供ができなかったので、氷山つららを養子に迎えるのは大賛成であった。

・よき父親であろうと努力している。

・外見的特徴は、30代後半の、やり手の優しい社長さんタイプ。

埼玉さん（さいたまさん）

・私立八尾比丘尼高校2・B所属の女子生徒。

・席が冬季冬美の前。なので、休み時間や昼休み、頻繁に夏季夏美に席を奪われている。

・奪われているというか、譲っている。

・その間はその近くで友達とお喋りしている。

・と、見せかけて夏季夏美と冬季冬美のやり取りを聞いて楽しんでいる。

・盗み聴きじゃないよ。勝手に聞こえてくるんだからしかたないんだよ。それに席貸してるんだから、ほら、あれだよ、そのお礼みたいな？

・ネギが好きである。深谷ネギとかうまーである。

・小学生時代。給食の時間。クラス中のネギを掻つ攫ったという伝説を持つ彼女のあだ名は『ネギ』。もはやイジメレベルのそのあだ名を受けても彼女はネギを食べ続けた。だって美味しいんだもん。

・彼女こそが隠れすぎていて出番が一切ない伝説の葱至上主義者である。

・彼女の前でネギを馬鹿にするときは覚悟しなければならない。首にネギを二重三重巻かれるという覚悟を……。

佐賀後輩

・私立八尾比丘尼高校1-C所属。

・将棋部所属。

・バカッブル片割れ(女)

・長崎といちやいちゃラブラブ。

・ただ、それだけです。

・出番不明。

桜木押花

・桜木さくらの母親であり、虹野輝樹の元妻。

・娘を溺愛しすぎて、危なく溺れ殺すところだった。

・今は、普通によい母親であろうと頑張っている。

・その第一歩として、働くかかか思っている。

・慰謝料とかたんまりもらってるので、働かなくてもよかったけど、さすがに働くか。

・虹野光については、まだどう接するべきか決めかねてる。

・虹野望はあまり会いたくない相手である。

・恨むのはお門違いと思っただけで、恨む気持ちもあるのだ。

- ・外見的特徴は、30代後半の美人教育ママタイプ。
- ・母親として、どこまで娘に干渉していいのか悩む今日この頃。

桜木さくら（さくらぎさくら）

- ・友達が欲しい少女という肩書き
- ・主人公？
- ・私立八尾比丘尼高校2 - B所属。
- ・文芸部所属。

・17才。誕生日は四月

・桜木押花の娘であり、虹野光の義姉。

・親友は冰山つらら

・冰山つらら以外との人付き合いがほとんどなかったことから、友達が欲しいと望んでいる。

・そのため色々友達を作ろうと頑張っていたのだが、そもそも友達ってなんだ？ 状態だったのうまうまかかった。

・そしてなぜか妹ができてしまった。

・妹として認めて欲しいという願いを無下にできるわけもなく、複雑な思いを抱えたまま虹野光を妹として認め、姉として頑張ることにする。

・桜木押花の教育により子供っぽい、本質的には桜木押花や冰山つららよりも強い子である。

・少々箱入り娘的なところがある。

・冰山つららほどではないが、人付き合いが苦手である。

・料理が壊滅的にまで下手。

・外見的特徴は、身長153前後でほんわかしてそうなタイプ。

・虹野望や虹野輝樹に対してはどういう感情を持つべきか、自分でも決めかねている。

更科蕎麦 さらしなそば

・私立八尾比丘尼高校体育教師。

- ・腹黒い女性。
- ・甘えているような舌つたらずな喋り方をするのが特徴。
- ・本人曰く、ぶりっ子ではなくキャラ作りらしい。一緒じゃんとか言わないの。
- ・女子生徒には不人気だが、ないすばでえな彼女は男子生徒にはとても人気がある。
- ・外見的特徴は、綺麗なお姉さんが甘えてくるのは好きですかの二十代後半。
- ・猫猫子猫とは同年代であるが、仲良しとは言いがたい。
- ・八尾比丘尼因幡曰く、性に対して自由。
- ・猫猫子猫曰く、ただのビッチ。
- ・下の名前で呼ばれるのが嫌いなのは、察してください。

さんすまいか 三途舞歌

- ・肩書き募集中
- ・主人公？
- ・私立八尾比丘尼高校2 - B所属
- ・家族との関係が零
- ・人付き合いなんてやったられつかめんどくさい。というか私一人で平気だから。私に近づくな。あっちにいけ。私は一人で平気なんだから！！
- ・そういうタイプの人。
- ・唯一鈴乃音鈴音は諦めて、友達だと認めた。
- ・人付き合いは苦手というか、避けているタイプである。
- ・避けていた人が一度でも心を許すと依存する可能性があるのので十分注意されたし。
- ・基本敬語。
- ・彼女にとつて友達とは、友達と思いたい人。である。
- ・その考え方は、だからあなたが友達だと思っても私が友達じゃないといったら友達じゃないんです。

- ・という使い方と、あなたが友達じゃないと思っ
ているから友達です。
- ・という二つの使い方が。 要注意。
- ・神様が大嫌い。
- ・猫猫子猫が神様を信じていなかったら、仲良くなれたと思う。
- ・外見的特徴は、身長173前後でツンとしているモデルさんみた
いなタイプ。
- ・アイスクリームのために人を殺せるくらいアイスクリームが好き。
- ・リストカットの傷を隠すため、年から年中長袖を着ている。
- ・誕生日は三月三日のひな祭りー。

しんげつみちる
新月満

- ・愛情至上主義者。
- ・主人公？
- ・愛こそが何よりも尊く愛のためにしか死ねない。
- ・そんな存在。
- ・文字通り、愛が全ての少女。
- ・彼女は喜怒哀楽。あらゆる感情を愛が関わっていないと感じる事
ができない。
- ・その為、どこか言動が演技っぽくなっている。
- ・若葉枯葉に恋愛感情を持ち、枯葉と付き合い結婚し、家族になる
のが夢。
- ・今現在若葉枯葉の『恋愛』が、自分より南奈美の方に向いている
と察して、若葉枯葉に対しては『略奪愛』も向いている。『恋愛』
と『略奪愛』二つの愛で、若葉枯葉の心を得ようとしている。
- ・愛を1つと考えず、小分けにして考えるのが彼女の特徴とも言え
る。
- ・例えば彼女にとっては、家族愛と兄弟愛は別物に分類される。と
いうことである。
- ・家族愛はあるが、兄弟愛はないというのが存在するというわけで

ある。

・過去の若葉枯葉との一件から、友情という繋がりを毛嫌いしている。

・あんな脆くてくだらなくて上辺だけの付き合いで愛情が生まれたらすぐに捨てられる関係を大切にしている奴とは相性が悪い。

・外見的特徴は、身長158前後でツインテールの小悪魔。

・若葉枯葉とはとある理由により別の高校に通っていたが、とある理由もなくなつたので転校も考えている。

・16才。誕生日は十一月。

鈴乃音^{すずのね}絢音^{あやね}

・鈴乃音鈴音と鈴乃音真音の母親。

・普通のお母さん。

・料理も得意。

・鈴音はもちろんのこと、色々我慢してしまうタイプの真音も心配している。

・専業主婦。

・外見的特徴は、40代後半の普通のお母さん。

鈴乃音^{すずのね}真音^{まね}

・私立八尾比丘尼高校1-B所属

・部活は入ってはいないが、将棋部によく顔を出している。

・虹野光と友達。

・鈴音ほどではないが、感情を表に出さないタイプ。

・色々我慢するタイプで、姉と友人がわがままタイプなので何かと気苦労が絶えない。

・でも、鈴音のことは大好きだし、光のことを大切に思っている。

・しかしプツンするときもある。そりゃ溜め込んでた爆発しますよ。

・外見的特徴は、身長158前後の姉思いの優しい妹タイプ。

・鈴音が舞歌と仲良くなつたのは嬉しいが、鈴音が自分を頼つてくれなくなるのは少し寂しいな。という気持ちもある。

鈴乃音鈴音

すずのねりんね

・よくわからない女という肩書き。

・主人公？

・私立八尾比丘尼高校2・B所属。

・よくわからない。

・外出するときは鈴を身につけていないと自分を保つことができない。鈴が取れてしまったら制限時間は1時間。その間にもう一度鈴を彼女につけなければ、GAME OVERである。

・よくわからない。

・基本的に無表情だが、三途舞歌関連となると頻繁に感情を表に出す。

・よくわからない。

・彼女は、色々とよくわからない。

・自分がわからないから、何もかもがわからないのかもしれない。

・よくわからないが故に、時に純真無垢で時にわがまま。

・その為、確固とした信念や考えを持っている人間にとっては、彼女という存在は一種の脅威である。

・純粹に問いかけてくるその質問に明白な答えを返せなければ、自らに疑問がわき、その思想が揺らぐ。

・トリックスターの立ち位置である。

・三途舞歌もある意味、そんな彼女の餌食になったともいえる。

・しかしそんなの、よくわからない。

・よくわからないが故に、他人の考えにも染まりやすいのは言うまでもない。

・その為、彼女にとっても、確固とした信念や考えを持っている人間は、一種の脅威である。

・外見的特徴は、身長142前後の教室の隅で一人で空を見続ける

不思議系女子タイプ。

- ・誕生日は八月。
- ・神社が嫌い、神社には決して行ってはいけない。

鈴乃音鳴海

- ・鈴乃音家の大黒柱。
- ・普通の父親。
- ・一人だけ名前ないのも可哀想だからつけました。
- ・外見的特徴は、40代後半の明るいお父さんタイプ。

辞書（あゝさ行）（後書き）

暗中模索で色々探求（本作品）

・暗中模索で友情探求の続編。

・続編ということで色々と設定が追加されていたり改変されていたりする。

・別個にした理由は、あちらはハッピーエンドで終わってるから？
・不穏なキーワードが追加されているが気にしたら負けである。

・『神無と水無の放課後』 『彼女達の平々凡々の日常』 『神様はサイコロを知らない』と世界を共有している。が、別に他作品を読んでいるなくても問題ない。ただ読んでいると色々楽しめるのかもしれない。しかし色々と矛盾を見つけてしまっただけで読みたくなる可能性もある。宣伝宣伝。

・時系列は『友情探求』 『色々探求』 『放課後』 『平々凡々』

『サイコロ』である。

・どうでもいつか。

・百合というキーワードがあるが、そんなに百合ってわけでもない
ので、警告タグはとりあえずなし。

・とりあえず、ほのぼのとした小説になる予定である。

・バットエンドだけど。

辞書（たぐわ行）（前書き）

辞書じしょ

- ・ 暇なとき読む。
- ・ 当然ここに書いてあることが全てではない。
- ・ 作者が重要だと思ったことが記されている。
- ・ あとノリ。
- ・ そのため、これを読むと作者がこれから書くことがわかってしま
うという噂。
- ・ ネタバレだね！。
- ・ 自動追加機能あり。
- ・ キャラが増えると勝手に追加されるよ。

辞書（たぐわ行）

たちはなまき
橋真希

- ・私立八尾比丘尼高校1-C所属
- ・サイドテールで笑顔がカワイイと評判の少女。
- ・諸事情により、喋らない。
- ・諸事情により、表情豊か。
- ・諸事情により、ボディーランゲージを多様。
- ・諸事情により、授業の出席率も悪い。
- ・諸事情により、皆勤賞。
- ・諸事情により、猫猫子猫とは相性が悪い。
- ・諸事情により、保険委員と活動することがある。
- ・外見的特徴は、身長155cmの愛くるしいサイドテールが似合う女の子。
- ・彼女はつまり、猫猫子猫の、三途舞歌や南奈美や鈴乃音鈴音に代わる、代用品である。
- ・噂によると、妹がいるらしいが……。

たぐわあきり
田所朝霧

- ・私立八尾比丘尼高校2-B所属の男子生徒。
- ・影が薄く、教室の隅っこで一人携帯を弄っているイケメンである。
- ・友人もおらず、いつも一人でいるが、友人がいなくても生きていける類の人間であるため、別にそのことをどうとも思っていない。
- ・部活動にも参加してはいない。
- ・頼まれればクラス行事にも参加するが、頼まれなかったら何もしない。
- ・昼休みは昼寝をする時間と決めている。
- ・夏目棗が持つ『棗友人ノート』と対をなす『恋愛データバンク』を所持している。

・この『データバンク』には、私立八尾比丘尼高校二学年全生徒の恋愛事情がのっており、その情報は正確無比。この『データバンク』にのっていないければ、恋人だと宣言しても、それはただの勘違いだと言われるほどである。

・放課後。特別棟のある空き部屋で彼を見つけ、交渉すれば、この『データバンク』の情報を手に入れることが出来ると噂されているが、本人は否定している。趣味でやっているらしい。

・彼は同性間の恋愛を信じていないため、彼の『データバンク』には同性間の恋愛事情は一切のっていない。

・自他共に認める、ムツツリスケベである。

・居残りし七人の一人。

冬^{ふゆ}季^き冬^{ふゆ}美^み

・幼馴染主義という肩書き

・主人公？

・私立八尾比丘尼高校2 - B所属

・将棋部所属

・夏季夏美とは、幼少時代から一緒であり家族同士の付き合いもある。つまり幼馴染という関係。

・夏季夏美に対して抱いている感情はもはや友情ではなく愛情に近い。

・が、自分には友情だと言い聞かせる日々。愛情だとしたら色々面倒になり一緒にいられないから。

・そう思ってる時点であれだが。

・夏季夏美とずっと一緒にいたいという気持ちがあるので、勉強が苦手な夏季夏美に勉強を教え、同じ大学に進もうと画策している。

・プリンが好き。

・外見的特徴は、身長160前後のテンション高め文系タイプ。

・彼女にとって幼馴染というのは一種の聖域であり、夏季夏美以上に親しくなる人間は、存在しない。

- ・ 友達ができたとしても親友ができたとしても恋人ができたとしても家族ができたとしても幼馴染という存在は生まれない。
- ・ これから先、未来永劫生まれえない。
- ・ 彼女の一番は、ずっと夏季夏美なのだ。
- ・ 秋春守が好きだという噂があるが、それは夏季夏美に対してだけついた嘘である。

ながさきこうはい
長崎後輩

- ・ 私立八尾比丘尼高校1 - C所属
- ・ 将棋部所属
- ・ バカツプル片割れ(男)
- ・ 佐賀とイチャイチャらぶらぶ。
- ・ ただ、それだけです。
- ・ 出番不明。

ながのつばさ
長野翼

- ・ 無情。
- ・ 私立八尾比丘尼高校2 - B所属
- ・ 委員長
- ・ 来る物は拒まず、去る物は追わず。
- ・ そういふ人間。
- ・ 彼にとって友達とは、友達だと言ってきた人間であり。
- ・ 彼にとって恋人とは、恋人だと言ってきた人間である。
- ・ そこに友情があるのか愛情があるのかなんて関係ない。
- ・ 自分からは決して友達にも恋人にも近づかない。
- ・ ずっと一人、本を読み続ける。
- ・ 与えられた仕事はきっちりこなす。
- ・ あるがままを受け入れて、受け流す。
- ・ 争い事が嫌いなので、そんな感じに生きている。
- ・ その為、争い事を瞬時に解決する事ができるジャンケンを、神聖

視している。

・委員長になつたのも、一番人気がなく他の人と争わなくていいからである。

・外見的特徴は、身長168前後の委員長タイプ。

・メガネもしてます。

夏季夏美^{なつきなつみ}

・主人公？

・私立八尾比丘尼高校2・B所属。

・将棋部所属。

・冬季冬美とは幼馴染の関係。

・冬季冬美ほどではないが、幼馴染である冬季冬美をかけがえのないものだと思っっている。

・彼女はずっと一緒にいれるというわけではない。と思っっている。
ある意味、冬季冬美より大人。

・高校入学したあたりから、冬季冬美が自分に対して、友情以上の気持ちがあるのではないかと薄々気づいているが、いや、それはな
いって。あつたとしても家族愛的な何かだつて。と思ってる。

・秋春守が好きらしい。

・いわゆる一目惚れらしく、秋春守目当てに将棋部にも入つた。

・私、秋春君好きなんだ。と冬季冬美に告げたのは、あるいは牽制
だつたのかもしれない。

・誰の想いに対する牽制かはわからないが。

・それに対して、私もだよ。といわれたとき、ホツとした気持ちが
あつたのはなぜだろう。

・そして傷ついた気持ちはどういう意味で傷ついたのでだろう。

・外見的特徴は、身長162前後のハイテンション体育系タイプ。

・なんだかんだ言つても、彼女も冬季冬美以上に親しい友人は存在
しない。

・未来永劫かはさだかではないが。

夏目棗 なつめなつめ

- ・私立八尾比丘尼高校2 - B所属の女子生徒。
- ・いつも寝起きのようにけだるげな、茶髪の女の子。
- ・部活動には参加していない。
- ・口癖は『すでに』
- ・頼まれればクラス行事に参加するが、頼まれなければ何もしない。
- ・田所朝霧が持つ『恋愛データバンク』と対をなす『棗友人ノート』を所持している。
- ・友人帳ではない。
- ・この『ノート』には、私立八尾比丘尼高校二学年全生徒の交友関係が書かれており、その情報は正確無比。この『ノート』に書かれていなければ、友人だと宣言しても、それはただの勘違い。と言われるほどである。
- ・放課後。特別棟のある空き部屋で彼女を見つけ、交渉すれば、この『ノート』の情報を手に入れることが出来ると噂されている。が、本人は否定している。趣味でやっているらしい。
- ・彼女は異性間の友情を信じていないため、彼女の『ノート』には異性間の交友関係は一切書かれていない。
- ・居残りし七人の一人。

新潟先輩 にいがたせんぱい

- ・私立八尾比丘尼高校3 - B所属。
- ・将棋部所属。
- ・脇役。男性。
- ・岩手と仲良しで、よくつるんでる。
- ・しかし彼女がいることは岩手には言っていない。
- ・だってあいつ、裏切るなよとか言ってくるし。
- ・金銀砂銀に対して普通に接する、つまりは奇異な目で見ない、数少ない人物。

- ・外見の特徴は、爽やかな文系タイプ。
- ・出番予定未定。

虹野輝樹にじのてるぎ

・桜木さくらと虹野光の父親であり、桜木押花の元夫であり、虹野望の夫。

- ・仕事に生きる男である。
- ・家庭とか、ホントどうでもいい。
- ・結婚したのも、結婚してたほうが色々世間体いいし。
- ・離婚したのは痛かったけど、今の時代離婚なんてざらだし。
- ・離婚理由は妻のせいってことにして、それなのに養育費とか慰謝料とかちゃんと払うということである意味いい評価だし。
- ・外見的特徴は、40代前半のエリートな社長。
- ・父親としては最低の部類に入る。と思う。
- ・金持ち。

虹野望にじのぞみ

・虹野光の母親であり、虹野輝樹の妻。

・虹野輝樹と結婚するがために、己の全てを使い桜木押花から奪った。

- ・その結果、力尽きた。
- ・搾りカスで生きていると自負している。
- ・体力気力共がない。
- ・睡眠時間二時間で余裕とか言っているが、どう考えても余裕じゃない。
- ・今、死にます。
- ・私、幽霊です。
- ・と、言われたら信じないほうがおかしいといつくらい顔色が悪いらしい。
- ・そんな状態のため、家事もほとんど家政婦さん任せであり、娘と

遊ぶこともほとんどなかった。

・こんな母親と父親の元で生活するよりは、姉と暮らしたほうが娘は幸せだろうと考え、光に姉である桜木さくらの存在を教え、選ばれることにした。

・が、桜木押花に、いや、お前頑張れって。死んでないんだからやれるって。自分で娘幸せにしろって。みたいなことを言われて、ふうー、私の残り寿命がまた縮まるね。とか思いつつ、光と遊んであげたりする。

・しかし体力がないので、挫折しそうである。

・外見的特徴は、30代後半で柳の下にいそうな儂げなタイプ。

虹野光
にじのひかり

・私立八尾比丘尼高校1 - B所属。

・将棋部所属。

・虹野望の娘であり、桜木さくらの義妹。

・幼い頃から母親も父親もあまり遊んでくれず、家がお金持ちということでクラスでは苛められていた。

・母親から姉である桜木さくらの話を聞き、自分も頑張らなければと思うとともに、一度会ってみたい。お喋りしたい。遊んでみたい妹として接して欲しい。と望むようになる。

・家族という関係に飢えていたのだ。

・紆余曲折、色々合って、桜木さくらに自分が妹であると告げ、彼女の望みは達成された。

・彼女はとても幸せである。

・似非お嬢様言葉を使う。

・あまり他人の事情を考えない。

・ある種わがままと呼べる存在である。

・外見的特徴は、身長152前後でわがままだけど憎めないお姫さまタイプ。

・秋春守に淡い恋心を抱いているようだが、今は恋愛よりも、お姉

ちゃんと仲良く遊びたいようだ。

猫猫子猫^{ねこねこねこ}

- ・私立八尾比丘尼高校保険医。
- ・八尾比丘尼高校の教員の中ではちゃんとした先生。
- ・小町のあるマンションに住んでおり、一人寂しくお酒を飲む日々を過ごしている。

- ・生徒の事を心から心配して、悩み相談などにのっている。
- ・生徒に干渉しすぎることがある。
- ・そのたびに自省したり、校長先生に怒られたりしている。
- ・過去に事故で自分の子供を亡くしており、その影響で生徒に干渉しすぎてしまう。

- ・また、子供を失ったことから立ち直るために、今の私の生活をあの子が見ているから、私はずっと悲しんでいてはいけない。楽しい人生を送らなければ。という思想に至っている。
- ・つまり、彼女は自分の人生を子供が読んでいる小説と考えているといってもいい。

- ・せっかくなら楽しい小説にしてあげなくっちゃ。そう思い彼女は今日も明るく楽しく生活している。

- ・本人が自分を小説のキャラと思っているため、この小説内において唯一、語尾に マークと マークがつくことがある。

- ・マークは輝く笑顔を表し、マークが弾む感じを表す。

- ・地の文を読む、つまり読心術もどきも使える。

- ・そういう思想を信じるためには、神様の存在を肯定しなければいけないため、彼女は絶対に神を否定しない。たとえ自分が神様を否定すれば三途舞歌が心を開くとしても、絶対に否定しない。

- ・外見的特徴は、20代後半の美人な保険医。白衣着てるよ。

- ・身長は160くらいな気がした。

- ・身長が低くて子供っぽくて色々と危なっかしくて自分の子供と境遇が似ている鈴乃音鈴音のことがほっておけない。

・最近は鈴乃音鈴音が三途舞歌に首ったけなので、なんだか寂しいなあ。という感じである。

・桜木さくらも境遇が似ているので、色々と気になる子。桜木さくらのために文芸部のお手伝いしてます。

はなばたけかいが
花畑絵画

・私立八尾比丘尼高校美術教師

・女性

・八尾比丘尼高校のガーデニングマスターとは彼女の事であり、お花が大好きな先生である。

・中庭の花壇やお花畑は彼女の趣味で構成されている。

・由緒ある家柄出身で、幼い頃から華道を仕込まれる。

・しかし華道よりも、一般的なガーデニングに彼女は興味を持ち、親に反抗。

・華道の先生なんかになりたくないやい。という事で、美術の教師になった。

・でもガーデニングもやりたいやい。という事で、自由な八尾比丘尼高校にたどり着く。

・なぜか頭にいつもハイビスカスの花を挿している。

・芸術家のセンスってよくわかんねえなあ。という事を生徒に教えるいい教師である。

はるのかぜきやうてい
春風教頭

・私立八尾比丘尼高校教頭。

・校長をサポートする人らしい。

・ふと思いついた設定らしい。

・高校二年生の娘がいるらしく、色々と手を焼いているらしい。

・調査能力に長けているらしい。

・つまりあれのあれらしい。

・出番とかどうでもいいじゃん。

はるかぜめぐる
春風巡

- ・とある高校に通う、女子高生。二年である。
- ・春風教頭をクソ親父と呼び、毎月お小遣いを貰っているが、足りなくなつた時は、学校まで取り立てにきたりする女子高生。
- ・上記の記述を見ればわかるように、春風教頭の実の娘である。
- ・絶賛反抗期中であり、人間という存在からも反抗しようとしている。
- ・外見的特徴は、中学生に見えるくらいの低身長。
- ・出番は一度きりの予定。

ほしまりあ
星麻莉亜

- ・私立八尾比丘尼高校3 - A所属女性。
- ・天文部部长。
- ・父親は日本人、母親がフランス人の方というハーフさんだが、生まれも育ちも日本なので、中身は日本人そのもの。
- ・名前が『星』であるため、幼い頃から星が好きだった。
- ・というわけではないが、名前が『星』なので、自分は天文部に入らねばならぬのだ。と、幼き頃からよくわからない思い込みをし、小学校、中学校、高校と、ずっと天文部。なかつたときは、自分で作つた。残念な人である。
- ・天文部に入るという目的で天文部に入っているため、星に詳しいわけでもなく、天体観測もあんまりしない。
- ・部室では仲がいい友人たちと、駄弁つて過ごす毎日である。
- ・早口で相手に会話のターンを渡さないマシンガントークをする癖があり、マシンガントークを食らった相手は、内容はよくわからないけど楽しそうだからいつか。と、思うのが常である。
- ・『なんちゃって』を多用する事により、長々と語ることに成功しているらしい。

・たまに『星空キラリ』『星宮メラリ』という偽名を使用するが、

特に意味はない。

- ・彼女の半分はノリで出来ており、彼女が語る言葉に、意味があることはほとんどないというのが、もっぱらの噂である。
- ・外見的特徴は、金髪に白い肌。目も黒ではなく、青っぽい。日本人っぽくない外見をしており、日本人女性にしては背が高い。メガネをしているが、目は悪くない。
- ・星占いは、信じるタイプ。

まつしまつきこ
松島月子

- ・私立八尾比丘尼高校2 - B所属の女子生徒。
- ・影が薄く、グループ内の隅っこで密かに笑っているような女の子。
- ・委員長である長野翼の隣の席に座っているため、時折、書記として任命されることがある。
- ・字も綺麗で、まとめ上手なので、特に問題なくその役割をまっとうしている。
- ・部活動には所属してはおらず、放課後は友達と遊びに行く予定がなければ、すぐ帰宅。
- ・そして、家でメイド服を着たり、眺めたりして過ごす、隠れメイド服マニアである。
- ・『メイド』ではなく、『メイド服』が好きらしい。
- ・メイド以外の職業で、一日中メイド服を着て仕事をしたいというのが、彼女のささやかな夢である。
- ・居残りし七人の一人。

まつまつこ
松松子

- ・虹野家に雇われている家政婦さん。
- ・虹野望の代わりに、虹野家の炊事洗濯など家事全般を全て一人でこなしているスーパー家政婦さん。
- ・年齢は六十代。おおらかな性格で、虹野光はとても懐いている。
- ・代々家政婦であり、彼女の母親も虹野家で働いていた。

- ・桜木押花が妻の時にもすでに働いていた。
- ・桜木さくらの世話もしていたのだが、乳児だった桜木さくらが覚えていないわけがない。
- ・虹野望が虹野光に対して母親らしいことを一切しなかったため、彼女は授業参観に代わりに出るなど、母親代わりのような事も行なっていた。
- ・外見的特徴は、ふくよかでおおらかな家政婦さん。
- ・そろそろ引退かしらと思っており、娘の梅子に後を継がせようと思っている。
- ・虹野輝樹に対してはいい感情を持っていない。
- ・桜木押花、桜木さくら、虹野光には同情している。
- ・虹野望には、もう少ししっかりしてください奥様！とほぼ毎日言ってます。

みなみなみ
南奈美

- ・愛の契約者という肩書きはなんかそれっばいけどなんか違う。
- ・主人公？
- ・私立八尾比丘尼高校2 - A所属。
- ・文芸部所属。
- ・秋春守の双子の妹か姉であり、穂波さんと秋春透の娘。
- ・母親から、秋春守よりも契約を教え込まれているので、契約主義見習いである。
- ・若葉枯葉に恋をしており、穂波さんに教えられた愛の契約方法を使い、生涯契約するのが夢である。
- ・学校には毎日通っているが、授業には一切出ず、図書室にいる。
- ・彼女曰く、私は頭がいいから授業に出なくていいんです。ということだが、実際はクラスに馴染めなかつただけである。
- ・自分でも言っているように授業に出なくてもテストでは百点とか取れるくらい頭がいい。
- ・そのため、授業に出席していなくて留年しない。

- ・人付き合いが下手な部類に入る。
- ・クラスにも馴染めず、授業にも出ない。このままで私、大学とか就職とかできるんだろうか。と悩んでいた事もあった。
- ・しかし今は、枯葉君のお嫁さんになればいいか。と思っている。
- ・結構幸せな奴である。
- ・目つきが悪いので、睨んでいると勘違いされる。ので、伊達メガネをしていたが、若葉枯葉に告白した後は、新しい私デビューみたいな感じで、メガネをするのをやめた。
- ・外見的特徴は、身長163前後で三つ編みで目つき悪い美少女である。そして育っているらしい。
- ・一般的には常識人だが、新月満と若葉枯葉が絡むと、とたんにおかしくなる。
- ・初恋に振り回される今日この頃である。

みなみほなみ
南穂波

・契約主義者

- ・秋春守と南奈美の母親であり、秋春透の元妻。
- ・穂波さんについては何から説明すればいいかわからない。
- ・とりあえず、笑い方は『にはははー』です。
- ・笑いと幸せには古来から契約関係があるので、笑うのが苦手でも精一杯笑った結果がこれらしいです。
- ・秋春透とはお見合い結婚だったらしく、結婚当初から長続きはしないだろうと思っていたようだ。
- ・双子が生まれたときに、女の子の方に『奈美』と名づけたことからわかるように、その時から離婚し、娘を引き取ることを考えていたようだ。秋春奈美。南奈美。みなみなみ。
- ・そのため、物心がつく前の奈美と『南奈美』名義で契約を交わしており、それを使い奈美をからかって遊んでいる。
- ・『契約』とは、いわば関係性のことである。
- ・『契約方法』とは、関係を結ぶための手段である。

・秋春守や南奈美は、その理論を『友達』や『恋人』にししか使わ
ない、使えないが、黒幕というか元凶である穂波さんは、ありとあら
ゆるものと契約でき、その契約方法を知っているらしい。
・彼女の手にかかれれば、ベンチと契約す事も茄子と契約する事もた
やすいのだ。

・彼女の一番恐れるべきところは、他の友情至上主義者は愛情至上
主義者や自由主義者や幼馴染主義のようになり、その一つの思想に固執
する事がないということである。

・つまり、自分の思想を簡単に捨てたと思っただらまたすぐに捨つよ
うな奴なんですよこの穂波さんという人は！

・頭脳は大人。体も大人。しかし肝心なところが子供。それが穂波
さんなのだ！

・外見的特徴は、40代後半には見えない若々しい（外見的にも内
面的にも？）優秀な秘書。

・この小説内においてもっとも厄介なキャラだというのは言うまで
もない。

・作者の一番のお気に入りキャラであることも言うまでもない。

・キヤーホナミサンステキー。

・次にお気に入りキャラは鈴乃音鈴音であり、一番気に入ってる名
前は三途舞歌であるということは内緒である。

・もっとも面倒なのは『あたし』だということは、言わなくてもわ
かってくだされ。

見習ありす（みならいありす）

・六才くらいの少女。

・偽名っぽい名前だが、これ以外に名前はないので、本名これ。

・ボードゲームで、負けることはない。天才という名すら霞むほど
強い。強いつか弱いつかというレベルにはもういない。彼女とボード
ゲームで対峙した瞬間、負けが決まり、神様だって敗北する。彼女
が慢心+空腹+睡眠不足、それに加え対戦相手に好意を持っていて、

初めて、勝ち負けという土俵が出来る。

・食えることと眠ることが大好きで、睡眠時間は一日十二時間。好きな物はお子様ランチ。嫌いな物は野菜全般。

・とある会社に勤めており、風変わりな教育をされているが、基本的に普通な少女。

・外見的特徴は、かぐや姫のような綺麗で長い黒髪の、将来が楽しみな美少女。

・『神様はサイコロを知らない』の登場人物。

八尾比丘尼やおひくにない因幡

・自由主義者。

・私立八尾比丘尼高校校長。

・学生も保護者も教師も自由な学校を目指し、八尾比丘尼高校を作った。

・自由を心から愛する女性である。

・彼女の自由とは、何をしても許される。というものではない。

・自分に正直に生きて行く。という意味に近い。

・そして自由とは、他者を束縛するものであるとも認識している。

・そして自らも他者であることも認識している。

・つまり簡単に言えば、本当の自由なんざ他人がいるところじゃ得られねえよ。だけどそれに近い自由を目指そうぜ。

・という思想であり、そういう理念で八尾比丘尼高校を作った。

・外見的特徴は、実年齢50代前半なのに20代後半みたいな外見でいつも女性用スーツを着用している。

・その外見と名前から、人魚とか食べたんじゃない？ という噂があり、八尾比丘尼高校の七不思議の一つである。

八尾比丘尼やおひくにない高校

・創立してまもない、まだ二十年も経っていない比較的新しい高校。

・八尾比丘尼因幡が創立者であり、自由な校風である。

・自由な校風ということ、校則もゆるゆるであり、危険物以外の持ち込みはほとんど認められている。

・学校指定の制服や体操着もあるが、私服登校も許されている。

・髪を染めていても怒られないし、ピアスをしていても怒られない。授業中に携帯を鳴らしても、先生によっては無視。一番重くてもその日一日没収である。

・学費も安く、進学率就職率ともに高く、校舎も綺麗、校則も緩いということ、人気が高い高校である。

・しかし当然悪い部分もある。

・教師の質は悪い。すべからく悪い。質というより、この高校にいる教師はやる気があまりない。そのため、就職も進学も最低限のサポートしかしないため、本人にやる気がなければ、終わる。

・また、部活動も盛んではないので、真剣にやりたい人は向いていない。生徒の自主性を重んじているため、生徒にやる気がなければ文化祭などの行事も、つまらないものとなる。

・校則が緩いので、不良とかいるんじゃないの？ という心配もあるが、校内の治安はいい。

・その理由としては、八尾比丘尼高校の入学試験の内容にある。

・入学試験は年に一度だけで、他の高校よりも早く行なわれる。

・試験内容は基本三教科と面接である。面接は、校長が直々に行なう。

・そして重要視されるのが面接であり、その比率は9：1とも言われている。つまり、校長が気に入った人だけが入れるのだ。おそらくこの面接で悪さをする人は落とされるため、治安はいいのではないだろうか。

・というわけで、この高校には頭がいい奴もいれば頭が悪いやつもいて普通な人もいれば変な人もいるという高校になったのであった。・というわけで、癖がある高校と認知もされており、就職率や進学率が高くて、あえてこの高校を選ばない生徒もいるらしい。

・なぜか新しいくせして食堂はない。なぜかない。ホント不思議。

七不思議。

- ・なぜか使ってもいない教室がたくさんある。ホントたくさんある。無駄に広い。不思議。七不思議。
- ・もちろん屋上も解放されていて、自由に使っている。転落防止用のフェンスも空気を読んで越えられなくもない程度の大きさなので、死ぬのも自由である。七不思議。

やまぐちくん
山口君

- ・私立八尾比丘尼高校2 - B所属。
- ・サッカー部所属。
- ・普通の好青年。
- ・ここは任せて先に行け！ 俺なら大丈夫だ！ 安心しろ……後から必ず……行くからよ……。
- ・という人。
- ・いや、正直言って書くの疲れ（略）
- ・秋春守の元友達。
- ・ほぼ一方的に縁を切られたが、秋春守の悪口一つ言わないいい人。
- ・外見的特徴は、外見的特徴は……さわやかサッカー少年！！
- ・出番、あるのかなあ。

やまたはなし
山田花子

・偽名は鈴鈴美鈴
りんりんみさず

- ・くるみデパート三階にある鈴専門店『鈴の森』の店主。
- ・鈴好きがこうじて『鈴の森』を作ったらしい。
- ・一人で切り盛りしている。
- ・世界中の鈴アイテムを揃えている一方で、自作の商品なども売っている。
- ・外見的特徴は、二十代後半でポニーテールで元気な店員さん。
- ・鈴乃音一家はお得意様らしい。
- ・一人称は『あたい』。語尾に『っす』をつける癖がある。

- ・ 鈴について語り始めると長い。べらぼうに長い。
- ・ 鈴乃音鈴音のことを鈴姉すずあね、鈴乃音真音のことを鈴妹すずいもつてと呼んでいる。

山梨小百合やまなししゅり

・ 私立八尾比丘尼高校1 - B所属

・ 将棋部所属。

・ 普通。

・ 普通の父親に普通の母親の長女として生まれ、生意気な弟が一人。

・ 普通。

・ 彼女のこれまでの人生は、なんら特別な事はなかった。

・ 誰かが死んだから変な思想に嵌ることもなく、変な思想を持った友達がいたわけでもなく、家族が急に増えるということもなく、親が変な思想を持っていることもなく。せいぜい変わり者が同じクラスにいたくらいか。普通に。

・ 彼女のこれまでの15年間は、小説ならば、十五年の年月が過ぎた。で流されてしまうようなものであった。

・ 彼女はそんな人生を普通に楽しみ普通に物足りないと思っている。

・ もっと刺激がある人生を送りたいと普通に考えた事もある。もちろん考えるだけ。

・ 普通に友達もいるし普通に嫌いな人もいるし普通に好きな人もいる。

・ 普通に友情というものも知ってるし普通に愛情というものも知っている。

・ 普通に普通で普通な少女。

・ これからもきつと、そんな人生を送るんだろうな。と知っている。

・ 外見的特徴は、ヒロインの友達Aみたいなタイプ。

・ 将棋部に入った理由は、友達に誘われたからであり、その友達はすでに退部しているが、なんかやめずらくてズルズルと続けている。将棋部に入った事とやめていない事が、今までの人生において唯一、選択を誤った。と彼女が本気で嘆いたことである。

- ・香川智弘がちょっといいなあと思っている。
- ・ここまで書いて、出番未定。

夜風佐原よかぜのたけり

- ・私立八尾比丘尼高校3 - A所属
- ・私立八尾比丘尼高校会計
- ・女性
- ・明石剛が好きなサディスト
- ・外見の特徴は、草葉の陰からクスクス笑うサディスト
- ・明石剛の焦った顔が好きなサディスト

横手早苗よこてさなえ

- ・私立八尾比丘尼高校3 - B所属
- ・私立八尾比丘尼高校副生徒会長
- ・明石剛が好きなサディスト
- ・外見の特徴は、長身で女王様タイプのサディスト
- ・明石剛の泣き顔が好きなサディスト

吉屋茜よしやあかね

- ・私立八尾比丘尼高校3 - A所属
- ・私立八尾比丘尼高校会計
- ・明石剛が好きなサディスト
- ・外見の特徴は、好きな子を苛めちゃう元気なサディスト
- ・明石剛の笑顔が好きなサディスト

黄泉君枝よみきみえ

- ・私立八尾比丘尼高校3 - C所属
- ・私立八尾比丘尼高校書記
- ・明石剛が好きなサディスト
- ・外見の特徴は、ロリータで小悪魔的なサディスト

- ・明石剛の怒った顔が好きなサディスト

若葉落葉
わかばおちは

- ・死者。

・不安の塊と呼べる存在だったらしい。
・人は簡単に死ねるんだよー。と若葉枯葉と若葉紅葉に教えてあげた。

- ・なんか違う気がするけどまあいつか。
・色々合って転落死。

・生前は、妻と子供たちに、いや、あんたはすごいから頑張れるって。やればできるって。お父さんすごいって。やれるって。元気出せって。今日も一日頑張ろうよ。と毎日言われていたらしい。
・出番はあるわけがない。

若葉枯葉
わかばかれは

- ・男友達が欲しい少年という肩書きはいかななものか。
・主人公？

・私立八尾比丘尼高校2 - B所属。
・色々合って友達がいなかった。
・色々合って友達を探していた。
・そしたら、なんか友達っぽくない友達ができてしまった。
・南奈美と新月満の二人に求愛されているが、どちらも遠慮している。

・その理由は他に好きな人がいるからとかではなく。恋人より友達の方がいいからという理由である。
・別に嫌いでもないしどちらかというが好きだし、もしかしたらその好きは友達としてではなく一人の女性として、つまり愛しているのかもしれないけど、友達でいて。

- ・とか、平気でいうこの男はもしかしたら悪い男かもしれない。
・新月満との過去の事件により、自分には人を愛せる気がしないと

考えており、友達に固執している。

・秋春守が、愛を否定して、友情に固執しているのに対して、若葉枯葉は、愛から逃げて、友情に固執しているという感じである。
・彼にとつての『恋愛』とはすなわち、小学生時代の新月満が望んでいた形であり、そんなの俺には無理です。という結論に達している。

・好きな人から離れたくないがためにスタンガンビリビリで、バツグにギョウギョウで、ロープをグルグルって、そんなの無理です。

・外見的特徴は、身長174前後の普通の高校生。

・頭はよくない。

・どちらかというと、ツツコミ役である。

若葉花恋^{わかばかれん}

・若葉枯葉と若葉紅葉の母親。

・今を生きる女である。

・普通に普通で普通な母親のように見えて、何かおかしい。

・過去は終わったものと割り切って、未来はわからないものと割り切って、今を大切に生きている。

・刹那的な生き物と思っただいてもかまわないです。

・というわけで、夫が自殺した原因を作り愛する息子を誘拐した新月満を今では全然恨んでいない。

・カワイイ未来の娘候補として接している。

・そんな彼女は、普通といえるだろうか。

・外見的特徴は、40代後半だけどまだまだ30代と言っても通用しますよという感じの会社員です。

・今を生きる彼女はあまり後悔はしないんだけど、優柔不断な枯葉とブラコンの気がある紅葉を見ると、育て方間違えたかしら。と思ってしまう。

わかばもみじ
若葉紅葉

- ・ 若葉枯葉の姉。
- ・ 20才。大学三年生。
- ・ 神社神裂と同じ大学に通っている。
- ・ 神社神裂の、親友であり友達であり悪友でありアドバイザーでありアドバイザーされる側である。
- ・ 基本的にスペックは高い。勉強もできるが、その勉強方法や理解の仕方は独特し過ぎて本人以外に理解される事はまれ。
- ・ 過去の色々な事件により、枯葉は私が守らなくっちゃ。と考えており、いわゆるブラコンの気配がする。
- ・ 若葉紅葉と新月満と南奈美が揃うと姦しい。
- ・ 外見的特徴は、頼りがいがある姉御肌的なタイプ。
- ・ 私立八尾比丘尼高校のOGであり、猫猫子猫との交流もある。
- ・ 家族のことは家族で解決するべきという考えがある紅葉と、家庭環境にも干渉しようとする猫猫子猫はそりが合わなかった。というわけで、引きつった笑いを浮かべながらお互いの手を握力する仲間である。

CAT'S BELL (猫の鈴)

- ・ 胡桃割市の東部にある喫茶店。
- ・ 駅の近くにある。
- ・ テラス席はなく、四人がけテーブルが二つ、二人がけテーブルが三つ、カウンターが五席といった感じである。小さい部類に入るのかな？
- ・ 有名ではない。いわゆる、静かで落ち着いた、隠れ家的な存在。
- ・ 秋春守の行きつけの店らしい。
- ・ チーズケーキが美味しいらしい。
- ・ あまり喋らないマスターと、大人に絶望したいイケイケな女子高生バイトが、切り盛りしている。
- ・ この店の存在を知っているのは、今現在、秋春守、香川智弘、冬

季冬美と夏季夏美、虹野望、虹野光、桜木親子、鈴乃音姉妹、南穂波である。

辞書（たぐわ行）（後書き）

ありすきやるる（作者）

・私。

・主に後書きを書く。

・あと地の分も書く。

・セリフだけでいいのに。とか思う私もいる。

・その場のノリで書く。

・続きなのにタイトル変更して別小説として書く。

・だって百越えるとなんか長いんだもん。

・という理由は嘘。

・リセットボタンリセットボタン。

・一人称とか無理じゃね？とか思ってる。

・二人称ってなに？とか思ってる。

・三人称も無理じゃね？とか思ってる。

・お前じゃあ小説書くの無理じゃね？は言わない約束である。

・これからもどうぞよろしく願います。

・更新スピードは期待しないほうがいいです。

・感想評価お気に入り登録菜を挟むなどとされると喜びます。

0 - 1 ・夏季夏美と冬季冬美の関係

夏季夏美と冬季冬美は幼なじみである。

家が近所だったため、幼いときから一緒に遊んでいた。親同士も仲が良く、小学校中学校高校も一緒。

まるで姉妹のように育った二人は、今も大変仲が良い。

まさに、The 幼なじみという感じである。

「うう……」

夏休み終盤である。

夏休み終盤の学生といえば皆様方もご存知のように、だいたい三種類に分類することができる。

まず一つ。ある種、勝ち組に分類される存在。つまり、宿題もう全部終わったから遊びほうけるぜ！ やっほーい！！ という存在である。勝ち組。勝ち組である。誰しもが一度はそんな夏休み終盤を夢見て、夏休み序盤に『夏休みの友』を殺しつくしたことがあるのではなかるうか。殺せたかどうかはおいといて。

次に、勝ち組ではなく、ある種負け組に分類される存在。つまり、宿題が終わる気がしねえー！！ 時よ戻れ！ いや、マジで！ という存在である。負け組である。しかしそういう奴らは序盤に遊びほうけている場合が多いので、一概に負け組とは言えないので注意

されたし。しかし夏休み終盤、もしくは始業式に、友達に天気を聞きまくる姿は負け組であると言っていていいのではなからうか。

そして最後に、夏休み終盤も序盤も中盤も関係ない存在。つまり、私計画的にやってるから。まだ宿題残ってるけど、全然余裕。遊ぼうという存在である。つまらない。なんてつまらない存在。しかしいてい、この存在を目指すものだ。脱落者が多いのは言うまでもない。

「なんで私がこんなに勉強しないとイケないんだ……」

「ほら、またここ間違ってる。ちゃんとしなさい」

「うう……夏休みなのにー」

さて、では、夏休み終盤のある日の昼下がりに。自室で冬美に勉強を叩きこまれている夏美は、この三種類の内どれに入るかというところ、厳密にはどれにも入らない。

いや、ならばなぜあんな長々と三種類書いたのかと言われれば、字数稼ぎ。というのはあながち嘘ではない。

「冬美さん冬美さん……私に、私に休憩をくれ！」

夏美は涙目で懇願。

「夏美さん夏美さん……あなたの休憩は却下です」

冬美は笑顔で却下。

「……ふ、冬美の鬼ー！ 悪魔ー！ せっかく夏休みの宿題が生まれて初めて余裕をもって終わったのにー！！ こんな仕打ちはない

よー！！」

夏美は勉強机代わりのちゃぶ台に泣き崩れた。

「夏美……………これも全てはあなたの未来のためなの……………つらいだろうけど、頑張つて」

対面に座つて勉強を教えていた冬美は、私も本当はつらいの。みたいな雰囲気を出しながら、夏美の頭をよしよしと撫でてあげた。優しいねー。

しかし騙されてはいけない。五割は冬美の未来のためである。

「えーん、えーん、私もう勉強したくないよー」

「夏美頑張つて。夏美はやれば出来る子だよ」

さて、夏美が泣いているフリをすることにより休憩していて、冬美がそれに気付きつつも休憩させてあげている間に、テキストに説明します。

夏祭りがありました。色々ありました。その時夏美が、私馬鹿だから冬美と同じ大学にはいけないよ。高校で離れ離れになつちゃうけど、私たちの絆は永遠だよ。みたいなことを冬美に言ったら、冬美の中の何かのスイッチが入り、じゃあ夏美に勉強教えたら一緒の大学行けるじゃん。ということになり、夏美は生まれて初めて余裕を持って夏休みの宿題を片付けたのに、なぜか受験生並みに勉強を冬美に強いられているのだ。お疲れ様でーす。

「はい、休憩終わりー。はい、起きてー。夏美、早く、起きてー。」

木魚になっちゃうよー」

冬美は夏美の頭をノートで、ポクポクと叩きます。

「……………」

夏美は顔を伏せたまま呻くだけで顔をあげません。昼食を食べてからかれこれ二時間は勉強したので、夏美の気力はもうほぼないです。昼食前にも二時間は勉強したので、今日はもう四時間は勉強していることになりました。お疲れ様でーす。

「冬美ー、今日の勉強はもうやめようよー。私もう疲れた…………もう無理…………」

「ダメ。今日の分はまだ終わってないの。私は夏美のお母さんにも頼まれてるんだから、容赦はしません。だから早く起きなさいー」

「……………鬼ー」

「なんともいいなさい。今の私は夏美に勉強を教える鬼なのです」
冬美は鬼と自認するだけであって、夏休み終盤は夏美に勉強を教えるのに全てを使っている。泊まり込みで教えるほどだ。夏美と冬美の親はとくに冬美が泊まることに反対はしなかった。夏美の親としては冬美も娘みたいなものだし、お馬鹿な娘に勉強教えてくれるとか万々歳だし、冬美の親も、夏美ちゃんと仲良しねー。程度である。夏美も最初は冬美が泊まるのを、昔を思い出すなあ。修学旅行思い出すなあ。という感じで懐かしがって楽しんでいたのだが、だんだんと疲れてきた。だって朝早くから勉強。夜寝る直前まで勉強だもん。しんどい。というわけで、さすがにそこまでしなくてもいいよ。

まだ私たち二年だし。と、夏美は言ったのだが、いや、そこまでしないと夏美無理だから。二年の夏から準備しないと無理だから。と、冬美に真顔で返され落ち込んだ。

というわけで今も冬美は、二日に一度は夏美の部屋に泊まっっていくのだ。そして今日は泊まっっていく日。今は三時。泊まらない日ならあと四時間で勉強終了。しかし今日は十一時まで勉強。つまりあと八時間………八時間？

「……………うがぁー!!」

夏美が爆発した。

「もうやだもうやだもうやだー!! 勉強やだー!! 遊びたいよー!! 高校二年の夏休みにこんなに勉強しているのは私だけに違いないー! 不幸だー! 遊びたいー! もう勉強やだー!」

夏美は子供みたいに駄々をこねはじめた。

「……………はぁ」

冬美はため息をついてから、夏美の側に行き、夏美の肩に手を置いた。その顔には優しい笑みが浮かんでいます。

「冬美……………」

夏美は冬美の優しい笑みを見て、冬美。わかってくれたのね。みたいに思った。が。

「夏美は、私と同じ大学に、行きたくないのかな?」

冬美はニコニコ笑顔のまま、夏美にそう尋ねました。夏美の肩を掴む手に力が入ってるのは、気のせいだよ。

「い、行きたいですとも」

夏美は頬を引き攣らせながら、ガクガクと首を縦に振りました。冬美の笑顔、怖いんだもん。

「なら、勉強しよつか」

冬美は夏美の肩から手を離しました。

「は、はい。今後ともご指導ご鞭撻よろしくお願いします」

夏美は正座しました。教えをこう立場なら当然です。

そんな夏美の態度に満足したのか、冬美は満足気に頷いて、「でも休憩も大事だからおやつにしよつか」と言って、部屋から出ていきました。

「ふう……怖かった」

夏美は息を抜いて、正座を崩しました。

夏美は、冬美が戻ってくるまでに、ちゃぶ台の上を綺麗にしておこうと思ひ、ノートやプリントを片付け始めた。

「……………」

片付けている途中、ふと、自分のノートをパラパラめくってみる。
ノートの最初の方はペケばっかりなのに、今はそんなにペケは見当
たらない。

成長してるな私。まあ、冬美にあんなに手伝ってもらってるのに成
長してなかったら、私泣くけど。

夏美は苦笑しつつ、ノートを閉じる。

おやつを食べたら、また勉強頑張る。

夏美はそう思いながら、冬美が戻ってくるのを待ちました・・・

0 - 1 夏季夏美と冬季冬美の関係（後書き）

作者練習中・・・夏季夏美も満更ではないため冬季冬美のスパルタに耐えている・・・作者思考中・・・

0 - 2 ・若葉枯葉と南奈美と新月満の関係

若葉枯葉と南奈美と新月満の関係は、いわゆる三角関係である。

三角関係。AはBが好きでBはCが好きでCはAが好き。そんな関係である。たぶん。昼ドラである。たぶん。

では、枯葉と奈美と満はどんな感じかというと、枯葉は奈美と満を友達だということにしている、奈美は枯葉を恋人ということにしている、満も枯葉を恋人ということにしている、奈美と満はお互にくたばれと思っている。

まさに、The 三角関係である。

たぶん。

「なんでこんなに勉強しないといけないんだ……」

夏季夏美が、高校二年の夏休み終盤にこんなに勉強しているのは私だけじゃね!? と思っていた時、枯葉もそう思っていた。

「枯葉君。なぜならあなたが、馬鹿だからです」

「そんなにはつきり言うんじゃねえよ……」

枯葉は奈美の言葉に傷ついたが、なにぶん本当のことなので強く言い返せない。

枯葉と奈美は仲良く勉強中である。場所は若葉家のリビング。枯葉の部屋でやらない理由は、リビングにはクーラーがあつて涼しいからである。あと、枯葉の部屋で二人つきりだと若さが暴走するからである。奈美の若さが暴走するのである。

「ほら枯葉君。また間違つてますよ。このままじゃ、休み明けのテスト、赤点ですよ?」

「うう……」

枯葉は頭がよくない。

それを心配した枯葉の姉、若葉紅葉は、親友である神社神裂に弟の家庭教師を頼んだのだが、気付いたらその役目が奈美に交代していたのであった。というわけで奈美は、神裂の代わりという大義名分的な何かを振りかざし、枯葉に勉強を二人つきりで教えているのだ。枯葉的にも、勉強を教えてくれるだけなら万々歳なのだ。

「……近い」

「何か言いましたか?」

「なんでもないです……」

奈美は冬美とは違い、枯葉の横に座り、勉強を教えていた。気をつけないと肘がぶつかるくらい距離で、勉強を教えていた。近い。近いつて。勉強しづらいつて。枯葉はそう思わずにはいられない。何かいい匂いがするとかは、思つてない。ホントだよ?

枯葉が距離を取ろうとすると、当然奈美は距離を詰めてくるので、枯葉は諦めているのだった。

「……………はぁ」

「なんですか枯葉君。ため息なんかついて。楽しくないんですか？」

「勉強の何が楽しいのかがわからない……………」

「勉強は楽しくないかもしれませんが……………彼女に勉強を教えてもらってるんですよ？ いわばこれはデートですよ？ もっと楽しそうにするべきです」

「お前さらつと何言ってるの！？ お前デート感覚だったの！？」

枯葉はビククリしました。

「え！ 枯葉君デートだと思ってなかったんですか！？」

奈美もビククリしました。

かれこれ二時間勉強していましたが、二人の間では今の状況の認識が違っていたようです。

「デートのわけなからうが！ まず第一にお前と俺は付き合ってるからデートじゃない！ 次に一緒に勉強することがデートだとは思えない！ 今は友達に勉強教えてもらっている、つまり勉強会だ！ デートなわけがない！」

枯葉は椅子から立ち上がり、お前は間違ってるよ！ と力説しました。

「一緒に勉強することがデートじゃないんですか!? おかしいです
ね。彼の家で勉強を教える。これ、デートの王道よ。と、お母
さんが言ってたのに……騙された?」

奈美も椅子から立ち上がり、あれ? 私また騙された? あれ?
という感じで思案顔です。

「じゃあ、デートの王道ってなんですか?」

真面目な顔して枯葉に質問。

「え? いや、デートの王道? ……遊園地とか?」

律義に答える優しい枯葉。

「じゃあ遊園地に行きましょう」

そう言って奈美はテーブルに広げていた勉強セットを片付け「ちよ
っと待て!」る手を、枯葉が掴んで止めた。

「落ち着こう。うん。落ち着こう。え? 南さんなにしてんの?」

「なにつて……遊園地に行くから勉強の片付けを」

「馬鹿なの? 南さんたまに馬鹿なの? 行くわけないよね。今か
ら遊園地行くわけないよね。そもそも言ったよね。南さんわざとス
ルーしたかはわからないけど、俺、言ったよね。俺とあなたは付き
合ってないんだからデートじゃないよって。なのになんでデートと
いう名目で遊園地に行こうとするのかな?」

「枯葉君と遊園地に行きたいからですけど、あの、その、枯葉君？
そろそろ、手、離してくれませんか？」

奈美の顔はリンゴみたいに真っ赤です。

「え？ あ！ す、すいませんでした！」

枯葉は奈美の手を離した。枯葉は全く意識してなかったのだが、奈美の恥ずかしげな様子を見て、なんか自分が恥ずかしいことしていた気持ちになった。

「いえ、別に、枯葉君に手を握られるのが、嫌なわけじゃなくて…

…」

「うつ……」

奈美が真っ赤な顔でもじもじしている姿を見て、枯葉はなんともいえない気分である。

「……」

「……」

そして無言になる二人。奈美は真っ赤な顔で俯いて、枯葉はどこを見ているかわからず視線がさ迷う。

なんだかいい雰囲気であった。奈美的には。

「枯葉ー！！ 私、遊びに来たよ！ ほら見て！ スイカ一緒に食べ……愛臭あいしゅうがする」

そんないい雰囲気のリビングの扉が開き、飛び入り参加してきたのは、満であった。手には大きなスイカを持っている。ちなみに愛臭とは愛の匂いのことである。リビングに漂っていた雰囲気のことである。俗語である。哀愁ではないのである。

「み、みっちゃん？ どうしてここに？ っていつか鍵は？」

枯葉は後ろを振り返り、動揺しながらも満に尋ねた。

「鍵？ お義母様から合い鍵もらってからそれで開けたのよ？」

満のその言葉に枯葉は、母ちゃん何してくれてんの！？ と心の中で叫んだ。

「何しにきたんですかあなたは。せつかくいい雰囲気だったのに……。さつさと帰ってください。私と枯葉君は勉強で忙しいんです。あなたと遊んでる暇はありません」

奈美はさつきまで恥じらっていたのが嘘のように、満を怖い顔で睨んでいます。

「あはつ。あなたの邪魔ができたなんて、私、嬉しいなつ。あなたがいなくなつて枯葉と二人っきりになれたら、もーっと、嬉しいなつ！」

満はそう言つてスイカを奈美に、放り投げた。

「っ！ なにす……なにしてるんですか！！」

奈美は慌てながらもスイカをなんとかキャッチ。その隙に満は、満のいきなりの行動にビックリしていた枯葉と腕を組んだ。枯葉は小さく悲鳴をあげた。

「ねえ枯葉。遊びに行こうよ。あんな奴ほっという遊びに行こ。ねえねえ。いいでしょー？ 勉強なんてやめて私と遊ぼうよー」

満は猫撫で声で枯葉を遊びに誘います。

「ととととと、とりあえず離れてくださいお願いします！」

枯葉の体は硬直状態。蛇に睨まれた蛙みたいに動けません。トラウマツテイク。

「えー。枯葉が私と遊ぶって約束してくれたら、私、離してもっ！」

満はクスクス笑いながら枯葉に交換条件を出そうとしましたが、途中でスイカが飛んできたので、枯葉と腕を組むのをやめドッチボールのようにスイカをキャッチ。その隙に枯葉は満から距離を取ってガクガクブルブル。投げたのは当然怒りで震えている奈美。お前私の前でなに枯葉君たぶらかしてんの？

「……あはっ。私の邪魔、しないでくれる？ 今、いいところだったんだけど。それに、食べ物で遊んじゃダメって教わらなかったの？ あなたはっ！」

満、逆襲のスイカ投げ。

「っ！ あなたこそ、人のモノを取ってはいけないって、教えられませんでしたかっ！」

奈美、怒りのスイカ投げ。

「っ！ い、いつから枯葉が、あなたになったのかな？ 枯葉は、私のモノ、だったのよっ！」

「っ！ はっ。人を物扱いですか。最低ですねっ！」

「っ！ あんたが先に、そう言ったっ！」

「あ、あのー……みんなでスイカ、食べない？ だから、スイカ投げるのやめない？ みっちゃんも南さんも、仲良く食べない？」

枯葉はテーブルに隠れながら、スイカ投げをしている二人を止めようとした。

「枯葉君がそう言うなら私はいつでもやめますけどっ！」

「っ！ 私だって、枯葉がそう言うならやめるよっ！」

「……………やめてないじゃん」

「っ！ あいつが先にやめればやめますっ！」

「っ！ 私もっ！」

「……………」

宙を舞うスイカを見ながら、俺があのスイカキャッチ出来たらそれで終わるよな……………無理。誰か助けてー！！ と、枯葉は思いました……………

0 - 2 ・若葉枯葉と南奈美と新月満の関係（後書き）

恋する乙女はスイカをドッチボールの球のように投げれるって誰か
が言ってたから……

0 - 3 ・若葉紅葉と神社神裂の関係

若葉紅葉と神社神裂は、いわゆる悪友である。時にお互いを助け、時にお互いけなす。親友のように仲がいいかと思えば、赤の他人のように素っ気ない。お前なんか大嫌いだと言われたら、笑いながら本気でビンタ。

二人は、そんな関係である。

「む。枯葉が私に助けを求めている気がするから私は帰らなければいけない気がするけど神裂はどんな気がする？」

「気のせいな気がするから紅葉はさっさと本を読むのをやめて片付けを再開した方がいい気がする」

若葉枯葉が、誰か助けてー！ と思っていた時、紅葉は神裂の引越しの手伝いをしていた。

神裂は胡桃割駅から五つ行ったところで家族と住んでいたのだが、この夏引越すことにしたのだ。引越し先は、若葉家に近いマンション。というわけで、今日引越してきた神裂は紅葉に引越しの手伝いを頼んだのであった。

「っーかさー、神裂。この部屋で一人暮らしするわけ？」

紅葉はしぶしぶといった感じで、本を読む手を片付ける手に変更した。

「なに？　なんか文句あるわけ？」

神裂はボックスの組み立て中である。

「文句はないけどさー。広くない？　この部屋。いいご身分だなー。と思っさ」

神裂の借りた部屋は、2LDK。大学生の一人暮らしにしては少々広い気がするのです。

「別にいいじゃない。狭いよりは広い方がいいじゃない」

「いや、まあそうだけどさ。一部屋丸まる使わないって、明らかに無駄でしょ」

現在二人は神裂の寝室になる場所を整理しているのだが、もう一つある部屋は物置になるらしいのだ。物置といっても、そんなに物を置かない物置。明らかに無駄である。

「だから別にいいでしょうが。黙って手を動かせ。さっさと本入れて」

神裂は組み立てたボックスを紅葉の近くにやった。が、紅葉はそれを神裂に返した。

「なによその態度。家族に見捨てられ一人寂しく引越し作業しなき

やいけなくなつた親友を、私はわざわざ手伝つてあげてるのよ？
そういう態度はないんじゃないかしら？」

紅葉は腕を組んで、ニコツと笑う。

「はいはい申し訳ありませんでした紅葉様。一人ぼつちのわたくしめにお手を貸していただきありがとうございます。というわけで、黙つて手を動かしていただいけませんでしょうか？」

神裂はボックスをもう一度紅葉の方にやって、ニコツと笑う。

「最初からそう言えばいいのよ。なんか最後のほう高圧的で気に入らなかつたけど、許してあげます」

紅葉はさつきまで自分が本を入れていたボックスの上にボックスを置き、そこに本を入れ始めた。神裂は簡易タンスを組み立て始める。神裂は別に家族に見捨てられたわけではない。自ら、引越しの手伝いはいらなうと言つたのだ。両親には手伝つて欲しくなかつた。この部屋には、入れたくなかつた。この部屋は私の部屋。私が入れた人以外は入れたくない。

「神裂。あの空き部屋、妹さんのための部屋でしょ？」

紅葉は作業をしながら、どうでもよさそうに聞きました。

「……」

神裂は聞こえなかつたフリで、答えを返しました。

片付けも一段落して現在時刻3時30分。

二人はリビングでお茶を飲んで一息いれています。

「ところで神裂。お隣りさんとかに挨拶しに行かなくていいわけ？」

ちなみに神裂の部屋は角部屋です。

「行かなきゃいけないー。とは思ってるけどね。大家さんに聞いたら、里帰り中で、留守だったさ」

「ふーん。隣に住んでる人がどんな人かとか、気にならない？ 危ない人かもしれないよ？ 夜な夜な隣から叫び声とか聞こえてきたら楽しいと思わない？」

ニヒヒヒ。という感じで、紅葉は笑ってます。完璧人事です。

「残念ながら、隣人はそんな危ない人ではございません。優しい優しい、気の弱い人ですよ」

お茶を啜って、澄まし顔。

「なにその言い草。隣にどんな人が住んでるか、知ってるわけ？」

「知ってるわけ。紅葉も知ってるわけ」

「え？ 私も知ってるわけ？」

紅葉、ビックリ。

「いやあ、私もビックリしたよ。偶然だよ？ 偶然。全くもって偶然なんだけどね。大家さんに苗字を聞いたときまさかなー。って思ったよ。もう一度言うけど、偶然だよ？」

偶然。偶然。と、クスクス笑いながら言う神裂を見て、完璧こいつ確信犯だよ。と、紅葉は当然思った。

「はいはいわかったから。偶然、偶然、隣人になった人の名前を教えてくださいませんか？」

「そんなに頼まれちゃ。教えるしかないね。私のお隣りさんの名前はね……」

神裂は、これからの生活が楽しみだ。と言わんばかりに、クスツと笑ってから、隣人の名前を発表します。

「冰山つらら」

0 - 3 若葉紅葉と神社神裂の関係（後書き）

中継ぎ的文章。

0 - 4 氷山つららとあたしの関係(前書き)

投稿一回ミスったorz

0 - 4 ・ 氷山つららとあたしの関係

氷山つららと『あたし』の関係は表裏一体というわけではない。つららが表なわけでもなく、『あたし』が裏なわけでもない。つららの裏が『あたし』というわけでもなく、『あたし』の表がつららというわけでもない。

つららがいなければ『あたし』は存在しない。しかし、『あたし』がいなくてもつららは存在出来る。

二人の関係は流動的だが、その上下関係だけは、絶対である。

「……………」

神社神裂が勿体振って言った名前に対して、氷山つらら？ 誰だっけそれ。と若葉紅葉が聞いていた時、つららは実家の縁側で、かき氷を食べながら一人涼んでいた。

つららの養母、つまり氷山吹雪の家、つまりつららの今の実家は、胡桃割市からだいたい離れた田舎にある。たんぼがいっぱいである。家は大きい日本風の家である。しかし最近作られた家なので、古いわけではない。クーラーとかあるし、台所とかはシステムキッチンだよ。

「……………涼しい」

山に近いので、涼しい風が吹く。それによって風鈴が鳴り、なおの
とこ涼しさがますます気がする。セミの鳴き声が風鈴の音を掻き消し、
暑さを増させようとしているが、残念ながら、かき氷を食べている
つららにとつて、セミが鳴いたところで暑くもなんともないのだ。
かき氷は最強なのだ。

「……………」

目の前に見えるのは見慣れぬ庭。囲いの向こうも見知らぬ景色。後
ろの座敷も慣れない畳み。かれこれ一週間この家で生活しているが、
まだ慣れない。自分はこの場にそぐなわい。この家で浮いている、
そんな感じがする。

ここにいて、本当にいいのかな。

ふと。そう思ってしまう時がある。

そういう時は決まって、親友である桜木さくらの顔を思い出し。

『クスクス。また。ホームシックに。なっちゃった？』

『あたし』が顔を出す。

『別に』

かき氷をシャクシャクとさせながら、ポツリと答える。

『あたし』と会話するのに言葉はいらぬ。だって、『あたし』は
『私』。心で想えばこと足りる。

『強がっちゃって。帰る予定は。いつだっけ。』

『八月三十一日。終業式前日』

『つまり。あと一週間。あんたに堪えられる？ クスクス。さくらちやんに。会いたくなつて。きたんじやない？』

「……………」

かき氷をパクパク食べる。冷たくて美味しい。やっぱりイチゴ味が一番だ。ブルーハワイも捨てがたいけど。

『無視か。まあいいけど。クスクス。あたしは知ってるよ。あんたは本当は。もう帰りたいって。だけど遠慮して帰れない。クスクス。予定を早めて帰るなんて。失礼だもんね。お母様に？ お父様に？ クスクス。居心地悪いって。言ってるようなもの。だもんね。』

『うるさい。黙れ。消え失せろ』

『だから。あんたが呼んだんじゃないの。それを。うるさい。黙れ。消え失せろって。クスクス。酷くない？ あたし。悲しくて泣いちやう。シクシク。クスクス』

『何なんだよ。お前は』

『あたしはあたし。それだけよ。あ。名前はいつでも募集中。あたしって。味気ないと。思わない？』

『思わない』

『つれないあんた。嫌いじゃないよ。クスクス。嫌うわけないけど。あたしだけは。ずっとあんたを嫌わない。何があっても。絶対に』

「つららさん」

「はい!？」

つららが気付かぬうちに、吹雪が背後に座っていた。脳内会議もどきに夢中になっていて、全く気付かなかったので、つららは驚いた。いつからいたの。って感じである。

「あら……驚かしちゃったかしら？」

「い、いえ……」

「スイカを切りましたから、あつちで一緒に食べませんか？」

明らかに動揺しているつららを見て、クスクス笑いながら、吹雪はつららを誘う。

「あ、はい。いただきます。……あ」

つららは、まだかき氷を食べ切っていないことに気付く。というわけで、急いで食べる。というわけで、頭がキーンとなり、悶絶する。

「大丈夫？」

吹雪のその問い掛けに、つららは首を上下に振って答え、かき氷を指差してから、向こうを指差す。つまり、喋ることは出来ませんが、私は大丈夫です。先にあつちで待っていてください。かき氷を食べ

てから行きます。という意味である。

「わかりました。向こうで待ってますから、かき氷を食べきったら来てね。ゆっくりで、いいのよ?」

つららの言いたいことを察した吹雪は、クスクス笑いながら、立ち去りました。

「……痛かった」

『バーカ』

『喧しい。黙ってる』

つららは『あたし』に八つ当たりしてから、かき氷をゆっくりと、しかし吹雪が来る前よりは早いペースで、食べ始めました。

0 - 4 氷山つららとあたしの関係（後書き）

自分に優しく接してくれるのに、私は早く帰りたいと思ってしまふ。それは悪いことかもしれない。だからあたしが代わりに糾弾してあげる。その悪を。自分じゃないから容赦なく。あたしは私を攻めます。

0 - 5 ・桜木親子と虹野光の関係

桜木さくらと桜木押花は、親子である。桜木押花は、三途舞歌の親のように子供に過度に無関心というわけでもなく、南穂波のように子育てをおもしrogがっている親でもなく、若葉花恋のように放任的な親というわけでもなく、鈴乃音絢音のように適度に干渉し適度に放任する親ではない。

では、桜木押花がどんな親なのかと言われれば、親になろうとしている親である。色々あつて母親というものがわからなくなった桜木押花は、『母親』というものを考えている。もしかしたら今の自分はさくらの親の資格はないかもしれないと思いながら、悩んでいる。とはいえしかし。

小難しいことを言ったり考えなくてもいいことを考えていたとしても、桜木押花が桜木さくらの『母親』であることと、桜木さくらが桜木押花の『子供』であることは変わらない。

それだけは、ずっと変わらない。

「はにゅーん……」

夏季夏美が勉強地獄にまた堕ちて、南奈美と新月満が、どっちがス

イカを切るかで喧嘩していて、若葉紅葉が神社神裂に、なぜお茶受けがないのじゃ。と怒り始めていて、冰山つららが冰山吹雪に、つららさん。スイカに塩は邪道ですよ？という感じでスイカについて熱く語られていた頃、さくらは自宅のリビングで奇妙な鳴き声をあげていた。

なぜ奇妙な鳴き声をあげているのか。

答え。夏休みの宿題が終わらないから。

「ひみゃーん……」

今現在。さくらの目の前には、決して少ないとはいえない量の夏休みの宿題が広がっている。これでも減った方なのだ。

さくらは別に宿題をサボっていたわけではない。ちゃんと一日にやる量を決めて、一日一日ゆっくりとやっていたのだ。

「ふにゅーん……」

なのにこの有様。

奇妙な鳴き声をあげながら、必死にペンを動かす。しかしその必死さと問題を解く速度は比例しない。数学むずい。わかんない。つららー。

「へにょーん……」

いや、当初の計画通り宿題を片付けていたらこんなことにはならなかったのだ。さくらは少々天然さんだが、そんな終盤に変な鳴き声をあげてしまうような計画は立てない。

ならなぜこんなことになっているのか。

答え。夏休み中盤にイレギュラー要素、義妹、虹野光が現れたから。

この夏、さくらは色々あつて妹が出来た。出来てしまった。それだけなら別によかった。いや、よくはないけど、変な鳴き声を出す羽目にはならなかった。

問題だったのは光が、姉が出来た！。姉が出来た！。嬉しいですよ。サイコーですよー。という感じで舞い上がってしまったって、毎日遊びましようとして連絡してきて遊んだのだ。断れない。とてもじゃないが断れない。あんなに舞い上がってる光を断ることは出来ませんでした。

「ほにゃーん……」

その結果が、これである。計画を立ててやったのに、途中で失敗して夏休み終盤に地獄を見るタイプの典型的例と言える。

「うう……お母さーん。助けてー」

弱りきつたさくらは、キッチンで作業中の母、押花に助けを求めた。

「大丈夫さくら？ どれがわからないの？」

娘の悲痛な声を聞き、押花はエプロンで手を拭きながら、キッチンからリビングに移動。

「うう、ここがわかんないよー。答え見てもちんぷんかんぷんだよー」

「えー……確かにそれはそうだけどー……ヒントくらいくれてもいいんじゃないかなーって思うなー」

さくら、疑いの眼差し。

「ひ、ヒント？ それは、えっと、ここを、じゃなくて……あー……ううー……ごめんなさいさくら。お母さん、本当はちっともわからなかったわ……」

押花は、いや、そこまで落ち込むことないよ？ と、さくらが思うほど、ガクリと肩を落として落ち込んだ。つららさんがいないから私が教えてあげようと思ったのに。私って奴は……うう。つららさんならこんな問題簡単に教えられたんだろうな。それなのに母親である私は教えられないとは。私って奴は。私って奴は。私って奴は……。押花はこんな感じで落ち込んでいたのであった。

「じゃあ、お母さんも一緒に勉強するしかないねー」

「え？」

さくらは落ち込む押花の肩に手を置き、ニコニコ笑いながら、ある意味、お母さんも道連れだよ？ という意味合いにも聞こえるような発言をしました。

「わたし、お母さんと一緒に勉強したいなー」

「さ、さくら……」

勉強を教えられない私にもそんなに優しいなんて。

娘の優しいその言葉を受けて押花は感激した。さすがさくら。優しい

いさくら。可愛いさくら。キヤー！私の娘は世界一よー！ と、押花はちよっと思った。ので、さくらを抱きしめた。バ力親の素養があるのは言つまでもない。

「お、お母さん苦しいよー」

「あ、ごめんなさいさくら。なんだか嬉しくなっちゃって」

「う、うん。ならしかたないねー」

お母さん、たまにおかしくなるなー。と、さくらは思つ。

さて。じゃあ二人で勉強しようと思つたとき、さくらの携帯が鳴りました。

「あ、光ちゃんからだ……」

さくらが携帯画面を見ると、光からだ。電話です。さくらの口からその名前が出たとき、押花はピクツと反応しました。押花は押花で、さくらの義妹に対して、色々思つことがあるようです。

「ちよつと電話してくるねー」

「ええ……ゆつくり電話してきていいわよ？」

「？ はい」

さくらは自分の部屋に入ってから、電話に出ました。

「もしも『もにゅーん！ お姉ちゃん！ 宿題終わらないです

のー!!」

光も変な鳴き声をあげていた。

「そ、そうなの？ わたしも終わらなくて困ってるんだよー」

『お姉ちゃんもですか？ 奇遇ですね！ お揃いなのー!』

「そ、そだねー。それで、どうしたのー？」

『終わらないからお姉ちゃん手伝って欲しいんですのー。今からお姉ちゃんの家に行っていいですかしら?』

「え？ 今からー？」

現在時刻は15時45分くらい。光の家は遠いから来るまでに一時間はかかる。どうだろ。勉強する時間はどれくらいあるかな？

『時間は大丈夫ですよ。いざとなったらお姉ちゃん家に泊まるですの！ お母様にも許可取ったですの!』

「そ、そっかー……」

こっちの許可は一切取られてないんだけどなー。

光は事あるごとにさくらの家に泊まるうとする。お姉ちゃんと一緒に風呂入ったり寝たいらしい。でも、さくらはあんまり乗り気ではない。押花が、あんまり来て欲しくないと思っている気がするからだ。

『ダメですか？ 真音には、今日は用があるからダメって断られて

しまったですの……お姉ちゃんしか頼れないんですのー』

電話口でもわかる。今、光は捨てられそうな子犬みたいな顔をしている。

「う、うーん……」

別に明日でもいいんじゃないかなー。光ちゃんと二人でやっても勉強が全く進む気がしないんだけどなー。でも断りづらいー。どうしようー。と、さくらは思った。

「ん？」

そして、ふと。思いついた。いや、気付いたというべきか。

『どうしたのです？』

「ちょっと待ってねー」

『？ わたくし待つのです』

さくらは抜き足差し足忍び足で部屋の扉に近づき、そっと扉を開けて、リビングを覗いた。

そこにはさくらが思った通り、押花が頭を抱えて問題を解いている姿があった。

答えがのっている紙を見て、問題を見て、頷く。と思ったら首を傾げる。そんな姿があった。娘が戻ってくるまでに問題を理解しようと頑張る親の姿があった。

「……………」

さくらはそっと扉を閉めた。

「もしもし光ちゃん？」

『もしもし光ですの』

「んー。あのねー。光ちゃんもお母さんに教えてもらったらいと思っようー？」

さくらはニコニコ笑いながら、そう提案しました。

『……うー、つまりお泊りはなしという事ですか？』

「……………光ちゃん。勉強する気あった？」

『あ、ありましたですよ！ ありまくりのなしまくりでしたのかしらー！？』

「……………」

『「うー、こほんですの。お、お母様に勉強を見てもらっんですの？」』

「うん。そっだよー」

『……………無理ですの。お母様は勉強すると、すぐ頭が痛くなってしまっんですの……………。だから勉強教えてくれないですの……………』

光、しょんぼり。

「大丈夫だよ。光ちゃんがいっぱいいっぱい頼めば、教えてくれるよ。だって、お母さんだもん」

さくら、自信満々。

『うー……本当ですか？』

「うん。本当だよー？ お義姉ちゃんが言っただから間違いないよ」

『ほう……！ はううう……何度聞いてもいいですよー。お姉ちゃんが言っただから間違いない。いいですよー……』

光、恍惚。

『わかったですよ！ わたくしお姉ちゃんを信じていっぱい頼んでみるですよー！』

「う、うん。頑張ってるねー……ふうー」

光の姉願望にまだ慣れないさくらは引きながら、電話を切りました。

「……」

電話を切ってもさくらはすぐにリビングには戻りません。また、抜き足で扉を開けて、リビングを覗きます。押花はまだ考え中のようにです。

「……」

さくらはまた、静かに扉を閉めました。

あと5分くらいはここで休憩してよ。5分経ったら、リビングに行って、お母さんが解けてたら教えてもらって、解けてなかったら一緒に勉強しよ。どっちにしても、楽しいな！。

さくらはベットに寝転がりながら、そう思いました・・・

0 - 6 ・三途舞歌と鈴乃音姉妹の関係

三途舞歌と鈴乃音鈴音の関係は友達である。互いに互いしか友達がいないのだが、桜木さくらと冰山つららのように親友と呼べるほど仲がいい友達というわけではない。しかし二人は、冬季冬美と夏季夏美のように互いを大切なものと認識している。しかしまわりから見るとそんなに仲がいいようには見えない。と思ったら、ありえないくらい仲がいいこともある。そんな、よくわからない関係である。では、三途舞歌と鈴乃音鈴音の妹、鈴乃音真音の関係はどうなのだろう。友達ではない。家族ではない。互いが互いに積極的に干渉するわけでもない。

三途舞歌と鈴乃音真音の縁は、鈴乃音鈴音で繋がっている。

鈴乃音鈴音がいなければ、二人は出会うこともなかったし、仲がよくなることも悪くなることも、ないのである。

「つきました。ここが鈴の森です」

「……なんですか……ここ」

夏季夏美が脱走を試みて地に伏して、若葉枯葉が結局スイカを切ることになって、若葉紅葉がカステラ食べたいと駄々をこねて、冰山つららがスイカうまいで、桜木押花がいつこうに戻ってこない娘の

様子を見に行ったらベットで寝ている娘を見つけた頃、三途舞歌は鈴乃音真音に連れられて、くるみデパート三階、鈴専門店『鈴の森』に辿りつき、その店内の様相に絶句していた。

順をおって説明する。

もうすぐ鈴音の誕生日である。鈴乃音家では誕生日は毎年盛大に祝う。パーティーをするのだ。クラッカーとか鳴らすよ。その誕生日パーティーに舞歌はお呼ばれされたのだ。

舞歌はそんな経験初めてであった。そもそも友達というものが出来たのも初めてで、色々戸惑っているのに、誕生日パーティー。とりあえず、行くことにはしたが一つ大きな問題があった。

誕生日プレゼントである。

友達が初めて出来たのだから、当然友達にプレゼントをあげるなんてこと経験したことがなかった。どんなものをプレゼントをすればいいかわからない。いや、喜びそうなものがわからないわけではないのだ。鈴音が喜びそうなものはわかる。鈴だ。鈴以外ない。それ以外思いつかない。しかし鈴音ほどの鈴マニアは、そんじょそこらに売っている鈴は全て持っているに違いない。というか鈴なんてみんな似たようなものじゃないかという話である。鈴がついているキーホルダーなんて鈴音は山ほど持っているに違いない。いまさらそれを一つ贈ったところで……。もしすでに持っているものだったら迷惑だろうし……。というような感じで舞歌は悩んでいたのだ。

友達が鈴音以外いないということは気軽に相談出来る相手は鈴音以外にいないということ。しかしプレゼントする相手にプレゼント何がいいか聞くのもどうだろうか。せっかくだから当日までプレゼントがどんなのかは内緒にしておきたいし。と、舞歌は思ったので鈴音には相談出来ない。親にも無理。ああどうしよう。もうテキストで

いいか。いや、あんなに楽しみにしてる奴にテキストなプレゼントをするなんてダメに決まってる。ああでも……。舞歌は悩んで悩んで、真音に相談することにした。

真音は鈴音とは比べものにならないほどの常識人だ。舞歌はそう思っているし、事実鈴音に比べたら常識人である。妹なんだから姉が好きなのも知っているだろうし、おそらくこちらの事情も察してくれるだろうと思い、舞歌は今日、連絡網で鈴音の自宅番号を調べ、出来れば真音本人、とりあえず鈴音以外が出る。と念じながら電話をかけ、見事真音が出たので、事情を説明した。真音は「わかりました。姉さんが好きな鈴がたくさん売ってる店知ってますから案内します。もちろん姉さんには内緒で」と心よく応じて、胡桃割駅で待ち合わせし、今に至るわけである。

「三途先輩。どうかしましたか？」

真音は固まっている舞歌に声をかけます。

「い、いえ……。あの……。な、なんですかこの店は？」

舞歌は動揺を隠しきれない。なんだこの店は。魔境？ 魔境なの？ 舞歌がそんな風に思ってしまうほど、その店は異様であった。

『鈴の森』はくるみデパートの一部に店を開いている雑貨屋のような店である。鈴しかない以外は、そこら辺にある雑貨屋と内装や様相は変わらない。

鈴しかない。

いや、本当に鈴しかない。天井からは大小様々カラフルな鈴がぶら下がっており、棚にはネズミにつけるのかと思うような小さい鈴から化け猫の首についてそうな大きな鈴、鈴がついたキーホルダー、

鈴がついたストラップ、鈴がついたイヤリング、風鈴などなど、鈴の小物が山ほど置いてある。舞歌は店内にはまだ足を踏み入れていない。外から見ただけでもそんなに鈴があるのだ。ここから見える範囲では、鈴がついたぬいぐるみ、バックなども売っているようだ。奥には服がかけられているのもわかる。あの服にも鈴が？ 舞歌はこの店の中にすっごく入りたくない。ここに入ったら、今日は鈴の悪夢を見るはめになりそう。

「なにつて……鈴専門店ですけど？」

真音は何度も来ているからなのか、それともやっぱり鈴音と同じ血が流れているからだろうか。全くこの店に、違和感やら恐怖やらを感じていないようだ。

「……………はあ」

舞歌はため息を一つつき、そのため息で色々な想いを吐き出して、決意を固め、店の中に足を踏み入れた。

「……………」

舞歌は鈴に囲まれた。

そんな感じである。

クマのぬいぐるみがあった。目が鈴だった。タヌキのぬいぐるみがあった。耳が鈴だった。猫のぬいぐるみがあった。心臓付近に鈴が埋め込まれていた。時計があった。数字部分が鈴だった。鈴のヘアバンド、鈴のリストバンド、靴紐の先に鈴がついている靴と靴の先に鈴がついている靴、鈴型貯金箱に鈴型の手提げ鞆、エトセトラエトセトラ。

「……………」

舞歌は逃げ出したくなった。ここまで鈴があると、鈴が怖い。この鈴がいつせいに鳴り出したら、気が狂う気がする。

店内には店員らしき人が一人いた。ポニーテールで『鈴の森』と書かれているエプロンをしている。若い。二十代後半くらいだろうか。

「あ」

レジカウンターで何かを作業していたからか、舞歌と鈴音が入ってきたことに気付いていなかったようだ。顔をあげ、そこに客がいたことに驚いたような顔をした。そして次の瞬間ぱーっと明るい顔に変貌^{へんぼう}。スタタターっと二人の前、というより舞歌の前に歩み寄ってきた。

そして。

「ようこそいらっしやいました！ ここは鈴のための鈴による鈴だけの世界！ 勇気の鈴がリリンリン！ 鈴の音聞けや勇気も百倍！ 鈴の世界をこよなく愛する人の店！ 鈴ファンの人はここを聖地と呼んで崇めます！ そう！ ここは鈴の聖地『鈴の森』！ そして私の名前は鈴鈴美鈴^{りんりんみずすず}！ 鈴の全てを愛し鈴の全てに愛されている女！ 人は私を鈴の化身と呼びますよ！ これから鈴の長いお付き合いをどうぞよろしくお願いいたします！ キッラーン！」

「……………」

「すいません。ホントすいません。自分調子のみりました。ホントすいませんでした。いや、マジですいません。金輪際やりません。さすがに決めポーズをした時は、あたかも自分で吐きそうだったと自

白します。ノリって怖い。ホント怖い。今日初めてきた客にテンション上がっちゃいました。ホント申し訳ないっす。あたいの名前は山田花子^{やまだはなこ}。どこにでもいる普通の女っす。鈴鈴美鈴とか嘘っす。偽名っす。普通の女っす。ホント申し訳ありませんでした。そしてホント、来てくれてありがとう」

鈴鈴美鈴改め、山田花子は、舞歌のありえないくらいいのだんびきを見て、即座に謝罪しました。土下座までしました。だって舞歌さん、人間のどんびきの極致って感じだったんだもの。このままじゃ即座に帰っちゃいそうだったんだもの。

「三途先輩。こっちです」

真音は山田の一連の行動に一切触れず、舞歌を呼びました。

「……………」

舞歌も土下座継続中の山田を無視して、真音と共に店内の奥に移動。

「……………鈴姉^{すずあね}より会話にはなるけど、相変わらず鈴妹^{すずいも}は冷たいっすねー」

山田はちよつと涙目になりながらも立ち上がり、舞歌と真音の後をつけます。

「これですこれ。姉さんが前来たとき、誕生日プレゼントこれがいいって母さんに頼んだんですけど、ちよつと高いから買えなくて、結局別のを買ったんです」

「……………これは」

「さすが鈴姉っすよ。お目が高い。こいつは一点物っす」

真音が示したのは、服である。白のロングワンピース。しかし鈴専門店にある服がただの服なわけがない。まず花柄ではなく鈴柄。襟元をカラフルに飾るのは小さな鈴四つに、大きな鈴一つ。赤青黄色に緑とピンク。戦体物？ もちろん赤色が真ん中で大きな鈴。裾すそにはぐるっと鈴が無数にくっついていて、歩く度に鈴が鳴ること間違いなし。

「……………」

舞歌はそれを手に取り眺める。死んでも着たくない服である。この服を着ると言われたら死ぬ自信が舞歌にはあった。まあ着たくても着れないけど。サイズ合わないから。しかし鈴音は好きそうには見える。サイズも合ってるみたいだし。値札を確認。2が一つに0が四つで20000円。高い。服はいつも『ゆにくろ』の舞歌にしてみれば、法外な値段である。

「……………」

というわけで、舞歌はこの店唯一の店員、つまり店長である田中を睨んだ。田中は怯んだ。しかし屈しない。

「い、いや、これは妥当な値段っすよ？ 触ってみるっすこの生地。肌触り抜群でしょ？ さらにこの鈴にも色々工夫がありますのですね。普通こうというのは洗濯すると取れてしまうんですけど、あたい独自の取り付けかたにより、半永久的にこの鈴は取れないっす。取れないだけじゃないっすよ？ ちゃんと鳴ります。鳴らない鈴は鈴じゃねえがモットーですからね。しかしこうやって服にくっついて

いるとどうしても鈴の音が鈍るんですけど、あたいはその鈍りを極力無くすため苦節五年。編み出しました。鈴接着技法第零番輪廻。これはただいま特許も申請している新技術であり鈴業界に革命を起こす。」「もういいです！ わかりました！ これが凄いのはもう十分過ぎるほど理解しました！」

舞歌は山田の熱い語りを途中で止めた。もう、うんざりっす。

「じゃあお買い上げっすか？」

「……………買います」

「ありがとうございます！ プレゼント用に包めばよろしいんですね！？ お任せあれー！」

田中は小躍りしながら、レジに向かった。

「……………はあ」

舞歌はため息をついた。思っていた以上の出費だった。

「本当に買うとは思いませんでした。お金の方は大丈夫ですか？ なんてしたら、僕も少しは出しますけど……………」

隣でおとなしく待っていた真音がおずおずとそう提案しました。

「……………いえ、別にいいですよ。ここを案内してくれただけで十分です。ありがとうございます」

舞歌は真音に軽く頭を下げ、お金を払うため、レジに向かいました。

「……………」

遠慮した。というわけじゃないか。やっぱり自分が贈るプレゼントだから自分でお金を払いたいってこと……か。きつと本当なら、プレゼントを見つげるとこまで一人でやりたかったんだろっな。僕に頼んだのも、苦渋の選択だったのかなあ。……姉さんを大事に思っている。ってということ……でいいのかな？

舞歌の後ろ姿を見ながら、舞歌の行動を、真音はそう解釈しました。

0 - 6 ・三途舞歌と鈴乃音姉妹の関係（後書き）

キッラーン！

『山田花子』が辞書に追加されました。

決めポーズがどんなポーズだったか……それは、あなたがこれまでの人生で最もどんびきしたポーズです……。

0 - 7 秋春守と金銀砂銀の関係

小難しいことはなし。

自分に有益である人間とを繋ぐ、切れやすく繋げやすい縁。

それが秋春守の友情。

小難しいことはなし。

秋春守は捻くれもので淋しがり屋でマザコンである。

八割ホントで二割が嘘である。

「ふむふむ。なかなかいい店ね守君。こんないい店を私に黙っていたなんて、どついうことかしら?」

「そついうことじゃないですかねえ」

冬季冬美が気を失っている夏季夏美に対して睡眠学習という名の洗脳を施^ほして、新月満が南奈美にスイカの種を飛ばして若葉枯葉にどんびきされていて、若葉紅葉がじゃあ羊羹だせよと神社神裂に詰め寄っていて、氷山つららが今日の夕飯は一緒に作りましょうか

と誘われていて、桜木押花が桜木さくらと一緒に眠り初めていて、三途舞歌が鈴乃音真音の『猫の鈴』という喫茶店でちよつと話しませんかという誘いを一刀両断で断っていた頃、秋春守は金銀砂銀と一緒に喫茶店『CAT・S BELL』愛称『猫の鈴』にいた。

「つまり守君は私が好きであるということかしら」

「つまり僕は部長に死んで欲しいと思っているということです」

「ひどくい守君。私泣いちゃうしくしく」

「そろそろホントに気持ち悪いんで真面目に話してくれませんか？」

「気持ち悪いってお前、もうちよいオブラートに包めよ」

「キモい」

「そついうことじゃねえよ！」

砂銀が女口調をやめたところで現状説明開始。

守は今日の分の課題をこなし、ブラブラと散歩していた。守は一人の方が楽しいと思うような人間ではないが、たまには一人でブラブラ散歩することはある。

ブラブラ歩いていた守は少々疲れたので『猫の鈴』に入って休息とつかおやつを楽しんでいた。そこに砂銀が現れた。

もちろん偶然でもなんでもなく、砂銀は暇だったので守の家に遊びに行った。いなかった。仕方ないので香川智弘に連絡してみた。

「で、香川は用事があるから遊べねえって言いやがって、じゃあて

めえ秋春がいそうなとこ心辺りねえかと聞いたらここを教えてください。たつてわけだ。わかってくれたかな秋春君？」

「香川君は口が軽くて困りますねえ」

「お待たせしましたー」

そんな感じでなんやかんや話していたら砂銀が注文したモンブランをウェイトレスが持ってきた。

「わっ。おいしそー」

砂銀は、女の子みたいに喜んだ。

「おはやくどうぞー」

ウェイトレスは、冷めた目で砂銀を一瞥して去っていった。

「よくそんなにコロコロ声を変えますねえ」

守は、気持ち悪いを通り越して感心した。

「……いや、まあ、お前の言葉は褒め言葉として受け取っておくとして……秋春、あのウェイトレス。今さっきなんつった？ おはやくどうぞって言ったか？」

砂銀は小声で守に確認。視線はカウンターにいるウェイトレスに向いている。

「さあ？ どうでしょうねえ。僕はごゆっくりどうぞと言ったと思

いましたけど?」

守は興味なさ気に、夏季限定スイカパフェを食べながら砂銀に答え
た。

「……………まあ、そういうことにしとつか」

釈然としないが、砂銀はとりあえずウェイトレスの事は忘れてモン
ブランを食す。

「……………うまい」

栗の季節ではないのにモンブランをオススメしてたから試しに注文
したが、普通に美味しかった。値段も普通だった。どうということな
の?

「秋春君秋春君。ここのケーキってどれもこんなに美味しいの?」

「そうですねえ……………まあ、美味しいですよ」

「へえー、本当にいい店ね……………」

内装も落ち着いているし、ホント、いい店。

「どうでもいいですけど部長。ケーキ食べると女口調になるってど
ういう原理ですか?」

「ん? そりやお前。男がケーキ美味しい美味しい言うより女がケ
ーキ美味しい美味しい言ってた方が似合ってるだろ。ま。男一人で
パフェ食えるお前にはわかんねえだろうけどな」

「全然わかりませんねえ」

「しっかしホントにうまいな……………私、この店のファンになっちゃいそう」

とかなんとか言いつつ、モンブランを食べている砂銀の耳に、ウエイトレスとマスターのこんな会話が聞こえてきた。

「マスターマスター。あそこの客。あれは男か女。どっちだと思えます？ 男にしては貧弱なイメージですし、女にして品がないですよ。私は綺麗なオカマに一票です」

「おと……………」
「こだとしても女だとしてもオカマだとしても客は客だ？ それはそうですけどね。というかマスター。いつも言ってますけどもう少し喋りましょうか？ おとって。男でもなく女でもなく音って。ああまあとりあえず、男だと思ってるってことでいいですか？」

「あん……………」
「なに綺麗な子が男なわけがない？ なに言ってるんですか？ 馬鹿ですか？ しかしありがとうございます。私はまた一つ、大人が馬鹿だという確証を得ました」

「褒め……………」
「言葉として受け取る？ 事実として受け取ってもraithたいですね。しっかし、あのニコニコ笑顔野郎が連れてくる客は変な奴ばかりですよ。今回は気持ち悪いオカマにこの前はバケツプリンを注文してきた女。久しぶりに私も腕が鳴りましたね。あの時は」

「おと……………」
「くい様という名の金づるに失礼のないように？」

ええ任せて下さいよマスター。それでも私、猫被るの超得意ですから」

ウエイトレスは胸に手を置き、自信満々であった。そしてマスターはそんなウエイトレスを見て、任せた。と言わんばかりに頷いたのでした。

「……………おい秋春」

そして砂銀は、なんとも言えない表情で守に話しかけた。

「なんですか？」

守はスイカパフェに夢中のようだ。しかし聞こえていたとは思うので、砂銀は話しを進める。

「……………あいつらって、いつもあんな感じか？」

「まあこの店、来る人は少ないですから。暇なんじゃないですかねえ。」

守はなんとも思っていないようだ。

「暇だからって、あんな会話するか普通？」

砂銀は呆れ顔だ。

そんな砂銀に守はスイカパフェを美味しそうに、ニコニコ笑いながら食べながら、こう言った。

「ホントこの店は、いい店ですよねえ」

「……………」

砂銀はノーコメントであった。

0 - 7 秋春守と金銀砂銀の関係（後書き）

秋春守が出てくる話の書きづらさは異常。

とりあえず一人を抜かして主人公という噂の方々の紹介終了。

次回から本編という噂です。

1-1 誕生日パーティー(上)

「……しんどい」

三途舞歌は、胡桃割駅にいた。

駅前の時計台の下で手には『鈴の森』の紙袋を持っている。

どうして自分はこんなところでこんな物持って立っているんだろう。

やっぱり断ればよかった。と、いまさら後悔している舞歌がここで何をしているかといえば、待ち合わせである。

「……」

と、舞歌は待ち合わせ相手を見つけた。遠くの方でとことこ歩いて、キョロキョロしている。待ち合わせ相手はしばらくするとこちらに気付き、とことこからたたたーになって近づいてきた。転びそうで怖い。舞歌はため息をつき、自分も歩き出す。

時計を見上げると17時30分。

舞歌の待ち合わせ相手であり本日の主役、鈴乃音鈴音は、待ち合わせ時間ピッタリに現れたのであった。

「……暑いし熱い」

「鈴音も暑いのに」

舞歌は鈴音に手を引かれながら、鈴乃音家に向かっている。

今日は鈴音の誕生日なのだ。前々から約束していた通り、舞歌は鈴音の誕生日パーティーに参加することになっていたのだが、家の場所がわからない。というわけで、鈴音が迎えに来て案内しているわけである。

なぜ本日の主役である鈴音が直々に迎えに来たのかというと、鈴音を迎えに来たかったからである。それだけである。舞歌としては、場所を教えてもらえば一人で行けたし、鈴音の妹、鈴乃音真音も今日の主役である鈴音を迎えに行かなくても自分が行くよ。と言ったのだが、鈴音は自分が迎えに行くと言って聞かなかつたのだ。

なぜそんなに強情だったのかといえば、先日真音と舞歌が二人だけで（自分を置いて）出かけたことが発覚したからである。真音が母親にかれこれこういうことがあったんだよ。と話していたのを家政婦は見た的な感じで聞いてしまった鈴音は、私を置いて舞歌と買い物に行くなんて！ キーッ！ 舞歌は私の友達なのにー！という感じで、大変ご立腹で、私が迎えに行くー！ 真音には任せないー！ というわけである。

鈴乃音鈴音という少女の特性は、二つ。鈴と子供である。

鈴音は出かける時はいつも鈴を身につけている。もちろん今日も身につけている。鈴ピアスである。

なぜ身につけているかというと、身につけていないといけないからだ。なぜ身につけていないといけないのかは、本人はよくわかってはいないが、とりあえず、身につけていないといけないのだ。取ると大変なのだ。それで納得しておくのがいいのだ。

そして子供である。低身長で見た目も子供っぽい、中身も子供

ばい。子供っぽいというか、我が儘というか。我が儘というか、独占欲が強いというか。独占欲が強いというか、ヤンデレの素質があるというか。

そして舞歌は意地っ張りである。意地っ張りというか、ツンデレというか。ツンデレというか、優しいというか。優しいというか、心を許した相手には優しいというか。

まあ、そんな感じというわけか、なにはともあれ、三途舞歌と鈴乃音鈴音。二人は友達であるが、その関係は、姉妹みあいである。舞歌が姉で、鈴音が妹。我が儘な妹に、なんやかんや言いつつ一緒にいてあげる姉。周りから見れば、そんな感じである。

「舞歌着いたの。ここが鈴音の家なの」

「……………普通ですね」

「？」

なんやかんや説明している間に、二人は鈴乃音家に着いた。17時40分。駅から徒歩10分。近いね。

鈴乃音家は普通だった。中流家庭の一般的な二階建ての建物。塀に鈴が飾ってあったり、屋根のてっぺんに鈴が刺さってたりしても驚かない覚悟があった舞歌からして見れば、拍子抜けというかホツとしたというか。まあ、妹さんは普通だしこいつの親は普通なのかな。舞歌はそんなことを、普通の家を見ながら思った。

「舞歌どうしたの？」

ぼけーっと家を眺めていた舞歌に、鈴音は首を傾げた。そんなに見てて何が楽しいのかな？

「どうもしませんよ。さっさと中入りしましょう。それともまだ中入っちゃいけないんですか？」

準備とかでダメとか。

「まだ中入っちゃいけないの。鈴音はさっさと中に入るの」

鈴音はそう言っ、てく、てく、と舞歌の手を引きながら玄関に行き、

「ただいま」と言っ、て玄関を開け、舞歌は少々緊張しながら「……お邪魔します」と言っ、て入っ、ていっ、た。

玄関で靴を脱いで隅っこに揃えて鈴音が用意してくれたスリッパを履き、また手を繋ぐこうとする鈴音の手を弾き、しょんぼりしている鈴音の後ろをすたすた歩く舞歌。二階に続く階段を通り過ぎ洗面所やらトイレやら物置やら寝室らしき扉を通り過ぎ居間についた。居間には誰もいなかった。

鈴乃音家の居間はそれほど広くなく、テレビ（薄型）とテーブル（料理数品有り）が一つに椅子が五脚。あと棚の上に観葉植物やら小物があるくらいか。台所とは扉で分けられている、ダイニングキッチンじゃないタイプ。台所の方ではカチャカチャ、グツグツ、いい音といい匂いがしてくる。つまり台所には誰がいるようだ。

「ただいま」

鈴音は台所の扉を開けて挨拶をした。
舞歌は所在なさに鈴音の後ろに立ったままである。その椅子に座って待ってればいいのかな。と、思わなくもないが勝手に座るのもあれだよな。

「あら、鈴音おかえりなさい。早かったわね」

「おかえり姉さん。ちゃんと三途先輩連れてこれたみたいだね」

台所では鈴音の母親、鈴乃音絢音と真音が料理を作っていた。
鈴音のおかえりに対しての二人の言葉はまるで、鈴音がこんなにも早く帰ってこれるとは思わなかった。よく迷子にならなかったね。という感じであつたが、鈴音はそれに対して怒るわけもなく「鈴音は早く舞歌を連れてこれたの」と、こくと頷き復唱し、絢音がグツグツ煮ている鍋を眺めた。舞歌は舞歌で、まあこいつ。チヨウとか追っかけてどっか行きそうだしなあ。鈴の音に惹かれてフラフラ歩いていく姿も目に浮かぶし。心配する気持ちもわからなくもない。と、鈴音の後頭部を眺めながら失礼なことを考えていた。

「あなたが、三途さん？ で、いいのよね？」

「え？ あ、はい。三途舞歌です……」

舞歌が鈴音の後頭部を眺めながら、チヨウチヨはありえないとしても、ホント、鈴はありそうで怖いな。こいつの頭の中はきつと鈴が大半を占めているんだろうから。しかしそう考えると、私はこいつにとつてどのくらいの価値があるんだろうなあ。とか考えてたら、絢音が話しかけてきた。ビックリしたぜ。

絢音はエプロンで手を拭き「鈴音。鍋見てて」と鈴音に声をかけ、

「鈴音はわかったの」と自信満々で鍋を凝視し始め「姉さんそういう意味じゃないよ」と妹に呆れられた鈴音と場所を交代し、台所の扉を閉め、舞歌の前に立った。舞歌は一步下がって距離を取った。舞歌にとつて鈴音は初めての友人。ということは当然、友人の母親と、面と向かつて話すのは初めての経験なので緊張を隠し切れない自分でも、顔が強張っているのがわかる。

「……」

絢音はふむふむと観察するように、舞歌をじろじろ見始めた。な、なんででしょうか。という気分になった舞歌は、もう半歩後退した。

「背、高いのね」

観察し終えた絢音は、ニコツと笑ってそう言った。舞歌は「は？はあ……まあ」と曖昧に頷いた。なんでわざわざそんな、見たらわかるようなこと言うんだ？って気分である。

舞歌は女子としては背が高い方だが、誰かにその事に触れられたのは一度だけだ。舞歌の背が高くなったのは中学二年くらいだった。その時はすでにクラスで孤立を手に入れていたので誰も話しかけなかったし、高校入学当初にクラスメートの一部が仲良くなる取っ掛かりとして背について言ってきたくらいだが、そんな些細で粗末な出来事、舞歌はすでに忘却の彼方。じゃあ舞歌が覚えている自分の背を指摘した人物は誰かというと、猫猫子猫というふざけた保健医である。

入学当初。猫猫というふざけた保健医は、健康診断で背を計った時舞歌に対して『あなた背が高いわね……羨ましいぞー！私に10センチくらいわけてくれないかしら？……なーんちゃって』と、言ってきたのである。さすがの舞歌も忘れられない出来事であった。

つまり舞歌の背に言及したのは、大人だけということなので、舞歌は絢音の言葉を受け、大人ってなんでわかりきった事言うんだろっなあ。意味わからん。と、思わなくもなかった。ちなみに、なぜ鈴音が舞歌の背の高さについて言わないのかというと、鈴音はそもそも背が低いのでたいていの人は背が高いんだから言うわけもない。ちなみにちなみに真音は、背が高いなあ。と思わなくもなかったが、わざわざ言うことでもないよな。と思ったので言わなかったのである。どうでもいい情報であれ。

「今日は鈴音のために来てくれてありがとうございます」

舞歌が大人の不思議に対して思いを馳せていたら、絢音が頭を下げながら感謝してきた。舞歌は動揺した。そこまで感謝されることですか？

「い、いえ、あー……こちらこそ、お招きいただきありがとうございます？」

舞歌は動揺しつつ、自分も頭を下げ感謝しておいた。自分でもよくわからないけど、とりあえず感謝しておいた。

そんな舞歌を見て、どう思ったかはわからないが、絢音はクスッと笑った。

「暑かったでしょ？　そこに座って待っていてくれる？　今、麦茶持ってくるから」

「え、あ、はい。あ、手伝った方が……？」

「いいのいいの。あなたはお客様なんだから……というかね……もう少し準備がかかるから、鈴音の相手をしておいてくれる？　それ

がお手伝いってことになるかな」

クスツと笑い絢音はそう言った。そして舞歌の返事を聞かず台所の扉を開け、「鈴音。もう鍋はいいわよ。三途さんと座って待つてなさい。あ、麦茶持つてつて」と、鈴音に声をかけた。鈴音は「鈴音はわかったの」と言つて冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップを持つた。そして絢音と交代で台所から出てきて、「舞歌こつちななの」と、母親はよくわからん状態の舞歌に声をかけ、椅子に移動。

「舞歌はここなの」と指定された場所に舞歌は座り、鈴音もその横に座った。

「……座るとこ違う気がするんですけど」

上座に座るべきじゃない？主役つて？という感じの舞歌。

「鈴音は座るとこ違う気はしないの」

鈴音は、何か問題が？ という感じの視線を向けながら、麦茶を注いだ。「零れる！」と、舞歌は指摘した。表面張力という偉大な力が働き、難を逃れた。よかったね。

「……まあいいか」

今度はちゃんと麦茶を見ながら注ぎ始めた鈴音を見てホツとしつつ、舞歌は、まだ始まってないんだから席なんていいのか。と思った。そして、「はあ……」と、一息ついた。初めて味わう他人の家の空気。久しぶりの『母親』という存在との会話。疲れた。妙に疲れた。これからが本番なのに、すでに帰りたい。やっぱり断ればよかったか。

「舞歌大丈夫？」

鈴音が舞歌の前に麦茶を置きながら、舞歌に声をかけた。

空気が読めないタイプ、つまり人の気持ちを察するのが苦手なタイプの鈴音が大丈夫？ と、どうしたの？ではなく心配する言葉をかけるくらい、舞歌は疲れた、というよりうんざりな顔をしていたようだ。

「……………大丈夫じゃなかったら帰っていいんですか？」

舞歌は鈴音を一瞥しながら尋ねた。

「ダメなの」

即答である。そして、この話は終わった。というように、コップに口を近づけ、今にも零れそうな麦茶を啜り始めた。

「……………はあ」

いいと言われるとは思わなかったが、取り付く島もなくこちらの意向は完全拒否の態度の鈴音に、舞歌は、呆れ気味にため息をつき、麦茶を飲んだ。

1・1・誕生日パーティー（上）（後書き）

とりあえず暑い!!

つてな感じで（？）鈴乃音さん家の鈴音ちゃんの登場でした。

これにて学生の主要メンバーは出揃ったに違いない。たぶん。おそろく。きつと。

更新頑張るぞ。おー。

内容もそれなりに頑張るぞ。おー。

つてな感じで（？）また次回ー。

1 - 2 ・誕生日パーティー（中）

「……………」

色々あった。

鈴乃音鈴音がテーブルの上に並んでいた食べ物（寿司とか）をつまみ食いしようとして、三途舞歌がそれを黙認してたらちようど台所から出てきた鈴乃音真音に、鈴音はつまみ食いはダメと叱られ、なぜ止めないのか。パーティーはみんなが揃ってからじゃないといけないんだよ。と舞歌も叱られ、舞歌はすいませんと謝って、鈴音はごめんなさいと謝った。

鈴音が舞歌の持ってきた袋に興味を示し、プレゼントだよと舞歌が教えたら、今欲しい今すぐ欲しい見せて見せて今すぐ見せてと言いはじめ、まあいいか。いつ渡してもプレゼントはプレゼント。変わらんだろ。と思いき舞歌が渡そうとしたら、ちようど台所から料理を運んできた鈴乃音絢音に、プレゼントは後で一緒に渡すからと鈴音は止められ、そういうのは始まってからでしょと舞歌は窘められ、鈴音は膨れっ面になりながらも我慢することにして、舞歌は、はあ。そういうもんなのか。と思った。

「……………はあ」

という感じで色々あって、舞歌はパーティーが始まる前から、なんか、自分が常識知らずみたいで、自分は鈴音ほどではないと思っていたのに、鈴音と同レベルのようで、それがなんかショックで、そんなこと知りたくなかった。いや、そんなはずね。私は常識人だ。少なくともこいつよりは。という気分になり、パーティーに来たことを後悔し、もう二度と来てやるもんか。と、思っていた。

「ただいまー。お、いい匂いだなー」

と、そんな風に舞歌が軽くへこみ気味で、鈴音がなんで舞歌は落ち込んでるんだろう。お腹空いてるのかな？ と、的外れな事を考えていた18時15分。鈴乃音家の大黒柱であり、夏休みなどなく平日である今日も頑張つて働いていた鈴音の父、鈴乃音鳴海が居間に現れた。手には四角い箱。ケーキに違いない。

「おかえり」

無表情で無感情。ちゃんと鳴海の方を見て言ったが素っ気なく感じるようなおかえりの挨拶をしたのは当然鈴音である。そんな挨拶でいいのかよ。ただいまもそういえば素っ気なかったな。親に対してそれでいいのかよ。と、家族に挨拶を言わない(言われない)舞歌が自分の事を棚にあげて思ったが、鈴音のそういう態度はいつものことだし、挨拶してくれるだけ満足な鳴海は、「ただいま鈴音。ほら、ケーキ買ってきたぞー」と言いながら満面の笑みだ。そしてケーキという言葉聞いて鈴音が無表情のまま目だけ輝かせた。待ち望んでいただけ。

「君が鈴音の友達、三途さんだね？ 初めまして。今日は来てくれてありがとう」

テーブルの上にケーキを置き、ケーキから目を離さない鈴音の頭をぼんぼん叩き、いやいやと首を横に振られ、落ち込みながら鳴海はパーティーがそろそろ始まるとして終わるのはいつだ。と考えていた舞歌に話しかけた。

「あ、はい。本日はお招きいただきありがとうございます？」

舞歌は椅子に座ったまま、とりあえず挨拶した。こういう挨拶は慣れていないので無作法でも許されるよね。

鳴海も、座ったままの挨拶程度で怒るわけもなく。何か納得したように、うんうん。と満足気に頷いた。

なにを納得してんだこの人。と、舞歌は訝し気に鳴海を見ていると、台所から食器を持った真音が出てきた。

「あ、父さん帰ってたんだ。今メールしようと思ってただけど」

「ただいま真音。今さっき帰ってきたところだ。父さん、仕事を早めに切り上げて、急いで帰ってきたんだぞ」

鳴海は、どうだ。偉いだろ。というように胸を張った。

「あらあら。それはいいことだけど、同僚の方に迷惑かけちゃダメよ?」

真音に続いて絢音も台所から出てきた。

「迷惑なんてかけていない。私の娘のためなら、彼らは喜んでサービス残業をしてくれるだろう」

自信満々である。

「父さん……冗談だよね?」

引き気味である。

「当たり前じゃない真音。あなたのお父さんが、他の方にそんな迷

惑をかけることするはずないじゃない。ね？ そつよね。お父さん
「？」

怖い笑顔である。

「も、もちろん冗談だとも、じ、自分の仕事を後輩に押し付けたり
なぞ、私がするわけじゃないじゃないか」

動揺である。

「……父さん、目が泳いでる」

冷めた目である。

「来月。お小遣い九割カット」

死刑宣告である。

「鈴音はケーキの箱開けていいの？」

マイペースである。

「姉さん……もう少し待とうよ」

苦笑いである。

「そ、そつだぞ鈴音。お父さん着替えてくるから、もう少し待って
なさい」

逃亡である。

「あなた。後でゆっくり話しをしましょうね」

執行猶予である。

「……………」

独りぼっちである。

「それじゃ始めましょうね。ほら、お父さん。電気消して」

「……………ああ、わかった」

主役の鈴音が上座に座り、その右側に舞歌が鈴音の希望で座り、左側には絢音が座り、舞歌の横には真音が座り、絢音の横にはここにきて威厳いけんというか立ち位置たちゐりというか位ゐが最下位さいげいになった鳴海が座った。

鈴音の前には17本のロウソクが刺さってるケーキがある。すでに着火済みである。鳴海が電気を消すと、ぼんやりとロウソクの明かりが周りに並ぶ料理を照らす。幻想的な気がするね。

「それじゃあ鈴音。歌を歌い終わったら、一息で消してね」

「!?!?」

歌!? 歌ってあの歌で歌歌うの!? と、舞歌は驚愕したが暗くて誰も気付かなかった。もちろん舞歌にとっては驚愕でいきなりの展開だったが、鈴乃音家にとっては恒例行事なので「鈴音はわかったの」「それじゃあ、さん、はい」「ハッピーバースデイトゥーユー」「」とか何とか、鈴乃音家の皆さんは手拍子で歌を歌い始める。仕方ないので舞歌も小声で歌を歌う。なんか、恥ずかしい。

「ハッピーバースデイ……ハッピーバースデイトゥーユー」「」

歌い終わると、鈴音は「ありがと」と言って、ふーっ、ふっ、ふっ、ふーっとな火を吹き消した。

「おめでとう」

「おめでとう!」

「おめでとう」

暗闇の中、盛大な拍手が起こり、口々におめでとうという声が上がった。

「……………おめでとうになります」

暗闇の中、やっぱり場違い。来なきやよかった。と、舞歌は思った。

1 - 2 ・誕生日パーティー（中）（後書き）

なにぶん誕生日パーティーに呼ばれたことなんかないからロウソクを吹き消すタイミングがわからん。というか高校生なのに誕生日パーティーするのがなんか奇妙。そこに友達を一人だけ呼ぶというのも奇妙。奇妙奇天烈奇々怪々。って、かつこよくね？

まあ。誕生日パーティーはかるーく流して、早いとこふざけてる保健医と怠けてる司書と自由な校長を登場させたい気がしないでもないね。

1 - 3 誕生日パーティー（下）

ダイジエスト。

「あらあら鈴音。口の回りが大惨事よ。もっと落ち着いて食べなさい。まだいっぱいあるんだから」

「りんねふあおちふいてたふえてるの」

「姉さん……食べながらそんなこと言っても説得力ないよ……。ご飯粒取れてないし……」

「三途さんも遠慮しないで食べてね」

「あ、はい」

「真音もご飯粒ついてるぞ。恥ずかしいぞー。鈴音のこと、言ったられないぞー」

「え？ ホント？ 取れた？」

「ああ。バッチシ撮れたぞ。真音が慌てた顔がな！」

「……父さん。いつの間に携帯出したの？」

「いつの間にかさ。ほら母さん。なかなかうまく撮れたろ？」

「あらホントね。あとで私にも送ってくださいね」

「ああ任せとけ。三途さんもいるかい？ 真音の慌てた顔というのはなかなかレアなんだよ？」

「父さん！」

「ははは。冗談だ冗談。やっぱり真音をからかうのはおもしろいな」

「そうね。真音はいついついからかいたくなる逸材ね。鈴音もそう思うでしょ？」

「姉さんがそう思うわけ」鈴音もそう思うの。「思うの！？」もじり…
…あ、三途先輩これ食べますか？」

「え？ あ、はい。どうも」

「ほら鈴音こっち向いてー。はい、1+1はー？」

「2なの」

「うん。見事に笑ってないな」

「そうね。ほら、鈴音笑って笑ってー。はい、チーズ」

「？ 鈴音にチーズくれるの？」

「あら……これは一本取られたわね。ちょっと待ってね。今チーズ持ってくるから」

「母さんも姉さんもなんか違う気がする……」

「ほら真音。こっち向いてー。1+1はー？」

「2だけど。いつの間に写真撮影大会になったの？」

「いつの間にかさ。というか真音。ちゃんと笑ってくれないと困るなあ。にーって。ほら、にーって」

「やだよそんなの……」

「やだつて……全く真音は我が儘だなあ。鈴音もそう思うだろ？」

「姉さんがそう思うわけ」「鈴音もそう思うの」「……姉さんには思われたくないよ」

「はい鈴音。チーズ持ってきたわよー。はい、三途さんもね」

「え？」

「ほら鈴音。三途さんの横に移動してチーズ出してー。三途さんもチーズを顔の横にしてー」

「え？ え？ え？」

「いい感じよー。はい、チーズ」

「え？」「チーズなの」

「あら。なかなかいい写真が撮れたわ」

「おお。ホントだな。これからはレモンじゃなくてチーズの時代だ

な

「チーズの時代って……僕にも見せて」

「はい」

「……チーズの時代だね」

「でしょ？ レモンより食べやすいし、いい感じね」

「舞歌チーズ食べないの？」

「え？ 食べますけど……」

「？ 舞歌どうしたの？」

「どうしたのって……どうなってるの？」

「？ 鈴音にはよくわからないの」

「つまりね鈴音。三途さんもこの写真が欲しいってことよ？」

「え？ いや、ちがい」「鈴音も舞歌との写真欲しいの」

「もちろん鈴音にも送ってあげるわよ。嬉しい？」

「りんねふぁっれふいの」

「姉さん……会話が終わってから食べ始めようよ……」

「ははは。鈴音は食いしん坊さんだな。三途さんも早く食べないと、鈴音に全部食べられちゃうぞ」

「……はあ、まあ、はい。いただきますけど……」

三途舞歌の総括。

なにこの家庭。これが普通の家族なの？

そんな感じで鈴乃音鈴音の誕生日パーティーは行われ早二時間弱経ち、現在時刻は20時30分である。たくさんあった料理はすでにほとんど片付けられ、そろそろお開きといった感じだ。

今居間には舞歌と鈴乃音絢音しかない。

鈴音は舞歌からのプレゼントである、鈴のワンピースを着替えに自室に行き、鈴乃音鳴海は携帯で撮った写真を印刷するとかなんとか言いながら、酔ってふらふら、千鳥足で自室に去って行った。

そして鈴乃音真音は、絢音に鈴音の着替え手伝ってあげると頼まれ、首を傾げながら鈴音についていった。

というわけで、今居間には舞歌と絢音の二人つきりという構図が作られた。

「……………」

舞歌は椅子に座りながら、そろそろお開き見たいだし、あいつが戻ってきたら帰ろうかな。と、ぼんやり考えていた。絢音は舞歌の前で食器類を片付けていた。

「……………あ、手伝います」

ぼんやり絢音が片付けをしているのを見てたけど手伝うべきじゃね？ と、舞歌は気付いた。

アルコールは摂取していないが、なんか頭が回らない。夢の中に漂っているような感じ。お腹がいっぱいで、眠くなっただのかもしれない。と、舞歌は人事のように今の自分を分析した。

「あらそう？ じゃ、食器まとめて運んでくれる？」

「はい」

ニコニコと絢音は笑って、楽しそうである。この人もアルコール飲んでたし、アルコールを飲むと陽気になるのか？ 不思議飲料だな！ と、テキストに考えつつ、舞歌は食器をまとめて重ねて、カチヤカチヤ片付け、台所に運び、流し台に置いた。人様の家の冷蔵庫を漁る趣味もないので舞歌は居間に戻ろうとした。

「……………なにか用ですか？」

戻ろうとしたら台所の入口を絢音に塞がれていた。閉じ込められた！。

「今日は本当にありがとうございました」

ニコニコ笑いながら絢音は感謝しました。

「……こちらこそご馳走様でした」

なぜ逃げ場を塞いだ状態で、話しかけてきたんだろう。と、舞歌は不思議に思う。逃げる気なんてさらさらないよー。

「あのワンピースもありがとうね」

「はあ……どうも？」

あなたにあげたわけじゃないのに感謝されても？ と、思う。

真音からの鈴のストラップ、絢音と鳴海からの鈴のネックレス、そして舞歌からの鈴のワンピース。鈴音はどれも喜んでいたが、やはり一番喜んだのは鈴のワンピースだった。それは前から欲しかった物だったからというより、舞歌からの、友人からの初めてのプレゼントだったから、というのが大きいだろう。と、舞歌以外は全員が思った。絢音の感謝はそういう意味合いが強いのだが、舞歌はどれほどその感謝の意味を理解しているかはさだかではない。

「ねえ三途さん？ 鈴音はちょっと変わってるでしょ？ 大変じゃない？ 友達でいるのは」

微笑みながら小首を傾げる絢音。

「はあ……まあ……一緒に暮らしている……あー、絢音さん？ の方が大変だと思いますけど……」

いまいちなにが言いたいのかわからない。大変だから友達やめたら

？ という意味ではないと思うけど。

「私は別に大変じゃないわよ？ だってあの子の母親だしね」

「はあ、そうなんですか？」

「子供の世話の大変は大変に含まれない。親ってそういうものじゃない？」

「……………」

そんなこと聞かれても私、親じゃないからわからない。私の親は子供の世話なんかしてないから大変かどうかもわからない。

この家はわからないことばかりだ。

わからないわからない。

どうしてパーティーなんてするんだろう。

わからないわからない。

どうして私がここにいるんだろう。

わからないわからない。

親ってなんだろう。

わからないわからない。

家族ってなんだろう。

わからないわからない。

もしこれが正しい親で普通の家族なら、私の『親』は私の『家族』

はなんなんだろう。

ぼんやりもやもやわからない。

なるほど。

あいつがわからないわからない言う気持ちは、理解できた。

「それに……鈴音があんな風になったのは私にも責任がなくはない

んだから大変なんて言っちゃダメなのよ……」

「……は？」

鈴音のわからない思考の片鱗を掴んでいた舞歌は、憂いを帯びた表情を浮かべて絢音が呟いた聞き逃しそうになった。

「どついう」「舞歌舞歌！」

どついう意味ですか？

と、舞歌が聞こうとしたとき、鈴音が鈴の音と共に居間に入ってきた。

「あら鈴音。似合ってるわね」

絢音は何事もなかったように、まあ実際何事もなかったのだが、居間に行き鈴のワンピースを着て笑顔の鈴音を褒めた。

舞歌は、なんかこう消化不良なあ。なんなんだよー。と思いつつ、封鎖解除された台所から居間に移動した。「舞歌舞歌！ 見て見て！ すごい鈴なの！ すごい嬉しいの！ ありがとうなの！」移動したら、鈴音がびよんびよん跳ねながら興奮していたので、「はいはい。似合ってますよ」と、頭を叩きつつおざなりに褒めておきました。

表面上はおざなりでどうでもいいような舞歌でしたが、内心は鈴音がこんなに喜んでくれてよかった。と、思っていたのは内緒である。

この日。

鈴音が手に入れたもの。

鈴のストラップ。千円。

鈴のネックレス。五千円。

鈴のワンピース。二万円。

年齢。 + 1

この日。

舞歌が手に入れたもの。

疑問。 30%

満足と達成感。 60%

嫉妬。 10%

この日。

舞歌と鈴音が手に入れたもの。

食べ物。 いっぱい。

思い出。 たくさん。

チーズを持って困惑顔の舞歌と、
チーズを持って微笑んでる鈴音の
ツーショット写真。

P r i c e l e s s ?

1 - 3 ・誕生日パーティー（下）（後書き）

んー。わからん。

まあ。こんなもんでしょ。

最近プライスレスのCM見ないなあ。あれ好きだったんだけど。

そんな気持ちでした。

また次回。

2 - 1 ・夏休み最終日

「ねえ夏美……」

「ん？ どしたの冬美。今にも死にそうな声で」

13時。

駅から私立八尾比丘尼高校に辿り着くためには避けては通れない坂を、夏季夏美と冬季冬美はえっちらおっちら上っていた。

坂といつても、この坂は天国に続く坂とか、地獄の坂とか呼ばれる急勾配ではなく、当然この坂の前に倒れた人間は数知れずとかいう逸話もあるわけもなく至って普通の、強いていうなら少々長いくらいの、緩やかな坂である。

「暑い……」

しかし、夏の暑さがプラスされればそんな坂でも結構つらい。

「あー、確かに暑いね。明日から九月だったのに。まだ夏真っ盛りって感じだね」

冬美に比べれば夏美はまだまだ余力があるようだ。さすが夏の化身っぽいだけはある。

「なんでこんな暑い日に私たちは学校に行かなきゃいけないわけ……？」

うんざり。と、いったように夏の空を冬美は見る。あの青が憎い……。

……。

「そりゃ、部長から強制命令がきたから仕方ないじゃん」

二人は将棋部に所属している。部長、金銀砂銀に呼び出されたので、今日二人は学校に向かっているのだ。

「まあいいじゃんいいじゃん。明日からまた学校なわけだし？ 予行演習的な感じさ」

そう。今日は夏休み最終日。明日が始業式なわけだ。冬美が憂鬱な原因の50%は、夏の暑さ。そして20%が、それである。明日から学校なのになんで前日に呼び出されるわけ？ 明日じゃダメなわけ？ ということである。

「ほら冬美。あともうちよっと。頑張ろうぜ！」

「……夏美はどうしてそんなに楽しそうなの？」

そして残り30%は、夏美が自分とは違い楽しそうだからである。もう少し厳密にいうと、夏美が楽しそうな理由が、残り30%に該当する。

「え？ いやいや別にあれだよ？ 夏休み最終日。冬美の地獄の勉強よりは部活の方が楽しいし楽だなー。なんて微塵も考えていないよっ。」

「……」

ニコニコと楽しそうな夏美を冬美は、恨めしげに無言で一瞥し、無言で膝を蹴った。膝カックンの強いバージョンである。夏美は見事

に膝をつき、アスファルトに手をついた。

「あっつ!?!」

冬美の膝カクンは手加減されていたが、夏場のアスファルトは手加減抜きの熱さだ。

「着いた……」

「着いたー」

そんな感じでじゃれあいながら、二人は私立八尾比丘尼高校に到着しました。

「あれ? 鈴乃音と三途……なにそれ?」

そして二人は上履きに履きかえるため、生徒玄関に向かった。そして、下駄箱でクラスメートであり一応若干知り合いである三途舞歌と鈴乃音鈴音に出会った。そして、夏美は困惑した。冬美は日差しから解放されて一息ついた。

「?」

鈴音はちょうど、座りながら上履きを履こうとしていたところだっ

た。急に現れた夏美と冬美を見て、首を傾げる。はて。誰だったわけ？ あっち（冬美）はなんとなく覚えてるけどこっち（夏美）は誰だったけ？

ちなみに服装は例の鈴ワンピースである。夏美が困惑したのもそのためである。だって、ねえ？ ワンポイントで鈴があるならまだしも、ねえ？

「鈴乃音さんまだですか！？ 早くしないと溶けてしまいますよ！？」

アイスの足は口裂け女より速いんですから！！」

そしてハイテンション舞歌はすでに靴を履きかえ、鈴音を下駄箱から少し離れたところで待っていた。アイスクリームを抱えながら。持っていたわけではない。抱えていたのである。どこに売ったのそれ？ 外国？ と、尋ねたくなるような大きなカップのアイスクリームを抱えながら立っていたのだ。一リットルのバケツくらいの大きさだろうか。鈴音を急かしたあと、うっとり。といった感じでカップを撫でる舞歌が怖い。夏美が困惑するのも仕方がないよね。

「鈴音は今行くの」

鈴音は立ち上がり、舞歌の傍にかけていった。そして二人は手を繋いで去っていった。

残されたのは、なんなんだあの服は。なんなんだあのアイスは。なんなんだあいつらは。と、呆然としてる夏美と、あの服なかなか可愛かったな。でもそれよりそんなことよりバケツプリン食べたい。と、思ってる冬美。

「あれ？ 夏季先輩と冬季先輩。奇遇ですね」

そして舞歌と鈴音に置いてかれた、鈴乃音真音の計三人。真音だけ

は学年が違つるので、下駄箱が離れていた。そのためひよっこりと、急に現れたわけである。

「ああ……鈴乃音じゃなくて、えっと……妹でいいや。妹は、普通だ。よかった」

夏美は至って普通の服装で、特におかしな物も持っていない真音を見て、ホッとした。ちなみに真音の服装は制服である。ブレザー夏服タイプ。普通だ。ちなみにちなみに、夏美と冬美は動きやすいカジュアルな服装を好むという噂である。

「真音さんも、部長に呼ばれたの？」

靴を履きかえながら、冬美が尋ねた。

「いえ。違いますけど、今日将棋部があるんですか？ 光は何も言っただけです……」

こつちに顔出していいのかな……。と、真音は呟いた。冬美と夏美にはまだ、その意味はわからなかった。

「そうだよ。真音さんのところには連絡こなかったの？」

「来ませんでした。というか冬季先輩。僕、将棋部じゃないですから」

「ああ。そういえばそうだったね。うっかりしてた」

真音は将棋部ではない。そもそも部活動に参加していない。しかし、友人の虹野光に付き合っつて、将棋部に頻繁に顔を出しているので、

半ば将棋部みたいなもんである。

「じゃあなんで来てんの？ 姉も来てたし。なんかあんの？」

そうそう。真音という名前だった。と、思い出しつつ夏美が尋ねた。

「姉さんと三途先輩と僕は、猫猫先生に呼ばれたんです。文芸部のことで話があるらしくて」

「猫猫先生が？ 文芸部？ 鈴乃音さんたち文芸部だったっけ？」

「いえ。違いますけど、まあ色々あって。僕、そろそろ行きますね」

真音は一礼して、走って舞歌と鈴音の後を追った。

「……んー、よくわかんないけど、いこっか」

「だね」

冬美と夏美も、将棋部の部室に向かって歩き出しました。

2 - 1 ・夏休み最終日（後書き）

はい。導入部分。

私立八尾比丘尼高校の制服はセーラーじゃなくてブレザー？リボンじゃなくてネクタイ？色は色々？

真音は制服登校タイプ。僕とか言いながらスカート着用。いや、だからどうしたって話しだけど。なんで真音の一人称は「僕」なんだろう。不思議だぜ。舞歌がアイスクリームを装備するとテンションが上がるのも不思議と言えば不思議だぜ。あと口裂け女という単語が頻繁に出てくるのも不思議だぜ。不思議がいっぱいだぜ。また次回だぜ。

2・2・猫猫は文芸部会議がしたい

「はい、たぶん全員揃ったと思うので、第三回くらいの文芸部文化祭どうすんの会議を始めたいと思います！！」

猫猫子猫が開会を宣言した。

「ちょっと、なに枯葉君に近づいてるんですか。それ以上近づいたら怒りますよ」

南奈美が睨みながら牽制した。

「……………」

若葉枯葉は無言で動かない。

「あはつ。あなたこそ枯葉から離れてよ。離れないと私、殺しちゃうかも」

新月満が笑いながら殺害予告した。

「舞歌舞歌。アイスクリーム美味しい？」

鈴乃音鈴音が無表情で尋ねた。

「美味しくないわけがありません……………」

三途舞歌が恍惚の表情のまま答えた。

「……麻薬成分入り？」

鈴乃音真音は舞歌の表情を見て思わず呟いた。

「お姉ちゃんここ！　ここがわからないんですのー！！」

虹野光は泣きながら教えをこいた。

「えつとねー。これはねー。あのねー。そのねー。ここをねー。えつとねー」

桜木さくらは必死に答えを考えた。

「……すーぴー」

小梅杏こじゅめあんずは寢息を立てた。

「……うん。誰一人私の言葉、聞いてないぞ」

猫猫は笑いながら、そう言った。当然その言葉も誰も聞いてはおらず、猫猫の笑みが引き攣ったのは、気のせいではない。

さて。誰から片付けようか。

その前に舞台の説明。

私立八尾比丘尼高校保健医猫猫子猫が今いるところはどこなのかという、文芸部部室である。

部室の広さは、たぶん教室の半分くらいで、扉は一つで（今は風の通り道にするため開きっぱなし）、壁際には本棚があつて、本棚には文庫本やらハードカバーやら絵本やら童話やらが並んで、その向かいの壁は黒板があつて、部屋の中央には丸い大きな机があつて、そこにみんな座つてる感じです。

猫猫は黒板を背にして座っており、その猫猫を頂点として、時計回りで、奈美、枯葉、満、鈴音、舞歌、真音、光、さくら、小梅、という順番で座っている。

以上。説明終了。

「ちょっと小梅先生。起きて下さいよ」

猫猫はまず、一番処理が簡単そうな、小梅に話しかけた。

小梅は恐らく私物だと思われる毛布を被って眠っている。

「……すーびー」

声をかけた程度では起きないくらいの熟睡度である。小梅をここに連れてきたのはおよそ30分前。私の眠りにレム睡眠はない。と、豪語する小梅にとっては爆睡に突入するのに十分過ぎる時間である。

「……………えい」

ということで、猫猫は早々に武力行使（レベルMAX）に打ってでた。つまり、頭を力いっぱい叩いた。

鈍い音がした。小梅の隣に座っていたさくらが、ビクッてなるような音だった。これで起きない奴は化け物だぜ！

「……………すー」

小梅は睡眠に関しては化け物だった。

「えい　えい　えい　」

そして猫猫は、生徒に対しては優しい先生だが、やる気がない教師に対しては鬼だった。君が起きるまで叩くのをやめない。という感じである。

「……………つたー。永眠出来るかと思いました」

さすがの小梅も、さすがに起きた。

「その台詞は永眠したかつたとも受け取れますよ小梅先生。おはようございます」

ニコッ。と、笑いかける猫猫。

「おはよう猫先生。永遠に眠れるなんて、最高だと思いますけどね……………」

小梅は、ふぁー。と、あくびをもらし、髪をガシガシと掻き、かたまたまだったメガネの位置を直し、他のメンバーの様子を一通り見てから、首を傾げた。

「あれ？ 私、なんでここにいるんだっけ？」

「文化祭のことを話し合うためですよ。私立八尾比丘尼高校図書室司書兼文芸部顧問小梅杏先生」

猫猫はまだ寝ぼけてる小梅の頭をもう一度叩いた。そして、「これは没収です。寝ないようにして下さいよ？」と言って、小梅の毛布を奪った。「あゝ。それだけは」と、小梅が言ったが無視。

小梅とは違って、猫猫は忙しいのだ。猫猫が相手にしなければ相手は、まだまだたくさんいる。

2・2・猫猫は文芸部会議がしたい（後書き）

はい。短め？ 気のせい。

小梅杏は初登場。この小説内では猫猫子音と虹野光も初登場かな？

まあどうでもいいかな？ 私はてけとーに書くのがもっとうです
から。部室の大きさもなんか違和感が……。

ま。次回もよろしく。

2 - 3 猫猫は恋ばなが好き

睡眠大好き小梅杏に鉄建制裁を行った猫猫子猫。これで、ちゃんとした文芸部会議に一步、近づいた。頑張れ猫猫。お前がやれねば、文芸部会議は始まらないぞー！

「奈美ちゃん奈美ちゃん。ちょっと私聞きたいことあるんだけど」というわけで、猫猫の次のターゲットは南奈美である。席も近いし、仲良しさんだし。

「なんですか子猫先生。今、私忙しいんで手短にお願いします」

奈美、素っ気ない。

「忙しいって何が？ってというか……………あれー？」

おつかしいなあ。私と奈美ちゃんって結構仲良しじゃなかったかしら。なのにこの態度ってなくない？ こちらを見ずにその台詞はなかない？ っていうかそもそも奈美ちゃんが睨んでる子ってだれ？ あと、枯葉君なんているの？ 私呼んだの奈美ちゃんだけなんだけどっていうか、枯葉君生きてる？

猫猫の頭の上にはハテナがいっぱいである。一つ一つ解消していきう。

「奈美ちゃん。忙しいって、何してんの？」

「威嚇です」

即答である。

「ああ……威嚇ね。威嚇って……威嚇？」

疑問である。

「はい。威嚇です」

肯定である。

「なんで……威嚇してるの？」

奈美ちゃん、ちょっとバカになっただかしら。とか、猫猫は思ってる。

「ストーカーがいるからです。そう。そうです子猫先生」

奈美は、満を睨むのをやめ、猫猫を見た。

「あれ？ 奈美ちゃんメガネやめたの？」

猫猫はいまさらながらに、奈美がメガネをかけていないことに気付いた。

「はい。色々あってやめましたって、今はそんな事はどうでもいいです。子猫先生。不審者です。校内に不審者がいます。追い出すべきです」

ずびし。と、奈美は満を指差した。

「不審者？ まあ確かに見たことない子だけど……奈美ちゃんのお

友達じゃないの？」

「違います!」「違う!」

奈美と満は、ほぼ同時に大声で否定した。そして睨み合う。そして、ずびし。とお互いをお互いが指差し、猫猫を睨む。猫猫は、なんとなく両手を上げた。ホールドアップ。なんか迫力あったし。

「こいつと友達とか虫酸が走りますよ! こいつは枯葉君に付きまとうストーカーで邪魔者です! どこをどう見たら友達に見えるんですか!」

「あはっ! 私は虫酸じゃなくて、鳥肌が立ったわ! あなたと友達だと思われるなんて! 私、死にたくなっちゃった! どうしてくれるんですか!」

で、二人は猫猫にそんな感じに怒った。猫猫は「ご、ごめんなさい? 私の勘違いだったわ」と、謝った。鈴乃音鈴音は、うるさいなあ。と、思った。三途舞歌は、アイスうまいなあ。と、思った。鈴乃音真音は、元気だなあ。と、思った。虹野光は、「このままじゃ宿題終わらないですのー!」と、嘆いた。桜木さくらは、「え、あー、うーん。頑張ろうねー」と、光を励ましながら、光ちゃん、あつちの話スルーなんだあ。と、思った。小梅は、すきあり。と、思い、猫猫の膝に置かれてるマイ毛布に手を伸ばした。猫猫は、その手を叩いた。小梅涙目。

「えーっと、二人は友達じゃないなら、どっという関係なのかしら?」

猫猫のその質問に二人は。

「私は枯葉君の彼女で、あいつは枯葉君のストーカーです」

「私が枯葉の彼女で、あいつは泥棒猫」

と、答えた。

「えー！！ 奈美ちゃん枯葉君と付き合ってるのー！？」

それを聞いた猫猫は、恋ばな大好きな女子高生みたいにテンションが上がった。そして奈美は「い、いえ、まあ……」と、照れ、満は「枯葉とは私が付き合ってるの！無視するな！」と、怒り、鈴音は「舞歌は鈴音にアイスクレルの？」と、舞歌に尋ね、舞歌は「いいですよー」と、答えて鈴音に餌付けを施し、真音は「……猫猫先生、歳、いくつですか？」と、キヤーキヤー言ってる猫猫に呆れ、光は「付き合ってるのですの？ 凄いですの！」と、囃し立て、さくらは、光ちゃんそういうのには反応するんだ！。と、思い、小梅は、私、毛布なくても寝れるし。と、睡眠体制に移行して、猫猫に頭を叩かれた。小梅涙目。

「え！ いつから！ いつから付き合ってるわけ！？ キスとかもうしたのー！？」

文芸部会議なんて頭から吹き飛んだぜ！ って感じに猫猫は奈美に尋ねます。

「えっと、キスはもうしました……」

奈美はモジモジ、顔真っ赤。恥ずかしい。だが答える。

「キヤー！！ そうなのそうなの！？ え！ え！ じゃあじゃあそれ以上はもうやっちゃった！？ ハッ！ 枯葉君がさつきから死んだかのように動かないのはもしかしてもしかして……奈美ちゃん

に精気吸われたから？」

「違います！！ そんなことしてません！！」

奈美は顔をさらに真っ赤にして否定した。猫猫はそんな奈美を見て、「冗談よ冗談」と、笑って、小梅は寝るのを諦め、本棚から暇つぶしの本を探していて、さくらは「キス以上ってなんですかー？」という光の質問に困っていて、真音は、光、天然なのかな。と、思いながらさくらに同情していて、舞歌は鈴音の「アイスと鈴音どっちが好きなの？」という質問に「アイス」と即答していて、満はフルフルワナワナ怒りで震えていて、

「さつきから私を無視しないで！！ 私、不愉快で不愉快で怒ってる！！」

テーブルをバーンと叩き、爆発した。

「さつきからあなたは勝手なことばかり言って！ 枯葉の彼女は私なの！」

ずびし。と、指差す。

「って、言ってるけど、奈美ちゃん的には？」

クールダウンして、猫猫は尋ねる。

「私が彼女です」

しらっと、答える。

「うるさい嘘つき！ あんた枯葉にフラれたくせによくもぬけぬけと！ ホントに殺す！！」

「あなただつて、遠い昔にフラれたくせにしつこくないですか？ さつさと諦めて家に帰るべきだと思いますよ？」

「……あはっ。あなた、私が本気じゃないと思ってるでしょ。愛の尊さに比べたら、一人の命なんてゴミに等しいって、私、あなたに教えてあげる」

満は、ニヤリと悪そうな笑みを浮かべ、ポケットに手を入れた。その隣では、満の不穏な雰囲気など気にしない、というか気付いていない鈴音が「どうして鈴音よりアイスなの！」って舞歌に怒っていて、舞歌は「アイスの前では全てが無価値ですよ……」と、悟りきった台詞を答えて、真音は、なんかやばそうだなあ。姉さんに声かけようかなあ。と、思っていて、光は「三角関係ですか？ ドロドロですか？ 昼ドラですか？」と、ちよつと満の雰囲気にビビりつつさくらに尋ねていて、さくらは、光ちゃんそういうの好きなのかなあ。と、ぼけーって思っていて、小梅は我関せず。という態度で桃太郎を読んでいた。

「はいはいストップストップ。落ち着きなさい。そのあなた。軽々しく殺すとか言っちゃダメよ。奈美ちゃんも、ちよつと言い過ぎ。落ち着きなさい」

そして猫猫は、パンパンと手を叩き、事態の鎮静化をはかった。原因の一旦はお前の悪ノリにもあるよ？ というのは内緒である。

「……なによあんた。口出さないで。屈折した愛を振る舞ってるあんたに、一途な私の愛は理解できないわ」

満は、もはや凶器レベルの目で、猫猫を睨んだ。

「屈折した愛……？ よくわからないわねあなたは……奈美ちゃん説明よろしく。あなたの願望は抜きにして、あくまで客観的に今の状況を説明してね」

「……………わかりました」

落ち着きを取り戻した奈美は、猫猫にこれまでの経緯を説明することにした。

2 - 4 ・猫猫は鈴音がお気に入りに

「ふむふむなるほど理解したわ。つまりこういうことね？ 奈美ちゃんはあるの夏祭りの日に告白をしたが、枯葉君は土下座までして友達でいて下さいと頼んだ。へたれね。奈美ちゃんはまあ仕方ないと思ひ、これから恋人になればいいやと思つた。懐が深いわ。でも、枯葉君のトラウマ的な存在の新月満ちゃんが現れてさあ大変。枯葉君はトラウマツテイクでボロボロだし奈美ちゃんはあたふたしてバカになつちゃうし満ちゃんは一切引かないし。修羅場ね。で、なんやかんやあつて、枯葉君は二人とも恋人は無理だから二人とも友達つてことで。つて言つたわけね。バカね。当然二人は納得しなかつただけで、とりあえずそういう感じてという感じてその場は収まつただけで、今現在も枯葉君の取り合い中。青春ね。奈美ちゃんが勝つてるとか略奪愛とかはよくわからないけど、なるほど。あなたが噂の新月満ちゃんつてわけね。紅葉さんからちよつとだけ聞いたことがあるわ……あ。気にしないで。いわばこれは伏線だから今回は関係ないわ。

「で、今日枯葉君と満ちゃんが来た経緯は、まず、私が奈美ちゃんに連絡した。奈美ちゃんは、じゃあ枯葉君も誘おう。学校デートだつて考えたわけね。で、アポなしで枯葉君家を訪ねた。そこはアポ取るべきだつたんじゃないかしら？ つて私は思うんだけど？ …… ああそう。そうなの。枯葉君は優しいから断らないと思つて。へえー。そつかさつつか……なんていうか、奈美ちゃん。二学期になったら色々教えることがありそうね。はい。まあそれも伏線だから今は関係なし。で、枯葉君は拒否したと。嫌だ嫌だ行きとうない。と、言つたわけね。で、奈美ちゃんは枯葉君の拒否を拒否と。で、枯葉君逃げる。奈美ちゃん追う。町内一周くらいしちやつた？ ラブコメしてるわね。で、その途中で満ちゃんに見つかったと。発信機ではなく愛の力で見つけたと。うん。よくわからない。で、なん

やかんやあつて瀕死の状態で枯葉君を捕獲して、ここに連れてきたと。こんな感じ？

「こんな感じね。じゃ、総括しまーす。奈美ちゃんは、もう少し枯葉君のことを考えなさい。枯葉君は、色々もう少し考えなさい。満ちゃんは、もう少し枯葉君以外のことも考えなさい。はい。反論を聞く耳は持つてませーん。とりあえず二人とも。今日は、文芸部の会議なんだからね？ まだいまいちあなたたちの関係がわからないけども、そこはちゃんとしてもらわないと困るわ。満ちゃんだってここにいるなら協力してもらわないと。それが嫌なら出て行きなさい。あ、枯葉君は置いていってね。そんな顔しても、そんな事言つてもダメよ。枯葉君がいなくなったら奈美ちゃんもいなくなるじゃない。それは困るわ。というわけで選びなさい。枯葉君の隣でおとなしくしてるか、枯葉君を置いて出ていくか。……はい。いい子ね。奈美ちゃんもおとなしくしてなさい。奈美ちゃん。もっと冷静になりさい。奈美ちゃんは冷静な方が魅力的よ？ 枯葉君は……寝かしておきましょう。それが一番平和だわ。はい。そんな感じで一件落着。次、行きまーす」

そんな感じで、南奈美と新月満の喧嘩を止めた猫猫子猫。また一步。文芸部会議に近づきました。

「ねえ鈴音ちゃん？ ちょっと私とお話しよっか」

次のターゲットは、鈴乃音鈴音である。難関である。どうやってこ

ちらに意識を集中してもらおうか。

「鈴音は今忙しいから嫌なの！」

鈴乃音鈴音は機嫌が悪かった。

「嫌って……………うう、鈴音ちゃんにフラれたー」

猫猫は精神的ダメージを負った。猫猫は鈴音がお気に入りなので、そんな、取り付く島もない感じで嫌とか言われたら、シヨックでかい。

そんな猫猫に南奈美は「頑張ってください」と、エールを送り、新月満は、そういえばこの子、なんか変な愛を感じるわ。と、鈴音に注意を向け、鈴音は「アイス返すの！ 舞歌にはもうアイスあげないの！」と、三途舞歌の手からアイスを取ろうとして、舞歌は「やめて！ 私からアイスを取らないで！」と、悲痛な叫びをあげながらそれに抵抗し、鈴乃音真音は「姉さん。ちょっと落ち着きなよ」と、鈴音を窘め、虹野光は「あ！ 宿題全然進んでませんの！」と、慌てて、桜木さくらは、光ちゃんってマイペースだなー。と、思い、小梅杏は、茶碗って寝心地どうなんだろう。と、思いながら一寸法師を読んでいた。

「……………ね、ねえ鈴音ちゃん。その服、鈴いっぱい素敵ね。どこで買ったの？」

猫猫は諦めない。鈴音が大好きな鈴で、とりあえず注意を引く。

「これは舞歌にもらった誕生日プレゼントなの！ 凄い素敵なの！」

パーツと、明るい顔になって、鈴音は猫猫の方を見た。さっきまで

怒ってたのが嘘みたい。

「誕生日プレゼント？ 舞歌ちゃんからの？ ……そう。この夏で、だいぶ仲良くなったみたいね。よかったわね、鈴音ちゃん」

猫猫はテーブルの下で小さくガッツポーズをした。鈴音がこつちと話す態度を持ってくれたし、鈴音と舞歌がうまく言ってるみたいだったから、ついついガッツポーズしてしまった。

「鈴音はよかったの！」

鈴音は褒められて嬉しかったのか、椅子から下りて、その場でクルツと回った。鈴が鳴った。涼し気だった。

猫猫は「わー。鈴音ちゃん素敵よー」と、拍手でおだてて、奈美も一緒に拍手して、満は、鈴？ って思つて、舞歌は、アイスうまあ。で、真音は、姉さん嬉しそう。よかった。って思つて、光は「素敵ですよー！」と言つて拍手して、さくらも、鈴乃音さん可愛いなー。って思つて拍手して、小梅は、なんかより一層眠気が。って思つて目を擦った。

「舞歌舞歌！ みんなに褒められたの！ みんな素敵って言ってくれるの！」

ぴよんぴよん跳びはねながら、鈴音は舞歌にそう言った。とても嬉しそうである。服が褒められただけでは、こんなにはならない。舞歌からもらった服が褒められたから、こんなにも嬉しそうなのである。

「え？ ああ………そうですねー」

舞歌は、恍惚を通り越して、世界を救って死んだ勇者。みたいにやり遂げた、満足感溢れる顔をしていた。アイスだけで、こんな顔が出来るなんて、舞歌は幸せものである。しかし、アイスでしか、そういう顔が出来ない舞歌は、不幸とも言える。

「舞歌！ アイスじゃなくて鈴音を見て欲しいの！」

舞歌の素っ気ない態度に、鈴音の機嫌は急降下。一気に不機嫌になり、椅子に座り、また、舞歌からアイスを奪おうとする。鈴音のライバルは、アイスだよ。

そんな鈴音を見て、猫猫は、ああ。やっぱり元凶叩かないとダメだわ。と思い、ため息一つ。奈美は、三途さん。あんなにアイスクリーム好きだったんだ。と思い、心のメモをとり、満は、ん。よく見たらあいつ夏祭りであった奴だ。愛に溢れててわからなかった。と、舞歌を思い出し、真音は「姉さん……アイスに嫉妬してるの？」と、呆れ顔。光は「お姉ちゃんお姉ちゃん。わたくしもアイスクリーム食べたいですよ！」と、さくらに提案し、さくらは「んー。そうだねー。わたしもなんか食べたくなくなっちゃった」と、同意して、小梅は、本を枕にして睡眠体制に移行し、頭を叩かれた。小梅涙目。

「真音ちゃん。とりあえず、色々説明してくれる？ なんで舞歌ちゃんバケツサイズのアイスクリームを食べてるの？」

そもそもの疑問を真音に尋ねる猫猫。舞歌本人に聞かないのは、今のトリップしている舞歌に聞いたところで無駄だと知っているからである。

「えつとですね。昨日、猫猫先生に電話で言われた通り、姉さんは三途先輩を呼んだんですよ」

猫猫は昨日、鈴音と真音に、かくかくしかじかで文芸部のお手伝いに来てくれない？ ついでに舞歌ちゃんも呼んでくれない？ と、頼んだ。で、鈴音は言われた通り、舞歌を呼んだ。

「でも、三途先輩は面倒だからやだって言って……」

真音はちよつと言い淀んだ。

「だから、アイスクリームで釣った？」

猫猫フォロー。

「はい……」

なぜ真音が、その事を言い淀んだかというと、アイスクリームで釣ったのがあまりいいことではない。と思ったからである。舞歌は、アイスクリームなら二つ返事で、どんなことも了承するんじゃないかというほど、アイスクリームが好きなのである。こちらに罪悪感が生まれるほどの好きさである。

猫猫もその事を知っているので、アイスクリームで舞歌を釣ることはなし。舞歌は、アイスクリームのためならスキップで三途の川を渡るような人間である。

「でも、なんでバケツサイズ？」

普通のサイズでも、十分釣れる。

「それはですね。この前、姉さんの誕生日会があつて、そこに三途先輩も呼んだんです。その時、三途先輩の好物のアイスクリームも出そうと思つてたんですけど、うっかり忘れてて。申し訳ないなあ

って思つて今回は、業務用の食品が売ってるスーパーで、業務用のアイスクリームを買ってみました」

「買つてみましたって……」

真音ちゃんもなんか抜けてる時あるわよねー。と、思いつつ、猫猫は、鈴音に奪われないように必死に、ホントに必死に、アイスを我が子のように抱えている舞歌を見て、考える。

もうそろそろあのアイスも溶けるだろうし。なくなるだろうし。食べ切るだろうし。そしたら、鈴音ちゃんも舞歌ちゃんも協力的になるはず。舞歌ちゃんはアイス食べ終わったら帰るとか言い始めるかもしれないけど、なんやかんや言つても協力してくれるはず。真音ちゃんも、鈴音ちゃんが落ち着けば、協力的になるでしょう。

「よし！ 鈴音ちゃんと舞歌ちゃんは保留！ しばらくそこでじゃれあつてなさい！」

隣の奈美が、それでいいのかよ。というように見ているが、猫猫は気にせず次に進む。

頑張れ猫猫。文芸部会議まで後もう少しだ。

2 - 4 ・猫猫は鈴音がお気に入りに（後書き）

最近。困ったら独り言モードを使ってる気がする。

罪悪感を感じるほどの好き。

舞歌にアイスはチートなんです。本人の意思とか無視で、こちらの意見を通せませす。罪悪感を感じるくらいに簡単にねー。なんか色々おかしいよね。

2 - 5 ・猫猫は人恋しい

みんなが文芸部会議に協力的じゃないから、一人一人に話しかけて協力を呼びかけている。という建前で、久しぶりに会った生徒たちとのコミュニケーションを楽しんでる猫猫子猫の次のターゲットは、虹野光と桜木さくらである。

「光ちゃん？ 会議始めるから、勉強やめてくれる？」

さくらと光を協力的にさせるのは至って簡単である。光に勉強をやめさせればいいのだ。それだけ。そうすれば、さくらも会議に協力的になる。簡単だ。しかし、その勉強をやめさせるのが難しいはずだ。今までの流れから考えて！！

「わかったですよ」

「わかったの!？」

猫猫は驚いた。「わかつちゃダメですよ!？」光も驚いた。さくらは、次はわたししか!。どうしょ!。おもしろいこと出来ないよ!。と、悩んでいて、小梅杏は、やるなら早くやれ。と、思い始めていて、南奈美は、どうかこいつ誰だ。桜木さんの妹さん?と、光を観察してて、新月満は、この子の愛は私にはない愛ね。と、うんうん頷いていて、鈴乃音鈴音は「鈴音はアイスが食べたいの。全部食べたいの。鈴音が食べてアイス無くしちゃうの。だから寄越すの」と、三途舞歌からアイスを奪おうとして、舞歌は「全部なんかあげるわけないでしょ!？」半分なら可です!」と、鈴音に餌付けを開始して、鈴乃音真音は「姉さん、あんまり食べるとお腹壊すよ?」と、姉の身を案じた。

「い、いえ、別にいいんだけどね。全然いいんだけど、なんかね？
なんかこう、物足りない感じ？」

猫猫は奈美に同意を求めた。奈美は、「子猫先生。会議したいんですか？ したくないんですか？ どっちなんですか？」と言って、呆れ顔である。

「もちろん会議したいわ！ したいんだけどお喋りもしたいの！
奈美ちゃんにわかる！？ ここ数週間昼間からお酒が友達だった私のこの気持ちが奈美ちゃんにはわかる！？ テレビに話しかける私の気持ちがわかる！？ 人肌が恋しいのよー！！ あなたたちとお喋りしたいのよー！！」

猫猫は奈美の肩を揺さぶり、己の気持ちを暴露。「ご、ごめんなさい？」奈美、反省。ああ、愛の行き場がないのね。満、同情。「鈴音は頭が痛いの！」鈴音、アイスクリーム疼痛。「この程度のペーすで音をあげるなんて！！」舞歌、嘆く。「いや、あの……まあいや」真音、諦め。「お姉ちゃん！ わたくし何がなんだかわかりませんの！」光、混乱。「んー。わたしもわかんない」さくら、ほんわか。「猫先生。もう寝ていいで「ダメです！」っくっく！」小梅、涙目。

「光ちゃん！」

「はいですの！」

猫猫は奈美の肩を揺さぶるのをやめ、光をキッと睨んだ。光はビクツと背筋を伸ばした。

「夏休み最終日なのにまだ宿題が終わってないなんてダメでしょ！お勉強は計画的に！」

猫猫はとりあえず光と会話をすることにした！ 時間はまだまだ有り余ってるぜ！

「う、ごめんなさいですのー！」

先生に怒られたですのー。

「どうしてもつと早くに終わらせなかったの！ 理由があるなら私に話してごらんなさい！」

なんか私、母親っぽくね？

「お姉ちゃんと遊んでたからですのー！」

「ふえ！？」

猫猫先生、なんか頑張ってるなー。と、蚊帳の外気分だったさくらは、光の、お姉ちゃんのせいたいな発言に驚いた。満は、枯葉はいつ起きるんだろう。と思つて、枯葉のほっぺを突き、奈美は、なにそれ私もしたい。と思つて、枯葉のほっぺを突き、鈴音は「舞歌舞歌。もうアイスはドロドロなの。もうアイスとは呼べないの」と、舞歌に、アイスは無くなったぜ。私をみやがれ。と言い、舞歌は「こんなこともあるのかと！」と言い、ポケットからストローを取り出し「アイスは飲み物です」と宣言し、アイスをストローで飲み始め、真音は「……」ア然として、小梅は、なにあの子怖い。と、舞歌に恐怖心を抱いていた。

「さくらちゃん！」

「はい！」

そして猫猫の標的はさくらに移った。

「光ちゃんとそんなに夏休み遊んだの!？」

「あ、遊びましたー！」

お、怒られる？

「グツジョブ」

猫猫はサムズアップで、さくらを褒めた。

「あ、ありがとうございます?？」

さくらは、なんかよくわからないけど褒められた。

「私はあなたたちが仲良くなってくれて、とっても嬉しいわ」

うんうん。と、腕を組んで、猫猫は、満足気である。

「わたくしもお姉ちゃんと遊べて嬉しいですよー！」

わーい。と、両手をあげて、光は、嬉しそうである。

「わ、わたしも嬉しいー」

な、なんかよくわかんない。と、さくらは困惑である。

「でも光ちゃん！ それとこれとは話しは別よ！！ 宿題はちゃんとやらないとダメでしょ！！」

コロツと、猫猫はお説教モードに戻った。

「さくらちゃんは宿題もう終わってるんでしょ？」

「はい。終わってますー」

お母さんと一緒に頑張りましたー。

「ほらご覧なさい！一緒に遊んでたお姉ちゃんは終わってるということは、宿題が終わっていないのはあなたがダラけていたせいよ！反省しなさい！」

ビシツと、言ってやったぜ。的な、猫猫。

「さすがお姉ちゃんですのー！」

そんなことよりお姉ちゃん凄い。的な、光。拍手をパチパチ。

「えー。そんなことないよー」

お母さんに手伝ってもらったしー。的な、さくら。髪の毛さわさわ。

「いい加減始めませんか？」

本気で寝るぞこら。的な、小梅。あくびを一つ。

「枯葉は脇腹が弱いつて、知らなかったでしょ？」

私の方が枯葉のこと知ってるもーん。的な、満。(枯葉の)脇腹チクチク。

「今知りましたから問題ないですね」

別に羨ましくないし。これから知るし。的な、奈美。(枯葉の)頭ポンポン。

「舞歌舞歌！ 鈴音も！ 鈴音もそれやりたいの！」

なにそれ私もやりたい。的な、鈴音。瞳キラキラ。

「もちろんいいですよ！ もう、一度やったら病み付きですよ！」

抜け出せなくなるぜ？ 私みたいにな！ 的な、舞歌。ストローを鈴音に貸す。

「……………」

いや、別にあれだよ？ 僕も混ぜりたいとか思ってないよ？ 的な真音。内心興味津々。

「よし！ じゃあそろそろ始めます！」

そして、それなりに満足した猫猫は、本日二回目の、文芸部会議の開始を宣言した。今度は、鈴音と舞歌、それと満以外の全員が、ちゃんと聞いてくれた。

じいじやじいじや、文芸部会議が始まるのである。

2 - 5 猫猫は人恋しい（後書き）

ふう、よくわからん。

何がわからないって、枯葉の存在理由がわからん。果たして奴はいつ起きるのか。起きたらどうなるか。もしかしてこいつが寝ている理由は、起きたら面倒になるからという理由ではなかるうか。作者がこいつが起きたら書けなくなるからではなかるうか。作者とか、考えちゃダメだよ？ サラッと読もうね。

ダメ。絶対。

倒置法。イエーイ。

また次回！。

2 - 6 ・八尾比丘尼高校七不思議

「というわけで始めます。って、言ったんだけど、始める前に、さくらちゃん。つららちゃんは今日どうしたの？」

猫猫子猫は桜木さくらにそう言った。

「あ、つららはー、まだ実家に帰ってて、今日の夕方に戻ってくるらしくて、来れないって言ってましたー」

「へえー。そうなの？ あのとつららちゃんが、そんなギリギリまでご両親の所にいるなんて……変わったわね」

猫猫は感心した。やはり夏は、善くも悪くも、人を成長させるようだ。

「よし。最後の疑問が解けたとここで会議を本格的に始めたいと思います。司会進行はわたくし、保健医猫猫子猫が務めさせていただきます。代わりにやりたい人いますかー。はい。いませんねー。じゃ、奈美ちゃんは書記やってくれる？」

「はあ……まあ、いいですけど」

南奈美は、子猫先生やる気満々だなー。と、思いつつ了承した。席を立ち、黒板に『第二回くらい文芸部会議』と書いた。

奈美が席を立つたので、新月満が若葉枯葉を席ごと自分の方に移動させた。奈美が席を立つたら、枯葉の席を寄せる。という理論は常人には理解出来ない理論である。満いわく、奈美が座っている間は悔しい事に愛が拮抗状態だったため（枯葉を愛する気持ちは明らか

に私（満）の方が上なのに、拮抗しているということは、これ即ち枯葉の愛が奈美に寄っているという事に外ならない。満にとって大変悔しい状況である）、なかなか寄せることが出来なかつたらしい。もちろん奈美がそれを許すわけもなく、奈美必殺チヨーク投げが満にヒットした。初めてとは思えない、綺麗なチヨーク投げだった。奈美いわく、愛の力でチヨークと短期契約したのかもしれない。ということらしい。常人には理解出来ない解釈である。満が黙っているわけもなく、二人は一気に一触即発状態になった。そんな二人を猫猫が必死に宥め、その結果奈美は席に戻り、ルーズリーフにメモすることになった。枯葉の座席位置も元通りである。しかしこの男、全く起きる気配がない。保健医猫猫は、枯葉の体調がちよつと心配である。

「……はい！ 仕切直していくわよー！ 光ちゃんも、もう震えなくていいわよー！ 危機は去ったはず！ 根源を潰してないからまた危機は訪れるでしょうけど、それはそれ！ これはこれよ！ 奈美ちゃん！ 今日話し合う事を発表してちょうだい！」

猫猫は結構必死である。

「十月始めにある文化祭に文芸部が出す、文芸冊子についての話し合いです」

「はいその通り。まあ、おおよそ一ヶ月後に迫ってきてるのよね。なのに！ 一切合切なーにも決まってるじゃない！ これは正直もう間に合わないんじゃない？ と、私も思ってしまうわ！ どうしてこうなるまでほつといたの！ 文芸部顧問の小梅先生！」

猫猫は小梅杏を叱った。

「さあ？ 生徒たちがどうにかするだろうなー。と、思っていましたから」

小梅は自分に責任はないと思っっているようだ。猫猫は「それでも教師か」と言っつて、小梅にデコピンを食らわせた。暴力ではない教育であり賤しつぱの一貫である。小梅は「私、司書が本職なんだけど…」と、ぼやきながら、額を摩った。

「まあ確かに。小梅先生ばかり責めるわけにはいかないわね。この学校は自由に重きを置く、こういう（・・・）学校なんだから、部長がしっかりしないと部活はダメなのよね」

猫猫のその言葉に、文芸部員であるさくらと奈美は顔を見合わせた。

「……というかホント、文芸部の部長つて誰なの？」

二人のその様子を見て、猫猫は呆れたように尋ねた。

さくらは首を傾げ、「さあー」と言った。元幽霊部員である奈美は「桜木さんか冰山さんかのどちらかだと、思いますけど」と言った。他は部外者なので、特に発言しなかった。一部の人間は興味もなかったもので、話しすら聞いていなかった。ちつとも協力的になっていない。まあ、静かなので、よしとしよう。

「えー。でも、南さんが一番部長っぽいよねー」

「確かにそれは言ってるわね」

さくらの発言に猫猫が賛同した。文芸部はさくら、つらら、奈美の三人しかいない。その三人の中で、奈美が一番部長っぽい。というより奈美以外に部長が出来る気がしない。猫猫とさくら、そして奈

美本人も、なんとなくそう思った。さくらとつらは仕切るタイプではない。

「書類上は誰が部長になってるんですか？ 桜木さん達は、私が文芸部という事を今年知ったわけですから、私の名前ではないはずですよ？」

「えっとー、どっちだったけー……」

さくらは天井を見上げたが、もちろんそこに答えはない。部長会議など、部長が出席しないといけない会議はあったが、そういうのはさくらとつらら、二人で出席していたので、書類上、部長となっているのがどっちなのかよくわからなくても、問題なかった。

記憶を思い返しているさくらを、隣で虹野光が、お姉ちゃんが部長……すごいのですのー。という尊敬の眼差しで見ている。さくらは、その熱い視線に気付いている。ただ、どう対処すればいいかわからないので（だってたぶん部長じゃないし。部長出来ないし）天井から視線を戻せないのであった。光は『姉』を過大評価し過ぎな気がする。と、さくらは思わずにはいられない。

「まあ、それは後々調べましょう。部員が三人しかいないんだから、部長も何もあまり関係ないしね」

猫猫はこのままだと先に進まない判断し、天井を見ながら首を傾げるさくらにそう声をかけた。

さくらは「わかりましたー」と答え、天井を見るのをやめた。そして熱い視線を送る光に、曖昧に笑いかけた。光はパーッと明るい笑顔になった。さくらはさらに曖昧に笑うことになった。

「それより本題に入りましょう。文芸冊子についてね。紙の材質と

か、印刷についてとか、レイアウトとか、そういうのは……そうね。私と奈美ちゃんが調べてどうにかしましょうか。奈美ちゃんとさくらちゃん、それでいい？」

「はい。かまいません」

「よろしくお願いしまーす」

「小梅先生にも手伝ってもらいますよ？」

「え!？」

小梅はホントに驚いた。

「なに驚いてるんですか。当然ですよ」

猫猫はホントに呆れた。

「まあ、そういうのは二学期始まってからするとして、今日の一番の本題。内容についてね。この為に、鈴音ちゃんや真音ちゃん、それから光ちゃんに舞歌「私帰ります!」……舞歌ちゃん？」

猫猫がようやく今日の本題に話しをのぼそうとした時、三途舞歌が立ち上がった。舞歌の前に置いてあるバケツサイズのアイスクリームは、空っぽである。

舞歌は先ほどまで、鈴乃音鈴音と交代で静かに、アイスクリームを飲んでいた。そして飲みきった。飲みきった(食べきった)後、しばらく舞歌はアイスクリームを食べた余韻(略してアイス余韻)に浸っていたが、ハッと、我に帰った。そして先ほどまでの自分の行動を思い返し、恥ずかしくなり、帰る(逃げる)ことにしたのだ。

しかし、

「離して下さい！」

「鈴音は離さないの」

「三途先輩。さすがにそれは薄情過ぎると思いますよ？ アイスクリーム食べたら帰るなんて……」

「ぐっ……」

左右に座っていた鈴乃音姉妹に捕まり逃げる事が出来なかった。残念。真音に、用が終わったらずぐポイか。みたいな正論を言われ、渋々席につく。しかし周りの視線（さくらの温かい視線。奈美のなるほどな！という視線。光のなんか怖いのですのという視線。真音の冷やかな視線。鈴音の監視するような視線。猫猫のニヤニヤな視線）が、なんか痛い。なんかムカつく。なんか恥ずかしい。なによりも恥ずかしい。というか恥ずかしいしかない。1：1：8で恥ずかしい。

「舞歌、顔真つ赤なの」

「っ！」

鈴音に指摘された舞歌は、机に伏せて顔を隠した。

鈴音は「舞歌大丈夫？」と、舞歌の頭をなでなでした。真音は「姉さん、そつとして置いてあげようよ」と、言った。光は、あの先輩よくわからないのですの！。と思い、さくらは、三途さんって結構かわいいな！。と思い、小梅は、私の睡眠時間が削られる。削られる！！と、戦々恐々しており、猫猫は、舞歌ちゃんは鈴音ちゃんだ

けじゃなく真音ちゃんとも仲良くなれたみたいね。もう舞歌ちゃん
は一人じゃないのね……先生嬉しい。と、ちよつと涙ぐんでいて、
奈美は、なにそれ私もしたい。と思ひ、枯葉の頭を撫で、満は、文
化祭かー。枯葉と一緒に回りたいなー。あんなことやこんなこと、
そして最後には、キヤー！ いや、ちよつと待つて。それよりもな
によりも、やつぱり枯葉と同じ……。と、愛の未来予想未来予想に浸つてい
た。

「はい。舞歌ちゃんが人の目を気にするようになって嬉しいけど、
続きいきますよー。あ、鈴音ちゃん。舞歌ちゃんはそのままとしと
いてあげて。大丈夫よ。舞歌ちゃんは何だかんだ言つて協力的よ。
今もちゃんと話し聞いてくれてると、私は信じているわ……。っ
てな感じで、ついに本題に入ります！ 内容について！ さくらち
ゃん！ 文芸冊子はどついう内容にするってことになつてたか覚え
ているかしら!?」

「はい！ 怖い話とか七不思議です!」

ビシツと指名されたさくらは、敬礼して答えた。隣で光が、「こ、
怖い話ですの!？」と怯えた。光は怖い話が苦手である。逆にさく
らは得意である。お姉ちゃん凄いですの!。である。

「その通りよ。この高校の七不思議と、怪談とか書こうというわけ
で決まつたのよね。で、夏休み中にそついうの調べようね。って、
言つたのよね。はい。調べてきた人は手を上げなさい。はい。いま
せーん。だろつと思つて私が調べておきました!! はい! 拍手
!」

「猫猫先生すごーい!」

猫猫の号令にさくらが素早く反応し、拍手を始め、一部を除いて（舞歌、満、枯葉、小梅）その拍手に続いた。

「ありがとー！　ありがとー！　猫猫子猫！　頑張った甲斐がありました！　といても、七ツ全部じゃなくて、四ツしか調べられなかったけどね。あ、今、なんだよ。全部調べてないわけ？　拍手して損した〜。って、考えた子がいるでしょ。いい？　そもそもね。まずここは高校なのよ？　七不思議なんていうものはね。せいぜい中学校までにしかないのよ。本来はね？　満ちゃんの高校にもないでしょ？　七不思議」

「興味ない」

色んな意味で。

「……ないわけよ。うん。本来零が基準のここを四ツも見つけたんだから、これって凄いことよ？　それにこの高校、歴史も浅いし、もしかしたらまだ、七ツないのかもしれないわね。その場合は調査中にするか……もしくは、私たちが作っちゃいましょうか。とりあえずそんな感じがいい？」

文芸部員さくらと奈美は、こくと頷いた。

光は、七不思議なんてあったんですのー！　と怖がり、さくらの服を掴んで震えていて、真音は、僕、ここにいる意味あるのかな。と、無表情で考えていて、舞歌は、アイスクリームなんてもう食べ……ないわけにはいかないー！と、自分と戦っていて、鈴音は、七不思議？　と、首を傾げていて、満は、転校手続きの方法は……。と、思案していて、枯葉は、……。で、小梅は、睡眠不足は寿命の天敵なのに……。と、まだ嘆いていた。

「でね。ただ、こういう七不思議がありますよー。って書くだけじゃつまらないし、ページも埋めれないから、やっぱり、七不思議が本当なのか確かめて見るのがいいと思うのよね。というわけで、今から確かめに行きましょう」

「今からですよ!？」

「そう、い・ま・か・ら」

猫猫は怯えている光を見て、ニヤリと笑った。光はさらにビビった。

「でも猫猫先生ー。まだ明るいですよー？」

七不思議といえば、夕方や夜中が多いというセオリーを、さくらは知っていた。

「大丈夫よ。私が調べた四ツの七不思議に、時間は関係ないわ。お化けが出るような怖い話じゃなくて、ただの不思議な話だもの。私が調べた四ツの話はね。『屋上のフェンス』『食堂』『使われない教室』そして、『八尾比丘尼校長』」

猫猫はニコツと笑った。

「七不思議の真偽は、体験するよりも何よりも、七不思議本人に聞くのが一番だと思わない？」

2 - 6 ・八尾比丘尼高校七不思議（後書き）

七不思議の詳しい内容はまたいつか。

2・7・八尾比丘尼高校校長八尾比丘尼因幡

とんとん

「失礼しまーす」

猫猫子猫は、軽く扉を二回ノックして、返事を待たずにそう言つて扉を開けた。この扉の向こうに、自分より目上の人間、つまり校長、八尾比丘尼やあひくになは因幡いんぱんがいることを考えれば、礼儀がなっていないと思われなくても仕方がない。

「おや？ 猫猫先生。大所帯で、何かご用ですか？」

思われても仕方がないが、校長室で半分に切つたスイカをスプーン片手に、側に塩、種出しよの皿まで用意という完全装備で食べている八尾比丘尼は、そういう礼儀とか気にしそもないようにみえる。

「いえ、ちよつと校長先生に聞きたいことがあります……」

「聞きたいことですか？ 構い……ませんよ。なんでも……聞いて下さい」

「……校長、話してる最中にスイカを口にせつせと運ぶのはどうかと思いますよ？」

猫猫は呆れ顔だ。

「そうですか？ まあ……いいじゃないですか」

八尾比丘尼は、涼しい顔でスイカを口に運ぶ。

「まあ、いいですけどね……」

来訪者の前でも、喋っている途中でも、何にも気にせず自由に、食べたい時に食べたい物を食べる。

そんな自由主義者の八尾比丘尼にとって、見知らぬ時代の見知らぬ土地で見知らぬ人が作った理屈不明の礼儀など、気にしそうもないようにみえるだけでなく、実際気にするわけもないのである。

七不思議の真偽を確かめに、校長室に行く人は手をあげる！

という、猫猫の号令に一番始めに手をあげたのは、興味津々桜木さくらだった。

次に、お姉ちゃんが行くならわたくしも精神虹野光が手をあげた。

さらに、やる気ナツシング小梅杏の手が、猫猫に無理矢理上げさせられた。

そしてなぜか、部外者新月満が手をあげた。

「え？ 満ちゃんも行くの？」

猫猫は驚いた。満が行くという驚きはもちろんのこと、話し聞いてたんだ。という驚きもある。

「ええ」

満は短く肯定を示し、ニツコリ笑った。完璧な作り笑いである。その有無を言わせぬ作り笑いを見て、猫猫は理由を尋ねるのを諦めた。

「奈美ちゃんはどつするの？」

代わりというわけでもないが、行くかどうか悩んでいる様子の南奈美に、猫猫は尋ねた。

「私は……」

奈美は考える。

八尾比丘尼校長の話に興味がないといったら嘘になる。私がついて行かないで桜木さんだけに任せて大丈夫かという不安もある。その点は、子猫先生がフォローしてくれるとは思うが、任せきりというのもよくないだろう。それに、新月満がついて行くのも気になる。この女が自発的に枯葉と離れる行動を取るなんて、どういうことだろうか。ここはやはり、ついて行くべきか。

しかし、そうなると枯葉をここに置いていくことになる。恐らくとつかまず間違はなく枯葉は起きているだろう。今は寝たフリをしているだけだ。逃げる機会を窺っているのだろうか。そんなと一緒にいるのが嫌なのだろうか。私ではなく新月満と一緒にいるのが嫌だと信じたい。

逃げられるのは困る。文芸部会議が終わったら遊ぼうと思っているのに。夕食も一緒に食べようか思っているのに。逃がさないためにも残るべきかもしれない。いや、でも、しかし……。

「……………私も、行きます」

「ん。じゃあ、鈴音ちゃんと真音ちゃんと舞歌ちゃん、それと枯葉君はお留守番よろしくね」

「鈴音はお留守番してるの」

「わかりました」

奈美は結局、行くことにした。枯葉が逃げないと、信じたのだ。

奈美のその判断は、満の予想通りだった。自分が校長室に行くと言えば、奈美はついてくるだろうと思っていた。思っていた通り、奈美は枯葉と二人つきり（満的には舞歌も鈴音も真音もないようなものなので、二人つきり）になる方を選ばなかった。奈美が選ばないとわかってたから、満はこのタイミングで校長に会いに行くことに決めた。

私があなたと同じ立場だったら、絶対そっちを選ぶのに。

「……………あはっ」

ホント、臆病者。私の事が気になってしょうがないのね。

満は、うっすらと小さく隠れるように、嘲笑を浮かべた。

「?」

その笑みに気付いたのは、鈴音だけだったが、鈴音には満の笑みの意味はわからなかった。

という経緯があつて現在、校長室には、猫猫、小梅、さくら、光、満、奈美、そして八尾比丘尼の、七人がいる。

「ふわー。わたくし、校長室、初めて入ったのですのー」

「わたしもー」

さくらと光は、初めて入った校長室をキョロキョロと見回す。

この校長室は、物珍しい物があるわけでもなく、至つて普通の校長室である。普通の校長室と違う点は、せいぜい二点。

まず一点は、歴代の校長先生の写真が飾られていないこと。これは、八尾比丘尼が初代の校長のため、当たり前と言えば当たり前である。そしてもう一点は、校長室の主である校長、八尾比丘尼が校長に見えない事である。校長とは思えない若さに見えるのである。外見年齢は二十代にしか見えない。実年齢は既に五十代のはずなのに、この肌のツヤや張りはありえない。その癖、雰囲気からは、歳相応の貫禄が滲み出ているようにも感じられる。

などである。不思議である。その外見に反した年齢の高さ。『八尾比丘尼』という名前。七不思議の一つになつても、なんらおかしくはないだろう。

「それで猫猫先生。何のご用ですか？」

八尾比丘尼はスイカを食べながら、話を促す。八尾比丘尼は、明日の始業式の準備などでそれなりに多忙だ。あまり時間はない。なので、話をしながらスイカを食べるのは仕方がないことなのだ。

「ええ、実は、文芸部の文芸冊子を作るために、校長先生の話聞きに来たんです」

「文芸部ですか。なるほど。だから小梅先生も一緒なんですね」

納得した。というように頷きながら、八尾比丘尼はスイカを口に運ぶ。

「となると。猫猫先生が一緒なのが不思議ですね？」

八尾比丘尼は首を傾げながら、スイカを口に運ぶ。

「え？ ええまあそれはその……成り行きで？」

あははは！。と、猫猫は苦笑いを浮かべた。そんな猫猫を見て、八尾比丘尼は、またですか。というように、ため息をつき、スイカを口に運ぶ。

「猫猫先生。あなたのそういう、自分に与えられた仕事以外の仕事も、自ら行おうとする自由なところ、私は嫌いではありません。しかし。あなたは少々、自由に働きすぎです。自由は適度に適当でなければいけません。行き過ぎればそれは、自由ではなく無秩序です。領分を弁えて下さい。何度も言っているように、あなたは私立八尾比丘尼高校の保健医なんですよ？ 高校の保健医です。高校においての、生徒の健康を管理し、生徒を見守って下さい。いいですか？ 高校外の生徒の健康は、また別の役割ですよ？」

八尾比丘尼は猫猫にお説教をした。そして、スイカを口に運ぶ。

「すみません……」

猫猫は怒られ、しゅんとした。小梅は隣で、いい気味。私をあんなに叩いたんだから怒られて当然。というように見ていた。

「しかしですな校長？ 困っている生徒がいたら手助けするのが、教師というものではありませんか？」

「教師とはこういうものである。というレッテルから教師が自由になれる高校を、私は目指しているのですよ？」

「というか、あなたは保健医ですから教師ではありませんよ。と、咳いて、八尾比丘尼はスイカを口に運ぶ。

「いやいや、だからといってですね？ 小梅先生がやる気なくて、このままでは、文芸部はダメになってしまうわけですから、保健医たる私が手助けするの致し方がないのではないかなあ。と、私は思っただけですよ」

あたふたと言いつつ猫猫。後ろに控える生徒たちは、先生も大変なんだなあ。と、他人事である。

「校長。なんでこんな人雇ったんですか？」

唐突にそう言ったのは、眠気が振り返してきた小梅である。もう寝たいのに、やる気に満ち溢れてる猫猫のせいで寝れない。なんでこんな高校にこんな先生いるんだろ。そんな気持ちから出た台詞であった。

「ちょっと小梅先生。その言い方は酷くありませんか？」

猫猫は、突然のそんな言葉に呆れ顔である。

「仕方がないんですよ小梅先生。生徒の健康を見たり、怪我の手当てをする保健医は、それなりに真面目でやる気がある先生ではないといけなかつたんです。我慢して下さい」

「ちょっと校長先生！我慢って、私が間違ってるんですか！？」と、猫猫が憤慨しているが、「この高校ではあなたの用に熱意溢れるタイプは異端です。私は、嫌いではありませんけどね？」と、八尾比丘尼は涼し気にフオーナーなのかよくわからない事を言っつて、スイカを口に運ぶ。

八尾比丘尼のその態度を見て、猫猫は腰に手を当て、熱を抜くようにため息をつく。いつもの事とはいえ、こんな人物が校長でいいのだろうか。とりあえず、隣の小梅を小突く。小梅ビツクリ。

「猫猫先生。確かに、小梅先生はやる気がなく寝てばかりです。文芸部の顧問なのに、文芸部の活動には参加していません」

八尾比丘尼はスイカを口に運ぶ。

「しかし去年もそれは同じでしたね。去年、猫猫先生は手伝いましたか？」

「いえ、去年はバタバタしてて手伝ってはいませんでした」

去年のその頃は、奈美や鈴音やその他もろもろについて色々バタバタしていた。

「そうですか。しかし去年の文芸冊子は素晴らしい出来でした。つ

まり、小梅先生がすっかりしていなくても、猫猫先生が手伝わなくても、大丈夫ということではありませんか？」

八尾比丘尼は、スイカを口に運ぶ。

小梅は、うんうん。と頷く。

猫猫は、「去年は去年ですし、栞ちゃんは一人で出来るもんだったから……」とゴニョゴニョ言ってみる。

「でもー、去年は部長に全部任せっきりだったからー、わたしたちよくわからなくてー、それで猫猫先生手伝ってくれるって……」

そしてさくらが、弱々しく猫猫に助け船を出した。自分たちを手伝ってくれる猫猫が怒られるなんて、なんか嫌だからね。

「桜木さん。部長というと、^{かなえ}鼎さんのことですか？」

八尾比丘尼は猫猫からさくらに視線を移す。そしてスイカを口に運ぶ。

「そうですー。去年は全部鼎部長が一人で作っちゃってー、でも今年はいなくてー、わたしたちよくわからないからー、猫猫先生が手伝ってくれて、よかったです」

「さくらちゃん……ありがとうー！」

猫猫はさくらの言葉に感激して、さくらを抱きしめた。光が、「羨ましいですよ！」と、叫んだ。さくらは、「せんせー。苦しいよー」と、呻いた。

「なるほど。鼎さんが何も教えなかったわけですか。それなら、猫

猫先生が手伝うのも仕方ないとも言えるかもしれない……」

猫猫の特定の生徒に対する過剰とも取れる干渉が、自由を通り越し差別にならない事を祈りながら、八尾比丘尼はスイカを口に運んだ。

2・7・八尾比丘尼高校校長八尾比丘尼因幡（後書き）

神は天には祈らない。

『鼎棊』が辞書に追加されました。

目上の人に対してのノックは四回だった。二回×二が日本的にいい感じだった。

というかタイトル漢字だけ！かつこよくね？

まあそんなことより私が言いたいのはですね。八尾比丘尼が変換しづらくてやだ。どうして携帯で八尾比丘尼が一発変換出来ないんだ！なんて使えない携帯なんだ！

まあ、鼎が変換出来たから許してやるけどさ！

また次回！！

2・8・八尾比丘尼高校七不思議『八尾比丘尼校長』

「では、そろそろ用件をお聞きしましょうか」

八尾比丘尼因幡は、猫猫子猫が桜木さくらを愛でるのが一段落したところを見計らい、声をかけた。そして、スイカを口に運んだ。小梅杏は、スイカ美味しそうだなあ。と、眠気を感じながら思った。

「あつ。いけないいけない。うつかり忘れるところでした。てへ」
さくらを愛でるのに夢中だった猫猫は、我に帰り、照れ隠しに輝く笑顔を見せた。猫猫子猫、にじゅうはっちゃん。

「ふにゃ〜……」

猫猫の、ギョ〜、プニプニ、グシャグシャ〜、グリグリグリ〜、により骨抜きにされたさくら。解放された今も、なんだか焦点が合わない虚ろな目をしている。ほのかに頬も赤くなっているし、髪も乱れている。犯罪の匂いがするぜ。

そんなさくらの隣で虹野光が「お姉ちゃん、わたくしもやりたいですの。して欲しいですのー」と言いながら、さくらの手を引っ張って催促していた。蕩^{たふ}けてるさくらは、半ば無意識で光のほっぺをプニプニと押してあげた。

「ふわ〜……」

光はそれだけで恍惚の声を上げた。危ない香りするぜ。

その後ろで若干引き気味の南奈美は、な、仲良し姉妹ということではないのか？ と思っ^ていて、新月満は、なかなかの愛で具合だった。

と、猫猫の行為を評価していた。

「実はですね校長。今年の文芸部は、八尾比丘尼高校の七不思議を調べて書いて、文芸冊子をなんとかしようと思ってるんですよ」

「七不思議ですか。それはおもしろそうですね。ああなるほど。私に七不思議の真偽を聞きにきた。というわけですか」

納得した。というように、八尾比丘尼は頷いた。そしてスイカを口にはこ（略）

「あ、さすが校長。七不思議、知ってましたか」

「はい。全てというわけではありませんが、一応知ってますよ。屋上のフェンス、食堂、空き教室、そして私、ですか」

クスッ。と、八尾比丘尼は笑った。そしてスイカを口に（略）

「あー、校長もその四ツだけですか。校長なら全部知ってるかもない。と淡い期待を持っていたんですけど……」

これはやはり私たちが七不思議を作るしかないかな。と、猫猫は思った。

「残りの七不思議を知っている人はいないかもしれませぬね」

「つまり、七不思議はまだ完成していないということですか？」

「完成とは不思議な言い方をしますね。私は、四ツで全部。八尾比丘尼高校七不思議ではなく八尾比丘尼高校四不思議ではないかと思

っています」

「四不思議……語呂が悪いですね」

「私もそう思います。ああ、先程、誰も知らないかもしれないと言いましたが、教頭なら知っているかもしれない。知らなくても調べてくれるかもしれませんし、頼んでみてはいかがですか？」

教頭はそうというのが得意ですから。八尾比丘尼はそう言ってスイカを（略）

「教頭ですか……私、教頭って苦手なんですよねー」

なんだか近寄りがたい雰囲気を出してますよね。猫猫は苦笑いを浮かべて、隣の小梅に同意を求めた。小梅は立ったまま寝てた。猫猫は頭を叩いた。小梅は起きない。「こーうーめーせーんーせーい？」猫猫の耳を引っ張った。「なんですかもう……」小梅は渋々起きた。八尾比丘尼はその茶番を眺めながら、スイカを（略）

「それで、どれの真偽を聞きたいんですか？ 全てですか？」

屋上のフェンス。食堂。空き教室。この三ツは学校の設備に關しての話。この高校は作った八尾比丘尼ならば、その真偽を答えられるのは当然。四ツ目の話は言わずもながである。

「とりあえず、八尾比丘尼校長の話の真偽を聞きたいですね。時間があるなら、残りの三ツもお願いします」

しっかりして下さいよ。というように、猫猫は小梅を見ながらそう言った。小梅は、そんな猫猫の視線なんてどこ吹く風であくびをし

た。

「ええ構いませんよ。時間もまだ……余裕がありますから」

ちらつ。と八尾比丘尼は時計を確認してそう言った。そしてスイカを（略）

「ありがとうございます。ここ、お借りしてもいいですか？」

猫猫は校長室にある応接スペース（ソファ二脚にガラステーブル）を指差した。

「どうぞ。立っているのもつらいでしょう」

「ありがとうございます。奈美ちゃん、メモよろしくね」

「はい。わかりました。校長先生ありがとうございます」

「ありがとうございます？」

「ですのー」

奈美と、まだ若干骨抜きさくらの光が、話してくれることと、スペースを貸してくれたことに対して一礼し、ソファに座った。ソファに座った席位置は、奈美、猫猫、小梅。もう片方のソファに、光、さくら、満が座った。奈美と満が対角線上に座っているのがポイントである。

「うわー、ふかふかだー」

さくらはソファアの座り心地に感動した。ふかふかである。高級感溢れるふかふかである。八尾比丘尼が座っている椅子も高級そうだが、こういうのに気を使うタイプなのかもしれない。

奈美も、座り心地いいな。と思った。猫猫は、こういうソファア欲しいな。と思った。小梅はひそかに、夢に旅だった。だってふかふかなんだもん。

「お姉ちゃんもつとぶにぶにして欲しいですのー」

光はソファアの座り心地なんて気にもせず、さくらにおねだりした。腐ってもお金持ちである。このくらいのソファア家にもあるので、別に珍しくもなるともない。

「えつとー、今はみんながいるからちよつとー……」

ソファアの感触を堪能していたさくらは、やんわりと光の要求を退ける。

「じゃあ、二人つきりになったらしてくれるのです!？」

一応言っておくが、光が望んでいるのは姉妹のスキンシップである。いやらしい事をして欲しいと思っっているわけじゃないぜ。

困ってるさくらの横に座っている満は、さくらと光のやり取りを聞いて、見て、感じて、愛の覚悟が足りない。という評価を下した。ソファアの座り心地など、満も一切興味がない。さらに言えば、七不思議の真偽も内容にも興味はない。彼女が興味あるのは、愛と枯葉だけである。

「はいはい光ちゃん。場所を考えて、静かにしてね。では、校長。八尾比丘尼高校七不思議『八尾比丘尼校長』の真偽についてお願い

します」

「もちろん。嘘です」

八尾比丘尼はきつぱりと断言した。そして、スイカに塩をかける。

猫猫は、ですよー。と思った。

奈美は、七不思議『八尾比丘尼校長』嘘。とメモした。そして、ふと。気付いた。

「子猫先生。私、八尾比丘尼校長の話の内容知らないんですけど」

「あ、わたしもー」

「わたくしもー」

さくらと光も、手を上げて知らない。とアピールした。

「あら？ そうだった？ じゃあ、教えてあげましょう。八尾比丘尼高校七不思議の一つ。八尾比丘尼校長について、ね」

「ぐふう……」

猫猫は、奈美、さくら、光にニコツと笑いかけながら、小梅の鳩尾を叩いた。小梅は悶絶して、別の夢を見そうだった。軽く叩いたのにこの苦しみよう。人を治す術すべを知っているということは、人を壊す術を知っているのと同じとかなんとか。

「まあ、特に怖くもなんともない、不思議な話でもなんともない話
なんだけどね」

猫猫、小梅一切無視。さくらと光は、若干猫猫に恐怖を覚えた。奈美は、子猫先生生徒以外には容赦ないなあ。と、思いながら、話しの内容をメモする構えを取った。

「見ての通り、八尾比丘尼校長つて外見すつごい若いじゃない？もはや化粧とか美容とか日々の食事とか日々の生活に気を使うとかアンチエイジングとかでどうにかなるという域いきを超えたレベルじゃない？ 何か人智を超えた理由があるんじゃないかしら。と、思った人がいたんでしょうね。そして、『八尾比丘尼』という名前」

「ああ、八尾比丘尼伝説ですか？」

奈美は内容を察した。

「その通り。いわく、八尾比丘尼因幡は人魚の肉を食べ、不老不死になった。実年齢はすでに、八百を越えている。八尾比丘尼因幡の肉を食べれば不老不死になれる。八尾比丘尼因幡の血を肌に塗ると美容にいい。ま、そんな話よ。女子高生つていう年代は、歳を取るといふのを嫌がるし、美容とか気になるから、こんな話が生まれたんでしょうね」

やれやれ。というように、猫猫は肩を竦めた。さくらは、へー。そんな話があるんだー。おもしろいなー。他の話もそういうのなのかなー。と、興味を持ち、光は、肉を食べるつて怖いのですの！ 血を塗るつて怖いのですの！ と、恐怖して、奈美は、メモメモ。と、冷めた反応を示し、小梅は、永遠に眠れる機会を失うなんて、不死つて怖い。と、なんか不思議なこと考えてて、満は、枯葉と永遠に生きられたら素敵。あ、でも、一緒に死ねないのはちよつとなー。と、なんか怖い想像してた。

そして八尾比丘尼は、ため息をついた。

「全く迷惑な話です。私も今年で51。こういう噂が流れたの初めてではありません」

51！？21の間違いじゃない！？と、満と小梅を除いた全員が、そんな感じに驚いた。

「名字が八尾比丘尼でなければ、信じる人も皆無だったでしょう。いえ。そもそもそういう噂すら流れなかったでしょうね。信じる人がいるんですよ。特に学生時代は大変でした。やはり、子供というのは大人より自由だからでしょう。常識に捕われず信じる人も多くて、襲われたことも一度や二度ではありません。あの時は大変でした……警察が来るのが遅れていたら、私の二の腕はなくなるところでした」

しみじみと昔話を語る八尾比丘尼。もちろん、スイカを口に運ぶのは忘れない。

「社会に出た後は、さすがにそういう危険なことはほとんどなくなりましたが、調査させてくれとか。化粧品のコムに出て見ませんかとか……全くあの頃は、不自由な環境でした」

「校長。しみじみ昔を思い出しているとこ悪いんですけど、ちょっと聞いていいですか？」

昔をしみじみ語るところは年相応だな。と、思ったかどうかはわからないが、猫猫は八尾比丘尼に質問した。

「八尾比丘尼っていう名字ってだいぶ珍しいですよ。何か由来があるんですか？」

「猫猫先生の方が珍しいと思いますよ？」

八尾比丘尼の切り返しに、奈美と光とさくらは、確かに。と思った。

「とはいえ、八尾比丘尼という名字も確かに珍しいですね。由来ですか……ああ、思い出しました。祖母に昔聞いたことがあります。私の祖先が、人魚を食べたから。と、祖母は言っていましたね。もしそれが本当なら、この噂もあなたがち間違いではないかもしれませんね」

クスツ。と笑い、スイ（略）

「人魚を、食べた？」

もしそうなら凄いいじゃん。マジじゃん。その遺伝子受け継いでる校長も凄いいじゃん。もしかしたらホントに何か効果があるのではなからうか。

猫猫の目がキラーン。と光った。お肌の潤いやらシワやらが気になる年頃、だって猫猫は、にじゅうはっさいだからー。

「猫猫先生。目が怖いですよ。まさか信じたわけじゃないでしょうね？」

「ま、まさか、信じるわけじゃないですか！ 奈美ちゃんもそんな白けきった目で私を見ないで！」

猫猫、あたふた。

「祖母の話を聞いたときは私も信じましたよ。まあ、子供でしたか

らね。その後、そんなわけないと思った私は、曾祖母からちゃんとした由来を教えてもらいました。曾祖母いわく、私の祖先は海人あまだったらしいですね。しかも今でいう、美し過ぎる海人。だったようです。さらに、泳ぎもうまかった。まるで人魚のように。重ねて、その地方には八尾比丘尼伝説も伝わっていた。いつしか私の祖先は人魚のようにから、人魚の肉を食べた人間。と、噂された。だから、名字が八尾比丘尼になった。ということですよ」

「なるほどなるほど。奈美ちゃん、ちゃんとメモした？」

「はい。大丈夫ですよ」

奈美は八尾比丘尼の話を、だいたいメモした。

「校長。今の話、文芸冊子に載せてもいいですか？」

「どうぞご自由に。今もたまに血を下さいと言ってくる生徒がいま
すから、私はもう諦めています」

「ありがとうございます。奈美ちゃん、ああしてこうしてそうして
見たらいい感じだと思わない？」

「よくわかりませんが、なんとなくわかりました」

つまり猫猫は、七不思議に絡めて八尾比丘尼校長の名字の由来を書
いてみたらいい感じじゃない？ と思ったのだ。奈美もなんとなく
それを察したのだ。さくらと光はちんぷんかんぷんだったのだ。

「ところで校長？ さっき曾祖母と言っていましたけど、まさかまだ
生きてるとかいいませんかよね？」

猫猫はなんとなく。聞いてみた。

「まさか。すでに他界してます」

「ですよ。ちなみにおいくつで？」

「130です。大往生でした」

「130!？」

猫猫ビツクリ。

「何か問題ありますか？」

「も、問題はない……ないかな?……ちなみにお祖母さんはおいくつで？」

「今年で100才です。まだまだお呼びはかからないようですね。今日もゲートボールをしようと行ってましたから」

「そ、そうですね……」

猫猫は引き攣った笑みを浮かべた。

「……………」

奈美は無言のまま、『嘘』と書いた横に『かも?』と加えた……

2・8・八尾比丘尼高校七不思議『八尾比丘尼校長』（後書き）

サイレンというホラーゲームがあっただな……。

というのはまあどうでもいいとして、八尾比丘尼校長の話でした！。

なんかよくわかりませんが八尾比丘尼校長の話でした！。

八尾比丘尼伝説は各自調べて下さい。私もよく知りませーん。
特に書くことありませーん。

また次回！。

猫猫子猫が、さすがにやっぱりなんかおかしいっすよ！130とか100とか！あなたの家系、不老はなくても不死は会得しているのではなかるうか！と、問い詰め、それに対して八尾比丘尼因幡が、私の家系は老いごときに束縛されない自由な家系ですから。ああそうそう。不死といえれば私は常々考えていました。死という運命から解放されるといふのは果たして自由といえるのかどうか。と、よくわからない答えを返していた時、文芸部部屋で待機していた鈴乃音鈴音と鈴乃音真音は、本棚の前で、あれこれ話していた。

「姉さんこれこれ」

真音は本棚から一冊の絵本を手にとった。

「母さんによく読んでもらったよね。小学校に入る前くらいの時はさ。姉さん覚えてる？」

真音は鈴音に絵本を手渡した。

「姉さん覚えてないの」

鈴音はぺらぺらと絵本をめくりながら、素っ気なく答えた。その絵本の内容を見ても特に思い出さないようだ。無表情でめくり続ける。

「そっか……」

真音にとってその答えは予想通りだったが、予想通りだったからといって、自分が覚えている事を姉が覚えていないというのはちょっと

ぴりショックだった。

真音はちよっぴりしょんぼりしつつ、鈴音から返された絵本を本棚にしまい、別の本を抜き出した。

「これは？小学三年くらいかな。教科書に載ってたよね。それで読書感想文かなきゃいけなくて、姉さん、よくわかりません。って書いて提出したら、先生に怒られたんだよね。これは姉さん覚えるよね？」

「姉さんそれは覚えてるの。どうして竜が16匹なのかわからなかったからわからないって書いたのに、怒られたの。鈴音はどうして怒られるのか、よくわからなかったの」

鈴音は真音からもらった本を先ほどの絵本と同様にぺらぺらとめくる。先ほどとは違うところは、ちよっと膨れっ面であることだろうか。怒られた時のことを思い出し、不機嫌になったのだろう。

「いや、あれは姉さんが悪いと思うよ？ わからないならわからない理由をちゃんと書けば、先生も怒らなかつたと思うな。鈴音にはよくわかりませんでした。だけじゃ怒られても仕方ないよ」

「わからないものはわからないからわからない理由なんてないの。わからない理由がわかれば鈴音にだってわからないなんてことないの」

「そうかな。理由がわかればわからないこともわかると思うけど。ほら、姉さんが五年生の夏休みに書いた読書感想文は先生も褒めてたでしょ？姉さんもわからないって言って、そこで諦めないでやれば出来るってことだよ」

「あれはお母さんが書いてくれたの」

「あつ。そうだったね。毎年先生が怒るから、母さんもなんか怒っちゃったんだよね。それで」

「……………はあ」

お互いに覚えている思い出を楽しそうに（鈴音はよくわからないが少なくとも真音は楽しそうに）語っている後ろで、三途舞歌は頼杖をつきながら、ため息をついた。窓から見える青空を眺めるともなぐ眺めていて、耳から入る二人の会話を聞いている。今の舞歌の状況は、『暇』の一言につきる。

校長室に猫猫と愉快的仲間たちが旅立った後、舞歌はすぐに俯せ状態から復帰した。なんかもう、しんどかったんだと思うよ。

そして帰ろうとした。止められた。止められるとわかった上での発言だったので、諦めるのも早かった。諦めのが前提の茶番。舞歌なりのじゃれあいに近い。

そしてその後しばらく世間話をした。

今日も暑いですねー。そうですねー。明日から学校ですねー。そうですねー。すぐにテストありますねー。そうですねー。勉強してますかー。それなりにー。

もちろん話題を出すのが真音で、相槌を打つのが舞歌と鈴音である。世間話をしていたのはだいたい10分くらいだろうか。しばらくすると真音は本棚に興味を示した。おそらく話題を提供するのに疲れたのだろう。舞歌も鈴音も、そして真音もコミュニケーション能力は高くはない。世間話を長時間行うのは厳しかった。

本棚の中に懐かしい本を発見した真音、鈴音を呼ぶ。鈴音、舞歌も誘う。舞歌は本が嫌いである。故に頑なに拒否拒絶。鈴音が、全く仕方ないなあ、もう。と思ったのかわからないが、鈴音は舞歌を立

ち上がらせるのを諦め、一人で真音の傍に行き、舞歌は一人外を眺めるようになったのだった。

「……………」

舞歌は思う。退屈である、と。

ああホント、退屈。帰りたいたい。だけど帰れない。いや、帰ろうと思つたら帰れる。ということは私は帰りたくないということか。いやいやそんなわけはないだろう。私は帰りたんだけどあいつが帰らないから仕方なく残っているだけだ。あいつが帰るといふなら私は即座に帰る自信がある。

しかし暇だ。退屈だ。やっぱりあいつと一緒に本を眺めてた方がよかったんじゃないだろうか。いや、でも、私、本嫌いだし。嫌いだから近寄りたくないし。本なんておもしろくもなんともないし。興味もないし。そんなの眺めたところでおもしろくもなんともないし。いや、しかし、あいつがもう一度誘ってくれるなら誘いにのるのも悪くはない。というかあいつは昔からあんな感じだったのか。まあなんとなくそうだろうなあ。とは思っていたけど。

外を眺めながらそんなことをつらつらと思っている舞歌が、色々ためんどくさい人間であるということとは、間違いない。

「……………」

と。舞歌が鈴音の昔話にさりげなく興味津々で聞いていたとき、この部屋に残っていた最後の一人、若葉枯葉が、がばつと勢いよく顔を上げた。いきなり起きたから驚いてそちらを見た舞歌と目が合った。睨まれた。枯葉は顔を逸らした。怖かった。

南奈美が予想した通り、枯葉はだいぶ前に起きていた。起きていたというより、意識を取り戻したとい表記した方が正しいかもしれない

い。寝ていたというより、枯葉は気を失っていた感じだったのだから。夏休み後半、枯葉は色々精神的に疲れていたのだろう。奈美と新月満に挟まれているというこの状況。気を失いたくなるのも仕方ない。そして枯葉は、案外気を失うのが得意なのだ。よくわからないのだ。

さて。

さっきから目覚めていた枯葉がなぜこのタイミングで顔を上げたのか。というのには、特に対した理由はない。しかし、どうして今まで気絶したフリ、寝たフリをしていたのかというのには、それなりに理由がある。

起きたら面倒なことになるからである。奈美と満がいた時に起きていたら、面倒な事になっていたのは間違いない。どんな風に面倒な事になっていたかは定かではないが、あの二人、特に満は回りに人がいる事なんて気にもせず、なんか色々やってくるだろうし、そして奈美も噛み付いてくるだろうし、面倒な事になるのは間違いない。面倒な事になるとどうなるかというところ、精神的に疲れる。夏休み最終日くらい一人で休みたい。というのが枯葉の正直な気持ちだった。友達が欲しいとか一人は嫌だとか思っているのに、そう思ってしまうほど、枯葉は疲れていた。なのに、気付いたらここにいる。お疲れ様です。

猫猫が話している時に目覚めた枯葉。なぜか頭を撫でられていたが、奈美と満がケンカをしていない事に気付く。これ幸いと死んだフリを続ける枯葉。奈美たちが部屋から出て行ったタイミングで死んだフリをやめなかったのは、満も一緒に出て行った理由を考えていたから。考えていたら、タイミングを失った。なんか帰る帰らないで揉めてるし。なんか楽しげに世間話してるし。なんか楽しげに昔話してるし。あれ？ まるで俺、盗み聞きしてる変態みたいじゃね？

そう思った枯葉はがばつと起きたのだった。

「あ、起きたんですか？ えつと……枯葉先輩？」

「え？ ああ、まあ、起きた。じゃなくて、起きました？」

真音と枯葉は初対面である。互いに名前すら知らない。真音は、先程の会話で名前をなんとなく聞いていたので、名前を呼べたが、枯葉から見ればこいつ誰だ。という感じで、話しかけられた事に動揺する。先輩って呼ばれたことにも動揺した。友達零人生を送っていた枯葉に後輩なぞ出来たことがあるわけもなく。枯葉は生まれて始めて先輩と呼ばれた。動揺すると共に、ちよつと感動した。ちなみに鈴音は、毛布？ という感じで猫猫が置いていった小梅杏の毛布を見ていて、舞歌はすでに窓の外を眺める暇つぶしに戻っている。

「他の人たちは校長室に行きましたよ。南先輩と……新月さんも、そこにいると思います」

寝ていて事情を知らないだろうと思い、親切に教えてあげる真音はいい人である。

「え、ああ、どうも」

寝たフリしてたから全部知ってるとは言えない枯葉。罪悪感がなくはない。

起きた枯葉に最低限の情報を教えた真音は、「姉さん何してるの？」と、毛布をバサバサして遊んでる鈴音に話しかけた。舞歌はバカを見る目で、鈴音を観察していた。

「……………」

さてこれからどうしよう。と、枯葉は考える。

選択肢は三つほどある。奈美たちが戻ってくるのをここで待つ。校長室に行ってみる。帰る。の、三つ。

一番無難なのは、ここで待っているという選択だが……。

「ちよ、なにするんですか！」

「鈴音は舞歌に後ろからいきなり毛布を被せただけなの」

「だからそんな事をした理由を聞いてるんですよ！ビックリしましたよ！」

「舞歌が退屈そうだったから驚かせてみたの」

「なっ……！ よ、余計なお世話だ！」

「ちよ、三途先輩落ち着いて下さいよ。埃が……」

「……………」

ここ、すっごい居づらい。

舞歌と鈴音は毛布を持ってじゃれあっていて、真音がそれを止めようとしている。舞歌が毛布をバサバサして、その反対を持つてる鈴音もバサバサして、すると鈴がリンリン。真音は埃を吸って、ケホケホ。そして、枯葉は一人蚊帳の外。なんという疎外感。一人ぼっち。孤独感マックス。いてはいけない感じ。というか、いないと同じ感じ。この部屋にいるのは四人じゃない。三人＋一人である。

枯葉の精神ポイントは高くはない。こんな感じ、後5分も耐えられない。

となると二つ目の選択肢。校長室に行く。というのはどうだろう。いや、正直この選択肢が枯葉の中で一番ありえない選択だ。いまさら校長室行ってどうなるという話である。話の途中から参加するというのも、今と似たような気持ちになる可能性もあるし。というかそもそも、校長とか、偉い人はちよつと苦手だし。という事で、残った選択肢は帰る一択。一番選んだらいけない選択であり、選んだら大変な事になりそうな選択だが……。

「……よし」

と、呟き枯葉は立ち上がった。

帰る事にしたのだ。奈美と満は怒るだろうが、帰る事にした。

そもそも自分がここにいる理由がないし、そもそも自分は半ば無理矢理連れて来られたのだ。帰ってもいいじゃないか。そくだそくだ。何も悪くない。帰る。俺は帰る。怒られるかもしれない。殺されるかもしれない。でも俺は帰る。明日の事は明日の俺が考えるのだ。あ、でも、やっぱりやめよいいかな。怒られるの怖いし。多分すごい怒るだろうなあいつ。みつちゃんは……怒らないかも。いや、あのよくわからない保健の先生がいたから、あいつも怒らないかもしれない。怒ったとしても説得してくれるかもしれない。よし。帰る。やっぱり帰る。俺は帰りたいから帰るのだ！

という熱い決意を持ち、枯葉は部屋を出ていく。

部屋から出て行く枯葉を見て真音は、トイレにでも行くのかな。と思った。他の二人はそもそも枯葉が出て行くのに気付いておらず、「舞歌、これ楽しいの!」「私は楽しくない……」と、毛布でじゃれあっていた。

というわけで、枯葉を止める者はこの中にはいなかった。

「待ちな少年。ここに、虹野光って奴はいねえか？」

「……………は？」

部室から出た枯葉を呼び止めたのは、奇妙にカツコつけてる将棋部部長金銀砂銀と、その後ろでうんざりだよ全くよー。という表情を浮かべてる秋春守の二人だった。

2・9・居残り組（後書き）

会話が……足りない。
まだまだ続く。

2 - 10 ・不安定な人たち

猫猫子猫が、校長、食べるの遅くありません？と聞き、八尾比丘尼因幡が、私はゆっくりじっくり自分のペースで食べるのが好きなんです。と答え、スイカを口に運んだ時、冬季冬美と夏季夏美は、将棋部部室で将棋をした。

「あのさー夏美」

「なにさー冬美」

「もう、帰りたい……」

「我慢しなさい。冬美でしょ」

「意味わからーん」

とかいうやる気がない会話をしつつ、将棋をしていた。

「でさ冬美」

「ぐさ夏美」

「ん？ ちょっと意味がわからない」

「安心して夏美。私もわからない」

「なら安心だね」

「安心なら安心だね」

「とつかさ冬美」

「どいつのさ夏美」

「私達、こんなでいいのかな」

「私達、こんなでいいんじゃない？」

「全く、意味ある会話してないよね」

「意味ある会話しかない人生なんて……意味ないよ」

「はい出ました冬美さんの十八番。なんかいい台詞이었습니다。という空気」

「イエイイ」

「イエイイ」

二人はお互いの顔を見ず将棋盤を注視しながら、ハイタッチをした。表情の色は互いに退屈。

「……」

そんな感じの夏美と冬美の横で将棋をしてる、香川智弘と山梨小百合は、何だかこう、むず痒い感じである。ツッコミを入れたい。何してる、何言ってるんですか？ と尋ねたい。でもこの二人の会話に入る勇気がない。ああでも、なんか聞くに堪えない、堪えられない

い。そんな感じである。

「でさ冬美」

「うん」

香川と山梨がそんな感じだということは全く気にせず、二人は会話を進める。

「部長はどこ行ったんだっけ。かれこれ10分くらい経ったけど戻ってこないよね」

「虹野さんをつままえに行つたんだよ。夏美が虹野さんを見たー。つていつから」

「私のせいなのか……。で、なんで秋春君を連れて行つたわけ？」

「そりゃ、部長の相手をしてたのが秋春君なんだから仕方なくない？」

「仕方ないのか……。というか部長は、なんで虹野をつままえに行つたわけ？」

「そりゃ、集まった人数が少なかったから退屈になつたんじゃない？だから新しい刺激を求めて旅だつたんだよ。秋春君を巻き添えにして」

今日集まった将棋部員は、夏美、冬美、守、智弘、小百合、そして金銀砂銀の六人だけである。後五人くらいはいるはずだ。

「三年生は受験とかで忙しいから仕方ないとしてさ。一年の、ほら、あのバカツプルはどうしたのかな？ 山梨さん。なんか聞いてる？」

「え？ わ、私ですか？」

急に話しかけられた小百合は動揺した。

「そりゃ、あなたですよ。この部屋に他に一年の山梨さんはいないじゃん」

「そ、そうですよね……。えっと、昨日佐賀さんからメールが来て、ダーリンと夏休み最後の思い出を作る為に海に行ったり買い物したり、えっと、あ、あの、あ、あんなことや、こ、こんなことしたり？で、忙しいから無理って部長に言つといてと……」

あんなことやこんなこと。が、どんなことかはわからないけど、小百合の顔は真っ赤である。

「ああ、だから部長は佐賀さんと長崎さんに関しては何も言っていなかったんだ……」

納得。というように、うんうん。と頷く冬美。

「……ねえ、なんというかさ」

夏美は、神妙な顔つきをしていた。

「今日、夏休み最終日じゃん？」

「そうだね。それがどうしたの？」

急に何、わかりきった事を。

「私達、夏休み最終日に将棋してるんだよね。いいの？ これでもいいの？ 高校生の夏休み最終日の過ごし方、これでいいわけ？ 今更だけどダメじゃない？ やっぱりなんか間違ってる？ 私が見つものもあれだけど、もっと、こう、ねえ？ あるでしょ？ ねえ、あるよね！」

「「「……………」」」

夏美のその問い掛けに、三人は無言で答えるのでした。

夏美が、これでいいの？ そんなんでいいの？ 高校二年の夏休み最後こんなんでいいの？ と、延々と愚痴愚痴言つて、冬美が、だから私と一緒に勉強しようと言っただろうに。それをお前が。と、延々と愚痴愚痴言つて、智弘と小百合が、かれこれ10分はこんな感じ。この人達、疲れないのかな。後、最終日に勉強もどうかと思う。とかいう感じの事を思っていた時、金銀砂銀は秋春守をお供に文芸部部室に乱入していた。

「ふんふん。なかなかいい部室じゃねえか。しかし将棋部の部室には敵わねえ。なあ、秋春？」

「全く持ってその通りですねえ」

「はっ、相変わらず心が感じられねえよ。お前の返答にはよ」

「……………あのー、なんで俺、手首掴まれてるんですか？」

「ん？ なんとなくだ。なんとなく。なんか面白そうだからな」

部室の前で、若葉枯葉を発見した砂銀。なんとなく枯葉の手首を掴み捕獲。そして、文芸部部室を覗くと、鈴乃音真音を発見。ピンポイント。

急に現れた砂銀。と、守。砂銀を知っている真音は、「あれ？ 部長。何の用ですか？」と普通に対応した。しかし、砂銀を知らない三途舞歌と鈴乃音鈴音は、そんな普通な対応をせず、砂銀を観察した。鈴音は首を傾げて、誰だろこの人。髪長い。女の人の？ 男の人？ ？と思い、舞歌は訝しげに砂銀を見て、なんだこいつ。なんか気持ち悪いな。男か？ 男だよな。いや、でも、女っぽいかな？ と思っていたのだ。

「夏季から虹野が来てるって聞いてよ。天罰を喰らわせてやるうと思ってるな。で、文芸部部室を探してたわけだ。つーか鈴乃音、お前も何でこっち来ねえんだよ」

ブーブー。と、ブーイングする砂銀。その後ろで作り笑いを浮かべながら、帰ってえー。と思ってる守。そして、手に、血が回らないと、悩んでる枯葉。

「部長……………たまに忘れてるみたいなんですけど、僕、将棋部じゃないんですよ？ 光が誘うから顔出してるだけで、あ、鈴乃音って、姉さんの事じゃないよ？ あの人は、僕に話しかけたの」

真音は呆れながら、砂銀に反論した。その途中、隣で、あれ？あの人今、鈴乃音って言ったぞ？ 知り合いだったかな？ と考え、混乱していた鈴音に助け船を出した。色々忙しい真音である。

「俺の事を部長って呼んでる時点で、ほとんど将棋部だと思うけどな。というかなに。そいつ、お前の姉ちゃんなの？」

鈴音を指差す砂銀。そして、じろじろと鈴音を見る。鈴音は首を傾げる。次に、舞歌もじろじろと見る。舞歌は既に、私、興味ないです。という意味表示、お空の観察に戻っている。観察を終えた砂銀は、鼻で笑い、こう言った。

「こんな暑い日に長袖？ 鈴ばっかりのワンピース？ お前ら、なんかおかしくね？」

その発言を受けた舞歌は舌打ちで不快感を表し、鈴音はムツとして不快感を表した。バカにされた！。

「あなたは誰ですか？」

「あん？」

そして砂銀に喰ってかかったのは、鈴音だった。真音は、ああ、姉さん敬語モードだ。と思いたため息をつき、舞歌は、こいつの敬語…：なんかやだ。とモヤモヤしたモノを覚え、砂銀に対しての不快感が消え去り、守は、なんだあの服。確かにすげえ。と、ひそかに鈴音の服に驚いていて、枯葉は、こ、こいつ、離す気がねえ。と、手首から手を外そうと躍起になっていた。砂銀はそんな枯葉を完全に無視。

「俺は金銀砂銀。お前の妹が所属してる将棋部の部長だ。そういうおチビさんは誰だ？なんでそんな変な服着てんだ？」

こいつはからかうと面白そうだ。と、判断した砂銀は、ニヒヒヒと笑う。チビと言われ、さらに舞歌から貰った服を変な呼ばわり、鈴音はまたムツとなった。「だから僕は将棋部じゃなくて帰宅部ですよ。何度言ったらわかるんですか。全くもう……」真音もちょっとムツとなった。お姉ちゃんっ子である。鈴音をバカにするような砂銀の態度にムツとなるのも仕方がない。舞歌も真音と似たような思いでムツとなっても仕方がない。

「鈴音は鈴乃音鈴音です。これは変な服じゃないです。どこが変なんですか？」

「どこって……どう見てもどう考えても変だろその服。なあ？」

いや、そんなわかりきった事を聞かれても。という感じで、砂銀は他の人に同意を求めた。

しかし真音は「僕はいいと思います」と答え、舞歌は真音の言葉に同意。守は「どうでもいい」と本音ただ漏れ。枯葉は「変でも何でもいいから離してくれる！？」と興奮気味。

砂銀に同意してくれる人は、残念。ここには存在しなかった。

「変なのはあなたの方じゃありませんか？」

鈴音、ちよつと勝ち誇る。

「はあ？俺のどこが変だってたんだよ。なあ？」

砂銀は、まさかの同意零、そして、鈴音のストレートな質問に、ちよつとペースを乱される。その結果同意を求めなくてもいい場面で同意を求め、真音に「部長は変だと思えます」と言われ舞歌がそれに同意して、守も「部長が変じゃなかったら世界は終わりですね」と言い、枯葉は「変だよおかしいよ!?」なんで手、離れないわけ離さないわけ!？」興奮気味。

「てめえら……俺のどこが変だって言うんだよ。あぁん?言えるもんなら言ってみやがれ」

砂銀、アウェイな空気を感じ、とりあえず脅し。しかし、守は作り笑いを浮かべさりと流し、舞歌は知らんぷり。真音もどこ吹く風で、唯一枯葉がちよつとビビって抵抗が弱まった。

「あなたは男の人ですか? 女の人ですか? 鈴音にはよくわかりません。それが変です」

そして鈴音が、脅しなんかには屈するわけもなく、言ってみると言われたから言ってみた。純粹だね!。

「……俺が、男か女か、だと?」

すつと。砂銀の雰囲気が変わった。さっきまでは、悪ふざけ、冗談、遊んでます、俺、本気じゃないです。という雰囲気だったが、てめえは越えちゃいけない一線を越えた、という静かな怒りが感じられる。しかしそれも一瞬。すぐに、ニヤリと笑い、悪ふざけモードに戻った。

「ふふふ、私が男か女かですって? さあ、どっちかなあ?」

砂銀は、前半を高めの声、女口調で言い、後半を低めの声、男口調で言った。一人二役。

鈴音は大きく目を見開き、「鈴音にはよくわからないの!」と興奮気味に叫んだ。真音は、相変わらず器用な人だと思いつつ、「姉さん落ち着きなよ。部長は男だよ」と鈴音を宥めた。舞歌は、うわっ。なにこいつ。キモい。と思い、砂銀からちよっぴり距離を取った。守は、相変わらず気持ち悪い。と思いつつ、作り笑いをキープし、そして枯葉は、「うわっ! なんすかあんた! 若干気持ち悪い!」と声を出して距離を取ろうとした。しかし、砂銀がそんな真似をさせるわけがない。

「ちよっとお前、ストレートに言い過ぎじゃね? 初対面で気持ち悪いとか言うかおい?」

砂銀は、枯葉から手を離し、胸倉を掴んだ。大丈夫、本気じゃないから枯葉は苦しくない。でも、怖いです。

「え、あ、すみません。ビックリして本音が……」

枯葉は、結構バカである。

「……本音、が?」

怖い笑い。

「……あは、あははー」

乾いた笑い。

「気持ち悪いなんて酷い! 私、傷ついたわ!」

胸倉を掴んだまま、女口調で叫ぶ砂銀。今度は枯葉をからかおうという魂胆である。砂銀の方が身長が低いので、枯葉を見上げる感じで睨んできて、そんな事言われたら、ある意味たまりませんね。

「ええ！？　なんかごめんなさい!？」

なんだよこの人意味わかんなくてこええよ!!　と、枯葉は思った。残念。枯葉はMな人ではない。

「私にあんな酷い事して……責任取ってもらっからね!！」

砂銀は悪ノリ中。

「意味わからないんですけど!？」

枯葉の心からの叫び。

「……キモい」

舞歌の心からの眩き。

「部長。僕、帰っていいですか？」

守の心からの願望。

「鈴音はよくわからないの！　よくわからないの!！」

鈴音は混乱中。

「姉さんだからね？ あの人、そういう人なんだよ。そうやって納得しなよ」

真音は鈴音の世話中。

「…………… 枯葉君、何してるんですか？」

そして南奈美の、どすが利いた声。

「い、いつの間にとつか…………… み、南さーん？」

枯葉には、奈美が地獄からの使者に見えた。

まあつまり、奈美がなんか、凄い怒ってる。という事である。

2 - 10 ・不安定な人たち（後書き）

もう、無理だよパトラッシュ……

次くらいで、二章は終わりにしたいよ、パトラッシュ……

パトラッシュ……ラッシュ……強そうだね。

2・111・穏やかな心で怒る

「もう一度聞きますけど、枯葉君は、何をしていたんですか」

「な、何をしていたって……」

南奈美が静かに、しかし確実に怒っている今現在、若葉枯葉は死を感じていた。この感覚は昔どこかで味わった事があるような気がしないでもない。

枯葉は、思った。

慎重に言葉を選ばなければ、死ぬ。

さて、枯葉が慎重に言葉を選んでいる間に、今の状況をさくつと説明する。

文芸部部室にいるのは、三途舞歌、鈴乃音鈴音、鈴乃音真音の三人である。鈴音は金銀砂銀が男なのか女なのかわからず、動揺、というより混乱している。男か女かという、根本的な事がわからなくなり、たださえ色々な事がわからない鈴音は、軽いパニック状態に陥っている。砂銀の性別がわからないという事は、もしかしたら今まで自分がわかっていた性別も、間違っているのかもしれない。そんな事があるわけないのだが、鈴音はそんな事さえも不確かである。そんな鈴音を真音は落ち着かせようとしていて、舞歌は少し心配そうに見守っている。というのが、現在の部室模様である。

そして、部室の入口前、入口前の廊下にいるのが、砂銀、秋春守、枯葉、奈美、奈美の後ろ、校長室に行っていたメンバー、猫猫子猫、桜木さくら、虹野光がいる。

奈美は枯葉の状況、つまり、砂銀（女っぽい）に枯葉が胸倉を掴まれている（距離近くね？）意味深な台詞を言ってる（責任ってどう

いう事？　ねえ、どういう事？）という状況を見て、恐怖の使者に変貌。

枯葉は死の恐怖を感じ、砂銀は、なんだこの威圧感は……。という感じで奈美に恐怖を感じ、枯葉から手を離し、奈美から距離を取った。守は、血を分けた姉だか妹だかの初めて見る激怒のオーラに若干引き攣った笑みを浮かべた。

猫猫は、ありや。なんで砂銀君がいるのかしら。と、状況の把握に努める為、傍観の姿勢を取り、さくらと光は、奈美にビビり、手を繋ぎガダガタ震えていた。

説明終了。ついでに枯葉の思考タイムも終了。

足りない頭で考えた枯葉。結局。

「俺が帰ろうとしたら、なんか、この男か女がよくわからない奴とこいつが現れて、手首掴まれて、胸倉掴まれて、意味不明な事を言われてた」

正直に全部話す事にした。嘘ではなく、真実を話したのだ。死ぬわけがない。

「帰ろうと、した？」

「……あ」

枯葉は、自分がバカである事を悔やんだ。と同時に、奈美が新月満に似てきているのを感じ取り、愛の恐ろしさを再確認した。

「……」

人を殺す視線とはまさにこれ。というような目で、枯葉を無言で睨む奈美。枯葉は、奈美から目を逸らす事ができない。熊に背中を見せたら死ぬのと同じ事である。目を逸らしたら、死ぬ。暑さとは別の理由で、汗をかく。俗に言う、冷や汗である。

枯葉にとつては永遠に近い見つめ合い。しかし実時間では数秒の見つめ合いを経て、奈美はため息をついた。と、同時に怒りのオーラが和らいだ。

枯葉は助かったと思い、安堵の息を吐いた。そしたら睨まれた。そしたら怖かった。意味がわからなかった。そもそもなんでこの人こんなに怒ってんの？

「守。その人誰ですか」

枯葉を射殺し若干冷静になった奈美は、守から情報を聞く事にした。

「将棋部の部長だよ。後南さん、名前で呼ぶのは」「守。もっと詳しく」「……かくかくしかじか」

これだから愛って奴は嫌だ。簡単に人を狂わせる。と思いながら、守は砂銀の情報をかくかくしかじかと洗いざらい喋った。隣で砂銀が「お前は俺を売るといふのか！」と喚わめいていたが、守は無視である。守だって、命は惜しいのだ。

「わかりました。そうですか。あなたが金銀さんですか」

守から砂銀の情報を聞いた奈美は、砂銀を見た。ただ見ただけが残念。奈美は生まれつき目つきが悪いので、睨んでるように見えなくもない。さっきの雰囲気も合間って、なんか怖い。というわけで砂銀は「な、なんだよ。なんか文句あんのかよ」と言いながら、フアイティングポーズを取った。

「別に文句はありません。ただ、なるほど。あなたが例の金銀さんだったんだな。と思っただけです」

「例のつて……なんだ？」

「子猫先生が、昔、色々教えてくれました。例えばあなたが、一年の時子猫先生に」「ギャー！！ ちよつと待て落ち着け喋るな！ それ以上お前喋るな！ え、なに、ちよつと待って！ お前何を知ってる！ いや待て！ 言うな！ 知りたくない！ 知られているという事を知りたくない！ というか子猫先生！ 守秘義務はどうしたー！！」

砂銀は顔を真っ赤にして慌てふためき、隣にいた守のボディに裏拳を叩き込み、枯葉の背中に張り手を食らわせ、奈美を涙目で睨み、奈美の後ろで、あれ？ 私言っただかしらー。と、考えるポーズを取っている猫猫を指差した。

守と枯葉は、解せぬだった。奈美は、枯葉君を虐めるからそうなるんです。と、砂銀にダメージを与える事が出来て満足していた。枯葉に対する怒りもほとんど無くなった。だってほとんど勘違いだったんだもの。

「……あ。そういえばあの時、つい」

猫猫は、ぼん。と手を叩き、奈美に砂銀の事を教えた事を思い出した。だいぶ前の話だ。奈美ちゃんよく覚えていたわねー。と感心した。

「ついでじゃないでしょうかー！！」

砂銀は激怒した。猫猫に近寄り、猫猫の肩を掴み「その辺はちゃんとして下さいよー!!」と言う。猫猫は「ごめん」と笑う。砂銀は「ごめんじゃすまされませんよー!!私もうお嫁にいけない!？」と嘆く。猫猫は「お、落ち着きましようか砂銀君?女になってるわよ?」と宥める。

砂銀と猫猫の過去には、色々あるらしい。

さて。状況が動いた。

部室内では、「舞歌は女の人なの!? 背が高いからもしかして男の人なの!? 鈴音にはよくわからないの!」と鈴音の混乱がピークに達し、「私は女ですよ! ちよつと落ち着け!」「姉さんほら! 鈴だよ鈴! ああもう……最近落ち着いてたからもう大丈夫だと思っただのに……」と舞歌と真音のお世話もピークに達していた。廊下では、猫猫と砂銀がなんやかんやしていて、その隣では光が「はっ! お姉ちゃん! わたくし宿題が!」と重要な事を思い出しさくらの手を引き部室に向かい、守は、もうやってらんねー。というように将棋部の部室に向かっていた。

「あー、南さん? 俺はどこに連れてかれるんですか?」

そして枯葉は、奈美に手を掴まれ、砂銀と猫猫の横を通り、どこかに連行される。地獄ではない事を祈る。

「図書室です。小梅先生に本の整理の手伝いを頼まりました」

ずんずんと歩く奈美。振り返らず答える。

「あー、怒ってます?」

さっきとは違い。明確な怒りオーラはないが、怒ってるのかな?

「怒ってます。なんで私を置いて帰ろうとしたんですか」

立ち止まり、枯葉と向かい合う奈美。じと目で睨む。枯葉は逃げたい衝動にかられたが、残念、手を掴まれてるので逃げられない。

「えー、あー、いや、あのー、なんとなく。そう。なんとなく帰ってたから。帰りたかったから帰ろうと思った。その何がいけない!」

枯葉は開き直った。なんか文句あつか。ほぼ無理矢理連れて来られたんだから勝手に帰って何が悪い! という理論である。

「彼女を置いて帰るのは、いけないに決まってるじゃないですか」

何を言ってるんだこいつ。という感じである。

「お前は彼女じゃなくて友達だから」

何を言ってるんだこいつ。という感じである。

「……百歩譲って彼女じゃなくて友達でも、勝手に帰るのはダメじゃないですか?」

「む……確かに」

最もな話である。何かおかしい気がしないでもないが、奈美の言ってる事は間違っていない。

「彼女、もとい友達を置いて勝手に帰ろうとした枯葉君には、罰ゲ

ームです」

「ば、罰ゲーム？」

「そうです。私は枯葉君を信じていたのに枯葉君はそれを裏切ったわけですから、当然罰が必要です。それが世の中の摂理です」

「摂理って……」

なんかおかしくね？

「というわけで、今日の夕食は枯葉君の奢りです」

「……………はい？」

何を言ってるらっしゃるのこの人。

「合意を得ました。契約成立です。さあ、早く本の整理なんか終わらせましょう。それで、夕食までどこかで遊んで、あ、それも枯葉君がお金を出して下さい。それで、夕食と一緒に食べて、また明日です」

奈美は、うんうん。完璧な予定だな。と思いながら歩き始める。枯葉を引っ張りながら。

「え、いや、ちょっと待て！ 俺は合意してない！」

「はい。って言ったじゃないですか」

「はい。じゃなくて、はい？ って言ったんだよ！ 疑問系だった

の！」

「私には同じにしか聞こえません」

「嘘だろ！ お前今、しれっと嘘ついたろ！ なんかおかしいよ！ お前なんかおかしいよ！ そもそも待てよ…… ほぼ無理矢理連れて来られたわけだよ俺は。言わば拉致だよ拉致。拉致された俺が勝手に帰ろうと、つまり逃げ出そうとして怒られるっておかしいだろ。友達置いて帰るのはおかしいかもしれないけど、そもそも友達を無理矢理連れて来てる時点でおかしくね？ つまり罰を受けるべきはお前じゃね？」

「愚痴愚痴とうるさいですよ枯葉君。もう決まった事なんですから諦めて下さい」

「諦められない！」

「はあ…… 全く枯葉君はわがままですね。まあ、そういうところも好きですけど」

「さらっと恥ずかしい事言うな！ お前段々みっちゃんに似てきてないか！？ ん？ そういえばみっちゃんは……！？ 手の骨が折れるからごめんなさい！？」

枯葉は、もう少し考えてから喋るといふ技能を会得しないと、いつかホントに死ぬのではなからうか。

枯葉が奈美の握力に恐れをなしていた時、文芸部の部室では、鈴音が鈴の音で落ち着きを取り戻し始め、真音がホッとして舞歌が鈴の魔力に驚き、光が宿題を泣きながら頑張りさくらがほけーっとそれ

を見守り、廊下では砂銀が自殺すると喚き、猫猫がそれを羽交い締めにして止め、将棋部の部室では、戻ってきた守が夏季夏美やら冬季冬美やら香川智弘やら山梨小百合に、おかえりー。どうだったー。部長はー。お疲れー。と迎えられていた。

そんな感じで、各々の夏休み最終日は終わるのであった。

2・11・穏やかな心で怒る(後書き)

タイトル思いつかない。

もうちょっと夏休み最終日、続くらしいよ。

幕間・終わりが始まり

「それでは校長。ありがとうございます。またわからない事があつたら聞きに来ますので」

まあだいたいおよそ、それなりに七不思議について八尾比丘尼因幡から聞いた猫猫子猫と愉快な仲間達は、校長室を出ようとしていた。

「時間がある時なら、いつでもどうぞ」

八尾比丘尼はそう答えて、スイカを口に運んだ。食べ始めてだいぶ経っているが、一口で運ぶスイカの量が少ないのでまだ食べているのだ。のんびりと、自分のペースで自由に食べる。それが八尾比丘尼スタイル。

「ああ、そういえば小梅先生。教頭先生が、図書室の本の整理について、話しがあると行ってましたよ」

そして唐突に何かを思い出すのも八尾比丘尼スタイル。

「南さん手伝ってね。私眠いから」

そして正直に理由を言って、手伝ってもらうのが小梅杏スタイル。

「別に構いませんけど……」

南奈美は、ちらつと猫猫を見た。猫猫は奈美がこつちを見た理由を理解し「まあ、今日の所はこんな感じでいいでしょ。後は自由時間ね」と答えた。

「じゃ、南さん。図書室来て」

「一度部室寄ってから行きますから、先に行つて下さい」

奈美は若葉枯葉を回収してから、行く気だった。そして無事、奈美は枯葉を回収、もとい連行した。

「わかった。あ、私の毛布も持ってきてね」

小梅はあくびを噛み殺しながら、校長室から直接職員室に向かった。残念ながら、奈美は毛布の事をすっかり忘れていて、毛布を持って来てはくれず、小梅はガツカリするのだが、それは別に語る必要もない話である。

「よし。じゃあまあとりあえず部室に戻りましょう。じゃ、校長。

ありがとうございますー」

「ありがとうございます」

「ありがとうございますー」

「ありがとうございますー」

「こちらこそ、なかなか楽しい時間でしたよ」

各々八尾比丘尼に、ありがとうー。って言って校長室を出て行く。人を除いて。

「満ちゃん？ 行かないの？」

一人ソファーに座ったまま立ち上がらない新月満に、猫猫は声をかけた。

「私の用事はまだ終わってないから」

満はニコツと、満面の作り笑いを浮かべてそう答えた。

「ふーん……まあいいけど」

猫猫は、まあ校長なら大丈夫っしょ。と思い、満を置いて行く事に決めた。

「……………」

奈美は、何考えてんだこいつ。というように訝しげに満を見ていた。と、満と目が合った。満は猫又のように、ニヤー。と笑い、手を振った。奈美は、イラッ。とした。その余裕が気に食わない。奈美は何か言っつてやろうと思ったが、「はいはい奈美ちゃん行くわよー」「ちよ、子猫先生！」と、猫猫に腕を掴まれ校長室から連れ出された。

そんな過程を経て、校長室には校長と不審者の二人だけになった。

「それで、用というのは何ですか？」

八尾比丘尼はそう言って、スイカを（略）
満はニコニコと笑みを保ちながらソファから立ち上がり、八尾比丘尼の前に歩み寄る。

「私、転校したいんです」

そして、そう言った。

「転校ですか。どこの高校にですか？」

「あはっ。もちろん、この高校に」

「……ああ、あなた。うちの生徒ではないんですか。通りで名前がわからないはずですよ」

「あなた、生徒全員の名前覚えてるの？」

なんて無駄な事を。と、満は驚いた。

「一応校長ですから。なのに、あなたの名前はわからないなんて。猫猫先生達は何も言いませんし……」

ボケが始まったのかと思いましたがよ。と、八尾比丘尼は愚痴った。
そしてため息をつく。

「全く、猫猫先生には困ったものです。学校は関係者以外立ち入り禁止です。自由と無法は違うんですよ……」

後でまた説教だな。と思いながら八尾比丘尼は、スイカをスプーンでえぐる。

「あはつ。私はああいう甘い先生、嫌いじゃないわ」

利用しやすいからね。

「猫猫先生が甘いだけならいいんですけどね。猫猫先生の甘さは、水飴みたいな甘さですから……。で、この高校に転入したいと？」

猫猫について考えるのをやめ、八尾比丘尼は話を戻す。そしてスイカに塩を。

「ええ。そうです。出来る事なら明日から」

「それは難しいですね。転入試験や、手続きなどで、そうですね。一月は掛かります。二学期から転入したいなら、夏休み中に手続きしないといけません。どうして夏休み中に手続きをしなかったんですか？」

「……だって、夏休み、枯葉と遊ぶのが楽しくて、すっかり忘れてたんだもん」

満は拗ねた。しかし自業自得である。

「そうですか。で、どうしますか？転入手続きしますか？」

「もちろん。あはつ。出来る限り急いで下さい。でないと私、この高校に忍び込むの我慢出来なくなるかも」

「それは困りますね。では、急ぎましようか。転入試験は、基本三教科の筆記試験。そして、面接です。急ぐなら、今から面接試験をしましょうか？」

「ええ。お願いします」

自信満々である。

「そうですね。それでは」「失礼します校長。明日の始業式について話があるんですが……」

八尾比丘尼がスプーンを置き、面接を始めようとした時、教頭が現れた。教頭は白髪混じりでメガネをかけていて、真面目で誠実な雰囲気醸し出す、ナイスミドルであった。

「さすが教頭。いいタイミングです。今から転入試験の面接を行うので、立ち会って下さい。ああ後、転入手続きの書類も一式用意してくださいか？」

「……面接を、今から、この場で、ですか？」

一言一言区切り、確認する教頭。

「何か問題が？」

八尾比丘尼が、問題があると思ってるはずがない。

「……用意してきます」

教頭は八尾比丘尼の態度を見て、色々と諦め、職員室に戻っていつ

た。

「さて、教頭が戻って来たら始めましょうか。ああ、立ったままと
いうのも何ですから、そのソファでやりましょうか」

「はい。よろしく願います」

八尾比丘尼と満が向かい合うようにソファに掛け、書類などを持
つてきた教頭が八尾比丘尼の横に座った。

「では、面接を始めます。まずは名前と、転校理由をお聞きしまし
ようか？」

「新月満。転校理由は、愛の為です」

満は、笑いながら自信満々にそう言った。

「ただいま……」

午後六時。

氷山つらはらには重い荷物を持ったまま、アパートの扉を開けた。

久しぶりに帰ってきた部屋の空気はもわつとしていて、蒸し暑い。

つらはらは玄関に荷物を置き、はぁ。と息を抜いた。

返事がないと知りながらも、つい、ただいまと言ってしまった。実

家にいる時は、返事があつたからつい。何だか寂しさが増す。

『おかえり』

「……………」

あたしが答えて、さらに寂しさが増した。

荷物を持ち直し、纏わり付くような空気を感じながら、リビングを抜け、寝室に向かう。荷物を下ろし、窓を開けて換気をする。暑いので、クーラーをつけたいが、その前にこの部屋の空気を入れ換えたい。つららはリビングの窓も開け、空気の通り道を作った。生温い風が部屋を抜け、もわつとした空気が無くなっていく。

「……………」
「疲れた」

荷物の整理をしなければいけないが、疲れてやる気がでない。ベツトに寝転び、疲れを癒す。

疲れた。

つららの実家がある場所はここからだいぶ離れている。重い荷物を持ち、電車で三時間かけ、帰ってきた。疲れた。疲れるとはわかっていたが、疲れた。

養親が車で送って行くと言ってくれたのに、それを断り電車にしたのだから、自業自得かもしれないが。

「……………」

断った理由はなんだろう。

自分の為にそこまでしてくれなくていいと思い、遠慮した。電車で三時間なら、車ではもっとかかるから、養親が大変だろうと思ったから、遠慮した。

『それだけじゃなくて。そんな長い時間あんな狭い場所で二人つきり。クスクス。ちよっと怖いよね』

「……………うるさい」

あたしの言う通り、つららが断つた理由には、遠慮以外にも怖かったからというのもあった。養父は仕事があるという事で、送っていくのは養母になるはずだった。車という狭い場所で、長時間養母と二人つきり。何か話さないといけない。その結果、嫌われる。何か話しかけてくる。その結果、嫌われる。何も話さない。その結果、嫌われる。何も話しかけてこない。嫌われてる。

どうなった所で、ストレスが溜まる。嫌われるかもしれないという、ストレス。恐怖。

夏休み。二週間程度、つららは養親と生活した。少なからず、馴染めたと、心を許せたと思ってる。しかし結局、車の中で二人つきりになる程度の事で、逃げ出す程度でにしか馴染めではおらず、心を許せなかったということ。

『あの人達は。あんたを受け入れようとしてるのに。あんたはあの人達を。全然信じてないのね。可哀相に』

「……………」

そう。結局、つららはまだ信用出来ていないのだ。養親達の優しさを。もしかしたら上辺だけで、ホントは嫌っているんじゃないだろうか。迷惑だと思ってるんじゃないだろうか。そういう疑念がなくならない。そんな風に思っちゃいけないと思っても、なくならない。それなのに、一人になると、寂しいと思ってる。

自分はダメな奴だ。と、つららは思う。

『あなたはダメね。これからもずっと。さくらちゃん以外には心開けないんじゃないの?』

あたしもそう言ってる。

「……さくら」

あたしの言葉で、つららは思い出す。そういえば、つららに無事帰ってきた。と、連絡するのを忘れていた。

つららは、長い旅の肉体的な疲れて、自己嫌悪による精神的な疲れにより怠い体を動かして、ベットから起きる。

荷物から、携帯を取り出し、カチカチと手早くさくらにメールを打つ。送信。

返信を待つ間に、つららはクーラーをつける。もう十分換気は出来た。今度は冷気が逃げないように、窓を閉める。

ピンポン。

「?」

リビングの窓を閉めるべきか、ああそついえば夕食どうしよう。と、つららが考えているとチャイムが鳴った。来客だ。

誰だろう。お養母さんが荷物を送ると言っていたけど、今日届くとは言っていなかった。さくらは来るなら来るって連絡くれるだろうし。となると、何かのセールスだろうか。

つららは来客者が誰かを考えながら、玄関に向かう。そして穴から覗く。宅配の人以外の知らない人なら、居留守を使うきだった。

「え?」

しかし、そこにはつららの見知った顔があった。知り合いだ。しかし訪ねて来るとは思わなかった。だからつららは驚いた。

確かにこの人には、教えてと言われたから、今日帰りますというのは教えた。だから、今日訪ねて来るのはわからなくもない。いや、やっぱりわからない。なんで訪ねて来たんだろ。何の用？ そもそも私、家の場所教えたっけ？

ピンポン

つららが予想外の来客に戸惑い、ドアの前でオロオロしていると、そこでオロオロしないで、とりあえず開けて。というようにもう一度チャイムが鳴った。

「……今、開けます」

つらら意を決し、とりあえず開ける事にした。あたしが『なんか怪しいからやめた方がいいってば』と喚いているが無視。

「あ、やっぱり帰ってた。いなかったらどうしようかと思っちゃった」

開けるとそこにはやっぱり見知った姿があった。当たり前だが、再確認してもやっぱりここにるのが不思議だ。

「……神社さん？」

名前も確認してみる。

「ええそうよ。私、神社神裂。それ以外の誰かに見える？」

予想通り驚いてるつららを見て、クスクスと見知った姿、つまり神社神裂は、楽しそうに笑った。

「え、あの、何で？」

「うん。今日帰って来るっていうのは聞いてたからね。物音がしたから、帰って来たかなーって思って、訪ねて見ました」

「物音がした……？」

近くにいた？ まさか盗聴？

「あ、これあげる。タオルだから、使ってね」

混乱しているつららをよそに、神裂はどんどん話を進める。手に持っていた包装されたタオルをつららに渡す。

「え、あの？」

なんでタオルくれるの？

「つららさん、夕食もう済ませた？ もしまだなら一緒に食べない？ 私、隣人と一緒に夕食食べるって、夢だったのよねー。一人暮らし始めたら絶対しようと思ってた」

「え、あの、ちょっと待って下さい。もしかして……」

物音がした。タオル。隣人と夕食。一人暮らしを始めたら。そういえば隣は、空室だった

「……引越して来たんですか？」

「ええそうよ。これからも、未永くよろしくね？」

つららの、恐る恐るまさかそんな事は。という弱々しい声に、神裂はニコツと笑い肯定し、握手を求めた。

「……あ、はい」

つららは、どついう事態が全くわからないけど、とりあえず、握手に応じた。

夏休み最終日。

明日から、新学期。

幕間・終わりが始まり（後書き）

はい。つーわけでまあ、ようやくとキャラの配置が終わったって感じですか？ そうなんですか？ てけとーに頑張ろうと思ってますですか？ 次回から新学期らしいですよ？ でも、内容が思いついてないんですか？ そうなんですか。じゃあ、ゆっくりてけとーに頑張りたいと思います。

また次回！。

3 - 1 ・ 始業式の話

二期の始業式に何かがあるかというところ、校長の話とか、夏休みの話とか、夏休みの宿題の話とか、始業式の次の日辺りにある学力テストの話とか、まあ、色々な話があるよね。

夏休みの話パート1

始業式。

朝登校してきた生徒たちは、ワイワイガヤガヤと、久しぶりに会った友人たちと夏休みの話やら宿題の話やらで盛り上がっていた。2 - Bの廊下側前方付近でも、久しぶりに会った友人と盛り上がっている二人組がいた。

「やあやあ青森君。久しぶりだねえ。夏休みにしてた？」

秋春守は、久しぶりに会った長野翼に話しかけていた。香川智弘がまだ来ていないので、暇だからだ。

「本を読んでいたよ」

翼は本を読みながら答えた。

「いつも通りだねえ。何冊読んだんだい？」

「夏休みの日数の二倍」

「一日二冊とは、化け物だね」

「そうだね」

「自分で認めるのかい？」

「まあね」

「元気？」

「それなり」

「いやあ、長野君の投げやりの返答も久しぶりだねえ。毎日だとイラッとするけど、たまに聞く分ならしないよねえ」

「君の笑顔も毎日見るとイラッとするよね」

「あはは。たまに言われるよ」

盛り上がった二人でした。

校長の話

始業式。

暑い中体育館に集まった生徒たち。
たんたんと式が進められ、校長の話。
八尾比丘尼因幡校長が檀上に上がり、話し始める。

「皆さん。暑いなか体育館に集合してお疲れ様です。あなた方が暑いように、私も暑いです。とても暑いです。もう堪えられないほど暑いんです。あなた方より、こんなスーツを着込んでいる私の方が暑いんです。なので手短かに話をします。夏休み明けでダラダラしたいのも、暑くてやる気が出ないのもわかりますが、二学期も頑張りましょう。では、終わります」

八尾比丘尼はやり切った顔をして、檀上を下りた。
檀上に近いところに並んでいた生徒は、教頭に叱られる八尾比丘尼の姿を目撃したのでした。

夏休みの話パート2

始業式が終わっても、学校は終わらない。午後から授業がある。
しかし始業式の日授業は、いつも以上にやる気が出ない。というわけで昼休み、教室内はダラダラとした空気が充満していた。
2-Bの教室中央列後方でも、ダラけている少女たちがいた。

「冬美」

「なにさー」

「怠い」

「知ってる」

「知ってたか」

「人様の椅子に座り、人様の机にぐてーっとしている今の夏美を見れば、誰もがこいつ怠いんだろうなと思うよ」

「マジ怠い。半端なく怠い。夏休みカムバック！」

夏季夏美は呪文を唱えた！

「夏美はMPが足りなかった。夏休みカムバックは失敗した」

冬季冬美はナレーションをした！

「くそー！！ 昨日の部活でMPを使い切っちゃったー！！」

夏美は握りこぶしを机に叩きつけ、本気で悔しそうだ。

「こら夏美。女の子がくそとか言わないの」

冬美は夏美の頭を小突いた。

「あ、すみません。あ、埼玉さんもすみません。席、返します」

夏美は埼玉さんの席を借りていたのだ。埼玉さんは、近くで別の子たちとお喋りしていたのだ。

「いいよいいよ。使っていいよ」

埼玉さんは、クスクス笑いながら答えた。埼玉さんは、夏美と冬美のやり取りを聞いているのが好きなのだ。

「あ、すみません。ありがとうございます。冬美さんも机に突っ伏してさらに、思いきり叩いてしまって申し訳ないです」

ペコペコと頭を下げる夏美。

「いいよいいよ。プリンダーズでいいよ」

ニコニコと夏美に手を向ける冬美。

「十二個!?!」

夏美はのけ反って驚いたのです。

夏休みの話パート3

冗談だと言ってよふゆっぺ!

と、夏美が叫んでいた時、同教室の窓際中央付近の席では、ダラけてはおらず、夏休みの話で盛り上がっている二人組がいた。

「えー! 神社さんが隣に引越して来てたのー!?!」

桜木さくらは、驚いていた。

「うん。私もビックリしちゃった」

氷山つらはら、さくらの大袈裟だろと思うほどの驚きを見て苦笑い。

「すごい偶然だねー。それで、その後一緒に夕食食べたの？」

「うん。なんか、詳しい話は夕食食べながらにしましょうねって、神裂さんが言って。半分無理矢理な感じだったかな」

クスクスと、昨日の出来事を思い出して楽しそうにつらはらは笑う。

「そしたらさ。すごいご馳走が並んでね。出前を取ったのかわかって思っちゃうくらいのご馳走。食べてみたらお店みたいに美味しくてビックリ。全部神裂さんが作ったって聞いて、またビックリだよ」

「そんなに神社さん料理上手なの？」

楽しそうに語るつらはらを見て、さくらも自然とニコニコと笑顔になる。

「うん、すごい上手。もうね、料理の勉強してるんじゃないかって思うほど上手なんだよ。でも、料理の勉強なんてしてないんだって。料理の本に書いてる通りに作ったただけだって言ってた。読んだだけじゃ、そんな上手く作れないよね」

「うんうん。全然無理だよー。書いてある通りに作ったのに、写真とは全然違うのが出来るよねー」

「さくらは、料理どう？ 上手くなった？」

さくらは料理が可哀相なくらい下手である。この夏休み、母親と一緒にせめて普通に下手までになりたいなと思っていたのだ。

「上手くなったよー。カレー作れるようになったもん」

さくらは誇らしげである。つららは、「おー、頑張ったねー」と、愛想笑いを浮かべる。まあ、夏休み前は素麺を作るのがやっとだったんだから、さくらはこの夏、剥く、切る、搔き交ぜるという三行程を会得したわけだ。そう考えるとたいした進歩だな。と、つららは思わなくもない。

「今度、料理教えてくれるって。さくらも一緒について言ってたよ」

「おー。いいねーいいねー。楽しそうだねー。是非お願いしたいねー。いつもお母さんに教えてもらってるからねー。神社さんに教えてもらって、お母さんをビックリさせたいねー」

「それは押花さん喜ぶね。じゃあ伝えておく。あ、そういえばさくら」

「なにー？」

「テスト勉強は大丈夫？」

「……………いい、天気だよねー」

さくらはつららから目を逸らした！

同時に現実からも目を逸らそうとした！

しかし現実はどこまでも付きまとう！

「……放課後一緒に勉強しよっか」

つららは親友のピンチを見捨てはしない！

さくらはつららの手を掴み「いつもお世話になりますー」と頭を下げた！

二人は仲良しでした！

夏休みの話パート4

昼食後の授業はただでさえ怠い。それが夏休み明けの最初の授業ならなおさらだ。

というわけで、四時間目が終了した後の五分休み、2・B窓際最前列で、三途舞歌は頬杖ついて空を眺めてぼーっとしていた。

そしてそんな舞歌を、わざわざ椅子を舞歌の机の前に運び、ぼーつと鈴乃音鈴音は見ていた。

「……」

舞歌は空を見る。

「……」

鈴音は舞歌を見る。

「……………」

舞歌はつまなそうに空を見る。

「……………」

鈴音は暇そうに舞歌を見る。

「……………」

鈴音は舞歌が頬杖をしている腕をペチペチ叩く。

「……………」

舞歌は暇してる左手で、やめんかボケと鈴音の手を払う

「……………」

鈴音は握手握手と、舞歌の左手を手取る。

「……………」

舞歌はなんでやねんと、鈴音の手を弾く。

「……………」

鈴音は逃がさないと、両手で舞歌の手を掴む。

「……………はぁ」

舞歌はため息をついて諦める。

「握手なの」

鈴音はご満悦である。

チャイムが鳴るまで、鈴音はご満悦で、舞歌は空を眺め続けた。

夏休み明けとか関係なく、よくわからない感じで二人は仲良しさんである。

夏休みの話パート5

放課後の開放感に至福だ。それが夏休み明け初日ならなおさらだ。しかしなぜか、若葉枯葉は放課後なのか開放されず、図書室で、本の整理を南奈美に手伝わされていた。

「枯葉君。その本はそこじゃありません。その下です。ラベルを見ればわかりますよね。もう、貸して下さい。私が一人でやった方が早いみたいですから」

「はいはいすいませんでした……はあ、何で俺こんな事しなきゃいけないんだろ……」

夏休み初日という事で、本の返却はわりと多い。というわけで、本

を所定の場所に戻すという作業も大変だ。しかし、そういう作業は図書委員がやるべきであって、図書委員ではない枯葉は本来やらなくてもいいはずなのだ。

という感じの事を奈美に言ったら「私だって図書委員じゃないのにやってるんですから、枯葉君も頑張ってください」という返答が返ってきた。

「え？ お前図書委員じゃなかったの？」

枯葉は驚いた。奈美はいつも図書室のカウンターにいるし、カウンター業務もしてるし、本の整理もしてるし、昨日なんて図書便りまで作ってたし。それで図書委員じゃないとか信じられない。

「違います。私はただ、いつも図書室にいるなら図書室業務よろしくと、小梅先生に頼まれてるだけです」

奈美は保健室登校ならぬ図書室登校。学校には来ているが授業には出していない。朝から放課後まで、昼を除いてほとんどの時間図書室にいる。昼は保健室である。図書室は飲食厳禁だからね。

「じゃあ本当の図書委員は何してんだ？」

奈美以外に図書室で作業している人を枯葉は見た事がない。カウンターにもいつも奈美一人だけだ。

「さあ？」

「さあって……」

「この学校、委員会がまともに働いてないって、知らなかったんで

すか？」

「いや、知らない事もないけど……」

この学校に在籍している生徒は全員、委員会に入っている。しかしほとんど活動していない。図書委員はもちろんの事、体育委員や保健委員も働いてない。なぜか？ 単純明解。やる気がないからである。生徒も教師も。

そんな感じでも問題なく活動や行事が行われる理由は、奈美や猫猫子猫のように一部の頑張り屋さんが頑張っているからである。

「なんていうかさ、貧乏クジ引いた。みたいに思わないわけ？」

「思いませんよそんな事。別に無理矢理やらされてわけじゃありませんし」

奈美は淡々と手際よく本を棚に戻していく。そんな奈美を、慣れているな。と、枯葉はぼんやり眺める。

「それに暇ですしね。一日本だけ読んでるのは」

「ふーん……」

暇なら授業出ればいいのに。

とは、枯葉は言えない。クラスも違うし、なんか色々事情もあるみたいだし。

「ところで枯葉君」

奈美は作業の手を止め、枯葉を見た。「な、なんだよ」と、枯葉は

身構えた。

「私、あれやってみたいんですけど。こう、図書館や本屋で同じ本を取ろうとして、手が当たって運命を感じるあれ」

「……………お前、なんか残念な奴だよな。頭が」

真顔でバカな提案をする奈美に対して、枯葉も真顔でバカにするのでした。

二人もなんやかんやで仲良しさんでした。

3 - 1 ・ 始業式の話（後書き）

始業式の話なのか夏休みの話なのかよくわからない話でしたー。

もう二度と出番がないだろうから好き勝手な事が書ける埼玉さんが辞書にむにゃむにゃされましたー。

ネタがないのでしたー。

4・0・授業参観のお知らせ

保護者、教師、生徒各位へ。

『授業参観のお知らせ』

厳しい残暑が続く毎日ですが、いかがお過ごしでしょうか。私は、元気です。このプリントを受け取ったあなたも、元気である事を祈ります。

さて、このプリントを作成している今は木曜日の放課後。私が帰ろうとしたところ、教頭に、私は忙しいので作って下さい。と言われて渋々作っているわけです。つまりこのプリントを教師に配るのが金曜日の朝。そこから生徒に配布して、保護者の方々が受け取るのは早くて、金曜日の夜という事になりますね。

そして授業参観は、来週の月曜日。少々連絡が遅い気はしますが、気のせいかと思われれます。仕方ないのです。教頭も私も、今日思い出したのですから。

しかし、年始に年間予定表を配ったので、授業参観に行く気満々だった保護者の方は覚えていおり、すでに会社を休む手筈になっていると思いますので、問題ないかと思えます。忘れていたけど行きたい方は、今からでも遅くありません。会社に連絡して休みましょう。

授業参観について簡単に説明いたしますと、いつ来ていただいても構いません。一時間目から六時間目全てをご覧になってもいいですし、一緒に昼食を食べたり、部活を見学するのもいいかもしれませぬ。どんな授業が行われるかなど、詳しい内容はお子さんに聞か、別紙をご覧下さい。今頃教頭が必死に作成していると思います。

・保護者の方へ

授業参観に来るも来ないもあなた方の自由です。

会社を休んでまで、授業を見る価値があるか、他の親と交流を持つ価値があるかは、ご自身で判断して下さい。

放課後、クラスによっては何か懇談会などがあるかもしれませんが、別に参加しなくても、後日内容はお伝えしますので問題ありません。

お子さんが嫌がる可能性もあるという事を忘れないように。

どうぞご自由に、お越し下さい。

・生徒の方へ

この配布されたプリントを親に渡すかどうかは、あなた方の自由です。

親に来て欲しくない方は、このプリントを教室のゴミ箱に捨てる事をオススメします。家で捨てようなどと考えるはいけませんし、渡してから来るなどと言ったところで無駄です。

親は子供がちゃんと勉強しているか心配だということを忘れないように。

どうぞご自由に、処分して下さい。

・教師の方へ

このプリントを、生徒に配るかどうかはあなた方の自由です。

面倒だったら、捨てても構いませんよ。

どうぞご自由に、思うがままに。

では、さようなら。

私立八尾比丘尼高校校長

八尾比丘尼因幡より

4 - 0 ・授業参観のお知らせ（後書き）

はい。授業参観のプリントでした！。
なんか色々おかしいけど気にしない。

困ったから、組み合わせを増やしてみようという魂胆。

次回から保護者のターンだぜ。

たぶん。

4 - 1 ・授業参観参加表明

金曜日朝とある高校

「校長」

「なんですか教頭？」

「なんですかこのプリント？」

「授業参観のお知らせのプリントですね。私が昨日頑張って作りました。頑張りついでに、印刷もしときました。それが何か？」

「……いえ、何も」

金曜日夜とある一般家屋

若葉枯葉は、母、若葉花恋、姉、若葉紅葉、家族全員仲良く夕食をオムライス食べていた。

「授業参観かあ……仕事休めるかしら」

と、花恋は枯葉が持ってきた授業参観のプリントを見ながら、呟い

た。

「いや、別に来なくていいし」

枯葉の心から言葉であった。

「仕方ない。私が行くしかないわね」

うんうん。と、紅葉は一人頷く。

「何が仕方ないのかわからねえよ姉ちゃん。俺、別に来て欲しくないんだけど」

「行ってくつて紅葉……あなたも授業あるでしょ？」

「いや、だから母ちゃん？俺、別に来て欲しく」「それが偶然、月曜日は午後講義がないのよ。これは行くしかない！」

「おいこら姉ちゃ」「あら、それならお願いしようかしら」

「ちよ、俺のはな」「お願いされました！ 任せて母さん！ 立派に枯葉の保護者を勤めてくるわ！」

「だか」「そうそう。奈美ちゃんのお母様が来てたらちゃんと挨拶しておく」「そいつは約束出来ない！！」

「いや、母ちゃん何言って」「ダメよ紅葉。しっかり挨拶しておかないと。もしかしたら将来親戚になるのかもしれないのよ？」

「親戚って」「いやー！！ あいつにお義姉さんって呼ばれるのは

嫌だー!!」

紅葉はスプーンを持ったままリビングから逃げ出した!

「はあ、全く紅葉には困ったものね。枯葉、紅葉にちゃんと挨拶させてね」

「いや、だから母ちゃん。俺、来て欲しくないんだけど。なんかすっごい嫌な予感がするんだけど。今俺は、プリントに書いてあったように教室で処分しなかった事への後悔でいっぱいなんだけど」

「あつ、紅葉には奈美ちゃんに、枯葉のテストの成績がよかった事のお礼も言っておいてもらわないとね」

「聞いちゃいねえよこの人!」

母親。 若葉花恋、 授業参観不参加。

姉。 若葉紅葉、 授業参観参加。

金曜日夜とある一般家屋

南奈美が携帯片手に自室のベッドで寝転がり、枯葉君からメール返って来ないんですけど。電話? 電話してみる? いや、でも電話はちゃっと緊張する。と悩んでいると、突然、「奈美ちゃん!」と、ノック無しでドアを開け、母、南穂波が現れた。奈美ビックリ。

「お、お母さん！ 入る時はノックするって契約しましたよね！？」

奈美は起き上がり、穂波を怒る。携帯を自分の後ろに隠すのも忘れない。昔、携帯の中身を見られた事があるのだ。

「えー、そんな契約いつしたっけー？ 何月何日何曜日ー？」

ニヤニヤと、まるで虐める相手を見つけた猫のように、楽しそうに笑う穂波。

「ここにちゃんと契約書もあります！」

奈美は机の引き出しから一枚のA4用紙を取り出した。その用紙には、月×日曜日、私、南穂波はノックしないで南奈美の自室に入らない事をここに誓います。この約束を破った場合は、南奈美のお小遣いを 月×日曜日現在の金額五千円から、プラス千円増やし、六千円にする事を誓います。と、書かれていた。

穂波は、「ちよつと貸して。あ、これ持って」と、奈美に持っていた物を渡し、契約書を受け取り、ふむふむと読んでから、「何の事か私にはわからないぜ」とニヒルを気取りながら破り捨てた。バラバラに。そして「はい、ありがとー」と言つて、呆然としている奈美から物を返してもらった。

「お、お母さん？」

奈美は、引き攣った笑みを浮かべた。必死に怒りを抑えているようだ。

「まだまだ甘いわね奈美。こういうのはちゃんと控えを取つとかないとダメだぞ」

穂波は、もう、慌てん坊さんなんだから。という感じに奈美を叱った。

奈美は深呼吸を繰り返し、必死に母親を殴るのを我慢した。

「……で、それ、何ですか」

なんとか落ち着いた奈美は、恐らく穂波がいきなり部屋に入ってきた本題であろう、穂波が手に持っている物について尋ねた。

いや、物自体はわかってる。服だ。いや、この場合服というより、ドレスと言った方がいいだろう。穂波は両手に一着ずつ、ドレスを持っている。右手にお姫様が来ていそうな、ピンクのフリフリドレス。左手には、パーティーなどに出かける時に着そうな、レッドで背中とかまる見えのセクシイドレス。どちらも穂波の歳を考えれば厳しいような気がするが、見た目若いので、似合いそうで娘としてはなんかやだ。というか左手のドレスは、会社のパーティーなどで着る場面もあるかもしれないが、右手のドレスはいつ着るつもりで買ったのだろう。

「いや、ほら、月曜日授業参観でしょ？ どっち着て行こうかなーって、今から悩んじゃって悩んじゃって、自分じゃ決められそうにないから奈美ちゃんに選んでもらおうと思って」

「!?!」

奈美は、二つの意味で驚いた。

まず、ドレス着て行く気なのこの人!? という驚き。

穂波は、「んー、こっちは青少年には刺激が強すぎるかしらー」と、実に楽しそうな表情を浮かべながら、ドレスを自分にあてがっている。普通に考えたら、自分をからかっているだけで、本気とは考え

にくい。しかし。しかしである。奈美は知っている。この人、普通じゃない。万が一ではなく、千がくらの確率で本気な気がするから怖い。

そして第二にどうかそもそも、奈美は穂波にプリントを渡していない。奈美はプリントの助言に従い学校内でプリントを破棄した。だから、穂波が月曜日が授業参観という事を知っていた事に、奈美は大変驚いた。

「ど、どうして授業参観って」

「え？ だって年間行事表に書いてあったじゃない」

「……」

まさか、である。プリントにもそんな可能性が書いてあったが、まさか、まさか年始に渡した年間行事表に書いてあったのを覚えておいて、予め休みを取っておく親がいたとは。しかもそれが自分の親だとは。奈美はまだまだこの母親を侮っていた。

「ふふふ、どれだけ私が授業参観を待ち望んでいたか。去年は色々合っていけなかったし、なぜか年に一回しかないしと、私のフラスコトレーションは溜まりに溜まっていたわ。ようやく。ようやく授業参観に行けるのよ……」

感慨深い。

「お母さん……」

まさかそれほど、授業参観に来たかったとは。なんだか、授業に出てない事が申し訳ない。そんなに楽しみにしているのに私は……。

「にやは、にやはは、やばい。学校で奈美ちゃんをからかえると思うと、笑いが……」

「……」

……この人今何口走った？

「しかも、噂の枯葉君にもこれを機会に合法的に接触出来る……にやは、今からどうやって奈美ちゃんを絡めて遊ぶか考えないと、あつ、あちらの母親も来たりするわけでしょ？……やばいわね、考える時間土日で足りるかしら」

穂波さん、心の声だだもれ。

「久しぶりに守もからかえるし、にやはは、にやははは！いや、ホント、授業参観が今から楽しみ……あ、奈美ちゃん。結局どっちがいい？ 私としては、こっちのセクシー路線で、枯葉君を誘惑して奈美ちゃんのジェラシーを煽って」

「せめて普通の服装で来て下さい！！」

奈美の心からの叫びであり、今月最大の妥協であった。

悲しいかな、このような妥協を月一の割合で行っている、奈美なのであった。

母親。南穂波、授業参観参加決定！

金曜日夜とあるアパートの一室

氷山つららはリビングで、神社神裂と夕食（肉じゃが）を食べていた。

なぜ神裂がいるかというと、先日、と言っても、もう一週間くらい経っているのだが、先日夕食をご馳走になったので、そのお礼に、今日はつららが夕食をご馳走しているのだ。

「へー、授業参観か」

つららから、月曜日授業参観があるんですよー。という事を聞いた神裂。

「つららさんのご両親は来るの？」

「いえ、遠いですから、多分来れないと思います」

だから、授業参観があるという事も教えてない。わざわざここまで来るのも大変だろうし。『来れないとか言われたらショックだし』

「そっかそっか、しかしこの肉じゃが美味しいわね」

コロッツと話題変更。つららの表情が少し暗くなったので。

「神裂さんの料理の方が美味しいですよ」

「いやいや、こと肉じゃがに関しては多分つららちゃんの方が上手だと思うな。どうも私には、肉じゃがのおふくろ的な味が出せない

のよね。つららちゃんはこの肉じゃがの味、お母さんから教えてもらったの?」

「あー……いや、あの、私は、施設で……」

つららは、困ったような笑みを浮かべた。どう話すべきか。というよりも、話すべきか? 『やめとけば。変な目で見られるから』

「施設?」

初耳である。

「あー……私、捨て子で、あの、中学まで、養護施設? みたいなところに住んでたので、それで、この肉じゃがも、その時……」

「へえー、そうだったの? 知らなかった」

なるほど。母親がない子の方が、素朴で温かい感じの肉じゃがを作れるとは。

神裂は苦笑いするしかない。

「あ、あの?」

なぜか苦笑した神裂。つららはよくわからない。神裂がどう思ったかが。『そりゃあんだ。うわこいつ捨て子かよ。かっこわるい。でしょ』それはない。と、思いたい。

「ああごめんごめん。っていう事は、今のご両親とは血が繋がってないの?」

養子って奴かな？

「あー……いえ、今のお養母さんは私のお母さんのお姉さんだから、本当は伯母に当たるから、養子だけど血は……少し？」

自分でも言ってる、よくわからない。

「なるほど。あなたの家庭も色々複雑なのね」

やっぱりね。

「？」

神裂の言葉は、同情よりも納得という色の方が強かった。つららには、どうして神裂が納得したかわからない。わからないけど、とりあえず、神裂が自分に対してマイナスイメージを持たなくてよかった。つららは、ホッとした。緊張して強張っていた体の力も抜ける。

「というわけで、月曜日の授業参観は私が行ってあげるわ」

神裂は、私に任せて。というように、ウィングをした。

「……………は？」

つららの心からの、は？だった。

隣人。 神社神裂、 授業参観参加？

養母。 冰山吹雪、 授業参観不参加？

養父。 冰山氷河、 授業参観不参加？

金曜日夜とあるマンションの一室

桜木さくらはリビングで、母、桜木押花と夕食（さくら特製カレー。なんか甘い。隠し味と称してチョコは入れすぎたのが原因かと思われる）を食べていた。

「え？ 月曜日授業参観なの？」

さくらの、「そういえば、月曜日授業参観だってー」という発言を聞き、押花は驚いた。

「うん。ちょっと待ってー。プリント持ってくるねー」

そう言ってさくらは自室に行き、「はいこれー」と、プリントを渡した。

押花は、ふむふむと校長が頑張ったプリントを読み、なるほどなるほどと教頭がまとめたプリントを読んだ。「ああ……」そして額に手を当て、やってしまったのポーズ。

「どうしたのお母さん？」

「……あのねさくら、実はね、お母さん、月曜日仕事の面接を受ける事になってるの」

押花は申し訳なさそうにそう言った。

「え！そうなのー？」

初耳である。お母さん頑張って働きます的な発言は聞いていたけど、月曜日に面接とは。

「そうなの。月曜日の午前中にね」

押花がさくらにその事を黙っていた理由は、落ちたらカツコ悪いからである。

「だから、授業参観は、午後からしかいけないわ……ごめんね？」

去年の授業参観は朝から放課後までいた。見守っているというよりも、監視していた感じだった。愛が溢れていたのだ。

「ううん。別に全然いいよー。お母さん、面接頑張ってねー」

「ええ、さくらも授業頑張ってね」

「うん！」

母親。桜木押花、授業参観参加。

金曜日夜とある高級住宅

「お母様ー！！」

虹野光はそんな掛け声と共に、バーンとドアを開け、母、虹野望の部屋に侵入した。

「お母様お母様！ これを見て欲しいですよー！」

光は、ソファアームでぐったりしている望の横に座り、望の眼前にプリントを提示した。

「だから……お母様は……やめなさい……」

望は、寝起きというよりも今墓場から蘇りましたというくらい弱々しい声で、光に注意した。その顔色は真っ白を通り越し、蒼白であり、纏う雰囲気は、ここはあなたのいるべき世界じゃないのよ？成仏しなさい。と言われたら成仏してしまいそうなくらい儚なげだ。

「ごめんなさいですよお母様！ それよりこれを見て欲しいですよー！」

そんな母親とは対象的に元気一杯元気潑刺な娘は、なんとというか反省の色無し。

「はぁ……」と、生きる事を諦めたようなため息をついてから、望はソファアームに投げ打っていた白百合のように白くて細くて脆そうな腕を、最後の力。使ってます。というようにゆっくり動かし、光からプリントを受け取った。生きている事が奇跡のような儚ない印象を受ける望だが、本人いわく、低血圧で体力と気力が零の近似値にあるだけで、健康そのものらしい。

「……………あぁ、授業参観」

ゆっくりと、五分程度掛けてプリントを望は読み、理解した。別に理解力に乏しいわけではない、ただ文字を目で追っていたら、頭が痛くなってきたので、休み休み読んだ結果、五分掛かったのだ。もう一度言うが、本人いわく、健康そのもので、病弱というわけではないらしい。

「そうです。授業参観です。お母様、来てくれますのですか？」
期待を込めた目で母を見る光。

体力と気力がほぼ零と自認しているだけあって、望がこういう学校行事に来た事は、これまで一度もない。父親もそういう事には一切関心を持たないので、いつも家政婦さんが代理で来る。寂しくないわけではない。

しかし最近の望は、ちょっと元気になったようだ。頻繁に遊んでくれるし、夏休みの宿題もちょっと手伝ってくれた。だから、もしかしたら？と、光は淡い期待を感じている。

「そうね……」

そんな娘をちらつと横目で確認してから、望は目をつぶった。もちろん、どうするか思考し始めたのだが、近くに『まだ生きてます』という看板を立てて置かないと、葬儀屋を呼ばれそうな雰囲気だ。

正直な所、望は授業参観には行きたくない。だってしんどいし。最近涼しくなっては来たが、まだまだ暑くて、外はつらい。ひ弱な人間虹野望は、夏はエアコンとアイスクリーム、冬は火燵にストーブがないと死んでしまうのだ。さらに虹野家は八尾比丘尼高校から離れているので、移動だけでも一苦労なのだ。例えば辿り着いたとしても、学校というのは何故か文明の利器、エレベーターとエスカレー

ターが整備されていないので、階段を使用しなくてはならない。死ねというのか。

確かに最近、色々合って母親頑張ろうとは思っているが、授業参観に行く意味が、望には見つからない。

光も、いつもの事だから、そこまで落ち込まないでしょう。

という結論に達し、望は授業参観に行かないと、光に伝えようと、目を開けた。

そして、行くと言ってくれるのを今か今かと待っている娘をもう一度横目で見て、ふと、思った。

「……………あの人は、来るの……………かしら？」

「？ あの人が誰ですか？」

「さくらさんの……………お母さんよ」

「お姉ちゃんのお母様ですか？ 多分来ると思うのですが……………そうですね！ お姉ちゃんにお母様を紹介したいのです！ だからお母様！ 授業参観には是非来て欲しいのです！」

「お姉ちゃんは、なかなかお家に遊びに来てくれないからちようどいいですねー！ いい考えですねー！」と、光がソファで跳びはねながら喜んでいるのを尻目に、望はうつすらと微笑んだ。もうすぐ死ぬ事を知っている人間が、最後に大きな事をしてやろうと考えているような、力強く、悪そうな笑みだった。

あの人に会って、久しぶりに生きている気分になるのも悪くない。

「そうね……………それじゃあ……………私も行くかしら」

「！ありがとうございますー！」

光はその言葉を聞き、嬉しさのあまり望に抱き着いた！

「ぐえ……！」

望は光の重さで断末魔を上げた！

母親。虹野望、授業参観参加（生きていたら）

父親。虹野輝樹、授業参観不参加

金曜日夜とある一般家屋

夕食（秋刀魚）

「授業参観ね。わかったわ。ちゃんと行くから安心してね」

「だってさ姉さん。よかったね」

「姉さんよかったの」

「よし。父さんも、仕事休んで行っちゃおうかなー」

「あなた」

「……はい、すみません」

母親。鈴乃音絢音、授業参観参加。
父親。鈴乃音鳴海、授業参観不参加。

とある一般家屋

夕食（刺身）

秋春守、プリントを学校内で破棄。父、秋春透は月曜日が授業参観だと知るわけもなく。

「守」

「なに？ 父さん」

「あー、学校は、最近どうだ？」

「別にいつも通りだよ」

「そ、そうか」

父親。秋春透、授業参観不参加

金曜日夜とある一般家屋

シチユ
夕食

三途舞歌、プリントを学校内で破棄。
両親が授業参観を知っているわけもなく。

「
……」

「
……」

「
……」

「
……」

「
……」

「
……」

三途舞歌の母、授業参観不参加。
三途舞歌の父、授業参観不参加。

4 - 1 ・授業参観参加表明（後書き）

長い。

でも仕方がないじゃないか。

影の主役穂波さんが出て来たんだもん。
六千文字くらい軽く行っちゃまうよ。

じゃ、次回から授業参観ですです。

また時間が……。

4 - 2 . 朝 色々な思惑(前書き)

50分授業。 10分休み。

8時40分 HR

9時00分 一時間目

10時00分 二時間目

11時00分 三時間目

12時00分 昼

13時00分 四時間目

14時00分 五時間目

15時00分 六時間目

16時00分 HR、掃除、下校、部活。

4 - 2 ・朝 色々な思惑

8時20分〜1 - B

「真音！おはようですのー！」

「おはよう光。今日は早いね」

「当たり前ですのー！だって今日は授業参観なんですのよー！」

「授業参観、そんなに楽しみなの？」

「ですのー！だってお母様が来てくれるんですものー！」

「あつ、来てくれる事になったんだ。よかったね。いつ来るの？やっぱり午後？」

「真音のお母様も午後ですの？」

「うん。先姉さんの方行くから、五時間目に来るって言ってたよ。光の方は？」

「お昼くらいに来るって言ってたですの。だから一緒にお昼ご飯を食べる計画ですの」

虹野光は、通学鞆とは別に持ってきた紙袋から、重箱を取り出した。三段だぜ。

「そ、それを二人で？」

鈴乃音真音は引き気味である。

「二人じゃないですよ。四人ですよ！お姉ちゃんとお姉ちゃんのお母様とわたくしとお母様の四人ですよ！今から楽しみですよ！」

光は本当に楽しみなのか、目が、幸せ光線が出そうなくらい輝いている。

「……それ、桜木先輩は知ってるの？」

そんな光とは対象的に、真音は心配そうな目で光を見ている。

「お母様がサプライズで驚かしましょうって言ってたから、教えてないですよ」

何か問題でも？というように光は首を傾げた。

「いや、それって……」

そこに光の父親がいたら間違いなく修羅場だと思っただけど……いなきゃ大丈夫なのかな？

「それって……何ですよ？」

「……まあ、頑張ってるね。応援してるよ」

僕が口を出す事じゃないか。という結論に達した真音は、とりあえず複雑な家庭環境な友人を、応援しておいた。

「？ 頑張るですの」

光は、どうして真音が応援したのかよくわからなかったけど、とりあえず、頑張る事にした。

8時25分〜2-B〜

「つららおはよー。遅かったねー」

「おはよう。うん。ちょっと、神裂さんに用事が会って……」

「神社さんがどうかしたのー？」

「……それがねさくら」

「うん」

「なんか、神裂さん、今日授業参観来るって言ってるんだよ」

「え！なんでなんでー!？」

「うーん。私もよくわからないんだけど、というかホントに来るかもよくわからないんだけど……」

「んー、詳しい説明を求めー」

「えっと、多分何だけど、私がお養母さんが来れないって言ったから代わりに来るみたいなんだよね」

「あ、つららのお養母さん来れないの？」

「ん、遠いからね」

『教えてないからだけどね』

「そっかー、残念。お母さん挨拶したいって言ってたんだけどー」

「押花さんは、いつ頃来るの？」

「お母さんはね、午前中は用事あるからお昼頃来れるって言った。つららもお昼頃来れるって言った」

「え、あー、いいの？」

『去年はあいつ。あんたの事邪魔物扱いだったもんね。遠慮しないでいいのよー。って言ってたけど。クスクス。目があっちいけあっちいけで。怖かったよね』

「うん。お母さんもね、今年と一緒に食べようって言ってたよー。今年は大丈夫だから、一緒に食べよ」

「……うん」

「それで、神裂さんはいつ来るの?」

「それが、よくわからなくて……。金曜日に行くって言うってたんだけど、ホントに来るかもよくわからなくて、土日とか家に遊びに来たりしてたから、聞いてみたんだけど、なんか、のらりくらりとどつちつかずで……」

『ムカつく』ムカつかないから黙れあたし。

「今朝も聞きに行ったんだけど、結局よくわからなくて……」

「なるほどなるほどー。というか土日神社さんと遊んでたの!？」

「えーあ、うん、なんか急にきて……」

「わたしも遊びたかったー!どうして誘ってくれなかったのー!」

ポカポカとつららを叩いてさくらは怒る。怒りレベル1。

「い、ごめん。急だったから……」

「うう、つららが段々わたしから離れていってしまっー……」

メソメソと泣くフリ。

「そ、そんな事ないって!私はさくらから離れたりしないよー!」

慌てるフリ。じゃなくてホントに慌てるつらら。

「なんちゃって嘘だよー。そんな事、全然思っ
てないよ?」

「だ、だよね」

よかったー。

「でも遊びには誘って欲しかったー!わたしも仲間に入れて欲しかったー!」

「うん。今度は誘うね」

「約束だよー」

「うん。約束」

二人は仲良く、指切りげんまをするのでした。

8時30分〜2 - B〜

「秋春君おはよー」

「おはよう香川君」

「今日、授業参観秋春君のとは来るの？」

「家は来ないよ。香川君の方はどうなんだい？」

「家は午後から母親が来るよ。やだなあ」

「大変だねえ。こっちは仕事が忙しいらしくて、助かったよ」

「あれ？ 仕事って、秋春君の家、共働きのの？」

「！」

香川智弘の素朴な疑問を受け、秋春守は、ある恐ろしい可能性に気付いた。気付いたというか思い出した。あの母親の事を。あの、南穂波という存在を。

「ど、どうしたの秋春君。急に怖い顔して……」

何か悪い事言ったかな？

「……いや、何でもないよ」

守は、いやいや、あっちも来て欲しくないだろうから授業参観のプリントを破棄したはずだ。つまり大丈夫。来るわけがない。大丈夫。来たとしても大丈夫。こっちに被害はない。いや、でも、あの人の事だから、いやいや、大丈夫だ、大丈夫なはずだ。と、必死に自分に言い聞かせるのだった。

8時35分〜図書室

「遅いですよ枯葉君」

「申し訳ない、今日はホント……ギリギリまで学校を休むか休むまいかで悩んでたから……で、図書室に呼び出した用件は何ですか？」

「その前に聞きたい事が。枯葉君のお母さんは今日来ますか？」

「……いや、来ない」

「そうですか。それはよかった……」

南奈美はホッと一安心。少しは面倒事が少なくなっ「代わりに姉ちゃん来る……」てなかった。

「どうしてですか!？」

「俺が聞きてえよ!！」

ここが図書室である事を忘れ、大声を出す二人。あまり人もいないし別にいつか。

「ああ、それならまだお義母さんの方がマシです……お義姉さん、紅葉さんじゃ……やばいです」

爪を噛みながら、どうするべきか悩む奈美。その表情は真剣そのもの。ここで判断を誤れば死ぬ。そんな気迫に満ちている。

「いや、確かにやばいけどそこまで心配しなくても……ん、待て。まさかお前の父親が来るのか！」

奈美の父親、つまり秋春透は至って普通のサラリーマン。娘の彼氏の前では変貌する、至って普通のサラリーマン。例えそれが彼氏（嘘）だったとしても、娘を守る騎士になる、至って普通のサラリーマンである。

「いえ……父親は多分来ません。守が上手くやったはずですよ」

それなのに私がしくじるとは！

「守……ああ、お前の双子の兄か弟」

そういえばこいつ、親が離婚して、父親と一緒に住んでなかったんだっけ。と、思い出す枯葉。

「じゃあ、何でお前、そんなに切羽詰まってるんだ？」

父親来ないなら、平気だろ。

「……今日、母親が、来ます」

この世の終わりを告げるように、奈美は言った。

「母親？ お前の母親、何か問題があるのか？」

「問題しかないです」

断言した。

「枯葉君いいですか？ あの母親を知らないあなたに、あの母親の厄介さをわかりやすく教えます。まず、お父さんの厄介さが風邪だとします」

「風邪」

相当厄介だ。万病の元だし。

「お母さんの厄介さは、無酸素状態です」

「む、無酸素状態？」

よ、よくわからない。よくわからないが、相当厄介な気がする。

「わかりましたか枯葉君。気を引き締めて下さい。じゃないと、こういう言い方は不本意ですが、あなたは今日、私と、結婚する事になります」

そう言つて、ポツと顔を赤らめる奈美。乙女だねー。

「授業参観で!？」

そして驚愕する枯葉。全く理屈がわからない。どんな過程を踏めば結婚する事なるか全くわからない。だからこそ、なんか怖い。

「……それもやっぱり悪くないかも」

そしてポツリと危ない事を呟く奈美。相思相愛になってからがいいかなあ。と思つてたけど、別に形から入って愛を育むのも悪くないかもなあ。と思ひ直したのだ。乙女だねー。

「お前は俺の敵なのか味方なのかどっちなんだ！」

もう枯葉大變。

「私はいつでも枯葉君の味方です」

そして断言。

「お、おう……」

そして動揺。

「こほん」

空気入れ換え魔法発動。

「話を戻します。とりあえず枯葉君も、私の母親の厄介さというか常識のなさが理解出来たと思います」

「ああ、理解した。よくよく考えれば、お前の母親だもんな。普通なわけがない」

子は親の鏡である。子がツッコミなら親はボケ。という意味である。違うか。

「褒め言葉としては受け取れません。罰として今週末はデートです」

「なんで!?!」

「いいですか枯葉君」

「よくない!」

「今日は授業に出ないですとここにいる事をオススメします」

「お前も俺の話聞かないのか!」

「大丈夫。枯葉君は、私が守ります」

「守る前に話を聞け!」

というやり取りをしていると。

キンコーンカーンコーン

と、チャイムが鳴った。それはホームルームの始まりの合図。

「やばい!」

枯葉は慌てて教室に向かおうとする。しかしその手を奈美が掴む。

「いや、お前離せって!話はまた後で聞くから!」

学校にいるのに遅刻扱いって、理不尽だよね。

「枯葉君。お母さんの1番効果的な対処方法は、目の届く範囲で無視です。まあ、1番難しい対処方法でもあるんですけど」

そう言つて奈美は、枯葉の手を離す。奈美だつて、授業を受けずにここにいと、本気で言つたわけじゃない。授業を受けれるなら受ければいいのだ。

無理だつた時はここに来ればいい。

「授業頑張つて下さい。ああ後、守にも一応、お母さんが来るって伝えておいて下さい。心の準備がないと、大変だろうから」

笑顔で手を振り、枯葉を送り出す奈美。

「……………わかつた」

なんか、複雑な気持ち。

「……………なんか夫婦みたいですね。いつてらっしやいのキスしますか？」

「なんか色々台なしだよ！」

枯葉は走つて教室に向かった。

8時40分〜図書室

4 - 2 ・朝 色々な思惑（後書き）

はい。始まりました授業参観。

今回のお話は、秋春守と南奈美と南穂波と桜木さくらと桜木押花と氷山つららと虹野光と虹野望が主です。

残念、夏美と冬美は出番なし。べ、別にあれだよ？その二人のことを前話でうっかり忘れてたからじゃないよ？

はい、また次回！。

時間が、時間が俺を苦しめる……

4 - 3 朝 説明と自由と契約と

8時50分〜2 - B

「あのさー」

HRが終わり、一時間目の数学の準備をしていた秋春守に、若葉枯葉が話しかけてきた。

「なに」

枯葉は友達でもなんでもない。守は素っ気ない態度だ。それが作り笑いでも笑いながら、素っ気ない態度というのは気持ち悪い。

「あー、なんというかさー」

枯葉はなかなか用件を言わない。守は、さっさと用件言えよこの野郎と、無言の作り笑顔で急かす。

「あー、あいつが、あ、南さんが、うー、まー、とりあえず、母親来るから注意しろって。伝えた。よし伝えた」

そう言っただけで枯葉は、頭を掻きながら去って行った。上手く伝えられず、自分のダメさ加減に歯痒かったのだろうが、守にとってそんな枯葉どうでもいい。

重要なのは、母親である。

「……………」

守は、作り笑顔のまま、固まった。

冗談だと、信じたかった。

8時50分、校庭へ

授業参観という事で、校庭は駐車場として解放されていた。まだ朝も早いので、車は数台しか停まっていなかったが、恐らく昼頃には車でこの校庭は埋まってしまっただろう。

そんな校庭で、一台の真っ赤な軽自動車は、先程から巡回していた。停まる場所を探しているわけではない。今の校庭は、どこでも自由に停められるスペースがある。そもそも探している様なゆっくりなスピードではない。そもそも停まれる所を探している車はドリフトをしない。

まあつまり、広々とした場所なので、何か血が騒いだのだろうか。

その車は、校庭は四周程度した後、ようやく駐車した。

その車から降りてきたのは女性。いい仕事をした後のような爽やかな顔をしている。

服装は黒のスーツ。スカートではなくパンツルックなその姿は、私刑事です。と言われたら納得してしまいそんな凛々しさがある。しかし。

「ふふふ……ドリフトもなかなかだったけど」

校舎を見て不敵に笑うその顔に凜々しさはカケラもなく、悪戯っ子にしか見えず、手に持っているのはセカンドバックではなく、スピーカーで使うマイバツク。

大人のように子供で、アンバランスにバランスを取る女性。

「お楽しみは、これからよねー」

南穂波が授業参観にやって来た。

9時00分〜職員玄関〜

「らんっらんっらんっらんっらんっらんっらんっらんっらんっらんっらん」

と、風の谷のテーマを陽気に歌いながら、穂波は校庭から職員玄関にやって来た。

プリントには生徒玄関と職員玄関どっちから入ってもいいですよ。と書かれていたので、穂波は校庭から近い職員玄関から校舎内に侵入した。

運動靴を脱ぎ、マイバツクからスリッパ（なんかフワフワしてる奴）を取り出す。

すでに授業が始まっているので、校舎内は静かだ。

「ふんふん、なるほどねー」

職員玄関には案内板が置いてあった。穂波は、遊園地でどのアトラクションから乗ろうかと悩むように、楽しそうにそれを眺める。教頭作成のプリント（というよりその情報量はパンフレットレベル）にも縮小された同じ案内図が書いてあり、すでに頭に入っているが、現地で案内図を見て、これから何しようかと考えるのは、なかなか楽しい。念のために言っておくが、ここは高校、穂波は今日、授業参観に来た。

さて。

この、私立八尾比丘尼高校について簡単に説明しておく。入口は南に一つに北に一つあり、一応南が正門という事になっている。穂波も正門から侵入した。校庭は西側にある。

校舎は四階建ての棟が三棟あり、南から順番に、職員棟、生徒棟、特別棟と呼ばれている。各々の棟は一階と二階に一カ所ずつある渡り廊下で行き来きが可能だ。

現在穂波がいる職員棟は、文字通り職員が使う教室が多い。一階には職員室や校長室、保健室があり、二階には就職、進学関係の資料などが置いてある教室、各々の教科の準備室、図書室、三階も準備室。そして四階には、教室がない。だだっ広い空間であり、雑巾かけ大会とかが出来そうだ。用途はもっぱらお弁当スペース。何故なら、四階の南側はガラス張りになっていて、大変眺めがいいのだ。生徒間では、展望室と呼ばれている。

「やっぱりここは外せない」

穂波も行く気満々である。

生徒棟は文字通り、生徒が使用する教室が多くある。一階には生徒

玄関や生徒会室、購買や用途不明の教室があり、二階には一年の教室、三階には二年の教室、四階には三年の教室がある。職員棟は屋上が解放されていないが、生徒棟は屋上が解放されており、四階西側から上がる事が出来る。

「2・Bは、1111」

穂波は再確認ロックオンした。

特別棟とは文字通り、特別な教室がある棟である。一階二階には、視聴覚室や音楽室、美術室などがあり、三階四階には、文化系の部室や用途不明教室が多数ある。文芸部や将棋部はここにある。

職員棟と生徒棟、生徒棟と特別棟の間は、中庭になっている。

職員棟と生徒棟の間の中庭には、花壇などがなく、レンガが敷き詰められており、屋上からこちら側に落ちれば確実に死ぬるという親切設計である。ベンチが設置されているので、昼時はカップルが使用している事が多い。

生徒棟と特別棟の間の中庭は、花壇などが設置されており、自然溢れる場所になっている。この場所を整備しているのはガーデニングマスターはなばたけかいが花畑絵画先生と、園芸委員会の真面目さんたちである。

以上説明終了。

故に行動開始。

「まずは娘より息子ね」

穂波は、そう呟いて歩き出した。向かう先はもちろん、息子がいる2・Bである。

「おや、保護者の方ですか？」

「はい？」

後ろから話しかけられた穂波。後ろを向くと先程までは誰もいなかったのに、スーツ姿のうら若き女性が。タイトスカートで、なんと
いうか、生足が素敵。素敵過ぎて穂波は殺意が湧きそうだった。

「えっと、校長先生ですよね？」

この見た目は噂の校長か。

「はい、私が校長の八尾比丘尼です」

というわけで校長八尾比丘尼因幡である。校長室から出て来たら、
穂波がいたので声をかけたのである。

「ですよ。あー、よかった。あなたみたいに若々しい教師が他にもいたら、嫉妬が暴走するところでした」

ニコツと笑う穂波。

「あなたも嫉妬される側だと思いますよ」

無表情で、二十代にしか見えない穂波を眺める八尾比丘尼。

「いやいや、私は校長先生みたいに生足はさすがに晒せませんよ」

「やはははー。と、笑う穂波は、精神的には八尾比丘尼より若々しい。

「こんな早くから授業参観にいらっしやるとは、ご苦労様です」

「ちつとも苦労じゃないですよ。もう、今日は楽しみで楽しみで、朝三時に起きちゃいました」

お弁当、頑張っちゃいましたよ。と、楽しそうに笑う穂波を見て、変わった人だなー。と思う八尾比丘尼。さすがに保護者までは把握していないが、この人は誰の親なのだろうと気にならなくもない。

「あ、そうそう。校長先生には色々とお世話になってますから、これ、つまらない物ですけど」

そう言っつて穂波は、マイバックから『とうきょうバナニヤ』を取り出した。

「ありがとうございます。後でいただきますね」

八尾比丘尼は躊躇なくもらった。

「これ、賄賂になっちゃいますかね？」

と、上げた人間が言う。

「さあ？ 純粋な好意を受け取る自由を束縛する法律なんて、私は知りませんけど」

と、もらった人間が言う。

「私もそんな法律、契約してませんね」

穂波は、クスツと笑った。
八尾比丘尼は、契約？と、首を傾げる。

「じゃあ、私はそろそろ」

「ええ、引き止めて申し訳ありませんでした。どうぞ自由に、授業参観をお楽しみ下さい」

「安心して下さい。言われる前から、楽しんでます」

穂波は、八尾比丘尼に一礼してからクルツと方向転換、「らんらんらーんっらんらんらーんっらんらんらーんっらんらんらーん」と、田舎道を口ずさみながらスキップして去って行った。

「……………」

自由な人というか、生きる事を楽しもうとしてる人だな。

と、穂波の後ろ姿を見送りながら八尾比丘尼は思った。

9時10分〜職員玄関〜

4 - 3 . 朝 説明と自由と契約と（後書き）

八尾比丘尼のガーデニングマスターとは私のことだ！！
花畑絵画が辞書にあげられました。出番はねえけど。

なんか、『ら』ばっかり書いてたら、らがゲシュタルト崩壊した。
らがらに見えなくなるー。
らららららららららー。

また次回なのらー。

4 - 4 ・ 一時間目 嫌がらせ

9時10分～2 - B

「……………」

秋春守は数学の授業を受けている。

その表情は真剣そのもの。いつもよりも、真剣なくらいだ。

しかし、授業には全く集中出来ていない。先程から無意味に鉛筆を回してばかりで、教師の話なんて全く聞こえていない。

今の守の頭の中は、母親の事でいっぱいいっぱいだ。

いや、それだけだとまるで守がマザコンみたいな気がするが、勘違いしないでいただきたい。秋春守の名誉の為にもしっかりばっちりと書いておくが、秋春守はマザコンではない。

ただ、南奈美よりも母親、南穂波を警戒しているだけである。

守は確信していた。

あの人が普通に授業参観に参加するわけがないと。

守は両親が離婚してから、かれこれ四年間、穂波に会っていない。会っていないが、何も変わっていないだろう。穂波が変わるとは、守には思えない。それはもう、信頼に近い感覚だ。

きつとあの子は生まれた時からあんな感じで、死ぬ時もあんな感じなんだろうな。そう思うと、不思議と苦笑いが浮かぶ。

「……………」

すぐに苦笑いを引つ込め、真剣な表情に戻る守。鉛筆の回転速度が上がるのと比例して、守の思考速度も上がる。席が近い香川智弘が、秋春君、ペン回しすご！と思っっているが、守が気付くわけもない。

忘れもしない小学校一年の初めての授業参観。穂波は最初、普通におとなしくし、授業を参観していた。しかし途中から、穂波が授業をしていた。授業が終わった時、生徒からも保護者からも、そして交代した教師も拍手喝采だった。奈美はそんな母親を尊敬の眼差しで見えていたが、守は幼いながらも、うちの親、おかしくね？と思っただものだ。その日家に帰った後、守が必死にお願いし、二度と授業参観であんな事はしないと約束を取り付けた。ちゃんと契約書も作成したから、今日来たとしても、授業を乗っ取るような真似はしないはずだ。

「……………」

鉛筆は加速する。

しかしまさか来るとは。去年は来ていなかったから安心して安んじ、というか油断していた。あの人は僕に関心がないだろうという、油断。甘かった。あの人は、おもちゃは捨てても離さない人だった。若葉枯葉から伝言を受け取る前までだったら、自分のところには来ないだろうと楽観視する事ができた。しかし、しかしあの奈美が伝言として伝えてきたという事は、来る。お前のところに確実に来るから注意しろという事だ。

「……………」

鉛筆はさらに加速する。

問題はいつ来るかという事だ。恐らく授業参観を知ったのは金曜日の夜。奈美がしくじったのだろう。あいつは頭がいいが、甘い。あ

の人はそこがお気に入りに入りたいだ。
あの人は会社でも、重要な役職についていたはずだ。昔、お母さんは会社で陰の取締役と呼ばれているのよ。と言っていたから間違いない。という事は、急に休みは取れないだろう。取れたとしても半日。つまり来る可能性が高いのは、午後からだ。午後の方が入れる時間も長いし、恐らくあの人は若葉枯葉の保護者にも会う気のはず。あちらはいつ来るかはわからないが、今も保護者が誰もいない事から推測出来るように、たいていの保護者は午後に来る。つまり、今、僕が取るべき最良の手は。

「…」

鉛筆の回転が止まり、守の思考も結論に辿り着く。

来る前に帰る。それがベスト。三時間目、いや、念のために二時間目が終わったら帰ろう。

守がその結論に達し、久方ぶりに笑みを取り戻した時、教室前方の扉から、懐かしい顔が教室を覗き込んだ。

「なっ」

「あっ」

目が合った。

ニヤリと相手は笑った。

守は固まった。

「やつほー守。元気してたー？」

南穂波は授業中でも関係なく、話しかけ、手を振ってきた。

ボキッ。

教室中が静かにざわめく中、守の鉛筆が、真っ二つに折れた。

9時20分〜2-B〜

保護者の方は後ろに。と、教師に促され穂波は後ろに移動した。その為、守の視界から穂波は見えなくなったのだが、守には穂波が、今、一生で一番楽しんでます。人を虐める事を。というように、ニヤニヤ笑っているのが目に見えるようだった。

「……………ああ」

守は机を見つめながら嘆息。幸せが逃げていく。

まさか一時間目から来るとは思わなかった。どういう事だ？まさか奈美の奴、事前に教えていたのか？いや、それはないだろう。じゃあ、なぜに？会社、クビになった？それはないか。

というように、守の頭の中はハテナがいっぱい。

守がなぜ、穂波が年間予定表を記憶していたという可能性に辿りつけないかというと、校長プリントをちゃんと読んでいないからなのだ。授業参観か。と、タイトル読んですぐに捨ててしまったのだ。プリントはちゃんと読もうね。

「……」

ふと、守は教室の中央付近を見る。

そこには、机に突っ伏して寝ている、いや、この場合は顔を隠している、枯葉の姿があった。

そんな枯葉を見て、見つかりたくない気持ち、わからなくもない。

と思う守。そして、なるほど、寝てしまえばこれ以上被害を受ける事はないじゃないか。と思い立つ。

というわけで、守は机に伏せた。

「守！ 授業中に寝るような子に育て覚え、私にはない！」

というわけで、後方から激が飛んだ。

教室内がざわめくなか、守は静かに拳を震わせた。

あんたに育てられた覚えがねえ。

9時40分〜2 - B〜

「……」

守は授業が終わって欲しくなかった。

終わったら色々面倒になるからだ。さつきから、チラチラとこつち
を見てる奴らいるし。あの人が休み時間になつたらいなくなると思
えないし。

それなら、真面目に授業を受けていれば被害を受けない今が、ずつ
と続いて欲しい。守はそう思った。

「じゃあ、この問題を……」

と、教師が言った。

「守にお願いしましょう」

と、穂波が言った。

教室内がざわざわではなく、がやがやになった。

「じゃあ、秋春。頑張れ」

「……はい」

守は速く、授業が終わって欲しかった。

4・4・一時間目 嫌がらせ（後書き）

守、お前じゃダメだ。

お前じゃどんなに頑張っても穂波さんには勝てねえ。

だって穂波さん、作者鼻肩されてるもん。

また次回。

4 - 5 ・ 休み時間 - 1 本当の目的は？

9時50分〜2 - B

キーンコーンカーン

チャイムが鳴った。「じゃあ、終わり」と言っただけで教師はさっさといなくなった。授業は終わった。

「守ー。こっちおいで」

しかし、秋春守の苦悩は終わらない。苦悩を生み出す存在そのものが、手招きして呼んでいるのだから。

「……………はあ」

守に、この呼び出しを無視するという選択を選ぶ事は出来ない。なぜなら、無視した方が酷い事になるのは目に見えているからだ。恐らく無視すると『私は悲しい！ 小学校一年のあの日あの時あの場所でお母さんの事を忘れませんっていう契約を交わしたのに！ あの日の涙は嘘だったのねー！』という感じで、回りに伝わらない感じで辱めてくるに違いないのだ。やる事が陰湿だ。

「やつ、守。久しぶり」

守が正面までやってくると、軽い感じで挨拶してくる南穂波。さすがにこの母親の前でも、作り笑いを浮かべていられる程、守は強い人間ではない。あからさまに嫌そうな顔で相對する。

「久しぶりです。申し訳ないですけど、守って呼ぶのやめてくれませんか？」

「つまりそれは私に秋春と呼べと？」

「そうです」

「嫌よ。私、秋春っていう名字嫌いだから」

ふーんだ。って感じで平然と言う、元秋春穂波。

「僕は守って名前が嫌い何ですよ」

はあ。と、嘆息。

「つまりどっちが我慢するかという勝負ね」

「そうですねえ」

「にやはは、しかし既に勝負はついているのだった」

そう言つてマイバックからクリアファイルを取り出し、一枚の紙を守の眼前に突き出す穂波。そこには『生涯、南穂波が私、秋春守の事を『守』と呼ぶ事を許します』と書いてあり、『あきはるまもる』と、幼児が書いたような下手な字でサインがしてあった。その横には『丁寧に子供の手形が。』

「……全然記憶にないんですけど」

いつのだよこれ。

「あなたの記憶になくても私の記憶、そしてこの書類にしつかり刻まれてるから問題無しなのよ。じゃ、私は守って呼ぶからねー」

勝ち誇りながら、クリアファイルをマイバックに仕舞う穂波。

「守は私をお母さんと呼んでいいのよ？」

ニヤニヤ。

「遠慮しときます」

「あら残念。心の契約も無効なのね。社会的には既に私達赤の他人だし、心の契約が不成立なら、私達完璧赤の他人じゃない？」

クスクス。

「……冗談はこのくらいにしませんか？」

ホント、この人と話すのは疲れる。

「冗談なんて酷い事言うじゃない。私は久しぶりに会った息子と心の交流を取ろうと必死に頑張ったのに……」

おおよと泣き真似をする穂波を無視して、守は教室中央で、こつちをちらちらと見ている一人の男子生徒を指差した。

「あれが若葉枯葉だよ」

守のその言葉を聞き、穂波を瞬時に泣き真似をやめ、若葉枯葉を見

る。ロックオン。

「ヒッ……」

にやあと笑う穂波と、バツチリ目が合った枯葉は身の危険を感じたのか、逃げるように教室から出て行った。逃げるようにはなく、逃げた、が正しいかもしれない。

「追わなくていいの？」

というか、追え。さっさといなくなれ。

「もちろん追うわよ？でも、奈美から少なからず話は聞いてるから、逃げる先くらいはわかってるのよ。そんなに急がなくても問題無し。もう少し、守とお喋り出来るわ」

母親のような笑みを浮かべる穂波。笑うのが下手というわりには、色んな笑いが出来るなど、守は関心した。

でも、その母親のように慈愛に満ちた作り笑いは、気持ちが悪いからやめて欲しい。

「学校はどう？ 家事の方はちゃんとしてる？」

「学校は普通。家事は父さんが出来ないから仕方なく」

「ああ、あの人はダメでしょうね。苦労かけるわね、守」

「……」

そういう状況を作った本人が、どの口で。

「睨まないでよ、怖い怖い。その目つき、誰に似たのかしら？」
あなたに、似たんだよ。

「変わらないわねえ、守。私があなたと会話する為に呼んだんじゃなくて、若葉枯葉が誰か聞く為にあなたを呼んだ事がわかるくらい、冷たい思考が出来るのに、たまに人間身溢れるのよね。中途半端よ。突き抜けるなら突き抜けなさい。私をお母さんと呼ばないと決めたら、その方向で突き抜けなさい」

クスクスと、笑いながら説経ねうような物をする穂波。本気なのか本気ではないのか、よくわからない。

「……………用事が終わったなら早く行った方がいいんじゃないですか？」

守は作り笑いを穂波に向けた。

「そうさせてもらおうわ。じゃ、守。また後でね」

そう言って、穂波は軽やかな足取りで教室から出て行った。

「……………はあ、しんどい」

こうして、穂波と守、約四年ぶりの親子の会話は終わった。
穂波の去り際の言葉に嫌な予感がしつつも、とりあえず疲れた心を癒すため、自分の席に向かう。

「秋春君、今の、お母さん？」

「おいおい秋春。お前の母ちゃん、わけえなおい。そして、なんかすげえな」

席に座ると、友人香川智弘と、元友人山口が話しかけてきた。

相手にするのは面倒なので、守は席を立ち、移動。

「おいこら無視か」「お、落ち着いてよ山口君。なんか色々疲れてるみたいだからそつとしておいてあげよ?」「バカだな香川。こういう時は、逆に茶化してやった方が、気楽になんだよ」という会話を聞き流しながら、青森翼の横に座る守。

翼は、すでに次の授業の現文の準備を終え、いつも通り、本を読んでいた。

守の母親について何も聞いてはこない。誰にも話しかけて欲しくない時、翼の近くは大変居心地がいい。

と、翼が本から顔を上げ、守を一瞥した。

「ご愁傷様」

他人に興味がない青森君にまで、同情される程、僕は可哀相な立場なのか。

守は、天を仰いだ。

そこには何の答えも書かれてはいなかった。

9時55分〜生徒棟三階東階段踊場

「ちよつとそこの鈴なあなた」

「鈴ですか？」

守との会話を終えた穂波は、枯葉を追いかけていた。

その途中、奇妙な少女とすれ違った。高校生には見えない低身長で、至るところに鈴が付いているワンピースを着て、手には国語辞典を持っている。

鈴を付けている、低身長な少女。もしかして……。と思い、穂波はその少女を呼び止めた。

「もしかしてあなた、鈴乃音鈴音？」

「鈴音は鈴乃音鈴音です」

「ああ、やっぱり」

指パッチン。偶然に感謝。

「？」

鈴音は、自分が見知らぬ人に呼び止められた理由がわからず、頭にハテナマークを浮かべていた。

「あつ、私、南穂波っていうの。鈴乃音さん、南奈美って知ってる

？その子の母親なの」

「鈴音は南奈美を知りません」

鈴音は無表情のまま首を横に振った。穂波は、「そっかそっか」と頷く。聞いていた通りのようだ。

「鈴乃音さんに会えたら、お詫びしないといけないなと思ってたのよね。あなたは覚えてないみたいだけど、色々、奈美が迷惑かけたみたいだからね」

「鈴音にはよくわかりません」

「わからなくてもいいのよ。私の気分の問題。はい、これ」

穂波はマイバックから『ぴよこ』を一箱取り出した。

「鈴音は知らない人に物をもらっちゃいけないと言われてます」

しかし鈴音はいい子なので、受け取るうとしない。

「知らない人じゃないでしょ？ 私は南穂波。はい、リピートアフターミー。あなたは、南穂波です」

クスクスと笑う穂波。おもしろい子。

「鈴音は英語わかりません」

と、鈴音が言った時、キーンコーン、二時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「鈴音は行きます」

「まあ待ちなさい」

教室に向かおうとする鈴音の肩を掴み、止める穂波。

「これ、受け取って？大丈夫よ、毒なんか入ってないし、これを受け取ったら、何か契約を結ばないといけないわけじゃないんだから。全然安心でしょ？」

「鈴音にはよくわかりません。離して下さい」

「受け取ってくれるまで離しません」

「鈴音は知らない人からは受け取らないの！！」

「だから私は南穂波。あなたは鈴乃音鈴音。名前を知らない仲じゃないから受け取りなさいってば」

「鈴音は南穂波なんてわからないの！だから受け取らないの！」

「じゃあ教えてあげましょう南穂波という人間を！」

「鈴音は教えてあげられたくないの！」

「じゃあ受け取りなさいな！」

「鈴音は受け取らないの！」

二人とも半ば意地になっていた。

鈴音は、知らない人から物はもらっちゃダメというのを愚直に守っていて、穂波は、最初に言った通り自分の気分の問題だ。このまま渡せなかったら、気持ち収まらない。

「何してるんですか」

そこにやって来た人物。

「いつまでも戻って来ないと思ったら……何してるんですか、行きますよ」

三途舞歌である。

「舞歌、この人よくわからないの！」

鈴音は舞歌に助けを求めた。

「……私の方がわかりませんよ」

舞歌はそう呟きながら、鈴音の肩を掴んでいる穂波を睨んだ。

「もう授業が始まっているので、そいつ離してもらえますか」

「そうしたいのも山々なんだけど、この子がこれを受け取ってくれないのよね……」

穂波は舞歌を、見た。背が高い。長袖。普通？

「あなた、この子の友達？」

「…………ええ、まあ」

不承不承といった感じで頷く舞歌。

「それならこの子の代わりに受け取ってくれる？」

鈴音の肩から手を離す穂波。鈴音は、すぐさま穂波から距離を取り舞歌の後ろに隠れた。

「私、南奈美の母親なのよ。奈美とその子、去年色々合ってたね。それのお詫びとして、これを上げようと思ったんだけど、その子なかなか受け取ってくれなくて。だからあなたが代わりに受け取って。その子と一緒に食べちゃって」

そう言つて、舞歌に『ぴよこ』を両手で差し出す穂波。賞状授与。舞歌は最初、警戒して取ろうとはしなかったが「受け取らないと、逃がさないわ」と、不敵な笑みを浮かべる穂波を見て、何かを悟ったのか「はあ…………わかりましたよ」と言つて、受け取った。

両手で。

「…………」

穂波は、袖から見えた舞歌の左手首の傷を、見逃さなかった。

「ほら、行きますよ。先生がもう来てたら、あなたのせいで私まで遅刻じゃないですか。どうしてくれるんですか？」

「あなたじゃないの鈴音なの！」

「勉強頑張つてねー」

さっさと授業に向かい始めた二人の背に手を振る穂波。

新しく得た情報をどうするか。

穂波はまだ、考えてはいない。

10時05分、生徒棟三階東階段踊場

4・6・二時間目 逃走と捕獲と追跡と

9時50分～図書室

「なんかよくわかんねえけど身の危険を感じたから逃げてきた！」

「正しい判断です」

慌てて図書室に入ってきて、重要な部分が足りてないような事を言ってきた若葉枯葉に対して、南奈美は何も聞かず、頷いた。

こうなる事をなんとなく予想はしていた。

「お母さんが、もう来たんですね？」

「来た！ よくわかんねえけど間違いなく乱入して来た！ 俺はあいつの事あんまし好きじゃねえけど、なんか同情してしまった！」

「とりあえず枯葉君。落ち着いて下さい。ここ、図書室です。後、そごどいて下さい。本借りる人の邪魔です」

「お、おお………すみません」

奈美の落ち着いた様子を見て、枯葉も落ち着きを取り戻した。とりあえず、後ろに立っていた人に場所を譲る。後ろにいたのは鈴だった。

「鈴音はこれを借ります」

とって、鈴乃音鈴音は国語辞典をカウンターに置いた。

「こちらにクラスと名前を。国語辞典の返却は、今日中をお願いします」

奈美は辞典などの特別な貸し出しの時に使うノートを取り出した。

「鈴音はわかりました」

そういえば、次の授業は国語辞典が必要何だっけ。と、枯葉は鈴音がノートに名前を記入してる姿を見ていたら思い出した。すっかり忘れてた。俺も借りようかな。

「鈴音は書けました」

「はい、結構です」

「ありがとう」

鈴音は国語辞典を抱えるように持って、図書室を出ていった。

「……」

鈴音の姿をしばらく目で追った後、奈美は立ち上がった。

そしてカウンターの後ろにある司書室で寝ている小梅杏に「先生、私、席を外すのでカウンターよろしく願います」と、一応声をかけた。小梅は、うんでもすんでもなく「すー、すー」という返事を返した。「すー、すー」という寝息を立てた、でも間違いいではない。

「じゃあ、枯葉君。逃げましょうか」

そして、ぼけーっと突っ立っていた枯葉の手を取り、歩き始めた。

「……は？」

引っ張られながら、は？

「は？ じゃありません。早くしないとお母さんに捕まりますよ。捕まったら、守の二の舞です」

秋春守に何があったのか、奈美は知らないが、だいたいは察する事は出来る。恐らく授業中に大声で応援とかされたんだろう。

「え、いや、でも、俺、授業が……」

それは嫌だなー。と思いつつも、やっぱり授業って大事だよね？と、やんわりと奈美に抵抗する枯葉。

「別にどうしても行きたいならいいですよ？ ただし、授業に行く」と、奈美の彼氏の若葉枯葉頑張れー。という声援を受けると思いますが。まあ私としては、それは何も嫌な事じゃないですけど、枯葉君的にはどうなんですか？」

歩きながら、もし授業に行った場合の可能性を語る奈美。

「……授業、諦めます」

一時間目のあの様子じゃ、ホントにやりそつだ。

「ムカつきました。キスしていいですか？」

周りに彼氏って思われるのが嫌なのか。今ここでキスして周知の事実にするぞ。という意味です。
奈美は立ち止まり枯葉を睨む。本気だぜ。

「……お前、なんか色々不安定だな」

頼れるのがこんな奴しかいないなんて……ああ、早く友達が欲しい。

枯葉はそう思いながら、「って、顔を近づけるな！手が痛い！」と、奈美から必死に逃げるのでした。

10時00分、職員棟二階西階段付近

10時10分、図書室

「ふんふんふん」

南穂波は機嫌よさ気に歩いている。

来て早々、校長にも会えたし、鈴乃音鈴音にも会えた。なかなか幸先がいい。

「無事守にも、久しぶりに会えてからかえたしね」

クスクスと、久しぶりに会った息子を思い出し、笑う穂波。

全然変わっていなかった。というわけではないが、根っこの部分は変わっていなかったようだ。色々と諦めているようで、諦め切れていない。

守は、穂波が教室に来て自分に話しかけたのは、若葉枯葉が誰かを聞きに来たのが目的だと思っていた。自分の近況を聞いた事や、なかったのは全てついだと思っていた。

「二つの優先順位には、六対四くらいしか違いがないのにねー」

まだまだ子供ね。

とかなんとか、息子について考えていたら、穂波は図書室についた。

穂波がなぜ図書室に来たかというのと、枯葉を追ってきたのだ。

なぜ枯葉が図書室に行ったかわかったかというのと、奈美が「枯葉君は私しか頼る人がいないんですよ」と、食卓で嬉しそうに言ったからだ。そして奈美がいる所は図書室。

というわけで図書室。そして奈美はきつと枯葉に授業に行けとは言わないから（奈美は自分が授業に出てないから授業の優先順位が低い。いざとなったら自分が教えればいいし）まあ、図書室にいるだろう。と、穂波は考える。と、奈美は考えるだろう。

「ふふふ、奈美が賢くてお母さんは嬉しいわ」

ニヤニヤと、案の定、枯葉も奈美もない図書室で笑う穂波。

授業中という事で、図書室には生徒はいない。穂波は、学校の図書室、懐かしいわー。と思いつつ、図書室内を歩く。たまに本を取っ

てぺらぺらとめくる。なるほどなるほど。奈美がいつもいるところはこういうところか。

「失礼しまーす」

しばらく図書室内を探索した後、穂波は今回の目的の場所、司書室に入った。

そこには毛布を被り、「すー、すー」と規則正しい寝息を立てて寝ている女性がいた。

「気持ち良さそうねー」

全く起きる気配がない女性を穂波をそう評した。

司書室には他に誰もいないし、奈美の話から考えると、まあ、この人に間違いないかな。

というわけで穂波は、「いい大人が昼間から寝てるんじゃないません！」と、教師に向かって教師っぽい事を言いつつ、寝ている女性、小梅杏の頭を叩いた。三回ほど。

「寝てない!?!」

すると、明らかかな嘘を叫びながら、小梅が飛び起きた。

「……あれ？ 猫先生かと思ったけど……誰ですかあなた？寝ていいですか？」

そして傍でニコニコ笑って立っている穂波を見て、首を傾げた。

「まだダメです。どうも初めまして。私、南奈美の母の南穂波です」
握手を求める。

「あ、そうですか。そういえば目が似てなくもないですね。寝ていいですか？」

握手に応じて許可を求めた。

「もう少し我慢して下さい。これ、いつも奈美がお世話になってるお礼です」

ユニークな人なこと。と思いきや苦笑しつつ、穂波はマイバックから『雷叩き起こし』を取り出した。マイバックはマイバックである。四次元マイバックではない。

「あ、どうも。寝ていいですか？」

小梅は特に考えるそぶりも見せず、穂波から『雷叩き起こし』を受け取り、許可を求める。

「ええ、どうぞ。私の用は終わりました」

「そうですか。じゃ、おやすみなさい」

『雷叩き起こし』を机に置き、自分はその横に顔を伏せる。睡眠体制。

「おやすみなさい」

クスクスと笑いながら、穂波はすでに寝息を立て始めた小梅にそう声をかけ、図書室を後にした。

さて次は、保健室か。

10時30分～図書室

4・6・二時間目 逃走と捕獲と追跡と（後書き）

あ、この小説の舞台は首都ではないです。はい、それだけは確かです。

穂波さんが首都っぽい食べ物ばかりだすのは、特に意味ないです。はい、それだけは確かです。

4・7・二時間目 同種

10時10分〜保健室

「失礼します」

「はいはい、どちらの南様ですかー？」

背後から聞こえた扉が開く音と声にテキストに答え、猫猫は読んでいた個人情報用紙に仕舞い、くるくる椅子をくるくる回して後ろを向いた。

そこには予想通り南奈美の姿があった。

「あらら……？」

しかし予想外な事に、奈美の隣には疲れた顔をした若葉枯葉がいた。しかも二人は仲良く（奈美が枯葉と無理矢理腕を組んでいるようにも見えるがとりあえず仲良く）腕を組んでいた。

ふむ、あの腕もしかして……。

その光景を興味深く観察した後、猫猫はニツコリ笑った。

「ベットは三つとも空いてるから好きに使っていいわよ」

若さね。

「じゃあ枯葉君、右側のベットを使いましょう」

優しくしてね。

「お前ら何言ってるの……?」

馬鹿?

「冗談を言ってるのよ」

「冗談に決まってるじゃないですか」

「……はあ」

という軽いやり取りをしてから、奈美と枯葉は椅子に座り、猫猫から番茶をもらい、一息ついた。

「で、奈美ちゃんは、まあいつもの事だけど、枯葉君、授業はどうしたの?」

「いや、まあ色々あってサボったんですけど……ああホント……何で俺は授業に出なかつたんだろう……」

授業出た方が、精神的ダメージは少なかつた気が……。

「んー、よくわからないけど、まあいいじゃない。奈美ちゃんの胸の感触を味わえたんだから、結果オーライじゃない?よかつたな青少年」

猫猫のその言葉に、枯葉はバツと顔を背け、奈美は「むっ!?!」と湯飲みを落とした。

猫猫は、拭く物拭く物と席を立ち、奈美は「かかかか枯葉君?」

と顔が真っ赤で、枯葉は「いやだから俺はやめる離れる離してくれ許してくれそれが俺の為でありお前の為でもあるんだって言ったのにお前は聞く耳を持たなくてなんかよくわかんねえ事ばかり言ってやれ愛し合ってる二人が腕を組むのは当然だとかそれが嫌ならキスだとかだから俺はあの状況に短時間ながらも甘んじていたわけでそもそも感触とか服とかであれだからなんか当たってるなくらいでもしかしてあれなのかなとか思ったけど別に柔らかいかもなかったから全然どうも思わなかったしなんら疚しい気持ちになったりしなかったからあなたは許してくれるだろうし私は悪くないだろうし神様だつて許してくれると信じて祈ってます」と早口で呟いていた。猫猫は湯飲みの破片を拾いながら、今度の休日新しいの買いにいこ。と思い、奈美は「~~~~っ！」と声にならない叫びを上げながら枯葉の頭を叩き始めて、枯葉は「痛い痛いごめんなさい！」と平謝り。

「仕方ないわよ奈美ちゃん」

掃除を終えた猫猫は、二人のほほえましい（当事者は必死な）光景を見て一言。

「奈美ちゃん育ってるんだもん。そう、私が妬ましいくらいに」

奈美は「~~~~っ！！！！」無言で絶叫して枯葉を殴り続き、枯葉は「お前もう黙れー！！」と防御しながら猫猫に激怒した。

枯葉が記憶を失うまで続くのではなからうかと思われた奈美の攻撃は、猫猫の「枯葉君が、見てるわ。奈美ちゃんの胸を」という言葉で終わった。

奈美は「もう枯葉君のお嫁にしかいけな〜い！」という恥ずかしがってるのか嫌がってるのか嬉しがってるのかよくわからない事を言いながら、カーテンで仕切られたベットの一つに隠れてしまった。枕を殴る音と、時折聞こえてくる「逆に枯葉君が私に興味があるって事だからというかそもそも取り乱す事でもないような気が……」というような呟きから察するに、冷静になろうと努力しているようだ。

取り残された枯葉は猫猫に、かくかくしかじかと、どうして自分が授業に出ていないかという事と、断じて自分は意識してはおらず故意ではなかったという事を説明した。説明にかけた時間が後者の方が長かったのは、仕方がない事だ。授業に出なかった理由は、「南さんの母親から逃げて来ました」で終わるのに対して、「いや、だから俺はそんな意識もしてないしそもそも言われるまで気付かなかつたし、いやいやいや、それにしても反応が早かつたって違つて断じてあれだつてこれだつてそれだつて」と長々説明しないといけないのだから。だから、枯葉が必死に言い訳をしていたわけではないと信じて下さい。

「私会った事ないんだけど、奈美ちゃんのお母さんって、どんな人なの？逃げる程の人なの？」

興味津々。

「いや、俺も直接話したわけじゃねえっすからよくわからないですけど、なんというか、先生に似てなくもない」

どこがとは言わないが。

「私に？つまり若いつて事ね！」

まだ私二十代。

「いや、人をからかうのを生き甲斐にしてそんな所が」

言わずにはいられない。

「なるほど。つまり枯葉君は、授業に行った場合でも保健室に行った場合でも、似たような人間にからかわれる結果が待っていたのね」

「ああ……確かに」

「枯葉君がからかわれるのは、避けられない結果だったのよ。運命ね」

「笑顔で語られるようないい運命じゃねえ……」

絶望だー。

「まあ確かにそうかも」

クスクスと、苦悩している枯葉を見て笑う猫猫。 頑張れ青少年。

「枯葉君、奈美ちゃんに騙されてない？」

「騙されてる？」

「そう。奈美ちゃん、お母さんをだしにして枯葉君を引きずり回したいだけかも。実は二時間目出てたら、今より平和だったかもよ？」

「……いや、何でそんな事を？」

何で奈美がそんな事を。という問い。返って来る答えはわかっているけど、聞いてみる。

「好きだからじゃない？好きな人と授業をサボって歩き回る。なかなかの青春ね」

「……っえ」

好きだから。

予想通りのその答え。枯葉はうんざりといった表情を浮かべた。

「その答えじゃご不満？」

そんな枯葉を見て、クスツと笑う猫猫。まだまだ若いな。

「不満っつーか、聞き飽きたっつーか……」

なんていうか……。

まだ奈美が出て来る気配がないのを確認してから、枯葉は小声で言った。

「好きだからとか愛してるからとかそれが全てとか……それだけで行動出来るって、怖くないですか？」

というより、気持ち悪い。

「怖いね」

枯葉のその言葉を聞き、猫猫は優しく微笑んだ。

子供ね。

「枯葉君！」

と、奈美がベットから現れた。

「はい!？」

聞こえてた!？とビビる枯葉。

「そろそろ行きますよ」

しかし枯葉の怯えをよそに、奈美は至っていつも通り。まだ少し頬が赤いが、冷静さを取り戻したようだ。

どうやら聞こえていなかったようだ。枯葉はホッとした。

「行くなって奈美ちゃん、どこ行くの?」

「どこじゃないどこかです」

「訂正。行くなって奈美ちゃん、今来たばかりなのに、もう行くの?」

「はい。そろそろお母さんがこっちに来るはずです。授業に枯葉君

がないとわかって、図書室に行って、ここです。ほら、逃げますよ枯葉君」

「えー……なんかもうよくね？」

「よくないです。おもちゃにされますよ。ほら、早く」

奈美は枯葉の腕を掴み立たせ、そのまま引つ張るように入ってきた扉ではなく、グラウンドに出る扉に向かった。

「枯葉君」

もう、流されるまま。という枯葉に猫猫が声をかけた。

「奈美ちゃんをよろしくね？」

「……遠慮したい」

枯葉はそう呟きながら、奈美に引つ張られ保健室から退出した。

「……怖いというより、気持ち悪い、ね」

一人になった保健室で、猫猫は先程の枯葉の『怖い』の裏にある気持ちを抱いた。

二人が来るまで読んでいた個人情報を机から引き出す。

『新月満』

そこには今度転校してくる少女の、枯葉がそう考える原因を作った少女の名前が書かれていた。

10時30分〜保健室

4・7・二時間目 同種（後書き）

で、どうなの？ 実際腕組んで当たるとかあるわけ？

いや、あれだよ？ 作者が暴走してるわけじゃないよ？ 南家の一族が暴走してるんだよ？

また次回とでも言おうと思ったかー！。

4・8・二時間目 全ての答えは笑みの中

10時35分〜保健室

「失礼しまーす」

「はいはい、どちら様ですかー？」

背後から聞こえた扉が開く音と声にテキストに答え、猫猫子猫は読んでいた個人情報に仕舞い、くるくる椅子をくるくる回して後ろを向いた。

そこには見知らぬ女性が立っていた。

「私は常々思ってます」

急に語り出した。

「はあ、どんな事を？」

とりあえず、のってみる。

「失礼しますと言いながら入ってくるのは失礼ではないか、と」

「まあ確かに失礼と知ってるくせに入るわけですからね。倍失礼かもしれませんねー」

「というわけで、入る時には、失礼なら失礼って言ってよ！私、それなら諦めて出て行くから！と言って入るべきではないでしょうか」

「……じゃあどござい」

「では」

と言って見知らぬ女性は一旦保健室を出た。

10時36分、保健室

「失礼なら失礼って言ってよ！私、それなら諦めて出て行くから！」

「はいはい、別に失礼じゃないですから諦めて出て行かなくていいですよー」

背後から聞こえた扉が開く音と声にテキストに答え、猫猫子猫は読んでいた個人情報用紙を机に仕舞い、くるくる椅子をくるくる回して後ろを向いた。

そこには予想通り、見知らぬ女性がいた。

「で、あなたが奈美ちゃんのお母さんですか？」

よくわからないけど変なコントに巻き込まれた後、ようやく猫猫は、素性を確認出来た。とはいえ、確認するまでもなく恐らく奈美の母親だらう。目元が似てる。

「ええ、はい。南穂波です。噂によると私とあなたはキャラが被ってるらしいので、ファーストインパクト、頑張りました」

見知らぬ女性、南穂波は達成感に満ち溢れた笑顔で、ブイサインしました。

「……ああ、なるほど」

猫猫はそんな穂波を見て、納得しました。

これは枯葉君が逃げたくなるという気持ちも、わからんでもない。

「あっ！」

唐突に穂波が声を上げた。

「どうしたんですか？」

「いまさらですけどあなたが猫猫子猫先生で言いんですよね！？白衣着てるから間違いないと思ってましたけどよくよく考えたら化学の先生の可能性も!?!」

唐突に穂波が警戒し始めた。

「……いえ、猫猫子猫であってます」

なにこの人！

「よかったー。どうぞよろしく。いつも奈美がお世話になっています」

穂波はホッと胸を撫で下ろし、猫猫に握手を求めた。

「……………失礼ですけど、おいくつですか？」

握手に応じながら、猫猫は穂波の年齢を尋ねた。尋ねずにはいられなかった。奈美の年齢を考えれば、穂波の年齢は若くても三十代後半。しかし、外見は何だか自分と同じ年に見えるし、このテンションは若さを感じる。

「女性に年齢を尋ねるなんて、ダメだぞ」

叱られた。

「……………ですよねー。あ、お茶いれますねー」

猫猫は愛想笑いを浮かべながら、席を立ち、お茶の準備を始めた。

「あつ、お構いなくー」と軽い調子の穂波の言葉を背後に聞きながら、猫猫は、このままではやばいと思っていた。

そう、このままではやばい。私の立場が！

今の所、完全に穂波さんペースだ。このままではやばい。枯葉君が言ったように、穂波さん本人も言ったように、なるほど。キャラは似ている。穂波さんも私も、いわばからかいキャラ。立ち位置は悪戯っ子。おちゃらけ係。

キャラ被りは最大の禁忌！

このままでは、このままでは……………ぼつと出のキャラに立場を追いやられてしまっー！

「……よしー！」

猫猫は気合いを入れた。

先手を取られたが、勝負はまだまだこれからである。

「はいはいお待たせしましたー。粗茶ですけど、私の気合いが入ってますので味は格別、保証します」

「むっ……」

猫猫の輝くような笑顔を見て、気を引きしめる穂波。

負けられない戦いが、どこかにはある。今ではないけどね。

「これはどうもどうも。じゃあ、これをお茶受けにするのはどうでしょう」

穂波はマイバックから、どらやきを取り出した。

「これ、いつも奈美がお世話になってるお礼です」

「わっ 私、どらやき好きなんですよー。ありがとっございませー」

「やっぱり、そうじゃないかなあって思ってたんです」

手を合わせて、よかったー。のポーズ。

「ええ。昔から好きなんですよねー」

「猫だけに？」

クスツと笑う穂波。

「はい、タヌキじゃなくて、猫だけに」

穂波と同じように、クスツと笑う猫猫。

穂波の言った言葉の意味を理解出来なければ、返さない切り返しだつた。

「……にやはは、奈美ちゃんに聞いていた通りの人のようね」

穂波は満足気だ。聞いていた通りの楽しい人だ。こういう人が娘の近くにいてくれるというのは、ある意味でいい事だが、ある意味で、悪い事にもなる。

「奈美ちゃん、家で私の話をしてくれるんですか？それは嬉しいなあ」

猫猫は穂波からもらったどらやきを箱から取り出し、穂波に一つ手渡した。

「奈美ちゃんはよく、学校の話をする？」

「こつちから聞くか答えてくれる感じですね。あんまり自分からは学校の事を話してくれなくて、私も困ってます」

「はあ……。と、あからさまに、頬に手を当て、私困ってますのポーズを取る穂波。」

「まあそうは言っても、ここ最近は何も話してくれなくなった方ですけどね。ほとんどは枯葉君の話ですけど」

最近の奈美を思い出し微笑む穂波。
猫猫も微笑む。

「奈美ちゃん、枯葉君に不思議なくらいぞっこんですからねー。親としては、複雑ですか？」

「複雑ですね。娘が恋愛に興味を持ったのは嬉しいですけど、その枯葉君がどんな子かわかりませんからね。心配にもなります」

ホント心配。寿命縮む。という感じの表情を浮かべながら、粗茶を飲む穂波。絵になるね。

「やっぱりですか。という事は、もし、今日、その枯葉君に会ってこいつはダメな奴だと判断した場合は、お母さんはどうするつもりですか？」

返答によっちゃ、敵に回るぜ。

「ダメじゃなかった場合は何もしませんよ？奈美をよろしくねって、言って終わりです。ダメだった時は……」

穂波は、ニヤリと笑う。

「これにサインしてもらって、後、色々と契約を結んで奈美の許容の範囲で改造ですかね」

マイバツクから取り出したるは、婚姻届け。すでに奈美の名前は書かれていた。

「……奈美ちゃん、書いたんですか？」

さすがに引き気味の猫猫。

「あの子、学力は高いけど、頭がいいわけではありませんから。天才にはなれませんよね」

クスクスと、具体的な事は言わず、楽しげに笑う穂波。そんな穂波を見て、奈美ちゃんも大変だ。と、猫猫は思い苦笑い。

「確か奈美ちゃんは、この前の学力テスト、学年で五位には入ってましたね」

「昔からあの子は勉強だけは出来て、あっ！思い出した！」

突然大きな声を上げ、手を叩き、突然思い出しました！という表情を浮かべる穂波。

その全てが演技であると見抜きながらも猫猫は「何を思い出したんですか？」と、微笑みながら尋ねた。

「ええ、猫猫先生に会ったら聞こうと思っていた事があったんですよ。今いいですか？」

下手に出るフリ。

「もちろんいいですよ？」

「猫猫先生はご存知だと思えますけど、私、離婚してまして。奈美になんの相談もなしだったから、離婚した当初は奈美も私に不信感を持ってました」

「それは、まあ……仕方ない事では？」

「ええ、私もその覚悟はありましたから、それは問題なかったです。きつと奈美も数年も経てば心の整理が出来るだろうと思ってましたしね。予想通り、奈美は中学卒業くらいには、離婚する前と同じように私と話してくれるようになりました」

ホント、奈美が私の思った通りに頭がよくて、よかったですよ。

と、穂波は笑う。

「でも、去年。そう去年の今頃くらいかな。奈美がまた急に私と話してくれなくなっただんです。離婚した時よりも、私と接するのを拒んだんですよ」

驚きました。という穂波に対して、猫猫は「難しい年頃ですからね」と、微笑みながら言う。

「そうですね。私もそう思いました。守にも相手にされず、クラスにも馴染めなくて、それを全部私のせいにしたのかもしれないなと思いました。まあ、実際、守については私のせいなんですけど」

穂波は自虐的に笑う。

「ああ、そうそう。奈美が授業に出なくなったのもちょうどそのぐらいじゃありませんでした？」

穂波は猫猫に笑みを向けながら、そう尋ね、猫猫はそれに対してもやはり微笑みながら「ああ、そういうえば、そうかもしれませんね」と、答えた。

「あの子がクラスにうまく馴染めないのは、別に高校が初めての事じゃありません。あの子は、勉強は出来るけど、どうもそういうのが苦手みたいでしたから。私と似た悩みを持っていたからこそ、奈美には念入りに契約について教えたんですよ」

「それが逆効果だったのでは？」

「かもしれませんね」

穂波は認めた。しかし悪いとは思っていないようだ。

「馴染めない事は、まあよくあったんですけど。授業にまで出なくなるのは初めてで、私はホントに驚きましたよ。予想外。奈美の性格じゃ、そういう事はないと思ってたんで、驚きは二倍って感じでした」

「心の機微というのを、完全に把握するのは無理な話です」

「ええ、私もその時は、そう痛感しました。ねえ、猫猫先生。私達みたいなキャラクタに一番つらい事って、何だと思えますか？」

唐突にも思える話題変更。穂波の表情は変わらない。笑っている。目も口も、笑ってる。

「さあ？何でしょう。ちょっとわからないですね」

猫猫も笑っている。穂波同様、笑ってる。

「無視や孤独。それが一番つらいですよ。相手が自分を無視するなら、契約も何にも意味がないんですよ。私達みたいに、人をからかい人をおちよくりで遊ぶキャラクタは、相手がいないのが、一番つらい」

「私は人で遊んだりはしませんよ？」

「だから私も、当時はつらくてつらくて、夜な夜な枕を涙で濡らしたものです」

知られていると知りながらも、惚けているその言葉は、無視しても問題はない。

「それは心中お察しします」

白々しい。

「それでまあ、最近はまだ、私の相手をしてくれるようになって、ホントよかったなあと思ってるんですけどね。奈美に聞いた事があるんですよ。どうして去年はあんなに私を無視したのって？」

「奈美ちゃんはなんて答えたんですか？」

「ええ、やっぱり私に怒ってたみたいで、私が嫌いになってたみたいです。でも、私は不思議だったんですよ。そういう時って、奈美はちゃんと口で言うんですよ。無視するのは奈美らしくないなつて。だから、どうして無視したのって？もう一度聞いたんです。な

んて答えたと思いますか？」

「さあ？皆目見当もつきませんね」

「子猫先生が、その方が効果的だって言ったから」

穂波は笑みを崩さない。

「……」

猫猫も笑みを崩さない。

「そういうお母さんには、そうした方が効果的よ。って言ったらしいですね。いや、ホント、効果的でしたよ？」

「ありがとうございます」

皮肉だ。感謝する時ではないという事は、猫猫も理解している。

「奈美は授業に参加してないのは、授業に出る必要がないからとか言ってますよね」

「ますね」

「でも本当は、クラスに馴染めなかったから」

「ですね」

「でも本当は？」

「……」

二人は笑っている。目も口も、笑っている。

しかし心は笑っているかはわからない。

ただ。

「失礼しまっ!？」

「どしたのなっっ!？」

二人はチャイムが鳴った事に気付かなかった。

そして保健室に入ってきた生徒は、ここ保健室じゃなくて異界じゃね!？と思う雰囲気味わった。

つまりきつと、二人の心は笑みの正反対の表情を浮かべているのだろっ。

10時55分、保健室

4・8・二時間目 全ての答えは笑みの中（後書き）

本当の悪者はだあれだ。

まあ、悪い人なんていませんけどー。

みんな自分が善だと思ってる事をやってるだけなんだよ！本当の悪者なんていないんだよ！

なーんちゃって。

また次回ー。

4 - 9 ・ 休み時間 - 2 ?

10時55分、保健室へ

二時間目が終わり、二人でギャアギャアワーワー言いながら、保健室にやってきた夏季夏美と冬季冬美。

「失礼しまっ!?!」

「どしたのなっっ!?!」

しかしどうやら二人は間違っって保健室ではなく、魔界に来てしまったようだ。
と、思ったら。

「はいはい、どうしたのかしら」

猫猫子猫がいつも通り声をかけてきた。やっぱりここは保健室のようだ。

「え、あの、えっと、あれ?」

保健室の空気が唐突にガラッと変わったので戸惑う夏美。

「お取り込み中だったなら、帰りますけど……」

夏美よりは冷静な冬美。

「別に全然お取り込んでないわ」

「そうそう。ちょっと楽しく世間話していただけよ」

「はぁ……そうですか」

猫猫だけではなく、相手からもそう言われては、冬美はそうかどうかと言えない。というか何で秋春君のお母さんここにいるんだ？

「で、どっちが付き添いでどっちが病人？それとも二人仲良く病気になったのかしら」

「まあ、やらしい」

「ええ、ホントに」

何がやらしいのか全くわからないが、大人な二人はクスクス笑っている。冬美は、二人のノリについてはいけず、「はぁ……？」としか言えなかった。

「あつ！そんなですよ猫っばい先生！私！私が病人！ってか怪我人！」

ここに来た理由を思い出した夏美が、元気よく、私が怪我人であると、アピールした。その姿は、全く怪我人には見えない。

「怪我って、どこ怪我したの？」

「ここ！ここにタンコブが！」

夏美はつむじの横辺りを指差した。猫猫に見やすいように、頭を下

げるのも忘れない。

「冬美に国語辞典で殴られたんですよ！絶対タンコブ出来てる！」

「どれどれ……」

猫猫が診察を始めた。

「殴ってないし。小突いただけだし。タンコブなんか出来てないし」

その隣で冬美が、ないない。と手を振っていた。

「出来てるってば！めっちゃ痛いもん！猫っぽい先生ならわかってくれる！」

夏美はあるといい、冬美はないという。教室でも似たようなやり取りをしていた事が目に浮かぶようだ。

「猫っぽい先生としてはね、タンコブはないという診察結果を下すしかないわね」

そして判決が下った。

「そ、そんな馬鹿な……」

夏美は突き付けられた真実に、動揺を隠し切れない。猫猫から、よろよろと距離を取る。し、信じていたのに！。

「だから行くだけ無駄って行ったでしょ？ほら、帰るよ。授業始まるし」

冬美は夏美の腕を掴んだ。勝手に裏切られた気分浸っている夏美を、引きずるようにして保健室を後にする。

「タンコブがないなんて……私達は一体なんのために、ここに来たんだ……」

「夏美。それ、私の台詞。失礼しましたー」

そんな会話を最後に、夏美と冬美は保健室から退出した。

「仲が良さそうな子達でしたね」

「ええ、あの二人はいつも一緒に、ホントに仲良しなんですよ。まさに親友って感じですね」

退出したと同時に休み時間終了のチャイムが鳴り、何かの開始が告げられた。

4・10・三時間目 ただの世間話？

11時00分〜保健室

夏季夏美と冬季冬美が去った保健室。猫猫子猫はパタパタとスリッパを鳴らしながら、カチャカチャとお茶を煎れ直し、南穂波はよっこいしょと、エコバックから新しいお茶受け（しゃかりこ）を取り出した。

そして二人同時にしゃかりこを一本つまみ、カリカリ食べる。そしてお茶を一口飲み、ほお。と、一服。そしてお互いニッコリ笑って

「さあ、どんな世間話をしましょうか」

「そうですね。何をお話しましょう？」

と、言った。

「そうそう。来月、文化祭がある事をご存じですか？」

猫猫が言う。

「ええ。もちろん。すでに休みをとってあります。今から楽しみですよ」

穂波が答える。

「去年は参加していませんけど、この高校の文化祭はどうなんです

か？」

「穂波さんもご存じだと思えますけど、この高校は自由が特色ですから。その年の生徒会にやる気があれば、大きな文化祭ですし。やる気がないならこじんまりした文化祭になりますよ。今年の生徒会は、んー、そうですね。生徒会長がちょっと躁鬱気味で、どうなるかわかりませんね」

「子猫先生が、やる気を出させればよろしいんじゃないですか？」

穂波はクスクス笑う。

「そうしたいのも山々何ですけど、校長に生徒にあまり干渉するなと怒られてしまいますから、自重します」

猫猫は舌を出して、てへっと笑う。

「そういえば、子猫先生は神様についてどう思いますか？」

穂波は新しい話題を提示する。

「どう思いますか、というのはちょっと曖昧過ぎて答えられませんね……。信じてるかどうですか？」

猫猫は首を傾げる。

「そうですね。まずはそこから始めましょう。私は信じてますよ。神様。私は死ぬまでに神様に会って、契約を交わすのが夢なんです」

穂波は乙女のように目を輝やせて語る。

「神様と契約ですか。それは大それた夢ですね。ちなみに、どんな契約を？」

猫猫は苦笑混じりに尋ねる。

「もちろん。来世でも、私はおもしろ可笑しく幸せに暮らせますように。っていう契約よ」

穂波は自信満々に答える。

「それ、契約じゃなくてお願いじゃないですか」

猫猫はクスクス笑う。

「あら。そんな事ないわ。もし私が来世で、おもしろ可笑しく幸せに暮らせなかつたら、契約不履行として、私は神様をクビにする。ね？お願いなんていう、自分を下に置いた物じゃないでしょ？」

穂波もクスクス笑う。

「そうですね。神様をクビに出来るなら神様より格下じゃなくて、対等、いいえ、格上ですね。ホント、大それた夢」

猫猫は楽しげに笑う。

「じゃあ次は、子猫先生の神様について聞きましょうか」

穂波はお茶を飲みながら言う。

「そうですね……私も穂波さんと同じく、神様は信じてますけど……。私が信じている神様は、穂波さんの言う、願いを叶えてくれたりする神様ではないですね」

猫猫は茶碗のふちを指でなぞりながら告げる。

「そうなの？じゃあ、あなたの信じる神様って、どんな神様？」

穂波は首を傾げて微笑む。

「穂波さんは、自分が小説や演劇の登場人物だと思う事はありませんか？」

猫猫はニヤリと笑う。

「そうねえ……昔はそう思う事もあったわ。にやははー。としか上手く笑えない自分に違和感を感じてた頃は、特に思ってた」

穂波は懐かしそうに語る。

「さすが穂波さん。契約とかよくわからない事言ってるあなたならきつと理解してくれると思ってました」

猫猫は両手を合わせて喜びを表した。

「子猫先生が、漫画や小説だったら マークや マークが語尾に付くような、年齢的にアウトな喋り方や笑顔をするのは、自分が小説の登場人物だと思ってるからなんですね？」

穂波はニッコリ笑う。

「私にとって神様と運命は同義です。私達は神様が作った運命に向かって生きていますよ。あっ、運命は線ではなく点。全てが決まってる。とは、私も思ってますせんよ？」

猫猫は肩を竦める。そこを勘違いしてもらっては困る。

「つまりこういう事ね。私とあなたがここで話す事は運命だけど、話す内容は運命ではない。決められてはいない。っていう事ね。もしくは、二時間目の会話は運命だけど、今の会話は運命ではない。という事かしら？」

穂波は人差し指を立てて、例えて説明する。

「ええ、その通りです。起こるべき事は絶対に起こる。しかしそこまでの道は、自由。その後の起こるべき事までは、自由。まあつまり、アドリブって奴です」

猫猫はしゃかりこをカリカリ食べる。

「私達が小説や劇の登場人物なら、読む人や見る人がいるわけですよ？それも神様が兼用？」

穂波は天井を見上げる。もちろんそこに、自分を見ているモノはいない。

「そうそう。そこがポイントなんですよね。いやあ、穂波さんは話わかりますね。私達、いい友達になれそうですね」

猫猫はニコツと笑う。

「そうですね。私はそうは思いませんけど」

穂波もニコツと笑う。

「もちろん神様も私達を見ているでしょうけど、神様は主に作るだけだと思います」

猫猫は気にせず続ける。

「じゃあ、読んでものは誰なのかしら」

穂波も気にせず続ける。

「それは人それぞれ違うからなんとも。あつ、私の読み手は秘密ですよ。ひ・み・つ」

猫猫はクスクス笑いながら、後ろを振り向く。もちろんそこに、自分を見ているモノは見えない。しかし猫猫は信じてる。そこに自分を見ているモノがいる事を、見守ってるモノがいる事を。

再確認。自分の生きる意味を再確認。これからも、おもしろ可笑しく刺激的に生きていくと、再確認。

「つまりそれは、自分で決めていいって事かしら？」

穂波は首を傾げる。

「まあ、そうなりますね」

猫猫は穂波の方を向き直り、答える。

「そう。じゃあ私の読み手は神様という事にするわ」

穂波はニヤリと笑う。

「どうしてですか？」

猫猫はクスクス笑う。

「それはもちろん。身近にいた方が、契約しやすいもの」

穂波は胸を張って答える。

「それはそれは、ホント穂波さんって、契約馬鹿ですね」

「にはははは、あなたに褒められても全然嬉しくないですよ」

「あっ、お茶煎れ直しますね」

「これはこれは。ありがとうございます」

こんな感じで、二人の世間話は、保健室に誰かが来るまで続くのであった。

11時15分〜保健室〜

4 - 11 ・午前中終了 何かの開始

11時50分〜2 - B

三時間目終了のチャイムが鳴った。これで午前中の授業が全て終了した事になる。

「……………はあ」

秋春守は、ため息と同時に、緊張して強張っていた体の力を抜いた。一時間目に南穂波の襲撃を受けた守。もうここには来ない、自分からかいいは来ないだろうと予測はしていた。しかし、もしかしたら。あの人はもしかしたら、油断している自分をもう一度からかいて来る可能性もある。

守はそう思い、二時間目も三時間目も、いつもより緊張して授業を受けていた。三時間目になるとちらほらと、保護者も現れ始め、親が来た生徒も守同様緊張していた。しかし、命を狙われているような緊張感を持っていたのは、守だけだっただろう。

そんな感じで守は、二時間目、三時間目を終えた。結果、何事もなかった。

どうやら自分の考え過ぎ、杞憂だったようだ。若葉枯葉があればから授業に来ない所を見ると、若葉枯葉をからかっているか、若葉枯葉を隠した奈美を捜しているかのどちらかだろう。どっちにしても、もうこっちは来ない。

というわけで守は、緊張を解き、鞆から弁当箱を取り出し、友人で

ある香川智弘と昼食を取る事にした。

つまり、油断した。

「守ちゃーん！」

「なっ!？」

教室の後ろから、自分の名前を呼びながら南穂波が現れた。

三時間目が終わってからまだあまり時間も経っていない。その為、教室には多くの生徒と保護者がいた。その約半数が、ぎよっと驚き守と穂波を見た。残りの半数は、同情の眼差しを守に向けた。そして残りの生徒は、無関心であった。

「な、な、なんで!？」

完全に油断、安心していた守は動揺を隠し切れない。動揺している息子を見て、穂波は満足気に頷く。

「はい、これ。そして、それ」

穂波は満足気に頷いた後、エコバックから弁当箱を取り出し、それを守に渡した。そして守の持っていた弁当箱を掻っ攫った。

「え、な、え？」

守は自分の手にある物体を見て、さらに困惑する。

「私、今日が楽しみで楽しみで仕方がなくて、四時に起きちゃったのよねー。で、暇だったからお弁当張っちゃったのよ。味も頑張

っちゃったし、量も頑張っちゃってね。あつ、残ったのは守の分にしよう。あつ、代わりに守の手作り弁当をいただこう。にやははは、これはいい考えだな。と、朝の私は高笑いしたのだった」

穂波は困惑している守に、一応説明した。

「……………交換拒否は？」

一応落ち着きを取り戻した守は、恐らくダメだろうなと思いつつ、尋ねてみた。

「もちろん却下。いい？守。私は今まで、なぜかラスボスと戦う前に黒幕と戦っていた感じだったのよ？私の疲労度は守が思っている以上に蓄積されている。それを回復させる為には、カワイイカワイイ息子のお弁当を食べるか、からかうかしかないのよ」

穂波はオヨオヨと泣き真似をした。全く同情出来ない。

「……………とりあえず、名前呼ぶの、やめてくれますか？」

相変わらず言ってる事がよくわからないので、守が一番要求度が低い要望を伝えた。

「もちろん却下よ。じゃあね。弁当箱は後で回収に来るから」

穂波は猫のように笑いながら、来た時同様、唐突に去って行った。

「……………」

守、呆然。

「あ、秋春君？」

智弘は、恐る恐る声をかける。

「……香川君、ちょっとそっとしておいてくれ」

守は智弘にそう言い、長野翼の席に向かう。

智弘もついて行こうとしたが、「そっとしておいてやれよ。なんかもう、俺もその方がいいような気がしてきた」という山口君に止められた。

翼は右手に文庫本、左手に箸という状態で、一人黙々と本を読み、モグモグと弁当を食べていた。

守は許可を得ずに翼の席に弁当を置き、近くの席から椅子を持って座る。

「……」

開けるべきか否か。一瞬躊躇したが、食べないわけにもいけない。守は弁当箱の蓋を開けた。

「……はあ」

守は中身を見て、ため息をついた。そのため息は感嘆の色とうんざりという色が、半々といったところか。

黄色くて美味しそうなタマゴ焼き。ウィンナーにアスパラ巻き。プチトマトにマカロニサラダ。それと偶然だとは思いが、自分の好物の春巻きが三つ。

そして白いご飯には、のりで作られた『I Love You』の文字。

「」愁傷様

弁当箱の中身をチラッと見た翼が、そう言った。

守は苦笑いを浮かべ、タマゴ焼きを口に入れた。

「……うん」

甘いタマゴ焼きは、懐かしい味した。

12時00分〜2-B

11時55分〜2-B 文芸部部室

守と弁当を交換（強奪ではない）した穂波はスキップしながら、猫に教えてもらった文芸部部室に向かっていた。向かっている理由は、南奈美と若葉枯葉に会う為だ。

文芸部部室は特別棟三階西階段付近。

穂波は生徒棟二階から渡り廊下を使い、特別棟に。特別棟を探索する為、東階段を使い三階へ。

特別棟には教室がたくさんある。通常の大きさの教室や、準備室程度の教室など様々だ。教室名が書かれたプレートがある教室もあれば、無い教室もある。扉から教室内を見ると、机や椅子がある教室もあれば、パソコンが置いてある教室。何も無い教室。棚がたくさんある教室。机と椅子が一組だけある教室など。

「あゝ、なんか不思議な感じね」

穂波は好奇心をくすぐられたので、机と椅子が一組しかない教室に入り、試しに座ってみた。広い教室に自分だけ。そんな空間に一人座って、黒板が設置されていない白い壁を見つめていると。何だか不安定な気分になった。なかなか面白かった。

「あら？」

そんな事をしながら三階に着くと、廊下に生徒が一人いた。窓から外を見ている。窓枠を掴み、今にもそこから飛び降りそうだ。

歩きながら観察。

制服から女子生徒と判断。髪は短め。身長は、平均程度。体が震えているようにも見える。手にはバック。見える横顔からは、悲壮感、触れたら壊れそうな儂なさが感じられる。

「どうかした？」

穂波は少女に声をかけた。近づいてみて、やはり間違いないと確信

「泣いてるの？」

少女は泣いていた。

声をかけられた少女は、ゆっくり穂波を見る。

その目からは涙。その顔には挑戦的な微笑み。さつき見た横顔からは想像出来なかった微笑みを向けられ、穂波は戸惑った。

「あたしは泣いてないわ」

戸惑う穂波を尻目に、少女はそう告げ、穂波が来た方に歩いて行った。

「……変な子」

少女の自信に満ち溢れた後ろ姿を見ながら、穂波はそう呟いた。

「まつ、いつか」

穂波はすぐに気分を切り替えて、文芸部部室を目指す。目指すといっても、すぐそこだった。

「奈美ちゃんみーつけ」

そう言いながら穂波は扉を開けた。

部室には円卓やら本棚が。

そして、奈美と枯葉はおらず。代わりに母親っぽいのが二人。その娘っぽいのが二人いた。

部室内の空気はとても重い。

「……………間違えました」

穂波はそう呟いて、扉を閉めた。

12時15分、文芸部部室

4 - 11 ・ 午前中終了 何かの開始（後書き）

はい、折り返し地点ですよー。

穂波さんの予定に狂いが出たところで、そろそろ彼女にはご退場願いますよー。

さあ、そして時は巻き戻る。 的な感じ。

閑話休題 午前中詰め合わせ

8時30分〜2-B

ホームルーム前の教室。夏季夏美と冬季冬美はいつも通り、テキスト
―な世間話に興じていた。

「ねえ夏美」

「なにさ冬美」

「今日の二時間目、何か覚えてる？」

冬美は、悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

「そりゃ覚えてるよ。現文でしょ？」

「そうそう。で、その現文は何の授業するか、知ってる？」

「え？あゝ……なんだっけ」

「辞書調べ」

冬美はクスクス笑う。

「へえー、辞書調べか。ふーん、辞書調べ。辞書調べ……辞書……
…辞書？」

夏美は何か引つ掛かった。

「夏美、持ってきた？」

ようやく気付いた。冬美はクスクス笑う。

「私、国語辞典忘れました！！」

夏美は天井に向かって叫んだ。なんとなく。ノリで。

8時31分〜2-B〜

「私、国語辞典忘れました！！」

三途舞歌は、ホームルーム前の教室で、窓の外を眺めていた。そしてその舞歌の前にはいつも通り、鈴乃音鈴音の姿があり、いつも通りほお杖をついてる舞歌を見ていた。

「国語辞典」

鈴音はポツリとそう呟いた。教室後方の声が聞こえたのだろう。

「舞歌は国語辞典持ってきたの？」

鈴音は舞歌の服を引っ張り尋ねる。

「持ってきましたよ」

舞歌は窓の外を眺めながら答える。

「鈴音は国語辞典忘れたの」

鈴音は舞歌の服を引っ張りながら報告する。

「……」

舞歌は秋の空を眺めながら、だからどうした。と、思う。

「舞歌は鈴音に国語辞典を見せてくれるの？」

鈴音は舞歌の服を引っ張りながら頼む。

「嫌ですよ。めんどくさい」

舞歌は殺風景な中庭を見下ろしながら断る。

「じゃあ鈴音はどうすればいいの？」

鈴音は舞歌の服を引っ張る。

「知りませんよ。自分で考えればいいじゃないですか」

舞歌は向かいの校舎を眺める。

「鈴音にはわからないの。鈴音はどうすればいいの？」

服を引っ張る。

「考える前からわからないって言ってませんか？あと、服が伸びるからやめろ」

舞歌は鈴音の手を払う。

「鈴音はどうすればいいの？国語辞典がない鈴音はどうすればいいの？」

鈴音は舞歌の手を引っ張る。

「誰かから借りればいいじゃないですか。あと、手を離せ」

舞歌は鈴音の手を振り解く。

「鈴音は舞歌から借りたいの」

鈴音は手を離さない。

「だから嫌ですって。他の人に借りればいいじゃないですか」

舞歌は諦めて、窓の外に視線を戻す。

「鈴音は他の人からどう借りればいいかわからないの」

鈴音は舞歌の手をフニフニ触りながら言う。

「私だってわかりませんよ」

舞歌はやっぱりうざいと思い、手を振り回す。

「じゃあ鈴音はどうすればいいの?」

鈴音は両手でガッチリ掴む。

「だから知らねえよ!」

舞歌は手を乱暴に振り回す。

とかなんとかしてたら、ホームルームが始まって、ホームルームが終わって、また似たようなやり取りをした。

舞歌が「図書館で借りればいいだろ!そんなくらい自分で思いつけよバカ!」と、助言するまで、そんなやり取りが続いたのだった。

10時40分〜2・B

二時間目現文。国語教師Aが「授業参観だし、なんか普通の授業するのもつまらんから、辞書調べするか。黒板に書いた語句調べて提出な。俺は電子辞書好きじゃねえから、ちゃんと辞典使えよ」と言った後、自習みたいになった。

夏美と冬美は当然のように二人で辞書調べをしている。埼玉さんも、当たり前のように夏美に席を譲った。

「ねえ冬美」

「なによ夏美」

二人はぺらぺら辞書をめくりながら会話をしている。

「結局、さっきの人は秋春君の母親だったのか、姉だったのか。さあ、どっち？」

「だから、母親だったんじゃないの？お母さんとかなんとか言ってたじゃん。ちなみにこの会話、もう五回目だよ」

「若くね？」

「若い母親だつているでしょ。これも五回目」

「あんな母親、いるのか……」

「まあ、私もビックリしたけど、現実を認めないとダメだよ夏美」

「つまり将来あの人をお義母様と呼ぶ覚悟をしろっくっくっくっ！？」

夏美は冬美の国語辞典角チヨップを喰らい頭を抱えた。悩んでいるわけではない。痛いのだ。

「何すんじゃボケーー！！」

夏美は激怒した。

「ごめん。手が滑った」

冬美は謝った。

「あつ、なら仕方ないね。つて、そんなわけあるかー!!」

夏美はノリツツコミをした。

「そんなに怒る程じゃないでしょ？夏美は大袈裟だなー」

冬美はやれやれだ。

「大袈裟じゃないし！すっごい痛いし！これ多分タンコブ出来たし！だってすっごい痛いもん！ほらやっぱり！」

夏美は叩かれたところを触ってタンコブを確認した。

「見せて……出来てないじゃん」

冬美は夏美の頭を触り、タンコブが出来ていないと確認した。

「出来てるし！間違いなくタンコブあるし！めっちゃ痛いもん！やべえ痛いもん！」

「夏美。私がタンコブを作るようなミスをするわけじゃない」

「こわっ！冬美の手加減スキルこわっ！だけど今回はミスだね！間違いないタンコブ出来てる！ほら！ほら！ほらー！」

「ちよ、夏美。頭近づけないですよ。どんなに至近距離で見たところ

で、タンゴブの夕の字も見つからないから」

「異義有り！冬美は自分のミスを認めたくなくて嘘をついている！
ということ、第三者に確認を求める。そうだ、授業が終わったら、
保健室に行こう」

「行ったところで無駄だと思っけどね」

10時40分、文芸部部室

「恐らく今頃、お母さんは保健室にいて、子猫先生に私がどこにいるか聞いているでしょうけど、まあ、子猫先生ならうまくやってくれると思いますから、しばらくはここでゆっくり出来ます」

保健室で猫猫子猫と別れた後、南奈美は、若葉枯葉を連れ文芸部の部室にやってきた。

「なんかもう、完璧あれだな。逃亡犯って感じ……」

枯葉は窓から生徒棟を眺める。その後ろ姿にはどこか哀愁が漂っている。本当なら今頃、あっちの教室で授業を受けてたはずなんだけどなー。どうしてこんな事になってるんだろうなー。

「逃亡犯じゃありません。枯葉君は何も悪い事してないじゃないで

すか」

ガサゴソと、棚から何かを取り出しながら、奈美は枯葉を慰めた。

「今の状況は、愛の逃避行という言葉がピッタシです。子猫先生もそう言ってくれると思います」

「もうあれだ。ツッコミを入れるのもめんどくさい」

「つまり枯葉君は私を愛しているという事を認めたという事？」

「……」

ああ、何だか窓から飛び降りたいなー。下を見ると、花で『秋』という文字が作られていた。すごいなー。と、枯葉は思った。飛び降りたらあれが、グチャってなるなー。

「いつまで黄昏れてるんですか。こっちに来て手伝って下さい」

「手伝う？」

枯葉は黄昏れるのをやめた。

「何それ」

奈美の前には数枚の紙と冊子が。

とりあえず奈美の隣に座り、紙を一枚手に取る。

そこにはワープロ文字で『八尾比丘尼高校七不思議まとめ（仮）』と書かれていた。

「ああ、文芸部の？」

「そうです」

奈美が取り出したのは、文芸部が作る冊子のネタが書かれている紙だった。そして見本の冊子。

ネタというのは八尾比丘尼高校七不思議についてであり、どういう話なのか、それが本当なのか等が、書かれていた。

「お前が作ったの？」

「そうです。パソコンを持つてるのは私だけらしいので、子猫先生に簡単にまとめておいてと頼まれました」

「子猫先生にねー」

あのふざけてんのか真面目なのかよくわからん先生ねー。

「嫉妬しましたか？」

過去の文芸冊子を読みながら、奈美はそう言った。

「俺の言葉のどこに嫉妬成分があっただんだよ」

こいつ馬鹿だよなあ。と思う枯葉。

「子猫先生と私が仲が良くて嫉妬したかなあっと思ひまして」

違いましたか？と、首を傾げる奈美。

「いや、どうしてお前と猫野郎が仲良しだと俺が嫉妬するんだよ。煙がない所に火を立てるなよ」

ないない。

「私が子猫先生の名前ばかり口にする事に対して枯葉君は嫉妬するべきです。そして私が、一番は枯葉君ですというべきです」

「なんかもう色々あれだけと、とりあえず、べきって、おかしくね？」

なんかこいつ、言動がみつちゃんに似てきたような気がする……。枯葉はちよつと寒気がした。

「……まさか枯葉君、子猫先生に嫉妬じゃなくて私に嫉妬ですか？子猫先生の方が好きとでも言いたいんですか！？」

急に怒りだした。

「いやいやいやいや！？お前さつきから俺の話一切聞いてないわけ！？俺はお前にも猫野郎にも嫉妬なんてしてないって言いましたよね！？聞こえてたらとりあえずそのシャーペンを放してあげて！？なんか折れてしまいそうだよ！？」

「冗談ですよ冗談」

クスツと奈美は笑った。

「枯葉君は、子猫先生に嫉妬したんですよね？」

ニコツと奈美は笑った。

「よし、お前はとりあえず耳の掃除をしる」

もしくは冗談という言葉の意味を辞書で調べる。

「あつ、私ひざ枕に憧れてるんですけど、どうですか？」

自分のひざを叩いて、私のここ、空いてますよとアピールを奈美はした。

「嫉妬はまあしないけど、お前とあの先生は確かに仲良いな」

枯葉は無視した。無視が一番いい手に違いないと信じて。

「何でそんなに仲いいわけ？やっぱりあれか？授業出てないから？いや、いつも図書室にいるし、そういうわけじゃないのか？」

「仲が良いのは当然です。だって私と子猫先生は友達ですから」

話題を変えられても特に嫌な顔もしない所を見ると、どうやら今までの奈美は本気ではなかったようだ。と、信じたいなと枯葉は思った。

「というか、えっ？友達なの？」

教師と生徒が友達ってどうなの？

「友情に年も職種も人種も種族すら関係ないんですよ？」

枯葉の、え？それどうなの？という顔を見て、奈美はどこか誇らしげにそう言った。友達がいるという事が誇らしいのかもしれない。

「ああ、そうだよな。別に人じゃなくても友達になれるよなあ……」

枯葉は、なるほど。そういう考えもあったか。と、思った。枯葉は、人と友達になる努力を放棄し、犬でもいつかと、ちよつと思っただ。

「でも、恋愛が出来るのは人だけですよ？」

「まあ、友達ならお前があつた猫野郎を信頼してるのもわからんでもないな」

無視である。

「信頼ですか？」

全く、枯葉君は恥ずかしがり屋だなあ。こつこつ話が苦手なのね。とか思ってる奈美。

「いや、だってさ。なんかお前の母親とあの先生、多分似てるじゃん？」

「まあ、似てなくもないかもしれませんがね」

「世の中には同族嫌悪って言葉もあるしさ。似てる奴らって、馬が合わないとかあるだろ？」

お前とみつちゃんみたいに。とは言わない枯葉。

「だから俺は、猫野郎とお前の母ちゃんは喧嘩くらいするんじゃないかなー。今頃保健室を飛び出したどこかさ迷ってんじゃないかなー。今まさにあの閉じている扉が開いて見つけたーとかあるんじゃないかなー。とか、思わなくもねえんだけど、お前は、あの先生がうまくやってると思ってるんだろ。やっぱり友達だから信じてるんじゃないかねの？」

俺はあの先生、友達とは思えねえし。そもそも教師とどうやってこいつ友達になっただらう。やっぱり契約とかいうよくわからん理論か？と、枯葉は気になったが、聞くと色々面倒そうなので聞くのをやめた。

「まあ、確かにお母さんと子猫先生は相性が良くないかもしれないかもしれまん」

今頃、子猫先生はキャラが被ったー。とか思ってるかも。

「でも、ああ見えて子猫先生は大人ですし、お母さんも……まあ、たまに大人です。私は、そこを信じてます」

奈美は微笑んだ。

「大人なんだから、嫌いな相手とも、仲良く出来ると思いますよ。今頃仲良く談笑してると思います」

10時50分〜二階渡り廊下 図書室

「冬美！今のうちに土下座の準備でもしといた方がいいよ！」

「夏美は猫猫先生に裏切られる準備しといた方がいいと思うよ」

舞歌は前方を歩いている二人組を、いつもうるさい奴らだな。と思しながら見ていた。その隣で鈴音は国語辞典を抱えながら、あの二人だれだっけ。と思っていた。

二人は図書室に向かっている。鈴音は国語辞典を返すため。舞歌は付き添いだ。借りる時は鈴音一人に行かせた結果、変人に絡まれていたので、仕方なく、今回は一緒について行く事にした。

職員棟に着き、前方の二人は右に曲がり、舞歌達は左に曲がって図書室へ。

「なんで私がこんな事を……」

舞歌はため息混じりにそう呟いた。鈴音は意味がわからず首を傾げる。自分について来ていくと言ったのに、舞歌がそんな事を言うのは、鈴音でなくてもわからないだろう。

10分休みの図書室には、利用者がほとんどいなかった。二人にとつてそれは別にどうでもよかった。問題なのは、カウンターに誰もいない事だった。いないと本を返せない。つまり、むだ足。

「……はあ、戻りますよ」

舞歌はため息をつき、出直す事にした。昼休みにならいるだろう。

「鈴音も戻るのが」

鈴音が舞歌の決定に不服を申し立てるわけもなく、頷いた。頷いた時、鈴が付いた髪飾りが鳴った。

「……眠い」

その音で起きたのかは定かではないが、司書室から声が聞こえた。誰かいるのかと思ひ、舞歌が司書室を覗く前に、毛布を羽織った小梅杏が怠そうに現れた。小梅は眠そうな目で、カウンターの前にいる舞歌と鈴音を視認。あくびを一つ。そして、小首を傾げて。

「寝ていい？」

と、尋ねた。

舞歌はため息をつき、鈴音は首を傾げた。

「本の返却手続きした後ならどうぞ勝手に」

11時30分、保健室

「失礼します」

「痛いのですの痛いのですのー。泣いてしまうのですのー」

鈴乃音真音は虹野光の付き添いとして、保健室にやって来た。光は体育の授業中、転んで足を擦りむいたのだ。

「あらあら光ちゃん。大丈夫？」

猫猫子猫は優雅にお茶を飲みながらそう尋ねた。

「大丈夫じゃないですよー。わたくし死んじやいそうですよー」

大袈裟である。が、本人にとっては大袈裟ではないのかもしれない。ぼろぼろと涙を流している。

「それじゃ、私はそろそろ」

「そうですね？名残惜しい気がしなくてもないでもないですね。あつ、光ちゃんそこ座って」

猫猫は南穂波が先程まで座っていた椅子を指差す。

光は指示された通り座り、「早くどうにかして欲しいですよー」と、嘆いた。

「はいはい、ちょっと待ってね」

猫猫は治療の準備を始めた。

「……」

一方。付き添いの真音は、この人誰だ？と、楽しげに笑いながら猫と光を見ている穂波を、見ていた。

「こんにちわ。一年生？」

「え？あー、はい」

見ていたら、話しかけられた。

「ジャージ姿な所を見ると、体育の授業で怪我したの？」

「ええ、まあ。光、運動苦手なのに張り切っちゃって……」

誰かの保護者だろうか。

「ああ、授業参観だから張り切ったのね」

穂波はほほえましいというように、「痛いのですー！ー」と、消毒液にやられている光を見た。

「ところで……どちら様ですか？」

気になったので尋ねてみた。

「私？私は南穂波。南奈美の母親よ。そっいうあなたはどちら様？」

「え？あー、鈴乃音です。鈴乃音真音」

南先輩の母親だったのか。若いな。と、真音は内心驚いた。そして穂波も、真音の名前を聞き、驚いた。そしてすぐに、クスクスと笑う。

「これも運命って奴かしら？」

「はあ……？」

真音には意味がわからない。

わからない真音を余所に、穂波はエコバックから紅葉饅頭を取り出した。

「これ、去年娘が迷惑かけたお詫び。受け取ってくれる？」

「え……？いいですよそんな、もう昔の話ですし」

慌てて首を横に振り、真音は断る。

「あなたがよくても私の気持ちがよくないのよ。だから受け取って
というか、受け取りなさい」

「……」

命令なのかよ。と、真音は思った。

「真音ちゃん。受け取っておきなさい。そういうのは、断る方が失
礼なのよ？」

困っている真音に、猫猫がそう助言した。

「はあ……じゃあ、わかりました。いただきます」

真音はその助言に従い、穂波から紅葉饅頭を受け取った。

「ん、ありがと。ああそうそう。あなた、文芸部の部室って、どこにあるか、知ってる?」

「文芸部の部室ですか?それな」

「特別棟三階の西階段付近ですよー」

真音が答える前に猫猫が答えた。まるで、穂波にさっさと保健室から出て行ってもらいたいようにも見える反応だった。

「なるほど。ありがとございます。それじゃ、真音さん。それから光ちゃん。あと、猫先生。さようならー」

穂波は微笑みながら手を振って、保健室を後にした。

「……………んー、疲れた」

光の治療を終えた猫猫は、大きく伸びをした。肩も回す。だいぶお疲れのようだ。

真音は、そんなに大変な治療だったのかな?と思った。

「いや、治療自体は朝飯前だったんだけどね」

そんな真音の思いを読み取った猫猫は、それを否定する。

「それじゃあどうしてそんなに疲れてますの?」

なんであの人、私の事ちゃん付けで真音はさんだったのかしら。納得いきませんわ!と思いい、ちよつと不機嫌な光が尋ねる。

「んー、なんていうか。セーブポイント無しとか事前に警告とか無しで、ラスボスと戦った感じ？疲れたっていうより、緊張感が半端なかったわ」

「ラスボス……？」

南さんの事かな？と、真音は思った。

「わかりますのその緊張感！わたくしもたまにセーブしないでボスとかと戦って、負けたらどうしようかしらー！って、凄い緊張するですよ！」

そして光は共感した。

「光ちゃんなら分かってくれると思ったわ。ボスの連戦の時なんて特にそうよね」

「すごいわかりますの！」

この子、なんか間違ってる気がするけど、まあいつか。と、猫猫は思い、それで話を進める事にした。

だって、そっちの方がおもしろいから。

11時40分〜保健室

閑話休題 午前中詰め合わせ（後書き）

まあつまり、おまけ。もしくはどこかに入れたかったんだけど、あんまり視点というか場所がコロコロ変わるのもあれだよなあ。と思っ
て入れなかった話。

夏美と冬美。舞歌と鈴音の扱いは、今回はこんな感じかもしれない。

次回からは午後の部って感じかなあ。

5 - 1 ・ 昼休み 来た人と来てた人

11時45分〜正門（南門）付近

八尾比丘尼高校正門、まあつまり南門。その前は緩やかな上り坂になっている。この道を下っていけば胡桃割駅に着く。つまり胡桃割駅から八尾比丘尼高校までは一本道なのである。楽チンである。徒歩だと30分程度かかるが。

その道を、桜木押花は上っていた。当然、八尾比丘尼高校に向かっているのである。

服装はスーツ。南穂波とは違いパンツではなくスカートで、あまり着慣れていないのか、どことなく新人OLという感じである。靴はヒールの例のあれ。履き慣れていないのか、歩きづらそうである。持っているのはOLさんが持ってそうな黒い鞆。中にはスリッパやら履歴書が入っている。

「……急がないと」

左手に嵌めている腕時計で時刻を確認した押花は、そう呟いて歩みを速める。しかし歩きづらくて、気よりは歩みは進まない。

やっぱり靴だけでも、履きかえて来るべきだったか。押花は舌打ちしたい気分であった。

さて、状況を簡単に説明しよう。

押花は今日。午前中は胡桃割駅前にあるくるみデパートで、面接を受けていた。何の面接かというと、パートの面接である。それが終わったのが11時過ぎ。予定ならもう少し早く終わるはずだったが、ちよっと色々合って遅くなってしまった。

本当なら、三時間目の途中くらいには学校に着く予定だったのだが、そんなわけで遅れ気味。車を持っていない押花は駅付近から頑張つて歩いて来たのでした。自宅のマンションは途中にあるのだが、着替えるロスも惜しかったので、そのまま来たのでした。

キーンコーンカーンコーン

「！」

もうすでに高校の外壁沿いを歩いていた押花には、三時間目終了のチャイムが聞こえた。焦るぜ。

お弁当は自分の分も含めてさくらに渡してあるから、さくらが飢えで苦しむ事はないだろうけど。優しいあの子の事だから、食べずに私を待つているに違いない。

そう思い押花は、さらに急ぐ。ちなみに、教室で一緒に食べるのは恥ずかしいという事で、昼は文学部の部室で食べる事になっている。もちろん。恥ずかしいのはさくらであって、押花的にはどこでもおっけーである。恥ずかしいとさくらに言われ、ちよつとシヨックなくらいである。

「タクシー……」

足早に正門に向かう押花。正門まで後100メートル程度まで来た時、正門前にタクシーが停まった。それを見て、しまったその手があったかー！と、押花は爪を噛みたくなった。日頃使わないので、タクシーという選択肢を思いつかなかったのだ。

今度こういう機会があったら、絶対使う。と、心のメモ帳にメモしながら、正門まで後50メートル程度。それはつまりタクシーまで50メートルという意味でもあり、その距離になるとタクシーから

降りて来た人物もよく見える。

「なっ……」

降りて来た人物を見て、押花の歩みが止まった。その表情は驚愕。なんでこのタイミングで。こんな偶然、こんな運命ありえない。降りて来たのは女性。白いロングスカートに白いカーディガン？秋の日差しはそんなに強くないと思うのだが、白い日傘をさした。服装から受けるイメージは、いい所の清楚なお嬢様だ。しかし、漂うオーラはどんよりしている。嫌々そうに校舎を見上げるその姿からは、マジでしんどい。という感情がひしひしと伝わってくる。

「……」

押花は、何よりも優先したい最愛の娘に、早く会いに行かなければならないのに、一向に歩みを再開させる事が出来なかった。体が、あの女性に近づくのをおそれているかのようだった。

女性はタクシーの運転手に何か声をかけられたようで、校舎からタクシーの方に、億劫そうに体を向けた。どうやら、荷物をタクシー内に忘れていたようだ。どこかの店の紙袋をタクシー内から女性が回収すると、タクシーはドアを閉め走り出す。押花の方へ。

走る物の姿を追うのは、どんな人間でもやってみようこと。幽霊のように立っている女性も、タクシーを目で追った。つまり、押花の方を見た。

目が合った。

変化は劇的であった。

幽霊のように儚ないイメージを持たせる女性は、押花を確認した途端、生き霊のような力強さを得た。そして遊び相手を見つけた死に

神のように、ニヤ〜と笑った。押花に悪寒が走った。

「奇遇……ですね……」

二人の距離は50メートル。それなりに離れているはずなのに、その女性の、つまり押花から夫を奪った元泥棒猫現本妻、虹野望の弱々しい声が、押花にははっきりと聞こえた。

「こんなところで……会うなんて……運命的……ですね……」

「……」

まるで見えない糸で二人は繋がっていて、それを伝えて聞こえてきているようだった。

11時50分〜2-A〜

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。授業が終わった。

「つらら早く行こー！ー！ー」

桜木さくらは飛び上がるように席を立ち、お弁当が入っている鞆を

持ち、前の席で教科書をしまっている氷山つららを急かした。

「え？あ、ちょっと待って」

そんなに急がなくても。と、内心苦笑しつつ、教科書をしまってから、さくら同様鞆を持ち席を立つ。

「よーし！じゃあ、部室へレッツゴー！！あつ、鈴乃音さんちよつとごめんねー」

「鈴乃音さんちよつとごめんねなの？」

鈴乃音鈴音が椅子を持って三途舞歌の前に移動中の所を、ちよつと失礼して通り、ハイテンションさくらは教室前方の扉から教室を後にする。

つららは、鈴音と舞歌に軽く会釈しながらハイテンションさくらの後を追う。

「守ちゃーん！」

教室を出たちようどその時、教室内からそんな声が聞こえた。一時間目に聞いたような声だ。あんなお母さんがいて、羨ましいな。と、つららは思わなくもなかった。

「つららつらら早くー！」

つららの少し前を歩いていたさくらが手招きして呼ぶ。

「さくら、そんなに急がなくてもいいんじゃないの？」

駆け足でさくらの横に並んだ後、つららはそう聞いた。

「んー。確かにそうかもだけどー。光陰矢の如しー。っていうしー、もしかしたらお母さん、もう部屋にいるかもしれないしー」

ニコニコと楽しげに笑いながら言うさくら。特別棟に向かう足取りも、スキップしそうな勢いだ。

「ん、そうだね」

押花さんが、先に行ってる事はまずないだろうけど。と、つららは思ったが、楽しそうなさくらに水を差す事もないと思い、ただ同意しておく。

「……」

しかし。と、楽しそうな笑みをこちらに向けるさくらを見ながらつららは思う。

押花さんと昼食を食べるのが、こんなに嬉しいのか。私、邪魔じゃないかな。と。さくらはそんな事ないよと言うけど、本当の所はどうなんだろう。

『家族水入らずに。不純物が混じっちゃった感じ。汚い汚い』

「んー。つららどうしたのー?」

つららの歩みが遅くなったのを不思議に思ったさくら。手を繋ぎながら尋ねる。

「……あー、私、本当にいいの?」

つららは不安げに、さくらの顔色を窺う。

「もちろんだよー。というかー、つららがいないと始まらない感じだよー」

ニコニコと。つららの心配なんて杞憂だよ。というように笑いながら、さくらは言う。ついでに引く張る。

「なんていうかさー。あれだよー。多分だけどさー。お母さんからして見ればー。つららも娘みたいなものだよー」

「えー!？」

押花さんそんな風に思ってたの？

「そんなに驚く事じゃないと思うよー？わたしたち、小さい頃からずっと一緒だったしー。つまりお母さんは小さい頃からつららを見てきたわけだからー。まあ、去年まではお母さんあれだったから、そんな風に思ってたなかっただろっけどー。今のお母さんならきつとつららがいなかったら、つららはどうしたの？って、自分から聞いてくると思うなー。だってー、家族は揃ってご飯食べたいじゃーん。とかなんとか言ってるうちにとうちゃーくー!!」

さくらは部室の扉を開けて、バンザイ。つららの手も掴んだままなので一緒にバンザイ。

「…………え？あ、ホントだ…………」

さくらの言葉に耳を傾けていたので、気付かなかった。

さくらの言ってる事を全て信じていいのかわからないけど、まあ、
ついてしまったなら仕方ない。腹をくくろう。でもまあ、さくらが
言う通り大丈夫な気もしてきた。

『ちっ』

『舌打ちする意味がわからない』

『死ねばいいのに』

『毒を吐く意味がわからない』

「っつて、あれー……」

会話モードに入ったつららは気付かなかったが、さくらは部室内を
見て、首を傾げた。何故なら、先客がいたから。

「桜木さんと冰山さんですか。ここを使いたいんですか？」

「あー、どこかで見たような、見なかったような……」

先客は言うまでもなく、南奈美と若葉枯葉である。

11時55分くらいだと思いますー文学部部室ー

5 - 1 ・昼休み 来た人と来てた人（後書き）

はい、なんか始まりました。

虹野望はなんか描写しまくり。死に神がおもちやを見つけた時の笑みってどんな笑み？

席について。簡潔に説明しよう。

廊下側二列は六席。残り四列は七席。計六列四十席。

廊下側一列。先頭に青森。前から六番目に香川。

廊下から二列。前から六番目に秋春。

廊下から三列。前から四番目に夏季。

廊下から四列。前から三番目に若葉。前から六番目に埼玉。一番後ろに冬季。

廊下から五列。先頭鈴乃音。

廊下から六列。つまり窓際。先頭三途。前から五番目氷山。前から六番目桜木。

そんな感じでしたー。

時間がギリギリでしたー。

つららが出てくるとややつこしいでしたー。

また次回でしたー。

5 - 2 ・ 昼休み 虚弱な黒幕

11時55分〜2 - B

「急ぐですの遅刻ですのスピードアップですのー!!」

「光……声と動きが一致してないよ」

保健室にいた虹野光と鈴乃音真音は、制服に着替えたりなんやかんやした後、2 - B教室に向かっていた。手にはお弁当箱。声は急いでいるが、その歩みは早足レベルの光の弁当は、重箱サイズ。その後ろ姿を呆れ顔で追う真音は、男子生徒じゃ物足りないサイズの弁当箱。

「お姉ちゃんいますですのー……?」

2 - Bの教室に着いた光。前の扉からこっそり中を覗く。先輩の教室って、ちよつと怖いよね。

光は教室内に姉、桜木さくらの姿を確認出来なかった。しかしその代わりに。

「秋春先輩ですの!」

将棋部の先輩、秋春守をすぐ近くに発見した。手作り弁当をモグモグと食べていた守は、名前を呼ばれてようやく、扉のどこにいるのが光だという事に気付いた。

「何か用?」

作り笑顔を浮かべて尋ねる守。「きゃー！」って叫ぶ光ちゃんは、恋する乙女という事でいいんじゃないですか？

「秋春先輩。桜木先輩がどこにいるか知りませんか？」

光が役立たずなので、真音が聞く。真音の役割って、いつもこんな感じ。

「桜木……さあ？知らないなあ」

「……そうですか。ちよつと失礼します。光行くよ」

場所を知らないというより、そんな人間知らないなあ。クラスメートなんて、どうでもいいから。という感じの守に早々に見切りをつけ、真音は光の手を引き入室。光がなんか言ってるけど気にしない。

「姉さん。ちよつといい？」

入室した真音は窓際に一直線。そこに、姉、鈴乃音鈴音と三途舞歌がいたからだ。二人は仲良く（かは知らないけど、客観的には仲良く）弁当を食べていた。

「姉さんちよつといいの」

箸を置いて、何か用かな？というように、真音が無表情に見つめる鈴音。舞歌は、なんでこいつらここに来たんだ。と思っているのか、訝しげに真音と光を見ている。

「桜木先輩がどこに行ったか知らない？光が捜してるんだけど」

「鈴音は桜木先輩がどこに行ったか知らないの」

そもそも、桜木先輩って誰だっけ。というように、首を傾げる鈴音。

「そっか。三途先輩は知りませんか？」

守と似たような態度だが、姉には甘い真音さん。特に不快には思っていないようだ。

「……部室がどうか言ってたような」

さくらの大声を覚えていたのか、舞歌は、今世紀最後じゃないかと思っくらいの優しさを見せた。

「これは運命ですのー!!」

「え？つて、光……」

文芸部の部室で食べようと誘いに来たら、すでにさくらは部室に行っただというではないか。これは運命に違いない。と、思ってテンションが上がってしまった光。真音を置いて、脱兎の如く教室を飛び出して行った。

「……まあいいや」

光が去って行った方を見ながら、真音はそう呟いた。元々、付いていくのはここまでにしようと思っただし。家族水入らずでどうぞみたいに言っただって、間違いなく修羅場だもん。

「真音はなにに來たの？」

今さらである。

「光の付き添いに来たんだけど、今はその用事も終わったから、姉さん達と一緒に昼食べようと思って来たって事でいいや。いい？」

不思議な言い回しをする子である。

「鈴音はいいの」

「三途先輩もいいですか？」

「どうぞ」勝手に……」

舞歌はどうでもよさげに窓の外を見ながらそう言った。そして昼食のメロンパンを食べる。

鈴音も箸を持って、昼食再開。

真音は近くの空いていた椅子を拝借して、弁当箱を開ける。

「いただきます」

礼儀正しい子である。

「いただいていますなの」

よくわからない子である。

「……………なんだそりゃ」

シッコミ役である。

12時は間違いなく過ぎてる〜2-B〜

11時55分〜特別棟一階 特別棟西階段〜

桜木押花は、生徒玄関から高校に侵入。恐らくさくらは、すでに部屋にいたろうから、一階の渡り廊下から特別棟へ向かった。西階段付近にあると聞いていたので、西階段を使用して三階へ行こうとしていた。

「ちょっと……待って……下さいよ」

そんな押花の後ろを、必死に、息も絶え絶えになりながら追う虹野望。押花の歩みは望にとっちや、全力疾走並みの速さだぜ。

「……」

なんで私が待たないといけないんだよ。と、思っている押花は待つわけもなく。後ろを振り向く事なくどんどん進んでいく。

「……逃げ……なくても……いい、じゃない……」

「逃げてません!」

かっちーんである。

西階段にたどり着いた所で、後ろから聞こえた挑発に引っ掛かった押花。ちよろいぜ。

後ろを振り向き怒鳴ると、望は廊下の真ん中で、膝に手をつけて、息を整えていた。

「じゃあ……そんなに……急がな、くても」

「……」

望は挑戦的な笑みを浮かべたつもりだろう。しかし、押花には疲れてる人が痩せ我慢して微笑んでるようにしか見えなかった。まあつまり。その姿を見て、望の意図した事とは逆に、押花の頭に上った血が下がってしまったのだ。

「ふう……」

押花は、落ち着け私。挑発にのるな。と、自分に言い聞かせてから、階段を上り始めた。「ちよ……私を……殺す気？」という声は聞こえなかった事とする。というか、殺せるなら殺したい気分だ。

「待って……下さい、よ……どうして……待って……」

無視無視。

「あれ……もしか、して……私の事……怖い？」

「怖いわけないでしょ!？」

ちよるい。ちよる過ぎるぜ押花さん。

二階にたどり着いていた押花は、後ろを振り向き怒鳴った。ちよろど通りかかった女子生徒と男子生徒のカップル（仮）が、驚いた。振り向いた押花。しかしそこに望の姿を確認する事は出来なかった。と思つたら、手摺りを使つて、なんとか立つてます私。という状態の望が、踊り場に現れた。あいつももうすぐ死ぬんじゃね。望の横を通っている男子生徒も、心配そうに見ている。しかし男子生徒は、女子生徒に手を引かれ、声をかける事なく去つて行つた。

「じゃあ……待つて、くれて……も」

そんなカップル（嘘）なんて気にせず、手摺りを掴みながら、またもや挑戦的な笑みを望は浮かべたつもりだろうが、残念。やっぱり押花には、へへへ、まだまだ俺は戦えるぜ？というように、強がつて笑つてるようにしか見えなかった。まあつまり。押花はその姿を見て、逆に同情してしまった。体力、本当にないなこの人。不憫。

「……何で私の後、ついてくるんですか」

腕を組んで、仕方なく。しーかーたーなく。相手をする事にした押花。

「それは……まあ……ほら……」

タメが長い。息を整え、手摺りから手を離し、ニヤリと。今回は成功した挑戦的な笑みを浮かべて。

「同じ男を愛した者同士という事で仲良くしたいなあって」

と、望は言った。その結果。

「喧嘩売ってるでしょあなた!？」

押花を激昂しました。そりゃ、そういう事を経て仲良くなる人達もいるでしょうけども。押花には無理である。

ちよつとでも同情して、相手をしたのが馬鹿だった。

押花は苛立ちながら、また、階段を上り始めた。「ああ……もう少し……休ま、せて」という声は、もちろん無視である。

「冗談、ですよ……冗談……私と、あなたは……別に、仲良く……ならなくても、いい」

「……」

無視無視。

「私が……あなたの後を、ついて行く、のは……そう……言うならば……運命、だから」

「運命?」

不可解な単語。三階にたどり着いた押花は、立ち止まり背後を見る。案外簡単に立ち止まる押花。結局のところ、押花は望を無視する事は出来ないという事。気になってしょうがない。望が。元夫、虹野輝樹の今の妻が。だから、望の弱々しい声も、押花にはちゃんと聞こえる。距離が離れていても。

「ええ……そうです、運命……」

手摺りに全体重を支えてもらって、やっと。という感じで、一段一段上ってくる望。

「例えば……知らない、人が……自分の……後ろをついて、くる……場合……その人が……ストーカー、じゃ、ないなら……その理由は？」

押花によろやく追い付いた望。たかが三階分の階段を上っただけで、やり切った表情を浮かべてやがる。

「……その理由は」

なんだか嫌な予感がする。今自分がいるのは特別棟三階。私がここに来た理由は、さくらと氷山さんと一緒に昼食を食べる為。

じゃあ、この人がここに居る理由は？

「運命とは……テンプレート……決められた、答え……この例えの……答えは、同じ場所を、目指してる、から」

ニヤア。と、あの世から手招きする亡者のように、望は笑う。

押花は、まさか。と思いつつも、慌てて文芸部部室に向かい、扉を開けた。

「お母さん!?!」

「さくら!?!」

扉を開けると目の前に、さくらがいた。押花がちょうど扉を開けた

時、さくらの扉を開けようとしたようで、鉢合わせの形になった。

「……………あなたは」

押花は驚いた。部屋にいたのはさくらだけではなかったからだ。もちろん押花は、つららが一緒に食べるといふのは許可していたのだから、つららがいても驚かない。そこにいたのが、つららではなく、光だったから驚いたのだ。

「あの、その……………ですの」

光はオロオロと、半ベソをかいていた。が。

「お母様！」

押花の後ろに、望の姿を見て、パアッと顔を輝かせた。

「だからお母様は……………まあ、今は、いいわ」

疲れたように、まあ実際疲れているんだろうけど、疲れたようにため息をつく望。

「……………これは、どづいう事ですか」

そんな望を睨む押花。なんとなく、こいつが全ての元凶な気がする。自分の不幸には、いつもこいつが噛んでいる気がする。

「さあ……………どづいう、事……………でしょう、ね」

睨まれた望は、クスクスと、悪巧みが成功した子供のように笑った。

そして、押花から視線を移し、

「初めまして……こんにちわ……さくら……ちゃん？」

自分を見て固まっているさくらに、そう、挨拶をした。

12時10分付近、文芸部部室

5 - 2 ・ 昼休み 虚弱な黒幕（後書き）

時間が……網渡り過ぎる！そろそろ破綻してパラレルワールドが生まれそうだぜ！

そして段々、虹野望が虚弱な穂波さんみたくなってきたぜ！

また次回だぜ！

5 - 3 ・ 昼休み あなたの知ってる私はあたし？

11時55分 教室棟 文芸部部室

虹野光は走っていた。教室に向かう時とは比べものにならない程の速さで。

昼休みが始まり五分程度経った現在。購買に行く人、帰る人。光同様、昼食を食べる為移動する人等、廊下や階段は生徒が多くいたが、光はそんなのなんのその。間をぬって脱兎の如く。二段飛ばして脱兎の如く。手に持つ弁当の状態なんて気にせず脱兎の如く。一路向かうは、愛しい愛しい姉のもと。

家族水入らずの楽しいご飯。しかもそれは家じゃない。しかもそれはお弁当。それってまるでピクニック。お外じゃないのが残念だけど。それって夢見たピクニック。いつかやってみたいと思ってた。お母様とお姉ちゃんと一緒にピクニック。それに今日はお姉ちゃんのお母様も。今日でもっと仲良くなれたらいいな。楽しみ楽しみ。ホントに、楽しみ。

「はあ、はあ、はあ……」

そんな風に思ってた光の目には。

「あれー？光ちゃん、どうしたのー？そんなに息切らして、何かあったのー？」

桜木さくらは愛しい姉に。

「あー……こんにち、わ？」

氷山つらはは、邪魔物に見えた。

12時00分〜文芸部部室〜

12時10分〜特別棟三階廊下〜

『どうしてあんたがいるんですか。あんたは何なんですか。お姉ちゃんに付き纏わないで下さい。お姉ちゃんはあたとご飯を食べるんです。家族水入らずで食べるんです。あたしはとっても楽しみにしてたんです。なのにどうしてここにいるんですか。邪魔しないで下さい。どこか行って下さい。どうしていつもあんたはあたしの邪魔をするんですか。クスクス。だってさ。言われたい放題だったわね』

『黙れ。うるさい。消えろ』

『邪魔物は黙れ。邪魔物はうるさい。邪魔物は消えろ。あんたの事じゃない』

『違う。そうじゃない。うざい。失せる。喋るな。黙れ』

『家族水入らずだってさ。水は入らないって。氷なんてもつての他だって。氷なんてなくてももうまくいくって。つまりあんたはいらな

いって。あんだなんていなくても。さくらちゃんはうまくやれるってぞ。』

『違う違う違う違う。さくらはそんな事言ってる。さくらはそんな風に思ってる。勝手な事言ってる。お前は黙ってる勝手に喋るな』

『クスクス。あんたは本当に可哀相。さくらちゃんを信じてたのに裏切られて。唯一の親友に裏切られて。ホントにあんたは可哀相。これであんたは一人ぼっちに逆戻り』

『裏切られてない。一人ぼっちじゃない。勝手な事言ってる勝手な事言ってる勝手な事言ってる』

『でも。さくらちゃん来ないわよ。追って来ない。ちつとも来ない。ねえねえどうして』

『どうして来ないの』

『裏切られたから。さくらちゃんは私なんかもついたらないから。妹がいるから。家族がいるから』

『さくらちゃんは私を見捨て。クスクス。さくらちゃんは私が嫌いなの。だから追って来ないの。きつときつときつとそう』

「どうかした？」

『違う。なんて事はない。だつて来な。クスクス。泣いてるのに来な。クスクス。さくらが私の側に。さくらちゃんはある側の側にいない。今はいない。ずっといない。でも平気。あんなにはあたしがいるし。私にはあたしがいるし。さあ笑いましょ。さくらちゃんな』

んて忘れて笑いましょ。クスクステタケタワンワンニヤアニヤア。笑えない。ならあたしが代わりに笑ってあげる。あんたは泣いてな隅っこで。あんたが泣いて。あたしは笑う。クスクステタケタワンワンニヤアニヤア。クスクス。ホントにあんたはおバカさん．．．」

「泣いてるの？」

『あたし』が気付くと側には見知らぬ女性。心配そうに『あたし』を見てる。しかし、『あたし』には心配なんて必要ない。

「あたしは泣いてないわ」

『私』は泣いているけど。と、『あたし』は内心呟いて、歩き出す。

さあ。どこへ行くっ。

『あたし』は自由だ。

12時15分〜特別棟三階廊下〜

5 - 3 ・ 昼休み あなたの知ってる私はあたし？（後書き）

チエンジ……

あたしは私。私はあたし。

あなたの知ってる私は私？

明日になったら私はあたし。

今日見たあなたは明日もあなた？

今日見たあなた。

明日はきつとあたしだよ。

クスクスケタケタアハハハ。

『あたし』って、一瞬、『あした』って読んじゃうよね。

またね！。

5 - 4 ・ 昼休み 互いを見ない同席者

12時15分、文芸部部室、

円いテーブルに四人が座っているこの部屋には、酷く重い空気が漂っていた。それは南穂波がやってきた前からであり、穂波が立ち去った後も変わりはない。

「……………」

出入り口から一番遠い場所（七時の席）に座っている桜木さくらは、膝に置いた手をじっと見つめていた。

さくらは虹野光の暴言を受けて出て行ってしまった親友、冰山つららを追おうとしていたが、虹野望に出会った事により事情が変わった。光の母親であり、自分の父親を奪った彼女を見て、さくらは、固まった。どうすればいいかわからなくて。挨拶するべきか、無視するべきか、怒るべきか、感謝するべきか？それすらもわからなかった、そんな事さえ選択する事が出来なかった、自分の気持ちをぶつける事が出来なかったさくらは、ここにはいないつららではなく、近くにいた母親を依り所にした。

この時、桜木押花がさくらの手を引き、ここから立ち去れば、さくらもここにはいなかっただろう。つららと合流して、落ち着けたかもしれない。しかし、押花は立ち去らなかった。立ち去れなかった。

「……………」

押花はさくらの隣に座り、さくらの様子を、そして望の様子を、窺っていた。この二人が、今、何を考えているか。それが気になってしょうがない。そう。気になってしょうがない。だから押花は、ここにいる。望に背を押され、どうぞお座りなさい。と言われ、座ってしまった。

この状況を作ったのは望であると、押花は確信していた。しかしその意図がわからない。いや、わからなくはない。望の行動理由を、押花は知っている。だからこそ、押花は望を警戒し、ここに残った。残らざる終えなかった。自分の見ていないところで何かされるより、自分の見ているところで何かされた方がいい。対処の仕様があるから。そう思い押花はここにいる。手の平の上である。

「……」

光はさくらの前の場所（一時の席）に座り、さくらと望とテーブルを交互に見ていた。さくらに対しては窺うように。望に対しては助けを求めるように。テーブルに対してはどうすればいいかわからず見ていた。比率は、4：3：3。

ヒステリックな感じでつららを追い出した光は、それが悪いとは思っていないかった。もっと言えば、つららが悪いと思っていなくらいだ。

お姉ちゃんだつて、私と食べたいはずだし。お姉ちゃんだつて、家族水入らずで食べたいはずだ。お姉ちゃんは優しいから、この人がここにいるのを許すだろうけど、本当は邪魔だと思ってるはずだ。それを代わりに私が言ってあげただけ。この人も一応お姉ちゃんの親友なら、そのくらい察してあげればいいのに。

自分も最初は鈴乃音真音を連れてこようと思っていた事を棚に上げ、そう思った。

追い出した直後。光はやり切った。満足感があつた。お姉ちゃんや

ったよ。と内心思った。

しかし、さくらの反応は光が思っていた反応ではなかった。さくらは怒鳴ったわけではない。何かを言ったわけではない。ただ、唇を噛み締め、拳をにぎりしめ、光を睨んだ。

光は戸惑った。どうして睨むのか聞いた。さくらはただ睨むだけだった。悪い事をしたかと聞いた。さくらはただ睨むだけだった。私は悪くないと言った。さくらはただ睨むだけだった。ごめんなさいと言った。さくらはただ睨むだけだった。涙目になりながら、お姉ちゃんと言った。さくらの睨みが強くなった気がした。何も言わず唇を噛み締め。拳を震わす。そんなさくらはまるで、光を怒鳴るのを、光を殴るのを、必死に我慢しているようだった。

光の主観にして数時間。実時間数分。さくらは無言で光を睨み続けた。そして、まるで光に見切りをつけたように、さくらは光から視線を外し、部屋から出て行こうとした。光は、見捨てられる。そう思ったが、どうすればいいかわからず、ただ、さくらの背中をオロオロと見る事しか出来なかった。

そこに現れた母、望。光は、望がこの状況をどうにかしてくれると思った。助けてくれると思った。

実際、光の期待通り、さくらはまだここにいる。しかし、それだけだ。望はそれ以上は何もしてくれない。

だから光は今も、ただ、さくらを恐る恐る見るだけ。望を、助けを求めるように見るだけ。テーブルを、涙を堪えるように見るだけである。

「……………」

そして、この状況を作り出した張本人である望は光の隣の席（零時の席）の背もたれに体重を預けるように座り、天井を眺めていた。そしてこう思っていた。

あつ、やっぱりダメだわこれ。

と。

少々早過ぎたか。この状況。と、望は思う。いつかはこういう場（自分とさくらの出会いの場）を設けなければいけないと思っていた。しかし、やはりいきなり過ぎたか。やっぱり、サプライズはよくなかった。反省。私、反省。

望の目的とは何か。簡単である。さくらと光に家庭を選ばせる事である。その為にこういう場を設けたり、押花をからかったりしているのだ。楽しいからしているわけではない。外出している時点で、望にとってはつらいだけなのだ。つらいのと楽しいの、比率は8：2。

夏休み。押花と会い、話した後。望はしばらく、母親として頑張ろうとしたが、すでに限界であった。やっぱり無理だわ。私には。光もこんな家庭じゃ嫌だろう。そんな思いもあって、今日のサプライズ昼食を計画したのだが。どうもダメだった。

望の考えでは、光が重苦しい空気を読まず、ぺちゃくちゃ話して、それにさくらが愛想で相手をする。そんな感じになるはずだったが。光は何も喋らない。どうも自分が来る前に何か合ったようだ。望は天井を眺めながら、ため息をつきたい気分だった。

ここにつらがない事。先程廊下で、つらららしき少女を見かけた事から、光がしたであろう事が、望にはなんとなくわかった。

つららさんとは仲良くしなさい。と、忠告しておいたのに。全くこの我が儘な子は。望は呆れた気味に、そう思うが、育て方を間違えたとは思わない。自分が育てた覚えはないから。

しかしまあ。光はなかなかいいわね。

望は天井を見ながら、微笑む。

光はだいぶ、さくらに懐いているようだ。懐いているというか、依

存心が出来てきているようだ。自分ではなく、さくらにそれが移り始めている。お泊り会と称して数回泊まらせていけば、さくらと一緒に暮らしたいと言い出すだろう。押花も多分それを許す。なぜなら押花は、さくらが一緒ならそれでいいから。光と一緒に住むくらいは我慢するだろう。さくらがいれば、押花は幸せだ。そしてさくらも、我慢するだろう。

そう。我慢する。自分が幸せかどうかは置いて、我慢する。光と押花の幸せの為に。

それじゃあダメだ。ダメなのだ。この子にも選ばせないと。この子は何も知らない。まだ何も知らない。最近、籠から出たばかりで、何も知らない無知な子供。

それじゃあダメなのだ。選ばせないと。子供にも選ぶ権利がある。幸せを選ぶ権利がある。しかし知らないと選べない。そう。この子はまだ知らない。何も知らない。

私の事も、父親の事も。何も知らない。

望は、にやあと笑う。まだまだやるべき事はたくさんある。そう思い、挑戦的な笑みを浮かべる。

その笑みを浮かべたまま、天井を見上げるのをやめ、正面を向く。押花と目が合った。

押花は、望の笑みの意味を図りかね、怪訝な表情を浮かべる。その表情を見て、さらに笑みを深める望。そして口を開く。

「お弁当……………食べません、か？」

「……………」

押花には、この状況で、あなたにそれが出来ますか？と、言ったように感じた。

そう感じるというのも、望の手の平の上である事に、押花は気付いてはいない。

12時25分、文芸部部室

5 - 4 ・ 昼休み 互いを見ない同席者（後書き）

待って。もう少し待って。今、コメディ―要員を呼んでる所だから
もう少し待ってあげて！

今向かってるはずだから待ってあげてー！！

5 - 5 ・昼休み 奇妙な人見て思う事

12時15分〜特別棟三階西階段 特別棟二階渡り廊下前

「おつかしいなあ……」

南穂波は部室の扉を閉めた後、腕を組んで、そうぼやいた。穂波にとつて、全くもつて予想外だった。あそこに南奈美と若葉枯葉がおらず、別の団体様がいるとは。

「ちゃんと奈美ちゃん。誘導したんだけどな……」

普通に。何もなければ。奈美は間違いなく文芸部部室で昼食を取るはずだった。穂波がそう考えるように、朝の内に奈美に仕込んでいたのだから。仕込みは上々だったはずだ。

しかし実際、部室にはいなかった。不確定要素が介入したのだろう。不確定要素。穂波が知らない奈美の関係者。もしくは枯葉の関係者か。

それとも、私以外に授業参観なのに授業を見るのが目的じゃない人でもいたのかしらん。

真面目に考えたところでわかるわけもないので、次の目的地までに着くまでの暇つぶしに、自分のプランを潰した相手とそのプランが何かを考える穂波。

頭の後ろで腕を組んで、今にも口笛を吹きそうな歩みで階段を下り、二階にたどり着くと。

「おややや？」

向こうから、先程三階で見かけた少女が歩いて来ていた。ついさっき別れたばかりとはいえ、すでにこの少女はこの辺にはいないだろうと思っていたので驚いた。と、同時に、運命って奴かしら？と、保健室に問い合わせたが、当然返信はない。あつても困る。

少女は、後ろで手を組んで、ゆっくりと、楽しそうに歩いている。

穂波とは違い、実際に口笛も吹いている。あれが私が失った若さかと、穂波は思わなくもない。

少女は歩みが遅い事に加え、まるでお上りさんのようにキョロキョロと辺りを見回したり、教室を覗いたり外を眺めているので、先に階段を下ったはずなのに、ここで穂波と出会いそうになってるようだ。

「ふむ」

そう。まだ出会ってはいない。距離もまだ離れているし、穂波は少女に気付いているが、少女は穂波に気付いていない（気にしていない）のだ。

穂波は歩みを止めた。何事も観察が重要だ。契約はそれに尽きる。相手と契約を結べるかを観察するのではない。南穂波のтонでも契約理論の前は、どんな物とも契約出来る。無機物有機物問わず。果ては生きているか死んでいるかも問わない。なら何故観察するかというと、どんな契約なら結べるかを観察して決めるのだ。観察。大事です。

穂波が立ち止まって見ている、全く気にしていないのか。少女は口笛を吹きながら、廊下の真ん中を、我が物顔で歩き、物珍しそう

に窓の外を見ている。駐輪場なんて、そんな珍しくないと思うが。曲がり角で、クルツと九十度ターン。どうやらこちらではなく、生徒棟の方へ向かうようだ。穂波は歩みを再開し、少女の後をつけようと思った。

「おややや……?」

が、止めた。少女が歩き出さず、固まってしまったからだ。遠目で観察出来る横顔から察するに、渡り廊下の先を見て、驚いているようだ。残念ながら、穂波には透視能力がないので、少女が何を見て驚いているかわからない。

「は?」

少女が動き出すまで、だいたい数秒といったところか。穂波は目を疑った。少女の動きが奇妙だったからだ。

少女は、渡り廊下の方へ頭を向けたまま、こちらに体を向けて、走り出そうとした。顔と体を一緒に動かせばいいだろうに。というより、そんな動き、意識しなければ出来ないだろう。

「あちゃー……」

では、意識してそんな体に負担がある動きをしたのだろうか。それは少女にしかわからない事だが、穂波には意識してしたようには思えなかった。意識してそのような動きが出来る人間が、転ぶわけがないからだ。そう。少女は転んだ。盛大に。恐らく、穂波の方に走り出そうとしたのだろう。その結果、足が纏れて転んだ。受け身も取らず、胸を思いつきり廊下にぶつけた。痛そうだった。手に持っていたバツクの中身も気になるし、転ぶ時も渡り廊下の方に顔を向けていたので、首も心配だ。

「……しかしあれね」

少女が驚いていた原因であり、恐らく逃げ出そうとした人物が、少女の側に駆け寄り、「大丈夫？」と声をかけているのを見ながら、穂波は思った。私、独り言多くなってきたな。と。

12時25分〜特別棟二階廊下〜

5 - 5 ・昼休み 奇妙な人見て思う事（後書き）

来てる。ちょっとずつ来てる。ポケ要員が来てる。そう信じて疑わ
ない。

また次回。

5 - 6 ・ 昼休み ノイズのない世界で

12時15分〜特別棟三階廊下 特別棟二階渡り廊下前

『あたし』は歩いてきた。『私』ではなく『あたし』が歩いている。『あたし』が手足を動かさず、『あたし』が地を踏み締め歩いている。それを『あたし』は感じる。廊下の固い感触。それを蹴る感触。体が風を切る感触。『あたし』は感じていた。知識ではなく実際に画面越しではなく肌で。『あたし』は実感していた。

ああ。これが歩くという事なのね。

『あたし』は見ていた。『私』ではなく『あたし』が見ている。『あたし』が頭を動かさず、『あたし』が眼球を動かさず、『あたし』が焦点を合わせて、『あたし』が見たい物を見れる。画面越しではないクリアな映像。『あたし』は見てる。『私』が見てる物で見てるのではなくて。『あたし』が見たい物を見ている。

ああ。これが見るといふ事なのね。

歩く事も見る事も。『あたし』は知っている。知識として。『私』として。でも実際。肌で。体で。それを実際に味わうのは、全く違う。

地図上で思い描く世界と、実際に歩く世界が全く違うように。テレビで見た世界と、実際に見た世界が違うように。

『あたし』にとって、全てが新鮮。全てが感動。
ああ。これが窓。冷たい。これが冷たい。ああ。あれが空。青い。
あれが青い。あれが雲。あれが山。あれが木。あれが車。これがド
ア。これが開ける。あれが黒板。これがチヨーク。これが嫌な音。
これが閉める。これが階段。これが降りる。これが下る。これが口
笛。「あたしはあたし」これが声。これが喋る。あれが蛍光灯。あ
れが光。あれが自転車。あれが駐輪場。

ああ。これが本当の世界。

『あたし』は今までも、数回、冰山つららの代わりに出てきた事はあつたが。今日のように今のように、完全に主導権を握ったのは初めてだった。こんなにクリアな世界を見たのは初めてだった。

つららが表に出ている時の『あたし』は、いつもディスプレイ越しに世界を見ていた。しかもアナログテレビのディスプレイ越しである。もうすぐ見えなくなる。そんな状態である。

そして今まで数回出て来ていた時は、いうならば半身。体半分だけ、ディスプレイから出て来ていた。完全とは言えない。

しかし今は、完全だ。完全に、ディスプレイから出た。どこかの幽霊のように。ようやく。ようやく、『あたし』はディスプレイから出てこれたのだ。ノイズ混じりの世界から。この綺麗な世界に。

『あなたはもう少し隅で泣いてなさい。大丈夫。その間はあたしがうまくやっておくから』

まだ泣いている『私』にそう声をかけ、『あたし』は目的地を目指す。

『あたし』が向かっているのは、職員棟四階である。

目的は昼食を食べる為。つららはまだ昼食を食べていないが、今は

食べれる心理状態ではない。というわけで、『あたし』が代わりに食べてあげるのだ。

食べるなら場所はどこでもいいのだが、『あたし』は見晴らしがいいところで食べたかった。なので、この学校で一番見晴らしがいい職員棟四階に向かっているのだ。

本当は、この学校で一番見晴らしがいい場所は屋上なのだが、つららが一度も屋上に行った事がないので、『あたし』も屋上がどんな光景、どんな状態なのか知らない。もしかしたら、屋上は酷い有様なのかも知れないし、風が強くて、弁当を落ち着いて味わえないかもしれない。味わうという事にも重きを置きたいので、今回は、『あたし』は屋上ではなく四階に向かう事にした。そう。今回は。

屋上はまた今度。いいえ。お弁当を食べてからにしよう。授業なんてサボればいいし。クスクスクスクス・・・

これからの楽しい予定を考えながら、『あたし』はクルツと九十度ターン。

「なっ」

しかし、『あたし』の足はそこで止まった。なぜなら、渡り廊下の先には。

「あら偶然。今からそっちに行こうと思ったのよ」

『あたし』の大嫌いな神社神裂が手を振っていたから。

「……」

『あたし』は固まった。何も言えない。足も動かない。世界にノイ

ズが混じり始めた。いつもの世界よりはマシだが、さっきまでのクリアな世界とは比べものにならない汚さだ。『あたし』は逃げたかった。このままではいけない。このままではまたディスプレイの中だ。『あたし』にはまだやりたい事がある。食べたい。食べるという事を実感したい、味わいたい。しかしそれはもう叶いそうにはない。

神裂だけならよかった。神裂だけなら、まだ『あたし』は逃げられたかもしれない。テレビの中に戻らなくてもよかったかもしれない。「あー……来ちゃいました」

問題だったのは、神裂の隣にいた人物だった。

『おかあ、さん？』

泣いていた『私』が顔を上げた。

『チツ。あんたは泣いて喚いて小さくなってりやいいんだよ!!』

『あたし』は『あたし』の意志から離れつつある体を必死に動かし、逃げようとした。

「くっつ!？」

しかし、無理だった。体は『あたし』の思った通りに動かず、『あたし』は盛大に転んだ。思いつきり廊下に体を打ち、激しい痛みを感じた。

ああ。これが痛いって事ね。

その痛みさえ新鮮だったのに。

「だ　じよ　ぶ？」

近寄って来た人物がどちらなのかも、何を言っているのかも、『あたし』にはもうわからない。ノイズだ。ノイズしかない。『あたし』はまた、テレビの中に戻される。ディスプレイ越しの世界に戻される。イメージとしてはすでに肩まで、テレビの中に呑みこまれた。嫌だなと『あたし』は思う。しかし『あたし』はそれに抗う事は出来ない。

ノイズ混じりの意識の中で、『あたし』は最後にこう思う。

ああ。これが死にたくない（消えたくない）っていう気持ちなのね。

12時25分〜特別棟二階渡り廊下〜

12時25分〜特別棟二階渡り廊下〜

「つらら!？」

氷山つららが盛大に転んだのを見て、氷山吹雪は驚きの声を上げ、神社神裂は足早につららの元に向かった。

「大丈夫？」

神裂はつららの側に屈み込み、その声をかけるが、つららから反応は返って来ない。うつすらと目を開けているが、どうも気を失っているようだ。

頭を打ったようには見えなかったし、呼吸も正常なので、そんなに心配しなくてもいいと思うが。いや、頭を打ってないのに気を失っているというのは、心配するべきか。

「あう！」

神裂がそう考えていると、後ろの方でそんな声が聞こえた。振り向くと、つららと同じ様に吹雪が廊下に倒れていた。どうも転んだようだ。

神裂は落ち着いた印象を与える動きやすい大学生っぽい服を着て来たが、吹雪は着物である。どう考えても走るのには適していない。しかし慌てていた吹雪は、走ろうとしたのだろう。結果、転んだようだ。幸い、つららとは違い気を失ってはいないようだ。鼻を押さえながら、すぐに体を起こした。顔を強打したようだ。痛そうである。しっかりして下さいよ。と、神裂は思った。

神裂はつい先程、初めて吹雪に出会ったが、吹雪からはおっとりとしたお嬢様というイメージを持った。緊張感が足りないというか、鈍臭いというか。いつも緊張しているようなつららとは、真逆だ。というのが神裂の第一印象だったが、どこかつららに似ている雰囲気もある。

二面性がありそうだ。血は争えないな。と、神裂は、鼻を押さえながらまた転びそうになっている吹雪を見ながら思う。

「その子、大丈夫？」

呆れが混じった目で吹雪を見ている神裂に、声をかける人物がいた。声がした方を見ると、いつからそこにいたのか。スーツ姿の女性がいた。大丈夫？と聞いたわりには、表情からは心配の色は読み取れない。どちらかというところ、おもしろがっているようだ。神裂の第一印象は、猫。

「ええ、大丈夫だと思いますよ」

「そう。それはよかったわ」

「……………まだ何か？」

一向に立ち去らず、こちらをニヤニヤと（実際はただ微笑みを浮かべていただけだが、神裂にはそう見えた）見ている女性に、神裂は首を傾げる。

「私、こう見えて人を観察するの得意なのよ」

「はあ……………」

いえ、あなたは人を観察するの得意そうですよ。とは思ったが、口には出さない。

「丸い人は好きじゃないわ。私、尖ってる人が好きなの。じゃあね」

自分の言いたい事を言うだけ言った女性は、神裂にひらひらと手を振って、神裂の後ろできょとんとしていた吹雪に会釈して、生徒棟へ去って行った。何だあの人。と、神裂は思った。

「お知り合い？」

「いえ、あんなユニークな人には会った事はありませんね」

肩を竦める。一度会ったら忘れないような人だった。

「つららさんは大丈夫？」

つららを神裂と挟むように、吹雪もつららの側に屈んだ。

「大丈夫だと思いますよ。すぐ起きます」

「そう。よかった」

今日会ったばかりの神裂の言葉を鵜呑みするのはどうかと思うが、吹雪は安心したようだ。慈しみの笑みを浮かべながら、つららの髪をすく。その姿は優しい母親そのものだった。

「あなたが丸くて、つららさんが尖ってるっていう事ですよね」

「え？ああ、はい」

つららの髪をすきながら言った吹雪の言葉に、神裂は少し戸惑った。吹雪が何を言いたいかわからなかったからではない。吹雪が、あの女性の言った事を理解していたとは思わなかったからだ。

「きつと私も、丸いんでしょうね」

「……………」

どこか寂しそうにそう言う吹雪に、神裂はどんな言葉をかけるべきか悩んだが、結局、曖昧に笑い言うべき事を言う事にした。

「鼻血、出てますよ？」

「え!？」

12時30分〜特別棟二階渡り廊下〜

5 - 6 ・ 昼休み ノイズのない世界で（後書き）

リングというホラー映画と、コワレ丸とかなんとかいう漫画があったな……。

まあ、そんな事より、吹雪さんってこんな人だっけ……。なんか、かわいらしいね。

転んでからしばらく経って、鼻血出たりするよね。ない？いや、なくはない。

というか、ようやく30分である。昼休みの長さにはわたくしも動揺しております。

また次回だと信じてやみません。

5・7・昼休み 食中毒の原因それは愛

11時53分くらいじゃね？特別棟三階文芸部部室 職員棟四階
展望室

文芸部部室を桜木さくらと冰山つららに明け渡した若葉枯葉と南奈美。

奈美が、ついて来なさい。と言ったので、へいへい。と枯葉はついて行く。階段で、ご立腹なスーツ姿の女性や、死にかけている女性が見たが、奈美は無視して、どんどん進む。枯葉は気になったが、奈美に腕を引っ張られ、結局声をかけずに通り過ぎた。

「あれ？そっち行くの？」

「はい。こっち行くんです」

二階で生徒棟に行くと思ったが、奈美はそのまま階段を下った。保健室にでも行くのかなあ。弁当食べたいんだけどなあ。と思いつつ、枯葉は奈美に手を引っ張られながら、おとなしくついていく。

「俺、教室戻って」「ダメです」「ですよー……」

思った通り、奈美は生徒棟を通り過ぎ職員棟へ。枯葉も、おとなしく職員棟へ。抵抗するより、流された方が楽である。

「え？あつちじゃねえの？」

「こっちです」

職員棟に着いて、奈美は保健室とは反対方向へ曲がった。

「保健室行かねえの？」

「保健室行きたいんですか？」

奈美は立ち止まり、枯葉を一瞥した。

「いや、そういうわけじゃないけど……どこ行くわけ？」

「図書室ですよ」

奈美はそう答え、職員棟東階段への歩みを再開。引きずられように、枯葉も歩みを再開。

「図書室なら二階から行った方がよかつたんじゃないかねえの？」

そっちの方が近い。

「なんとなく二階の渡り廊下は危険な感じがしましたので、避けました」

野生の勘というか、血の警告というか。

「危険って……」

なんだそりゃ。と、枯葉は呆れつつも奈美に手を引かれながら階段を上る。手を繋ぐのが恥ずかしくなくなってる事に、果たして枯葉は気付いているだろうか。奈美の枯葉調教は順調のようだ。

そんなこんなで図書室到着。ここの図書室は、本を汚さない、静かにする。を守れば食事をしてもいい事になっているので、昼休みも始まったばかりだが、図書室にはそれなりの生徒が昼食を食べていた。食べている人のほとんどが一人なのは、触れてはいけない所である。

「失礼します」

奈美はカウンターに躊躇なく足を踏み入れ、司書室へ。手を繋いだままの枯葉も司書室へ。

司書室に入って、さすがに奈美は枯葉の手を離した。司書室では、いつも通り小梅杏が眠っていた。毛布がずり落ちていたので、奈美はかけ直してあげた。優しいね。

「……」

枯葉は小梅が枕代わりに使っている物に興味を示した。お菓子の箱だった。側面を見ると『雷叩き起こし』と書かれている。土産物だろうか。潰れてないといいけど。

「多分、教頭先生からもらったんじゃないですか？」

自分の荷物を回収した奈美は、信じられん。食べ物を枕にするなど。という状態の枯葉にそう教えた。

「教頭先生？」

枯葉は教頭先生がどんな人だったかあまり覚えてない。影が薄いからかな。

「教頭先生は頻繁に旅行に行くみたいで、先生達にお土産を買ってくるんです。私もよく、小梅先生とか子猫先生におそろわけてもらったりするんですよ」

「へえー」

「さっ、行きますよ」

役得って奴か。なるほどな。と、感心している枯葉の手を握り、奈美は司書室から出る。枯葉は抵抗する気がもう全くないのか、おとなしく手を引かれる。

「今度はどこ行くわけ？」

「展望室です」

図書室から出た二人は、階段を上る。目指すは職員棟四階、展望室である。

「展望室？あんな何にもないところに、何しに行くわけ？」

枯葉も去年、一度行った事があるが、あそこは本当に何もない。だっ広い空間があるだけだ。確かに南側が全面ガラス張りになっていて、眺めはよかったが、それも一人で見た枯葉には、なんか寂しいなあ。という感想しか抱けなかった。

「もちろん。お弁当を食べに行くんです」

当然の事を言いました。

「お弁当って……」

まあ確かにあそこは、弁当を食べる場所としてはいいかもしれないけど。

「俺、持ってないけど。弁当」

教室に置きっぱなしだ。一緒に食べるなら、一度教室に戻らなければ。

「大丈夫です。枯葉君の分も私が持ってますから」

「ああ、なら大丈夫だなあ……って、どういう事？」

さすがに意味がわからず枯葉は立ち止まった。当然奈美も立ち止まる。現在の居場所、三階と四階の間の踊り間。

「え？なに？どついう事？俺の弁当持ってるの？」

いつの間に回収したの？今日ほぼずっと一緒にいたよね。

「枯葉君のお弁当は持ってませんけど、枯葉君の分のお弁当は持ってます」

奈美は手に持っていたバックを掲げた。その中に入ってるらしい。

「俺の分……お前、作ってきたの？」

手作り弁当。愛妻弁当。

枯葉の脳裏にそんな単語が浮かんだ。と、同時に鳥肌が立った。悪寒が走る。昔、似たような事があって大変な目にあっただよな……。

「私じゃないです。お母さんが作ったんです」

枯葉の心の内には気付かず、奈美は呆れ混じりに今朝起きた事を話し始めた。

「今日私は、いつも通り五時に起きました」

「……あ？あぁ……早起きだな」

奈美の手作りではないという事がわかり、悪寒は収まったがまだ気分は優れない。

「すると、すでにお母さんがキッチンにいたんです。何でも、授業参観が楽しみで早く起きちゃったらしくて……」

小学生か。あの母親は。

奈美は嘆息した。

「お母さんは、早起きして暇だったから、お弁当を三つ作っちゃったらしいんです。私の分と、お母さんの分。もう一つはてっきり、守の分かと思っただんですけど、枯葉君の分って言うんですよ」

「俺の？何で？」

そこはおとなしく息子にやっつけよ。

「お母さんいわく、好きな人とペアランチって、素敵でしょ。って
いう事らしいです。なるほど、それは素敵だな。と、私は思って今
に至ります。さっ、行きましようか」

説明を終えた奈美は枯葉の手を取り、階段を上り始めた。枯葉の手
が、少し冷たくなっている気がしたが、血の気が引いたからとは考
えず、ああ、私が握っていないとすぐ冷たくなっちゃう季節なんだ
な。と、奈美は思った。幸せな奴である。

「行くのはまあもうどうでもいいけど、ペアランチって何だ？」

説明不十分である。

「二人で同じお弁当を食べる事です。常識ですよ？」

「いや、そんな常識聞いた事ねえ……」

はあ。と、疲れたような落ち込んだようなため息をつく枯葉。奈美
に手を握られたからかはわからないが、気分の悪さはすでにないよ
うだが、疲れは溜まっているようだ。

「安心して下さい枯葉君」

四階に着いた奈美は、立ち止まり微笑みながら枯葉の方を向いた。

「私の愛がこもった手作り弁当は、また今度作って来てあげますよ。
私としては、彼氏に初めてお弁当を作るのは、公園デートの時がい
いなと思ってましたけど、枯葉君がどうしてもっていうなら、明日

にでも作ってきましょうか？」

どうも奈美は、枯葉のため息を、なんだ、奈美の手作り弁当じゃないのか。ガツカリしたぜ。という意味に捉えたらしい。幸せ物め。

「愛が……」

愛がこもった手作り弁当。その言葉を聞いて、枯葉の脳裏にある言葉が、台詞がよぎった。

『これにはね。私の愛が、いーっぱいつ、いーっぱいつ、入ってるの。だからね、これを食べればね。枯葉にも、私がどれだけ枯葉を愛してるかわかると思うんだ。あはっ。私、嬉しい。これで枯葉にも、私の愛が伝わるんじゃない？私の愛の意味がわかるんじゃない？もう二度と、引越しても友達だよなんて言わなくなるんじゃない？そうなんですよ？あはっ。あはははははっ！いいなっ、いいなっ。それってとっても幸せだよなっ。だから、ね？早く口を開けてよ枯葉。早く口を開けて、私の愛を、呑み込んで？』

「っ……っ！」

「どうかしましたか？」

痛みを堪えるように顔を歪めた枯葉に、心配そうに声をかける奈美。

「いや……何でもない、何でもないから、弁当の件は丁重にお断りします」

胃がキリキリするのは、空腹だからだと、枯葉は思ったかった。

12時10分〜職員棟四階展望室

「……なに、ここ。魔境？」

「なに言ってるんですか？」

職員棟四階は展望室と呼ばれ、眺めのよさから昼食の場として人気スポットと説明したが、実は、それほど使う人間はいない。じゃあ人気スポットじゃねえじゃんと言われてしまうかもしれないが、人気スポットなのである。ただ、昼食時だけは、ここには使用条件があり、それをクリア出来る人間が少ないから、使用する人間も少なくなるのだ。その為現在も、人気スポットなのに、枯葉と奈美以外には、四組のカップルしかいない。そう、カップルしかいない。どんなカップルがいるかというところ。

「はい、ダーリン。あーん」

「あーん。ん、とっても美味しいよマイハニー」

「やん。マイハニー、なんて。ダーリン、私照れちゃう」

「照れる君もカワイイよ……」

「だ、ダメよダーリン、人が見てるわ……」

「僕以外の人間なんて、カボチャだと思ってご覧……ね？恥ずかしいじゃないでしょ……？」

「ホントね……ダーリン」

中央にいるバカカップルはこんな感じ。

「好きよ」

「俺も好きさ」

「私の方が好きよ」

「いや、俺の方が好きだね」

「私よ」

「いや、俺だね」

「勝負する？」

「こんなところで？」

「出来ないの？」

「ふっ、馬鹿にしなくてくれよ。出来るに決まってるじゃないか」

「そう。じゃあ、私を楽しませてよね」

「そんなの、昼食前さ……」

南の窓際近くにいるバカップルはこんな感じ。

「べ、別にあれだからねっ。これは私があんたの為に作りたかったわけじゃないんだからねっ。あんたがどうしても、どーしてもって、土下座までして、あまりにも、あーまーりにもっ！情けなかったから、仕方なく、しーかーたーなーくっ！作って来てあげたんだからねっ！そこんとこ勘違いしないでよねっ！」

「うん。わかってるよ。ありがとね」

「わ、わかってればいいのよ………で？」

「ん？なに？」

「……味よ、味」

「え？ごめん、よく聞こえなかった。もう一度言ってくれる？」

「だから、その………美味しいかって聞いているのよ………」

「ああ、なんだそんな事か」

「そ、そんな事って何よっ！バカにしてるわけ！？」

「うん。バカにした」

「なっ……あ、あんだねえ！」

「だって、君が作ってくれた物が、美味しくないわけじゃないか」

「なっ!?!」

「あっ、顔真っ赤。カワイイね」

「……み、み、」

「ん?」

「見るなバカア!!」

南西の隅にいるバカカップルはこんな感じ。

「はい、あっちゃん。あっちゃんの大好きなハンバーグだよ。私、頑張って作ったんだよ。はい、あーん」

「やめろっつーの」

「えー。そんな事言わないですよ。ほらあ、あーんって。ほらほらあ。恥ずかしくなくてもいいじゃんかあ」

「やめろって……ったく、うぜえなあ」

「あっ……」

「……おい、何落としてんだよ」

「ご、ごめんね、ごめんねあっちゃん。服汚してごめんね。大好きなハンバーグ落としてごめんね。今拭くね。ごめんなさい。本当にごめんなさい」

「こんくらい自分で拭ける」

「あつ、そうだよね……ごめんね。お節介だったよね、ごめんなさい……私、うざいよね。ごめんね。あつ、私、ハンバーグ捨ててるね……ホントにごめんなさい」

「……ちっ、捨てなくていい」

「え？」

「だから、食うから捨てなくていいって言ったんだよ」

「で、でも、落ちちゃって汚いよ？」

「……お前が作ってくれたのが、汚ねえわけねえだろ」

「あっちゃん……」

北西の隅にいるバカップルはこんな感じ。

「……説明を求めろ」

この惨状を見て、胸やけしそうな枯葉。

「ここ、昼休みはカップル専用なんです。知らなかったんですか？」
そして特に何も感じていないご様子の奈美は、バックから弁当を取り出し準備しながら、淡々とこの場所の説明を枯葉にした。

「去年まではそうじゃなかったんです。昼休みここは、誰でも使用出来ました。でも、今年に入ってから、あの二人がここを使用するようになったんです」

あの二人。奈美は中央で食べているバカップルを指差した。指差したが、そっちを見ようとはしない。枯葉も見ない。だってあのバカップル、もうイチャイチャってレベルじゃねえもん。枯葉はもちろんの事、奈美もよく見ると耳が赤い。見てなくても、いるだけで恥ずかしい。

「ずっとあれです」

「ああ……読めてきた」

「はい。あの二人は注意してもやめません。ずっとああです。枯葉君もご存知の通り、先生達はどうぞご自由にです。子猫先生は一度注意したらいいんですけど、若さを止める事は出来ない」と

「頼りにならない先生だな……」

「じゃあ枯葉君は止められるんですか？」

「……無理です」

あれは、無理です。馬に蹴られる前に、羞恥心で殺されます。

「みんなもそうでした。だいたい一月ですか。一月経った頃には、昼休み、ここはあのカップル専用になりました」

「ああ、うん。だろうなあ」

あんなイチャイチャバカップルがいる近くで、昼食は食べれまい。特に彼氏、彼女がいない者は。

「で、今は、あのカップルがいても気にせず食べれる者、自然とカップル専用になったわけです」

「カップル専用というか……」

バカップル専用だろ。と、枯葉は思った。もちろん、これは暗黙ルール。実際四階の階段に、『昼食時カップル限定。命が惜しくない者はどうぞご自由に』という立て札が置いてあるわけでもないし、友達同士で来たり一人で来たところで、追いつかれるわけではない。ただ、居心地が悪いので、バカップル以外は近寄らなくなっただけだ。なので、同じ空間で乳繰りあってもどうも思わない人間や、そもそも一部の他人にしか興味がない人間もどき等は、問題なく利用出来る。

「というわけで、枯葉君。カップルである私達は何の問題もないので、早くお弁当を食べましょう」

ちなみに弁当は至って普通だった。から揚げやタマゴ焼きやアスパラ巻き。カラフルな弁当だ。気合い入れて作った感が出てます。

「いや、カップルじゃねえし。それにカップルでも問題有りだし。」

「というか、お前も内心、ここ失敗したなと思ってるだろ！」

枯葉の顔を見る奈美の顔は、真っ赤である。見てなくてもね。なんかね。声が聞こえるんですよ。

「いいえ。全く思ってます。ほら、枯葉君。あーん」

恥ずかしさを振り払うように、奈美は枯葉にから揚げをあーん。

「いやいやいやいや！？しないよ！？百歩譲ってここで食べるのは承諾したとしても、そういう事は絶対にしないよ！？」

奈美から距離を取る枯葉。しかし枯葉の後ろはガラス張り！しまったこれ嵌められた！

「ルールは守らないといけません。はい、あーん」

「ルールなの！？そうやって食べるのがルールなの！？じゃあ食べない！やっぱり俺戻る！教室戻る！母ちゃんが作ってくれた弁当が待ってるから！？」

「そのお弁当は夕食にして下さい。はい、あーん」

「い、いや、やめようよ南さん。雰囲気には呑まれるのはよくないよ？弁当は二つあるんだから、二人仲良く自分の分の弁当を食べようよ」

「最初の予定だったらそれでもよかったですけど、部室に行く前に荷物を取り忘れたり、桜木さん達が来たりしたので、この空気を利用して、はい、あーん」

「お前なんかもう色々切羽詰まってない!？」

言ってる事がよくわかりません!

「我が儘言わないで、あーん」

「ぐう……」

恥ずかしそうに頬を染めながらも、睨むように枯葉の目をじーっと見つめ、口元から揚げを持ってくる奈美。

前方に奈美。後方はガラス。右方は壁。左方からは熱い視線。どこかの、というか南のバカップルがイチャイチャするのをやめ、お手並み拝見というように見ているのだ。

「あーん」

「うう……」

逃げ道がない気がします。もう、ここはおとなしく口を開き、あーんするしかないのではないのでしょうか。ああでもきつと、一度許したら後はなし崩し的にずっと許す羽目になるんだろな。でももうどうにでもなれよ。別にこれにこいつの愛入ってないし!

そんな感じで決意を固め。枯葉が、東南のバカップルに今にもなりそうだった時、そいつは現れた。

「そうはい神裂かんさきと私に言わせたいのかー!ー!」

「ねえちやくふう」

「なっ、お、お前はー!!」

突如現れた、枯葉にとつての救世主、奈美にとつてはお邪魔虫の名前を呼ぼうとした口にするかさずから揚げがぶち込んだ奈美は、背後からのご立腹な声を聞き流し、満足げに頷きました。

12時25分、職員棟四階展望室

5・7・昼休み 食中毒の原因それは愛（後書き）

はい。そろそろ、昼休みも終わらせたいので、時を加速させようかなあと思つてます。無理かなあ。まあやってみるしかないよなあ。落ち着いて素数を数えて考えて見ますね。

うーん。まあ、もう少し頑張つて見ようかなあ……。

5 - 8 ・昼休み 壊れた人形。部外者は笑う

12時35分〜特別棟三階文芸部部室

「さ、さくら？美味しい？」

桜木押花は桜木さくらが手作りの卵焼きを食べた後、恐る恐る尋ねた。

「ん……」

さくらは弁当を死んだ魚の目で見ながら頷いた。いや、もしかしたら、ただ卵焼きを咀嚼しただけかもしれない。それほど小さな頷きだった。押花、オロオロ。

「お、お姉様？これ食べますか、しら？」

押花の後に続くように、虹野光はから揚げを恐る恐るさくらに差し出してみた。

「……………ん」

さくらはしばらく死んだ魚の目で弁当を見つめていた後、首を横に振った。それは先程の頷き同様小さな動きだったが、先程とは違い明確な拒否だった。光、オロオロ。

「あら……さくらちゃんは……もうお腹いっぱい、かしら？」

光のから揚げを拒否したのを見た虹野望は、うつすら微笑みながらさくらに、前の二人とは違い恐る恐るではなく、弱々しく、しかし挑戦的な物言いで尋ねた。

「……………」

さくらの、弁当を見るでもなく見ていた死んだ魚の目が少し泳いだ。泳いだ、だけだ。頷かず、首も振らず。ただ、白米を口に運んだ。無視したのか、それとも行動が返答なのか。今のさくらからは読み取れない。母親の、押花でさえも。

「私は……………もう、お腹いっぱいよ」

さくらが自分に何かを言う事、ましてやこつちを見る事なんて、微塵も期待していなかった望は、他の二人のようにオロオロするわけもなく、そう呟いて、箸を置いた。昼食開始から10分。から揚げ一つに卵焼き一つ、小さな俵型のおむすび一つ、オレンジを一切れ食べて、もうお腹いっぱいのようなようだ。

「よかったら、どうぞ……………押花さん……………もちろん、さくらちゃん、も？」

三段重箱弁当。光が中身を気にせず猛ダツシュした為、中身をぐちゃぐちゃ。しかし食べれないわけではない。

元々みんな（望的にはさくら、押花、光、望、つららの五人。光的には四人）で食べようと作ってきた物だ。光だけで残り全てを食べ

切れるわけがない。

「どうぞ、ですの」

本当はさくらにも食べてもらいたいのだが、さくらには先程断られてしまったので、光は恐る恐る押花に重箱を近づけた。

「……………どうも」

望には敵意があるが、光には敵意はない。どう接するべきかわからない状態。とりあえず、今にも泣き出しそうな光の親切を無下に出る程、今の押花はヒトデナシではないので、押花は重箱からから揚げを頂いた。美味しい。ジューシーでしっかり味もついている。

「これ……………誰が？」

思わずそう聞いてしまった。望が作ったとは思えない味だ。だってこの虚弱野郎。おむすびだって握れそうもない。

「ふえ？え、えっと、松子さんです、の。あつ、ま、松子さんっていうのは、家政婦さんで、わたくしが小さい頃からいて」

光は、無視も拒否もされず、それどころか話しかけて来るとは思ってもみなかったたので、驚いた。驚いたが、もう色々と限界だった光はこれ幸いと、聞いてもない事を喋り始めた。

無言で昼食を食べるのに耐え切れなかったのは押花も同様だったのか、別に松子さんの情報はどうでもよかったのだが、押花は「へえ」「そうなの」と相槌を打って上げた。

「……………ぶっ」

食べる為に使った体力を回復させるように背もたれにもたれかかり、天井を眺めていた望は、光と押花が互いを使つて精神の安定を得ようとしているのを感じて、鼻で笑つた。別に馬鹿にしたわけではない。ただ、不幸中の幸いだなと思つたのだ。この昼食会は言わば、顔合わせ。そして、光のさくらへの繋がりを強くしようという目論みが（望には）あつたわけだが。色々合つてそれは不可能になつたが、光と押花の繋がりを作れたようだ。これを幸いと呼ばず何と云う。

「……」

しかし問題はさくらちゃん。と、望は天井を眺めながらぼんやり思う。

さくらは押花と光が話しているのも気にせず、死んだ魚の目をしながらもそもそと弁当を食べているだろう。体中から重苦しい空気を散布させながら弁当を食べているはずだ。

心を閉ざしたというより、考えるのを極力やめたつてとこかしら。と、今の光の状態を望はそう推察する。

望に対してどうするかとか、光に対してどうするかとか。いくら考えても答えが出ないわからない。自分で考えてわからないから、他者に従うようになる。他者にどうにかしてもらおうとする。この中で一番信頼している押花が、お弁当を食べましようと言つたから、お弁当を食べている。聞かれたから、答える。それだけ。声に反応する人形に近い。そこに自分の意思はほとんどない。そう、ほとんど。そこには少し、意思がある。意思なき存在でなければいけない人形なのに、意思がある。人形としても不出来だ。

私の言葉には方向性が定まってないから無視。それはいいけれど。光の言葉を拒否したのが問題ね。

さくらが光のから揚げを貰わなかった。望が問題視してるのはそこだ。つまりそれは、さくらが光に対して怒っているという事だ。嫌ってはいないと思うが、このままではよくない。このまま別れたら、光はさくらが怒ってる嫌ってるどうしようどうしよとオドオドし、さくらもさくらでどうしようどうしよとどうでもいいやと、進展しなくなるどころか、せつかく出来かけてきたさくらと光の繋がりが無くなってしまふ。これでは、光と押花の繋がりが強くなっても意味がない。さくらと光。それが全てのベースなのだ。

望の希望としては、押花にさくらの機嫌を直してもらいたいのだが、どうも押花は子供との接し方が迷子になっているようで、いまいちさくらに踏み込み切れないご様子。母親何だからしっかりして下さいよ。と、望は自分を棚に上げて嘆く。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

光の家政婦の話も終わってしまい、また、光と押花がさくらの様子を窺い、さくらが死んだ魚の目のままモソモソと弁当を食べ、望が私関係ないしー。というように天井を眺めるという状態に戻ってしまった。空気が重くて、箸を動かすのもしんどいです。

ああ、誰か空気を変えて。

さくら以外の三人がそう思ったその時。

「呼ばれてないけどここにちわ」

部室の扉を開け、新鮮な空気と共に一人の女性が現れた。

「ある時は完璧ある時は天才ある時は善人ある時はみんなの友人ある時は不完全ある時は凡人ある時は悪人ある時は一人だけの親友。そうです私は神社神裂。神の社の神を裂ける私に、裂けない物は何もない。例えそれが目に見えないモノだとしても。以後、よろしくどうぞ」

長々と意味がない口上を述べた女性、神社神裂に、押花と光はもちろん、さしもの望も呆気に取られた。

「かみやしろさん……………？」

さくらの死んだ魚の目に蛍の光のような弱々しい光が灯った。

「ほら、二人とも入って入って」

神裂はそんな四人の様子を見て、満足そうに頷いた後入室。後ろの二人を手招きした。

「あ……………どうも。初めまして」

恥ずかしげに入ってきたのは、鼻にティッシュを詰めた着物姿の氷山吹雪。

「……………どうも」

吹雪の背中に隠れるように、体を縮こませてるのは冰山つらら。

これにて、文芸部部室には、桜木親子。虹野親子。冰山親子。三組の親子が揃った事になる。

「さあ、これでようやくやっとホントに役者は揃いましたね。楽しい楽しいお昼の始まりですね」

この混迷を深める文芸部部室を切り抜ける鍵は、完璧で天才な部外者であるのは間違いない。

12時45分〜特別棟三階文芸部部室〜

5 - 8 ・ 昼休み 壊れた人形。部外者は笑う（後書き）

いいやもう限界だ！飛ばすね！

これ以上は私に文芸部部室は書く事は出来ない！

だから飛ばす！ぶつ飛ばす！

おまつ！嘘じゃねえぞ！やるって言ったらやるからんな！次の話は急に13時になっていって、「嫌な……事件だったね……」って、紅葉が呟くからな！俺はやると言ったらやる人間だぞ！この後書きは嘘の匂いがぶんぶんするぜとか思ってもやるかな！

あつ！そんな事よりスーパー家政婦松松子が辞書に追加されたよ！
やったねさくらちゃん！家族が

はい、また次回をお楽しみー！

蛇足 語る必要のない重要な事

「嫌な……事件だったね……」

と、私の親しい友。若葉紅葉を呟いた。彼女の周りには、からあげやハンバーグ。白米に梅干し。アスパラのベーコン巻きにポテトサラダ。それと三つの弁当箱。三人分の弁当の残骸が、足の踏み場もないほど散乱している。

食料の中央に立つ私の心の友。若葉紅葉の右手には血が滴る包丁が握られていた。ああ、彼女がこの食料を調理したのだなど、私は悟った。そして残骸にしたのも彼女だと。

残骸がうごめいた。ハンバーグとから揚げの中から人間の手が。白米と梅干しから人間の体が。アスパラのベーコン巻きから足が。そしてポテトサラダから顔が現れた。その顔には見覚えがある。南奈美。なるほど。私の友。若葉紅葉にとって彼女は残骸なのだ。

となるとどこかにいるはずだと、部屋を見回せばやはりいた。唯一残骸がない一角。部屋の隅で泣いている男の子がいる。若葉枯葉。私の赤の他人。若葉紅葉にとって彼だけは残骸ではないのだろう。

包丁を持った彼女がこちらを向く。血に塗られたその顔は美しい。残骸を踏み潰しながら彼女はこちらにやってくる。どうやら彼女は私も残骸にしたいようだ。

それがわかっていても私はその場から動けない。なぜだろう。自分の足元を見てその疑問が解けた。私の足はすでに卵焼きになっていたのだ。

という、夢を見た」

「ん、出演料寄越せ」

12時00分、胡桃割市市内 八尾比丘尼高校

「だから車乗せてあげてるじゃない。私もね。親友を猟奇犯罪者に仕立てあげてしまって申し訳ないと思ってるのよ」

「ああ、珍しく車で来たと思ったたらそういうこと。ははは、意味わからん」

神社神裂と若葉紅葉は、大学から神裂の車で八尾比丘尼高校に向かっていた。向かっている理由は、もちろん授業参観に行くためだ。

運転は神裂。助手席に紅葉。青い軽自動車は軽快に進んでおります。

「あと、そうはい神裂かんざき！という寒すぎるダジャレも言ってた。やめてよね紅葉。そんな寒い事言うの。現実で言ったら絶交だから」

「そんなダジャレを私に言わせるあんたの深層心理にビックリだね。絶交ね」

「なら今すぐ車下りてくれますか若葉さん」

「冗談がわからないんですか天才さんは？」

「冗談がわからないんですか凡才さんは？」

「ところで十才^{てんさい}」

「なによ盆栽」

「あんたいつの間に車買ったわけ？親の車かなあと思ったけど、新車特有の匂いがする」

夏休みに入る前までは、毎日電車通っていて、車は持っていないと言っていた気が。

「先週よ、先週。一人暮らしするし、車があった方が色々いいと思っ
つてね」

「そんな軽い気持ちで車って買えるもんだっけ？金は？」

「もちろん全額私マナーの一括払い」

「あんた大学生よね。それにバイトしてる気配ないし。金の出所は
？」

そう聞く紅葉の視線は外を歩く野良犬に。対して興味はないようだ。

「私ってば。巷で噂の天才少女だからさ。お金なんて、腐るほど持
ってるのよ。足りないなら作ればいいしね」

それを知ってか知らずか神裂は、意味深な発言をする。

「ふーん。まあ、私に迷惑がかからないなら何やってもいいけど
ね」

しかしやはり興味はないようだ。

「私に迷惑がかかる時は先に言っつてよね。縁切るから」

「それはこつちの台詞よ。あまり私に迷惑かけないでよね。縁切るわよ」

「私、なんかあなたに迷惑かける事したっけ」

「まあ、紅葉は直接してないけどね。週一のペースで若葉紅葉抹殺計画が、おっと、口が滑ったわ」

「ちよつと待て。詳しく教えてちようだい」

さすがに興味を持たずにはいらなかったようだ。

「抹殺計画？冗談でしょ？」

「冗談だったらよかつたんだけどねー。冗談を知らない人間ってのはいるものよ」

クスクスと神裂は楽しそうに笑うが、紅葉は笑える話ではない。

「どういう事よ。私って、週一で殺される程嫌われ者なの？」

もしそうなら明日からちよつと人間不信に。

「ほら、私ってば巷じゃ天才で完璧って言われてるでしょ？」

「まあね。私は馬鹿だと思うけど」

「みんな紅葉さんみたいに思ってくればいいんだけどね。残念ながらそうもいかない。で、私を天才だとか思って利用してくる人はまだいいわけよ。崇拜してくる馬鹿がいるわけね。神様！って、馬鹿らしいけど。で、そういう奴らは私の隣に結構の頻度いて、フランクに接する紅葉が気に入らないわけなんだな！。神様になんてことを！ぶち殺す！ははは、人間こわっ」

「その台詞は私の台詞。なにそれ。マジ怖い」

「いやいや、怖がらなくていいよ。そういう動機は少数だから。大半はほれ。あいつは天才様に取り入って甘い蜜を吸ってやがる。羨ましい。殺そう。とか、いつも仲良いあいつを誘拐して脅そうとかね？怖くないでしょ？」

「怖いわ！マジかお前マジか！？嘘だと言ってよ神裂さん！？」

「それで紅葉の気が収まるなら。うん、嘘だ。嘘だよ。嘘です。嘘である。嘘でしかない。嘘でありなん。嘘としか思えない。嘘に違いない。嘘ですとも。嘘嘘嘘嘘、嘘八百」

「安心できねえし気も収まらない！ハッ、さつきからあの車ずつついて来てる気が！あっ！あの犬さつきもいた！というか神裂から殺気を感じる！」

紅葉の猜疑心が50上がった。

「大丈夫大丈夫。週一のペースで私が犯罪計画潰してるから。ほら、私ってば完璧だし。その辺抜かりないし。唯一の親友を守る為に私

は日夜頑張ってるのよ、うるうる。涙無くして語れないわね」

「……で」

白々しい演技をする神裂をじと目で睨む紅葉。

「ん？」

「どこからどこまでが冗談？」

「そうねえ……まあ、ほとんど冗談と思ってくれてよくてよ？」

「……前見て運転しなさい」

天使のような微笑みを向けた神裂を見て、紅葉はどこまでが冗談なのか、知るのを諦めた。こういう笑みを浮かべた神裂から、冗談と真実を見分ける事は不可能だと、紅葉は知っているからだ。

真実は、笑みに隠され、闇の中。

12時10分、生徒棟三階2・B前廊下

「あの一……」

三途舞歌が次の授業の準備のため、廊下のロッカーをしゃがんであさっていたら、声をかけられた。

昼食を食べ終わったら図書館に行くのが日課の舞歌。しかし、鈴音も図書館行きたいのー、僕も行きたいですー、という事を鈴乃音姉妹に言われ、鈴乃音姉妹が昼食を食べ終わるまで待ちぼうけになっていた舞歌は苛立っていたので、声をかけてきた人をついつい睨んでしまった。

「え、あー……」

「……」

相手は見上げるように睨まれ怯んだ。舞歌は驚いた。着物姿だったのだ。どこのいいとこの母親だよ。恵まれやがってと、舞歌の不機嫌度アップ。

「2-B、ですか？」

睨まれ怯みながらも女性を舞歌に尋ねた。握りしめた拳から、私、頑張れ。という気持ち伝わってくる気がしないでもない。

「あれ、読めないんですか」

舞歌は教室のプレートを指差し、明らかに喧嘩腰である。

「読めますよ？」

そんな当たり前のこと、何で聞くんですか？と、言わんばかりに首を傾げきよとんとした着物女性。舞歌は、睨みつけるから訝しげに

相手を見るに変化。

「…………読めるなら、聞くなよ」

道理であるが、言うてはいけない事である。

「ああ…………2 - B、の人、ですか？でした。うっかりしました。すいません」

「…………うっかり？」

頭を下げて丁寧に謝罪された舞歌は、ああこれ。敵対心を向けるじやなくて、無視するのが一番いい選択だったと後悔した。

「…………そうですけど、何か？」

舞歌はロッカーから教科書を取り出してから立ち上がり、そう言った。

女性は舞歌の背の高さに威圧されからか（そこまで背は高くないはずだが）、一歩後ずさり、「えー、あー…………」と言いながら目を泳がせた。どうも人付合いに慣れていないように思われる。いいところ箱入り娘か。いい大人が。と、舞歌は思った。

「あー…………あのー！」

数秒経った後、意を決したのか、女性が拳を握りしめ、舞歌を見据えた。ちよつと緊張。

「…………いますか？」

「……………はあ？」

つらら？つららがいる？つららがいますか？氷柱屋？

「あ、いや、つららさん？冰山さん？あ、私は冰山吹雪？じゃなくて、なに名乗ってんの私……………あー、最近の子とのコミュニケーションの取り方がわからない……………いや、最近の子っていうより私って年下との会話全般苦手意識ある……………そもそも高校ってあまり好きじゃない……………もう帰りたいかと思うってどうなの母親として……………」

「……………」

舞歌にうまく伝わっていないと察し、慌てて補足しようとしたが、はて、どうすればいいのだろうかとわからなくなった女性、冰山吹雪は頭を抱えてぶつぶつと自分の世界に。舞歌としては、頭を抱えたいのはこっちって感じである。

しかしとはいえ。この変な着物女性の用事を舞歌は理解した。どうやらこの人、冰山つららの母親らしい。憎らしい。遙々遠くから母親が来てくれるとは、愛されてやがる。

冰山つららというと、確か、桜木さくらとかの横にいる奴だったはずだ。なんか影薄いから記憶は定かではないが、まあ多分そうだ。

「小雪もそんなだから……………」

「……………部室ですよ」

ぶつぶつと自分の世界に没頭中の吹雪に、舞歌は吐き捨てるようにつららの場所を言った。聞こえてなくても教えたのだから、もういだらうという理屈で、これで舞歌は立ち去ろうと思っていたのだが。

「部屋つて、どこですか？」

吹雪には聞こえていたようだ。頭を抱えながら舞歌に詳しい場所を尋ねる。

「……特別棟の三階の端。あの辺」

吹雪の切り替えの早さに舞歌は、少し戸惑いながらも、ご丁寧に、廊下の窓から見える特別棟を指差し教える。根は優しい子何です。

「あっ、なるほど。ありがとうございます」

「……」

ふんふんと、首を縦振り、なるほどなーという感じの吹雪を尻目に、用事は終わった早くここから立ち去ろうと思った舞歌は、立ち去ろうとしたが。

「つららさんの友達ですか？」

「はあ？」

思いがけない質問に舞歌は立ち止まった。何言ってるのこの人。

「あ、でも、つららって言って、氷柱を思い浮かべたんだから違うわよね。でも、ただのクラスメートなら食べてる場所なんて知っているかしら、じゃなくて知ってますか？やっぱり友達ですか？」

自己解決すると思ったら、自己解決しなかった図。

「……友達でもなんでもないですよ」

「あ、そうなんですか……」

見るからにしょんぼり。

「あっ、せっかく勇気を出して声をかけたので聞くことと思っただけです」

そしてすぐに復帰。

「つららさんって、高校ではどんな感じなのかしら？じゃなくて、なんですか？」

そして舞歌の許可を得ず聞いてしまう。

「……」

「……」

そして期待に満ちた目で見ちゃう。舞歌が明らかになんざりといった目で見ているのに気付かず、答えてくれると信じて疑わない。

「……」

数秒、舞歌は見てんじゃねえよ諦めろよさつさと娘のとこ行けよという思いを込め、吹雪は早く教えての思いを込め、見つめ合って火花を散らして）いると。

「もしかして、冰山吹雪さんですか？」

二人に、というより吹雪に声をかける新たな女性が現れた。

後ろから声をかけた女性は二人連れだった。声をかけたのは落ち着いた雰囲気的女性。もう一人は「いないんですけどいないんですけどいないんですけどー！」と、教室を覗きながら喚いている、正反對な雰囲気的女性である。

二人とも若く、母親という感じではないが、高校生より社会に溶け込んでいるというか、学校社会から浮いている感じがする。大学生くらいか。生徒の姉が親の代わりに来たのだろう。羨ましい。羨ましい？逆だ逆。同情に値する。と、舞歌は思った。

「はい。そうですけど……あなたが神社神裂さんですか？」

「はいそうです。あ、敬語じゃなくて構いませんよ。遠いところをわざわざご苦労様です」

「いえ、こちらこそ。授業参観のこと教えてもらって、どうもありがとございます」

吹雪とその女性、神社神裂は会話を始めた。

「これだから神様に嫌われるほど勘がいい奴は嫌何だよなあ！！もはや勘ってレベルじゃねえもん！！」

もう一人の女性はそう言って、疾風の如く立ち去った。

「そちらの方は？」

神裂は人が良さそうな笑みを浮かべながら、舞歌を見た。

「あっ、こっちはつららさんの優しいクラスメートさ……あ、ちょっと?」

「……」

自分の役目は終わったのだ。というように、舞歌は吹雪を無視して教室に戻っていった。

一時間目のあの母親といい、今の母親といい。変な母親に絡まれる日だ。それとも母親というのは、みんなあんな感じなのか?

12時20分、生徒棟三階2-B 職員棟二階図書室

『え?ところでどうしていきなり夢の話をしたのだった?特に理由はないわ。いや、だからつてなーんだって思わない方がいいわよ紅葉。この場合、特に理由もないのになんとなく今日見た夢を話した事に意味があるのかもしれないんだから。紅葉、予知夢って知ってる?ふふふ、まあそういうと思ったわ。でも、ちょっと見方を変えれば予知夢なんてありえないって事はありえないって事になるんだけどね。いいから聞いときなさい紅葉。さっき話したのは夢のクライマックス。導入は、あなたが枯葉君と奈美さんが眺めがいい大部屋で、仲良く昼食を食べてるのを見て怒るって感じよ。これは私の

夢の警告、いえ、助言みたいなもんよ。教室に枯葉君いなかったら、一番いい眺めのところ。行ってご覧なさい』

「っだあ！もはや天才とか完璧とかいう枠じゃ説明出来ない気がするけどなー！」

と、叫びながら若葉紅葉は廊下を走り、階段を下り、一番眺めがいい部屋、職員棟四階を目指す。

二階の渡り廊下を走り、職員棟へ。そして東階段へ向かう。

「あら？紅葉ちゃんじゃない。奇遇ね」

そして階段の踊り場にて、ちょうど一階から現れた猫猫子猫とバツタリ。

「このタイミングであんたが現れるのはおかしいだろー！」

紅葉、心の叫び。

「んー、よくわからないけど……神様のご都合主義って奴じゃない？」

猫猫、大人の余裕。

「いや……今はあんたに構ってる暇はない。というか、あんたに構ってる暇は私にはない。というわけでさようなら先生。もう二度と会うことは……何のつもりですか？」

紅葉が額に手を当て、クールダウンして、猫猫に別れの言葉を言うおとししたら、猫猫はまるで紅葉の行く手を塞ぐように、三階へ続く

階段の前に立った。

「ふふふ、ここを通りたければ私を倒してからって、こわっ！冗談よ冗談！？落ち着いて話し合いましょう！私まだ死にたくはないわ！？」

猫猫はかつこよく紅葉を挑発しようとしたのだが、紅葉が、腰を落として呼吸を整え、この一撃で相手が死んでしまってもいい覚悟を漂わせ始めたので、慌てて命乞いにシフトチェンジ。

「死にたくないって……」

紅葉は猫猫の言葉を聞き、嘲笑を浮かべた。

「なによ。何か文句ある？」

「別に文句はありませんけど、嘘はいけないと思いますよ？腐っても先生なのにー」

「嘘？」

クスクスと小馬鹿にするように笑う紅葉を、猫猫は訝しげに見る。枯葉とは違い、紅葉は何を考えているか読みにくいから困る。

「そう。嘘嘘嘘嘘、嘘八百ってやつ。先生は嘘つきですよねー。私はそういうところも嫌いなんだよなー」

「……………言いたいことがあるならばつきりと言ったら？」

「先生ってば、本当は早く死にたいんでしょ？ってことよ」

「……………」

猫猫は笑っている紅葉を睨む。睨むだけで反論はしなかった。

「……………後で保健室に来なさい」

反論する代わりに、そう言って道を空けた。

「別に具合は悪くはないので、行く理由はありませんのであしからず。先生こそ、お大事に？」

紅葉は皮肉たつぷりにそう言って、階段を上っていった。

「……………あの子はホント苦手だわ」

残された猫猫は、紅葉に自分の過去を話したのは間違いだったと、改めて思った。

12時30分、生徒棟三階2-B

「だから、本当に不思議なのよねー。私はちゃんと奈美ちゃんに、恋人同士が食べるならやっぱり、人があまり来なくて、ゆっくりお話が出来て二人つきりになれるところがいいわよね。でも、見晴らし

がよくて二人つきりになれるとこつて、なかなかないのよねー。あまり人が来ない部屋があつたらベストなんだけどなー。つて、私は言ったのよ。そう言えば、あの素直な奈美ちゃんの事よ？ほぼ100%部屋に行くじゃない？なのになかったのよ。ビックリしちゃったわ私。ちよつと守。お母さんの話し聞いてるの？」

「聞きたくなくても聞こえてますよ……」

秋春守は、うんざりしているとわかりやすく、ため息をついたが、南穂波は気にせず「ならいいのよ。しつかし料理うまくなつたわね守ちゃん。タマゴ焼きは、たぶん奈美より上手だわ」と、弁当を食べながら話し続ける。

守が穂波からもらった弁当を食べ終わり、なんか今日は読書して内に籠りたい気分だと思つたので青森翼から本を借り、そのまま翼の席で読書を始め、へいへい秋春こつち来て詳しく色々教えるよー。という感じで馴れ馴れしい山口君を無視して読書を続け、ただいまー。という感じで穂波が現れ、今に至る。

「ところで守はどんな感じなの？勉強はまあどうでもいいとして、友達とかちゃんという？お母さん、息子が一人ぼっちじゃないか心配だわ」

「あなたに心配される筋合いはありませんねえ」

「そつ。まあ、守はそんなに心配してないのよねえ。なんだかんだ言つて、世渡り上手だし。問題はほら。あなたの妹よ妹」

「妹なんていましたっけねえ」

「妹じゃなくて姉だったかしら？まあどつちでもいつか。奈美はね

え……ぶっちゃけどう思う？教育した私が言うのもあれだけど、これから先、大丈夫かしらあの子」

「ぶっちゃけどうでもいいですよねえ」

「この前、高校卒業したらどうするのー。って聞いたら、枯葉君と結婚しますー。って言ったのよねー……どう？」

「早いとごどうにかした方がいいと思います」

「そうよねえ。やっぱりそう思うわよねえ。だから昼食時間使って親交を深めようとか思ったんだけどねー……ん、つまりあのグループもそんな感じだったのかしら？というかあの部屋使ってたということは……」

穂波は白米をモグモグしながら、色々と思いを巡らす。守は本を読みながら、早くどっか行かないかなあ。と思う。翼は本を読みながら、特にどうも思わない。

「……これは午後からも色々頑張らなくっちゃ！あつ、安心していいわよ守。午後はあんたには絡まないから。多分」

「それはどうも……」

多分というのが気掛かりです。

「んー……ところで守はどうなの？恋愛方面は。なーんか、熱い視線を私に注ぐ二人組がいる気がするんだけど」

穂波はそう言って、こそそこそちらを見ていた女子生徒に手を振っ

た。「冬美！なんか手振られたんだけど！」「振り返しとけば？」「だよー！」

「元気な子ねー」

穂波はクスクスと笑った。

「守に聞いてもそんなの気持ち悪いと答えられちゃうと思うから、読書少年に聞く事にするわ。どうなの少年？息子は学校でモテるんでしょうか？」

「さあ？僕はそういう情報には疎いので」

翼は本を読みながら素っ気なく答えた。

「じゃあ、どういう情報には敏感なの？」

「ジャンケンとか」

翼は本を読みながら冗談ではなく本当の事を答えた。

「ジャンケンの情報に敏感って……守、面白い友達を持つてるわね」

「ええまあ」

「しかしホント、この高校は面白いわ。教師も面白いし生徒も面白い。ああ、私が後十年若ければなあ」

「二十年の間違いじゃありませんかねえ」

「酷いわ守。お母さん泣いちゃう」

穂波泣いちゃう。うるうる。

守無視。うぜえ。

翼読書。ふむふむ。

「そつだぞ秋春。こんな若いお母様に向かってそんな事言つもんじやねえぞ？」

山口君乱入。どうも、後ろの方ですつと話しを聞いていたようだ。
香川智弘と一緒に。

「そつよねえ。いいこと言つじゃないあなた。見習いなさい守」

穂波ニコニコ。

「そつだぞ秋春。俺を見習え」

山口君ニヤニヤ。

「……うぜえ」

守眩き。

「こら守。友達に向かってそんな事言つちやダメでしょ」

メッ。

「そつだぞ秋春。母親の言つ事は聞くもんだ」

ニヤニヤ。

「山口君は友達でもなんでもないですよ」

守、事実を告げる。

「はあ？おいおい秋春まだそんな事言ってるのかよ」

山口君苦笑。

「なに。こいつ友達でもなんでもないわけ？随分馴れ馴れしい奴ね。あっち行ってくれる？」

穂波豹変。

「え、あ、う？」

山口君ビツクリ。

「今私は久しぶりに会った息子との遊び、じゃなくてコミュニケーションに忙しいのよ。ただのクラスメートに興味ないわ。さっさと失せてくれる。ああ、やだやだ。守の友達だと思って無駄に気を使ったわ。ああホント、無駄な時間。ちよつと。まだいるわけ？早くあっち行ってくれる？しっしっ」

穂波が山口君を見る目は、周りをぶんぶん飛び回る鬱陶しい蠅を見る目だった。

「うっ、うっ……蛙の子は蛙ー！！」

山口君は涙を流しながら教室から出て行った。「や、山口君!？」と、智弘は後を追った。

「全く馴れ馴れしい奴だったわ。礼儀を知らない子ってあれだから嫌よね」

「全く持ってその通りですねえ」

「……」

翼はページをめくりながら思った。

親子だな。

蛇足 語る必要のない重要な事（後書き）

う、嘘は言っていないよ？

つてな感じの蛇足話でしたー。

紅葉と神裂の話が主な話でしたー。

神裂の言う事がどこまで本当なのかは定かではありません。

吹雪は色々とあれです。若い子とのコミュニケーションが苦手な
んです。つららの前では頑張ってるんですけどね。

猫猫と紅葉には色々あるよーです。ちなみに猫猫は、保健室から出
たら奈美と枯葉が仲良く歩いてたので興味深々でばれないように後
をつけていたらバツタリって奴です。ご都合主義です。

穂波と守は親子です。山口君は裏表がないいい人です。

はい、次回から昼休み後半戦です。

またー。

6 - 1 ・昼休み つららと吹雪と神様と

12時32分〜特別棟二階渡り廊下付近

「……………」

冰山つららは目を開けた。

「ん……………」

目を開けたということは自分は目を閉じてたということだ。見えるのは天井？寝てる？何で？と、まだ完全に覚醒していない頭で考えるがよくわからない。

「起きた？」

「？つ……………」

声をかけられた。誰だろうと右に首を動かすと、痛みが走った。首痛い。

「ん、やっぱり首痛めた？大丈夫？」

「……………神裂さん？」

「それ以外の誰かに見える？」

「いえ……？」

クスクス笑うその顔は、神社神裂に間違いない。

間違いないが、何でここにこの人いるんだろう。夢かな？ああ、夢か。なら安心。ここがどこかわからないのも夢だからだし、どういう状況かわからないのも夢だからだし、私って誰だっけと思ってるのも夢だからだし、見たところ廊下に寝てるのに頭が痛くないのも夢だから。夢なら早く起きないと。さくらが私を……私を……。

「あ、また寝ちゃうの？そんなにひざ枕って寝心地いいの？」

「ひざ枕……？」

また眠ろうとしたつらは、半分閉じた目を左に向けた。そこには嬉しさと恥ずかしさがミックスされたような曖昧な笑みを浮かべている養母、冰山吹雪がいた。

近い。近いというよりすぐそこ。手が伸びてきた。撫でられた。夢？ひざ枕。ひざ枕？ひざ枕！

「ひゃ！？」

自分の置かれていた状況を一部把握したつらは、慌てて体を起こした。そして二人の方を向いて正座。ひざ枕って、夢だとしても恥ずかしい！

こうして、廊下のご真ん中で三人が正座をしている図が生まれた。

「え、あ、え？お、お養母さん？」

「はい、お母さんです」

「そうね。間違いなくこの人はお母さんね」

つららは、ニコニコ笑う神裂と曖昧に笑う吹雪を交互に首を動かして見る。その度に首が痛むが気にしない。というか痛いということはこれ夢じゃなくね？

「混乱してるわね。吹雪さん、そんな娘さんに説明をどうぞ」

「ええ！？」

神裂の説明役任命に動揺する吹雪。しかし、説明を求めるようにチラチラ見るつららを見て、すぐに動揺を隠し気を落ち着かせる。しっかりとしたお母さんでありたいのだ。

「つららさん、こんにちは」

「い、こんにちは」

まずは挨拶。基本です。

「授業参観に来ました」

目的を言います。大事です。

「え、あー、でも……」

私、教えてないんだけど……覚えてたのかな？

「神裂さんに教えてもらったのよ」

相手が聞きたい事を察して答えます。重要です。

「え？」

神裂さんが？と、神裂を見るつらら。神裂はニコニコ手を振った。よくわからないけどつららは手を振り返えしといた。まだちよつと混乱中です。

「恥ずかしい話だけどね。授業参観なんて全然知らなかったわ。つららさん、どうして教えてくれなかったの？」

吹雪は、怒っているというより呆れているという感じなのだが、つららは「し、ごめんなさい」と謝った。

「別に謝ることじゃないわ。というより謝るのは私よね。娘の授業参観を忘れてるなんて……ごめんなさい」

「あ、いや、私がごめんなさい？」

「いいえ、私がごめんなさいよ。私が悪いわ」

「そんな、あの、お、お養母さんは、悪くない、です。私が悪いんです。ごめんなさい」

「いいえ、つららさんが悪いことは何もないわ。私の責任よ。ごめんなさい」

「いやいや、ここはあえて私が悪くて私に全責任があるということ

にしておきましょう」

氷山親子の無限に続きそうな謝罪合戦に終止符を打ったのは、もちろん神裂である。

「つららちゃんには、無断でお母さんを選んでごめんなさい。吹雪さんには、んー、まあ、なんとなくごめんなさい」

吹雪に謝る事が思いつかなかった。

「あー、いえ、というか……知り合い？だったんですか？」

つららの素朴な疑問。お養母さんをどうやって呼んだのだろう。自分分は実家の連絡先とか教えてないけど。

「いや、あれよ。ちょっと携帯を拝借してね。ちょちよいと赤外線をね。うん。便利よね。赤外線」

神裂はそう言っつららから目を逸らした。疚しい気持ちがあるようだ。

「え、あー……」

そういえば、日曜日急に部屋に来たな。あの時が。

「でも……ロックは？」

つららは用心深いので、携帯を閉じる度にロックがかかるように設定している。つまりロックナンバーを知らないと、つららの携帯は何も出来ないのだ。

「あ、いや、うん。まあ、私くらいになると、勘でわかつちやうよね。うん。というか、1225って。誕生日？」

「あ、はい」

厳密に言つと違つけど。

「ダメよダメ。誕生日なんてちよつと安直じゃないかしら。もう少し用心深くしないとダメよ。私じゃなくてもすぐわかつちやうわよ？しつかりしなさい！」

「え、あ、ごめんなさい？」

神裂は自分の非を相手の責任した！つららもよくわからないけど謝罪した！そんな二人を見て吹雪はクスツと笑つた！

「さつ、とりあえず私と吹雪さんがいる理由はわかつたでしょ？今度はつららちゃんの番。何でこんなとこにいたの？」

「えつと……………」

神裂に聞かれ、つららは天井を見上げて思い出してみる。

「さくらと押花さんと一緒に部室で昼食を食べる事になって、部室に行つて……………そしたら、さくらの妹の虹野光とかいう子が来て……………邪魔つて言われて……………やっぱり私邪魔だと思つて部室飛び出して……………飛び出して……………飛び出して……………？」

ここは二階だから、多分どこかに行こうと思つたんだろうけど、全

然思い出せない。

「思い出せないならいいわ。いいですよね吹雪さん」

「ええ。つららさん、無理に思い出さなくていいわ」

「？」

神裂と吹雪が妙に優しい笑みを向けられたつらはは、首を傾げた。何か自分に隠している気がする。首もなんか痛いし。

「しかし、さくらちゃんの妹か……ということは今頃、部室で三人で食べてるのかな？」

神裂は天井を見上げた。透視能力はないはずだが、神裂なら見えそうなのがして怖い。

「多分……」

楽しそうに食べてるんだろつな……家族水入らずで。

「いや、んー……なんかあるわね」

「え？」

神裂の意味深な言葉。つららにはよくわからない。

「とりあえず、行ってみましようか。はい、つららちゃんも立って？」

そう言つて神裂は立ち上がり、つららに手を差し出した。

「え？あ、はい……え、行くつて、え？」

特に考えずその手を掴み立ち上がった後、つららは動揺した。

「はい、出発しまーす」

「え、え？でも、あ、え？」

神裂に手を引かれ、背中を吹雪に押され、混乱したまま歩くつらら。え？と言いまくりである。

「私への質問は現在、一つしか受け付けていないわ。さあ、聞いた事を一つにまとめてごらんなさい」

「え？いや、何で？」

「質問はそれでいいのかしら？」

「え、あ、いや、違って……」

「つららちゃんは考え中みたいなので、吹雪さんは何か聞きたいこととありますかー？」

「あー……あつ。桜木さん、再婚したの？さくらさんつて、一人っ子じゃなかった？」

「再婚したわけじゃありませんよ。つていつか、つららちゃん。教えてなかったの？」

「あつ！いや、あの、ごめんなさい」

「謝る事じゃないわ。再婚じゃないってことは……ああ、色々大変みたいね」

「吹雪さんは頭の回転が速いのか遅いのかわからないわね。はい、つららちゃん質問をどうぞ」

「え！？あー、うー、そのー……お、お養母さんは何で鼻に詰め物を？」

「はう！？こ、これはあのねつららさん！？」

「盛大にこけて鼻血出したからよ」

「か、神裂さんそれは内緒の約束！？」

「あー……お、お大事に？」

「あ、ありがとう……」

「はい、吹雪さんの威厳が少し崩れたところで、到着しましたー。行きますよー」

「え、あの、ちよっ……」

「どうすればいいかわからないそんな時は、母親を壁にすればいいのよ」

「え？あー……はい。お、お願いします？」

「お、お願いされます？」

こんな感じで、神裂と氷山親子は部屋に突入したのでした。

12時45分、特別棟三階文芸部部屋前

6 - 1 ・昼休み つららと吹雪と神様と（後書き）

今さらだけどタイトルの矢印意味ないから。

今回つらら、え？つて言い過ぎじゃね？慌て過ぎじゃね？『あたし』はどうした？とか思いました！。

神裂と吹雪のチームワークがいいのは仕様なのです。しょうがないのです。神裂と吹雪は同じタイプなのです。天才目完璧系姉科と天才目箱入り系母親科なのです。つららはきつと普通目二重人格系人見知り科なのです。

意味わからんわー。

また次回なのだ！。

6 - 2 ・ 昼休み 何かが変われば何かが変わる

12時45分〜特別棟三階文芸部部室

「とりあえず席替えを要求します！はい、そこがそこであれがあれでこれがこれ！」

神社神裂は混乱している全員に命令した！その結果すんなり席替えが完了した！よくわからないけど凄いね神裂さん！

席替えの結果、円形テーブル。12時に虹野望。1時に神裂。2時に桜木押花。6時に冰山吹雪。7時に桜木さくら。8時に冰山つらら。11時に虹野光。という感じになった。どんな意図があるかはわからない。少なくとも、望と押花と光とさくらとつららには、わかっていないだろう。

「どいつもどいつも。急に現れて仕切っちゃってすいませんね」

神裂はニコニコと相手に警戒心を抱かせないような笑みを浮かべな

がら、望に謝った。

「いえ……こちらも、困って……ましたし……」

望は虚ろな目で神裂を観察しながら答える。

「ですよー。考えなしに行動するからこうなるんだよ。さくらさんのお母様もそう思いますよねー」

神裂はさらっと望に毒を吐き、押花に話しかけた。

「……え？あ、すみません、何ですか？」

さくらと吹雪の様子が気になってしょうがなくてちらちら様子を見ていた押花は、話を聞いてなかったようだ。

「はいはい、さくらさんのお母さん。あっちはあっちこっちはこっちですよー。あなたの子供は高校生。ほら、全く食が進んでないじゃないですか。時間は有限ですよ。光ちゃんも、大きくなる為にたんとお食べ。あ、このおむすびもらうわね。望さんはもう食べ終わっただんですか？」

神裂は、押花に釘をさし、さくらとつららが気になって押花同様箸が進んでいない光に声をかけ、腹ごなしと重箱消費を同時に行い、望に話題を振った。忙しい人ですか？

「ええ……私はもう……十分食べま、した……光、神裂……さん？の、言う通りよ……ちゃんと、お食べなさい」

「わかりましたですの……」

母親の言うことにはおとなしく従う光は、もそもそと重箱弁当を消費していく。

「……………それで……………」

光が元気なさげに食べる姿をしばらくぼんやり見た後、望は緩慢な動きで首を動かし神裂を見る。

「……………どちら様、ですか？」

そして聞く。素朴な疑問。入ってきた時になんか言ってたけどよくわからなかったし。

「私ですか？同じ事を二度言うのは嫌いなんですけど私は神社神裂ですよ。娘さんから聞いてません？さくらさんと光さんを引き合わせるのに一役買った大学生の片割れです。片割れっていうかおまけかな。私は主につららさんの担当でしたから」

「ああ……………あなたが、例の……………それはどうも……………私は虹野望です。以後よろしくおねが……………いします」

「……………」

望が弱々しい不敵な笑みを神裂に向けたのに対して、押花は不満げな視線を神裂に向けた。どうも、てめえが引き合わせなかったらこんな状況にはならなかったはず。と、少し思ってるようだ。

「さくらさんのお母さんも、娘さんから私の事は聞いてますか？」

そんな視線を微笑みで受け流し、神裂は押花にも聞く。

「ええ、まあ……少しだけ。……私は桜木押花です。よろしく願いします」

名乗るか名乗らないか。よろしくと言うか言わないか。押花は逡巡したが、結局名乗り、よろしくと頭を下げた。見え隠れするは望への対抗心。

「はい、どうぞよろしくお願いしますね望さんに、押花さん。あなた方の関係と今の状況は知りませんし聞いていませんが理解しましたので知りました。陰ながら応援してますよ。しかしこの海老フライは美味しそうですね。望さんがお作りになったんですか？……ですよね。保健室、行った方がいんじゃないですか？おや？光さん、また箸が止まってるぞ。今回はお姉さんと楽しく食べるのはおとなしく諦めるよな女々しいやつ。仕方ないなあ、私も手伝ってあげますね。この量を一人で食べるのはさすがに大変でしょうからほらほら、押花さんも娘さんの事を気にし過ぎですよ。さくらさんはあなたがいなくても元気になるから安心して、自分のお弁当をお食べになつて。ほらほら、光さんに押花さん。そんな目してないで、ね？望さんをご覧なさい。達観した目をしてるじゃないですか。そのまま天に昇りそうなくらいにね」

神裂は微笑みを絶やさず、仕切り、挑発し、窘め、空気を変え、押花と光の目を、さくらから自分に移すのだった。

「さくらさん久しぶりですね」

吹雪は優しく微笑みながら、さくらに話しかける。

「二年ぶりくらいかな。元気でしたか？」

「……ん」

さくらは、焦点があってない目で吹雪を見ながら頷いた。

「そっか。それはよかったです。これからもつららさんのことをよろしくね」

「ん……」

さくらは先程同様に頷いた後、自分を訝しげに見ているつららの方を見て、首を傾げた。

「え、あの、さくら……どうしたの？」

さくらが首を傾げて何を聞きたいのかよくわからなかったつららは、とりあえず、自分も首を傾げて聞きたいことを聞いた。

「……………ん」

さくらはしばらく、観察するようにつららの目を見た後、頷きもせず首を横に振りもせず、『ん』と言って微笑んだ。そして弁当を食べ始めた。

「つららさんも、そろそろお弁当食べなさい」

「えーあ、はい」

その笑みどんな笑みー！？と、動揺していたつららに、吹雪がクスクス笑いながらそう言った。

「うっ……」

鞆から弁当箱を取り出し、蓋を開けたつららは中の惨状を見て呻いた。ほうれん草の和え物がタマゴ焼きでもやしとベーコンがポン酢を白米にギャー！。

「……」

さくらもつららの弁当を見て驚いている。そして目で、どうしてこうなった？と尋ねる。しかしつららも、なんでこうなった？と困った笑みを浮かべるしかない。

「まあ、あれだけ盛大に転んだらそうなりますね」

唯一真実を覚えている吹雪だけが、クスクスと上品に笑える。

「転んだ……？」

さくらが不思議そうに聞く。

「いや、ん、転んだ……のかな？」

ちゃんと答えられるなら答えたいんだけども、覚えてない。え？私
って転んだんですか？首痛いのもそのせい？って感じで、つららは
吹雪を見る。しかし吹雪は優しい笑い漂わせるだけ。それ、逆に不
安になるんだけど。

「大丈夫……？」

さくらが鏡みたいな瞳をつららに向けた聞く。

「え？うん。首がちょっと痛いだけけど……さくらは大丈夫？」

様子変だけど何かあった？

「…………ん」

さくらはつららの言葉には答えず、じーつとつららの首を見る。そ
して何かを納得したのか、頷いて、吹雪の方を見て首を傾げ、吹雪
が笑みを変えずにこちらを見ているのを確認した後、また頷いて、
弁当を食べ始めた。

「え、ちょっとさく」「つららさん？そんな状態でもちゃんと食べ
ないとダメですよ。昼休みももうすぐ終わりますし。お喋りもいい
けど早くお食べなさい」「あ、はい…………」

つららは、明らかに様子がおかしいさくらに何があったか聞きたか
ったのだが、暗に吹雪に止められた。

「…………」

つららは残骸をモグモグ食べ始める。そして二人の様子を窺つ。

さくらは柔らかいが何を考えているわからない表情で、モグモグ弁当を食べている。当然つららには、さくらが何を考えているかはわからない。

吹雪は優しく微笑みながら、さくらとつららが弁当を食べている姿を見ている。まるで何でも、さくらの事も、わかっているように、つららには見えた。

自分には、付き合いの長い、親友である私にはわからないのに。二年ぶりに会ったこの人にはわかつてる。

『あんたがダメか。あっちが優秀か。クスクス。どっちかしら。あたしとしては。あんたがダメに一票だけど。ああ。つままない』

「……………」

つままないって何だよ。

12時55分〜特別棟三階文芸部部室

6 - 2 ・ 昼休み 何かが変われば何かが変わる（後書き）

もう、何も言うまい……。

吹雪が100点しか取れない天才だとしたら、神裂は100点以外も取れる天才である。っていうか天才ってなんだ？

まあいいや。とりあえず、文芸部室はこれでいいや……

6・3・四時間目 考察と傾向と対策と

13時00分〜特別棟三階文芸部部室前 〉

波乱にみちていた気がしないでもなかった昼食を切り抜け、各々は文芸部部室を出た。

「チャイム鳴っちゃったわね」

廊下に響くは授業開始の合図。別にそこからチャイムが鳴っているわけではないのに、スピーカーではなく、なんとなく天井を見てしまう。不思議。と思っているのは神社神裂。

「あ、はい。ですね……」

急がないといけないんだけど、さくらに歩みを合わせた結果、鈍速で歩きながら、神裂の独り言のようなものに、律儀に振り向き答えるのは、氷山つらら。

「……」

つららの手を握りながらニコニコ笑顔のゆっくりペースで列の先頭を歩き、何を考えているか全くわからないけど、何かを考えているのは間違いないのは、桜木さくら。

「桜木さん。スーツ姿似合ってらっしゃいますね」

「え、ああ、はい……………冰山さんも着物、素敵ですね」

「ふふふ、ありがとうございます」

「……………」

神裂の後ろで、片や自然体、片や探り探りで、会話しているのは氷山吹雪と桜木押花。

「お母様、しっかりしてですのー」

「あまり、押さないで……………ちょっと、私……………無理っばい……………
帰って、いい……………?」

「せっかく来てくれたんですのから、ちょっとくらい授業見て行って欲しいです……………」

「……………ちょっと、ね……………ああ、でも……………その前に……………保健室、
いきた、い……………」

そして列の最後尾で、疲労困憊精魂尽き果て今死にます。といった様子で歩いているのは虹野望。親を支えるのは子のつとめ。といった様子で、望の背を押しながら、頑張って歩いているのは虹野光。

そんな感じで。総勢七人。四組一列編成で、一向は生徒棟に向かっているのだった。

唯一一人で歩いている神裂は、頭の後ろで手を組み歩きながら、ま

ずは前の二人を観察してみる。

「さくら……あの、何かいいことあったの？」

自分でもそんなわけないだろうと思っただろうに、いやもしかしたら万が一億が一さくらはいいことがあって笑っているのかもしれないと考え、聞いてみたのはつらら。

「ん」

笑顔で速答。ただし伝わらない答えなのはさくら。

「そ、そっか………うう」

弱々しく笑った後、俯いてうめくしかないのはつらら。

そんな感じの二人を見て神裂は苦笑い。そして考えるでもなく考える。適度に適当に、考察する。

今現在。さくらは内向に重きを置いているようだ。九割内向。一割外向。つまり、考え中である。考えるのに忙しいので、集中したいので、外の事に関しては、他者に、つららに任せているのだろう。

任せきり。任せられる信頼。それを、今の母親には、押花には任せられないと判断しての行動。聡い。

何について考えているか。恐らく、というか間違いなく、家族に関してだろう。さくらにとって家族は、その困いにつららも含まれていたかもしれないが、今までは押花一人。それで十分満足してたし安定していた。そこに急に現れた妹と名乗る光とかいう変な奴。困らないわけがない。

しかし光に関しては。歳も近かったからか、まずは、カワイイ後輩、友人として接する事で、距離感を計り、妹ってなんだ？年下の友人

みたいなもんじゃなかるうか？それじゃいかんのか。とか考えながら、受け入れようとしていたのだろう。

だがしかし。再度現れたよくわからん奴望。光の、妹の母親だが、自分とは全く血の繋がりもないし、情もない。ので、家族と接しなくても、関わらなくても、問題なかるうなのだ。いや、もちろん考えなければいけない問題なのだけど。

一番問題なのは、その二人の陰に見える、父親。父親の記憶なんてないし、写真でさえ見たことない。自分にも父親がいたんだな。と、そんな当たり前の事をふと思いつく。思い至る。

思い至って、湧く想い。喜怒哀楽。妬みや憎しみ。会いたい見たい。見たくないし会いたくない。知りたくなかったし、知ってよかった。今のさくらの心の内は、様々な感情が混ざりぐちゃぐちゃの群青色になっている。それを整理するのに、必死なのだろう。自分で考えるのは偉い。と神裂は思う。さすが紅葉の担当ね。と、間違った事も思ってみる。

さくらはなんだかんだ言っつて、一人で考え、結論を出すだろう。その結論が良い悪い、そうするしかない。とかは置いておいて。だから、問題なのは、神裂が問題としたいのは、やはりつららなのだ。さくらが一人前なら、つららは半人前。つららは二でもなく一でもなく、0.5。さて、どうしようか。統合か分離か、そのままか。

まあ、その辺は色々と相談しないと。と、結論づけ、神裂は次に、階段を下りながら、後ろの会話に耳を傾けてみる。

「桜木さんは今日、何時まで？」

「……一応、さくらと一緒に帰るつもりですけど」

「そうですね。じゃあ、まだまだ時間はたっぷりありますね」

後ろに目はない神裂には見えないが、押花が息を呑んだ気がした。この二人は大人なんだから自分が出る幕はないだろうと思いつつ、暇人神裂は考える。

押花と吹雪の関係を、神裂は直接聞いたわけではない。というか、二人とも初対面。しかし、つららとさくらから（特につららから）それとなくこの二人、というより桜木家と氷山家の二つの家庭の事を聞いている。少し。少なからず。触りを。上辺だけを。聞いている。そして神裂にとってはそれだけで、理解し察するには十分である。

しかし別に神裂の理解力が推察力がすごいわけではなく、言ってみれば、書いてしまえば単純な話。吹雪はつららを実家に呼び暮らしたかったが、つららはさくらと一緒にいたかったのでそれを拒否。そこに間接的に、押花が関わっていた。それだけの話。

問題なのは、問題だと思ってるのは恐らく押花だけだが、問題なのは、押花がその事に対して引け目を感じていること。申し訳ないと感じていること。そして吹雪がその事で怒っている、という程でもないだろうけど、自分に対していい感情は持っていないだろうと考えていることだ。

実際は、吹雪は悪い感情を持っているわけでもなく、ましてや怒ってなどいない。と、神裂は推察するが実際はどうなのかわからない。吹雪はどうも読みづらい。

天然というか、抜けているというか。優秀っぽいのに吹雪さんは、押花さんがそんな風に思ってることには気付いていないだろうなあ。と、神裂は同情めいた気持ちを抱き、苦笑しつつ、窓の外を見ながら、最後尾の二人の様子に、耳をすましてみる。

「お母様っ。ちゃんとっ。歩いてっ。下さいっ。ですのっ」

「それでも……精一杯……歩いてる、わ」

「わたくしが背中押さなかったら、止まってしまう気がするの、気のせいなの？」

「ええ……もち、……ろん……よっ」

「もついいですのお母様……喋らなくていいですの……喋る力を歩く力として使って下さいですの……」

「そつさせて……もらっ……わ」

病弱ならぬ虚弱な母親を支える健気な娘ごっこ（にしか神裂には聞こえないけど、やってる本人達は真剣な事）をしている二人についても、情性で神裂は考えてみる。

光は甘え過ぎ。望は死に急ぎ過ぎ。

「ちやお。紅葉」

この二人に関しては、さすがに情報が少なすぎるな。情報収集からというか、情報収集をするかしないかから、始めよう。と、早々に結論つけたところで、渡り廊下を渡ったところで、バツタリ出くわした若葉職員棟からこちらに向かつて来ていた紅葉に声をかけた。もちろん渡り廊下を歩いてきた時から、紅葉があちらからこちらに歩いて来ていた事には気付いていた。

「首尾はどんな感じ？」

「ぼちぼちよ……そっちは？」

こちらに挨拶一つせず、行ってしまったさくらを訝しげに見ながら、紅葉はそう尋ね返す。

「まあまあね……ところでさ」

先に行く吹雪と押花に、また後で。という意味を込めて会釈をしてから（吹雪は会釈を返してくれたが、押花は返してくれなかった。挑発し過ぎたと反省しなくもないような気がしなくてもない）神裂は尋ねる。

「枯葉君、生きてる？」

「当たり前でしょうが。私の弟だぞ」

若葉枯葉の頭を脇に抱える、いわゆるサイド・ヘッドロックというプロレス技をきめながら、紅葉は、誇らしげに答えた。

肝心の枯葉から、返事が返って来なかったのは、気になるとこだ。ピクリとも動かないし。

13時05分〜生徒棟二階廊下〜

6 - 4 ・四時間目 え？なんだって？

13時05分〜職員棟一階保健室

「あら奈美ちゃん、不機嫌そうね」

猫猫子猫が真面目に仕事をしていると、目が据わり不機嫌そうな南奈美が保健室にやってきた。

「ちょっと休みたいので、四時間目が終わる5分前に起こして下さい」

猫猫の方を見ずに奈美は、苛立ちが混じったような声でそう告げ、ベットへ向かう。

「左は真^ま希^{おの}ちゃんが使ってるからダメよ。真ん中か、右のね」

目が赤かったから、泣いてたのかしら。と猫猫は思いつつ、その声をかける。

奈美は返事を返さず、三つあるうちの、一番右のベットに入り、乱暴にカーテンを閉めた。そのすぐ後、ベットに飛び込んだような音がした。

その音を聞いて、猫猫は肩を竦めた。だいぶご機嫌斜めのような音だ。

「ふう、やれやれ全く今日は大変ねえ」

奈美が、というよりたいていの人間が不機嫌になる理由は、人間関係が原因だ。と、猫猫は思う。

奈美は恐らく多分きつとほぼ確実に。若葉枯葉と昼食を食べていたところ、若葉紅葉に邪魔され、それで、不機嫌になっている。一緒にいないということは、奪われてしまったのだろう。奪われたというのは、もちろん奈美の主観でのことだ。客観的に見れば、授業に出る方がいいこと、正しいことのため、奪われたというよりは、奪還されたというのが正しいかもしれない。

そこで不機嫌になる奈美はお門違いなのだが（もちろん奈美もそれを理解しているだろうが）、あの紅葉のことだ。他にも色々、奈美の神経を逆なでするようなことを言ったりしたりしたのだろう。やれやれだ。

「……」

猫猫は椅子を回しながら、さて、これからどうしようと考え。いつもなら、奈美の愚痴を聞いてあげたり、アドバイスしてあげたり、枯葉に吹き込んだり、ちよつと手回しをしたりしてあげるのだが。今日は、ちよつと話しが違う。状況が違う。猫猫の苦手な紅葉もいるし、猫猫にいい感情を持っていない穂波もいる。いつも通りというわけにはいかないだろう。

「……よし」

猫猫は、立ち上がった。

白衣のポケットに手をつ込み、左のベットに向かう。そして躊躇なくカーテンを開ける。

「真希ちゃん調子どう？」

カーテンを開けると、そこにはベットに腰掛け本を読んでいるサイドテールの少女がいた。

猫猫に声をかけられた少女、たちはなまき橘真希は本から顔を上げ、ニッコリ笑った。

「私ちよつと席外すから、誰か来たら頼むわ」

猫猫の頼みに対して、真希は、自分の胸を叩き、力強く頷いた。

真希のその動きは、はい、私に任せて下さい。というボディランゲージに見えたが、なぜか猫猫は、呆れ顔でため息をつき、「頼むわね」と念押しした。

「じゃ、本当に、頼むわね」

猫猫はもう一度念押しして、白衣を翻し、保健室を出て行った。

13時15分、職員棟一階保健室

13時10分、生徒棟三階2-B

「だからさあ、そこは魔境だったわけよ」

「どちらかというところ、異世界の方がよくない？」

「どっちでもいいわよどっちでも。とりあえずさあ、そこは不純異性交友してる奴らのたまり場だったわけよ。こんなところに弟を居させてはいけないと思うのは姉として当然でしょ？」

「そう？ 枯葉君だってもう高校生よ？ 許してあげなさいな」

「じゃあ聞きますけどね。あなたの妹が、そうとは知らず、野外セックスの穴場に男友達に誘われ、昼ご飯を食べに行ったらどうすんの？」

「大丈夫よ」

「何がよ」

「神無かんなに男友達なんていないから」

「ああ、なら安心……え？」

「え？」

「何で断言出来るのよ。そんなわからないわよ？ ああ、私なんて愚図だ馬鹿だ最低だ。私なんて生きる意味なんてない。え？ こんな私に話しかけてくれるなんて、あなたは神様？ え？ これって恋？ 私、あなたになら何をされてもいいわー。って、なるかもしれないじゃんあなたの妹。つまりすでに、男友達じゃなくてセフレがいるとみた。あなたの妹も、あなたに似てなかなか美人らしいじゃん？ 今頃、授業をサボって屋上でいちゃついているとみた」

「それ以上神無で下品な想像すると、殺すわよ。本気で」

「ごめん、許せ」

「許す。全く……いい？紅葉。私ってば、風の便りによると完璧で天才らしいのよ？」

「らしいわね」

「神無がそんな風にならないようにコントロールするなんて、楽勝だと思わない？」

「……うわあ、こいつ最悪な発言したよ。妹の人生を手の平の上で転がしてるよ」

「あなたは束縛してるじゃない」

「あなたは生きてるだけで束縛してるじゃない」

「で、その後どうしたの？」

「もちろん私はこんな悪影響があるところから、枯葉を保護することにしたわ」

「南奈美は抵抗したでしょ？」

「ああ、全くあの女狐。まだ枯葉が弁当を食べてるでしょ。とか言つて。お前が無理矢理食べさせてるんだろっがー。って話よ」

「え？なに？食べさせてたの？」

「そうよそんなのよ！あの女狐私が話してる間にも隙を見て枯葉の口から揚げポテト、シユウマイ白米エトセトラをぶち込みやがんのよ！マジむかつく！枯葉は優しいから拒否出来ないのを知ってるのよあいつはー！！」

「あー……紅葉。授業中だ。静かにしろ。お前今日は保護者として来たんだろっが。何で生徒みたいな怒られ方されてんだ」

小声で話しているのは黙認していた公民教師だったが、さすがに、大声を出した若葉紅葉を叱った。

「喧しいわハゲ！いつもはちゃんと授業しない癖に授業参観だからって、真面目に授業して教師面すんな！」

「俺はハゲじゃない。かつらだ。たく……若葉枯葉。放課後準備室に来い。お前には特別に宿題を出してやる」

「え！？」

身内の恥に打ちのめされていた若葉枯葉は、驚きの声をあげた。

「あー！聞きましたか見ましたか奥様方！今のは横暴ですよ！教師の横暴！今こそPTAの力を見せつける時です！」

「紅葉！お前廊下に立ってる！」

「廊下に立ってるなんて！なんて前時代的な罰！こういう教師が体罰は仕方ないなんて言うんですよ！こんな教師を野放しにしている良いのだろうか！？否！今こそPTAが立ち上がるべきではないで

しょうか！」

大半の保護者は苦笑を浮かべ（その中には氷山吹雪の姿もあった）一部は呆れたような表情を浮かべ（その中には神社神裂の姿もあった）さらに一部は確かにそれは言えてるかもしれないと思った（その中には桜木押花の姿があった）中、一人の保護者が「全くもってその通り！」と、声をあげて賛同した。

「おお、わかってくれますか！」

「わかりますともわからないわけがないわ！あなたのその、弟を想う熱い心！理解出来ないわけがない！なぜならそれは、子を想い母親の心とほぼ同義なのだから！」

「ありがとうございます！これから共に戦いましょう！同士よ！」

「同士だなんて……そんな堅苦しい呼び方はやめて。私とあなたの仲じゃない」

保護者は照れたように、頬に手を当て体をくねらせた。公民教師は「あの母親は誰の母親だ！。今名乗り出れば、宿題を少なくともしてやるぞー」と、親の責任を子供に背負わせようとしたが、不思議というか当たり前というか、誰も名乗りでない。

「じゃあ、何て呼びましょうか」

「もちろん。未来のお母さんと呼んでくれて、構わないわ。私もあなたを、未来の娘と呼ぶから」

「え？」

「え？」

13時20分、生徒棟三階2-B

6 - 4 ・四時間目 え？なんだって？（後書き）

たらららっ たっ たーん。

猫猫子猫の新しい相棒。橘真希が現れた。辞書が屈伸運動を始めた。

おい、授業参観で何章使うんだよ。

6・5・四時間目 一人より二人……？

13時30分～職員棟一階保健室

橘真希が、イスに座り本を読んでいると、弱々しい音がした。

「？」

今のはノックの音かな？と、思っているように見えるよう、真希が首を傾げると、ドアがゆっくりと開いた。

「失礼………します………」

入ってきたのは体調が悪そうな女性だった。

真希は、大丈夫ですか！？と、慌てているように見えるよう、読んでいた本をイスに置き、今にも倒れそうな顔色の女性に駆け寄った。

「もうしわけ………ないんだ………けど、ベット、貸して、くれます………か？」

息も絶え絶えな様子の女性を、案じるように見えるよう、心配そうな顔で真希は小さく頷き、歩くのも辛そうな女性に肩を貸してあげた。

「ありがとう………そういえ、ば………保健の先生は………いな

い、の？」

真希は、女性を真ん中のベットに連れながら、わかりませんと相手が解釈するよう、首を横に振った。

「そう……まあ、いいわ………ああ………ありがとね………」

ベットまで連れていくと、女性は安堵のため息をつき、ゆっくりとベットを労るかのように必要以上にゆっくりと、ベットに横になった。

真希は、お大事に。と、相手が思うような優しい笑みを見せた後、カーテンを閉めた。

本を手に取りイスに座った真希は、本当に大丈夫かな。と、不安に思っているように見えるよう、眉ねを寄せて真ん中のベットを一瞥した。

そして、何事もなかったかのように、静かに本を読み始めた。

「ただいまーっと、あら真希ちゃん。ちゃんとお留守番してくれたのね。猫猫ビツクリ」

読み始めた直後に、猫猫子猫が戻ってきた。

真希は、おかえりなさい。と、相手が解釈するよう、相手を受け入れるような笑みを浮かべた。

そして開いたばかりの本をまた閉じ、立ち上がる。猫猫が戻ってきた今、お留守番なんてことしなくてもいいのだ。

真希は、どうぞお座りください。私はベットに戻ります。と、促しているように見えるよう、笑顔でイスを指差してから、ベットに向かった。

「相変わらず、性格が捻くれてるわね」

左のベットに向かう真希の背に、猫猫はそう声をかけた。

真希は、もう。それってどういう意味ですか？と、不満げに見えるよう、振り返り、頬を膨らませ、両手を腰に当てた。

猫猫はそれを見て、肩を竦め、やれやれだぜ。と、思った。

13時45分、職員棟一階保健室へ

「助けてナミえもとネコえもん！」

そう言って保健室に駆け込んで来たのは南穂波であった。

面倒な奴がきた。と、緑茶を飲みながら猫猫子猫に愚痴をこぼしていた南奈美は嫌そうに顔をしかめた。苦笑いを浮かべる猫猫も似たようなことを思った。

「なんですかお母さん。今私は忙しいんですから、守と遊んでいて下さい」

「冷たいわ奈美ちゃん！午前中は私と楽しく鬼ごっこのようなかくれんぼのようなことで遊んでいたのに！？」

素っ気ない態度の奈美に、穂波はオーバーにショックを受ける。

「それは枯葉君をお母さんの魔の手から守る為だったからです。でも、そんなの必要なかつたらしいですけど」

拗ねる奈美。もちろん、必要ないと言ったのは若葉紅葉だ。そう言つて、紅葉は奈美から枯葉を拉致つてしまった。不愉快だ。

奈美はついさつきまで、紅葉のことに關して猫猫に愚痴つていた。猫猫も紅葉には色々と不満というか不愉快な感情があるので、たいそう盛り上がったいた。

「奈美ちゃん奈美ちゃん。何か悩みがあるなら、お母さんに話してご覧なさい？」

暗に、そつちではなくこつちを頼つてみなさないな。と言つたわけだが。

「いいです。子猫先生に話しましたから」

猫猫は心の中でガツポーズ。穂波は心の中で負けたあ。

「ふふふ、しかししかしてしかながらの人生よ!!」

「意味がわかりません」

「今まで隠していたけど、奈美ちゃんと私はこんな契約を交わしていたのよ!!」

穂波は四次元エコバックからクリアファイルを取り出し、そこからハガキサイズの紙を奈美に見せた。そこには『なやみごとは、お母さん、南ほ波に何でもそうだんします。南なみ』と、書かれていた。

小学校低学年くらいに作成された契約書かと思われる。

「そんなの時効です」

冷静な切り返しである。

「いやいや、ほら、見てここ。隅っこに、死ぬまでこの契約書は効果を発揮します。みたいなことが書いてあるでしょ？これ実は、全部の紙に書いてあるんだけど。あー、虫眼鏡がないと見えづらいかな？」

「そんなの無効です！」

全くもってその通りである。

「じゃあ私の話を聞いてよナミえもん！」

じゃあその意味はわからないのである。

「嫌です！」

面倒なのである。

「未来の娘に虐められたのよ！」

気にしないのである。

「お母さんが紅葉さんに？」

未来の娘と言われ、すぐに紅葉の名前が出る奈美は、めでたいとい

うか、頭がいいね。

「そうなのよ！虐められてなぜか廊下に立たされてしまったのよ！」

「なぜかって……自業自得なんじゃないんですか？」

穂波が紅葉と喧嘩して、授業を妨害する姿が目には浮かぶ。

「理不尽な仕打ちよ！なぜか守と枯葉君も廊下に立たされたわ！」

「とばっちりですよね！」

穂波が助けて守と叫ぶ姿と、穂波が枯葉は誰にもやらんと叫ぶ姿と、教師が連帯責任って、知ってるか？と言う姿が目には浮かぶ。

「一人で遊ぶのも守で遊ぶのも構いませんけど、枯葉君まで巻き込むのはやめて下さい！」

「遊んでないわ。お母さん、真面目よ？」

「嘘です。お母さんが真面目なら、紅葉さんに虐められるわけないじゃないですか」

自分とは違い、この母親が誰かに虐められとか、考えられない。という、一種の信頼。

「んー、そう言われると確かにそうなんだけどねー」

肯定する穂波。その自信が、奈美にはなくて穂波にあるものである。

「でもやっぱり、一人より二人なのよねー」

「……………どういう意味ですか？」

「つまり！私達も手を組むしかないのよ！」

「嫌です。どこの世界に、自分の恋路を母親に手伝ってもらう娘がいるんですか」

「いや、いると思うけど……………でも奈美ちゃん、このままじゃ枯葉君の心をゲット出来ないわ？いいの？」

そんなことはないと思う。

「嫌です。でも、大丈夫です。今子猫先生と、どうやって紅葉さんから枯葉君を拉致して家に連れ帰るか、考えていたところです。夜道を襲うのはやめようというところまで、話し合ったところです」

ね？先生。と、同意を求めるように猫猫を見る奈美。

「そ、そうだったかにゃ……………」

は、犯罪計画を練っていたわけじゃないかぁ。と、目を逸らす猫猫。

「……………」

おいこら人の娘に何吹き込んでんじゃ。と、猫猫をじと目で睨む穂波。

「こ、こんなこともあるのかと状況を打破する秘策を私は用意しておいたわ！」

状況というのは、奈美と、自分の今の状況のことである。

「奈美ちゃん次の授業体育よね」

「そうですね」

出る気ないけど。

「その体育でうまくいけば万事解決なのよ！」

自信満々な猫猫。

「はあ……よくわからないですけど、そうなんですか？」

よくわからない奈美。

「……」

何でも言いからさつさと言えよと思う穂波。

「ふふふ、この作戦の肝は、家族の絆よ」

次回。猫猫の秘策が冴え渡る気がしなくてもない！

6・5・四時間目 一人より二人……？（後書き）

子猫の秘策が冴え渡る！

だと、なんかかわいらしいね。

ねこまんまにゃ！ねこまんまを作れば解決にゃ！

つて、感じ。

いや、意味は特にないよ

6・6・休み時間 五時間目に保健室と体育館

13時55分〜職員棟一階保健室

「お母様大丈夫ですのー!？」

「光……保健室なんだから静かにね」

慌てて保健室に入ってきた虹野光と、呆れ顔で保健室に入ってきた鈴乃音真音。

「猫先生猫先生お母様はどこですの生きてますですの!？」

「光ちゃんのお母さん？」

クルクルイスで回っていた猫猫子猫は首を傾げる。はて、来てたかな？

「ああ、そういえば真ん中のベット……」

そういえば、真ん中のベットのカーテンが閉まっている事を、猫猫を思い出した。帰ってきたら閉まっっていて、中を覗こうとしたら、南奈美が起きてきて、色々あつて忘れていた。

「真ん中のベットですのね!」

猫猫の言葉を受け、脱兎の如く真ん中のベットに駆け寄る光。真音は「だから落ち着いてさあ……」と、ため息をつきながら後に続き、猫猫は、光ちゃんは相変わらず元気でカワイいわねえと、微笑みながら後に続く。

「お母様が死んでるのです！」

カーテンを開け、寝ている虹野望を見た光は、開口一番そんな悲痛な叫びを上げた。

「……」

いや、死んでないよ。と、自信を持っていえない真音。

「これはこれは……」

本当に死んでたらどうしよう。とか、真希ちゃん黙ってやがったな。とか、思っ猫猫。

「お母様生き返って下さいですのー！」

母に縋り泣く娘。

「うるさいわよ………光」

生き返る母親。まぶたを億劫そうに開け、めんどくさそうに、光の頭に手をのせる。

「お母様が生き返ったのですのー！奇跡ですのー！」

「あなたの……奇跡は、安いわね……」

はあ。とため息をつく望。何だこは。全くもって眠れやしない。

「大丈夫ですか？」

猫猫は保健医らしく、顔色が悪い望の容態を聞く。

「ええ……もう少し、静かに……眠れれば……」

暗に、静かにしろということである。

「お母様が授業中にいなくなっちゃって、わたくし心配だったですよ？」

骨！という感じの望の手を握りながら、言う光。

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫よ……少し、疲れただけ……あなたは、授業……頑張りなさ、い」

「お母様が心配で授業にあれが入らないですの」

「あれじゃなくて身……しっかりなさい、光……あなた、さっきの数学……ほとんど隣の……鈴乃音さん？」

名前合ってる？と、目で聞く望。頷く真音。

「……鈴乃音さんに、答え、聞いてた、じゃない……」

「うう……わからないんですものー」

「だから、頑張りなさいと……言ってるのよ……鈴乃音さん、頼むわ……」

「あつ、はい。ほら行くよ光。五時間目始まつちゃう」

「嫌ですのー！わたくしお母様といたいですのー！」

「失礼しました」

「失礼したくないですのー！」

真音に首根っこを掴まれ、光は引きずられるように、保健室から退席した。

「はあ……」

疲れた。という心がこもったため息をつく望。

「元気なお子さんですね」

「私には……元気過ぎる、わ……あげましようか？」

「え？……冗談でもそういうことは言わない方が……」

「ええ、そうね……そう、なのかしらね……」

「おやすみなさい」

猫猫は苦笑しながら、カーテンを閉めた。

「全く………静かに寝かせて………欲しいわ」

望は、一人呟く。

さっきもうるさかったし、保健室は静かにする場所じゃないのかしら。

そんな素朴な疑問を持ちつつ、望はまぶたを閉じる。

死んだらゆっくり静かに寝れるのかしら。もしそうなら、寝ている間に殺して欲しいわ。

望は最後にそう思い、浅い眠りにおちた。

呼吸をしているかわからないその寝姿は、死んでいるようにしか見えなかった。

14時10分〜第二体育館〜

「えっとあ、今日わあ、授業参観ということであ」

「全く、何だったのよあのには野郎。何で私があいつの分までバケツを持たなきゃいけないかったわけ？おかしいでしょ。今思い出しでもおかしいでしょ」

「おかしい人間同士が出会って、おかしくならない方がおかしいんじゃない？」

場所は第二体育館。

現在、若葉枯葉のクラスは体育の授業中。準備体操を終え、体育教師が今日やることをメガホンを使い説明している。

保護者の多くは二階のアリーナ席に座っているが、若葉紅葉と神社神裂はさも当然の如く、列の後ろに並び、雑談に興じていた。

「つまり、私は神裂とには野郎のとばかりを受けたわけか……」

「本当のとばかりは枯葉君と、あの少年だったと思うけどね」

「あの少年なに？無駄に達観した感じだったけど」

「さあ？息子さんじゃない？」

「つまりあの女狐留年してたのか！そんな馬鹿に枯葉はやれん！」

「普通に双子じゃない？」

「普通なんて亡霊みたいなもんだ！」

「その心は？」

「亡霊に心はない」

「で、あの未来のお母さんはどこに行ったのかしらね」

「未来のお母さんとか言うなよ縁起わりい……あんなのと家族になるとか、女狐にお義姉さんと呼ばれるよりやだ」

「確かに私も遠慮したいわね」

「何よ。完璧つぽく天才つぽいあんたがそんな事言うわけ？」

「言うわけ。苦手な人くらいいるわ。完璧の前に天才なのだから」

「うわあ、自分で天才とか言ってるよ。苦手な人？知らなかったわ。例えば？」

「若葉家長女とか」

「ほお」

「若葉紅葉とか」

「ふむ」

「紅葉とか」

「私だけじゃねえか！喜ぶべきか悩むわ！」

「というわけでえ、ようわあ、いつも通りい、自由にやっちゃって下さあい。保護者の方わあ、参加しにくい服装の場合い、ネコつちがあ、じゃなくてえ、私が準備しといたジャージがありますのでえ、

声かけて下さあい。あとお、紅葉ちゃんは死んでくださあい」

「突然何言ってるんだ、このぶりっ子年増！」

「ぶりっ子じゃありません、キャラ作りって言ってる下さあい。じやあ、かいさあん」

しまらない号令を受け、生徒達が蜘蛛の子を散らすようにとはいわず、ダラダラと移動し始めた。

「私、聞いてなかったけど。なにすんの？」

「ご自由にどうぞって言ってたわよ。なんとなく、親子で遊びましように進めてた気がするけどね」

「ふーん。じゃあ、枯葉と遊ぶか。ミントンやりたいミントン」

紅葉が久しぶりにバトミントンやりたいなあと思い、枯葉の姿を捜し始めた、ちょうどその時。

「アイルビーバーク！！！！」

と、体育館中に日本語英語が響いた。

「なっ！？お、お前達は！！！！」

「紅葉、ノリ良すぎ」

声が出た方、つまり入口を見た紅葉はどよめいた。神裂は冷静にツッコミを入れた。

入口にいたのは案の定というか当然の如く、南穂波と南奈美。服装はどこで着替えたのか、すでに学校指定のジャージ姿だった。穂波はニヤニヤと笑いながら腕を組み、仁王立ち。奈美は親の敵を見るような目で紅葉を睨んでいた。

「色々と省くけど、未来の息子をかけてバレーで勝負よ!!」

と、穂波。

「色々と省くけど、断る!!」

と、紅葉。

「逃げるんですか?」

と、奈美。

「誰が逃げるかやってやるし!」

と、紅葉。

「紅葉、軽すぎ」

と、神裂。

「さすがに枯葉君の一生を賭けるとかありえないから、とりあえず放課後枯葉君で遊べる、じゃなかった枯葉君と一緒にいられる権利をかけて勝負よ!!」

「望むところだには野郎め!!バケツの怨み晴らしてやるじゃな

かった、枯葉はやらん!!」

「にやははは!!受けてしまったわね!すでにこの時点でああなたの負けは決まったわ未来の娘よ!!」

「ど、どういう意味よ永久とわに赤の他人!!」

「私は遙か昔、東洋の魔女と呼ばれていた!!人達の後輩だったのよ!!」

「な、なんだって!?!よくわからないけど、騙したな!!」

「騙した?にやはははははは!!ちゃんちゃらおかしいわ!!騙したなんて言葉はね、事前に相手を調べずに自らの力を過信した傲慢な人間が使う負け惜しみなのよ!!」

「ぐう、なんだかよくわからないけど負けた気分……」

「そちらは紅葉さんと神裂さん。こっちはお母さんと私で、二対二の、ビーチバレーみたいなルールでいいですよね」

「いや、こっちは三人。神裂」

「はい、連れて来たわ」

「この展開はありえない!?!」

と、叫んだのは、入口で奈美と穂波の姿を見て、あつ、これ絶対面倒なことになると思いステージ裏の非常口から脱出を試みようとしていたところ音もなく近づいて来ていた神裂に捕まりここまで引き

ずられてきた若葉枯葉その人である。

「これで三人！というかすでに景品がこちらのチームにいる時点で私の勝ちが決まってるんじゃないかしら！！」

「よ、よくわかりませんが卑怯ですよ！！」

「卑怯？あはははははははは！！笑止千万！！卑怯なんて言葉はね、勝つために何の努力もしなかった怠け者が使う言い訳なのよ！！」

「というわけで、こちらも三人目を捕獲もとい連れて来ました」

「お母さん、さすがです」

「……はあ」

と、ため息をついたのは、騒ぎを遠くから眺めていたら三人目が現れ、あっ、これ巻き込まれるフラグだと遅ればせながら気付き枯葉同様ステージ裏から脱出を試みようとしたところ後ろから肩を叩かれ、抵抗？そんなの生まれた時から諦めてるとい感じに達観している秋春守その人である。

「……」

枯葉と守の目があった。その時二人が感じたのは同じ感情、略して同情。それが友情に変わるのも、そう遠くない気がした。

「ちい！数のアドバンテージは取れなかったか！まあいいわ！まとめて叩き潰してやる！具体的に言うとバレーボールで！！」

「叩き落としてあげます。具体的に言うとバレーボールで」

「じゃあ私は、叩き返してあげるわ。具体的に言うとバレーボールを」

「ところで、私は明らかに部外者なのにさも当然の如くチームに組み込まれてる謎を誰か教えてくれない？」

いつも部外者完璧天才神裂の言葉は、もちろん誰にも届かなかった。

14時15分〜第二体育館〜

6 - 6 ・ 休み時間 五時間目に保健室と体育館（後書き）

よくわからないけど、次回！雌雄を決する時！！

6・7・五時間目 実況解説(ごっこ)

14時15分～職員棟一階保健室

「15分かぁ……」

デスクワークに精を出していた猫猫子猫は、時計を見てそう呟いた。背伸びをして肩を回す。短時間でも集中して作業をすれば疲れる物は疲れる。

そろそろ奈美ちゃんと穂波さんが、紅葉ちゃんに勝負吹っかけてるころかしら。それともバトミントン勝負とかやってるころかしら。

クルクル椅子でクルクル回りながら、ぼんやり体育館の様子を想像する猫猫。ニヤニヤ笑いを浮かべている。

親子で楽しく遊びましようとかいいんじゃないかね。と、体育教師に助言したのはもちろん猫猫であり、もちろんそれは穂波と奈美が若葉姉弟と仲良くなるのに役立つかなあとか思った作戦だった。

余談だが、猫猫が助言しなかった場合、体育の授業は永遠に外周ラウンニングだった。理由は、今日は天気がいいから。とのことだった。馬鹿かと思った猫猫は、馬鹿かと言った。

「んー……」

回るのをやめ、思案顔でカーテンが閉まっている二つのベットを見る猫猫。

左には橘真希。真ん中には虹野望がいる。

真希は、まあ体調が悪いわけではないので問題ない。望は、顔色が悪いが、前少し調べたところ、何か持病があるわけではなかったはずだ。ただ、人間が最低限生きられる程度にしか体力がないだけ。いわば、年から年中冬眠状態で活動しているようなものだ。寝てれば問題なし。

体育館気になるし、行ってみようかしら。ちょっとだけなら大丈夫でしょう。

「猫猫先生」

猫猫がそう思い、椅子から立ち上がった。まさにそのタイミングで、保健室の扉が開いた。

「あ、校長先生。何かご用ですか？腹痛か何か？」

入ってきたのは校長、八尾比丘尼因幡だった。

「違います」

八尾比丘尼は、ぴしゃりと否定した。そして、ちらっとベットの方を見た後、厳しい表情で猫猫を見る。

「猫猫先生にお話があります。校長室に来てくれますか？」

「お、お話ですかあ？ちょっと、忙しいかなあって……」

こ、これはもしや。と、一歩退く猫猫。

「あなた、またやりましたね」

「や、やったとは？」

「更科先生さうしなが泣きながら私に訴えてきました。猫猫先生に、授業の内容を変更しろと強要された。」

「裏切ったなああのビッチ！！」

どら焼きで手を打ったはずだろうがぁ！！

「猫猫先生！ビッチだなんて教師が使っている言葉ではありませんよ！あなたはいつになったら教師としての自覚が生まれるんですか！？来なさい。説教です」

五十代とは思えない力で腕を掴み、猫猫を連行する八尾比丘尼。

「お話じゃなくて説教にランクアップしてますよ校長！ビッチじゃないならなんて表現すればいいんですか！？」

「性に自由と言ってます」

「自由と片付けていい話じゃありませんよ！あの野郎じゃなくあの先生がどれだけ生徒と」

「恋愛の自由です。いいから来なさい」

「何で私だけ　！」

「……………はぁ」

望は、遠ざかっていく声に対してため息をもらす。

静かに寝かせてくれないかしら。

14時20分、第二体育館へ

「ねえ冬美」

「なに夏美」

「どうする？なんかもう場所ないし」

「どうしよっか」

「あっ、始まるみたいじゃん」

「ホントだ」

「こうなったらあれをやるしかないね冬美」

「あれをするしかないのかな夏美」

「実況と解説ごっこ！ー！」

「えー、いいよ」

「さあ始まりました第35回八尾比丘尼高校豪華商品争奪大会決勝戦！ー！実況は夏の残骸夏季夏美！」

「解説は冬の妖精冬季冬美がお送りします」

「よろしくお願ひします冬季さん。さあ、ついに始まりましたね。どうですか？」

「この試合が気になって、夜も眠れませんでした」

「では今日はぐっすり眠れるわけですね。では、解説をどうぞ」

「いえ、まずは実況からどうぞ」

「いやいや、ここは解説からどうぞ」

「じゃあ場所の解説からしましょうか。実況の夏美さん」

「あなたの自由に解説の冬美さん」

「ここは第二体育館。つまり第一体育館があるわけですが、違いはさほどありません」

「強いて言うなら、大きさが違いますね」

「その通り。あと、第二体育館の二階は完全に観客席になっていますが、第一体育館の二階は卓球場と物置になっているという違いもあります」

「大きさは、だいたい二倍くらい違いますよね」

「はい。第一体育館はバスケットコートが二つ。こちらは第二体育館はバスケットコートが四つ程度の大きさですね」

「縦に長いですよー、この体育館。なんでかな」

「小耳に挟んだ風の便りによるとですね、気になった生徒が先生に聞いたところ、私い、長い方が好きなお、とのことですよ」

「意味がわかりませんよ解説の冬美さん」

「同意します。じゃ、そろそろ実況よろしく夏美さん」

「決勝で戦うチームは、えーっと、秋春チームと若葉チーム、だよ
ね？」

「だね」

「チームメンバーは、秋春チームが秋春君と、秋春君のお母さんと
……………誰だあの女!!」

「図書委員の人。名前知らないけど」

「何でさも当然の如く秋春君チームに入ってるんだ！秋春君のお母
さんとも仲よさ気だし！っていうかクラス違うじゃん！何でここに
いんの!?!」

「いや、クラス違うのにいる理由はわかるでしょ。他はともかく」

「教えて解説の冬美さん！」

「教えるけどさ、実況かつこ八テナの夏美さん。この学校、体育の時間が二クラス、たまに三クラスくらい被ってるでしょ？あの図書委員の人が、その被ってるクラスなんでしょ。多分、2 - Aじゃない？」

「知らなかった！」

「そこは知っておいて欲しかった」

「しかし他の疑問はさしもの解説さんにもわかるまい」

「何でこの実況さんは上から目線なんだろう」

「くっそお。よくわからないけど妬ましいぞお。何で私がここで実況ごっこに興じてあっちがあははうふふとバレーに興じてるんだよお」

「……………え？夏美さん夏美さん。私、どうしてあの方がチームにいるか知ってますよ？」

「え？ほのかに殺気を漂わせている冬美さん、マジですか？」

「マジですよマジですよ。これでも解説という肩書きを持つ私ですよ。わからないわけないじゃないですか。あと、私は断じて殺気なんか出してないよ？」

「に、ニッコリが怖い……………」

「実はあの子は、秋春君の彼女さんなんですよ!」

「……えー、マジでー?」

「おい、なんだってって言えよ」

「怖いんだってー!?!」

「いやいやだって他に考えられないよね?それしかないよね?」

「いや、なんか他にもあると思うよ?」

「そもそもこの勝負の報酬、秋春君でしょ?」

「マジでか!?!」

「いやいやマジだって、嘘じゃないよ?なんかそんな事言ってたもん。巷の噂じゃそんな感じだもの」

「た、確かになんかそんな話をしていたような気が……」

「で、今の彼女があこの図書委員さんでしょ?で、あっちのほら、若葉チームにいる人いるでしょ?」

「ああ、あの、若葉のお姉さんっぽくない方?」

「そうそう。あの人が秋春君に一目惚れで、秋春君の彼女を巡る戦いが始まったんだよ」

「なんだってー!?!」

「あの人は年下好きなんだよ」

「なんだってー!?!」

「あの人は狙った獲物は逃がさないんだよ」

「なんだってー!?!」

「あの人は「その仲良しさんたちー!」あまり勝手な事言わないようにねー!?!」

「……」

「……」

「……へい、冬美」

「……やあ、夏美」

「私達は、秋春君チーム側コートの壁際にいるじゃん?」

「そうだね。ステージ前のコートではバスケ中。その次のコートはバレー中。次のところではバドミントン中で、なかなかの賑やかさの体育館に私達はあるね」

「あの人……聞こえてんの?」

「まさかぁ……私達は小声で叫ぶという妙技で会話してたんだよ?」

「だよねー。ありえないよねー」

「つまり今のは偶然なわけだよねー」

「全く持っただけの通りだから、私の事は気にせずどっぞ会話を進めなさいー!」

「……」

「……」

「……」

「……実況の夏美さん、話し進めて」

「……と、とりあえず私は今からでも秋春チームに入りあの女の代わり秋春君の彼女のポジションにぐほえ!」

「きゃー、夏美さんが急にまるで腹部に裏拳くらったような叫び声をあげて腹を抱えてしまったわー。一旦CM入りまーす」

6・7・五時間目 実況解説ごっこ(後書き)

更科先生が現れた!

CM中に、辞書を確認するの悪くないかもね。

5時間目はずっとこんな感じで続きまーす。

6・8・五時間目 保健室と体育館の攻防

14時15分〜第二体育館 保健室

桜木さくらは一人で、体育館から保健室に向かっていた。一人で隣に親友、氷山つららはいないし、後ろに母親、桜木押花はいないし、もちろんどこにも妹兼友人、虹望光の姿はない。

つららとは第二体育館の入口で別れてきたさくら。ちょっと気分が悪いからと言って。もちろんつららは一緒に行こうかと言ってくれたが、というかそんな事言う前からついて来る気満々だったが、一人で大丈夫だから。つららはお母さん達に伝えといて。と言って別れてきた。

つららは納得したわけではなかったようだけど、疑っていたようだけど、本当に大丈夫だから。と、さくらが二度言つと、わかったと困り顔で頷いてくれた。

つららはちゃんと察してくれただろうか。と、別に通らなくてもいい生徒棟に入りながらさくらは思う。だいたいな。と思いつつも、察して欲しいならちゃんと口に出せばいいのにな。と、矛盾している気がする自分の行動に対して、ちょっと苦笑い。しかしすぐに表情を引き締める。

今頃つららは押花に保健室に言った事を伝えているだろう。押花は保健室に来ようとするに違いない。でも、きつと来ない。と、さくらは推測する。

押花とつららだけなら、きつと来てしまっただろう。でも今日は、つ

ららの養母、冰山吹雪がいる。さくらは吹雪の事をあまり知らない。二年前に一度、顔を見た程度。その後は今日まで一度も、会った事もない。つまり今日、初めて会ったと言っても過言ではない。それでもさくらは、吹雪なら自分が保健室に行ったという意味を、保健室に行こうと思った動機を、察してくれる気がした。親友のつらは察してくれるか不安なのに、初対面の吹雪が察してくれるのを確信しているのは、何だかおかしいなと自分でも思いながら。

「何で私だけいつもいつも説教されるんですかー！」

「それはいつもあなただけが説教されるような事をするからでしょう」

渡り廊下を渡ったところで、聞いた事がある声が聞こえた。さくらは曲がり角で曲がらずそこで待機。出来るなら今は会いたくはない声だ。

「そんな事はないと思いますけど……前々からまさかなあとは思ってたんですけど……校長先生、もしかして私の事嫌いですか？」

「好き嫌いの自由です。いいから入りなさい」

「つまりそれは遠回しに私の事が　！」

「……」

さくらは声が聞こえなくなったところで、曲がり角から顔を出す。いない。

あの声は保健医猫猫子猫と、校長八尾比丘尼因幡だった。会話から推測するに、校長室に入っていたのだろう。つまり今、保健室に

猫猫はいない。猫猫を保健室から遠ざけるのが一番の問題だったさくらにとってそれは幸運だったが、さくら以外には（もしかしたらさくらにとっても）、それは不幸だったかもしれない。

さくらは足早に廊下を進み、保健室の扉の前にたどり着き、周りを見渡す。つらら達の姿はないし、保健室から声も聞こえない。

少々遠回りでさくらは保健室にやってきた。もし、吹雪が察してくれず押花が保健室に来る事になれば、もうここにいってもおかしくない。ということは、やはり吹雪はうまく足止めしてくれたという事だろう。

吹雪の言葉に対して、あの二人は強く抵抗出来ないの事を、さくらは知っている。つららは気が弱いから、押花は吹雪に負い目があるから。

「失礼しまーす……」

さくらは中にいる人に聞こえないくらいの小声でそう言って、ゆっくりと保健室の扉を開ける。

思った通り、保健室には猫猫の姿はなかった。猫猫がいた場合は、望が怪我をしたと伝えて退室してもらおう作戦を、四時間目に一応考えておいたのだが、使わずにすんでよかった。猫猫を騙すのは難しい気がしていたからだ。

さくらの目的も、目につる範囲にはいなかったが、そこは予想の範囲内。さくらは使用中であろう、二つのベットに視線をうつす。

「……」

足音を立てないように、抜き足差し足でまずさくらは、左のベットに近づいた。そして気を落ち着かせるために一度深呼吸してから、カーテンを少し開く。

中を覗くと、ベッドに腰掛け眠っている少女がいた。膝の上に開きっぱなしの本が置いてある。間違えましたー。と、心の中で謝罪のような報告をし、さくらはそつと、カーテンを閉める。

「…………ふう」

となると残りは真ん中のベッド。さくらは先程同様深呼吸し、カーテンを掴んだところで、もう一度深呼吸をしてから、そつとカーテンを開けた。

「…………」

そこにはさくらが思った通り、光の母親、虹野望が死体のように眠っていた。

さくらは望が起きないように、静かに、カーテンの隙間から体を滑りこませ、カーテンを完全に閉じる。これで完全とは言えないが、この場合は外界から遮断された個室となった。

「…………」

さくらは静かに、押花の恋敵、望の寝ているベッドに近づき、枕元に立つ。

そして死人のような顔を観察するように眺める。昼休みの時は、考える事を放棄した対象を、眺める。

妹兼友人の母親であり、母親の恋敵であり、自分にとってはまだよくわからない、存在さえもわからない、まるで幽霊のような望を、観察する。望をしつかり直視して、自分の中に生まれる感情が何かを確かめる。

「……あ」

さくらは保健室に来てから初めて、声をもらした。望がまぶたを開いたからだ。まだ起こそうとは思っていなかったため、さくらは少し驚いたが、逃げたすことはしない。それでは、親友も母親も置いてここまで来た、意味がない。

「どうやら……眠れない、みたいね……」

望は首を動かすのが億劫なのか、目だけを動かし、さくらと目を合わせ、末期の言葉を口にするような弱々しさで言葉を吐いた。

「……」

さくらは何も答えず、望の虚ろな瞳を見続ける。

「そう……」

さくらのその態度を見て、何を思ったのか、何を察したのかはわからないが、望は目だけではなく、首を動かしさくらをちゃんと視界におさめた。

そして、言葉を発する。

「偶然、というわけでは……ないみたいね……私と……お話を、したいのかしら……それとも」

それとも。と、言ったところで、望の表情が変わった。

先程までが、けだるそうな、まるで幽霊のような表情だったとするならば、今の望は、怨敵を見つけた悪霊のような表情だった。

口角を限界まであげた、狂ってるような力強く精気に満ちた笑みを

浮かべながらも、やはり弱々しい言葉で、望はきく。

「私を殺したいのかしら……………」？

「……………」

さくらは、『はい』とも『いいえ』とも答えず、望の笑みから逃げる事もせず、望を見続けながら、自分に、殺したいんですかと、問いた。

もちろん自分から答えなんて、返って来なかった。

14時25分〜第二体育館

「はい、CM明けてこんにちわ。前任の実況者が全く実況をしないという暴挙に出たので代わりを務めさせていただきます、冬季冬美でございます」

「はい、どーも。偶然にも前任の実況者と同一名だけど多分別人、理不尽な暴力で腹部が痛い解説、夏季夏美でーす」

「どうぞよろしくお願いします」

「はい、よろしくどうぞー」

「今回は真面目に行こうと思うよ夏美」

「私はさっきも真面目なつもりであぶなっ！！へへへ、その何度も裏拳を喰らうかってんだってついたあ！？蹴りは反則でしょ！？」

「さて、かれこれ試合開始から五分から十分程度経っているわけですが」

「無視かよ！いいいいいいし、距離おくし。蹴りや拳が届かない場所に行くし」

「私的の雰囲気的には若葉チームが勝っているような気がしますけど、どうですか？」

「そうですねって、近づいてくんな！」

「いや、だって近くにいないとやりにくいじゃん」

「確かに」

「でしょ？」

「なら仕方ないか」

「うん、仕方ない。で、どうですか解説の夏美さん」

「えっと、そうですね実況の冬美さん。確かにこちらのコート、つまり秋春君チームのコートでボールが跳ねるのが多い気がするから、若葉チームが勝ってるんじゃない？」

「では、得点板をご覧ください」

「え？得点板というと、黄色の下地に黒字で0から9の数字が書かれた変な材質な物が三つ三つの計六つありその間に一つ白い仲間外れがぶらさがっているような形で黄色の奴をカレンダー式でめくっていく事により999点くらいまで表せて上には黒板のような物もついていてコロコロがついているからってスーパーのカートのようにして遊んだら昔こたま怒られた、あれ？」

「そうそう。調子にのった小学生つまり夏季夏美が止めようとする私を轢いた、あれ」

「それを見ればいいの？」

「そう、見ればいいの」

「えーっと……30対6か……そうかあ、もう一セット終わってたのか。ところでこれ、何セットマッチ？」

「んー、五セットじゃない？なんかやる気満々だし」

「そっかそっか、じゃあ後四セットだねっておい！授業時間じゃ終わらないだろそれ！」

「そこでノリッコミなの！？」

「冗談だ」

「冗談だったのか」

「審判仕事しろよコートチェンジはどうした！」

「そつちが問題なの!？」

「嘘ですよ冬美さん」

「嘘ですか夏美さん」

「っていうかあれでしょ?よくやる間違えでしょ?一桁のとこじゃなくて間違えて十桁のとこめくっちゃった。てへ。ってことでしょ?あ、またやった。点差が33に開いた」

「まあ、そうなんだけどね。百桁じゃなくて十桁で間違えるってどうなのって感じだけどね」

「まあ確かに。というか私達もう高校生じゃん。そんなミスするほどのお茶目さんってどんな人？」

「あんな人」

「ふむふむあの特徴的な鈴簪すずかんざしとあの顔は、一人しか知りませんね」

「鈴乃音さんだね」

「あいつなら納得だね」

「なんとなくね」

「つと、よく見たら若葉チームの得点やってんの三途じゃん。何であの二人が？」

「なんか、体育館から出ようとした二人が捕獲されてたのを見たよ
うな気がするよ夏美さん」

「ああ、そこにいたからという感じですね冬美さん」

「そうそう。で、三途さんなんだかんだ言っただけなら頼まれたら断れない
ような人でしょ？」

「……………そう？」

「でしょ。間違いなく、三途さんは根は優しくていい人でしょ。間
違いなく、友達想いの人でしょ」

「えー……………そうかなあ」

「夏美は違っと思ってわけ？」

「だってさあ、いい奴なら鈴乃音のミスを指摘するでしょ。ほれ見
てみ？三途は間違いなく気付いてるじゃん？気付いている上で指摘
せず、こんなミスするなんてホント馬鹿だな頭おかしんじゃない
の。と、言わんばかりのあの、ゴミを見るような目ですよ？あれで
友達想いとか根が優しいとかは、とてもとても思えませんねえ」

「あ、見て見て夏美。三途さんが、さめんどくさそうにため息つ
いた後に、鈴乃音さんに指摘してちゃんと正しい点数に直してあげ
てるよ。しかもほら、もうあなたはいいから下がってなさいよ全く
世話がかかるんだからあ。と、言わんばかりに鈴乃音さんを後ろに
下がらしたと思ったら、鈴乃音さんが、私がやる私がやる私がやり
たいのというアピールに対して、仕方ないなあ。今度ミスしたら下
がらせますよ。と、言わんばかりのため息をつけて場所を譲ったよ。

間違はなく三途さんは、冷たい態度の裏に春のような暖かさを持た、優しい人間だよ」

「……………い、いや、それは冬美さんの深読みだと言わざるおえませんね」

「……………随分否定するね夏美」

「そ、それはまあほらなんといいつか私つてば清く正しい真実の解説者を目指していますからあつ……………!?!」

「キヤー!!!夏美の横っ面に凄い勢いでバレーボールがぶつかつたー!!!って本当に大丈夫ですか夏美さん!?!チャンネルはそのままで!?!」

6 - 8 ・五時間目 保健室と体育館の攻防（後書き）

んー、いまだに八尾比丘尼高校の全体像がつかめないのは私だけで
すか？体育館って、一つじゃなかったっけ。んー、改築したのかな
あ。

八尾比丘尼高校の紹介CM流れないかなあ。

チャンネルはそのままで！

ここが何チャンネルかは知らないけどね！

6・9・五時間目 愛憎の舞台（笑）

14時25分〜保健室

「あら……怯えない、のね……光なら、一発なんだけど……」

渾身の悪役顔を披露したというのに、全く反応しなかった桜木さくらが意外だったのか、それともつまらないと思ったのか、虹野望はまた億劫そうに首を動かし天井に顔を向け、まぶたを閉じて、生きる事さえ諦めたようなため息をついた。

「それで……何の用、かしら……まさか、本当に、殺しに来た……わけじゃない、でしょ……？」

望は目をつぶったままさくらに用事を尋ねた。

「……喋って、くれない？」

しかしさくらは一向に何も言わない。仕方なく望は、しんどいがまぶたを開き、横目でさくらの様子を見る。

案の定、さくらはマネキンのように微動だにせず、こちらを見ていた。それを確認してから、望はまたまぶたを閉じ、心の中でため息をついた。

会わなければいけないというところまでは決めてきたようだけど、聞くべき内容までは決められなかったようね。と、望はさくらの今の状態をそう、推測した。

なら来なきやいいのに。と、望は心からそう思う。一時間程度考えただけで行動するなんて、何を焦ってるのかしら。と、自分の事を棚に上げさらにそう思う。

望はもう、今日さくらと押花に関わるのはやめようと思っていた。昼休みで、望は精魂尽き果てた。放課後の部活動にまで、参加する気などカケラもなかった。保健室で寝たら、帰るくらいのつもりだったのだ。

つまりこの状況は、望にとっては嬉しくもなんともないし、ラッキーとも思っていないし、逆に災難だとまで思っていた。そりゃ、いつかはさくらと二人だけで会談する場が必要かとは思っていたが、今じゃなくてもいいじゃないか。

「……はあ……あなたが、喋らないなら……私が出てきとーに……喋るわ……質問があるなら……いつでも、どうぞ……?」

そうは言っても、こういう風に追い詰めたのは私みだから、仕方ない。と、今度は心の中ではなく実際にため息をつけてから、望は自分がつらつらと話してあげる事にした。情報収集に来たのなら協力してあげた方がいいだろう。早く終わるし。つまり早く寝れるし。

「まずは……そうね、名前は……虹野望……性別は、女……体温は、調子いいときで……35度……血圧は、下が70から75……上が……ああ、こんなのは、どうでもいいかしら……年齢は、あなたの母親と同じ……あなた、母親の年齢、知ってる?」

さくらは答えない。望も気にせず続ける。天井を見るでもなく眺めながら、思いつくままに語る。自分の事を、もしくは、過去を。

「身長も……同じくらいかしら……体重は、私の方が、低いでしようね……まあ、若い頃は、体重も同じくらい……だったかしらね……ああ……性格も、近かった……気がするわ……一つの事

に、執心する……タイプ……心当たり、ある？」

「……」

「まあ……今の私は……見ての通り……その抜け殻みたいなものよ……一晩で、白髪になったりは、しなかつたけれど……望の果ての、姿が、これ……ああ……比べると、本当に……あの人の、好みは、わかりやすいわね……」

「……」

『あの人』という単語に、さくらが反応したのに、望は気付いた。喋ったわけではないが、明らかに空気が変わった。話しを聞く、態度が変わった。

それに気付かなかったかのように、しかし気付いた上での内容を、望は喋り続ける。

「身長……体重は……まあ少なからず、あつたのかしら……でも、やっぱり、性格ね……あの方は、仕事一筋……みたいなものだし……何か一つに、執心する……私や、押花さんが……気に入った、のかも、知れないわね……自分に似てて……だから、結婚して……いえ、あなたが生まれて、かしら……？」

「……何が、ですか？」

これが記念すべき、さくらと望の初めての会話であった。

「何がって……わからないの……？」

望は首を動かさず、またさくらを見る。

「つまりね……………あなたが生まれたおかげで押花は輝樹トモキ以外につまりあなたにも心を裂くようになったおかげで一つに執心しなくなつたおかげで、私はあの人と結婚出来たという意味よ？」

「っ」

今度は成功した。

さくらが一步退いたのを望は見逃さなかった。

望はちよつと、勝つた気分になった。が、すぐに、はて？いつから私はこの子を怯えさせる事を目的にしていたっけ。目的違くな？と自問自答。

もちろん、そんなの形だけの自問自答。

本当の意味で自分に問い自分が答えるような人間を、望は知らない。

14時30分〜第二体育館

「夏美、本当に大丈夫なの？保健室行く？」

「平気平気、耳がジーンってする程度だし」

「本当に？」

「ホントホント。だから、ひざ枕はもうよくな？ってか、ひざ枕す

る必要あつた？」

「必要性しか見つからない」

「具体的には？」

「……………え？CMもう……………え、あ、こほん、えーっと、引き続き実況は冬季冬美でお送りします！」

「おいこら」

「解説は!?!」

「いや、もうそれはいい「解説は!?!」「いや、だから「解説は!?!」
……………せめてひざ枕を「かーいーせーつーわっ!?!」

「……………解説は、何故かひざ枕継続中、夏季夏美です」

「さあ、ハプニングが連続ですが張り切っていきましょう！」

「いきましようー！」

「おお、夏美さんもやる気出て来ましたね」

「ええ、冬美さんに負けないようにいききたいと思います」

「さて、正常運転に戻った得点板を見る限り、5対15で若葉チームが勝ってますね」

「えー!そんなに大差がへぶしー！」

「こら。動かない」

「そうは言ってもひざ枕状態では得点板が見えづらいでござる」

「大丈夫だよ夏美っち」

「何がですが冬美っち」

「私が夏美の分まで見てあげるから」

「なんかよくわからない理論だけどいい笑顔だから、まあいいか」

「さすが夏美さん話しわかるー」

「イエーイ」

「イエーイ」

「まっ、得点板は見難いけど試合は見えるから問題ないしね。さっきから、サーブが凄いもんね、あの……地獄耳の人」

「そうだねー、私はあんなに見事な天井サーブを見た事がないよ。天井舐めてるよね」

「私は天空落として呼んでるけど」

「じゃあ私は稲妻落として呼ぶ事にする」

「じゃあ私は無回転サーブと呼ぶ事にする」

「じゃあ私はジャイロサーブと呼ぶ事にする」

「しかしあれだね実況冬美さん」

「しかしどれだね解説夏美さん」

「この得点差、サーブだけのせいじゃないよね」

「だね。チームバランス悪いね」

「とりあえず、三対三と見せかけて、二対二だよねー。秋春君と若葉、やる気ないもん」

「うん、で、あの図書委員の子、下手だね」

「うん、マジ下手だまああうちっ!!」

「いら、言葉に気をつけなさい。彼女も頑張ってるんだから」

「いや、まあそうだけどさ……ど下手じゃねあう!」

「しめんなさいは?」

「いや、でも先に下手と言ったのは冬美さん……」

「し・め・ん・な・さ・い・は?」

「し・め・ん・な・さ・い?」

「よし、今度から気をつけるように」

「何この理不尽な感じ……」

「秋春君のお母さんはうまいけど、一人じゃどうにもならないね」

「だね。さっきまではあっちの地獄耳もやる気なさげだったけど、若葉姉にすっかりやんなさいよーって喝を入れられてからはこのサーブだもんねー」

「5対20。天井サーブは確かに打ち返しづらいけど、あの、神裂さんとか言ってたかな。地獄耳の人の凄さは、サーブの正確性にあるよね」

「え？どういふ事冬休みさん？」

「どういふ事って夏休みさん。気付かないの？」

「うん。何故か視界が横になってるからね」

「うん。それは関係ないと信じたいよね。さっきから、ネットギリギリとか、ラインギリギリとかを狙ってサーブしてるよあの人」

「え？あれたまたまでしょ？」

「いや、偶然にしては続き過ぎでしょ。ほらまたネットギリギリ。秋春君のお母さんがなんとか拾ったけど、ダメだね。ただ返すだけじゃ、若葉君のお姉さんに決められちゃう」

「確かに厳しそうだね。でも、たまたまでしょ。あんな天井ギリギ

りのサーブさえ難しいのに、それに加えてネットギリとかライン上とか、二階から目薬垂らして目に入れるようなもんじゃん。ありえなくない？」

「んー、まあ確かに……運がいいのかな……あ、また天井サーブ」

「高いねー」

「ねー……あれ、ちょっと強すぎじゃない？」

「だね、ミスだミス。やっぱりぐうぜ……あ」

「……」

「……冬美、ナイスキャッチ」

「……イエイ」

「イエイ……」

「……一旦CM挟みます」

6・9・五時間目 愛憎の舞台（笑）（後書き）

とりあえず、笑っとけ。

話はそれからだ。

6 - 10 ・五時間目 例えそれが何であれ

14時30分〜職員棟一階保健室

「冗談よ冗談……………あなたが生まれたせいのはず……………ないでしょ……………？押花さんが離婚した理由は……………私が言うのも……………あれだけでも……………私が頑張ったからよ……………泣いちゃった？」

「な、泣いてません」

「ええ……………そうみたいね……………」

俯いていた顔を上げ、心なしか自分を睨んでいる桜木さくらを見て、ちよろい親子ねー。なんて、思ったりしたりもした。

「そうよね……………さくら、ちゃんは……………強い子よね……………光とは違うものね……………」

「……………バカにしていますか？」

一言口にして、喉に詰まっていた物が取れたのか、さくらは喋り始めた。

「まさか……………褒めてるのよ……………」

望は、もう全てやり遂げた。というようなため息をつき、また、ま

ぶたを閉じた。無言の圧力というのは、大変息苦しいのだ。それから解放されただけで、一安心。

「さあ……………私の冗談で、緊張も解れたでしょ……………」

と、冗談であった事を強調しつつ。

「今度はあなたが……………喋りなさい……………私はもう、疲れたわ……………」

「疲れた……………」

「ええ、そう……………疲れてるのよ……………」

色んな事に、疲れてる。

「……………あなたは……………」

さくらは何を聞くか、逡巡しながらも、口を開く。

「何しに来た、んですか？」

「それはつまり……………来て欲しくなかった？」

「……………」

「わからないなら……………わからないと、言いなさい……………」

「……………わかりません……………」

「そう、それでいいの……無言はもう、遠慮したいわ……
何しに……？何しに来たんだったかしら……ああ、そうそ
う……あなたに、会いに来たのよ」

虐めに来たわけではないのだ。

「私に……？」

どうして？

「驚くことじゃない、でしょ……光には毎日嫌でも会うし……
……押花さんには、前会ったし……」

「前、会った？」

「あら……聞いてなかった……？夏休み……あなたが光
と遊んでくれてる間にちょっと、ね……だから、今日はあなたに
顔見せ……あわよくば会話……だったかしら……」

確かそんな感じで来たと思うけど、なんかどうでもいいやな望。

「……」

さくらは、望の言った事を考えているのか、無言。表情は、怒って
いるような、困っているような、複雑である。

「……わっか」

さくらは何かを決意したかのように、一歩、ベットに、望に近づい
て、さっきより小さな声で、でも、力強く、望にきいた。

「……輝樹って、言ってみましたけど、もしかして　！」

お父さんの名前ですか。と、さくらは言おうとしたが、驚きでその言葉をのんだ。

さっきまでの死の間際のような弱々しい動きではなく、死に際の自滅的な力強い動きで、目を見開き、首を動かし、さくらを睨み、ベツトから腕を延ばし、さくらの腕を掴んだのだ。痛いほど強く掴む望の手は、その力強さとは裏腹に、死体のように冷たかった。

「もしかして？ふざけた事を言わないで」

これだけは譲れないという気持ちを込め、望は言う。

「自分の父親の名前くらいは知っておきなさい。例えそれが自分を捨てた父親でもよ。それは知るべき事で、教えるべき事よ。覚えておきなさい。虹野輝樹。それがあなたの父親の名前よ」

それは、望の一つの信念であり、そして、自分と性格が似ていたという桜木押花との、決定的な違いだった。

望はすぐに、さくらから手を離し、さっきまでの力強さが嘘のように、また弱々しい姿に戻ったが、さくらは望の底にある強さにふれ、動揺していた。

動揺していたがもちろん、虹野輝樹という名前と、そして望の手の冷たさは、忘れられそうにはなかった。

「！」

そしてさらに、さくらを動揺させる音がした。扉が開く音だ。

「何で説教の長さは相応に年齢を重ねてるのよー……」

そして疲れてるような、猫猫子猫の声。扉が開く音だけでは違かった可能性もあったが、やはり猫猫が戻ってきたようだ。

出来れば、望と自分が会っていたこと、会話をしていたことを、誰にも知られたくないさくらは、見るからに慌てた。キョロキョロと周りを見て脱出口を捜すが、もちろんあるわけもない。

どうしようどうしようとさくらがテンパリ、なんかその姿不思議と光に似てるなあ。なんて望がボケーっと思ったりしていると、猫猫が近づいてくる音が。さくら、ピンチ。

「真希ちゃんまだいるーって、お昼寝中か……」

猫猫は隣のベットを確認したようだ。しかし安心はできない。隣とということは、次はこっちということ。

「ベットの下か……布団にもぐりなさいよ……」

こうなったら、一か八かダッシュで逃げようかと、さくらが思っている時、望がそのくらい気付けよという呆れが混じった助言をした。もちろん、布団にもぐりなさいは冗談である。さすがにそれはない。望ジョークである。

そう、だっただけだ。

「お邪魔します……!」

「ちょ、本気……ぐっ……!」

さくらは布団に潜り込んだ。慌てすぎである。ベッドの下にはシートが入っているカラーボックスみたいなのがあって入れないからという考えで、さくらは望のベッドに潜り込んだのだが、慌てすぎである。どかすという考えに至って欲しかった望であった。さらに、なぜ腹の上に乗った、脇でいいだろう脇で、だっこちゃんか。と、言いたい望であった。

「虹野さん生きてますかーって……………」

しかし、望がそう言う前に、猫猫がカーテンを開けてしまった。さくらは小柄とはいえ、ベッドに潜り込んでばれない大きさではない。布団は明らかに、膨らんでいた。

「……………妊娠何ヶ月ですか？」

猫猫は訝しげに膨らみを見ながら、とりあえず。

「そろそろ……………九ヶ月かしら」

望は、腹部を圧迫されているせいで脂汗（冷や汗ではない）を流しながら、とりあえず。

「そうですね、あの光ちゃんがお姉ちゃんになるんですねー」

感慨深い猫猫。

「ええ……………そうなの、よ……………」

胃の中身を吐き出しそうな望。

「そうなんですかー」

「ええ……」

「……」

「……」

「……で？」

そこにいるのは誰かしら。と、猫猫が布団に手をかけた、その時。

「猫猫せんせい！！聞いてよ聞いてよ聞いて下さいよー！！」

「夏美、静かにしなさい」

騒がしい声と、静かな声が、扉が開く音と共に保健室に響いた。

「冬美ったらマジ酷い鬼であり悪魔であると思うんですけどって、いないじゃん」

「ホントだ」

「猫猫、先生……呼んで、ますよ……？」

「……今行くわー」

ちっ、命拾いしたな。って感じで、猫猫は布団から手を離し、退席。

「あつ、猫猫先生聞いて聞いてちょっと聞いて！」

「はいはい、聞いてあげるからそこに座りなさい夏美ちゃん。そして落ち着きなさい。顔が鼻血だらけで大変な事になってるじゃない、ティツシユ」

「その通り夏美。女としてそれはどうなの？っていうくらいの有様になってるから」

「そんな風にしたのはお前だろうがー！」

「事故よ事故。私は、なぜか急に指名され、なぜか夏美が若葉チームで私が秋春君チームに入ったと思ったら、なぜか夏美が肩を組み近づきイチャイチャし、なぜかあまつさえあんな事やこんな事をし始めたから、なぜか殺意の波動に目覚めあの地獄耳野郎を狙ったら、なぜか夏美に当たっちゃったのよ」

「なぜが多いわね」

「嘘だね冬美！一セットが終わったところで三対三に限界を感じたのかは知らんけど人員補給が行われた結果、ジャンケンの結果、私が若葉チームで冬美が秋春チームになったら、なぜかあの地獄耳さんが近づいてきて名前やら身長やら聞いてきたり異様にスキンシップ取ってきて、何この人気持ち悪いわー。とか思ってたら、向こうのコートから聞き慣れた声つまり冬美の声で、トス下さい！とかいう声が聞こえたと思ったら、なぜか地獄耳さんが私を前に出したと思ったら太ももに激痛が走り、膝をついたところで、トス下さい！の冬美とそれっ！の地獄耳さんで、どういこうこつちゃねんと思つて顔を上げたら、顔面ドーンって、破滅へのロンドかー！」

「夏美、それはテニス」

「あつ、そっか」

「相変わらずあなた達二人は、独特な空気を作るわねー」

「……………」

カーテン越しに、喧しい声を聞きながら、望は布団をめくる。コアラみたいに自分にくっついていてるさくらと目があった。

「あなた……………馬鹿？」

「……………あは、あはははー」

率直な疑問と言葉を受け、さくらは照れ笑いをするしかなかった。

14時45分、職員棟一階保健室

6 - 10 ・五時間目 例えそれが何であれ（後書き）

例えそれが何であれ、知るべき事が確かにある。

とかなんとか言いつつも、ないわあ。

この展開はちよつとないわあ。

布団に潜りこむとかマジないわあ。

っーか。隠れてどうすんだ。逃げれないじゃないか。

まあ、明日になったら、いい考えが浮かぶと信じて、また次回。

休み時間・エラー

14時50分〜職員棟一階保健室

「さくら大丈夫!？」

「はい？」

仲良し幼なじみコンビの治療を終え、さて、妊娠九ヶ月の謎を暴くかと、猫猫子猫が思っていたら、そんな声と共に桜木押花が保健室に入ってきた。慌てているらしく、扉を閉めることもしない。

「す、すいません。さ、さくらは？」

体育館から走ってきたのだろう。息を切らして押花はさくらの所在を尋ねる。スーツ姿でよく頑張るものだ。

「落ち着いて下さい押花さん。さくらさんですか？来てませんけど……」

「来てない？そんなはずは……」

押花は、名乗ってもいないのに何で名前がわかったのだろう。と、少し思ったが、今はそんな事より、さくらの方が心配だった。

「あ、もしかして……」

猫猫は、いや、ありえないかなあ。と思いながらも、中央のベットの向かう。押花は少々苛立っている様子で、猫猫についていく。

「虹野さん入っていいですかー？」

と、許可をもらう形の言葉を吐きつつ、無断でカーテンを開ける猫猫。

「虹野って、何でここに!？」

「自分で言うのも、あれだけど………私、ここにいるの、お似合い………だと、思うわ」

カーテンを開けるとそこには、先程同様の虹野望が寝ていた。まあつまり、妊娠九ヶ月である。

「さくらをどこにやったの!」

なんかもつ、全部望のせい。

「まあまあ桜木さん落ち着いて」

今にも望に襲いかかりそうな押花に、苦笑いな猫猫。

「相手は妊婦さんですよ」

「妊婦う？」

何言っただこの保健医。と、押花は思った。が、すぐにその言葉の意味を理解した。というか今まで気付いてなかったのかよ。とい

う話である。

「妊娠何ヶ月でしたっけ？」

「九ヶ月……だったかしら？」

「……さくら？」

いや、まさか。そんなはずは。と、思いつつ、膨らみを見る押花。望と猫猫の戯言なんて無視だぜ。

「汗かいてますけど、平気ですか？」

「ええ……ちょっと、暑くて……」

「……さくら！」

押花は布団に手をかけ、一気にめくった。猫猫はもう少し遊びたかったので、ちょっと残念だった。望は助かった気分だった。

「……」

「……」

二人の視線が、望の腹部に注がれる。そこにあったのは。

「………シート？」

そう呟いたのは、果たしてどちらだっただろうか。そう、望のお腹

が妊娠九ヶ月になっていたのは、シーツをまるめて隠していたからだったのだ！なんだって！。

「……………さくらは？」

「桜が咲くのは……………まだ、だいぶ先だと、思います、けど？」

「馬鹿にしてるでしょあなたは！」

「……………」

押花が、いいからさくらを出せーっと、望に襲いかかっている（押花の中では望が隠したのは自明の理）のを、放っておき、猫猫はベツトの下を覗く。そこにはシーツが空になったボックスしかなく、人がいるわけがない。

カーテンを開け、隣のベットも確認するが、橘真希が寝ているだけで、他に誰もいない。念のため、右のベットも確認するが人はいない。誰かが寝ていた気配もない。

「……………虹野さん、どういう事ですか？」

「な、にが、です、か……………それ、より……………おし、ば、なさんを……………なんとか、して……………死ぬ」

首を絞められている現在の望は、いつも以上に死に近づいている。

「まあまあ押花さん。抑えて抑えて」

「部外者は黙ってなさい！これは私達の問題です！」

「さ、さくらちゃん、なら……………」

猫猫に注意がいき、首を絞める力が弱まったところで、望は騙り始めた。さくらの名前が出たので、首を絞めるのはやめておく押花。

「30分、くらい…………前に、来たわ……………」

「それでどこにやったの!!」

押花が興奮してる横で、猫猫は、30分前というと、私がちょうど校長に拉致られた頃かしら。と、冷静に分析。

「どこにも、やって、ないわ…………私を見たら…………あの子、逃げちゃったわ……………」

「逃げた!?!どこに!?!」

「知るわけ……………ない、わ」

「嘘!嘘よ!嘘に決まってるわ!さくらに何をしたの!」

吐け吐け吐き出しやがれクソ野郎がー!と、押花は望の肩を揺さぶり脳をシエイク。

「それで?」

と、呆れ顔の猫猫。

「何でこんな悪戯を?」

「それは、まあ……なんと、なく………助けて」

気持ち悪いー。

「なんとなくなつて………困るんですよー。洗濯とか、し直さないといけないですし」

「ごめ………助けて」

「本当にさくらちゃん逃げたんですか？」

暴れる押花をなんとか羽交い締めで拘束しながら、猫猫は念押し。

「ええ………そうよ………」

はあ、押花さんだけだったら、私死んでたわね。保健医がいてよかった。と、安藤の表情を作る望。

「さくら、ちゃんは………逃げたわ………」

ついさっき、ね。

忍法変わり身と、敵を一つの場所に誘導し、その間に脱出作戦により、なんとかばれずに（虹野望が裏切つてない限りはばれずに）保健室から脱出し、更衣室で手早く着替え、教室に戻ってきた。

「あ、さくら……」

教室につくとすぐに、冰山つららが駆け寄ってきた。さくらの席はつららの前だから、駆け寄って来なくてもいいだろうに。

つららは冰山吹雪と何か会話していたようだ。さくらの席に吹雪が座って、こちらに小さく手を振っている。なんとなく、優雅だ。

「あれ、押花さんは？一緒じゃないの？」

「お母さん？ううん、会ってないけど……つらら、疲れてるの？」

さくらは、心無しかつららが疲れているような気がした。顔色が悪いとまではいかないけど、なんかやつれているような。

「あ、うん……ちょっと体育で、疲れちゃって」

曖昧な笑みは、嘘ではないけど、根本の事は言っていない。そんな感じだった。

「そっかー。吹雪さんと、何したのー？」

「ん、バドミントンを、ちょっとね。さくらは、ずっと保健室で寝てたの？」

「えっとねー……実はねー……保健室にはいなかったんだよー。屋

上でサボタージユしてたんだよー」

さくらは苦笑いを浮かべながら、嘘をつく。苦しい言い訳だ。屋上でサボタージユなんて、そんな事をするなんて、自分らしくもない。自分がやるわけがない。つらは嘘だと気付くだろう。しかし、そういう嘘をつくしかない。保健室にいたという嘘はつけない。食い違ってしまつから。そういう打ち合わせになっている。

「え？ずっと屋上にいたの？」

つらは驚いたようだ。当然だ。

「うん。ずっとだよー」

「一人で？」

「うん」

「どっし……………何でもない」

つらは何か言おうとした。が、言うのをやめ、顔を伏せてしまった。

「つらら……………」

落ち込んでしまったつららを見て、心が痛むさくら。つらはきつと、どうして自分誘ってくれなかったのか聞こうとしたのだろう。でも、一人になりたかったという事情を察してくれたに違いない。だから口には出さなかった。きつと私を困らせたくないから。と、さくらは思った。そしてさらに、親友に心配をかけてしまい、申し

訳ない。だけど、本当の事は言えない。と、さくらは強く思う。

親友に隠し事をするなんて、少し悪い気もするけど、これは私が解
決しないといけない事だから。

「つららさん。それとさくらさん？教室移動しなくてもいいの？次、
美術でしょ？」

と、吹雪がやってきて、つららの肩に手を置き、そう言った。

つららはビックリした様子だったが、さくらはそりゃあまあ、近づ
いてくるの見えてたからビックリはしない。

「あ、はい」

つららは慌てて、机に戻った。美術の準備をするためだろう。

「あー、ありがとございましたー」

さくらはつららの後を追う前に、小声で、吹雪に礼を言った。

「何の事？」

吹雪は笑顔でそう返した。

そして笑顔を引っ込め、やはり小声で言う。

「あなたも大変だろうけど、つららの事も気にかけてあげてね」

「はい、わかってますよー」

さくらは胸を叩いて、任せろー。だったが、吹雪は大丈夫かなあ。

と苦笑いだ。

「なに、話してたの……？」

美術セットを脇に抱え、戻ってきたつららが、不思議そうに聞いた。

「何でもないよー。あ、わたしの分も持ってきてくれたの？ありがとー」

「あ……うん。別にいいよこのくらい」

「でもありがとー！さあ、早く行くつよつらら！遅刻しちゃうー！」

「あ、うん」

さくらはつららから美術セットを受け取り、つららの手を引きながら、意気揚々と美術室へ向かい始めた。

「つららの手は温かいねー」

「そう？普通だと思っけど……」

「えー、温かいよー。うん、あったかい」

「……」

吹雪はそんな二人の後ろ姿をほほえましい物を見るように、微笑みながら後を追う。その表情は時折、困ったような悩んでいるような物に変わった。

「何でもないよ。とは、言って欲しくなかった……………」

さくらさんにそれを期待するのは、少々高望みしすぎかしら……………。

休み時間・エラー（後書き）

エラーしてるのは物語と私の頭。

吹雪さん、着物でミントンしたのかなあ。着物なんて着ないからわからないけど……無茶苦茶だね。スーツでミントンは許されるよね。

またね！。

7・1・六時間目〈約束何それ美味しいの

15時10分〈特別棟一階美術室〉

「で？」

「ん？」

「反省の言葉は？」

「ないよ」

「ああ、つまり後悔の言葉ならあると」

「いや、それもなし」

「歯を食いしばる時間はやる」

「その前に紅葉に説明する時間をあげる」

「説明する時間なんて不用だろうがー！！」

「つまり、バレーに負けた責任を紅葉が私に求めているという事を、紅葉は説明する気がないと。バレーに負けたというか時間切れで、最終的にジャンケンで勝敗を決した結果負けた責任を私に求めているという事を、紅葉は説明する気がないと。それは困ったわね」

「そうそう、そういう事をする時間もおしいって、お前が説明してたら同じだろうがー!!」

「待って紅葉」

「なによ」

「このノリはとある二人組を彷彿させるわ」

「はあ?とある二人って誰よ」

「も、もしかして紅葉、私に特別な感情を抱いているの?やだ、困っちゃう」

「キモい」

「ストレート過ぎるわ」

「気持ち悪い」

「本来そっちがストレート過ぎると思うんだけどね」

「いいからお前は私に謝罪しろー!」

「私が謝罪したところでどうにかなるものじゃないでしょうに」

「私の機嫌がどうにかなるっつーの。なぜなら、神裂が頭を下げるところを見ると、私は大変気持ちがいい」

「最低な事言ってる事、自覚してる?」

「いいから土下座しろよ！」

「あのー、紅葉さん紅葉さん？今は授業中だし、静かにしてください。って、先生思うんですけど……」

「失せるハイビスカス馬鹿」

「失せるって、私一応、教師なんですけど……。あつ、それと私はハイビスカス馬鹿じゃないわよ？馬鹿ハイビスカスなのよ」

「誇らしげに言う事じゃない！」

はい。

というわけで、美術室。現在みんな楽しく授業中。若葉紅葉はそんな状況気にせず、神社神裂に謝罪を要求していたら、頭にハイビスカスを挿した教師、花畑絵画に怒られましたとさ。
はい、続き。

「つーか、親の似顔絵を描きましょうって、小学生かよ！」

今日の美術は、親の似顔絵を描く内容である。現在、紅葉の前では、無心の境地に至ろうとしている若葉枯葉が、黙々と鉛筆を走らせていた。

その隣では神裂が、初対面の男子生徒に描かれている。何だか男子生徒は一心不乱に鉛筆を走らせている。今、この時を、このチャンスを逃すわけにはいかぬ！という鬼気迫る表情である。

「えー。だって、楽しいじゃない。そういうの。紅葉さんも、弟さんに描かれて、楽しいでしょ？」

「まあ、確かに」

と、紅葉は思っているようだが、紅葉同様に楽しんでいるのは少数のようだ。

多くの保護者は恥ずかしげであり、多くの生徒は何でこんな事をと思っているようだ。

さらに、保護者が来ていない生徒達は、生徒同士で描く羽目になり、さらにさらに、『適当に二人組を作って』という花畑の号令で適当な二人組を作れなかった二人組は、よく知らない者同士やら、男女のペアになつてたりなんかしたりして、初々しいね。

「じゃあ、万事おっけー。だから静かにして動かないであげてねー。弟さんが描き難いでしょ？」

紅葉さんがわかってくれてよかったー。という風に、どこか嬉しげにハイビスカスを揺らしながら花畑は離れていった。

「で？」

「ん？」

というわけで、再開。

「土下座は？」

「動けないから無理」

神裂は先ほどから、口以外一切動いていない。ピクリとも動かず、一点を見つめている。もちろん見つめているのは、神裂を描いてい

る名もなき男子生徒である。

「……神裂、やめてあげな。青少年が勘違いを起こしてる」

恋する乙女な眼差しになっっている名もなき男子生徒に対して、紅葉は呆れ顔である。どんだけだよ。

「勘違い？何が？」

「鈍感アピールご苦労様。まあ、どうでもいいか」

そう、名もなき男子生徒なんて、どうでもいいのである。

「恋は落ちるモノ。愛は育むモノよ」

神裂は意味深な発言をして、ニッコリ笑った。名もなき男子生徒は、名前が明かされる前に、死んだ。

「何よ意味深な」

「つまり、恋に間違いはないわ。落ちるんだもの。愛にはあるけどね。育てるんだもの。って、話しよ」

神裂は意味深な笑みを、今度は枯葉に向けた。枯葉は「はあ……？」何言ってるんだこの人と思った。

「何言ってるんの神裂。キモさが爆発してる」

紅葉も同様の事を思ったので、口で伝えてあげた。自分がどれだけ変な事を言っているか、教えてあげるのも友達を務めなのです。

「それで、放課後どうするの？」

友達の心ない言葉を、肩を竦めて受け流すのも、友達の務めなので
す。

「どうするって？」

「だから、枯葉君を譲るの？」

「まさか。枯葉を連れて早々に帰る。約束は、破るためにあるのよ
！あははははー！」

なぜか勝ち誇る紅葉。

「あなたの姉はこんな事言ってるけど、枯葉君的にはどうなの？」

枯葉は、うんざり顔で紅葉を見た。

「俺、すぐには帰れねえけど」

「どついう事よ！！あんたまさかあの女狐との約束を律儀に守ろう
という気か！あんたをそんないい子に育てた覚え、お姉ちゃんには
ありませんよ！」

紅葉、激怒。

「姉ちゃんのせいで俺は理不尽な宿題を受け取りにいかなきゃいけ
ねえんだよー！！」

枯葉、激怒。

「あのね。喋るなどは言わないのよ？うん。先生そんな事が出来るとは思ってない。でもどうだろうね。大声を出さないのは出来るんじゃないかなー!?」

花畑、涙目。

「私はどつちに味方するべきかしらーっ」と

そして神裂は、隣の姉弟喧嘩（プラス花畑）を尻目に、自分はこれからどうするか、テキストに考えるのだった。

そしてそして、鈴乃音鈴音は三途舞歌が鈴しか描いてくれなかった事にご立腹で、桜木押花はしつこいくらい、本当にあれとは話してないのね。何もされてないのね。と、桜木さくらに尋ね、それに対してさくらは平然と嘘を返し、冰山つららと冰山吹雪は互いに緊張しながら互いを描き、冬季冬美が夏季夏美の相変わらずの絵心のなさに微笑んだりしたんだけど、それはまた別のお話・・・

7・1・六時間目<約束何それ美味しいの(後書き)

とりあえず書きました。

とりあえず投稿しました。

続きの内容が全く思いつきません。

どうしよう。

7-2・放課後 流れを知る者作者

16時15分〜特別棟三階文芸部部室

文芸部部室は、ご存知かどうかは知りませんが、せいぜい十二人程度しか入れないくらいな気分の広さしかない。べたべたくつつけばもう一人二人、さらに中央に安置されている円卓や壁際に配置されている本棚やら棚やらを外に放り出せば、もう一人二人三人四人くらいは入れるだろうが、前者はともかく後者は面倒な事このうえないのと言つまでもない。

さてさてでは今現在この部室に何人いるか数えてみると。

「あーるー晴れたー、ふーふーふふふーん」

一人目。陽気に歌う十二時の女、南穂波。

「あーるー日ーもーりーのーなーかー？」

二人目。テキトーに歌う一時の女、神社神裂。

「丑三つ時に藁人形に五寸釘で神も殺せるのか試してみようかどうかどうしようかそうしようそうしようやってみないとわからないやらずに後悔するよりやって歓喜しよう……」

三人目。神裂にガツシリ腕をホールドされている二時の女、若葉紅葉。

「も、紅葉さん？」

四人目。紅葉の呪詛に怯え戦く三時の女、桜木さくら。

「……」

五人目。『人多くない？なんか多くない？みんな見てない？こつち見てない？さくらちゃんとあなたの仲裂こうとしてない？たぶらかそうとしてない？』な四時の女、冰山つらら。

「そうなんですか。さくらさんに料理を。それは楽しそうですね」

六人目。ニコニコと世間話に興じる五時の女、冰山吹雪。

「え、ええ、まあ、楽しくないわけがないです……」

七人目。吹雪よりも別の人が気になる六時の女、桜木押花。

「……………帰りたいたい」

八人目。テーブルを精気がない瞳で見つめてる七時の女、虹野望。

「……………」

九人目。母親と姉を交互におどおど見る八時の女、虹野光。

「姉さん……………さすがにそれはどうかと思うよ」

十人目。呆れ顔で姉を見る九時の女、鈴乃音真音。

「ふふふ、よかったわね鈴音」

十一人目。微笑みながら娘を見る十時の女、鈴乃音絢音。

「鈴音はよかったの」

「……重い」

十二人目。無表情ながらもどこか満足気な十一時の女、鈴乃音鈴音。
十三人目。歯ぎしりを始めそうな顔をしながらも膝の上を貸している十一時の女、三途舞歌。

「さあ、最後の懇談会を始めましょうか」

そして十四人目。ここに人を集めた黒幕の一人である猫猫子猫は、座るところがないのでドア付近で待機。

というわけで合計十四人。

人数制限をオーバーしている部室にいるのは、全員女性。

三人いれば姦しいというけれど、十四人いれば果たして果たしてどうなるか。

「さてさて皆様方。よく集まっていたいただきました。私は保健医猫猫子猫です。初めましての方は初めまして」

猫猫がなんか仕切り始めた。

「桜木さんと冰山さんと、一応南さんは、文芸部だから集まってくれてわけですけど、他の皆様は私と、南さんがお呼びしました」

「私は無理矢理連れて来られたんですけど」

紅葉は親の敵を見るような目で、神裂を見た。神裂は慈愛に満ちた笑みを返した。

舞歌も紅葉同様無理矢理だったが、抗議するのも面倒のようだ。

「なぜお呼びしたかということ、文芸部の活動をするためではございません。今日の締めを行おうと思ったわけです。今日を逃したら、なかなか会えない人もいるでしょうしね。皆様も、今日は色々あって、最後のまとめを行いたいと思ってませんか？」

「あー、確かに今日は色々ありましたねー」

どちらかという色々を起こした方の穂波は、人事の如く。

「ありましたありました」

神裂はとりあえず同調して。

「神裂さん神裂さん、もう手を離してくれませんか。逃げないから」

紅葉は嘘をついて脱出を試みて。

「色々あつたかなー？」

さくらはのほほんとしてつららに尋ね。

「え？あー、あつたかな？」

つららは、話しをあまり聞いておらず。

「確かに色々ありました」

吹雪はうんうんと頷き。

「……」

押花は隣の元凶を睨み。

「……」

望はぼんやり天井を眺め。

「……」

光はおどおどしっぱなしで。

「光、大丈夫？」

真音は光に声をかけ。

「今日は色々あったの？」

絢音は鈴音に尋ね。

「今日は色々あったの？」

鈴音は舞歌に尋ね。

「知りませんよ……」

舞歌はため息混じりにそう答えた。

「というわけで第一回カップリング大会を始めたいと思います!!」

猫猫は高らかにそう宣言した。

穂波は「イエーイ!」と場を盛り上げ、神裂と吹雪は拍手で場を盛り上げたが、他の方々は、何言ってるのこいつみたいない気分だった。

「ルールは超簡単! ようは、話しをしておきたい人を指名すると、なんと驚き! 対一で話す場を提供させていただきます! きゃ、太っ腹 色んな思惑色んな人が混ざって今日の目的を達成出来なかったあなたや、いい機会だから話しをしておきたいと思っているあなたには、絶好のチャンス!! 選び方は早い物勝ちの指名制! 質問は一切受け付けませんよ準備はおっけー? はい、じゃあ、お手上げー、ピッ!」

猫猫の号令でまず手を上げたのは、穂波。ついで、吹雪。そして釣られて手を上げた光の三人。他の方々は、状況についていけないか、そもそも興味がないようだ。

「はい、南さん早かったですね。じゃ、指名をどうぞ」

「もちろん未来の娘もとい、紅葉ちゃんです。きゃ、恥ずかしっ」

「断る!」

「はい、紅葉ちゃんに拒否権はございません。じゃ、南さん、例のとおくをお使い下さいね。えっと、神社さんでしたっけ? 協力してくれます?」

「はいはい構いませんよ。紅葉さん行きますよー。大丈夫ですよー。怖くありませんからねー」

「何キャラだよ！行かねえよ！やめろ！離せ！やらせだ！これは間違いないやらせだー！！」

紅葉は抵抗も虚しく神裂に連行されてしまった。こうして、穂波と紅葉と神裂が退室した。

残り十一人。

「はい、じゃあ次は、冰山さんですね。冰山さんはどなたを指名しますか？」

「つららさんでお願いします」

「え？」

私？押花さんじゃないの？みたいなつらら。

「はいはい了解しました。左隣の空き部屋を使って下さいねー」

「わかりました。じゃ、行きましようかつららさん」

「え？あ、はい」

つららは戸惑いながらも吹雪の後ろをついていく。

「いつてらっしやーい」

さくらはニコニコと手を振って、二人を送り出した。

残り九人。

「はい、じゃあ、光ちゃんは？」

「えっと、あの、じゃあ、あの……………お姉ちゃんがいいですの……………」

「！」

「わたしー？」

驚いたのは押花で、間延びした返事をしたのはもちろんさくら。

「はいはい了解了解。それじゃあ、二人は上の階の、将棋部の横の部屋を使ってね」

「わかりましたー」

「あ、待って下さいですの……………」

「さくらー！」

「わたしは大丈夫だよ、お母さん」

自分呼んだ押花にニコニコ微笑みさくらは退室。後を追うように光も退室。

残り七人。

「まあ、ここまでではほぼ計画通り」

猫猫は穂波が座っていた位置に座る。

「はい、他に誰かと話したい人いますかー。せっかくの機会ですよ」

「そうねえ……よくわからないけど、私もこの機会を使わせてもらおうかしら」

絢音は手を上げた。

「はい、じゃあ、絢音さん」

「三途さんでお願いします」

「はあ？」

何でだよ。という感じの舞歌。

「はいはいらじやりました。この部屋の真下の部屋をお使い下さい。じゃ、鈴音ちゃんどいてあげて」

「舞歌は何をお願いされたの？」

猫猫を無視な鈴音。猫猫涙目。

「私が聞きたいですよ……何この流れ。ありえない」

「鈴音、お母さんにちょっと三途さん貸してくれない？」

「鈴音はちよつと舞歌を貸したくないの」

「そんな事言わずにお願い。欲しかった鈴買ってあげるから。ほら、あの鈴枕」

「鈴音はちよつと舞歌を貸してあげるの！」

「……」

友情が物欲に負けた瞬間である。

「じゃ、行きましようか」

「……はあ」

膝の上から鈴音がどいた舞歌は、何で私は流されてるんだろうと思いつつ、絢音の後に続いて退室した。

残り五人。

「私は……その、ちっちゃい子で、いいわ」

舞歌と絢音が退室してすぐに、望がやる気なさげに鈴音を指名した。これには鈴音以外の全員が驚いた。鈴音は、首を傾げた。

「えつと……理由聞いていいですか？」

「別に……今日は、もう疲れてるのに……あなたに、無理矢理連れてこられて……このままだと、押花さんと話す事に……なり

そつだから………先手を打つ、事にしたわ」

確かに猫猫の予定では、望と押花を組ませる予定だった。

「それなら僕でも………」

真音は鈴音の代わりに名乗り出た。

「あなたより………そつちの子の方が、おもしろそう………どうせ光が終わるまで………私も帰れないんだから………空き時間は、楽しくないと、ね………」

望はニヤリと笑った。そして席を立つ。

「ほら、行くわよ………」

望はふらふらと幽霊のような足取りで鈴音の席に近づき、枯木のような腕を伸ばし、鈴音の腕を掴んで、引っ張った。

「あ、ちよっ」「拒否権は、なしよ………そついう事、でしょ?」

真音の抗議めいた声に対して、望はそつ先手を打つ。

「それは紅葉ちゃんだけなんですけど………」

猫猫は口の中だけで、そう言ったが、当の本人、鈴音が黙って望について行くので、強く抗議を出来ない。さつき校長に怒られたばかりだしー。

「あなたはどこに行くんですか?」

「右隣の……部屋……」

保健室での作戦会議を聞いていた望は、使っている教室を知っていた。

「鈴音はどこに行くんですか？」

「私と……同じ場所よ……」

「姉さん……」

真音は不安げだが、そんなの気にしない二人は部屋から退室した。

残り三人。

「やっぱりこうなりましたか」

これからどうしよう。という空気が流れ始めた部屋に、神裂が戻ってきた。

「はい、先生。鍵です」

「あ、ありがとう」

神裂は猫猫に部屋の鍵を渡した。

「じゃ、行きましようか」

「……は？」

そのまま神裂は猫猫の手をとった。

「私はあなたを指名します」

「……………え！？いや、私にはまだやる事がー！？」

猫猫は抵抗するが無駄な抵抗。紅葉同様、神裂に連行されるように部屋から退室した。

「……………」

こうして、お互いに全く面識がない二人、真音と押花が、部屋に残ったのだった。

気まずい事、この上ない状況である。

7・2・放課後 流れを知る者作る者（後書き）

どんどん書けばいいじゃない。

好きにテキストに書けばいいじゃない。

人間だもの！。

7-3・放課後 密室の鬼ごっこ

16時20分〜特別棟四階異室

「だーっ！どうしてっ！私がつ！こんな目にーっ！」

若葉紅葉は憤りを言葉にしつつ、扉を開けようと躍りになっていた。

「諦めなさい娘。その扉、内側からは開かないわ」

無駄なあがきをしている紅葉を、南穂波はソファーに座りながらニヤニヤと眺めている。

「内側から鍵が開かないって、学校にあるまじき教室でしょうが！何だこの部屋！私の在学中にはなかった気がしますけど!？」

紅葉は扉に蹴りを与えた後、穂波の向かい側のソファーに座った。

「まあ確かに。私もどうしてこんな部屋があるかはわからないわ。まあ、いいじゃない娘。ゆっくりしましょう。一時間後に開けに来てくれる手筈よ」

「クソ。神裂の野郎裏切りやがって。これだから天才とか完璧とかは嫌だ。どこにいても役に立つから、いつでも裏切り放題だ。っーか、ナチュラルに娘呼ばわりすんな!」

穂波と紅葉が言うように、この教室、というより部屋の用途は全くわからない。

部屋の大きさは一般的な教室と同じなのだが、部屋に置かれている備品は、二人がけのソファアが部屋の中央に二脚だけ設置されており、壁際には鞆などをしまうであろうロッカーが並んでいる。ロッカーの上には金魚バチが置かれており、二匹の朱い金魚が狭いながらも世界を悠々と泳いでいる。その近くには金魚の餌が置かれていて、金魚の世界が綺麗なところを見ると、定期的に世話はされているようだ。

窓もなぜか一つしかなく、中庭側の壁中央に出窓が設置されている。そこには花瓶が置かれており、彼岸花が一輪飾られていた。

壁には黒板はなく、片方の壁には画鋏で『ようこそ』という文字が作られており、もう片方の壁には『今は秋です』と、どうでもいい情報が同様に画鋏でアートされていた。

つまりよくわからない、異室である。

「猫猫先生に、あなたを監禁出来る部屋があったらいいんだけどって聞いたたら、ここを紹介されたわ」

なかなかいい部屋である。ソファアもふかふかだし。

「この高校はおかしいとは知ってたけど、さすがにこんな部屋があるとは予想外だ。クソ。とりあえず、猫死ね。私は犬派だ」

「にははは、気が合うわね。私も犬派よ。猫は、嫌い」

「その笑い方で信じれるか」

紅葉は目をつむり、腕を組み足を組み、嘆息。全くしてやられた。出られない部屋があるとは。

「今頃枯葉はどうなってるのかしら」

「そりゃあ今頃、うちの奈美ちゃんよろしくやってるんじゃない？」

「神裂この野郎ー！！」

紅葉は壁に蹴りをくれた。鬱憤は全く晴れなかった。

「クソクソクソ！神裂さえいなかったらこんな状況にはならなかったのに！」

紅葉は壁に頭を打ちつけた。頭、超痛い。

「確かにねー。私だけじゃ、あなたを部屋まで連れてくる事さえ無理だったでしょうね。ところで娘、女性があまりクソとか言わない方がいいわよ」

「娘言つな。一頭身下げるぞ」

冗談とは思えない目つきで穂波を紅葉は睨んで、ため息。またソファーに戻る。

「なに？あの神裂って子はあなたの友達なのかしら？」

クスクスと笑いながら、穂波は神裂について聞く。まずは、という感じだ。

腕を組み、貧乏揺すり、苛立ちながらも、紅葉は穂波と会話を
する。

「友達じゃねえしあんな奴。赤の他人だし」

「にやははは、そう。赤の他人にそこまで憤れるのねあなたは。気に入ったわ。娘として認めてあげましよう」

「願い下げだ馬鹿野郎。あんたに認められるくらいなら、あいつを友達と認めてやるし」

「友達に裏切られるとは。あなたもしかして、人望ないの？」

「あいつが例外なんだよ。あいつは巷じゃ、天才やら完璧やら言われててね。さっきのバレーだって、あいつが最初から最後まで本気だしてたら、こっちのパーフェクトゲームだった」

「ふむ。まあ確かに、そんなありえない事が、ありえたかもしれないと思ってしまう何かが、彼女にはあるわね」

「そうそう。別にカリスマ溢れてるわけでもないし？実際に何か凄い事を目の前でやったわけでもないし？外見も綺麗だけど平伏したくなる程でもない。なのに何だか、こいつは何でも出来て凄いなさるうなあって思ってしまう。しかもちゃんと何でも出来るから始末におえない。そういうアホみたいな存在何だよあいつは。全くもって腹立たしい事に。生まれる時代が間違ったとかじゃなくて、生まれる次元を間違えてやがる。チートだチート。あいつは望めば何でも出来る。私だって、あいつが本気でしたらこの有様だし。さつさと二次元に帰りやがれバカ。二度と私の前に現れるな」

「にやははは。そんな人と一緒にいられてバカ呼ばわり出来るとは、あなたは器が大きわね。義理の母親として、鼻が高いわ」

「お前もさつさと二次元に帰れ！！ずっと思ってたが何だその笑い方は腹立つなあ！バカにしてんのか！喧嘩売ってんのか！買うぞ！いくらだ！」

「ごめんなさいねー。私、この笑い方しか出来ないのよねー」

今にも襲いかかってきそうな紅葉に対して、全く動揺していない穂波は、エコバツクをガサガサと漁り始めた。

「どら焼き好き？」

「好きだけどお前の施しは受けん！」

「まあまあそう言わず、はいどうぞって、あーこれ婚姻届だったわ間違えちゃった。てへ。こっちがどら焼きだったわー」

穂波はエコバツクから間違えて間違えてまーちーがーえーて、婚姻届を取り出してしまったが、すぐに（しかしさりげなくちゃんと『南奈美』と『若葉枯葉』と書かれている事を紅葉に見せて）エコバツクにしまい、どら焼きを取り出し紅葉に放り投げた。

「だからいらナイって、ちょっと待て今の紙をもう一度見せる！？」

紅葉は驚きのあまり、どら焼きを握り潰してしまった！

「紙って、これ？」

穂波はエコバツクから一枚の紙を取り出した。そこには長々となんか書かれていた。

「違うこれじゃないって……なんじゃこりゃー!!」

受け取り破り捨てようと思ったが、内容を流し読んだところ、私、つまり若葉紅葉は若葉枯葉と南奈美の結婚を許しちゃう。と書かれている紙だったので、紅葉はたいそう驚いたのじゃ。

「さあそこにサインなさい!そうすれば全てが丸く収まるわ!」

穂波はボールペンを紅葉の眼前に差し出して、契約を迫った。

「意味わからんわー!!」

紅葉はボールペンを弾き、紙をビリビリに破いた。

「わからなくてもいいのよ書いた後にわからせるから!さあお書きなさい!」

しかし穂波は、エコバックからまた同じ紙を取り出し、どこからともなくボールペンも出現させた。

「何なんだお前は急にはっちゃけやがって!頭おかしいんじゃないの!!」

「おかしくないわ!私からして見れば口約束だけで安心する人間の方がおかしいのよ!」

「理由もなしにサインしろと言ってくる方がおかしいだろー!!」

そんな感じで数分後。

「はあ、はあ……ごめんなさい。神の意思に操られたわ」

「電波系は苦手だから、勘弁……」

ソファで互いに天井を見ながら、息を整える二人の姿があった。部屋には紙の残骸とボールペンが散乱しており、戦いの激しさを物語っているような気がした。

「ごめんなさいね。私、契約とかに固執するタイプなの。いわば、契約至上主義者なの」

「さつさと二次元に帰れにやは電波」

「にはは、にはははは、言わせてもらっけど、あなたのブラコンも十分二次元レベルよ」

「家族を愛して何が悪い」

「家族を縛って何がいいの？」

「お前にだけは言われたくない気がした……」

「私は縛ってないわ。遊んでるのよ」

「余計わりい……」

そして、沈黙。

部屋には二人が息を整える音だけがする。

「……には野郎」

「何かしら娘」

「ふと思ったんだけど……ここから私達、後一時間出れないわけじゃない?」

「そうね。四階から飛び降りる以外じゃ、出れないわ」

「例えばの話……花をさ」

「ん?」

「花とか摘みにいきたくなかったりしたら……どうすんの?」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……花瓶が、あるわね」

16時30分〜特別棟四階異室

7・3・放課後 密室の鬼ごっこ(後書き)

どんどん行くよどんどん行くよ。

どこに行くかは知らないけれどー

7-4・放課後 あなたはまだ、そこから

16時25分〜特別棟三階取調室

「その、校長先生が、入学してくる生徒が、どんな教室を望むかわからないから、色んな、その、大きさとか内装とか？の教室を作っておく事にしたから、この特別棟には、空き教室が多くて、変な教室も多いらしい、です」

「そうだったの」

「はい。それで、えーっと、備品とかも、校長先生が認めれば、置いてもいいらしくて、生徒よりも先生が多く利用してるらしいんですけど、だから、ソファーとか、クーラーとか、テレビとかがある教室があったり、教室には不釣り合いな机や椅子がある、教室がある、らしいです」

「なるほどね」

氷山吹雪は氷山つららの、たどたどしい説明にうんうんと頷く。吹雪とつららが使いなさいなと言われた教室、というより部屋は、四畳半程度の小さな部屋だった。デスクが一つに、クルクル椅子が二つ、なぜか窓には縦に格子が入っており、壁には鏡。デスクの上にスタンドも置かれている。取調室を彷彿とさせる部屋だった。どうしてこんな部屋があるのかしら。という吹雪の疑問に、つららが桜木さくらから聞いた事を説明して、今に至る。

「それが、八尾比丘尼高校七不思議の一つなの？」と、吹雪が聞いた。

「あー、はい。その、そういうわけで？変な教室が多いからかはわからないですけど、その……気付いたら教室が増えるとか？その教室を作った、あー、つまり備品を申請した人が？誰かわからないとか？誰も知らない人がいるとか？です、はい……」

つららはうる覚えの八尾比丘尼高校七不思議の一つ『不思議な教室』を説明した。なぜうる覚えかというと、つららはあまり怖い話が得意ではなかったので、あるうことが、さくらの話を聞き流していたのだ。その事で、『あたし』にグチグチ虐められて眠れられない夜もありました。

「なるほど。つまり、八尾比丘尼と秘密の部屋なのね」

ハリーなんとかではなく、ね。

「え？あ、はい。そうですね……」

「……うう」

吹雪はつららの愛想笑いを見て、言わなきゃよかったと、内心後悔した。と自分的には思っているが、顔に出ています。

「……あー、その、お、お養母さん？」

落ち込んでる養母に申し訳ないけど話しかけるつらら。

「その……」

何の用ですか？と、言っていないものか。なんかそれって、用がなきゃ話しかけるなという感じではないだろうか。母親に対してそれはいかな物か。しかしこの狭い部屋に長時間二人きりというのも少々遠慮したい。すでにちよつと息苦しい。

『ズバツと言っちゃえばいいのよ。何。遠慮してんのよ。あなたはホントダメダメなグズね。何の用なんですかー。こんな狭くて近いところに連れ込んで何の用なんですかー。真面目な話ですかー。どうでもいい話ならさくらちゃんに会いに行きたいんですけどー。あんなんでどうでもいいんですけどー。ってはつきり言えばいいのよ。クスクス笑ってケタケタ笑う』

「特に話があるわけじゃないの」

「え？」「はあ？』

つららが『あたし』に応援されてるのかけなされてるのか判断に困る事を言われていたら、吹雪がまるでつららが何を考えているかわかっているかのように、ニッコリと笑い声をかけた。

「ただ、私もそろそろ帰らないといけませんから、その前につららさんとお喋りしたくて。迷惑でしたか？」

「いえそんな事は全然全く……！」

「いやいやそんな事全然ありませんし思った事もございません！と、首と手を使いアピールアピール。」

「そう。よかつたわ。学校は楽しい？」

「あ、はい」

「さくらさんとは、喧嘩とかしてない？」

「はい」

「さくらさん以外には、お友達とか、出来た？」

「え？あー、いえ………すみません？」

『いらぬいし。そんなのいらぬいし。あなたにはさくらちゃんとおたしがいれば十分だもんねー。クスクス。あたし的にはあなただけで十分なんだけどね。実はあなたもあたしだけで十分だったりして』

「謝らなくてもいいのよ。別に、友達なんてそんなにいらぬいと思うし。零だったら困るけど、一人いれば十分よ。零という事は、社会に生きていないという事なんだから」

「はあ………？」

『つまりあたしだけいれればいって事じゃね。ねえねえそういう事でしょこれ。遠回しにさくらちゃんと縁を切れって言ってるんじゃないかしらこれ』

「あなたの母親がそうだった」

「え？」

「さくらさんの、妹さんとはどう？仲良く出来そう？」

「はあ？あ、じゃなくて、あー………はい」

『出来るわけねえだろ！ふざけやがってあの小娘好き勝手いいやつて！次会った時はボコボコのケチヨンケチヨンにして虹の毒で殺してやる！ああホントむかつく！さくらちゃんがいなかったらあの場で殺してたのに！というか母親ってなに？』

「あまり思いつめないようにね、つららさん」

「え？」

「もっと自分の気持ちを言っているのよ？嫌いなら嫌い。好きなら好き。嫌なら嫌。やりたいならやりたい。あなたはまず、そこからね」

「はあ………？」

『そこから？なに言ってんだこいつ意味わかんないんですけど。あたしにわかるように言えってんだ！。クスクス。あ。あんたにもわかるようにだっけ』

「そうすれば、それは消えるわ」

「え？」

『え？』

「神社さんとはいつ出会ったの？」

「え？あ、それはその、というか、え？それって………それって？」

『あたしじゃないわよ？それじゃなくてあたしはあたしだもの。消えるとか。消えるとか。ありえない』

「私、ビックリしちゃったわ。いきなりあの人から、つららさんの

友人ですけどって、電話がきて。帰って来てた時、つららさん全く神社さんの事、言ってなかったじゃない？だから、これが噂のオレオレ詐欺かって思いました」

「あ、すいません？」

こんな感じで。つららは終始、吹雪のペースにのまれ、頭にハテナマークを浮かべつつ、自分の近況を、夏休みに実家に帰った時より、話す羽目になったのだった。

だってここ、そういう部屋だし。

16時35分〜特別棟三階取調室

7-5・放課後 姉妹の楽しい喧嘩

16時35分〜特別棟四階仮眠室

「ごめんなさいですのごめんなさいですの許して欲しいですのー！
！」

「だ、だからもうわたしにはいいってばー！」

「怒鳴られたですのまだ怒ってるですのごめんなさいですわー！！」

「怒鳴ってないよ大声出してただけだよー！！」

桜木さくらは自分に縋り付いて泣き喚く虹野光に、さすがにそろそろうんざりしてきていた。

さくらと光が使いなさいと言われて使っている部屋は八畳程の部屋。ふかふかのベットにメトロノームと目覚まし時計。メトロノームの規則正しいリズムと、ふかふかベットの前では誰もが眠くなり眠りたくなり眠りにつく。何を隠そうこの部屋の名は仮眠室。備品申請者の名前もわかっている。小梅杏である。

小梅が何人足りとも起こす事叶わぬ安らかな睡眠を目指したのがこの部屋である。そして完成したのがこの部屋であり、防音バツチリ防犯バツチリな小梅の夢の部屋であったのだが、二、三回使ったところで猫猫子猫に発見、捕獲、叱責、没収されてしまった部屋である。簡単に言くと、猫猫に力ギを奪われ、小梅本人は使えなくなっ

てしまい、今は猫猫の管理にある部屋であるという事である。さらにどうでもいい余談だが、週に一度の頻度で、体育教師更科蕎麦が猫猫に、『部屋の力ギ貸してえ。使いたいからあ。眠るわけじ

やないけどお』と言ってくるが、一度も貸した事はない。眠る以外で更料がこの部屋をどう使う気なのかは、謎です。

部屋にきてさくらが、おー。ふかふかじゃー。と、スプリングの質と枕の低反発具合と太陽の匂いがする布団を堪能していると、光が泣きながら抱き着いてきて、そのままベットに押し倒された。ベットに押し倒された。あなた、疲れてるのよ。そしてなんか謝られた。どうやら昼休みの事を謝っているようだったのだが。すでにさくらの的にはそれはどうでもいい話。というわけで、さくらとしては自分よりもつららに謝って欲しい。のに、光はただただ泣き謝罪。困ったものである。十分程度ずつと、さくらはぐてーつで、光はごめんなさいごめんなさいというのは本当に、困ったものである。

「ひ、光ちゃんとりあえず落ち着いてよ苦しいからー!!」

十回目の落ち着き要請。

「ごめんなさいですのー!!」

口だけで行動がない謝罪は数えきれませぬ。

「だからわたしじゃなくてつららに謝ってよー!!」

お母さんわたし大丈夫って言ったけどダメかもー!と、ベットを転がり光から逃れようとするが、縋り付いてる光も一緒に転がるので結果として遊んでるようにしか見えない行動を取りつつさくらは思う。

「…………ごめんなさいですのー!!」

「……光ちゃん今、躊躇しなかったー？」

転がるのをやめてマウントポジションを取る光と目を合わせる。

「そ、そんな事ないですよ？」

「……」

露骨に目をそらす光。

光がすでに泣いていない事に気付くさくら。こいつ、遊んでやがったな。

「光ちゃんもしかしてー……つららに謝りたくないのー？」

まさかー。

「の、ノーコメントですわ」

肯定と同義である。

「何でー？」

「の、ノーコメントですの」

「もしかして光ちゃん……つららの事嫌い？」

核心の質問。

「ごめんなさいですのー！ー！ー！」

その答え。

「みにゃー！」

光が謝罪という名の肯定と共に、さくらの胸に拳を叩きこんできた。そして胸に顔を埋めて、自分の匂いをつけるように首を横に振る。コロコロ転がり、光にポカポカ叩かれ、ニヤアニヤア縋られたさくらの衣服は乱れまくりである。乱れまくりである。みだれまくりである。本当に、疲れてるのよ。

「だってあの人怖いんですもの！それにお姉ちゃんをわたくしから盗ろうとするんですもの！」

「と、盗ろうとって……」

わたし、別に光ちゃんのものじゃないんだけど……。という言葉は飲み込んで。

「こ、怖くないよー？つらは優しいよー？」

そっちの誤解を解こう。

「それはお姉ちゃんが騙されてるからですますのー！」

「みぎゃー！」

また、さくらに拳を叩きこんだ。光は興奮しているようだ。性的な意味ではない。

「あの人は怖い人ですの鬼ですの悪魔ですのわたくしをお姉ちゃんから引き離そうとするですのお姉ちゃん独占禁止法ですのー!!」

「ぐみゃー!ぐにゃー!みにゃー!」

さくらの上で跳ねて弾む光。潰されるさくら。死ぬかもしれない。

「ひ、光ちゃん落ち着いてよ何を言ってるかわからないよー!!」

「どうしてですの!あの人の目を見ればわかる事ですのにー!お姉ちゃんのバカ!」

「つららの目はウサギみたいでカワイイよー!バカなのは光ちゃんの方だよ!もー、怒るよ!」

「ごめんなさいですの許して欲しいですの!お姉ちゃんはバカじゃないですの優しくて柔らかくて温かくて大好きですの!」

「あ、ありがとー。じゃなくてだからー、わたしじゃなくてつららに」「ごめんなさいですのー!」「にぎゃー!」

以下、ループ。

16時45分〜特別棟四階仮眠室

7・5・放課後 姉妹の楽しい喧嘩（後書き）

イエーイ。

これからは今まで以上に先を考えず自由に書いていくぜー。

7-6・放課後 聞きたい事・教えたい事

16時45分〜特別棟二階一般教室

「それでね。もう鈴音ったら、家じゃ、あなたの話しかしないくらいだったのよ?」

「はあ、そうなんですか……?」

「そうなの。最近はそうでもないんだけどね、最初はお父さんったら最初、あなたの事、男だと思っててね。うちの鈴音をたぶらかしやがってーって、怒ってたわ」

「はあ、そうなんですか……?」

「だって鈴音ったら、あなたの事カッコイイって言うのよ。まるでヒーローみたいな表現を使うんだもの。お父さんじゃなくても、勘違いしちゃっわ」

「はあ、そうなんですか……?」

ヒーロー?

と、三途舞歌が思ったところで、情況説明。

一般教室の窓際の席で、舞歌と鈴乃音絢音は喋っていた。

上記のように、絢音が話し、それに舞歌がテキストに相槌を打つという形で終始会話が進んでいる。

会話内容はほとんど、鈴乃音鈴音の事である。それもある種、当然の事。舞歌と絢音の共通の話題などその程度しかない。だって舞歌

は、絢音がいつ来ていたかさえ知らないのだ。その程度の関心度なのだ。誰が好き好んでこんな目にか思ってるのだ。ああ、早く帰りたいとか思ってた窓の外を眺めようとするのは我慢している舞歌は、中途半端に他人想いである。

「退屈？」

演じるからにはちゃんとしないとダメである。同じ返しばかりでは、ダメでございます。

「はあ、まあ……」

ぶつちやけ、この状況意味不明。何で私この人と話してんの。

「何でこんな状況に……って思ってる？正直帰りたい？」

「ええ、まあ……」

「ふふふ、正直者なのね」

クスクスと笑う絢音は、大人の余裕である。

「鈴音の話、つまらなかつた？」

「いえ、まあ……」

楽しいやおもしろいよりは、恥ずかしいとか興味深いというベクトルの話だった。

家でそんなに私の話をしているのか、恥ずかしい。

家でもあいつはそんな感じなのか、興味深い。

そういう類のお話。

「あらそうなの。じゃあ、困ったわねー」

そうとなると、どうしましょう。絢音は腕を組んで話題を考え中。そんな絢音を舞歌は訝しげに見る。この人は、何か用があったわけじゃないのか。先程から鈴音の話ばかりしているが、それは前置きみたいな物ではなかったのか、と。

「ん、私の顔に何かついてる？」

「……いえ」

舞歌は、絢音の首を傾げるその姿を見て、考え過ぎだったかと思う。

「ふふふ、何か私が、あなたに話したい事があると思った？」

絢音が浮かべる微笑みは、母の笑み。

「でも、それは私の立場だったりして」

「はあ？」

おちゃらけた態度で何言ってるんだこいつ。

「あら、そんなにビックリする事ないでしょ？あなたが私に何か聞きたい事あるかなあって思うのって、そんなに突飛なこと？あなたと私の間にあるのは、あの子なのよ？」

「……」

なんか、雰囲気違うな。と、舞歌は思う。誕生日会の時とは、なんか雰囲気違うな、この人。

「あなたは気付いていなかったかもしれないけど、私は四時間目、教室にいたのよ？ふふふ、あなた、ほとんど外見てたわね。ちゃんと授業受けないとダメよ？」

「……余計なお世話ですけど」

母親みたいな事、言わないで下さい。母親にそんな事、言われた事ありませんけど。

「ちなみに、鈴音は授業時間の約半分あなたを見て、約半分黒板を見て、ちよつとだけあの騒ぎを見てました」

「はあ………？」

だから、なに？

「五時間目は真音の方に行ってたからわからないけど、体育。鈴音の面倒見ててくれたでしょ？」

「………だったら、何ですか？」

何を言いたいのかこの人。

「もちろん、ありがとございます。って言いたいの」

「別に、感謝されるような事じゃ………」

舞歌は窓の外に目を向ける。

絢音の笑みから、逃げた形になる。絢音の笑みは、母の笑み。全てを包む、母の笑み。それは舞歌にとって、見慣れぬ笑み。

「あら、じゃあ、好きでやってくれた事なの？」

「……」

この場合のノーコメントは、答えるのが恥ずかしいという肯定でもなく、言うまでもないだろうという否定でもなく、自分にもよくわからないから答ええないという色が強かった。

それを汲み取ったからか定かではないが、絢音は力を抜くようにため息をついた。

「ねえ、三途さん。本当に聞きたい事とか、話したい事ない？」

「……ありませんよ」

「本気？」

「本気って……」

そこは本当と尋ねるところじゃないのか。と、呆れ混じりの目を舞歌は絢音に向ける。

絢音はやはり微笑んでいた。絢音の笑みは、母の笑み。全てを見通す、母の笑み。それは舞歌を揺さぶる、愛の笑み。

「聞きたい事や話したい事があるのは、あなたじゃないんですか？」

だから舞歌はすぐに目を逸らす。

「んー、そうっ?」

「はい」

「んー、そうねー……おかしいわね。この前は初対面だったから聞き難いのかなと思ったけど……こんな事聞くと怒るかもしれないけど、三途さんって、鈴音とお友達なのよね?」

「……みたいですね」

「よね。なら、聞きたい事とかない?」

「ありません」

「ないの?」

「はい」

「本当に?」

「…はい」

「本気で?」

「……はい」

「本当に本気で?」

「…………はい」

「本当に本当に本気で？」

「本当に本当に本気でありませんよ！」

しつこいなあもう！

舞歌が怒ると、絢音はクスクスと笑った。

「よかったわちゃんと怒ってくれて。あなたも鈴音みたいに、ちょっとおかしいかと思っちゃった」

そしてそんな事を言う。

「…………」

「あら、そんな顔しなくてもいいじゃない。鈴音がおかしくないと思っていたわけじゃないでしょ？」

自分の娘をおかしいと言い切りながらも、絢音はやっぱり優しく微笑んでいた。全てを受け入れる、母の笑み。それは舞歌は揺さぶる、愛の笑み。

「…………ちっ」

苛立つ理由は、笑みのせいか、それとも唯一の友人のせいか。舞歌は頬杖をつき、窓の外ではなく、窓に微か写る自分の顔を見て、舌打ちを打つ。

「高校生にもなって、膝の上に座りたいなんて言うなんて、おかし

い。高校生にもなつて、あの幼稚な言動は、おかしい。授業中にずつと一人を見ているなんて、おかしい。鈴をつけていないといけな
いなんて、おかしい。テストがいつも50点なんて、おかしい。わ
からない事をわからないとはつきり言えるのも、おかしい。一人の
為に泣いて怒つて悲しんで喜べるなんて、おかしい。自分を鈴音つ
ていうのは、まあ、おかしくないという事にしとく？それがなくて
も、あの子がおかしいという事は、揺るがないでしょ？ねえ三途さ
ん、そうでしょ？もしかして、三途さんはあれがキャラ作りとか、
個性とか、アイデンティティー？って思ってるの？そう、認めちゃ
ってる？そう、受け入れちゃってる？そうやって、これからも一緒
にいる？いてくれる？いられる？平気？不安にならない？ねえ、三
途さん。本当に？本当に、何も聞きたくないの？何も聞きたい事な
いの？今はチャンスじゃない？ねえ、三途さん。あなたは鈴音の友
達なんでしょ？ただのクラスメートじゃなくて、友達なんでしょ？
一緒に登校して、一緒に昼食を食べて、一緒に勉強をして、一緒に
部活に行つて、一緒に帰宅して、一緒に行動する友達なんでしょ？
赤の他人じゃなくて。それなのにねえ、三途さん。何か聞きたい事
ないの？ねえ、三途さん。それ、本気？」

「ああ……わかつたわかつたわかりましたよ」

舞歌は絢音を睨んで言う。

「あんたは私に、あいつがどうしてあんな風なのか、聞いて欲しい。
そういう事だろ」

「あら、三途さんはわかる人ね」

絢音は、そう言つて、やはり笑みを浮かべるのだった。

海のように広くて深い、底知れない、母の笑みを。

16時55分〜特別棟二階一般教室

7 - 6 ・放課後 聞きたい事・教えたい事（後書き）

なんか、絢音さんが、変な人みたくなってるかもしれないけど、この人基本一般人ですから。

7・7・放課後 虹は鈴に戸惑う

16時55分 特別棟三階一般教室？

「……」

「……」

虹野望と鈴乃音鈴音は向かい合って座っていたが、かれこれ30分程度だろうか、一言も喋っていない。望は虚ろな瞳で天井を眺め、鈴音は無機質な瞳で望を眺めている。

二人が案内された、というより望が勝手に使用した教室は一般的な教室とほぼ変わらなかった。40組の椅子や机が収まりそうな広さであり、黒板があり窓があり、掃除用ロッカーがあり、教壇があった。

ただ唯一というか二つというか、一般的な教室とは違い、その部屋には机と椅子が二組しかなく、まるで先程まで二者面談していたかのように、その二組が部屋の中央で向かい合わせに置かれていた事、そして棺桶が置かれていた事が、他の教室とは少々変わっていた。少々かどうかは各自の判断である。

特に棺桶は少々異質であった。生きる事にさえ興味なしの望も入室時、興味を持ち、教室後方の床に置かれていた棺桶に近づいた。鈴音もそのあとに続いたの言うまでもない。

棺桶は大人一人が入り切りそうな大きさであり、黒を基調に赤い十字が彩られているというセンスがわからない物となっていた。

試しに望がノックしてみたが、中から返答はなかった。試しに棺桶を開けて見ようかと思ったが、重くて上がらなかった。なかなか重厚な棺桶である。これを運ぶには四人は必要ではなからうか。私が

四人いても無理だろうけど。と、望が思った程だ。

「この学校……演劇部……ある？」

演劇部の備品が何かだろうと考えた望の質問だったが、鈴音の答えはもちろん「鈴音にはわかりません」だったので、なぜこんなところに棺桶があるのかは、謎のまま、二人は着席し、今に至る。

望が話さない理由というのは簡単な話、話すのが疲れるからである。望が鈴音を連れてきたのは、桜木押花と二人きりになるのを避けるためであり、すでにその目的は達した。押花の強気で弱気な性格から、自らこちらに会いに来る事はないだろうから、望は後は、虹野光の用事が終わるのを待つだけなのである。鈴音をおもしろそうと思ったのは本当の事だが、だからといって、何か話そうとは思っていなかった。自分からは。

会話をしない気ではなかった。相手が、鈴音が何か話すだろうと思っていた。なぜなら、あそこまで強固に膝の上に座る事を主張した少女、光と似たような願望を持っている少女ならば、沈黙は苦手だろうと。そういう風にも考えていた。困っていたら、面談だが、こちらから話し始めてやるか。そんな風に考えていた。

しかし現実というのは、なかなか予想通り、考え通りにはいかないものだ。

「あなた……」

望は虚ろな目で、鈴音の全体を視界に捉えながら尋ねる。

「いつ……まばたきしてるの？」

それは望が不思議に思っていた本質の質問ではなかったが、わかりやすい質問でもあった。

望はこの約30分の間、ほとんど天井を見上げて眺めていたのだが、やった事がある人はわかると思うが、というか誰しもがわかる事かと思うが、姿勢を維持し続けるというのは大変肉体に負担がかかる。例えばそれが脱力状態であっても、ずっと天井の一点を、全体を眺めているのは大変しんどい。ましてや望は、自他共に認める虚弱体質である。5分持てばいい方である。

それゆえ、人間として自然の事ながら、望はずっと天井を見上げていたわけではなく、時には机を、時には窓の外を、時には目をつむり、そして時には鈴音を見ていたわけだ。そう、鈴音を見た時がポイントであった。

鈴音とはいつも目があった。いつでも、だ。天井を見上げてる時、ふと、視線を下にずらせば目が合うし、机から視線を上げれば目が合うし、窓の外から室内に戻せば目が合うし、目を開ければ目が合う。

目が合わない時も、望が天井を眺めている間、机を眺めている間、窓の外を眺めている間、まぶたの裏を眺めている間、望は鈴音の視線を感じていた。

30分間ずっと。一度も目がそれる事もなく、片時も視線を感じない時がなかった。

それは何も不思議ではない。なぜなら鈴音は30分間ずっと、望を見ていたのだから。一度も目を逸らさず、一度も視線を外さなかった。

「鈴音はいつまばたきしてるかわかりません。いつまばたきしてるんですか？」

望の疑問に対する質問が、これであった。鈴音は、冗談を言ってい

るようには見えない無表情のまま小首を傾げ、まばたきを一度した。まばたきというのはこつこついうものですよね？そんな確認をしたような、まばたきだった。

「私に聞かれても……………困るわ……………」

「あなたは聞かれると困るんですか？」

「ええ……………だって、私の事……………じゃない、もの……………」

「あなたの事じゃないから困るんですか？」

「そうよ……………私の事じゃなく、あなたの事……………よ」

「あなたの事じゃなく鈴音の事なんですか？」

「……………あなた」

望はループに陥りそんな予感を感じ、質問を変える事にした。虚ろな目は怪訝な色を帯び始めている。

「あなた……………変な子ね……………馬鹿にしてる、わけじゃないのよ、ね」

馬鹿にしているのなら、おちよくっているのなら、見る側を不快にするような表情を浮かべるはずなのだが、鈴音は真面目な無表情のままである。

「鈴音は馬鹿にしてるわけじゃありません。鈴音は変な子ですか？」

「そうね……………馬鹿にしてるわけ、じゃないなら……………変ね」

つまり、今の質問も、今までの質問も、鈴音は真面目に、本当に、本気で、わからないから聞いたのだ。もちろん、本当は望を馬鹿にし、おちよくているのかもしれないが、もしそうなら、望には手に負えない人間である。

「名前……………なんだっけ？」

「鈴音の名前は鈴乃音鈴音です」

「そう、私は……………虹野望、よ。よろしく、ね」

望は鈴音に握手を求めた。

鈴音は差し出された手を、不思議そうに数秒見つめた後、「よろしく」と端的に答え、握手に応じた。

鈴音の手は、望に負けず劣らず、冷たかった。

17時05分 特別棟三階一般教室？

7・8・放課後 大・ジェス・ト

16時30分〜特別棟四階異室

「さあ、鬼ごっこをして距離も近づいたところで」

「近づいてねえよ。鬼ごっこは離れるもんでしょうが」

「保護者同士、腹を割って話しましょう」

「話さねえよ。一人で腹切ってるよ」

「奈美ちゃんの事、どう思う?」

「恋に恋する迷惑女」

「同意しましょう」

16時40分〜特別棟三階取調室

「神社さんは、そんなに料理がうまいの?」

「はい、もう、ビックリするくらい上手です」

「それは今度、食べてみたいわ。郵送してくれる?」

「え？あー、はい。わかりました」

「わかってもらっちゃうと、困るんだけど……」

16時50分、特別棟四階仮眠室

「だーかーらーつーらーらーにーあーやーまーってー！」

「ごめんなさいですわごめんなさいですごめんなさいですかしら
ー！ー！」

「三段活用ー！？」

「なんですのそれ？」

「え？えつとねー……つららに謝ってくれたら、教えてあげても
いいよー？」

「じゃあいいですの」

「……えー」

16時55分〈特別棟二階一般教室〉

「わかってくれたら嬉しいわ。私は不安でしょうがないのよ。鈴音に友達が出来る度にね。あの子は、生まれた時からというわけではないけれど、ずっとあんな風だったけど、友達がいた時だつてあるのよ？友達がいない人はいても、友達がいなかった人なんて、いないでしょ？」

「……」

「あら……地雷を踏んだ心配が……」

17時00分〈特別棟四階異室〉

「だからこそ私はね。さっさと契約して縛っちまうのもありかなあつて思うのよ。どう？」

「ハッ。確かに不確かなのを確かにするにはいいかもしれませんがどね。枯葉の気持ちはどうですかつて話ですよ」

「気持ちなんて、後からついてくるもの。らしいわよ？」

「そんな事信じてないって顔に書いてありますよ、おばさん？」

「え？おかしいわね。そんな事を信じてみたいと顔に書いておいた

はずなんだけどね、娘さん？」

17時00分、特別棟三階取調室

「あ、ねえねえつららさん？」

「はい？」

「神社さんと私の料理、どっちの方が美味しいですか？」

「……あー、それは……」

『比べものにならないマジで。まあそれでもあたしはあの女の料理嫌いだから美味しくないけどね。だってあたし。あいつ嫌いなんだもん。あ。クスクス。つまりあんた。嫌いなんだ。あの女より。母親の方が』

17時00分、特別棟四階仮眠室

「よーしよしよしよしよーし」

「ぶにゃー」

「よーじよーじよーじよーじよーじよーじよーじよーじよーじよーじよーじよーじよーじよー」

「ふみやふにやふみやー」

「ねえ、光ちゃん。撫でるのもういい？」

「まだですのー」

「本当につららに謝ってくれるのかなー……………」

17時00分〱特別棟二階一般教室〱

「そついえば三途さんの親御さんは今日来てないの？」

「……………なんか悪いんですか来てないと」

「あら……………また地雷……………」

17時00分〱特別棟一階茶室〱

「ですから、神様なんていやしませんよ」

「いますいますいるっていったらいるんだものですよそういうものなのよ神様ってものはね」

「ちなみに、幽霊もいません」

「……………何でそんな事わかるんですか？いるかもしれないでしょ？」

「あ、勘違いしてますね。訂正しましょう。幽霊はいます。でも、あなたの近くには神様もいませんし、幽霊もいません。何でって？だって見えないんですから。見える私に見えない。先生、言ってる意味、わかります？」

17時00分〈特別棟三階文芸部部室〉

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、あの？」

「……………なんでしょう」

「桜木先輩の……………お母さん、ですよね？」

「……そうですね」

「僕は、光の友人の、鈴乃音真音です……睨まないで下さい怖いです
すすいませんでした……」

17時10分〜特別棟四階異室

「だから枯葉はこれっぽちもあんたの娘に好意を抱いていない！」

「そんなわけないでしょ。奈美ちゃんカワイイし、性格もいいし、
胸もあるし」

「まずあの目は可愛くないし、さらに性格もあんたの娘と納得する
悪さだし、何よりも枯葉は胸とかに興味ないから!!」

「そんなはずないわ！男はみんな胸が大好きよ！守も鳥のむね肉が
好物だったし！」

「鳥のむね肉関係ねー！」

17時10分〜特別棟三階取調室

「お、お養母さん？そんなに落ち込まなくても、あの、お養母さんの料理も、美味しいですよ？」

「そ、そう？よかったー……どっちの方が好き？」

「えー？あー、それはもちろんお養母さんの、です」

「正直に言っていていいんですよ？」

「い、いえ、正直に言って、お養母さんです」

「どんなところが？」

「ど、どんなところ？あー……素林なところ？」

17時10分〜特別棟四階仮眠室

「ふーん。光ちゃんのお母さん、そんなに動かないのー？」

「そうですね。日がな一日、ずーっとお部屋に引きこもりですの。引きこもりの中の引きこもりですわ」

「そうなんだー。じゃあ、家事はおと、誰がしてるのー？」

「松さんですのー！」

「松さん？」

「スーパー家政婦さんですわ！すごい料理も美味しいし、すごい掃除も得意ですし、すごい優しく、すごいすぐくてすごいんですわ！」

「す、凄いことはわかったー」

17時10分〈特別棟二階一般教室〉

「鈴音と付き合う上で重要なのはね。期待しないことなの」

「期待しない？」

「ええ、そうよ。期待しちゃダメなの。あの子に普通を、期待しちゃうダメ。ずっとあの子はあのままなの。絶対に、変わらないわ」

「……」

「ふふふ、どうして私がそう言い切れるか、不思議？そう思うなら三途さんは、変われると思ってるのね。でも、私は変わらないと思ってる。その違いはどこから生まれると思う？そう。私は知っていて、あなたが知らないから。私はわかっていて、あなたにはわからないから。鈴音があんな風な理由を。そこが全て」

17時10分、特別棟三階一般教室？

「一＋一は？」

「二です」

「そう、正解……それは、わかるのね……」

「鈴音はそれはわかります」

「あなた……桜木、さくら……知ってる？」

「鈴音は知りません」

「さつき……同じ教室にいた……柔らかそうな、子」

「柔らかそうな子とは何ですか？」

「雰囲気よ……雰囲気……」

「鈴音にはわかりません」

「……わからないんじゃない？、考えるのを、放棄してるんじゃない？、」

「そうなんですか？鈴音は考えるのを放棄してるんですか？」

「私は……そう、思うわ……」

「鈴音はそう思いません。どうしてそう思うんですか？」

「逆に……聞く、わ……あなたは、なぜ……そうおもわ、ない？」

「鈴音にはわかりません。どうして鈴音はそう思わないんですか？」

「……」

17時10分、特別棟三階文芸部部室

「……」

「……」

「……」

「姉さん大丈夫かな……」

「……」

「……」

17時20分〜特別棟四階異室

「今さらだけど、あなた達の父親ってあの有名な？」

「そうですね何か。学校を震撼させた父親ですけど何か。え？そういう父親の息子と大事な娘を結婚させるわけにいかないって？了承したわ。二度と顔見せんー！」

「まさか自分の父親の壮絶な死すらネタにするとは、未来の娘、恐ろしい子……！」

17時20分〜特別棟三階取調室

「じゃあ、次は文化祭の時来ますからね。その時は、お養父さんも連れて来ますよ」

「あ、はい」

「お金は大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

「そうですね。困った事があつたら、遠慮せず連絡して下さいね」

「はい」

「早急な困った事があつたら、神社さんと桜木さんを頼りなさいね。頼んでおきますから」

「あ、はい。ありがとうございます……」

『そいつらに頼る前に。あたしを頼るように。わかりましたか？』

「……」

『無視かよ』

17時20分、特別棟四階仮眠室、

「なるほどー。光ちゃん家は大きいんだねー」

「そうなんですわ。是非お姉ちゃんには一度来てもらいたいんですけどー」

「んー、そうだねー……つららと一緒にならいいかなー」

「あの人はダメですよ」

「じゃあいいや」

「……えー」

17時20分〜特別棟三階一般教室

「……いいです」

「え？」

「だから、教えなくてもいいですよって言ったんですよ」

「どうして？」

「どうしてもこうしてもですよ、めんどくさい。私、もう帰っていますか」

「本気？」

「本気ですよ。何で私があいつがああなった理由を聞かなきゃいけないんですか。ああ、もうめんどくさい。遠慮せずに正直に言っていますか？」

「ええ、どうぞ」

「迷惑してるんですよあなたの娘さんには。ちょこまかうるちよろ私の回りにやってきて、意味がわからない事を頼んできて、何でも

かんでも聞いてきて、友達だとか言っつて、正直言っつて嫌いですよ。私は嫌いな人間の過去を聞いて、ましてや調べて、それで楽しむよくな陰鬱な人間じゃないんですよ。だから、いいですって話です」

「三途さん、鈴音の事嫌いなの？」

「ええ、そうですね」

「でも、わざわざ誕生日祝いに来てくれたじゃない？」

「それも嫌々行つたんですよ」

「プレゼントも持ってきてくれたじゃない？」

「仕方なくですよ。誕生日にプレゼントを持っていくのが礼儀じゃないですか」

「学校では、いつも一緒なんですよ？」

「好きで一緒にいるわけじゃありません。あいつが勝手に私の近くにいるだけです」

「さつきも、鈴音の我が儘聞いてくれたでしょ？」

「嫌々です。ああしないとずっとつるさいだろうかと思つたんで」

「本当に鈴音の事嫌いなの？」

「はい、本当に。本気で」

「そう、困ったわね。鈴音はあなたの事好きなのだけど」

「困ってるのは私の方です」

「ふふふ、そうね。それで三途さん？」

「まだ何か？」

「最後よ最後。つまり三途さんは、鈴音の事は嫌いだし、鈴音の事はわからないし、鈴音の事は知りたくもないし、鈴音のやる事には全部嫌々だし、鈴音と友達なのは嫌々だから、これから鈴音が嫌々にならない限りは、ずっと一緒にいてくれるという事でいいの？」

「……………帰ります」

17時20分、特別棟三階一般教室へ

「あなた……………携帯、持ってる……………？」

「鈴音は携帯を持っています」

「そう……………使い方……………わかる？」

「鈴音はわかります」

「そう……………メールとか……………するの？」

「鈴音はメールとかします」

「そう……どんな？」

「舞歌おはようとか舞歌おやすみとか舞歌何してるとか鈴音はから揚げが好きですとか舞歌は何が好きとか舞歌元気とか舞歌次いつ家に来るのとか舞」「ストップ」

「鈴音はストップします」

「そうし、なさい……舞歌って、さっきの？」

「鈴音にはさっきのがわかりません」

「ひざに座ってた、子……」

「ひざに座ってた子は鈴音です」

「……ひざに座られ、た……子」

「ひざに座られた子は舞歌です」

「……その子、友達？」

「鈴音と舞歌は友達です」

「そう……凄いわ、ね」

「鈴音には何が凄いかわかりません。何が凄いですか？」

「あなたと……友達という事が、よ」

17時20分、特別棟三階文芸部部室

「……」

「……」

「……」

「……みくび」

「……」

「……」

17時30分、特別棟四階異室

「え？なになに？もう一回言ってくれろ？」

「うぜえ！近づいてくんな！」

「近づかないならもう一回言ってくれるのかしら？」

「誰が言うか！」

「えー、言つてよ未来の娘。あの女にくれてやるくらいならお前の娘にやるわ！って言つてご覧なさいよー」

「あー！血の迷い気の迷い聞き違いー！！ハッ！この気配は！？」

「紅葉ー、迎えに来ました「デストロイ！！」

「うわ、危ないなあ。なに、怒つてんの？」

「当たり前でしょうが！こんな親狐と一時間近く監禁しやがって！」

「南さん、楽しかったですか？」

「そうねえ、延長をお願いしたい程ね」

「あはは、わかりました。延長入りまーす」

「私を無視してんじゃねー！！そして延長なし！」

「わかつてるわよ未来の娘。さすがにそろそろ私も帰りたいわ。奈美ちゃんから放課後デートの話も聞かなくちゃいけないし」

「そうだった！私も枯葉に説教しないと！狐と神裂に構つてる暇なしー！」

「にははは、またいつか会いましょう。今度はあなたの母親とも話したいわ」

「断る。さっさと失せろ」

「ああ、そういえば紅葉。頼まれた案件だけどね」

「どうだった？」

「釘を一本埋め込んだってとこかしら。ダメだわありゃ。もう信仰レベルよ。あれで布教し始めたら、あの人教祖よ」

「あっそ」

「軽いわね」

「そりゃね。私の知ったこっちゃないから。私の知らないところで、あのまま死ぬまで生きてるって感じ」

「じゃあ何で私に更正依頼を？」

「別にい。一人あまりそんな神裂さんの暇つぶしを提供しただけ」

「それはどうもありがとう」

「あれ、桜木さん。さくらさんはどうしたんですか？」

「……色々とありまして」

「そうですね。お節介かもしれませんが、過去の関係ではなく、今の関係を大事にするべきかと思えます」

「……大事に」

「あと、光さんでしたか？あの子に罪はないですし、あの子に悪意はないのだから、優しくしてあげるべきかと思えます。半分は血が繋がっているんですから」

「……私とは繋がってません」

「半分でも四分の一でも零でも母親にも娘にもなれますよ。ね、つららさん？」

「え、あ、はい」

『うわあ。聞いてなかった。あんた聞いてなかった。さくらちゃん
の事考えて聞いてなかった。クスクス。今こいつ。それなりにいい事言った気がするけどよく考えたら言ってないかもしれないけど
どうだったかしら。クスクス。やっぱり言ってないわ。意味わかん
ない。ごっこをホントにするなんて無理な話。あんたもそう思う
でしょ。わかっているくせに最近歩みよろうとしちゃって。クスクス。
ねえねえ何してんの。ねえねえ何期待して』『黙れ。うるさい。消
える』

「さて、私はそろそろ帰らないといけません。桜木さん、大変かと思いますが、つらさんの事もよろしくお願いします。はい、つらさんも」

「え、あー、よ、よろしくお願いします?」

『ほら。あたしにもよろしくと言い』『言わない』

17時30分、特別棟四階仮眠室

「よし。そろそろ部屋に戻るつかー」

「えー。まだお喋りしたいですのー」

「やだー」

「お姉ちゃんが冷たいですわ!」

「また今度ねー。さあ、お家に帰る時間ですよー」

「……わたくし、今日はお家に帰りたくですの」

「じゃあここに泊まればー?」

「お姉ちゃんが素っ気ないですわ!?」

「あははは、ほら、置いていくよー」

17時40分、特別棟三階文芸部部室

「あ、母さん」

「あら、真音と、光さん、でしたっけ？」

「ですの。虹野光ですわ。いつも真音にはお世話になってますですの」

「それ、自分で言うことかな……」

「ふふふ、これからも真音をよろしくね。それで……鈴音はどうしたの？」

「姉さんはまだ戻って来てないよ。母さんの方こそ、三途先輩は？」

「三途さんは帰っちゃったわ」

「帰ったの？」

「ええ、逃げられちゃったというのかもしれないけどね。それで、鈴音はどこに行ったの？」

「わかんない。光のお母さんとどこか行っちゃった。光とも今、探

しに行こうかって話してたとこ」

「ですわ」

「そう。他の方たちは？」

「桜木先輩たちは、さっき帰ったよ。そういえば光、氷山先輩に謝ってたけど、何かしたの？」

「仕方なく謝ったですの。わたくしは悪くないと思いますわ」

「光がそう思う時は、たいてい光が悪いよ」

「どつという意味ですのそれ……」

「ふふふ、仲良しさんね。鈴音もそうだけど、真音にもいいお友達が出来てお母さんは安心しました。さて、じゃあ、もう少し待って来なかったら、探しに行きましょうか」

17時40分、特別棟三階一般教室？

「そろそろ……戻りま、しょうか……押花さんが、帰った……心配がする、わ」

「鈴音にはわかりません」

「わからなくて、いいのよ……………ああ、携帯……………」

「？」

「携帯……………メルアド……………番号……………交換、してみる？」

「鈴音は交換しません」

「どうして…………？」

「家族と友達以外には簡単に教えちゃダメと真音に鈴音は言われています。あなたは鈴音の家族ではありません。あなたは鈴音の友達ではありません。だから鈴音は交換しません」

「なるほど……………じゃあ、私は、あなたの……………なんなのかし、ら？」

「鈴音にはわかりません。あなたは鈴音のなんなんですか？」

「私にも、わからない、わ……………あなたの、友達にでも……………聞きなさい」

「鈴音は舞歌に聞きます」

「そうしなさい……………まあ、いいわ……………さくらちゃんと、交換出来ただけ……………十分、過ぎる……………ふっ」

「どうして笑ってるんですか？」

「これからが、楽しみだから……………さあ、戻りましょう……………今日は、疲れたわ……………」

「鈴音も疲れました」

「そう……………あぁ、最後に……………もう一度、握手……………しましょうか」

「鈴音は握手をします」

「……………あなた、私みたいに……………手、冷たいわ、ね」

「鈴音の手は冷たいですか？」

「ええ……………でも、心は、温かいらしいわ……………」

「鈴音の心は温かいですか？」

「らしいわ……………心が、あったならの……………話しただけどね……………」

「鈴音に心はありますか？」

「さぁ……………あると思えば、ある……………らしいわ……………帰りましょっ……………」

「……………」

「鈴音も帰ります」

7 - 8 ・放課後 大・ジエス・トゝ (後書き)

ながつ。色んな意味で今回は長かったね。次回で授業参観偏も終わりです。次はきつと文化祭編なんじゃないかな。よくわかりませんがどね

7・9・帰宅〜これまでとこれからと〜

何だか途方もない悠久の時を経た的な時間が経っているような気がしないでもない授業参観はようやく終わった。

授業参観の日の夕食や夜というのは、一部の家庭を除き（授業参観に参加していない家庭や、夕食時会話なしのような家庭を除き）たいていは、授業参観の話で盛り上がる。というか、盛り上がって欲しい。願望である。もっと授業がんばなさいとか、変な先生ねえとか、あの子おもしろい子ねえとか、お母さん久しぶりに学校に行つて若返つた気分よとか、何でもいいから会話を弾ませて欲しい。そのためには、両親だけではなく子供も努力するべきだというのは、きつと言つまでもないことだ。

若葉家の場合、夕食時の会話、

「さあ吐きなさい枯葉！何をされたか吐きなさい！」

「だから何もされてねえよ。つーか姉ちゃん、食事中に吐けとか言うな」

「枯葉の言う通り。紅葉、自重なさい」

「ぐっ……お母さんまで……枯葉、あんた放課後なにしてた？」

「またかよ……」

「姉が満足するまで話し続ける。これ、弟の宿命」

「聞いたことねえよそんな宿命……だからさあ、誰かのせいで課せられた社会の宿題を受け取りに行ったわけよ。そしたら偶然、準備室であいつとばったり会って、お互い大変だなあ。みたいなため息をつきあってから、二人で準備室に入った」

「あいつって？奈美ちゃん？」

「いや、秋春とかいう奴。あれ？母ちゃん知らなかったっけ？あいつの双子の、兄だか弟。同じクラス」

「友達？」

「違う。で、プリントと、なぜか姉ちゃんを、あいつは母親を、もつと落ち着かせると説教もらって準備室出たら、あいつがいた」

「枯葉……代名詞じゃなくて名詞を使いなさい。わかりづらいから」

「南さんが、いました」

「はい、よろしく」

「あいつ、じゃなかった、南さんはなんか知らんけどいきなり、さあ帰りましようとか言っ腕を掴んできて」「なんだっ」「紅葉」「……はい」

「……で、まあ俺も用ないから帰ろうと」「姉が拉致られたというのに」「紅葉!」「はい……」

「んで、学校出て、そこであいつは駅、俺は逆方向だから、別れようとしたら、友達なら送っていくべきではありませんかみたいな事を言ってきた、確かにそうだなあと思ってた、駅まで送ることになった。そしたら、途中の公園で小学生に会って、一緒に遊んだ」

「小学生って、前話してた、メルアドを交換した女の子?」

「そう。で、楽しく」「枯葉はやはりロリータコンプレックス……!」

「人聞きがわりいこと言ってるじゃねえよ姉ちゃん!あと何で母ちゃん今回止めない!?何で目を逸らす!?姉ちゃんは泣き真似をやるめろ!」

「そんな事より、先を早く話しなさい」

「そんな事って……あー、で、夕方のチャイムが鳴ったくらいで、小学生達が帰るって事で、公園を後にした。んで、途中、あんな子が欲しいですねー。みたいな戯言を聞き流しつつ、駅着いて、じゃあなあって言って別れようとしたら、ちよっと一服しようって提案してきたから、何でだよと言ったら、放課後にカフェに行くのは大変自然ですみたいな事を言われ、なんか確かにそうかもなあと、思い、カフェに行き、一服し、じゃあまた明日ー。で、帰宅した。はい、終わり」

「……お母さん、感想をどうぞ」

「枯葉と奈美ちゃんが仲良しで母親としては、嬉しいかぎりってとこね」

「違うでしょ！？それデートじゃね！？でしょ！？」

「なに言ってるんの姉ちゃん」

「なにを言ってるの紅葉」

「どこがデートだよ」

「どこがデートなの」

「頭おかしいんじゃない？」

「枯葉、それは言い過ぎ」

「頭おかしいのは枯葉の方よ！！あんたは体よく騙されてる！！」

「何が？」

「……いい？枯葉、よく聞いて想像なさい。男と女が放課後、一緒に帰って、遊んで、カフェで雑談に興じて、今日は楽しかったね！。明日もまた遊ぼうね！。あははは！。うふふふ！。と言って、別れる。この二人の関係は？」

「いや、それだけじゃわからないだろ二人の関係なんて。友達かもしれないし、家族かもしれないし、幼なじみという物かもしれないし、あ、師弟という可能性も」「歯を食いしばれ！！」「俺のハンバーグ！？」

「どう考えても恋人でしょうが！！」

「どこが！？つていうかハンバーグをなぜ盗った！？歯を食いしば
れの意味は！？」

「ああもうダメだわこの弟。今日は徹夜で友達と恋人の違いについ
て洗脳しないと」

「徹夜で洗脳！？ダメだこの姉ちゃん！！母ちゃんどうにかしてく
れよ！！」

「枯葉、強くなるのよ」

「どつという意味それ！？」

南家の場合、夕食の会話

「というわけで奈美ちゃん。紅葉っちは思いの外、好感触だったわ。
このまま押せ押せで、キャッキヤのウフフフとやってれば、ウエデ
イングエンドよ」

「本当ですか？何だか怪しいですけど」

「酷いわ奈美ちゃん！お母さんの言う事を信じられないというの！
？」

「はい、全く」

「えー、どうしてよー。私の言った通り、今日の放課後は枯葉君と楽しくデート出来たでしょ？」

「確かに出来ましたけど……あれ、デートですか？別に手を繋いで帰ったわけじゃないですし、ただ歩いて喋ってお茶を飲んで……友達でもやりませんか？」

「えー？つまり奈美ちゃんもつと恋人でしかやらないような事をしたかったの！？具体的に言つと、せ」「そういう言動が信用を失う原因というのがわかりませんか！？」

「にはははは、冗談よ冗談」

「お母さんは冗談と本気がわかりづらいです……ん」

「どうしたの？ああ、携帯のお呼び出しね。電話？メール？誰から？枯葉君かなあ？」

「いえ、子猫先生です。はい、もしも……はい……はい……え？……はあ……酔ってるんですか？……はあ、わかりませんけどわかりました、お母さん元気出して。これでいいですか？……はい……はい、おやすみなさい」

「猫野郎なんだってー？」

「よくわかりませんが、なんか、お母さん元気出してと言ってと言っていました。酔ってたみたいです」

「それはそれは……一歩間違えたら変質者ね」

「お母さんは子猫先生の事嫌いなんですか？」

「え〜、どうしてそう思うのかにゃ〜？」

「野郎って言うてますし、目が怖いです」

「目が怖いのは奈美ちゃんも一緒じゃない？」

「私は目つきが悪いだけです」

「じゃあ、私もそうよん」

「野郎については？」

「親しみを込めた、つ・も・り」

「……同族嫌悪ですか？」

「そう。同属嫌悪よ。つまりジエラシー！！奈美ちゃんが私に懐かないから、私は猫先生を嫌いになっちゃったのよ！というわけで奈美、もっと私を頼りなさい」

「ご馳走様でした」

「奈美ちゃんが冷たい！お母さん泣いちゃうーっうるうる。ちゃんと歯を磨くのよー」

「その……あの子とはどんな話をしたの？」

「光ちゃん？」

「ええ、その子」

「えっとねー、まずは昼休みの事でつららに謝ってもらって話をしたー」

「昼休み……？」

「あ、そっか、お母さん知らなかったっけー。あのねー、お母さんたちが来る前にねー、光ちゃんがつららに酷い事を言って追い出しちゃったんだよー」

「酷い事？」

「うん。あっち行けーとか、邪魔だーとか、いらぬ子ーとか。もうホント酷いんだからー」

「それは酷いわね。だから最初、つららさんはいなかったのね」

「そっだよー。全く光ちゃんには困ったもんだよー。全然謝るって言わないんだもん」

「そっね………ね、ねえさくら？お母さんが、話してみましようか？」

「何をー？」

「だからその……そういう事を、ね？」

「……むー」

「ど、どうしたのさくら？膨れちゃって……カワイイ」

「カワイイじゃないよー。お母さん、光ちゃんの事、嫌いななの？」

「き、嫌いってわけじゃないけど……」

「夏休みはケーキ買ってきてくれたり、お茶すすめたり、いい感じだったのにー」

「その……色々複雑なのよ」

「それはわかるけどさー」

「……さくら、怒ってるの？」

「ちよつとねー。光ちゃんは良い子なんだから、虐めちゃダメだよー？虐めたらわたし、お母さんの事嫌いになるよ」

「そんな事許しません！」

「じゃあ、お母さんも光ちゃん虐めちゃダメだからねー」

「わかった。絶対虐めないわ。だからさくらも、絶対嫌いになっちゃダメよ？」

「わかったー」

「それで、他にはどんな事を？」

「光ちゃんのお家について話したよー。あのねー、光ちゃん家にはねー、松さんっていう、スーパー家政婦さんがいるんだってー。今日のお昼を作ったのも松さんらしいよー」

「ああ、そう言ってたわね。そう……松さん、まだ元気でやってるのね……」

「お母さん知ってるの？」

「えー!? え、ええ、ちょっとだけね」

「ちょっと?」

「そう、あの、つまり、さくらがまだ小さい頃に、ちょっと世話になったのよ……」

「へー。そうなんだー。どんな風にちょっと世話してくれたのー？」

「……聞きたいの？」

「うん。お母さん、わたしが小さい頃の話してくれないじゃーん。だからちょっと聞きたいなーって」

「……さくらが小さい頃の話。を、聞きたいの？」

「うん。他に何かあるのー？」

「……………うづん、ないわね。そうね。じゃあ、ちょっと話してあげるわね。そうねえ……………そういえば、さくらの名前の由来とか、話した事、あった？」

「うづん。聞いた事ない。どうして？」

「さくらが生まれたのは、桜が綺麗な季節だったのよ」

「えー、だからさくらなのわたしー？なんか安直ー」

「安直……………も、もちろんそれだけじゃないわ。色々本を読んだり、字画とかを気にしたり、一生懸命に考えて、てる……………松さんにも相談してね。それで、可愛くて、桜のように皆に愛されて、力強い女の子になって欲しいと思って、平仮名の『さくら』にしたのよ」

「松さんにも相談したのー？」

「ええ。だから、そうね。松さんはさくらの半分名付け親とも、言えるかもね。さくらの生みの親も育ての親も私だけだね」

「なるほどなー」

「姉さんほら、アイスあげるから機嫌直してよ」

「姉さんアイスもらうけど機嫌直さないの」

「……母さん」

「もうほっときなさい真音。寝て起きたら、機嫌直ってるわよ」

「鈴音は寝て起きても機嫌は直ってません」

「あら、本当に?」

「本当なの。鈴音はお母さんに怒ってます」

「困ったわね。三途さんが勝手に帰っちゃったのは、お母さんのせいじゃないのよ?」

「鈴音はお母さんのせいじゃないとは思わないの」

「三途さんに聞いてみたら?」

「そつだよ姉さん。メールしてみたら?」

「鈴音はメールを試してみたの。舞歌はちっともメールを返してくれないの。鈴音は怒ってるの!」

「え?母さんじゃなくて三途先輩に怒ってるの?」

「鈴音は舞歌じゃなくて母さんに怒ってるの」

「でも、メール返さないのは三途先輩がいけないような……」

「違うのよ真音。三途さんがメールを返さないのは私が怒らしたからだと思ってるのよ。そうよね鈴音」

「鈴音はそうなの」

「でも違うのよ鈴音。私はちょっと、鈴音の昔話をしたただけなのよ」

「姉さんの昔話を聞いたら、そりゃ逃げるよ……」

「姉さんの昔話を聞いたら、そりゃ逃げるの？」

「いや、ん、まあ、逃げない人もいるかな……」

「真音。それがね。三途さんったら、聞かずに帰っちゃったのよ」

「そうなの？」

「舞歌ったら、何を聞かずに帰っちゃったの？」

「鈴音の秘密よ」

「鈴音の秘密なの？」

「鈴音には秘密なの。だから、鈴音の秘密。あ、ほら、鈴音。携帯鳴ってるじゃない。三途さんかもよ」

「もしもし鈴音です。舞歌怒ってるの………鈴音にはよくわからないの………鈴音はわかったの。お母さん元気出して………お

やすみ

「姉さん誰から？」

「姉さん猫猫先生から」

「猫猫先生？何だって？」

「鈴音にはよくわからなかったの」

「ふーん……あ、僕にもかかってきた……はい、もしもし……え？
……何ですか？……酔ってるんですか？……ええ、はい」

「鈴音、まだ怒ってる？」

「鈴音はまだ怒ってるの」

「そうなの、困ったわねー。じゃあ、本当の事を教えてあげる」

「本当の事を教えてあげるの？」

「そうよ。実はね、三途さんは、鈴音に怒ってるのよ」

「舞歌は鈴音に怒ってるの？」

「そうよ。鈴音が虹野さんと楽しくお喋りしてたから、三途さんは嫉妬して怒って帰っちゃったのよ」

「鈴音は虹野さんと楽しくお喋りなんかしてないの」

「あら、そうなの？でも、三途さんはそう勘違いしちゃったのよ。鈴音が私が悪いって勘違いしちゃったのと同じだね」

「舞歌は鈴音に怒ってるの？鈴音はどうすればいいの？」

「ふふふ、いい？鈴音。三途さんにね。ありがと。って送ってみて？」

「鈴音はわかったの……………送ったの！」

「返ってきたら、三途さんはもう怒ってないって」「返ってきたの！」

「思った以上の早さ……………何だった？」

「いきなり何ですか気持ち悪い。さっさと寝ろって書いてあるの！舞歌怒ってるの？」

「全然怒ってないわ。安心して、鈴音は寝なさい」

「鈴音はわかったの！鈴音は安心して寝るの！」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

「あれ、解決したの？」

「ええ、解決したの。猫猫先生なんだって？」

「それがよくわからないけど、なんか、お母さん元気出してって言えって。なんか、酔ってたし、泣いてたしで、よくわからなかったから、とりあえず、呼んだら、感謝された。母さんわかる？」

「うづん、さっぱり。猫猫先生はいい先生だと思っただけど、どうも時たま、変よね……さっ、真音ももう寝なさい」

「母さん、まだ九時だよ？今時、小学生だって寝ないよ……」

「あら、鈴音は寝たじゃない」

「姉さんは例外だよ。高校生で九時に寝るなんて、姉さんだけだと思っちな」

虹野家の場合、就寝前の会話

「奥様、失礼いたします」

「なに……？」

「お嬢様がお眠りになりましたので、そろそろ松はお暇させていただきます」

「九時……わかった、わ……」

「明日もいつも通り、六時に来ますので」

「ええ……よろしく」

「奥様」

「なに……」

「お風呂には入られましたか？」

「……まだよ」

「そうですか。では、これから？」

「……」

「奥様！」

「………めんどいのよ」

「面倒という理由で、女性がお風呂に入れないのはいかなものかと、松は思います。今日は久しぶりに外出なされたのですから、汗もかいているでしょうに。それなのに面倒だから入らないとは。全く、松は嘆かわしいです。奥様。結婚以前の、自分磨きに余念がなく、ギラギラとしたあなたはどこに」「わかった、わ………
…いつもうるさい松ね……入るわよ、入れば、いいんでしょ……」

「そうです。それでいいんです。では、松は失礼いたします」

「さつさと……………失礼なさい……………」

「奥様」

「なに……………」

「お風呂で、寝ないようにお気をつけて下さいね」

「わかってるわ……………」

「奥様はいつもそうおっしゃりますが、ご自身が何度浴室で死にかけたか。覚えておいでですか？」

「……………十、くらいかしら」

「奥様！松が覚えている限りでもすでに百は越えておられますよ！松のように歳をとれば忘れがちになるといふ事も考えれば、二百は死にかけていると考えられます！奥様はギネスにでも挑戦しておられるのですか！？」

「ギネスって……………松、あなた、若いわね……………」

「おだてても松の機嫌は治りませんよ！全く……………。奥様。もう口が酸っぱくなるほど言ってまいりましたが、もっとしつかりして下さい。昔のご自身を取り戻すのです。松ももう生い先短い身。松が死んだ後は、奥様がこの家を守らねばならぬのですよ？わかっておいでですか？」

「あなたが死んだら……………あなたの娘を……………雇うわ」

「娘はまだまだでございます。孫はなかなかですが、少々性格に難があります。どちらにしても、奥様に頑張っていただかないといけません。八月の末は、元気だったではありませんか。お嬢様とお遊びになって、勉強も見られて、手料理まで。あの姿を見て、松は確信しました。まだ奥様の中には、あの頃の奥様が生きていらつしやると」

「生きてないわ……………もう、死に体よ……………もう、下がりなさい……………」

「わかりました……………奥様」

「……………なに」

「先程から携帯を開いては閉じ、開いては閉じ、何をしていられるのですか？」

「ああ……………それは、いい質問……………松、相談したい、事が……………あるのだけど……………」

「何でございましょうか」

「実は……………さくらちゃんをどうおびき出すか、悩んでるのよ」

「まあ。それは本当でございいますか？」

「ええ……………松の、言うとおり……………今日は、よくなかったから……………今度は、別アプローチを、ね」

「やっぱりでございますか。ですから松は言ったのです。確かに奥様は押花様の事はよくお知りかもしれませんが、自身の娘の事をわかっていないと。奥様はもつと光お嬢様を理解しなければなりません。光お嬢様は少々強引なところがあります。松の見立てでは、光お嬢様の本質は奥様に大変似ております。今まではそれを抑えていたようですが、さくらお嬢様に甘えるという形で」「わかったわ……わかったから……話が長いの、よ……」

「家政婦というものは、そういうものでございます。奥様、一つお聞きしてもよろしいでしょうか」

「……いまさら許可……どうぞ」

「さくらお嬢様はどうでございましたか？何分、光お嬢様の話は、どうも美化され過ぎている気がして、信憑性にかけていらっしやいますので。松は心配なのです。さくらお嬢様がちゃんと育てられるのか。お元気でしたか？かわいらしかったですか？虐められてはおりませんか？三食食べておられますか？成長しておられますか？押花様はちゃんと母親として」「ストップ……松、一つじゃないの？」

「これは失礼いたしました。しかし奥様。おわかり下さい。松は、さくらお嬢様も押花様も心配なのです」

「ああそう……でもね……私も、まだ……さくらちゃんは……よくわからないわ……だから……松、直接、聞きなさい」

「それが出来たら苦勞はいたしません。松はこの数十年、何度連絡を取ろうと思ったか。しかしあの押花様の事です。松が連絡を取るの嫌がられるでしょう。ですから泣く泣く松は……」

「こつちからじゃなくて……あつちからならいいのよ……松……メルアドを、手に入れたわ……」

「……さくらお嬢様のですか？」

「ええ……これは、光も……そして押花さんも知らないわ」

「奥様、目が輝いておられますよ」

「そう？まあ、いいわ……つまり……光にも押花にも知られずに連絡を取れるという事よ。これをどう使いましょうか。ねえ、松？さくらはどうしてこの事は押花には黙っていると思う？」

「それは、押花様には知られずに、奥様と連絡を取りたいからだ、松は思います」

「ええ、同意見よ……何が聞きたいのかしらね、あの哀れな子は、私に」

「恐らく、奥様が考えている通りかと」

「松も、手伝ってくれるかしら？」

「もちろんです奥様。松も、さくらお嬢様にお会いしたいですから」

「ふっ……ふふふ、松……あなたも、なかなかの、悪人、ね……」

「おほほほ、奥様程ではございませぬよ」

氷山つらら宅へ就寝寸前へ

「疲れた」

『そうね。あたしも今日は疲れたわ。クスクス。でも。なかなか楽しい一日だった』

「……………そうかな」

『あら。あなたはつまらなかつたというの。クスクス。贅沢な奴。お母様が来てくれた初めての授業参観。つまらなかつた？おもしろくなかつた？正直邪魔だと思った？来て欲しくなかつた？勝手に呼びやがってあのクソ女！いつかぶっ殺す！って思った？』

「……………思つてない」

『そうよね。思うわけないわよね。あなたが思つていいような事じゃないもんね。クスクス。最近調子乗つてんじゃないのあんだ。つておい。寝るな。起きろ。これからあたしがあんだをねちねちと虐めるんだから。あなたは親に捨てられるたゴミのような価値しかないのよー。さくらちゃんが新しい繋がりを得たからつて。あなたに出来るか思つてんじゃないわよーつて。虐めるんだから。起きな

さい。起きろ。おいこら。夢見てんのか。羨ましい。あたしも見た
いわ。夢のような。夢みたい。クスクス。まあいいわ。おやすみな
さい。ゆっくり休みなさい。あたしの分も。あたしのために。クス
クス．．．
』

7・9 帰宅してこれまでとこれからと（後書き）

どうにか終わらせた。

これからもがんばろうと。

よろしくお願いします。

1・1・それは一通の手紙から

「おはよー。つららなにしてるのー?」

9月中旬。秋らしくなり、文化祭まで二週間になったある朝の事。桜木さくらが教室に來ると、氷山つららが自分の席で、机の上に置いた封筒をシャーペンでつついていた。

「あ、おはようさくら。朝來たら、机の中にこれがあって、危険がないか確かめてたんだよ。爆弾かもしれないし」

つららはニツコリ笑いながら、行動理由を説明した。「冗談を言うてるようには見えない。え。つららってそんな感じの人だっけー。と、さくらは思った。

「机の中に手紙かー……………あ、ラブレターかもー!!」

キヤー!と、さくらは興奮した。

「さ、さくら、声大きいから」

クラスメートの視線が痛い。

「ラブレターだったらどうするつららー!」

「ど、どうするって、どうもしないよ。というか、茶封筒のラブレター何て、ないと思うよ?」

「ないの?」

「多分」

なにぶん、ラブレターというものをもらった事がないので、絶対とは言えないが、多分ないだろう。

「とりあえず早く開けて見ようよー!」

「う、うん」

つらはさくらのテンションの上がり方に少々引きつつ、封筒を開けた。中には案の定、紙が入っていたが、中身はさくらの期待には応えるものではなかった。

「何だー。南さんかー」

手紙の差し出し人は南奈美だった。内容は、今日の放課後、絶対部屋に来て下さい。文化祭の事で話があります。との事だった。

「ラブレターじゃなくて残念だったねつららー」

「ん、そうかな……?」

別に、つらは残念とは思っていない。もちろんさくらも、本気で残念だと思っているわけではない。

「あ、わたしのところにも入ってたー」

「あの人から?」

「多分ねー。よかったー。仲間外れにされたかと思っただよー」

さくらの机の中にも、同じ茶封筒が入っていた。つららにはあって自分になかったら、ちよつとシヨックを受けるところだった。

「文化祭のことかー。七不思議の事かなー？」

「多分そうじゃないかな」

「えつと……屋上のと、校長先生のと、部屋のと、食堂のはあるから、後三つ必要何だっけー？」

「うん。見つけたのかな？」

「どうかかなー。見つからなかったら、自分達で作らないといけないんだよねー。つらら、作れそう？」

「どっくだろっ……」

つららは思案顔で、外に目を向けた。

「ネタでもあるのー？」

おや、無理と言ったと思ったけど、あてでもあるのかな。と、さくらは思った。

「そういうわけじゃないけど……怖い話じゃなくて、不思議な話なら、考えつくかなって」

つららは淡い笑みを浮かべながら、答えた。さくらを安心させるよ

うな笑みだった。

「あ、確かにー。怖い話は難しいもんねー。わたし達が怖いと思っても、相手が怖くなくなったら、怖い話じゃないもんねー。でも、不思議な話なら、不思議だから、不思議だよねー」

「うん。不思議なのはみんな不思議だからね」

「それに、不思議な事なら、わたしも体験した事あるしー」

「そうなの？」

「うん。あのねー。この前、フライパンで、ベーコンを焼いてたのー。ベーコンがいい感じになったから、わたし、フライパンから出そうと思っただけどー、お皿用意するの忘れちゃったのに気付いたんだよねー」

「あー、たまにあるね。慌てちゃうよね」

「うん。わたしも慌てただけどー、お母さんから、火はちゃんと消しなさいって、しっかり教えられてたから、火をちゃんと消してお皿を取りに行ったんだよー。で、少し捜すのに時間がかかったけど、お皿を見つけて戻ってきたら、なんとびつくりー！ベーコンが黒焦げになってたんだよー！？わたし、ちゃんと火を消したのにー！ね、不思議でしょー？」

「……………それ、余熱」

1・1 それは一通の手紙から（後書き）

新章突入。という気分。

1・2・三人寄れば文殊の知恵

「早急です」

放課後。

桜木さくらと冰山つららが部室に行くと、すでに南奈美がいた。さくらとつららに着席を促してすぐ、奈美はそう言った。

「これをどうぞ」

「どうもー……うわー、これ、南さんが一人で作ったのー？」

「……」

奈美から配られた書類の束を見て、さくらは驚きの声を、つららも声は出さなかったが、内心驚いた。

奈美が用意したものは、文芸冊子の仮本のようなものだった。一般的な印刷紙をホッチキスでまとめ、本にしてある。ぺらぺらと中身をめくると、目次、七不思議のまとめ、編集後記等が、二段組みで書かれていたが、完璧ではないようだ。所々、空白のページがある。

「見てもらうとわかるように、まだ完成していません。あなた達二人にやってもらいたい事は、三つあります」

「三つー？」

「そうです。まず一つは、残りの七不思議を考えてもらいます」

仮本には、七不思議が四つしか書かれておらず、残りのページは空白となっていた。

「あ、結局、残りの三つは見つからなかったのー？」

「はい、私には。あなた達は？」

「ぜんぜん」

そもそも調べていない。

「でしょうね。ここまで捜して見つからないとなると、まだ残り三つはないのかもしれない。というわけで、作る事にします。ちょうど三つ。三人で一つずつ担当しましょう。よろしいですか？」

「わかりましたー」

「……」

つららも頷いて、了解した。

「残り二つは、編集後記、つまり後書きみたいなものです。それを考えといて下さい。これは短めでいいですよ。それと、タイトルですな」

「タイトル？」

確かに、仮本の表紙には、文芸冊子（仮）としか書かれていない。

「はい。どうも、決まった名前はなく、例年変えるのが決まりみた

いになつてるようなので。何か案を考えといて下さい。ここに参考になるもの、置いときます」

奈美は鞆から、歴代の文芸冊子や、怖い話を書いてある本や雑誌を取り出し、机に置いた。準備がいい奴である。

「では、明日の朝、またここに集まって下さい。それまでに、最低でも、七不思議は考えといて下さい」

「え！明日の朝ー！？」

それはちよつと締め切り急じゃないか。

「急がないと間に合わないんです。何か質問は？」

「え、え、えつとー……あ、三途さんとか鈴乃音さん達はー？」

夏休み手伝ってくれるとか、なんとか言つてたような。

「……私は気付きました。人数が多ければいいというわけではないという事に。子猫先生に、少々のせられた感があります」

「は、はあ……？」

黄昏れている奈美に、さくらは戸惑い気味だ。

「三途さんと鈴乃音さんには、別の事を頼んであります。七不思議ではない、怖い話を考えてもらっています。他に質問は？ないですね。では、私はこれから用があるので。鍵はそこにあるので、戸締まりはよろしくお願いします。あ、これは置きっぱなしでいいです

よ

奈美はそう言って、足早に部室を後にした。忙しそうだ。

「どっするつららー？」

「うん。どうしょっか」

二人はとりあえず、奈美が置いていった参考資料に手を伸ばす。

「……とりあえず、簡単そうなタイトルから考える？」

「そうだねー。えっとー、去年の鼎先輩が作った奴は……鏡面物語」

「内容は……童話や物語の考察や、解釈が、みっちりだね」

「鼎先輩、こんなの書いてたんだー」

鼎菜というのは、さくらとつららの二つ上の先輩で、先代文芸部長である。去年の文芸部は、菜一人で行っていたと言っても、過言ではない。文芸冊子も、もちろん一人。さくらとつららは、ノータツチだ。

「赤ずきんちゃんは、お母さんに呑みこまれた子供の話なのか……あれ、前も似たような事を言ったような……」

「……さくら、中身はまた後で読もうね」

「あ、そうだったそうだったー。えっと、一昨年のは、月？」

「中身は、月の事が……うわ、月の裏側には宇宙人がいるって信じてるよこの人……」

「オカルトだねー……三年前のは、地中探検……つららつらら！地球の中心は空洞何だってー！」

「……さくら、信じちゃダメだよ」

そんな感じで、過去の文芸冊子を読んでもみると、どうやら例年、本の内容に沿ったタイトルにしているようだ。

「んー、七不思議大百貨とかー？」

「七不思議なのに、百もあつたら大変だよ。普通に、八尾比丘尼高校七不思議でいいんじゃないかな」

「それは長いよー。もっと短めでさー……七不思議とか？」

「それはストレート過ぎるような……七不思議大全？」

「あ、ちよつと待ってー。よく考えたら、七不思議以外にも怖い話をのせるんだから、七不思議っていうタイトルはよくないようなー」

「あ、そっか……七不思議と怖い話とか？」

「うんうん、そんな感じー。あ、耳袋とか？」

「参考資料そのままはよくないと思う……難しいね」

「ねー」

二人で話し合うが、なかなかいいタイトルが思いつかない。

「んー」

「……」

さくらは参考資料を読みながら、いいタイトルを考え、つららは目をつむり、タイトルを考えている。

「……奇々怪々とかは？」

先に案を出したのは、つららだった。

「あ、いいかもいいかもー。短いしわかりやすいしー、それならそんなに怖くなくても、不思議な話とか書いてあっても、間違っていないよねー。それにしようよー」

さくらもそれに同意し、タイトル案は『奇々怪々』という事に決まった。

「つららどづかしたー？」

「え？あ、ううん。なんでもないよ」

「？」

自分で出した案なのに、なぜか悔しそうな顔をつららがしていたのが、さくらには不思議だった。

1・2 三人寄れば文殊の知恵（後書き）

三人目は、あなたの心の中に……。

1 - 3 ・嘘は真実から生まれ

部室を後にした南奈美が、足早に向かったのは図書室ではなく保健室だった。猫猫子猫が、七不思議のネタと一緒に考えてあげる。と
いつか考えさせてー！と、言ってきたので、その相手をしに行くのだ。

「失礼します」

「来たわね奈美ちゃん。象の鼻のように首を長くして待っていたわ
」

「キリンで例えた方が早くないですか？」

「そこに気付くとは、やはり奈美ちゃん、奈美ちゃんね」

「意味がわかりません」

「褒めてあげるわ。さあ、私の胸に飛び込んできなさい！」

「遠慮します……」

猫猫は満面の笑みで両手を広げ、カモンカモンだったが、もちろん奈美は飛び込むわけがない。逆に一步引く。

「そつちから来ないならこつちから行くわ！」

「ちょ……はあ」

有限実行。猫猫はまさに、猫のごとく静かに俊敏に近づき飛び掛かり、奈美を抱きしめた。奈美は抵抗したが、すぐに諦めのため息をつく。

「充電中」

「……」

最近の子猫先生は、変だ。と、なすがまま抱きしめられるながら奈美は思う。

最近というか、授業参観日があった日からだ。その日から、今のような、抱きしめたり、頭撫でてきたり、膝枕をしてきたり、家に来ないかと誘ってきたりと、スキンシップが増えたというか、過激になってきたというか、必死というか。

その行為は、奈美以外にも行なわれているらしいことが、先日、図書室で、三途舞歌が『あの猫、本当に気持ち悪い。一緒に風呂とか、頭おかし……』と、鈴乃音鈴音にばやいていたのを偶然たまたま聞き耳なんて立てていないのに聞こえてきた事で、わかった。鈴音はそれに対し『鈴音は気持ち悪くないの』と答えていた。自分は気持ち悪いと思っていないと言ったのか、自分は気持ち悪くないと言ったのか、どっちの意味か奈美にはわからなかったが、それっきり、舞歌と鈴音は会話をやめてしまったので、真相は闇の中だ。

八尾比丘尼因幡校長にも目に余る状態らしく、廊下で正座させられ『確かに私はこの教師達に自由を約束していますが、同時に、生徒にも自由を約束しているのです。言ってる意味、わかりますか？』と、怒られている猫猫の姿を、奈美は二度みかけた。見かけた直後、『耳かきしてあげましょうか。私、得意なのよ。さあ、膝枕膝枕』と、危ない目つきで擦り寄ってきたので、八尾比丘尼の説教も効果はないと思われる。

『どうしたんですか？何か、あつたんですか？』と、結局耳かきを

されながら（なんか怖かったんだもん）聞いてみたところ、『秋つて……人肌が恋しくなるのよね』と、わかるようなわからないような返答だった。つまり、言いたくはないという事だろうと奈美は察し、理由はきかない事になっている。

「むぎゅー」

「……」

抵抗すればするほど、ホールド時間が長くなるということを経験上知っているので、奈美は猫猫が満足するまでこの状況に耐える。幸いなことに、保健室には他に誰もいないので、恥ずかしくもないし、いや、誰かいるかもしれない。と、奈美はカーテンが引かれているベットを見て思う。保健室には三つベットがあるのだが、使用中はそのカーテンが引かれている。今引かれてるカーテンは三つ。つまり全部使用中という事だ。大変珍しい。全てが埋まっているのを見たのは、初めてかもしれない。もしかしたら、ただ、カーテンを引いているだけかもしれない。そんな風に思ってしまうほど、珍しい。

「ただ引いてあるだけじゃないわ。全部埋まってるのよん」

猫猫は、奈美が疑問に思っていたことに答え、離れた。

「それは珍しいですね」

読心術だっけ。久しぶりに使ってるの見せたな。と、奈美は思いつつ、返答。

「ということとは、忙しいんじゃないんですか？出直しましょうか」

猫猫はこんなんでも、一応保険医だ。三人も利用者（患者）がいるのなら、それなりに忙しいだろう。

「いやいや、奈美ちゃん。出直してもらったら困るわ。なぜなら、あそこのカーテンの奥にいる三人は、奈美ちゃんのために呼んだんだもの」

今にもスキップを始めそうな陽気な足取りで、猫猫は一番左のベツトに向かう。

「私のために？」

「ええそうよ。奈美ちゃんは、今、七不思議を作ろうとしているんですよ？」

「はい。七不思議というか、学校の怪談でいいんですけど」

「どうせあれでしょ。図書館の住人たる奈美ちゃんは、本を参考にしようとしてるでしょ？ダメよダメ。フィクションからフィクションを作っちゃ、劣化した作品しか出来ないわ」

カーテンに手をかけ、猫猫は楽しげに奈美に語りかける。

「別にそんなに真面目に作る気もないんですけど……」

テキストに、トイレの花子さんをモチーフにしたのを書こうと思っていた。

「ダメ。やるからには、徹底的にやらないと。いい？七不思議よ。恐怖ではなく、不思議。不思議はつまり、変な事。奈美ちゃんも知

つてのとおり、この学校には変な子がたくさんいるのよ!! それを使わない手はない!! それを参考にしない手はない!! というわけで、エントリー? 1!! 橘真希ちゃんでーす!!」

猫猫は元気よく、カーテンを開けた。

そこにはもじもじとして、恥ずかしそうな表情を浮かべている女子生徒がいた。

「さあ奈美ちゃん!! この子を見て会話して触れ合って!! インスピレーションを感じるのよ!!」

「……」

周りを置いてけぼりで、一人ノリノリで楽しそうな、テンション上げ上げの猫猫を見て、ああ、お母さんの言つとおり、ちょっと子猫先生と距離置いたほうがいいのかも。と、思う奈美なのであった。

1 - 3 ・嘘は真実から生まれ（後書き）

次回、橘真希の秘密が暴かれる気がしないでもない・・・

1 - 4 . 内なる想い。垂れ流し

「さあさあ奈美ちゃん。ご覧なさいな、感じなさいな。この真希ちゃんから溢れ出す変人オーラを！ビシバシ創作意欲がわいてくるでしょ？」

「創作意欲はわいてきませんし、子猫先生の方が、変人オーラ出ます……」

南奈美は、猫猫子猫の言うことを冷静に否定し、嘆息した。何だか面倒だな。これなら枯葉君と一緒に考えればよかった。内心そんな後悔までする。

「ちよつと真希ちゃん。あなたがやる気出さないから、奈美ちゃんのテンション急転直下よ。責任取ってなんかおもしろい事しなさい」猫猫の理不尽過ぎる責任転嫁に、橘真希は、え！私のせいじゃありませんし、おもしろい事なんか無理ですよ！と、言わんばかりに首を横に力強く素早く振った。

「……子猫先生、その、橘さんに触れる前に、一つ聞いていいですか？」

真希に関わらないと終わらないだろうな。とは、すでに奈美も悟ってはいるのだが。

「もしかして、残り二つのカーテンの向こうにいる人も……」

「ええそうよ。奈美ちゃんのために呼んだ、猫猫子猫寄り縋りの変

わり者がいるわ」

「……」

猫猫の輝く笑顔を見て、うわ、帰りた。と、奈美はげんなりした。カーテンの奥でおとなしく待つてる時点で、変人度数も高い気がする。

「さて、シャイでうぶ、かつこ笑い。の、真希ちゃんは自分で自己紹介出来ないから、私が代わりにするわね。こちら、橘真希ちゃん。一年生よ。保健委員なの。」

猫猫の紹介を受け、真希は、よろしくね。と、言わんばかりの笑顔で奈美に向けた。

「二年の南奈美です。よろしくお願いします」

奈美も頭を下げ、自己紹介。

「奈美ちゃんが、この子のどこが変なんだろうとか思ってるかもしれないから、説明してあげるわね。まずこの子、入学してからまだ一度も学校では喋ってないわ！」

「一度もですか？」

確かにそれは変人だな。と、奈美は真希を見る。真希は両手を組み、頬を膨らませ、変人変人つて。失礼じゃないですか？と、言わんばかりに猫猫を見ていた。

「ええ、一度も。朝のおはようから放課後のさようならまで。生徒

も教師も分け隔てなく。誰とも喋らないの。喋れないわけじゃないのよ？ねー、真希ちゃん。めんどくさいだけなんだもんねー」

「喋るのが面倒って……」

呆れた眼差しを真希に向けるが、真希は明後日の方を向き、口笛を吹き、なんのことかなー。よくわからないなー。と、言わんばかりの態度を取っていた。

「授業とか、どうしてるんですか？」

「当てられるのが嫌で、出てないのよ。全く、困った子よ。奈美ちゃんはまだ図書室にいて、生徒と関わるからいいんだけど。この子は特別棟の空き教室を根城にしてね。完璧引きこもり。一学期になって、ようやく保健室に連れ込む事に成功しました」

猫猫はポンポンと、真希の頭を叩いた。真希は頬に手をそえ、連れ込まれました。照れるー。と、言わんばかりにクネクネと体をくねらせた。

「しかあし!!」

猫猫は真希の頭を叩くから掴むに変更。真希は、何!?!と、言わんばかりに目を大きくして動きが止まった。

「真希ちゃんの変人たる所以は、そこじゃないのよ奈美ちゃん!もちろんサイドテールでもない!」

「いえ、そこが変とは思ってません」

似合ってる。

「真希ちゃんの変人たる所以は、この腹黒さにあるわ」

「腹黒い？」

どという意味だろう。と、奈美は真希を見る。真希は、何言ってるんだろうこの人は。と、言わんばかりに呆れ顔で猫猫を見ている。

「奈美ちゃん。今、真希ちゃんが何を考えているか、当ててみて？」

猫猫はニヤニヤ笑う。

「何を考えてるかですか？そうですね。子猫先生の的外れな意見に呆れてる？という感じですか？」

真希は表情豊かで、身振りが大袈裟なので、何を考えているかわかりやすい。

「外れ〜。答えは、てめえ何ばらしてんだ。殺すぞ。ああん？でしたー」

「……………」

奈美は真希を見る。真希は、違います違います違います！と、言わんばかりに顔の前で手をブンブン振る。

「見てんじゃねえよ腐れ女。喧嘩打ってんのか？」

奈美が、読心術が使える設定がある猫猫に目を向けると、猫猫が真

希の内なら声を代弁した。

「俺が腹黒いからってなんかてめえに迷惑かけたか？かけてねえよな。かけねえように喋ってねえんだから。相手に伝わらなければ、言葉も想いも関係ねえ。意味がねえ。ないも同然だ。それとも考える事さえ罪ですかあ？違いますよねえ？思想は自由ですよねえ？っていつかてめえはいつまで俺のプライバシーを垂れ流してんだよ。黙れよ黙れよ黙れって言ってるじゃねえ。はあ？勘違いすんなよな別に恥ずかしいわけじゃねえよ。ただ世間体つてもんがあるだろうが。表情豊かで幼い感じのシャイでうぶな弱い女の子っていう、見ての通りな世間体がなあ」

勝手な事ばかり言わないで下さいよー！と、言わんばかりに涙目で猫猫を両手で叩き、違いますからね。この人の言ってる事は全然的外れですからね。信じませんよね。ね？と、言わんばかりに涙目で奈美の様子を窺い、もう黙って下さいよー！と、言わんばかりに涙を流しながら猫猫に縋り付く真希の心の内を、猫猫は代弁した。

「どう奈美ちゃん。インスピレーションわいてきた？」

「……チエンジ、お願いします」

猫猫が言ってる事が本当なのか。それとも自分が、真希の表情から読み取る言葉が本当なのか。奈美にはどっちが正しいのかわからない。確かめる方法を奈美は持っていない。猫猫の方が付き合いは長いので、猫猫の言う事を信じる事にして、もうチエンジで。

「はい、もう十分だって。ありがと真希ちゃん もう、そんな汚い言葉を女の子が使っちゃダメよ」

「……頭痛い」

保健室に来たら、具合が悪くなるって、どうなんだろう。

猫猫と真希のじゃれ合いを見ながら、奈美はそう思っていた。

1 - 4 ・内なる想い。垂れ流し（後書き）

ちやららちやちやちやちやーん。

奈美は、『喋らない女の子』という怪談のインスピレーションを得た。

1 - 5 ・高校物語に欠かせない存在

「はい、じゃあエントリーNo.2を紹介したいと思いまーす」

「……手早くお願いしますね」

すでに保健室に橘真希はいない。猫猫子猫から教室のカギを受け取り去って行った。特別棟の一室のカギらしく、それをもらう、もしくは取り返す、ためにこの茶番に付き合っていたようだ。笑顔で一礼し、保健室を後にした。猫猫曰く、「二度とてめえの面は見たくねえ」と思いながら去って行ったらしい。それが本当かはさておき、面倒なキャラだった。色んな意味で。

何はともあれそういうわけで、保健室には、元気いっぱい猫猫と、椅子に座って精神力回復中の南奈美、そしてカーテンの向こうのまだ見ぬ人達しかいない。

「はい、では、ご開帳〜」

猫猫はノリノリで真ん中のカーテンをオープン。

「ど、どうもー……」

カーテンを開けるとそこには、見るからにひ弱そうな体格で、おどおどと周りを窺うその姿からは履歴書の短所の項目には優柔不断と書くだろうなと思わせる、女性の母性本能をくすぐりそうな、小動物タイプな男子生徒がいた。

身長は、155くらいだろうか。男子にしては低めだ。奈美はこの男子生徒の顔を知っていた。名前はうる覚えである。

「奈美ちゃんも、この子は知ってるでしょ？」

猫猫は男子生徒の肩に手を置き、男子生徒を前に出す。それだけで男子生徒はビビッてる。

「ええまあ一応は。図書室にもよく来ますし……一応生徒会長ですし」

そう、この男子生徒は生徒会長である。名前は知らないが、それだけは一応知っている。

「その通り。陰が薄い生徒会の長、生徒会長よ　ほら、自己紹介自己紹介」

「え、あ、はい、すいません。僕、あの、あかしつよし明石剛です。ごめんなさい。こんなんで生徒会長でごめんなさい」

猫猫に促され自己紹介した、私立八尾比丘尼高校生徒会長明石剛は、ひたすら低姿勢であった。

「どうも。初めまして、南奈美です」

「あ、ご丁寧にどうも。すいません。ごめんなさい」

「……」

噂で聞いていた通りの人だな。と、むやみやたらに謝る剛を見て、奈美は思った。

この高校は生徒会、委員会の陰が薄い。ほとんど活動していない。

やる気がある人、やりたい人が活動して、成り立っている。奈美が図書委員でもないのに貸し出し業務をやっていたり、保健委員でもない生徒が保健室に常駐したり、風紀委員でもない生徒が風紀を取り締まったりと、自由に委員会の活動は行われている。

そんな学校なので、生徒会もテキトーである。一応生徒会長は選挙で選ばれるが、真面目に選ぶわけではない。

「ご、ごめんなさい？な、なんか僕、悪い事、し、しましたか？し、しましたよね。すいません。ごめんなさい。謝りますから、そ、そんな睨まないで下さい、ホント、すいません」

「……睨んでません」

生まれつきの目つきである。

「そ、そうなんですか？ご、ごめんなさい。てっきり、その、すいません」

その結果生まれたのが、この、人の上に立つのに明らかに向いてなげな生徒会長である。噂によると、副生徒会長、書記、会計は全て女子生徒であり、毎日この会長は愛でられているらしい。ちゃんと活動しろよ。と、ツツコムまともな生徒や教師は、この学校には少数である。

「こら剛君。謝る癖、直しなさいって先生何回も言ってるよね」

「す、すいません、あつ、すいません、うつ、ごめ、じゃなく、すいま、あ、う」

「もっとちゃんとしなきゃダメよ剛君。あなたは生徒会長なのよ？」

「うう……でも猫先生。僕は今だに、どうして生徒会長になったかもわかりませんよ！。僕みたいな弱虫が生徒会長なんて、おかしいんですよ。それなのにちゃんとしろとか、頑張れとか言われても……正直迷惑で」「歯を食いしばりなさい！」

「ごめんなさい!？」

猫猫は剛の頬をぶつた。もちろん手加減したのでそんなに痛くはないだろうが、いきなり叩かれ精神的なショックはでかい。剛は涙目だ。

「迷惑ですって!？ならなぜ立候補したの!？」

「す、すみません。だけど僕は好きで立候補したわけじゃなくて、友達が勝手に」「言い訳は聞きたくありません!」

「すみません!？」

「……」

猫猫が二度目の暴力を振り、剛が涙目から泣きに変化したのを、奈美は、あ、子猫先生の小芝居始まったな！。と、ボケーつと蚊帳の外で眺める。

「あなたは全校生徒から選ばれた代表なのよ。支持されてるのよ。どうせ自分なんか……とか言ってる……選んでくれた人達に、申し訳ないと思わないの?」

猫猫は腕を組み、先生の説教的な雰囲気醸し出す。

「す、すいません、だけど、あの……」

「何？言いたい事があるならはっきりと言いなさい」

「は、はい、すいません、あの……僕以外に立候補がいなかったから会長になったわけだから、支持とか選んだとかはごめんなさいごめんなさい言い訳言っでごめんなさい……」

猫猫が手を振りかざしたのを見て、慌てて言い訳（という名の真実）を口に出すのをやめる剛。

「うん。剛君がわかってくれて先生は嬉しいです」

「……」

猫猫は剛の頭を、子供にするように優しく撫でる。剛はまた叩かれるのではないかと思っているのか、ビクビクしながらそれに堪える。そんな二人を、子猫先生、何で小学校の校医にならなかつたんだろう。そっちの方が似合ってる気がするんだけど。と、思いながら奈美は眺める。

「わかったなら、自分が今やるべき事、わかるよね？」

猫猫はニッコリ笑った。その不自然までにニッコリな笑顔に、剛はじろじる。

「や、やるべき事ですか？え、えっと、その、すいません、あの……あの人と話す事、ですか？」

剛はちらつと、奈美を見る。目が合つと、すぐにそらす。

「違います」

違うのかよ。と、奈美は心の中でツツコミを入れた。

「ち、違うんですか？でも、さっきの人はそれで解放された気が…」

カーテンの奥で、さっきのやり取りを聞いた上での推測だろう。この人は、どんな手を使われてここにいるんだろう。と、奈美は思った。

「真希ちゃんは真希ちゃん。剛君は剛君よ」

「ええ!?!」

クリア条件が違うようだ。ショック。

「やるべき事、わからないの?」

「す、すみません」

「仕方ないわね。教えてあげる。いい?生徒会長であるあなたが今しなければいけない事はね……………文化祭を盛り上げる事よ!」

「……………」

「……………」

重大な真実を告げた！みたいにタメて、そんな事を言った猫猫。ポカーンな、生徒二人。

「……文化祭を盛り上げる事？」

先に復活したのは、奈美だった。

「そうよ奈美ちゃん。今、剛君がやるべき事は、文化祭を盛り上げる事なのよ！」

「……はあ、そうなんですか？」

何言ってるんだらうこの人。という感じの奈美。

「そうなのよ！奈美ちゃんは知らないでしょうけど、このままじゃ今年の文化祭、文芸部、将棋部、野球部、バドミントン部、卓球部、園芸委員会、くらいしか展示しないのよ！？さらに、パンフレットもなきや、ポスターもない！文化祭？ああ、そんなのもあったね。程度の認知度よ！このままじゃ過去最低の文化祭になるわ！なぜそうなるか！ずばり今年の生徒会長が剛君だから！」

「ええ！？僕のせいですか！？」

「あなた以外の誰のせいだと言うの！」

ガシッと、剛の肩を掴む猫猫。

「自分のせいでないというなら、文化祭のために今まで何をしたらか言ってみなさい？」

「え、えつと……あ！クラスと部活と部活と委員会に、文化祭のお願いのプリントを……」

どっどん小声になっていく剛。

「で、その後は？」

「す、すみません、と、特に何も……でも、申請するかしないかは自由と」「歯を食いしばりなさい！」

「ごめんなさい!?!」

「謝る暇があるなら、こんなとこにいないで、早く生徒会室に行き、準備を始めなさい！」

「ここに呼んだのは猫先生、すみませんすみませんごめんなさい何も言っていないです……!!」

「わかればいいのよわかれば」

「……」

猫猫の手が上がるだけで、怯えて謝る剛を見て、生徒会長。すでに心、折られてるな。と、奈美は思った。

「で、でも猫先生、もう二週間切ってますし、今から僕が頑張っても……」

「大丈夫。あなたが無理でも、あなたの周りは優秀だから、なんとかなると思うわ」

暗に、お前には期待してねえ。と、言っているようなものである。

「で、でも、早苗^{さなえ}さん達、文化祭とか興味ないみたいで……」

「大丈夫。あなたが、高校最後の文化祭、素敵な思い出を作りたいな。とか言えば、あの子達、やる気出すと思うから」

「で、でも、と、というかそれなら直接早苗さん達に、すみませんごめんなさいやります言います今すぐ生徒会室に行つてやりますからその振り上げた手を僕におろさないでくださーい！ーもうやだよー！ー！砂銀君のバカーー！！」

剛は泣きながら保健室から脱兎の如く逃げ出した。

「ふう、これで文化祭も、もう少し盛り上がるわね」

一仕事を終えたぜ。という感じに、猫猫は額の汗を拭うフリ。

「子猫先生。私がいる意味、ありました？」

「ん〜……見てておもしろかったでしょ？」

「……いえ、全く」

子供を泣かして楽しむ趣味は、奈美にはない。

「あら残念。でも、インスピレーションはわいてきたでしょ？」

「……いえ、全く」

1 - 5 ・高校物語に欠かせない存在（後書き）

物語において、生徒会長は二つのタイプに分けられる。カリスマか、マスコットか。

こいつは後者。辞書に、生徒会長『明石剛』が追加されました。

あと、奈美が『校舎裏の泣き虫少年』のインスピレーションを手に入れました！。

「はい、じゃあ最後の変わり者を紹介したいと思います。わー、パチパチパチパチ」

「……手早くお願いします」

一人盛り上がる猫猫子猫を尻目に、南奈美は携帯を開けては閉じて開けては閉じて、明らかにやる気がない。

「もう奈美ちゃん。やる気が感じられないぞ。そんなじゃ、メッだぞ」

「そうは言っても子猫先生。私にやる気があってもなくても関係ないですか？」

橘真希の時も明石剛の時も、奈美は側で見ているだけである。猫猫と相手にやる気があれば、もっと言えば猫猫にやる気があれば、このよくわからない状況は成り立つし、進行するし、終わる。

「ふう、やれやれ奈美ちゃん。そんなんだからあなたは友達が出来ないのよ。もっとアクティブになりなさい！」

「そういう事ですか……今は枯葉君がいるから別にいいです」

どうやら、猫猫にはそういう魂胆もあったようだが、余計なお世話である。友達いなくても、彼氏がいればよくね？理論が奈美にできつつある。

「別によくないと思うけどね。まあ今はいいわ。ほらほら奈美ちゃん。最後はあなたにカーテンオープンさせてあげるわ」

猫猫はニヤニヤと小悪党が浮かべそうな笑みで、奈美を手招きした。

「拒否権はありますか？」

「ないわ。保健室において私の指示を拒否する事は何人たりても出来ない！」

「……何か企んでるんですか？」

奈美は猫猫を怪しみながらも、カーテンに手をかける。

「企んでるとしても、奈美ちゃんのためになる事よ？」

「……よくわかりませんが、わかりました」

開ければわかるかと思い、奈美は最後のカーテンを開けた。

「……」

そこにいたのは一人ではなく二人。両方とも奈美の知り合いだった。一人は待ち疲れたのか、ベットで丸くなり眠っていた。健やかな寝顔で、もう一人の服を掴んで寝息をたてている。

もう一人はベットに腰掛け、大変な失敗をってしまったと愕然としているかのように、背中を丸めて座ってる。何故か手には空になったアイスクリームを持っている。

寝ているのは鈴乃音鈴音。

真っ白な灰になってるのは三途舞歌である。

「……」

奈美は静かにカーテンをしめなおす。

そして、してやったりと笑ってる猫猫に、目で、理由を話せと促す。まあつまり、睨んだ。

「やっぱり最後という事で、この学校でも屈指の変わり者を用意したけど、気に入らなかった？奈美ちゃんの好みだと思っただけど」

「気に入るも何も好みも何も……子猫先生、悪ふざけが過ぎます」

「悪ふざけ？何が？猫猫わかんない」

「……帰ります！」

ふざけた態度の猫猫に、勘忍袋の緒がぷつつんした奈美は、怒って帰ってしまった。

「さようなら！」

「また明日ねー」

怒りながらもちゃんと挨拶する奈美ちゃんは、いい子だなー。猫猫は微笑みながら、奈美を見送った。

「しかし、昔の友達と仲直りさせてあげようと思ったただけなのに、あんなに怒んなくてもいいのにゃー」

猫猫はパイプ椅子を引きずり、カーテンを開ける。

「舞歌ちゃんもそう思わない？」

自分の不甲斐なさに打ちのめされ中の舞歌の近くに座る猫猫。

「……知らねえよ」

舞歌は顔を上げず、吐き捨てるように答えた。

「ありやりや、舞歌ちゃんも機嫌悪いわねー……アイスクリーム」

「！」

ポツリと呟いた言葉に、舞歌は顔を輝かせて猫猫を見た。そして直後に敗北に顔を歪ませ、俯いてしまう。負けたのだ。舞歌はアイスクリーム好きの自分に、自分の欲求に負けたのだ。

「さすがにそこまで露骨だと……わざとやってるんじゃないかと思っちゃうわ」

その、パプロフの犬もびっくりな反応に猫猫は、苦笑いだ。

「でも違うのよねー。舞歌ちゃんマジだもんねー……ちょっと心配だわ。この舞歌ちゃんのアイスクリーム好きを悪用されないか」

「……お前が言うな」

舞歌は左手を握りしめ（右手にはアイスクリームがあるので握りしめないのだ）、悔しさと怒りを滲ませる。

猫猫に『ちよっと鈴音ちゃんと一緒に保健室来て』と言われた時、

舞歌は『嫌です』と即答した。実際嫌だったし、面倒だったし、行く気はカケラもなかった。だが『ほら、アイスクリームあげるから来ない?』と、猫猫に言われた瞬間、『行きます!』と即答してしまった。脊髄反射である。アイスクリームをもらえる以外の事は全てどうでもよくなるというか、考える事さえ出来なくなるのだ。

というわけで、舞歌はニコニコ笑顔で猫猫についていき、鈴音はその後ろについていき、『ここでアイスクリーム食べながら待ってねー』と言われたからおとなしくベットでニコニコ笑顔でアイスクリームを食べ、鈴音はしばらくは舞歌の足と戯れていたが、眠てしまい、食べ終わり余韻から覚め、我に帰った時、自己嫌悪で真っ白な灰になっていたのであった。

「私のはカワイイものよ。例えばの話、舞歌ちゃんが一人で歩くとするじゃない?そこに見知らぬ男の人が歩いてきて、へい彼女ハーゲンダッツあげるから遊びに来ないかい?って言われたら、どうする?というか、どうなる?」

「……………無視します」

「そこは即答じゃないと心配よねー。ねー、鈴音ちゃん?」

眠ってる鈴音のほっぺを突く猫猫。やーん。柔らか肌。

「真面目な話。あんまり教えないようにしなさいね。その、我を忘れる程のアイスクリーム好き。私みたいに優しい人だけじゃないんだからね」

鈴音の寝顔を見て頬が緩みまくりで、真面目な話と言われても危機感を感じられない。

「……だから、お前が言うな」

顔を上げ睨むが、猫猫は鈴音に夢中。

「えー。私が教えたのは真音ちゃんだけよー？その真音ちゃんが鈴音ちゃんに教えて、そしたら文芸部の方々に知れ渡った感じよね？それ以外に誰か知ってる人いる？」

「いねえよ。つまりお前が教えたからどんどん知ってる奴が増えてるんだよ」

恥ずかしい。

「私が元凶と言いたいの？しかし元を辿れば、舞歌ちゃんが自分のアイスクリーム好きを抑えきれないのがいけないのよ？ねー？そうよねー？」

「んー！」

ほっぺを突くのに飽きたらず、猫猫は鈴音の髪もくしゃくしゃと撫で回し始めた。鈴音は嫌そうに顔をしかめ、猫猫の手から逃げる。しかし舞歌の服から手は離さない。それがまた、カワイイ。

「やーん。ホント鈴音ちゃんは私のツボだわ。こんなカワイイ子を一人占めなんて、羨ましいわ。ねえねえ舞歌ちゃん。ちよっとくらい分けてくれない」

「はあ？何言ってますか？」

分けるとか、物扱いかよ。

「鈴音ちゃんカワイイもの。みんな狙ってるわよー。奈美ちゃんだつてあの様子じゃあ未練たらたらだしー。どうするのよ舞歌ちゃん。鈴音ちゃんを一人占めには出来そうもないわよー」

「別に……どうもしない」

そもそもこいつ、私のじゃないし。こいつが私以外に懐くなら、それも仕方ない。

「あらそ。なら、アイスクリーム10個で鈴音ちゃんちよーだい」

「もちろんいいです……よ……」

舞歌は、太陽のように輝く笑顔を浮かべた直後に、自分にはどうしようもない絶望を知った時に浮かべそう表情になって、肩を落とした。

「あははは、舞歌ちゃんも私好みにカワイイわよ」

いいと言ってしまった自分にショックを受けてるって事は、鈴音ちゃんを大切に思ってるって事よねー。自分で気付いてるのかしらこの子。

猫猫は「アイスクリームアイスクリームアイスクリームアイスクリーム……クソクソクソどうして私はこの程度で……いや、アイスクリームはこの程度なんてもんじゃないけど……」と、ぶつぶつ呟く舞歌の頭を撫でながら、そんな事を思うのだった。

1 - 6 ・最終兵器（後書き）

南奈美は『アンサーちゃん』というインスピレーションを得た気がしたが、絶対に使ってやんないと思ったらしいです。

また次回。

1 - 7 . 七不思議が生まれる時？

桜木さくらが、夕食後、自室の勉強机でノートを開き、ああでもないころでもない、七不思議を考えていると、ベット脇に置いておいた携帯が鳴った。

「光ちゃんからかー」

着信設定をしてあるので、画面を見るまでもなく相手がかかる。さくらは携帯を手に取り、少し考えてから、通話ボタンを押した。

「もしもし。さくらですー」

『もしもし光ですの！お姉ちゃんですか！?!』

元気いっぱいの方が携帯から聞こえる。少しうるさいので、少しボリュームを落とす。

「そうですよー。何がご用ですかー？」

ベットに腰掛け、横になる。あ、眠くなってきた。

『特に用はないですの！なんとなくお姉ちゃんとお話したくなつたんですの！ダメですかしら……?』

「ううん。ダメじゃないよー」

『よかったですわ！お姉ちゃんは今、何してたのですの?』

「今はねー。七不思議を考えてたんだよー」

『七不思議ですの?』

「うん。あのねー、かくかくしかじかなんだよー」

さくらは虹野光に、事情を説明した。

『ふえー。お姉ちゃん大変ですのー』

「大変だよー。全然思いつかない。光ちゃん、何かいいアイディアないー?」

『アイディアですか?任せてくださいですの!んー……七不思議……怖い話……ぬらりひょん……花子さん……鬼の手』

「お、鬼の手?」

ぶつぶつと聞こえる不穏な単語に、さくらはちよつと怖い。

『うう、申し訳ないですの……わたくしもあまり怖い話は好きじゃないですから、思いつきませんわ。ごめんなさいですの……』

「謝らなくてもいいよー。お話作るのって、難しいもんねー」

『うう、お姉ちゃんが優しくくて涙が出るんですの。それに比べて、ここでお姉ちゃんの力になれば今度お返しでわがまま聞いてくれるかもって考えていたわたくしは……わたくしは……ちっぽけですのー!』

「ひ、光ちゃんさりげなく腹黒いねー……」

「違うですよの違うですよのそうじゃないんですわー！これは腹黒いとかじゃないですよ！？妹的には当たり前前の考え方という噂を聞いた事はございません、むきちゃー！」

「む、むきちゃー？」

携帯の向こうで、光が悶えてる音がする。『むきちゃー！むにゃー！ぴぎゃー！』と奇声を上げながら、柔らかい物（多分枕）を叩く音やら、どこか（多分ベット）で転がってるご様子である。

「光ちゃーん。戻っておいでよ光ちゃーん。腹黒い光ちゃんでも、わたしは気にしないよー。たぶーん」

『多分って言われた！？お姉ちゃんに腹黒いつて思われて多分気にすると言われたのですのどうしましょどうしましょー！いい子のカワイイ妹でいたいのですのにー！ふえーん！ー！』

「ちよつと光ちゃん落ち着いてよー。冗談だよじょうだーん。気にしないよー」

さくらが光にそう声をかけるが、光には聞こえていないようだ。携帯からは奇声とドタバタ音しか聞こえない。

光ちゃんの相手をするのは、電話でも大変だなー。さくらは苦笑いだ。

『みにゃー！あ、松さんいいところに で そう 』

「ん？光ちゃーん？」

携帯から奇声が聞こえなくなったと思ったら、声が遠くなり聞き取れなくなった。どうやら携帯を放り出して、離れたところで誰かと話しているようだ。

「んー？松さんかー……」

松さんって、例の家政婦さん？あ、あんなに騒いでたから様子見に来たのかな？と、さくらがベットで転がりながら、考えていると。

『お待たせいたしました。松でございます』

「ふえ！？」

携帯から光ではない人の声がした。光とは正反対な落ち着いた声である。別回線に繋がったんじゃない？と思うくらいの違い。ビックリしてさくらはベットから飛び起きた程である。

『初めまして、虹野家の家政婦をしております松と申します。いつも光お嬢様がお世話になっております』

「は、はあ……どうもですー」

なんとなく姿勢を直すさくら。

『松の事は光お嬢様か、押花様から聞いておいでですか？』

「えーっと、少しだけー」

『そつでいいますか。それはうねしゅついでいいます』

「そうですかー……?」

松松子は嬉しそうに楽しそうだが、さくらは、困惑中である。何で私光ちゃんじゃなくてこの人と話してるの?という感じである。まあいつかは話してみたいとは思ってましたけど。ちょっと唐突過ぎる。

『はいはいどうぞございますね。わかっておりますよ。松にお任せください。さくらお嬢様』

「は、はい?」

お、お嬢様言われたー。こそばゆい。

『松にお任せください』

「な、何をですかー?」

『松はこう見えて、怪談が得意なのでございます。メモの準備は出来ておりますか?これからお話するは、数十年前に、松が実際に体験したものでございます』

さくらは慌ててノートを開き、松が語る怪談をメモした。

こうして、八尾比丘尼高校七不思議の一つ『包丁』が生まれた……

1・7・七不思議が生まれる時？（後書き）

おさらい。

七不思議？ 『八尾比丘尼校長』

七不思議？ 『屋上』

七不思議？ 『食堂』

七不思議？ 『空き教室』

また次回く

1 - 8 . 七不思議が生まれる時？

「なるほど。その四つは、オリジナルね」

「オリジナル……ですか？」

「うん、そう。七不思議には、その学校オリジナルの話と、パターンのがあるのよ。例えば、走る二ノ宮金次郎とか、走る人体模型とかは、二ノ宮金次郎や人体模型がある学校なら、違和感なく成立する七不思議でしょ？」

「はい。あ、だからそれを使えば……？」

「その通り。あまり変な七不思議にはならないわね。全国で語られるって事は大人気って事だから、なおよし。そうねー……トイレの○○さん。走る○○。○時○○分に○○をすると○○が起こる。笑う○○。この辺がパターンかな。ほとんどの七不思議はこれよね。オリジナルのよりは真実味が薄れるしおもしろくはないけど、いざとなったらこれにすると良いわね」

「はい。相談にのってくれてありがとうございます」

「いいのいいの。美味しい夕食のお礼と思ってね？あっ、後はそうですね。都市伝説を使うのもありね」

「都市伝説……？」

「学校で語り継がれるのは七不思議。社会で語り継がれるのは都市伝説。似たような物よ。古典的な怪談よりは参考にしやすいと思う」

よ。例えば、口裂け女とか、メリーさんとか、ドッペルゲンガーとかね？」

「……………」

氷山つららは、机にほお杖をつきながら、シャーペンを回していた。七不思議考え中である。

夕食時、お隣さん、神社神裂にアドバイスをもらったのだが、なかなか考えつかない。困ったもんだ。

「……………トイレの丸子ちゃん」

『それはないわ』

オリジナルは諦めて、それにしようかな。と、つららが思った時、『あたし』が現れた。

『丸子ちゃんって。丸子ちゃんって。クスクス。センスのカケラもないじゃない。ありえないわ。マジありえないわ。なに。小さいの？おかつぱなの？おじいちゃんが大好きなの？』

『うるさい黙れ。丸子ちゃんカワイイからいいだろ』

『あんだバカ？怖い話を考えてんのに。カワイイって。カワイイっ

て。クスクス』

『笑うな。じゃあお前なんかいい考えあるのかよ。ないだろ。ないなら黙ってる』

『あるわよ』

「え？」

私にはないのに『あたし』にはあるの？驚きのあまり、つららはシャーペン回しを失敗して、シャーペンを床に落としてしまった。

『クスクス。何をそんなに驚いてるの？あたしがあるんだからあなたにだってあるのよ。ただ。あんたが気付いてないだけだね』

『私が気付いてない？』

『そうよ。気付いてないというか思い浮かべたくないかな。そもそもあたしが出てきたのは。あんたがせっかく作るんだから。オリジナルがいいと思ったからなのよ。それがあんたの本心よ。クスクス。忘れたの？そういうのを教えるのが。あたしの役割なのよ？』

「……………」

そうだった。何だか釈然としない気持ちを抱えつつ、とりあえず、落ちたシャーペンを拾う。

『それで。どんな話』

『クスクス。教えて欲しいならそれ相応のモノをよこすべきじゃない』

い？ああそういえば。タイトルだって。あたしが考えてあげたわよね。そのお礼もまだじゃない』

『お前のものは私のもの。いいから早く言え』

『きゃー。こいつ最悪な性格してるー。クスクス。仕方ないな。教えてあげる。優しいあたしに感謝なさい。怖がりなあんだ』

「怖がりじゃない……」

『怖がりよ。怖がりだから気付かない。思いついてるのに。気付かない。七不思議を作るのに自分が怖いと思うのを遠ざけるなんて。あんだ七不思議作り向いてないわね』

『別に。怖くなくても不思議な話ならいい。七不思議だから』

『クスクスクスクスクス。嘘つき。嘘つき。嘘ばっか。あんたはそんな事思ってない。七不思議は怖くないでいけないなって思ってる。だけど怖いから怖くなくてもいって逃げて。あんだ程の弱虫。あたしは知らないな。自分の想像力にさえ。怯えるなんてね』

「……いいからさっさと言え」

『はいはい。せっかちさんね。クスクス。あの憎らしい女の助言を参考にするのは。あたしとしては遠慮したいのだけど。あんたはあいつの言葉で一つ思いついたじゃない。ふと。本当に。ふと。自然に思い浮かんだじゃない。ずっと海の底にあったものが。何かのきっかけで浮かんでくるように。ゆっくりと。確実に。確かな物が。ずっとそこにあっただみたいに。古いような新しいような。思いついたのは偶然かしら必然かしら？クスクステタケタアハハハ。想像力

は恐怖の源。リアルがあるからホラーがあるの。メリーちゃん。メリーちゃん。メリーちゃん。それがきつかけ。考えてごらんなさい。思い出してごらんなさい。メリーちゃん。そして、あたし。クスクスクスクス……」

「メリーちゃん……あたし……」

クスクス。と、頭に響く『あたし』の声に急かされるように、ふらふらと、つららは部屋の押し入れを開ける。

「メリーちゃん……あたし……メリーちゃん……あたし……メリーちゃん……?」

熱にうなされてるかのように、ぶつぶつと、『あたし』『メリーちゃん』と口にしながら、押し入れから一つの古い箱を取り出す。ゆっくり開けたその箱には、一体の古めかしい西洋人形が入っていた。

くすんだ金色の髪に擦り切れたベージュのドレス。沈んだ青い無機質な瞳が、つららを見つめてる。

「あたし……メリーちゃん……どこにいる……あたし……メリーちゃん……ここに……」

西洋人形を、大切に、我が子のように、親友のように、大切に、持ち上げて、目を合わせる。

「クスクスクスクスクス……」

その笑い声は『あたし』の物なのか『私』の物なのか。つららにはわからなかった。

こうして、八尾比丘尼高校七不思議の一つ『ワタシ探し』が生まれ
た。

1 - 9 . 三人寄れば姦しい

次の日。

「あ、つららおはよー。早いねー」

「おはよう……」

桜木さくらがいつもよりだいぶ早い時間に登校した。氷山つらら以外にはまだ、教室に生徒はいなかった。

「んー？」

つららは自分の席に座り、ぼーとした様子だ。寝起きかな。と、さくらは思ったが、それにしても目の下にくまがあるし、顔色も悪いような。寝不足かな？

「……つらら大丈夫ー？」

「あー……ん、ちょっと寝不足……なのかな？」

自分でもよくわからない。いつ寝たのか。いつあれを書いたのか。つららは淡く微笑み、話題を打ち切るように「じゃ、部室いこ」と、さくらの手を握った。

「南さんもついるかなー？」

「どつだろつね」

昨日。朝、部室に来て下さいと、南奈美に二人は言われていたのだが、具体的な時間を聞き忘れていた。携帯番号を交換していないので、時間を確認する事も出来ないの、二人はとりあえず7時30分に、部室に行く事にしたのだ。

「南さんいたー。あ、ノートパソコンだー。持ってきたのー？」

「おはよう、ごいいます……」

「おはようございます。ええ、私物です」

部室に行くと、すでに奈美があり、ノートパソコンを覗んでいた。つらら同様、目の下にくまがあり、何だか疲れたご様子である。

「南さんも寝不足なのー？」

「ええまあちよつと……色々ありまして……」

色々、嫌な事でもあったのだらう。奈美は顔をしかめた。

「桜木さんは……元気そうですね……」

奈美は、元気そうではない、つららを見て言う。つららは、曖昧に

微笑むだけだ。

「七不思議作りが、うまく言ったんですか？」

「んー。うまくいったかどうかはわからないけど、徹夜はしなかったよー。南さんとつらは徹夜したのー？」

「うん……多分」

多分そういう事じゃないかなー。という困った感じのつらら。

「ええまあ、一人なら徹夜する意味はなかったんですけど……お母さんのせいで……！あの人は本当に全く……！」

あいつが横から口を出さなきゃー！という怒り気味な奈美。拳が震えとる。

「な、何だか二人とも大変だったんだねー」

特に南さんは大変そうだー。と、愛想笑いなさくら。

「……こほん。失礼、で、二人とも七不思議は？」

怒りを抑えこんだ奈美が仕切る。

「はい、これですよー」

「……」

さくらとつらはノートを奈美に渡した。

「どうも……なるほどなるほど、よく出来てますね。特に氷山さんのは……七不思議っぽい」

ふむふむと奈美は、ノートに書かれた怪談を流し読んだ。

「え、そうなのー？つらら、どんな話作ったのー？」

「どんなつて……んー、不思議な話？さくらののは？」

「わたしのはねー、ある人に教えてもらった話なのだよー」

「ある人……？」

「では、このノートは預からせてもらいますね。放課後までにパソコンに打ち込んでおきますので、放課後にお返しします」

「あー、ちょっと待ってちょっと待ってー。ちょっと見せてー。南さんのも気になるしー。ノートパソコンも気になるしー」

「あー……私も」

「別にいいですけど」

さくらとつららは奈美の横に座り、ノートパソコンを覗きこんだり、お互いのノートを読んだりと。

「うわー、つらら。なんかこれ……不思議だねー」

「ん、さくらのは……猟奇的だね。さくらが考えたの？」

「確かにこの話は、桜木さんっぽくないですね」

「えへへへー、実はこれは松さんっていう人に教えてもらった話そのままなのだよー」

「松さん……？」

「後で話してあげるー。南さんのも読ませてー」

「ええいいですよ。ちょっと待ってくださいね………これです。ちょっと恥ずかしいですね………」

「ほづほづ………これはこれは………南さん」

「な、何ですかそのニヤニヤ顔は」

「だってねー。ねー、つららー？」

「あー、うん、そうだね。見かけによらず………カワイイ話を書くね」

「か、カワイイ！？ち、違いますよこれはお母さんがこつした方がつてうるさいから……！」

「そんなに恥ずかしがらなくてもいいのにー。南さんカワイイよー。そっかー、こういう話でもよかつたんだねー。全然思いつかなかつたよー。わたし達には縁がない話だもんねー」

「うん、逆立ちしても無理だね」

「その点、南さんは毎日が春だもんねー」

「ど、ど、どという意味ですかそれ！」

「キヤアキヤアワーワー」。

三人はまるで友達のように騒ぐのです。

1・9・三人寄れば姦しい(後書き)

まとめ。

七不思議? 『八尾比丘尼校長』

七不思議? 『屋上』

七不思議? 『食堂』

七不思議? 『空き教室』

七不思議? 『包丁』

七不思議? 『校舎裏の少女と少年』

七不思議? 『ワタシ探し』

?と?は固定。

これにて八尾比丘尼高校七不思議完成。
実際出来てるのは四つだけ。イエーイ。

また次回!

2-1 生徒会長のお話？

文化祭まで一週間を切ったある日のこと。緊急の全校集会が開かれた。

一体何だろー。と思った生徒は少なく、多くの生徒が、ああそういえば最近、賑やかだよなー。文化祭の事だろうなー。と思い、正門にアーチができ、街にはポスターが貼られ、校内も飾られ始めている。今、急ピッチで、八尾比丘尼高校文化祭、略して比丘尼祭ひくにさいは準備されているわけなのだが、クラスや部活の催しは、まだまだ少ない。恐らくその事だろう。と、一部の察しいい生徒は気付いていた。

「じ、こんにちわ」

約600名の全校生徒が集まった体育館のステージに、生徒会長明石剛が立った。

そして、原稿用紙に目を落としながら、おっかなびっくりという感じで話し始める。

「ほ、本日は、お、お日からもよく、よく、集まってくれたなこの野郎どもって、違います違いますごめんなさいそんな事思ってますん、集まってくれてありがとうございませすホントありがとうございませすだから怒鳴らないでー！！茜さんも怒鳴り返さないでー！！あ

あもう君枝さんめー……あ、何でもありませんすいません。

こ、こほん。えー、本日集まってもらったのは、えつと……え、あの、本当にこんな名称でしたっけ？なんか違かったような……あ、そうですねそうですね早苗さんが言うならそうですねそうですねなさい疑ったりしてごめんなさい！だからそんな目で睨まないでー！！ほ、本日は一週間後に行われる、だ、第15回八尾比丘尼高校文化祭……ど、ど、……ドキドキ最後の想い出作り！秋の夜空に叶う想いは何色吐息！！の事で皆さんにお願いがあります！！あーあーあー！！知りません聞こえませんわかりません！！何だその変な名前言われても知りません！！比丘尼祭とか因幡祭とかでいいじゃん言われても知りません！！文句がある人は早苗副会長に言って下さい！！何ですぐ黙るのみんな！？うう、ホントどうして僕会長なんだろう……あ、ありがとうございます頑張ります。

えつと、それですすね……どこまで読んだっけ……あ、ここだ。えー、ポスターや、アーチ、パンフレット、特設会場。あ、これは職員棟と生徒棟の中庭、鉄庭ですね。そこに作って、ビンゴや大食い大会とかを計画しています。そういう催し物は生徒会と委員長さん達と一緒にやりますので、皆さんのような役立たずにはってまた！？君枝さん悪ふざけが過ぎるよ！え？あ、そうだよ。つつい読んじやう僕がいけないよね……ん？

もう読まなきゃいいんだ。うん。マイペースだ僕。頑張れ僕。えーつと、それでですね。全体イベントについては、後日プリントを配布しますので、盛り上げていただければ嬉しいです。それで、今回お願いしたいのは、クラス展示や部活展示です。展示というか、催し物ですはい。夏休み前にお願いのプリントを部活にもクラスにも送ったんですけど、えー、残念な事に全体で10くらいしかまだ計画書が出てません。と、という事で……強制的に全てのクラス、部活動に何かしらやってもらう事になりましたってブーイングの嵐！？ごめんなさいすいませんホント「あなた達やる気のカケラもないですね」違いますー！！今の僕の声じゃないですー！！袖に潜ん

でる佐原さんですー！！え！？僕のせい！？どうしてそうなるんですか……もうホント「死ぬ」うわーん！もう本当にやだー！！」

「というわけで泣き出してしまった剛会長に代わりまして、副会長の私です。もうホント、あの子の泣き顔たまらない……の、私が説明するからあなた達、さつきみたいにふざけるの禁止という事はわかってますね。さつさと手短にこんなつまらん話し終わらせて舞台袖で会長を愛でたい私ですから、一言でも横槍入れたら、鉛筆投げる。」

よろしい。あなた達がブーイングするのもわかります。剛ラブな私も、剛が想い出を作りたいと言わなければやる気零でしたから。しかし状況は刻一刻と変わるといふ事を知れ。ピッキング技術ありの私がこれから言う事をよく聞けば、あなた達のブーイングは歓声に変わるでしょう。

発表上位三クラス、もしくは部活には賞品が出ます。三位には、近隣の食べ放題店無料券。もちろん全員。二位には、近隣の食べ放題無料券＋ネズミ遊園地の一年フリーパス。もちろん全員。を、校長がプレゼント。大学はもちろん剛と同じとこな私も、あなた達がテンション上がる気持ちはわかりますが、静まりなさい。そしてまだ早い。騒ぐの是一位の発表を、聞いてからにきなさい。

一位の賞品は、自由です。もちろん全員分。ええ。自由です。賞品を用意して欲しいと頼みに言った私も、最初は意味がわかりませんでした。自由とはつまり……何でもという事です。ええ。何でもです。それはどのくらいまで許されるのかと疑問に思った私は、も

ちろん確認しました。初めてのキスは生徒会室の私は、剛と付き合うというのもよろしいかと聞いたところ、付き合うのは相手の気持ちもあるだろうから、デートプランを用意してくれるとの解答をいただきました。あんなレストラン、あんなホテル、貸し切り、花火……ふふふ、つまり、本気な私です。金の亡者茜が、億くれと浅ましく頼んだところ万なら可との返答をもらいました。ええつまり、現なま可。わかりましたか。一位になったら、あなた達の望みを願いを、校長八尾比丘尼様は、叶えてくれるという事です。あの年齢詐称と言ってくれな八尾比丘尼校長なら、何でも叶えてくれそうな気が、しませんか？

静まりなさい。親切な私が注意事項を教えてやる。まず一つ、別にやる気が出ないなら休憩室でもいい。そうすればライバル減るかから万々歳と思ってる私は、それをオススメします。次に、不正は許しません。もしかしたらばれなきやいいと思うかもしれませんが、ばれないわけがないと知れ。何故なら不正が発覚した瞬間、失格になるからです。ライバルが減るというチャンスを、鬼の副会長な私が、見逃すわけがないでしょう？

軍資金や準備時間については、今日の昼休みまでクラス委員長と部長に再度配布します。午後に時間を取ってもらうよう頼んでおきましたから、テキストに頑張りなさい。週明けが締め切りです。

以上、学年一位の私でした。これにて全校集会を終わります」

2 - 1 生徒会長のお話？（後書き）

よかせぢはら
夜風佐原

よこてさなえ

横手早苗

よしやあかね

吉屋茜

よみきみえ

黄泉君枝

残りの生徒会メンバーをまとめて辞書に追加しておきました。あま
り出て来ないと思いますけどね。

2・2・仕切るのは面倒

全校集会の衝撃的な発表を受け、六時間目は全クラスがロングホームルームとなった。

それは、若葉枯葉達が所属する2・Aも例外ではない。

「では、始めます」

どのクラスにも二人、文化祭実行委員会がいるはずなのだが、このクラスの文化祭実行委員会が誰なのか誰も知らなかったため、担任も調べるのがめんどくさかったため、学級委員長、長野翼が進行役とまとめ役、書記は翼の隣に座っていた女子生徒（名前はまだない）が務める事となった。

「まずは、ちゃんとした出し物をするか、休憩室にするかについて決めたいと思います。何か意見はありますか」

「ちゃんとしたのをやるに決まってるだろ！目指すは一位だ！」

翼が意見を促すと、一人の男子生徒、山口君が席を立ち、拳を高らかにあげた。

すると数人が「そうだそうだ！」「何でも叶えてくれるなんて凄くない？これ凄くない？」「チャンスがあるなら挑戦すべきだ！」と声をあげ賛成した。

声を上げないまでも、多くの生徒が近くの友人達と「何お願いするー」「私はブランドのあれ」「二位や三位でも十分だよな」「焼き肉とか。十分過ぎ」と口々に話している。もちろん一部の生徒は、この騒ぎから一歩引き、冷めきっていた。現代っ子め。

「どつやら出し物をしたいという人が多いようなので、休憩室はやる事にします。反対意見は………ないようですので、次に、具体的に何をやるか決めたいと思います。何か意見はありますか」

「やっぱ王道喫茶店だろ！」

先ほど同様、山口君が最初に声を上げ、クラスの色んなところから意見が出る。

「喫茶店は他のクラスもやるんじゃないか？」「料理とかどうすんだよ」「そんなの後で考えればいいでしょ」「ただの喫茶には興味ありません。メイド喫茶に賛成する奴は俺のところに来い」「誰か言うと思った」「俺も」「僕も」「私も」「王道といえばお化け屋敷を忘れてもらっちゃ困るぜ」「屋台とかはどうなの？」「焼きそばとか？」「タコ焼きとか？」「お好み焼きとか？」「備前焼きとか？」「最後のなんか違うね？」「ゲーム系はどう？」「ダーツとか？」「ルーレットとか？」「スイカ割りとか？」「占いとか？」「将棋とか？」「将棋は将棋部がやるでしょ」「演劇とかどうよ」「一週間とか？」「無理だろ」「諦めたらそこで試合終了だよ！」「言うと思った」「俺も」「僕も」「私も」

「……」

クラス中から聞こえてくる意見を、急遽書記に任命された女子生徒が、無言のまま黙々と黒板に書き出していく。有能な名無しである。

『喫茶店』

『メイド喫茶』

『お化け屋敷』

『タコ焼き』

『お好み焼き』

『焼きそば』

『備前焼き』
『ダーツ』
『ルーレット』
『スイカ割り』
『占い』
『将棋』
『演劇』

「……」

なぜかメイド喫茶だけ目立つように書き出された候補を、翼は腕を組みながら、眺める。そしておもむろに『演劇』『スイカ割り』『備前焼き』を消し、『ジャンケン大会』と、付け加え「皆さん静かにして下さい」

「この中から決めたいと思います。演劇とスイカ割りと備前焼きは無理っぽいので削除しました。文句は……ありませんね。では、残りの候補からやるものを決めたいと思います。多数決は不公平感があるので、代表同士のジャンケンで決めたいと思います。反対意見や文句は聞きません。各々の代表は前に出てきて下さい」

クラス中から「代表……？」という疑問の声がもれる。

「代表は長野、お前じゃねえの？」

「クラスの代表はね、山口君。でも、出し物の代表までやる気はない。だから、各々提案した代表がこれから先は引っ張っていつでもらうよ。やる気がある人がやった方が、いいだろ？というわけだから、各々提案した代表者、代表をやってもいい人は前に出て下さい。まず、喫茶店」

先ほどまでの賑やかさが嘘のように静まり帰るクラス。誰一人乗
りでる事はなく、「山口、お前がやれよ」「い、いや、俺は部活の
もあるからな」という会話が小声でなされた。

「次、メイド喫茶……次、」

誰も、代表なんてやりたくはないようだ。その後も翼が代表出てこ
いと呼びかけても、誰も『私がやります！』とは言わなかった。

「という事で、ジャンケン大会に決まりました。部活等がなく暇な
人は、放課後残って下さい。じゃ、終わり」

というわけで、翼提案翼代表で2 - Aは文化祭においてジャンケン
大会をする事になった。

やる気は一切、ない。

2・2・仕切るのは面倒(後書き)

こんなもんだよ人生は……。

2 - 3 ・居残りし七人

尻つぼみで終わった六時間目の、2 - B文化祭計画。

クラス委員長でジャンケン大会のリーダーである長野翼が『放課後暇な奴は教室に残れ』と呼びかけたわけだが、残ったのは、翼を入れて、七人だった。暇な奴はもつというと思う。

その中には、先ほど書記に任命された女子生徒と、若葉枯葉と三途舞歌と鈴乃音鈴音の姿もあった。

枯葉と鈴音は部活もなくバイトもしていなかったので残ったので残ったいい子ちゃんのだが、舞歌は鈴音に引き止められ嫌々残ったやる気なし子ちゃんである。

「これだけ集まってくればいい方かな。始めようか」

翼は教壇に立ち、そう言った。集まった他の六人は、各々好き勝手なところに座っている。連帯感というものがない。

「始めようかって委員長。何すんのよ」

集まった一人、茶髪でけだるそうな女子生徒が言った。

「そうだね。具体的な事を決めようと思う。あ、先に言っておくけど、準備はこのメンバーだけでやろうと思うから。ここにいない人は期待するだけ無駄だろうからね。悪いけど、よろしく」

「だと思ったよ。すでに残らなきゃよかったと後悔。あんたもそう思わない？つてか、あんた誰。クラスにいた？」

女子生徒は近くに座っていた枯葉に、とても酷い事を言った。「…」

…若葉枯葉「枯葉は涙を堪えながら答えるのだった。

「ふーん。すでにこのクラスで二年経ってんのに気付かなかった。転校生？」

「違う、最初からいた」

「あつそ。で、準備って何すんの？」

枯葉を傷つけるだけ傷つけた女子生徒は、本題に戻った。枯葉涙目。

「賞品の買い出しと、メンバー分けが主かな」

「買い出しとか。すでにやる気なし」そう言って、女子生徒は、机に突っ伏した。

「あー、そもそもどんな風にするつもりなんですか？」

先ほど、急遽書記に任命された女子生徒が聞いた。

「ジャンケンで買った回数によって、賞品のグレードが上がるシステムにしようと思う。一人なら安い菓子、二人なら缶ジュース、三人ならペットボトル、四人ならペットボトルと缶ジュース、五人ならペットボトルと袋菓子。参加賞は飴かな」

「お金は取る計画？」

「無料か、十円か。どっちがいい？」

「十円なんて、すでに無料みたいなもんでしょ。無料でいいよ」

「私もそれで」

「俺も……」

茶髪と書記、そして枯葉がそう答え、先ほどから携帯を弄って、話しを聞いているのかさえ怪しい男子生徒も頷き同意した。

翼は「三途さんと鈴乃音さんもそれでいいかい？」と、窓際でポーツとしている二人に尋ねた。

「どうぞ」勝手に……」

「鈴音は勝手にするの」

「ちょ、お前に言ったんじゃねえよ！やめんか！」

舞歌は自分の顔に伸びてきた鈴音の手を叩く。何する気だこいつ。

「じゃあ、無料って事で」

じゃれ合い始めた舞歌と鈴音は無視して、翼は進める。

「準備するものは、賞品と、クーラーボックスと……暗幕かな。机や椅子を端に寄せて、中央で暗幕引いて隠せば、まあ、それなりに見えるだろうし」

「あ、私、クーラーボックス家にあります」書記が手を上げた。

「僕の家にも一つある。もう一つくらい欲しいかな……」翼は教室にいる書記以外を見回した。

「私が持ってたらずでに名乗りあげてる」茶髪がそう答え、携帯が首を横にふる。

「若葉君と、三途さん達は？」

「あー、どうだったかな……」

さて、どうだったかと枯葉は思い返してみるが、記憶にヒットしない。しかし自分の記憶はあまりあてにはならないと知っているので、どうだったかな。

「鈴音の家にクーラーボックスはあるの？」

「だーからっ。私に聞かれてもわかるわけないでしょうが」

「舞歌の家にクーラーボックスはあるの？」

「私の家にはありませんよ」

「じゃあ鈴音の家にもないの？」

「なぜそうなるの……」

「鈴乃音さんと若葉君は、土日で調べといて。月曜日教えてくれればいいから」

枯葉の様子と、舞歌と鈴音の会話を聞いて、翼はそう指示を出した。「わかった」と枯葉が答え、「鈴音は何を調べればいいの？」と鈴音が舞歌の顔に手を伸ばしながら尋ね、舞歌はため息をつきながら

「やめんか」と言った。

「買い出しは、前日に誰かに行ってもらおうとして、問題は当番決めだけど……さすがに当日もずつとこの七人というのは、嫌だよな」

「ここで頷く奴はすでに青春を放棄してる」茶髪が嘲笑を浮かべていった。

「とりあえず、受付とか見張りは僕がずつとやるから」

「委員長はすでに青春を放棄してんの？」

「いや、僕はジャンケンをやる事、見る事に青春を感じるんだ」

「すでに常人の域を突破してたし。なあ、転校生？」

「転校生じゃないって……」

けだるげに同意を求めてきた茶髪を見て、何だこいつ。変な奴だな。と、枯葉は自分を棚に上げ思った。

「当番決めて気をつけないといけない事は、部活動等とブッキングしない事と、交友関係か……面倒だな」

「交友関係、ですか？」書記が首を傾げる。

「そう。仲良い人がいないと、当番組んでもサボるだろうから。かといって、好きな時に好きな人と来いといったところでまとまるとは思えない」

どうしたもののか。

翼が悩んでいると、「そうなるだろうと思って私はここに残ったのさ。すでに集まってる転校生以外も私のとこに来な」と、茶髪が言った。「だから転校生違う」と、枯葉が言ったが無視された。

翼と書記と携帯は、言われた通り茶髪の近くに集まったが、「舞歌の耳たぶも柔らかいの?」「柔らかいからって何なんだよ!」と、じゃれあう二人は集まらない。

「ほら、さつさと三途達も来いって。お前ら来ないとお披露目タイムが始められない。いいもの見せてやるから」

「いいものとはなんですか?」鈴音が食いついた。

「いいものはいいものだし」

「鈴音にはわかりません」

だからいいや。と思ったのか、鈴音は舞歌の耳たぶをまた狙い始めた。「キモい!」舞歌はそんな鈴音から逃げるように、茶髪の近くに移動。舞歌を追って鈴音も。これにて七人全員集合。

「よしよし。それじゃあお披露目タイムだぜ」

茶髪はニヤニヤと、ふにやけた笑みを浮かべながら、鞆から一冊の大学ノートを取り出し、机に置いた。

「あ、これが例の……?」書記が物珍しげにそのノートを見る。表紙に何か書いてあるわけでもない、変哲もないノートのだが、書記にはそのノートが何かわかってるようだ。

「そうか。すでに松島と田所はこれ知ってたか」

書記、まつしまつきこ松島月子と、携帯、たどころあさきり田所朝霧は頷いた。

「まあいいか。知ってる人はすでに知っている、知らない人は今知る。つまり知らない人はすでに誰もいない。これが私の秘密兵器。知る人ぞ知る、『棗友人ノート』さ」

誇らしげに、茶髪、なつめなつめ夏目棗はノートを叩いた。

2・3・居残りし七人（後書き）

一芸に秀でたキャラの使い難さと強さは異常。

『棗友人ノート』なつめなつめ夏目棗

『メイドスキー』まつしまつき松島月子

『恋愛データバンク』たにこらあさきり田所朝霧

を、辞書に放り込んでおきました。

『棗友人ノート』と『恋愛データバンク』に関しては、次話で説明
されますが、先に辞書を読んでもいいですよ。

2 - 4 ・友人ノートと恋愛バンク

「ゆ、友人ノート？」

「そう。友人ノート。このノートにはすでに、この学年の生徒の友人関係が全て書かれてる」

友人ノートという響きに、興味深々な若葉枯葉に対して、夏目棗があくび混じりに答えた。

「見てもいいかい？」

「どうぞ〜」と、棗は長野翼の手元にノートを滑らした。

翼はノートを開き、「……へえー」と感心したような呟きをもらす。隣に立っていた松島月子も、横から覗き込んだ。興味深々である。

「本当は誰にも見せないんだけど。まあ、ここにいる奴らは口堅い……というか、喋る奴がいなさそうだからいいか。な、転校生？」

「だから転校生じゃ……いや、どどういう意味だよそれ」

「そのノート見ればわかるし」

にやにやと笑う棗に、枯葉は不気味さを感じた。

「あ、見ますか？」

「どうも」

翼から月子へ、そして月子から枯葉へノートが渡った。

ノートはクラス別、男女別に書かれているようだ。

ページの上の余白に、クラス名が書かれており、その下には、恐らく名簿順だろう生徒の名前と部活が縦に並んでおり、その横に、また別の名前が書かれている。横に書かれているのが、友人という事なのだろう。たまに、横が空白な名前があり、涙を誘う。

「三途達は興味ないわけ？」 棗が興味なさげな二人に聞いた。

三途舞歌は「興味ないです」ときっぱり切り捨てた。

「棗友人ノートとはなんですか？」

そして鈴乃音鈴音はそう聞いた。

「ん？だから、友達関係が書かれてるんだって。正確さには自信があるよ。どうやって調べてるかは、企業秘密」

「友達関係とはなんですか？」

「友達関係は、友達関係だよ。いやいや、本当に変な奴だねえ鈴乃音鈴音は。この友人ノートの名前の横に、名前が書かれる事はないと思っていたのに。ねえ、三途？あんたよく友達やってるよねえ」

「友達やってるつもりはありませんよ」

棗のにやにや笑いがうざったいのか、舞歌は舌打ちをした。そんな舞歌の隣で「鈴音は変な奴なの？」と鈴音が舞歌の服を引っ張る。

「いやあ、強がられても。すでに友人ノートに書かれてるからね。あんた達は友人なんだよ。このノートに書かれてる事は、正確無比

で絶対なのさ」

「はぁ？本人が否定してもですか？」

「本人が、否定してもさ」

「……頭おかしいんじゃないですか？」

「おかしいかもね。おかしくないのは、ノートだけ。それほど、このノートはすでに正確無比なモノになってるわけ」

「いや……正確無比と誇ってるってこ悪いんだけど」

枯葉が棗と舞歌の会話に口を挟む。

「間違ってたんだけど」

「いや、だから間違ってるわけがないし」

「いや、間違ってるから」

「どこが間違ってるか言ってみ」

「俺のところが空白になってる」

枯葉は自分の名前が書かれてる部分を指差す。そこには『若葉枯葉（無）』としか書かれていない。その横は空白。泣ける。

「いや、間違っていないっしょ。だからこそその転校生だし」

「転校生じゃねえし！間違ってるし！」

「どこが？」

「だーかーらー！俺にも友達はあるっつー事だよ！」

枯葉のその訴えを聞き「ハッ」棗は鼻で笑い「え……？」「月子はビツクリし」……「朝霧は初めて携帯から目を離し「何時間交代にするか……」翼は話を聞いておらず「鈴音が変なら舞歌も変なの？」だからどうしてそうなる……」二人は相変わらずである。

「すまないねえ、転校生、って、すでに飽きてきているから若葉と呼ぶか。すまないねえ、若葉。さすがの友人ノートも、Imaginary Companionは把握してないんだよ」

「い、いまじにーこんばにおん？」

「わかりやすくいうと、想像上の友人という事だよ。子供には多いらしいんだけど、この年になれば、すでに消えてるのが普通なんだけど、たまにいらっしゃるらしいよ。自分にしか見えない友達がいる奴」

「へえー、なるほど……って、想像上の友人じゃねえよ！リアルにいるわー！」

「おお、ノリツッコミが出来るとは。やるねえ。何で友達いないの？」

「俺が聞きてえよ！ってかいるしー！」

「想像でしょ？」

「ちげえよ！」

「仕方ないなあ、すでに勘違いと決まってるから聞くのも面倒だけど、誰か言ってみろし」

「み、南奈美さんだよ」

枯葉の自信なさげなその台詞を聞き、「アハハハハ！」棗は爆笑し「え……」月子は驚き「……」朝霧は鞆からもう一つ電子機器を取り出し「もう帰っていいですかこれ」「いいよ。月曜日の放課後も一応残ってくれたら嬉しい。鈴乃音さん、クーラーボックスの件よろしく」「鈴乃音さん、クーラーボックスの件よろしく」「三途さんよろしく」「帰る」翼とそんなやり取りをし、興味なしの舞歌と鈴音は帰宅した。

「何で笑う!？」

舞歌と鈴音が帰宅した事にも気付かず、枯葉と棗達のやり取りは続く。

「い、いや、だって、まさか、み、南奈美って、お、女だし、そ、そこまでの勘違いって、あは、アハハハハ!!」

さっきまでの怠そうな様子からは想像出来ない程の爆笑。腹を抱えて、涙を浮かべる。心の底から、おかしいようだ。

「そ、そこまでおかしい事か……?」

「あ、あのー」枯葉が困惑していると、月子が恐る恐るという感じ

で枯葉に声をかけた。

「若葉さんは知らないと思いますけど、夏目さんは、異性の友情を認めてないんですよ。だからあんなに笑ってる……んだと思います、はい」

「み、認めてない？」

「そうだし」

涙をぬぐい、笑いを堪え、棗が言う。

「異性の友情なんてありえないし。そんなの信じてる奴は、人間つてもんをすでに履き違えてるし。異性の間にあるのは愛情だけだし。異性が仲良くするのは子孫を作るためだけだし。私達は友達なんですとかいう男女は、恋人と名乗りたくない恥ずかしがり屋か、友情も愛情も知らないまだガキを作れねえガキだし。すでに私達はガキを作れるんだから、異性間の友情なんて、ありえない」

「……いや、暴論じゃね？」

枯葉の率直な意見を言い、月子は苦笑いを浮かべ、翼は友人ノートを見て組み合わせを考えており、朝霧は鞆から取り出した電子機器、『すまーとふおん』を机の上に置いた。

「つまり、若葉。南って奴とあんたは友達じゃあないわけ。二人の関係は勘違いか、恋人だし。友人ノートに間違いなし」

「あの一、私もお二人は恋人同士だと思ってたんですけど……」

「なに!?!」月子の言葉に、枯葉は驚愕した。一般人から見ても!?!

「だって……二学期になってから、お二人頻繁に一緒にいますし……一緒に帰ったりもしてますよね。夏休みに、お付き合いを始めたのでは？」

「いやいやいやいやいや！？待つて！？何で！？一緒に帰ったり一緒にいるのは友達だからだからね！あいつがなんと言おうとも誰がなんと言おうとも友達だからね！？」

「勘違いや強がりがそこまでいくと、見苦しいし。田所。見せてくれるわけ？」

「……ああ。間違いは訂正しなければならぬ」

朝霧は初めて口を開いた。そして『すまーとふおん』を操作し、あの画面を出し、机にまた置いた。

「恋愛データバンクはすでに知ってたけど、実物を見るのは初めてだし」

「恋愛データバンク？」

なんじゃそりゃ。と、枯葉が画面を見る。画面の上部には『恋愛データバンク』と表示されており、その下には『クラス：』『氏名：』という、入力出来る項目が表示されていた。

「こ、これが噂の！？見てもいいですか！？」

月子が目を見開き食いついた。

「他言無用を約束するなら」

「もちろんです！こ、この中に、学年全員の恋愛事情が……」

生唾を飲み込み、骨董品を扱うかのように『すまーとふおん』を手に取る。翼も横から覗きこんだ。枯葉も覗きこむ。

「クラスを入力すればクラス全員。全員を知りたくなければ、個人名を入力すればいい。名前の横に表示される数字は、交際期間。A B Cは、言うまでもない」

「な、なるほど……へー、え、あ！そうだったんだー……あの二人が……え、もうここまで？」

月子は画面を見て、感心したり、驚いたり、赤くなったりと、百面相である。

「松島の食いつきぶりに、私はすでに引き気味。委員長と松島はすでに知ってるみたいだけど、若葉は知らないみたいだから、田所、説明してやれば」

「それは恋愛データバンクだ。二学年全員の恋愛関係が入力されている。調べ方は企業秘密だが、情報は正確無比。間違いは、ありえない」

「何だそりゃ……」

何だそりゃである。

「……あれ？」画面を操作していた月子が首を傾げた。

「若葉さんのところ、空白ですけど……」

「すでに借りたし」

棗は月子の手元から『すまーとふぉん』を奪った。画面には、『若葉枯葉』としか表示されていない。

「どついう事だし田所」

「どついう事も何も、そついう事だ夏目。若葉枯葉に恋人はいない」朝霧のその言葉に「ありえないし！」棗は机を叩き「え、でも……」月子は枯葉を探るように見て「ようやくわかつてくれる人が！」枯葉は喜び「データバンクとノートがあれば、当番決めは大丈夫そつかな」翼は一人頷いていた。

「じゃあ何か田所。若葉と南は、ただの顔見知り程度だと。お前はそつ言いたいのか」

「いいや違つう。俺の見立てでは、若葉枯葉と南奈美は、友人関係にある」

「よく言つてくれた！」

枯葉は朝霧の肩を掴み、感謝した。朝霧はすぐにその手を弾き、二度と触るな。とついうような目で枯葉を見た。枯葉シヨック。

「間違いは正すと言つた。間違つてゐるのは俺のデータではない、お前のノートだ。夏休み明けは関係が変化しやすい。調査を怠つた

な、夏目」

「ハッ。何を言うかと思っただら。調査は常に万全だし。間違ってるのはお前の方だ。若葉と南はすでにキスマで済ましている。それで付き合っていないと判断するとは、田所バンク。すでに落ち目か」

「いやちょっと待て何でお前それを知って」「その事実は把握しているが、それは事故のようなものだ。しかしそれを踏まえても、若葉枯葉と南奈美は恋人関係にはない判断した。南奈美の、片思いだろう」

「何でお前も把握してんの!？」という枯葉の言葉を無視して、朝霧は『すまーとふおん』を操作し『南奈美：若葉枯葉に片思い（A）』と表示されている画面を棗に見せる。

「これだからムツツリスケベは困るし。明らかに若葉も好意を抱いてるし。つまりこいつらは恥ずかしがり屋の出来たてカップルだし。友達ではない。私のノートに難癖つけるのは、やめる」

「ムツツリスケベだが何か問題あるか。難癖をつけているわけではない、事実を述べているだけだ。前々から思っていたが、お前のノートは不完全だ。正確無比を豪語するなら、異性間の友情を認めるべきだ。何を意地になっっているのか知らないが、このままではずっと、不完全なままだぞ」

「自分の事を棚に上げて、好き勝手言うじゃないか田所。貸せし。お前のバンクが間違ってる事を教えてやるし」

棗は朝霧の『すまーとふおん』を操作し、ある画面を見せた。

「冬季冬美か。こいつに彼氏はいないぞ」

棗が出した画面には『冬季冬美』としか表示されていない。

「確かに冬季に彼氏はいないし。が、彼女ならいるし。見やがれ田所。すでに私のノートは、冬季と夏季を友人とは認めてないし」

棗のノートには確かに『冬季冬美』と『夏季夏美』の名前の横には、互いの名前が書かれていなかった。

それを見て「ふん」朝霧は鼻で笑い「やっぱりそうだったんですか！」月子はテンションが上がり「え、何が？今どういう状況？」枯葉は話しにいまいちついていけず「さて、もうそろそろ帰りたいたいけど……」翼はそろそろお開きにしたい。

「つまり夏目。お前はあの二人が恋人同士だと言いたいわけか。だから俺のデータが間違っというのと？」

「すでにそう言ったと私は認識してるし。夏休み明けから、明らかにあの二人の情は友情の域をこえてるし。少なくとも、冬季の情は、すでに親友の括りにさえ入らないし。調査を怠ってるのはお前の方だ」

「くだらない。自分のミスをこちらのせいにするとは。同性の間に恋愛関係はありえない。愛を感じる事はあるだろう。ただしそれが恋愛に至る事はない。もし、俺達は、私達は、恋人同士だ。と言ってる奴らがいたら、それはただの勘違い、愛を履き違えてるだけだ。もつといえは……病気だ。異常だ。病院に行く事をオススメする」

「相変わらず視野が狭いし。愛の形は無限だし。同性間の恋愛は、

すでに認められていると言っても過言ではないし。なんだっけね。ああそつだ。お前のデータは不完全だ。正確無比を豪語するなら、同性間の恋愛を認めるべきだ。何を意地になっっているかは知らないが、このままではずつと、お前のデータは不完全なままだぞ。だっただっけか？」

「……言うじゃないか夏目。いい機会だ。俺は常々、お前のノートの不完全さが気に食わなかった。来い、決着をつけてやる」

「それはこつちのセリフだし。私のノート以外に、そういうのがあるのは、気に食わなかった」

棗と朝霧は睨み合いながら、教室を出ていった。『友人ノート』と『恋愛バンク』を置いたまま。

「何だあいつら……変人だ」

枯葉のまとめた感想である。

「確かに」翼は枯葉に同意し「これは……借りていてもいい、という事かな」『友人ノート』と『恋愛バンク』を手に取る。

「処分してもいいんじゃない？個人情報を守るために」

「だ、ダメですよ！これは宝なんですから！特に恋愛データバンクは、恋する乙女の強い味方なんですよ！？」

「お、おお……冗談です、すみません」

月子の気迫に、枯葉謝罪。怖い。

「確かに、こんな貴重品をここに置いていくのはよくないかな。僕が預かっておこう。土日で当番決めておくから。とりあえず、今日は解散。月曜日の放課後も、よろしく」

翼はそう言つて、『友人ノート』と『すまーとふおん』を鞆にしまひ、「じゃ、さようなら」教室を出ていった。

「あ、あのー、若葉さん？」

なんか疲れたあ。帰る時は部室か図書室寄れとか言われてたけど、寄らずに帰ろう。と思いながら、枯葉が帰宅の準備をしていると、一足先に帰宅の準備を終えていた月子に話しかけられた。

「本当に、南さんとは付き合つてないんですか？」

「……付き合つてねえよ。友達だ友達」

月子は納得いかないが本人が言うなら、というように「そうですかー……」と言つた後「あ、あの、えつとですねー……」言つべきか言わないべきか悩むように、目を泳がせ始めた。何だこいつ。と枯葉は怪訝な目で見る。

「あ、あのー！」

「は、はい!？」

そして意を決したのか、月子は枯葉に近づいた。恥ずかしいのか、顔は赤いが、目は力強い。覚悟を決めたものの目だ。なんか怖い。

「若葉さんは、誰にも言わないと思うから、私、言います！せつかの機会だから、言っておこうと思います！」

「な、何をですか!?!」

「南さんはロングメイド服がぜつつっつたい似合っと思っの!?!」

「……は？」

メイド服？

「必要になったら私に相談してください!?!私、メイド服に関しては力になれると思うから!」

「……メイド服が必要になる時って、なに？」

混乱している枯葉に、月子は一切説明せず「さようなら!相談待ってるから!」と言って早足で教室を出ていった。

そして、教室には、色んな事に取り残された枯葉が一人。

「……………このクラス、変人しかいないのか」

枯葉が二年間いて、ようやく気付いた、事実である。

2 - 4 ・友人ノートと恋愛バンク（後書き）

というわけで、変なクラスメート達でした。

メイドについてはさだかではございませんが、友人ノートと恋愛バンクはこれからも出てくるに違いない。大変便利なアイテムだし。

また。

3 - 1 . 文化祭前日く文芸部く

賞品が出ると発表される前は、一部の生徒が文化祭に向けた準備を行っていたわけだが、今は違う。多くの生徒達が文化祭に向け、全力で準備を行っていた。

狙うは一位。お前らそんなに出来る子だったのかよ。と、教師や近隣住民が驚くほどの手際で、高校は彩られた。もちろん、一部の生徒は、めんどくさ。そんなに熱くなってどうすんだよ。一位なんざ取るわけねえだろ。と、冷めた眼差しで準備に走る生徒を見ていたのだが、逆に、準備に走る生徒達も、ハッ。達観しやがって。あいつらはああやって、これからも色々諦めて生きていくんだろってな。と、見下していたのだから、どっちもどっちだろう。

そんなこんなで文化祭前日。授業は午前で終わり、午後は明日の文化祭準備に使われる事となった。

至るところから、最後の仕上げ、最後の準備を行う生徒達の声が溢れ、八尾比丘尼高校は活気に満ちていた。

それは高校内だけに留まらず、市内全体も活気に満ちていた。至るところにポスターが貼られ、至るところでビラが配られていた。その気合いが入ったポスター、ビラまで配るといふ生徒達のやる気と熱意を感じ、どうやら今年は、あの、変な高校がやる気出して文化祭するらしいぞ。そいつは見物だな。明日は天気もいいし、行ってみるか。そう思わずにいられる奴がいたら、人生考えなおせ。そんな勢いだった。

祭り。

まさに、市を上げた祭りになる予感がするこの文化祭。青春を謳歌しようとする学生達にとって準備とは、盛り上げるためとは別に、楽しむための準備も欠かせない。

同性と一緒に楽しみ友情を高めるか、異性とと一緒に楽しみ愛情を深めるか、新たな出会いを模索するか、それとも祭りを盛り上げる事に、裏方に徹するか。
それは人それぞれ。

ただし、その準備を怠れば、忘れれば、祭りは途端につまらない物となり、ああ、準備をしている時の方が楽しかったな。

そんな事にも、なりかねない。

「出来ましたね」

「出来たねー」

「うん」

文芸部部室。

円卓に山積みされた、今日届いた文芸誌『奇々怪々』を見て、南奈美、桜木さくら、冰山つららの文芸部三人は、達成感に包まれていた。感慨深い。

「ギリギリでしたね」

「うん。南さんお疲れ様です。南さんが頑張ったおかげだよー」

「うん。お疲れ様。助かりました」

さくらとつららは、一番頑張っていた、というかほとんどを一人で取り仕切っていた奈美に拍手を送る。家族以外から褒められたり、勉強以外で称賛される事が少ない奈美は「い、いえ、子猫先生がほとんどやってくれましたから……」照れた。

「こ、こほん。それより、明日の確認をしましょう」

わざとらしい咳ばらいで、話題を変えようとする奈美の顔はほのかに赤い。さくらは最近、文化祭の準備で一緒にいて気付いたが、この人はなかなかカワイイ性格をしている。さくらは小声で「南さんって、カワイイよね」と、つららに言うと「ん、そだね」「つららは困ったような曖昧な笑みで同意してくれた。

「明日の文化祭は、十時から一般公開が始まります。九時から開会式ですが、それに出る予定はありますか？」

「一応出る予定だよー」

「私も」

「そうですね。まあ、準備する事もないので構いませんが、一応、開会式が始まる前に、一度ここに顔を出して下さい。最終確認しますので」

「はい」

「ん」

「それで……とりあえず、最初の当番はお二人に任せてもいいんですよね。クラスの方は、大丈夫ですか？」

「うん。二人共、一日目は午後からだから平気だよー」

「そうですね。では、十時から、二時間よろしくお願いします。その後は、私が代わります」

「一人で大丈夫なのー？」

さくらの言葉を受け、奈美は言いくそうに目を逸らし「……いえ、枯葉君に手伝ってもらうつもりなので平気です」と、言った。するとさくらは、「やっぱりー！」と、目を輝かせた。こういう反応をさくらがするから、あまり言いたくなかったのだ。

ここ最近気付いたのだが、どうもさくらは恋愛に興味があるらしく、奈美が枯葉の話をする、テンションが上がる。それは嬉しいような、恥ずかしいような。困る。奈美よりはるかに付き合いが長いつららも、さくらのそういう一面を知らなかったのか、そういう時は苦笑いを浮かべている。

「……それで、あなた達の後は三途さん達、ですよーね」

「はい、頼んでおきました」

というわけで、さくらがそれ以上、話を広げないように、つららと奈美は話しを進めた。

「私が十四時まで、三途さんと鈴乃音さんが十六時まで、一日目の終わりは十七時です……後の一時間は三人でやりましょう。二

日目の相談もかねて」

「わかったー」

「はい」

「では……机を空き教室に運びましょうか。縦にすれば、ギリギリドアからも出ますし」

文芸誌の販売は、ここ、文芸部部室で行われる。販売には円卓はあまり向いていないので、この机は他所に運び、別のところから長机を運びこむ作戦となっていた。

というわけで、三人で協力して、円卓を転がして同じ階の空き部屋へ。ついでに使わない椅子も運び出す。

そしてまた三人で、生徒会室から長机を拝借し「疲れたー」

「はい、これで準備完了です。お疲れ様です」

「お疲れ様ー」

「お疲れ様でした」

「私はまだ用事があるので、先に帰っててもいいですよ。明日はよろしく願います。あ、一部……じゃなくて、家族の人の分も持つていっていいですよ」

「はい。あ、そうだ南さん」

母親の分の文芸誌を手に取りながらさくらが聞く。

「何ですか？」

「あのねー。つららと昨日話しててふと思ったんだけどー。文化祭中にトラブルが起きた時のために、メールアドレスを交換しておくべきな気がしないー？」

「……交換しておくべきですか？」

「しておくべきだよねー。ねー、つららー？」

「ん……かな？」

「……そうですね」

「そうだよー。いちいち探すのも大変だしー、校内放送するのも恥ずかしいしー。ねー、つららー？」

「……ん」

「そうですね……じゃあ、しますか？」

「しましよー」

「……」

慣れない手つきで、三人はメールアドレスを交換した。

「えへへへー、つらら以外で初めての同い年な人のメールアドレスゲット

」

携帯を見て、さくらは嬉しそうだが、奈美とつらは、良かったよ
うな悪かったような、神妙な顔つきで、携帯に入った新しい名前を
見ていた。

3 - 2 ・文化祭前日(2 - B)

「……………はあ」

三途舞歌は、暗幕を画鋐で天井にとめながら、何でこんな事を……。と、ため息をついた。隣で画鋐を受け渡す役目をしている鈴乃音鈴音は、舞歌のため息に首を傾げた。

文芸部部室にて、文芸部三人娘が初々しく赤外線を向け合っていた頃、2 - B教室でも、明日の文化祭に向けての準備が行われていた。四人だけで。

若葉枯葉、青森翼、田所朝霧の男共は、明日の景品を買いに行つたので、残つた四人、舞歌、鈴音、夏目棗、松島月子だけで、教室の準備を行っている。

事前に中身出しとけと指示しといて空になった使わない机と椅子を端に寄せたまではよかった。さして面倒ではなかった。舞歌的に。面倒だったのはその後、暗幕を中央に張り、使わない机を隠す作業。中央に張るためには天井にとめるしかないわけのだが、当然、天井に手が届くわけがなく。机にのって作業しなければならぬ。机にのる人間はどんな人間がよろしいか。背が高い人間がよろしい。という真つ当な意見を、棗が口にしゃがった。

舞歌は悲しい事に背が高い。小学生の時、暇だったので、眠りまくつたのが原因に違いない。もっとぐれていればよかった。舞歌は舌打ちしたいのを我慢して、机にのって、さっさと終わらせ帰宅するために、黙々と暗幕を張るのだった。その横で、鈴音は、画鋐ケースを持ち、ぼーっとスタンバっているのだった。

「いやあ、三途がいて助かったし。なあ、松島？」

「え、あ、そうですね。助かりました。私達じゃ、届きませんし……」

「ホント、三途って奴は見かけによらずいい奴だな。な、松島？」

「うん。もっと怖い人かと思ってたけど、優しい人ですね」

「その事にすでに気付き、友達になるとは、鈴乃音はなかなか見る目あるな。な、松島？」

「う、うん。そうだね」

棗と月子は、舞歌達から離れたところで、教室を装飾するお花を紙で作りながら、そんな事を言う。

その会話を聞き、舞歌はいらつく。特に棗とかいう女の言い方が気に食わないのだ。月子は、まだ、本心で言ってるような、馬鹿にしているような雰囲気だが、棗は明らかに、にやにやと笑い、馬鹿にしているような、便利な奴で助かったぜ。みたいな、そんな風に言いやがってからに。

好きでやってんじゃねえよ！仕方なくやってんだよ！帰ったら帰ったで面倒な事になりそうだからな！鈴の面倒も見ないといけないし！

「……画鋏」

「画鋏なの」

という想いをぶちまけたくなるのを我慢しつつ、舞歌は黙々と作業を進める。

「なあ、鈴乃音。お前、どうして三途と仲良くなるうと思ったんだ

よ。ちょっと私に話してみ」

棗は暇なのか、舞歌達の側にやってきた。

棗は鈴音に興味があるのか、ここ数日、鈴音によく話しかけている。舞歌はなんとなく、いらつく。

「鈴音にはよくわかりません」

そして鈴音の大半の返答は、これである。その返答を聞くと、舞歌は少しホツとするのだが、そんな自分に気付くと、なんとなく、いらつく。

「はいはい、その返答はすでに予想済みだったし。しかしまあ、どうして仲良くなるうと思っただなんて、そうそう答えられるものじゃないよな。なあ、松島。お前もお前で普通に、女子グループの一つに属してるわけだけど？どうしてそのグループにいんの？」

「どうしてと言われても……入学した時、席が近い子と仲良くなつて……後は成り行きで」

「普通だし。まあ、入学とか、そういうきつかけのな物にのった場合は、わざわざ複雑にする事もないわけだけど。だけど、なあ、三途。お前は去年、ずっと一人だったわけだし？鈴乃音は、まあ、一時友達もいたけど、お前は本当に一人だったわけで、私はすでに、あ、こいつは友達いらねえ奴何だなんて。判断してたわけだけど。なあ、三途？鈴乃音じゃなくて、お前だよな。お前、何で鈴乃音と友達してんの？」

「……あなたに言う必要、ありますか？」

「ハハハ、ないし。ないけどやっぱ、その返答はお前も友達だと思ってるって事でいいんだよな」。な、三途？」

「……ちっ、画鋏！」

舞歌の苛立ち度はとどまる事を知らない。全くもっていらつく。何だこいつは。

「舞歌怒ってるの？」

「怒ってませんよ、いいから画鋏よこせ」

「いやいや、鈴乃音。騙されちゃいけないし。三途はすでに、私にご立腹だし」

わかってんならどっかいけよ！何なんだよお前は！という想いを込め、舞歌は棗を睨む。

「あなたは何なんですか？」

鈴音もそう思ったのか。棗に問う。

「おっと。鈴乃音のそれとはあまり喋りたくないし。気持ちわりい。さっさと退散するに限る。な、松島？」

棗はにやにや笑いながら、月子の側に退避した。

「えっと、それって？」

一人黙々と花を作成していた月子は、首を傾げる。

「それはそれだし。鈴乃音のあの意味わからん質問だし。あいつは考えない方が幸せな事を聞いてくるから厄介だし。なあ、松島。お前って、何？」

「何って……何？」

「そうなるだろ？それが厄介なんだよな」

「夏目さんが何を言いたいか、ちよつとよくわからないけど……」

月子の困惑した様子を見て、棗は「それがいいって事だし」と、笑った。

「舞歌舞歌。鈴乃音のそれとは喋りたくないは何なの？」

「知りませんよ……いいから画鋏」

「舞歌も喋りたくないの？舞歌も気持ちわりいの？」

画鋏をいっこうに渡さず、聞いてくる鈴音に舞歌はため息。

「……」

心なしか涙目の鈴音を見下ろし、そしてちらつと、離れたところにいる二人が、こつちを気にしていないのを確認。

そして屈み「舞歌も喋りたくないの？舞歌も気持ちわりいの？舞歌も退散するに限るの？」と聞いてくる鈴音の手から画鋏を奪い、もう一度二人の様子を見て、こつちを見ていない事を確認して、きょとんとしている鈴音に小声で言う。

「喋りたくもなく気持ち悪い奴となら、私はもう退散してますよ」
そしてすぐに立ち上がり、作業を始める。ああもう。なぜそんな事を言ったんだ私は。と、すでに後悔しつつ、そんな事を言った自分にいらつきながら。

鈴音は最初、どういう意味かわからなかったのか、無表情のまま首を傾げたが、意味がわかったのか顔を輝かせて、舞歌の足にくっついた。「ちょ、やめろ！」落ちそうになった。

「聞いたか松島。あれが俗に言う、デレって奴だし。見たか松島。あの輝きが、ギャップって奴だし。あれに互いにやられたに違いないし」

「はあ、あれがデレとギャップですかー……強烈ですね」

「お前ら黙って作業してろ!!」

舞歌のここ最近の苛立ちは、ばない。

3・2・文化祭前日〜2・B〜（後書き）

素は便利キャラに育つ気がする！

3 - 3 ・文化祭前日〜将棋部〜

「はい、それじゃあ最終確認するよー」

2・Bで、暗幕張り終えたからもう帰ろうとした三途舞歌が夏目棗にもう少しお喋りしようぜと絡まれ、誰がてめえなんざと喋るかボケがあ！という気分だった時、将棋部部室において、今日は女口調な気分の部長、金銀砂銀が明日の最終確認を行っていた。行っていたが、夏季夏美は全く聞いていなかった。

なぜか。それは別に、砂銀の女口調が気持ち悪いからという事ではもちろんないし、聞く価値がないと思っっているわけでも、もちろんない。夏美が全く聞いていない理由は、夏美の隣に座っている幼なじみ、冬季冬美が気になって気になってしょうがないからだ。もう気になり過ぎて、砂銀の言葉なんざ全く聞いてはいない。

なぜ冬美が気になっているかといえば、最近、冬美の機嫌が悪いからに外ならない。夏美に対してだけ、機嫌が悪い。まあつまりストリートに言えば、あまり夏美としては認めたくないけど、というかよくわかっていないけど、現在二人は喧嘩中なのである。困った。

事の発端は、一週間前、あの全校集会があつた日の放課後。部室での事だ。夏美と冬美、他にも砂銀や秋春守、虹野光、鈴乃音真音、山梨小百合や香川智弘といった、いつものメンバーで将棋を打ちながら、文化祭の事について話しあっていると、奇妙な二人組が現れた。

その二人は、夏美のクラスメイトであつたが、なにぶん、夏美はなかなかの薄情さんなので、クラスメイトの顔は覚えていても名前は覚えていなかった。しかし冬美は知っていたようで、冬美が名前を呼んだ事により、夏美はその二人が、夏目棗と田所朝霧という名前だと知った。

その二人は部屋に入ってくるなり、夏美と冬美の近づいてきて、こう聞いてきたのだ。

『お前らは、恋愛関係にあるのか、それとも友情関係にあるのか』と。

夏美は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔とは、まさにこれ。といった顔になった。自分でも思ったのだから、よっぽどの自信がある。あまりにも突拍子もない、急な問い掛けだったので、この時夏美は、青天のへきれき！というくらい驚いていたと同時に、自分を冷静に見る事が出来るという、奇妙な状態であった。

夏美はそんな表情、状態だったわけだが、ではもう一人の方、冬美はどのような状態だったかというところ、熱い物に触れて手を離す時のような速さで顔が真っ赤になり、「な、な、な、な、な！？」と、声をあげていた。いわゆる、羞恥と混乱の極地というものであり、見ていた夏美も恥ずかしくなるような状態であったと言える。

そこに追い打ちをかけるかのように、棗がこんな事を言う。

『ほれ見ろし。やっぱりこいつら好き合ってやがる。私の正しさはすでに証明されたし』

冬美の顔の赤さはすでにリンゴの赤さをはるかに越え、ドレッドという感じであった。他の部員達が空気を読んで何も言わずにこちらを注視しているのが、さらに恥ずかしさを加速させる。夏美も、冬美に比べたらそこまではないだろうけど、顔が赤くなっているのを感じた。

この状況はなんかもまずい。

このままではなんかもまずい。

何かがまずい。

夏美はそう思った。このまま行くと、何かが壊れてしまう気がした。確実に。

だから夏美は、何かよくわからない事を言いあっている棗と朝霧に、こう言ったのだ。

『何勝手な事言ってるわけ？私と冬美は幼なじみ。』

それ以上でもそれ以下でもない。

恋愛関係とか、意味わからない事、言わないでくれる？』

その後、冬美の機嫌が悪くなり、今に至るまで、機嫌が治る事はなく、冷戦のような喧嘩状態が続いている。どうしてこうなった。

「……………はあ」

夏美は、隣にいる冬美に聞こえるように、わかるように、あからさまなアンニュイ感が漂うため息をついた。冬美がこちらを見た。目が合った。そっぽを向かれた。どうしようもない。

土日、冬美が大好きなプリンを持参して遊びに行ったりしたのが、機嫌は治らなかった。いつもはこれで治るんだけど。

何で怒ってるんだよー。と、この一週間、夏美は何度聞いた事が。別に。と、この一週間、夏美は何度言われた事が。

ごめんなさい。と、この一週間、夏美は何度頭を下げた事が。何が。と、この一週間、夏美は何度答えに窮した事が。

ああもうホント。どうしてこうなった。明日はせっかくの文化祭なのに。

夏美は頭を抱え、髪を掻きむしった。隣から視線を感じた。ちらつと見た。目があった。そらされた。ため息一つ。

冬美がなぜ怒っているのか、夏美にはわからない。というかそもそも怒っているのか？というレベルである。だからこそ、どうすればいいかわからず、このように悩み苦しみ、ストレスにさらされている。

と、夏美は思ってる。が、同時に、夏美は冬美が怒ってる理由を、機嫌が悪くなった原因に、心当たりがあった。そうじゃないかな。あれじゃないかな。きっとそうだろうな。

しかしそれは夏美には、まだ受け入れられない理由であり原因である。故に、夏美はそれから目をそらし、悩み、ストレスを受け続ける。甘んじてそれ受け入れる。

今の関係を壊したくはない。

「夏美さん」

「……何ですかー？」

もつどうしろっちゅうねえん。と、夏美が頭を抱えてると、砂銀が声をかけてきた。

「ちょっと話しあるから。来てくれる？」

全く話を聞いていなかったのが、ばれたか。怒られるのか。ああいいよ。今はそうやってわかりやすく怒ってくれると嬉しいよ。というやけっぱちな夏美は「りょーかーい」と答え、砂銀の後に続き

部室を出る。

部室から少し離れ、廊下で砂銀が立ち止まった。当然夏美も立ち止まる。

「まだ喧嘩してんのかよ」

開口一番、呆れ顔で砂銀は言った。何故か男口調だ。どういう使い分けなのだろう。

「別にいい。喧嘩してるつもりはないみたいですよ。冬美さん的には」

廊下の窓から外を見ながら夏美は拗ねたように答える。

「ハッ。まあ一方的な感じだしな。大変だねえ、お前も」

慰めるように砂銀は夏美の頭を撫でる。「触んな変態」不快だったので弾く。

「ひでえ言い草だな、おい。まあいい。さっさと仲直りしろよ。いい加減、部活の空気が悪くなってやりづれえ」

「冬美に言ったださいよ」

「俺が言ったところで無駄だっつーの。お前にしかどうにかできねえだろう」

「私にだっってお手あげですよー」

「抱き着いてみ。一発だと思っぜ」

「殴っていいですか」

わりとマジで。

夏美の本気の殺意を感じないのか、砂銀は「おお、怖い怖い」と、おちやらけた。気が抜けた。

「組み合わせ、変更すっか？」

砂銀がようやく、本題らしきもの口にした。

組み合わせというのは、明日の文化祭の当番の事である。将棋部というくらないのだから、当然将棋部は将棋を文化祭では行つ。しかし今日、将棋だけで客が来るとは思わなかつた部長は、そこに賞品を加え、さらに一手、コスプレで宣伝という作戦を考案した。コスチュームは、メイドの次に王道路線、巫女である。もちろん男は袴である。巫女服は女だけ。

砂銀の実家は神社なので、衣服の調達は楽勝だったのだが、問題は羞恥心つて奴である。一人で巫女服来て、看板持つて校内歩くとか、マジ無理。なら二人にするか。というわけで、厳正なるくじ引きが行われた。

結果、夏美は守とコンビを組む事になり、冬美は光と組むことになった。砂銀はその組み合わせを変えてやろうかと、守から冬美に変えてやろうかと、提案してきたのだ。文化祭中に、仲直りしろよ。という事だろう。傍若無人な変態部長にしては、いい事を言っじゃないかと、夏美は思った。「お前、なんか失礼な事考えてね？」見破られたが、考えるポーズを取り無視した。

なるほど。それは大変いい、願つたりも叶つたりな提案であつた。文化祭の解放的なムード、さらに巫女服といういつもとは違う服装を着ていれば、仲直りもしやすい気がしないでもない。すでに一週

間。さすがにそろそろどうにかしたいし、いつまでもずるずるとこのままでは、心身共にきつい。いい機会ではないか。ここは提案を受けるべきではないか。

「……………いいです」

しかし夏美は断った。

そう考えた上で、夏美は断った。

別に、冬美と仲直りしたくないわけではない。仲直りしたい。仲直りしたくないわけではない。

しかし、夏季夏美は秋春守が好きだ。好きです。好きですか。好きに違いない。好きという事になっている。間違いない。

文化祭の解放的なムード、さらに巫女服といういつもとは違う服装を着ていれば、一気に仲が進展する事もあるだろう。

好きならば、そのチャンスを、棒に振るなんて事、ありうるだろうか。

ありえない。好きならば。

だから夏美は、秋春守が好きな夏季夏美は、この組み合わせを、この幸運を喜び、捨てるなんて事は、しない。

幼なじみとの仲直りは、いつでも出来るだろう。

「あつそ。お前がそう言うならいいけどね」

砂銀はあっさりとそう言って、部室の方に歩き出した。何だか拍子

抜けだった。もう少し、粘ってくれたら……。

「……………はぁ」

夏美は、先程よりも増したストレスを気休めでもいいから軽減させるために、ため息をついてから、砂銀の後を追った。

部室に戻ると、冬美と目があつた。目をそらした。ストレスが溜まった。

「……………はぁ」

冬美の横に座ると、アンニユイなため息が聞こえたが、夏美は聞こえなかったフリをして、智弘と談笑している守を見る事にした。

機嫌がよくなる事はなかった。

3・3・文化祭前日(将棋部)(後書き)

好き何だから、こころしましよ。

好き何だから、こころしましよ。

愛があるなら、こころするでしよ。

愛があるなら、こころするでしよ。

そついう約束。

そついう誓約。

誰かに誓った約束で。

誰かが見守る誓約で。

世界に愛は満ちてるよ。

3 - 4 ・文化祭前日〜枯葉〜

「はいはい、だからもうわかったって……」

夕食前、冬季冬美が自宅のベッドで枕に対して、無言で拳を振り下ろすという作業に没頭している時、若葉枯葉は携帯片手に、ベッドに腰掛け、通話中であった。

「十二時に部室に行けばいいんですね。わかったわかった」

電話の相手は南奈美である。明日の文化祭、文芸部を手伝って欲しいとの連絡だった。

「俺は十時から十一時だから大丈夫……いや、嘘じゃねえよ。何で嘘つかなきゃいけねんだよ……おかしって、友達を手伝うのは何にもおかしくないだろ……ちげえよ！友達だよ！とーもーだーちーとーしーてっ！手伝うんだよ！その辺間違えんな！……え？ああ、うん、まあ、暇だけど……うっ、いや、まあそうですよ、一人でぶらぶらする気だよ……うん……うん……なるほど、確かにお前の言う通り一人はつまらないかもしれない……そうだな、じゃあ一緒に回るか……だからちげえよ！デートちげえよ！何でそうなるんだよ！友達同士と一緒に文化祭回る事をデートいいですか！？言わないだろってちょっと待て切るな……っだー！めんどくさくない友達が欲しいー！！」

枯葉はそう叫び、ベッドに倒れた。と、同時に「デートデートっさいぞ枯葉あー！！」ドアが開いた。姉、若葉紅葉の襲来である。

「枯葉！あんたがデートなんて百年早いー！！」

「だからデートちげえよ!! ああもう! めんどくさくない姉ちゃんも欲しいわ!!」

紅葉はベットから体を起こした。倒れてる状態で相手出来るほど、生易しい存在ではないのだ。

「ひどっ! 訴えてやる!!」

「どこにだよ!」

「母さんによ!」

「多分母ちゃんは俺の味方になってくれると思う!!」

「じゃあ、やめた。ところで紅葉」

紅葉は椅子に座った。紅葉はため息をついた。居座る気だよこの姉。

「さっきの電話あれかな。女狐かな?」

「女狐かどうかは知らんけど、南さんだよ」

「明日の文化祭?」

「そう。なんか手伝って欲しいって。後、文化祭一緒に回ろっつて
わ」

「お姉ちゃんは高校生での恋愛に断固反対する!!」

「恋愛関係ねえよ！友達で文化祭回るどくに恋愛要素があんだよ！」

「友達つつつても女友達でしょうが！しかも好意を持つてる類いのね！！さらに一対一！とどめに相手は友達じゃなく恋人だと思ってる！はい、そこから導き出される要素を答えなさい！」

「最初に友達言ってるから友達以外の要素はない！」

「我が弟ながら頭わる！？どう考えても恋愛要素ありでしょうが！？もしかしてあんた友達とか言ってるれば恋愛には発展しないか思ってる！？？」

「え？」

「え？」

ヒートアップしている枯葉と紅葉、鏡合わせのように首を傾げる。

「ちょっと落ち着こうか枯葉」

「姉ちゃんにしてはまともな提案だ」

「とりあえず、私も明日文化祭行くから。神裂と一緒に」

「あっそ」

「あんた案内しなさい」

「何でだよ。姉ちゃん案内いらないだろ。パンフレットもあるし」

「察しが悪い弟め。あんたを案内役に使う事により、女狐と二人きりになるのを阻止しようとしているのだ」

「何を偉そうに言ってるんだらうこの姉は。もしかしくなくてもバカなんじゃないだらうか」

「というわけでよろしく」

「え、やだよ」

「何だよ。そんなにあの女と一緒にがいいってどういうの!?!」

「姉ちゃんなんか変なドラマでも見た? ちげえよ。何が悲しくて文化祭を、なんか盛り上がりつつある文化祭を、姉の案内で回らないといけないんだよ。どう考えても、友達と一緒に回る方が楽しいじゃん。それに……」

枯葉は言いにくそうに、紅葉が目をそらす。そんな態度取られれば続きが気になるもの。紅葉は「それに、何よ。言いなさいよこら」とか言っちゃう。

すると枯葉は、羞恥心を抑えるかのように目を泳がせながら「それに……友達と一緒に文化祭回るって、ちよつと夢だったし」と、言った。紅葉に衝撃が走る。その程度が、そんな当たり前の事を夢だとか言っちゃうなんて。

「か、枯葉…… あんた、便所飯とかしてないでしょうね!」

「してねえよ……!」

「そう、よかった……そこまで落ちてはいなかったのね。しかしまさか枯葉がここまで友達に飢えていたなんて……私、ちよつとシヨツクだわー」

「な、何だよそのかわいそうな物を見る目は……」

「……いいわ。明日は許してあげる。せいぜい女狐のペースにのせられないようにしなさい。あいつもまた、あんたは別ベクトルの関係に飢えているのだから……」

「べ、別ベクトル……?」

紅葉は意味深な事を言っ、部屋から出ていった。と、思ったらすぐに戻ってきた。

「枯葉。最近、泥棒猫の様子はどうなの?」

「泥棒猫……みつちゃんの事?」

新月満。枯葉の、トラウマメーカー兼幼なじみ的存在。

「それ以外に泥棒猫がいんの?」

「動物で例えんのやめるよ……みつちゃん?そーいや、二学期始まってからは全然連絡ないな……学校忙しいんじゃない?」

「ふーん……ならいいけど……」

紅葉はやはり、意味深な空気を出しながら部屋を出ていった。と、思ったらまたすぐに入ってきた。

「……まだ何かあんのかよ」

「一番大事な事忘れてた。夕飯だから、下、降りて来いって」

「……わかった」

3 - 4 ・文化祭前日〜枯葉〜（後書き）

こんなもんか。

次回、文化祭編。

私が七不思議を全て書き殴れたら投稿開始。
後書きまで使うテキスト一章になる予定。

待て、次回。

1 - 1 . 文化祭開幕〜普通と異常〜

山梨小百合。

八尾比丘尼高校1 - B所属。

身長は高すぎでもなく低すぎでもないし、体重も痩せすぎでも太りすぎでもない。

髪も染めてはならず、ツインテールやポニーテールのように特徴的な髪型でもなく、腰まであるわけでもなく短すぎるといってもいい。

両親は健在であり、不仲でも新婚のようにべたべたしているわけでもないし、小百合を過度に愛してるわけでも憎んでいるわけでもない。

中学生の生意気な弟が一人いるが、ブラコンでもなくシスコンでもないし、あまり会話は無いが、挨拶すらしない程不仲ではない。

固執するような価値観は持ってはならず、普通に友達もいるし、恋人はいないが、恋愛に興味がないわけではない。

影が薄いわけでも、自己主張が激しいわけでもなく、適度に適当なコミュニケーションを取れる彼女は、友達からはいい子だよねと言われ、普通だよねと言われ、優しい奴だよと言われる。

これといって特徴がない、普通に普通で普通な少女、小百合。

将棋部に入っているというのが、彼女が唯一、普通から外れる可能性がある要素だが、入部して約半年、彼女はまだ普通から逸脱していない。

そんな自分が時に嫌いであり、時に好きであり、他のキャラが濃い人達のことを、時に羨ましがり、時に嫌っている。

山梨小百合。

彼女は文化祭といういつもと違う今日この日も、普通だった。

八尾比丘尼高校 1 - B 8 : 20

「小百合おはよー」

「おはよー」

「おはよー」

小百合は鞆をロッカーにしまった後、窓際にいた友人達と合流した。

「いい天気だね」

「だねー」

今日は文化祭一日目。小百合のクラスは結局、何も出し物をしない事になり、休憩室という事に落ち着いた。教室には机を四つ組み合わせたものにシーツをかけ、花瓶が乗せられた簡易テーブルが十個ほど出来上がっている。

そのため、机と椅子が使えないので、すでに登校してきているクラスメート達は、各々自由に、教室内で固まり談話していた。

「昨日のドラマ見た？」

「もちろん見たよ。やっぱりおもしろいよね」

昨日のテレビの話。雑誌の話。文化祭の話。そんな他愛もない、いつも通りの平和で普通な会話。時に小百合はただ笑い、時に話題を提供し会話を盛り上げ、開会式までの時間をつぶす。

一日目は九時から生徒だけ参加出来る開会式があり、十時から一般公開となっている。開会式は自由参加のため、準備等で忙しい生徒は参加しなくても構わないらしいが、小百合のクラスはすでに準備を終えているし、将棋部の方は九時半くらいに集合しろという事なので、小百合は友人達と開会式に参加する予定になっている。

「大食い競争って、何食べるんだらうねー」

「飛び入り参加オツケーと書いてあるし、小百合、参加してみたら？」

「私？んー、ケーキだったら考えてみようかな」

「え、それマジで言ってるの？」

「冗談に決まってるでしょ」

「だよねー」

そんな会話をしていると「真音おはようですよー！！」という、周りを気にしない大声が聞こえた。

「光おはよう。朝から元気だね」

「当たり前ですわ！今日は文化祭ですよ！真音ももっとテンション上げるべきかしら！？」

「何で最後疑問にしたの？」

声が出た方を見ると、案の定、教壇の近くで、クラスメートであり同じ部活に所属している、鈴乃音真音と虹野光が話していた。

テンションが高く元気潑刺、今が本当に楽しいというように、顔を輝かせてる光に対して、なんかもう全てを受け入れますというように、表情が変わらない真音が、ああやって一緒にいるのは、不思議なものだな。と、小百合はあの二人を見ると、三回に一回はそんな風に思う。

「相変わらず虹野は元気だねえ」

「間違いなく、あいつ空気読めないよ。鈴乃音はよく一緒にいられるもんだよ」

友人達が嘲笑を浮かべながら言う言葉に対して小百合は、「毎日楽しそうだよね」と、苦笑を浮かべるに留めた。

開会式は自由参加のため、整列し、クラス単位で行動する事なく、各々ならだらと、体育館へ向かう。小百合も、パンフレット片手に、友人達とならだらと体育館へと向かった。

「小百合は途中で抜けるんだっけ？」

「うん」

「コスプレしながら将棋打つんでしょ？見に行つてあげるよ」

「恥ずかしいからやめてよ」

「そう言われると行きたくないのが、人の性だよねえ」

「午前中だよ。絶対見に行くから」

「ちょ、本当にやめてよね。それより、ステージの幕が下りてるけど、何かあるのかな」

「そりゃ何かあるんでしょ」

体育館は暗かった。電気はついてはおらず、窓にはカーテンが引かれていたからだ。ステージの幕も下りている。スケジュールを見ると、吹奏楽部の演奏があるようなので、そのためだろうか。この学校にも吹奏楽部があった事を今日知った、小百合だった。

そんな暗い体育館の中で、生徒達は、おおよそ学年で固まって座っている。小百合達も、一年が固まっている近くに座り、小声で会話しながら、開会式が始まるのを待っていた。

「あ、始まるっばい」

マイクハウリング音がした後、「黙りやがれ」という有無を言わせない言葉が、体育館に響いた。

「あーあー、マイクチェックマイクチェック、会長ラブ。おっけー、ばっちしだな。んじゃこれより、第15回くらい八尾比丘尼高校文化祭、比丘尼祭もとい、ドキドキ最後の想い出作り、秋の夜空に叶う想いは何色吐息かつこ笑いの、開会式を始めるぜ。司会進行は、剛をバカにしているのは俺だけだ、生徒会会計、吉屋茜よしやあかねが行う。文句がある奴は拳で語れ。いねえな。よし、じゃあ、開会の言葉〜。ヤンデレ副会長どうぞ〜」

暗闇の中、ステージに上がる副会長、横手早苗よしいさなえをスポットライトが照らす。

「どうもこんにちわ。ゴリラ女に紹介された私です。特に言うことはありません。開会式を始めます」

「よし、喧嘩を売られた俺だけ。いつか殺す。次、校長先生の話」

早苗と入れ違いに、今度は校長、八尾比丘尼因幡がステージに上がり、スポットが当てられる。何で暗い中やるんだらうと、小百合はぼんやり思った。

「皆さんこんにちわ。校長の八尾比丘尼です。本日はいい天気ですね。今日の文化祭は例年がない盛り上がりを見せているようです。この盛り上げが、私が賞品を出すと許可したからだと思うと、自分の事のように嬉しく思います。自分の力で何かが成功するというの

は、いくつになっても嬉しいものです。今回の文化祭が成功したら、来年も賞品制度を実施しようかと思うくらいです。さて、無駄話もこのくらいにしておきましょう。皆さん今日は、楽しみましょうとは言いません。楽しめなくても結構です。家に帰っても結構です。後悔するとは言いません。後悔するかどうかなんて、楽しめるかどうかなんて、各自の自由なものですから、強制しません。どうぞ自由に、文化祭を過ごして下さい。終わります」

「はい、校長に拍手～」というやる気ない号令で、パチパチとテキトーな拍手が起こった。

「はい、まばらな拍手どうもでしたと。次はちょっとした説明。陰険ロリさっさとしろよ」

「どおもお。のおきいんおんなあにいしよおかあいさあれえたあしよおきいのお、黄泉君枝よみきみえだよお」

「うおー！！君枝ちゃんカワイイよー！！」

今度ステージに上がり、ライトを受けたのは、ゴスロリが似合い過ぎていた黄泉君枝だった。君枝が、何を言っているか聞き取りづらいい、ゆっくりで纏わり付くような挨拶をすると、体育館の一部で歓声が上がった。小百合には理解出来ない人気である。

「ありがとうだね。えっとお。せえつうめえいいすうるうのおわあ、とうひょうしいすうてえむうでえすう。ぱあんふうれえつとおのお、さあいごおのおぺえじいにい、とうひよおのおかおみいがあつういてえまあすうのおでえ、そおれえお、せえいとおげえんかあまあえのお、とうひよおばおつくすにい、あー、めんど。ボックスに入れて下さいねー。最終日までだねー。来場者にもパンフレットは一部

しか渡さないからー。正真正銘、一人一枚ねー。不正したら、わあ
たあしい、なあいちやあうー」

「泣かないでー!!」

「ありがとうしね。じゃあ、せえつうめえおわありいまあすう。ば
あいばあい」

「バイバーイ!!」

手を振りながらステージを下りる君枝に対して、さっきの校長へ向
けた拍手よりも少人数ながらも、激しい拍手が送られる。小百合に
は理解出来ない人気である。隣の友人も「きもっ」と、呟いていた。

「はい、相変わらずうぜえロリでしたっ。次、今の説明じゃわか
んなかった事を補足説明すっぞ。二度手間とか言っんじゃねえぞ。
心優しい剛が一人だけ役目がねえのはかわいそうって言ったんだか
らな。文句ある奴は、ボディに一発入れてから聞く。いねえな。よ
し、補足説明、根暗。さっさとしろよ」

「運動バカに紹介されたアイ、夜風佐原よかぜさほらが補足説明する」

ステージには上がらず、どこからかマイクで、夜風のように清々し
い声で補足説明を始めたのは、生徒会会計、夜風佐原だった。

「パンフレットの最後を見ればわかる。一番いいと思った出し物の
名前を書いて、投票箱に入れる。簡単。もちろん、自分の部活、ク
ラスに入れてもいい。体育館やイベントでやるような大きな出し物
をするクラス、部活、団体の場合は、別途、ポイントが加算される
場合もある。二日目、最終日の一般公開終了17時が締め切り。原

則一人一票。誰かに強制に書かせるのもなし。パンフレットを不正に入手するのもしなし。来場者の分は、生徒玄関と職員玄関で配布しているが、常時アイ達、生徒会メンバーがいるのを忘れるな。不正がばれないとも思うな。アイはいつも監視している。不正をした場合、その本人が所属している団体は即刻失格。だからあなた達は、積極的に不正に手を出すべき。なぜなら合法的に失格させる事が出来るから。全てを失格させて、後は邪魔なあいつらも消して、そしてアイは明石君と、ふ、ふふふ、ふふふふ……失礼。説明を終わる」

「はい、後で校舎裏に来て感じての補足説明もこれで終わりつとあー、苦痛だった。お前らももううんざりだろ？安心しろ。次でかたつくるしいのは終わりだ。だからな。お前ら、全力で拍手しろ。じゃあ最後だ！俺だけの会長が、第15回比丘尼祭もとい、ドキドキ最後の想い出作り！！秋の夜空に叶う想いは何色吐息！！の、開催を宣言するぜ！！おらあ！！拍手しねえと殺す！！」

半ば強制だったが、盛大な拍手の中、ぺこぺこ頭を下げながら、明石剛がステージに上がった。ライトに照らされ、恥ずかしそうだが小百合は剛を見ると、応援したくなる。変わり物が多い生徒会メンバーの中で、この剛だけは、どこか普通で、将棋部での自分と似ていて、親近感がわくからかもしれない。

「え、えっと、どうも。こんな僕がこんな大事な事しているのかなって思ってますけど、えーっと、でもまあ、はい。頑張りたいなと思います。えー、校長先生はああ言っていましたけど、ここまで頑張っただけで来た僕、っていうか準備してきた人達からしたら、やつぱり、楽しんでもらいたいなと思いますし、えーっと……それに」

そこで剛は言うべきか悩むように顔を伏せた。

そして一瞬の沈黙の後、顔を上げた。そこには小百合が知っている、おどおどした迷子のような表情ではなく、全てを受け入れてくれそうな優しく力強い笑みがあつた。

「楽しんで欲しいし、楽しみたいですよね！皆さん、賞品とかそういう事は二の次にして、楽しみましょう！それでは、第15回比丘尼祭ドキドキ最後の想い出作り、秋の夜空に叶う想いは何色吐息の開催を宣言します！！」

剛の力強いその言葉を合図に、吹奏楽部の演奏が始まり、ステージの幕が上がった。

ああいうギャップが、モテる秘密なのかな。

小百合は拍手をしながら、照れ臭そうにステージを下りる剛を見て、思った。

八尾比丘尼高校 校庭臨時駐車場 9：20

「早く着きすぎたか……」

彼女は新車特有の匂いがする車内で、時計を見てそう呟いた。

事前に入手していた情報によると、例年より今年の文化祭は盛り上がっているらしいので、もしかしたら駐車場も埋まってしまうので

はないかと心配して来た彼女だったが、杞憂だったようだ。まだ彼女の車を含めて、数台しか停まっていなかった。

「……………」

10時から一般公開らしいので、後、30分は時間がある。さて、どう時間を潰すかと彼女は数秒考え、眠いので寝ることにした。眠いとこれからの仕事に支障をきたすかもしれないし。

「……………栞ちゃん、ついたの？」

隣の助手席で眠っていた幼女が、まぶたをこすりながら彼女に聞いた。

「つきましたけど、まだ仕事は始められませんから、寝てなさい。それと、ちゃん言うな」

彼女は不機嫌そうにそう言うてから、自分も一眠りするために、目をつぶった。

彼女の名は、かなえしお 鼎栞

先代の文芸部部长であり、日常から、普通から逸脱した人間。

「ん……………」

体育館の方から、吹奏楽部の演奏だろうか。演奏が聞こえ、栞は一度目を開けた。しかしすぐに、興味を失い、また目を閉じた。

今日は文化祭。

いつもと違う学校に。

いつもと違う何かが集まり。

誰もが自由に振る舞い行動する。

そんな二日間が、今、始まった。

1-1 文化祭開幕〜普通と異常〜（後書き）

はい、というわけでようやく始まりました文化祭。待ってる人がいるかは知らないけど、ようやく七不思議も完成しましたよーっと。

はい。

えーっと、今回の文化祭編はまず、『日常』山梨小百合、『非日常』鼎菜の二つの視点で、おおまかの一日目の流れを描く予定です。

その後、『禁じられた恋愛』夏季夏美と冬季冬美、『噛み合わない恋愛』若葉枯葉と南奈美視点で一日目を描いて、二日目に突入する予定ですな。

二日目の演目は『人間賛歌』『人形三昧』『歪んだ愛情』『諦めの友情』の四本立ての予定となっております。

予定は一つ以外、全部嘘の予定です。

さて、本題。

次回から、まためんどくさい事に、後書きまで使用していきますよ。理由、携帯だと後書きを使うと綺麗に分けられるから。多分。いつも飛ばす人も、今回ばかりは読んでみたらよろしいかと。

ではでは、長々とお付き合い下さい。

1 - 2 ・文化祭午前の部々巫女とありす

八尾比丘尼高校 体育館 生徒棟 特別棟四階 9 : 30

「じゃ、私そろそろ行くね」

「あ、うん。また後でね」

吹奏楽部の演奏が終わったところで、山梨小百合は体育館を後にする事にした。将棋部に向かうためだ。

「はい、んじゃあ次は、例のあれやるぞ。テンション上げるー！！」

例のあれが少し気になったが、すでにちよつと遅刻気味。これ以上遅ければ、部長が怒りそうだ。あの変な部長に怒られるのは遠慮したいので、小百合は足早に部室へ向かう。

将棋部部室は特別棟四階にある。体育館から特別棟に向かうためには、一度、生徒棟に入らなければいけない。特別棟と生徒棟の間の中庭、通称庭園、を突っ切れば行けないこともないが、職員棟と生徒棟の間にある中庭、通称鉄庭、とは違い、土があるため、上履きで突っ切るのは不良かヤンキーがやることだ。小百合は不良ではないので、遠回りでも生徒棟を経由する。

「おい、例のあれが始まったらしいぞ！」

「マジでか！やべえ、出遅れた！」

とかいいう会話をする生徒とすれ違いながら、小百合は生徒棟一階に。

例のあれって、ビンゴ大会かな。

校舎内はいつもと雰囲気がだいぶ違う。廊下の壁には、いつもなら『薬物をやる自由はてめえらにねえ』とか『タバコや飲酒はばれないとこで』とか『それ、本当に愛ですか?』とか『今、私達はあなたを必要としている』とか書かれた、薬物や飲酒、デートDVや部活動誘いのポスターしか貼られていないが、今は、『ダーツで射止める例のあれ!』とか『あっちの喫茶はクソまずい。こっちの喫茶はベリーなデリシャス』、『その一手に全てをかける』とか書かれた、ポスターが貼られている。

ある教室の出入り口にはビニールテープがのれんのようにかかっており、ある教室は暗幕で隠され『超絶恐怖迷宮』と、ダンボールで作られた安っぽい看板が置いてある。

窓から特別棟の方を見れば、庭園には秋の花が咲き乱れている。園芸部が花の販売もしていたはずだ。

さらに特別棟には『七不思議の秘密を知りたいければここ』と書かれた垂れ幕が。七不思議なんてあったんだ。と、小百合は少し興味がわいた。時間があつたら行ってみようか。

そんないつもと違うお祭りムードの校舎を歩けば、自然とテンションも上がるといふものだ。一階からでも特別棟に行けるのだが、もう少し校舎内を歩き、祭りの空気を感じたくなった小百合は、二階から行くことにした。

階段の段差を利用したモナリザっぽいものアートを見て、誰が作ったんだろうな。昨日はなかったしな。とか思いつつ、二階へ。そこで、小百合は教室に荷物を取りに行くことを思い立った。ロッカーには鍵をかけていないので、盗難の危険性がなくもない。それよりは、常時誰かがいる将棋部に置いておいた方が安全だろう。そういうえば、部長もそんな事を言っていた気がする。

二階から行くことにしたよかったと思いながら、小百合は教室へ。ロッカーは廊下に設置されているので、教室へ入る必要はないのだ

が、虹野光と鈴乃音真音がいるかと思い、教室の中を覗くと、数人のクラスメートがグータラしているだけだった。開会式に出ていたかはわからないが、もう行った後なのかもしれない。

小百合はカバンをロッカーから取り出し、さつきより早足で特別棟へ向かう。もしかしたら自分が最後なのかもしれないという不安にかられたからだ。

数人の、どこかで見たような生徒とすれ違いながら、渡り廊下を渡り、特別棟へ。西階段の方が近い気がしないでもないので、渡り廊下を左折し、三階を素通りし、四階へ。

「おせえぞ山梨！」

「す、すいません」

四階へつくと、部長、金銀砂銀が部室の前で仁王立ちしていた。袴姿で。似合っているようにも見え、男装しているようにも見えた。

「お前がげっぴだ！罰が用意してあるから覚悟しろよ！」

「ば、罰ですか？」

そんな話聞いていない。とほほな気分、小百合は砂銀の後に続き、部室に入る。

「あれ、まだ全然いませんけど……」

部室にはまだ、人が全然いなかった。いるのは二年の先輩、秋春守と香川智弘だけだ。二人は窓際でいつも通り、話していた。いつも

と違うのは、二人共、袴姿という点だ。二人共、似合ってなくもない。

入ってきた小百合に気付き、「おはよー」と智弘が柔らかく笑みと共に挨拶した。守も最低限の義務を果たすように「おはよう」と続いて挨拶したので、「おはようございます」と小百合は一括で挨拶を返した。

「他の奴らはすでに着替えに行ってるんだよ。ほら、これお前の分。たつたと、着替えて来い。更衣室は隣だ」

「わかりました……」

砂銀から巫女服を受け取り、マジで着るのかあ。と、微妙な思いを抱えつつ、小百合は部屋を出る。

隣の教室のドアには『更衣室』と貼られていた。そういえば、隣の教室ってどんな部屋か知らないな。小百合はドアに手をかけ、開けようとした。が、開けなかつた。鍵がかかっているようだ。

ノックをすると「どちら様ですか？」と、落ち着いた声だ。多分真音だ。小百合が若干緊張した声で「山梨です」と、答えると、鍵を開ける音がした後、ドアが開いた。開けたのは、案の定、真音だった。巫女服だったのも予想の範囲内だ。涼しげでどこか達観した表情の真音と、巫女服の神秘性が、マッチしている。

「に、似合ってるね」

「ありがとうございます。褒め言葉にしときますね」

きこちなく小百合が褒めると、真音はそんな返答をし「どうぞ」と、道を開けてくれた。

もしかして、嫌だったのかな。と、褒めた事を後悔しつつ、教室に

入ると、そこは更衣室だった。細長い部屋に、細長いロッカーが五つ並んでいる。ちょっと狭いが、まさに更衣室だった。

「ここ、更衣室だったんだ……」

「みたいですね。僕も驚きました」

真音は小百合の、驚きが混じった呟きに律儀に同意し、ドアを閉め、鍵もした。

更衣室には真音の他に「し、真音？何だかこんがらがってしまっpegくちゃぐちゃですよ!？」と、巫女服に悪戦苦闘の光と、「……冬美、着れた?」「見ての通りだけど」「あつそ……」と、最近の将棋部を微妙な空気にする二人組、夏季夏美と冬季冬美がいた。光は言葉通りまだ巫女服を着ていないが、冬美と夏美は見ての通りすでに巫女服を着用していた。

「山梨さん、早く着替えた方がいいですよ。ほら、光も。手伝ってあげるから。というか、足が同じところに入ってるよ……」

「気付きませんでしたわ!」

真音がかいがいしく光の世話をやいているのを見ると、世話好きなのかなあ。と、小百合は三回に一回くらい思う。

真音の助言に従い、小百合も早く着替える事にする。入口に一番近いロッカーが開いていたので、そこにカバンを放り込む。

巫女服を着た経験はないが、一応事前に、部長にレクチャーを受けているので、なんとかなるだろう。小百合の今日の服装は制服。スクールセーターにスカートという出で立ちなので、そんなに着替えに時間はかかるまい。

「ちょっとどいて」

「あ、すみません」

夏美に言われ、小百合はセーターを脱ぎながら、通路を開ける。夏美は「あんがと。鍵、かけといて」と言い、更衣室から出ていった。冬美を置いて。

言われた通り小百合が鍵をかけると、後ろで疲れたようなため息が冬美だ。

「冬季先輩。まだ喧嘩中ですか？」

真音が光の着替えを手伝いながら、聞いた。小百合としても気になるとこだ。いつも仲良く、将棋部を盛り上げる二人がここ最近は仲が悪く、将棋部を盛り下げている。

「別に喧嘩してるわけじゃないんだけどね」

困ったような顔をする冬美は、お疲れのようだ。わかりづらいが、目の下にくまも出来ている。

「でも先輩達ぎくしゃくしてるんです。空気が悪くなって困りますわ、わたくし。よく知りませんが、謝っちゃえばいいと思いますわ。お姉ちゃんとわたくしも、それで仲直り出来ましたもの」

えへへへー。と笑う光は、なんというか、平和だなあ。と、小百合は思った。

「謝ったら私が悪いって事になるでしょ？私、それは嫌なの。……」

……でも、私がいけないんだろうなあ」

ままならないなあ、心って奴は。

冬美は、やれやれ全く、しんどいなあ。というふうにそつ呟いて、「じゃ、私も行くね」と言っつて、更衣室から出ていった。

「さつさと謝ればいいのにー。うっ、し、真音、ちょっと苦しいですの」

「光はもう少し、相手の事を考えるべきだと思っつな」

「じ、ごめんなさいですの!?!」

「謝れば全部解決するわけじゃないんだからね。はい、出来た。山梨さんは大丈夫ですか?」

「え、あ、うん。多分」

あの先輩達はいつも仲良しで、互いの事を全部把握しているように見えたけど、やっぱりそんなわけじゃないんだなあ。色々悩みあるんだろうなあ。と、ボーツと考えていて、着替えが全く進んでなかった小百合。慌てて着替え始める。

「不思議な感じですか?どうですかの真音?似合ってますかしら?」

「んー……コスプレだね」

「真音は本物っぽいですの」

「あんまり嬉しくないよ。それ」

クルクルと回る光と、呆れ顔の真音。二人の会話を聞くともなく聞いていると、ふと、一つ思い出した。

「ね、ねえ鈴乃音さん？」

「何ですか？」

「部長が、私が最後って言ってたんだけどさ」

「ええ、山梨さんが最後ですね」

「佐賀さんと、長崎君を見てないんだけど……」

そう。将棋部には、真音と光、小百合以外に、長崎君と佐賀さんという、バカツプルがいるのだ。部活にあまり来ないし、来たとしても夏美と冬美とは次元が違うレベルの、二人だけの世界を作り出すので、視界にあまり入れないようにするため、すっかり忘れていた。いや、ホント、忘れていた。

「ああ、あの二人ですか……」

真音は言いづらそうに、小百合から目をそらした。「これで秋春先輩もメロメロですかしら！あ！お姉ちゃんにも見せたいですのー！」と、光は自分の世界。正直、ちょっと黙って欲しいと思う小百合である。

「あの二人は……別室で一緒に着替えています」

「……ああうん。そっか」

まあ、うん。カップルだから、一緒の部屋で着替えても何にも問題ないかな。うん。

小百合は黙々と、着替えを再開した。

八尾比丘尼高校 将棋部部室 10:00

「始まったな」

外で空砲が上がった。一般公開が始まったのだ。

部室には、袴姿の、砂銀、守、智弘、長崎。巫女服姿の、夏美、冬美、真音、光、佐賀、小百合の、計十人がいる。

「よし、お前ら、とりあえず衣装似合ってるぞ。特に真音。お前はなんか巫女だな」

「意味がわかりません。というか部長。僕、将棋部じゃないんですけど」

「今さらかよ。諦める。よし、んじゃ、最後の打ち合わせするぞー」
部室の準備はもうバッチリだ。机を合わせ、将棋盤をセットしてあ

る。賞品のお菓子もバツチリオツケー。飲料もクーラーボックスで冷やしてある。

「とりあえず俺は常時ここにいるからな。困った事あったら聞きに來い。で、午前と午後のペア当番制な。午前は、俺と香川、長崎と佐賀、夏季と秋春な。他の奴ら、虹野と冬季、山梨と鈴乃音は、ほれ、この看板持って自由行動しとけ」

「え？」

「どした山梨」

「あのー、私、午前だったと思ったんですけどー……」

昨日の段階では、そうだったはずだ。確認するように、真音の方を見ると「僕もそう思っていました」との事なので、小百合の聞き間違いではないと思われる。

「ああ、なんか急に夏季の野郎が午前がいつっていつから変えた。さっきの罰とはこの事だと思って受け入れる」

えー。と、少々不満なのだが、部室内の空気が不満を言うのを許さない。冬美から立ち上る不機嫌オーラで息苦しい。それを感じとっていないのは、長崎君と佐賀さんだけだろう。「マイハニー。素敵だよ」「マイダーリン。素敵だわ」とか、愛は盲目って凄いな。

「はい、んじゃ解散。ほれ、冬季と鈴乃音。これ持って遊んでこい。一時には戻って來いよ。それまでには機嫌が直ってる事を祈るぜ。虹野、お前に期待してる。で、長崎と佐賀は乳くりあってんじゃねえよー!!畜生め!!」

しゅしゅと、湿気を払うように、冬美と光、真音と小百合を追い出す砂銀。冬美と真音に渡されたのはプラカードで、『特別棟四階将棋部是非来てねハート』と書かれている。

「真音。わたくし、真音とがいいですよ」

冬美の不機嫌オーラにビビリ気味な光は、子犬が飼い主に擦り寄るように、真音に助けを求めた。小百合は焦った。ここで光と交代したら、自分がこの不機嫌先輩と三時間近く一緒なわけだ。遠慮したい。

「ああん？私が嫌だって言いてえのかあ？」

「ヒッ！」

冬美、やさぐれモードである。もはや誰だお前はという目つきで、光を見る。

「おら行くぞ！もう夏美なんか知るか、バーカバーカ！」

冬美は将棋部にいる夏美にも聞こえるようにそう叫び、光の手を掴み階段を下りていく。「し、真音ー！！」と、光が唯一の友達に助けを求めたが、「ファイト」友情とは儚ないものであった。

「……………」

「……………」

そして二人。今だ関係性がはっきりしない微妙な関係な、真音と小

百合が部室前に。

「……山梨さん」

「は、はい？」

「どこか行きたいところ、ありますか？」

「あー、特にない、かな」

「じゃあ、先に僕が行きたいところ、回ってもいいですか？」

「あ、うん。いいよ」

「じゃあ、行きましょうか」

「うん」

こうして、小百合は巫女服姿で、真音と二人で、文化祭を回ることになった。

「……」

空砲の音で、鼎栞は目を覚ました。これでも寝起きはいい方だ。助手席を見ると、幼女はまだすやすや眠っている。子供は寝るのが仕事という噂なので、問題ない。問題なのは、大人の仕事。栞の仕事だ。

「……何だこれ」

眠っていたのは、30分程度だ。寝る前はがら空きだった校庭、もとい駐車場が、すでに満杯になっていた。栞の車の横にも車が止まっている。どんだけ短時間で人が多くなっただよ。栞は舌打ちを打った。あまり人が多いところは好きではない。早々に仕事を終え、帰宅しよう。

「……」

栞は後部座席のクーラーボックスを確認した後、助手席の幼女を一瞥し、考える。

今日こいつを連れてきたのは社長の指示だ。栞が初めて社長と離れて行く仕事。心配だから。といって、この幼女を連れていけと言われたが、実際のところ、幼女の世話が面倒だったただけだろう。全く、嫌な社長である。

正直、この幼女を連れていかない方が仕事は早く終わる気がする。その理由は二つ。一つはこの幼女、我が儘であり食いしん坊である。もう一つはこの幼女、今日の服装が、真っ白でフリフリがついたお姫様ドレスである。整った外見で将来有望な幼女がこんな服着てれば、目立ってレベルじゃない。なぜこんな服を着てきたんだ。仕事だぞ。と、自分で幼女の服装を選んだ事を棚に上げ、栞は呆れ混じりのため息をついた。

置いていくか。と、栞は考える。幸い今は秋。夏とは違い、車内に置き去りにしても、死にはしまい。寝ている間に仕事を終え、寝ている間に会社に戻れば問題なからう。祭り楽しみタコ焼き食べたいとか言っていたが、寝ていたお前が悪いのだと言ってやろう。そうしよう。

だか待てよ……。と、栞は車から出ようとしたところで思いとどまる。もし、自分が仕事を終えるのに時間がかかった場合。こいつは起きるだろう。起きたら置き去りにされたと怒るだろう。そしてこの少女は車で待つという選択をするだろうか。否、この少女は、多分そろそろ小学二年くらいのこの少女は、勝手に車から出て、食べ物匂いにつられ、ふらふら歩き回るだろう。それを捜す労力を考えれば……。

「……あります、起きなさい。あります」

結局栞は、少女、ありますを起こし、一緒に連れていくことにした。

名前を呼びながら、しばらく肩を乱暴に揺さぶると、不機嫌そうな顔をして、ありますが起きた。

「……なに」

「行きますよ。お仕事の時間です」

「……眠い」

「なら、寝ててもいいですよ？ただし、タコ焼きや焼きそばは諦めなさい」

「やだ。食べる」

「なら、行きますよ。お仕事の時間です」

「ん。リンゴ飴も食べたい」

「社長からもらったお小遣いの範囲なら、何でもお食べなさい。私は一切お金は出しませんから。ほら、行きますよ」

栞はポシェットとクーラーボックスの中身を確認し、仕事へ向かった。

1 - 3 文化祭午前の部、校長と教頭（前書き）

今回の章でも、数人、新キャラが現れますが、いつものように後書きで告知できないため、告知なしで登場人物紹介に追加しときます。誰だこいつ。というキャラが出てきた場合は、登場人物紹介にゴー！。

1 - 3 ・文化祭午前の部／校長と教頭／

八尾比丘尼高校 特別棟四階 渡り廊下 10:00～

「……」

山梨小百合は、鈴乃音真音の後ろ姿を見ながら、階段を下りていた。真音の行きたいところというのは、「姉さんの教室です」という事なので、今二人は、生徒棟二階に向かっている。ここ半年、真音と会話する事はあまりなく、今も隣ではなく後ろをついていく間柄の小百合だが、真音が姉思い、というかシスコン気味というのは薄々気付いていたので、小百合にはなんとなく予想がついていた。

小百合は真音の姉、鈴乃音鈴音を見かけた事はあるが、一度も話した事はない。喋った事はないが、知っているし、見た事がある。外見と名前が一致する。全学年の、大半の生徒が、その程度の関わりを鈴音とは持っている。そう、八尾比丘尼高校では、鈴音はちよつとした有名人なのである。

有名な理由に、内面はほとんど関係ない。独特で奇妙なよくわからない性格だから、有名というわけではないのだ。なぜなら多くの生徒は、鈴音の性格を知らないからだ。だから、鈴音が有名な理由の大半は、その外見にある。大半という事は一部は、その奇行が有名な理由な理由なわけだが。

まず、小さい。小百合も初めて見かけた時は、小学生？と、驚いたものだ。小学生並の身長に加えて、目が大きい事も、鈴音の幼い印象に拍車をかける。高校という場において、鈴音は常時浮いているようなものだ。目立たないわけがない。

それに加え、鈴音の独特なファッションが、鈴音を有名にさせた。

いつもどこかしらに鈴をつけていて、目立たないわけがない。たまに風鈴までつけてくるのだから、何だあれは。おい、あいつは何だ、小学生か。何だ知らないのか、あいつは鈴乃音という女だ。鈴乃音？だから鈴をつけているのか。どういう理屈だ。おい、誰か話しかけて見るよ。嫌だ。何か危ない気がする。という感じで、鈴音は本人が知らぬところで、有名になっっているのだ。そして最近、そんな鈴音の側にいつもいる三途舞歌も、ひそかに有名人である。

そんな有名人と、少しお近づきになりたいという気持ちだが、小百合にも普通にある。妹である真音と一緒に、鈴音に会いに行くのは、ちょっと楽しみだし、これを機に、真音と仲良く出来るかな？と、小百合はひそかに期待しているのだ。真音とは前々から仲良くなりたいたいと思っていたのだ。なぜなら将棋部において、香川智弘について、一般人な気がするから。あの場所でのこれからの二年間、平穩に過ごすためには、真音と良好な関係を気付いておいた方がいい気がする。真音は将棋部じゃないけどね！

「ね、ねえ、鈴乃音さん？」

というわけで小百合は、校舎内についての間にか流れていた、運動会で使われてそうテンションが上がる音楽から、ちょっと勇気をもらい、前を歩く真音に声をかけた。お姉さんの事を、ちょっと聞いてみよう。

「何？」

真音は足を止め、振り向き、小百合を見る。優しげでも柔らかいわけでもないし、突き放すようなでも煩わしいというわけでもない、無色透明な『何？』に加え、自分に興味が一切ないんじゃないかと思つような達観した表情に、「うっ……」小百合は怯んだ。

光との会話をよく耳にする小百合は、真音が優しいし結構普通な性格だと知っている。さっきの着替えの時も普通に対応してくれたし、着替えがうまく出来なかった自分を手伝ってくれた。しかし、小百合は真音と会話をしようとすると、緊張し、尻込みしてしまう。それは、年上の大人、例えば教師に何か用事があった話しかけた時の緊張に、似ている。

「どうかしました？」

「あ、あー……いい天気、だよね」

「あ、うん。そうですね。晴れてよかった」

「だ、だよねー……じゃ、じゃあ行こっか」

「？ うん」

早足で自分を追い抜いていく小百合を見て、不思議がる真音。内心恥ずかしがる小百合。いい天気って何なの私ー！

鈴乃音さんはお姉さんとは違った意味で浮いてるんだよ！。大人っぽい。お姉さんの雰囲気の子供っぽいから、鈴乃音さんは大人っぽいのかなあ。うう、話しづらい。

とほほな気分以小百合は二階の渡り廊下へ早足で向かった。ちゃんと真音もついてきている気配があるので、問題ない。

「あ……」

渡り廊下に差し掛かったところで、小百合は早足をやめ、歩みがゆ

つくりになつた。何故なら前方、生徒棟から、校長、八尾比丘尼因幡が歩いてきたからだ。教師とすれ違ふとき、挨拶するべきか、会釈をするべきか、素通りするべきか。いつも悩む小百合である。

「どうかした？」

小百合の歩みが遅くなれば、自然と真音が追いつく。そして追いつかすことなく、隣へ。

どうかしたと言われても、前から校長先生が歩いてきてどうすればいいかわからんから歩みのペースが落ちました。と、言える小百合なら、さつきとほほな気分にならなかつた。困り顔で俯き加減で歩を進めていると、「こんにちわ」と、八尾比丘尼から挨拶された。しかも八尾比丘尼は歩みを止めた。

「こんにちわ」

「こ、こんにちわ」

真音は特に緊張していない様子で、立ち止まり、挨拶を返したが、小百合は緊張気味に挨拶を返す。

「ふむ、あなたたち……」

八尾比丘尼は顎に手を当て、品定めをするように、真音と小百合、巫女服姿の、真音と小百合を見た。小百合はドキドキものだ。八尾比丘尼高校で一番の名人に、ジロジロ見られているのだから。隣の真音が、しれっと立っているのが信じられない。

八尾比丘尼が有名な理由は言うまでもない。理事長兼校長。独特な価値観。そして何より、その美貌。

もうすでに五十を超えていると初めて聞いた時、小百合は恐怖すら

感じた。その外見の若さ。触らずともわかるそのほっぺの弾力性。今も惜し気もなく外気にさらしている、すらつとした綺麗なその生足の美しさ。アンチエイジングにも限度というものがあるだろう。友達から聞いた、校長の血を塗ると美容にいらいらいという噂を、信じてしまいそうになるのも仕方あるまい。

「お二人共、とてもよくお似合いですね。巫女服、カワイイですよ」
「ありがとうございます」

八尾比丘尼はニッコリと笑い、二人の服装を褒めた。八尾比丘尼の若さとその笑みに見とれた小百合は、慌てて「あ、ありがとうございます」

「将棋部ですか。確か、金銀さんのご実家が神社でしたね。金銀さんの案ですか？」

真音が持っているプラカードを見て、八尾比丘尼が聞いた。

「はい。部長が持ってきた巫女服です。少し恥ずかしいんですけど、宣伝になるからと。校長先生は、将棋はさされるんですか？」

「ええ、もちろん。年寄りにはみんな、将棋がさせるものです」

「年寄りには見えません。あ！す、すいません！」

反射的に、口から出てしまった。失礼だったかな？

「何を謝ることがあるんですか？若いと言われることは女性にとつて、いくつになっても嬉しいものですよ。ありがとうございます、山梨さん」

「ど、どうも……」

名前を呼ばれたことに驚きつつも、八尾比丘尼の温かい笑みに、ほっとする小百合。

「校長先生も、お時間があればぜひ」

「ええ、そうさせてもらいます。では、よい文化祭を」

八尾比丘尼は姿勢よく、力強い歩みで、特別棟の方へ。

「……ふう」

八尾比丘尼の後ろ姿が見えなくなるまで見送り、小百合は息をついた。緊張した！。

「ため息ついて……さっきからどうかした？」

「……鈴乃音さんって、凄いな」

「何が？」

何で小百合が褒めるのかわからない。というように、真音は首を傾げた。その仕種が、真音の大人っぽい雰囲気には似合わなくて、小百合はクスクス笑った。

「え、何で笑ったの？」

「ううん。何でもなし。鈴乃音さん、行こっか」

「？ うん」

気を取り直し、二人は並んで、一路、鈴音がいる2 - B教室へ向かうのだった。

八尾比丘尼高校 校庭 職員玄関 校長室 10:10

「いらっしやいませー！！タコ焼きいかがですかー！！」

「どこよりも安くどこよりもうまい焼きそば店はここですよー！！」

「嘘ついてんじゃねえ！！こっちの方が百円安いわー！！」

「……………」

鼎菜は困惑していた。まさかこれほどとは思わなかった。この盛り上がり、去年の文化祭とはもう別物だ。場所というか、次元が違う。クーラーボックスを肩に担ぎ、片手に寝ぼけ眼のありす、片手にポシエットを持ち、校庭から職員玄関へ向かった菜。

車の合間をぬうように歩き、職員棟に近づくにつれ、ありすの目が輝き、菜の気分が沈んでいった。

屋台があったのだ。校庭の砂から、アスファルトに変わるその境目から、ずらーっと、職員棟の前に並んでいた。縁日のように。どう

やら正門の方まで続いているようだ。

縁日のように、屋台が並んでるだけならよかった。栞の機嫌はそこまでブレイクしなかった。縁日のように、人がゴミゴミ集まっているのが、いただけなかった。一般公開前からやってやがったなこの量。

「栞ちゃん。あれ食べたい」

「ちゃん言つな」

「栞。あれ食べたい」

「後にしなさい」

「あれ食べたい」

「仕事が終わったらにしなさい」

「あれ。食べたい」

「……」

さらに栞の機嫌を悪くするのが、この、焼きそばやタコ焼きの匂いを嗅ぎ、睡眠欲から食欲にシフトチェンジした欲望の化身、ありすである。

栞の手をギュッと握り、買ってもらったまで、私は絶対にここを動かない、絶対にだ。というように、足を踏ん張り、栞を睨んでくる。やっぱり置いていけばよかった。

「おい、何だあの子。お姫様か」

「何あの子カワイイ」

「誘拐したいと思わなくもなくもない」

「隣にいんのは、お付きの人？」

「女執事？カツコイイ」

「何あのクーラーボックス。魚でも入ってんの？」

「あれ、食べたい！」

「……」

さらにさらに、周りの視線が栞のうんざり度を上げていく。案の定、ありすの容姿は目立つ。ありすが目立てば、隣の栞も目立つ。誰が執事だ誰が。仕事だからスーツ着てるだけだ。

「……ありす」

「食べたい！」

「ポーチ貸しなさい」

「貸したら食べていい？」

「いいですよ」

「なら貸す」

栞は屈み込み、ありすと視線を合わせる。ありすから、肩にかけているおもちゃみたいなウサギのポーチを受け取り、自分のポシェットから、社長からもらったありすの軍資金（五千円。ガキには過ぎた金額なのでがめようと思っていた金）を、ポーチに入れてから、返す。

そして、肩を掴んで、言い聞かせる。

「いいですか、ありす。私はこれから仕事をしに行きます。あなたと一緒にいきますか？それとも遊んでますか？」

「遊んでない」

「なら、遊ばず一緒に行きますか？」

「行かない。遊んでない。食べてる」

「よろしい。お金はポーチに入れたきました。そのお金で好きなだけ、食べなさい。お金の計算、できますか？」

「ううん」

「じゃあ、仕事の時みたいに立ち振る舞って、どうにかしなさい」

「うん」

「待ち合わせ場所は、中庭……鉄庭にしましょう。特設ステージがあるらしいですから、そこにしましょう。わかりましたか？」

「わかった」

「では、いつてきます」

「ん、いつてきます」

ありすは、栞が肩を離すと、まさに、子供は風の子！というように、人混みの中に走っていた。

「……ふ」

栞は、手早く厄介払い出来た。さすが私。と、自分を内心で褒める。最善だったのは、車に放置してくる事だったが、早いうちにリカバリー出来た。

この状況、車に置いていった場合と同じ面倒が起こる可能性があるが、よくよく考えれば、探すのが面倒ならば、捜さなければいいじゃないか。仕事が終わりに、中庭にありすがいなかったら、そのまま帰ろう、そうしよう。

「……うん」

完璧な解決方法だ。うんうん。と、頷きながら、屋台の匂いや賑やかさを無視し、栞は職員玄関へ。

職員玄関前の階段で座っている邪魔な奴らをぬうように進み、職員棟侵入成功。

「こんにちは」

「こんにちは」

受け付けに挨拶を返し、栞は靴を脱ぎ、スリッパが用意されていた

ので、それを履く。スリッパを忘れていたので、なかつたら素足で廊下を滑るところだった。靴を入れるビニールまで用意してある待遇ぶり、いい事だ。

「パンフレットをどうぞ。来賓の方はこちらにご記入を」

「……」

自分は来賓ではない気がしたが、どうやら職員玄関は来賓が入る場所のようなので、仕方なく記帳しておく栞。ここで断ったら、生徒玄関からお願いしますと言われかねない。そんな疲れる事は嫌だ。というわけで『いっわりななき偽名鷲』と記入した栞。鷲という漢字を書くのに苦労した。

「……」

受け付けの生徒の表情が強張った気がしたが、気のせいだろう。入ってきた時から訝しげにクーラーボックスを見ていたが、今は自分の方を訝しげに見ている気がするが、気のせいだろう。と、栞は思うことにし、気にせず、職員玄関を西へ行ったすぐのところにある校長室へ向かう。後ろから「……まあ、いいか」という呟きが聞こえた。さすがこの高校の生徒だ。栞は信じてた。

校長室の扉の前に立ち、栞は深呼吸。そしてノックを三回する。すると、「ちょ、少々お待ちください!？」と、慌てた様子の、男性の声。ん、校長はいないのか？

校長室の中からは、バタバタと暴れる音と、「静かにしてなさい!」という男性の声がたまにする。何してんだ？

「どうぞ」

数分。校長室の前で待ちぼうけていると、室内から入室の許可がようやくかと、内心ため息つきつつ「失礼致します」

「どうもすみません、バタバタしておりまして……」

校長室には、案の定、校長、八尾比丘尼因幡の姿はなかった。代わりに、栞は名前も覚えてない、苦勞人という印象しかない教頭の姿と、私服姿の……背の低さと雰囲気からいって、女子中学生だろうか。何だか不機嫌そうに、腕を組み、そっぽを向いている。

「……」

密室に中年男性と女子中学生。何だか慌てていた。教頭が困ったところを見られたというように目を泳がしている。栞は思った。そういう趣味だったのか、と。

「えー、あなたは？校長にご用事でしょうか？」

汗をハンカチで拭きつつ、教頭は焦り気味で、早く出て行って欲しい様子だ。

「はい、八尾比丘尼校長に、ちょっと頼みごとがありました」

「頼みごと、ですか。どのような？」

「すみません。内密なことなので……」

言えないような頼みごと。そう、教頭あなたの趣味と同じですよ。

「そうですね……」

教頭は栞を怪しんでいるようだ。やはりスーツとクーラーボックスの組み合わせは怪しいか。社長の言う通り、釣り人スタイルでくればよかったか。と、栞は内心で舌打ちを打つ。

「おいクソ親父！さっさとしろですよ！！」

と、栞が、さらに怪しまれるのを覚悟で部屋を出るかと思っていると、不機嫌そうだった女子中学生がそう怒鳴った。

「こ、こら巡めぐり！お前はまたそんな汚い言葉を！」

慌てて教頭は女子中学生を怒る。

「うっせえクソ親父！！いいからお小遣いをよこせです！！」

「だから小遣いは毎月ちゃんとやっているだろ。我慢しなさい」

「我慢できねえ足りねえやってらんねえの三拍子ですコンチクショウです！！だからこうして遠路遙々やってきたというのにこのクソつたれ親父はです！！このピーでピーなピー！！」

「そ、その規制音はどういう意味だ！？」

「……」

ギヤアギヤアワアワア言い合う教頭と……教頭を親父と呼び小遣いをせびる女子中学生。

栞は思った。これはチャンスだ。

「それでは私はこれで。スキャンダルでお困りのさいは、ここに
連絡を」

栞はポシエットから名刺を二枚取り出し、応接デスクに置いた。

「あ、ちょっとあなた待ちな」「校長は保健室に行つたですよピ
女！神様に感謝しろです！」

「巡！！ふざけるのもいい加減に下さい！！」

「失礼致します」

何故か、教頭をクソ親父と呼び毎月お小遣いを貰っているが足りな
くなったので学校まで取り立てにきた女子中学生が、校長の行き先
を教えてくれたので、栞は一路、保健室へ向かうのだった。

1 - 3 . 文化祭午前の部、校長と教頭、(後書き)

文芸部作成。文芸誌『奇々怪々』から一部抜粋・・・

七不思議？『八尾比丘尼校長』

『八尾比丘尼伝説』

有名かどうかは定かではありませんが、そういう伝説が古来からこの日本では語り継がれています。どのような伝説なのか。知らない方のために簡単に書きますと、『人魚の肉を食べ、八百年以上生きた人間』のお話です。私たちは、この伝説が事実かは知りませんが、私たちは、人魚がこの世にいるかも知りません。しかし私たちは、もう齡50を越えているのに若々しい、まるで老いを知らないような、『八尾比丘尼』という姓を持つ女性を、知っています。

『八尾比丘尼因幡』

私立八尾比丘尼高校初代理事長兼校長。この高校の創始者。彼女に出会えば、誰もが思うことでしょう。若い、と。そうです。彼女はとても若々しい。とても50代には見えません。20代、制服を着たら、10代でも通用するほどの若さ。精神的に若い人は珍しくもないですが、八尾比丘尼校長ほど、肉体的に若い人を、私は知りません。その容貌からでは仕方ないことでしょう。いつしかこのような噂が、まことしやかに、囁かれるようになりました。

『八尾比丘尼因幡があんなに若々しい理由は、昔、人魚の肉を喰ったからだ。だから、八尾比丘尼因幡の肉を喰えば、血を飲めば、永遠の若さを手に入れる事が出来る』

これが八尾比丘尼高校七不思議の一ツ、『八尾比丘尼校長』です。

私たちは、この噂が事実が、本人に確かめに向かいました。八尾比丘尼校長は、快く、お答えくださいました。

八尾比丘尼校長の話によると、『人魚の肉を食べたことはもちろんなく、このような噂は事実無根である』とのことです。この噂を信じ、血や髪を盗もつとする輩が多く、八尾比丘尼校長は大変困っているとのことでした。皆さんも、迷惑はかけないようにしましょう。

しかし、八尾比丘尼校長の家系の女性は、みな若々しく年を取り、長生きしているという事実や、『八尾比丘尼』という姓は、八尾比丘尼校長の祖先が『人魚の肉』を食べたという噂からきているということも教えてくださりました。

それらを踏まえれば、もしかしたら、本人が人魚を食べていなくても、その血には、『人魚の力』が残っているのかもしれない。

だからもしかすると、その血を飲めば……。なんてことも、あるかもしれませんね。

1 - 4 ・文化祭午前の部く心の叫びと語らぬ心く

八尾比丘尼高校 生徒棟二階 生徒棟三階2 - B 10:10

「人、結構いるね」

「そうですね。まだ始まったばかりなのに」

八尾比丘尼因幡と別れた後、山梨小百合は、鈴乃音真音と共に、生徒棟二階を歩いていった。

特別棟の方はあまり展示もないし、まだ始まったばかりだったからか。全く人がおらず、スピーカーから流れる音楽が虚しく響いていただけだったが、生徒棟はすでに多くの来場者がいて、賑わっていた。十時前からいたんじゃないだろうか。

「ちょっとそこのあんた達！ダーツでもどう!？」

「いやいやここはこちらのボール当てに!！」

「って、山梨？巫女服？何で？」

「将棋部と巫女服に関連性は？」

「萌え？」

「あざとい。しかしその手があったか……!!！」

「お化け屋敷は数あれど、一番怖いのはここですよー!！」

「ハアハア巫女さん。写真を一枚、ハアハア」

「こちらの喫茶店にも、カワイイウェイトレス今すよー！」

「ママー。あのお姉ちゃんたちカワイイねー」

「そうねえ、カワイイわねー」

「一緒に写真撮ってー！」

そんな賑わいの中でも、やはり巫女服は目立った。

生徒棟の二階は、一年の教室が多いため、小百合の知り合いも多く、大変恥ずかしい。真音も、涼しげな表情でなんとも思っていないように見えるが、よく見ると若干顔が赤くなっている。プラカードも顔が隠れるように持つてるし、「写真撮影はダメです」と、きつぱり断っている。

しかし、来場者の中には子供も多い。近くに保護者らしき子供もいれば、子供だけのグループもいる。保護者連れの場合は、保護者が子供を制してくれるが、子供だけはそうもいかない。純心無垢な気持ちで写真をせがまれば、小百合は断れないし、真音も無理だ。というわけで、一緒に写真を撮ってあげたりした。

「ハアハア、ぼ、僕もいいかな」と言ってきた危なそうな男子生徒たちは、近くにいた正義感に溢れた男子生徒と女子生徒の連合に駆逐された。集団での暴力が正当化される時というのは、確かにある。

「ふ、二人で行動でよかったよね」

「だね……」

そんな感じで、生徒棟二階から三階に上がるだけの短い距離で、す

で二人は精神的に疲労していた。小百合は心から、真音と一緒によかったと思つた。小百合の知り合い以外の対象は、全て真音がやってくれた。小百合は話しかけられても、しどろもどろになつてしまつが、真音は落ち着いて、うまく将棋部の宣伝までしていた。

「あ、ここです」

色々あつたが、ようやくたどり着いた2-B教室。教室入口には画用紙で『ジャンケンゲーム。無料。賞品あり』と書かれたものが、一枚張り付けてあつた。シンプル。

「ジャンケンゲーム？」

変わった出し物だ。

「うん。ジャンケンして勝つと賞品もらえるらしいよ」

「へえー」

そのままだなあ。と思ひながら、真音に続いて小百合も教室に入る。

「らっしやーせー。記念すべき、三人目と四人目のお客様だし」

教室内は閑散としていた。教室中央には暗幕が引かれており、その暗幕をとりあえず華やかにしてみようとは努力した。という感じで紙花が。黒板や壁にも、余つたからつけとくかというように、紙花が。質素だ。

暗幕の前には、机が五つ、間隔をあけ並んでおり、六人の生徒が座つていた。

小百合たちに、怠そうに挨拶したのは、教室後方の入口に一番近い席に座っていた茶髪な女子生徒。机の上にノートが置いてあるが、受け付けさんだろうか。

その隣にはこれといった特徴がない女子生徒。真音と小百合の巫女服姿を見て「ふわぁ……巫女服もいいかも」と、感嘆の声をもらしている。巫女服も？

その隣にはメガネをかけて携帯をいじっている男子生徒。やる気と興味は感じられない。

その隣の男子生徒は……なぜか机に突っ伏している。寝てるのかな。そしてその男子生徒の隣の席に「姉さん、何してんの……」

「姉さん、座ってるの」

呆れ顔の真音に、何を当たり前のことを？というように答えた真音の姉、鈴乃音鈴音。服装は鈴がちりばめられたワンピース。ちよつと寒そうだ。

「座ってるのって、どうして三途先輩と同じ椅子に？」

そして何故か、椅子取りゲームのように鈴音と同じ椅子に座っている不機嫌そうな女子生徒、確か名前は、三途舞歌で、計六人。五つの席に、六人。

真音は鈴音の側に寄って行った。そうすると、小百合は一人、入口のところで立っていて、さてどうしよう。

「へい、その巫女」

「……私です、よね？」

「すでにそこに、巫女はお前だけだし」

怠そうな女子生徒に手招きされたので、とりあえず、近づく。

「何で巫女服なんて着てんの？」

ストレートな質問である。

「こ、これは部活の関係で……」

「すでにそういう趣味に目覚めてんの？松島の同土か何かなわけ？」

答えは聞いてないのである。

「そ、そういう趣味はありません！」

「な、夏目さん!？」

怠そうな女子生徒、夏目棗の言葉に、小百合だけでなく、これといった特徴がない女子生徒、松島月子も慌てた。

「何だ、そうなのか。残念だったなあ、な、松島？」

「残念って、あ、あの夏目さん？わ、私、夏目さんが何を言ってるかわからないな」

「」
月子は頭の後ろで手を組み口笛まで吹き、そうまるで、秘密を知られたみたいだけど、しらばっくれてみればまだなんとかなるんじゃないかな。という態度をとった。少なくとも小百合にはそう見えただ。小百合は思った。この人、コスプレとかが趣味の人何だ、と。

「すでに、知ってる、し……」

数分続いたノート攻防戦は、棗と月子が、互いに精魂尽き果てたところ、月子が我に戻り、収束した。

「松島あ、お前、もし私が、誰かから聞いたと言ったら、どうする気だったんだよ」

「それはもちろん、精神的な口封じを……あー、はい、自重します」

月子は椅子に座り、恥ずかしいのか、体を出来るだけ小さくして、俯いた。顔は真っ赤だ。

「……君たちは、何をしているんだい？」

小百合の後ろから呆れたような声。

後ろを見ると、いつの間にかいたのか、入口に、メガネをかけた委員長っぽい男子生徒がいた。

それとその後方の廊下には、ギャラリーが出来ていた。多分、月子と棗の騒ぎに何だ何だと集まったのだろう。もしくは、左手に四つ、右手に三つ、計七つのかき氷を持っている委員長っぽい男子生徒を見に集まったのではないだろうか。

何だろうこのクラス。変な人しかいない気がする。

小百合は絶妙なバランスでかき氷を持ちながら歩く委員長を見て、そんな風に思うのだった。

教頭と、教頭をクソ親父と呼び小遣いをせびる女子中学生（仮）がいる校長室から、脱出した鼎栞。

「シャアアアアアアアアアアアアアアアアップウウウ」

廊下を歩き、職員棟一階の端っこにある保健室に向かっていくと、生徒棟の方から魂を燃やしたような大声が聞こえた気がした。廊下の窓や教室の窓、至るところの窓が開けてあるため、声がよく通るのだ。職員棟の方ではあまり出し物がないからか、静かなのだが、生徒棟の方、鉄庭と呼ばれるコンクリートが敷き詰められている中庭の方からは、大変騒がしい声がする。文化祭だからか、テンション上がってるようだ。どうでもいい。

「……………」

保健室のドアをノックする栞。しかし、反応はない。試しにドアに手をかければ、軽快に横に滑る。というわけで「失礼します」

保健室には人がいた。が、それは栞が捜している八尾比丘尼因幡ではなかった。残念。そして、養護教諭でもなかった。

養護教諭がいつも座っているであろう事務イスに座って本を読んでいたのは、サイドテールの制服姿の女子生徒だった。

入ってきた栞を見て、ようこそ。と、歓迎していませんと言わんばかりの笑みを向けた。

「こちらに校長先生がいると聞いてきたのですが」

栞が単刀直入に用件を言うと、女子生徒は、すいません、いません。と、言わんばかりに申し訳なさそうな顔で首を横に振った。

「来たのは、確かですか？」

まさかあの女子中学生（仮）、騙しやがったか。という気分な栞に對して、女子生徒は、はい、来ました。ちよつと前に。と、言わんばかりに頷き、手で『ちよつと』を表し、おしかつたですね。と、言わんばかりに、苦笑した。どうやらあの女子中学生（仮）、嘘はついてなかつたらしい。

「校長先生が今、どこにいるかはわかりますか」

ノーヒントで捜し回るのは遠慮したい栞。自慢ではないが、体力は皆無だ。すでにクーラーボックスを放り出したい。

女子生徒は、しばらく考えるように顎に手を当てた後、お腹に手を当て、保健室の床を指差した。栞には意味がわからなかったので、「わからないんですか」と、聞いた。

すると女子生徒は、まるで苦しんでいるようにお腹に手を当て、保健室の床を指差した後、今度は空いているイスを指差し、そこに座ってはいかがですか？と、言わんばかりに微笑んだ。

栞はジェスチャーの意味を考えた。

「……………校長先生はお腹が痛くて保健室に来た。また戻ってくるから待っていてください。という意味ですか？」

栞の推理に對して、女子生徒は、まあ！正解！と、言わんばかりに、

両手を合わせ、小首を傾げ、ニツコリ笑った。

「……では、そうさせてもらいます」

ちょうど疲れていたところだし、保健室で校長と会えるのは都合がいい。

そう考えた栞は、女子生徒の提案通り、クーラーボックスを床に下ろし、イスに座り、女子生徒が保健室にあった小さい冷蔵庫から取り出したお茶のペットボトルをもらい、代わりに名刺を渡し、一息ついた。

栞がこの女子生徒、橘真希に騙された事に気付くのは、15分後のことである。

1 - 5 ・文化祭午前の部／屋上にカリスマ

八尾比丘尼高校 生徒棟三階2 - B教室 生徒棟屋上 10 : 45 }

「山梨さんごめんね。付き合わせちゃって」

「うっん、全然いいよ。ジュースももらえたしね」

鈴乃音真音と山梨小百合は、生徒棟二階西側階段踊り場にいた。相変わらず注目を浴びている。

なんやかんやで人が集まった2 - B教室。お客が多くなってきたので、真音は姉、鈴乃音鈴音と話してはいられなくなった。小百合もずっと突っ立っているわけにもいかない。というわけで、ジャンケンをして教室を立ち去ったわけだ。

委員長つばい人に説明してもらったが、五人と勝負して勝ち抜いた数によって、賞品をもらえるらしかった。小百合は、じゃあ何で七人いるんだろう。と、思った。委員長つばい人は責任者つばかったので除いたとしても、六人。一つの席に二人座っているあそこに何か問題がある気が。と、考えつつゲーム開始。

結果は、小百合は机に突っ伏していて、なんか怯えていた男子生徒に負け、三人抜き。そして真音は、四人抜き。最後、鈴音と十回程度あいこをした後、バトンタッチした三途舞歌に負けた。十回以上あいこを繰り返していた時、真音が「やっぱり……」と、呆れたような懐かしむような呟きをもらし、舞歌と委員長つばい人が、どうして毎回毎回こうなるんだ……。という苦虫を噛んだような顔をしていたのを見て、舞歌と鈴音が同じ席に座っていた理由、六人な理由がなんとなくわかった気がした小百合であった。

「それで、これからどうしましょうか。山梨さん、行きたいところ、

ある？」

「んー……」

そんなわけで教室から出てきて、踊り場で、小百合は景品のメロンソーダ、真音は烏龍茶を飲みながら、一服していた二人は、さて、これからどうしようか。真音は、缶のオレンジジュースももらったが、それは巫女服につられて来た女の子に上げてしまった。そう、一つの場所にずっといると、人が集まってきてしまうのだ。早々に、次の目的地を決めなければ。

しかし、小百合は特に行きたいところはない。文化祭を回りたいなあと、漠然に思ってるだけで、行ってみたいところはないのだ。ただまあ、体育館に行けば、友人達がいるかもなあとは思っている。友人達とも回りたいなあとも思っている。というわけで、ちよつと体育館に行きたいなああと、思わなくもない。しかし、小百合の友人達と真音は友人ではないので、あれだ。どうしよう。

「とりあえず、上から回りましょうか？」

「あ、うん。そうしようか」

結局、真音の提案で、そういう事になった。妥当な案だ。小百合から提案しなかったくらいだ。というわけで二人は、三階から四階へ。

「あ、山梨さん。屋上で何かやってるみたいだよ」

「ホントだ。風船イベント……？」

四階の踊り場の壁に貼られた一枚のポスターに注目する二人。どう

やら、十一時から屋上で、風船に手紙をつけて飛ばすイベントがあるらしい。主催は天文部とのことだが、そんな部活があることを今日知った小百合であった。「天文部なんてあったんだ……」と、真音も呟いてるので、小百合が無知というわけではない。

「山梨さん、屋上って行ったことある？」

「うん、あるよ」

入学当初、物珍しさで友人達と来たり、昼を屋上で食べたりした。

「そっか。僕、行ったことないんだよね。行ってみたい？」

「うん、いいよ」

というわけで二人は、四階から屋上へ。

「そっいえば鈴乃音さん？」

「ん、何？」

階段を上がりながら、小百合は気になった事を聞いてみることにした。勇気を持って。

「鈴乃音さんって、自分のこと、僕っていうよね。あ、いや、いけないっていう意味じゃないんだけど……」

真音が立ち止まり、困ったような顔をしたので、慌てて言い訳っぽいことを言う小百合。

「やっぱり変かな、僕っていうの」

「う、うん、変じゃないと思うけど、珍しいなーって」

「昔からの癖で、なかなか直らないんだ」

「昔から？」

「うん」

真音は歩き始め、小百合に背を向け言う。

「姉さんがあんな風だから。僕がすっかりしなきゃなあって、思っ
て。私より僕の方が、なんか強そうでしょ？」

「ああ、うん、そうだね」

本当はよくわからない理由だったけど、小百合は理解したことにし
た。へたなこと聞かないようにしよ。

「うわぁ、いい景色」

「だねー」

屋上初体験の真音は、感動の声を上げた。小百合も、秋晴れの空と
清々しい空気を浴びて、気分がいい。

屋上には、長机が四つ程度、その近くにガスボンベが置かれており、
その周りに人が集まっている。親子連れや子供が多いのは、このイ
ベントの内容故だろう。校舎内より人が少ないため、小百合たちに
注目する目も少ない。屋上の開放感もあいまって、リラックス出来

る。背伸びもしちゃう。ああ、気持ちいい。

「おや、真音さんじゃない。久しぶりね」

二人が人が集まっているところに行くと、一人の女性が真音に話しかけてきた。

「あ、さん。お久　りです。来て　か」

「ええ、見ての通り来てたのよ」

「……」

真音に声をかけた女性は、なんとというか、後光がさしているように小百合には見えた。大学生だろうか。動きやすそうな服装や、整った顔立ちに、すらっとした綺麗なたたずまい。この女性の美しさは、モナリザみたいな美しさだ。と、小百合は感じた。普遍的な美しさ。完璧な美しさ。どこか人口的、しかし天然でないと産まれそうもない姿。小百合は光に集まる虫のように、その姿から目を離せないでいた。

「夏祭り　ね。　か？」

「元気だったけど、夏祭り以来というのは間違いね。授業参観の時、文芸部で一度会いました。話しはしなかったけどね」

「ああ　ん。」

「謝ることないわ。そんな時もあるでしょ。覚えていてくれただけで、嬉しいわ」

真音と女性が、何やら会話しているが、小百合の耳には、女性の声しか入ってこない。この声はとても優しく温かく、この声をずっと聞いていたい。この声に従いたい。不思議と、そんな風に思わせる。なるほど、これがカリスマというものか。小百合は、ほづけた頭でそう思った。

「そちらのカワイイ巫女さんは？真音さんのお友達かしら？」

「……へ！？」

自分が話しかけられたと気付くのに数秒かかった小百合。我に帰る。

「あ、山梨小百合さんです。将棋部で、クラスメートなんです。山梨さん、この人は神社神裂さん。ちょっとした知り合いかな」

「いえいえ、ちょっとした知り合いじゃなくて、ちょっとしたお友達でしょ？よろしくね、山梨さん」

女性、神社神裂はニッコリと、眩しい笑顔を浮かべ、小百合に握手を求めた。小百合は恐る恐る「よ、よろしく、お、お願いします」と、握手、というよりちょっと手に触れた程度で、すぐに離れた。なんとというか、美術館の触れてはいけない展示物に触れてしまった感じだ。達成感と同時に、罪悪感。小百合自身にもよくわからない感覚。何でこんな風に思ってしまうんだろう。カリスマパワーだろうか。

「ふーん……？」

小百合の反応が面白かったのか。興味深げに小百合の頭から爪先ま

でを、観察するように見る神裂。

自分より何もかも優れてる人にジロジロ観察されるといふのは、恥ずかしいことこの上ない。穴があったら入りたかったが、なかったので、小百合は真音の背後に隠れた。

「どうしたの山梨さん？」

真音が不思議そうにしているが、不思議なのは小百合の方である。どうしてこんなカリスマ溢れる人と普通に話せてるの？

「ふむ、あなたは丸い」

観察を終えた神裂が言った。「丸い？」

「私とはまた別の意味だね。さて、二人とも、手紙的なものを書きに来たんでしょ？すいませーん」

頭にハテナマークを浮かべる二人を置いて、責任者っぽい人に声をかける神裂。

どういうこと？僕にもわかんない。という会話をアイコンタクトで行った二人のところへ、金髪にメガネをかけた日本人っぽくない女子生徒が便箋を持って近づいてきた。

そして言う。

「ハロー。カワイイ巫女さん達。ってかマジで巫女じゃん。チョー受けるんですけど。とか言う喋り方はマジムカつくんですけど。なんちゃって。はい、天文部部长星空キラリです、キラーン！！もちろん偽名です、キラーン！！ああもう。私も猫先生みたく、星マークを使ってみたーい！なんちゃって。で、何で巫女？え、私がどうして金髪なのか知りたいって？知りたくない。というか聞きたく

もない。じゃあ私も聞いてあげないもんね！！これでおあいこでしょ！！ざまあ味噌づけ、なんちゃって。早口で何を喋ってるかわからないってか、何お前って？だから私は星宮メラリ、メラーン！なんちゃって。はい、これ便箋。これにテキストに書けばいいじゃない！バカ！淋しかった！なんちゃって。じゃ、説明しよう！と、思ったけどなんかそのカリスマフルな方の方がうまく説明してくれる気がするので、バトンタッチ。ってか、あの人何物？マジでやばくない？じゃ、書き終わったら私にプリーズね。あっちはあっちでちびっ子たちと戯れてくるでありんす。マジちびっ子カワイー、将来はサッカーチーム出来るくらい作りたい。まずは相手を見けるのが先だけど！なんちゃってね！！」

「……」

なんか、早口で内容が全く頭に入って来なかったが、とりあえず、便箋を受け取った小百合と真音。

「では、私が説明しましょう」

クスクスと笑う神裂が、説明してくれらしい。自然と背筋を伸ばして聞く小百合。そんな小百合を不思議そうに見る真音。

「とはいえ、説明することなんてあんまりないわね。その便箋に、何か書く。それを風船に結んで、飛ばす。どこまで飛ばるか、どこに着くか、誰が読むか、はたまたどこにも着かず、誰にも見られず、塵になるか、藻くずになるか。わからないけど、こういうのって、素敵よね」

うんうん確かに素敵だ。と、小百合はうんうんと頷く。神裂が言うなら素敵に違いない。

「内容は何でもいいんですか？」

「ええ。ちゃんとした手紙でもいいし、ポエムだって構わない。子供達はどうかやら、短冊と同じ感覚みたいね。願い事を書いてる子が多いみたい」

「名前とかは、書かなくてもいいんですよね？」

「……」

神裂と平然と話せる真音が凄いなと思うと同時に、何だか妬ましい小百合だった。どうしたんだろう私。

「書いてもいいし、書かなくてもいいわ。自己責任。まあ、この」時勢、書かない方がいいと私は思うわね。わかったかな？」

「わかりました」

「山梨さんは？」

「へ、あ、わ、わかりました！」

「そうは見えないけど、その返事ならわかったという事にしましょう。さつ、カワイイ巫女さんたち。見えない何かに、手紙を書きましようか」

ニツコリと笑う神裂のその笑み、その姿は、なんかもう完璧。小百合、みとれちゃう。真音が、若干引き気味なのにも、全く気付かないくらい、恋する乙女な感じであった。

1・5・文化祭午前の部／屋上にカリスマ（後書き）

七不思議？ 『屋上』

『屋上』

皆さんは、屋上に行ったことがありますか？ この高校は珍しいことに、生徒棟の屋上が開放されています。天気がいい日は、上を見ればいつもは遠い青い空が間近に見えて、いつもは見えない遠くの風景まで見渡せて、素晴らしい眺めですよ。まだ行ったことがない方は、ぜひ、行ってみてください。ただし、風景を見るのに夢中になって、落ちないようにご注意ください。屋上には落下防止用のフェンスが設置されていますが、それでも注意してください。高いところに昇ると、降りたくなるのは当然ですけど、安全なところからにしてください。

どうしてこの高校は屋上が開放されているか。疑問に思ったことはありませんか？ 小説や漫画では、屋上は開放されているのが常ですが、現実では、安全性を考慮し、屋上は立ち入り禁止になっていることが多いのです。しかし、この高校は、開放されています。『自由』が売りだから。そう思っている方も多いでしょう。その通りです。『自由』なのです。この高校は『屋上から飛び降りる自由』を認めているのです。だからでしょう。こんな噂がこの高校にはありません。

『高校成立当初。屋上にフェンスは設置されていなかった。誰も飛び降りる状態にするために。しかし、ある時、何かに呼ばれるように校内に侵入した犬が、何かに導かれるように屋上に上がり、飛び降りて死んだことにより、フェンスが設置された』

これが八尾比丘尼高校七不思議の一ツ、『屋上』です。

私達はこの噂の真偽を確かめるために、八尾比丘尼校長に話を聞きに行きました。八尾比丘尼校長のお答えはこうでした。

『事実です』

そうです。この噂は、事実だったのです。事実、高校成立当初は屋上にフェンスはなく、誰でも『自由』に飛び降りることが出来るようにしていたようです。しかし、ある時、犬が飛び降りてしまい、色々な方面から苦情が来たので、しづしづ、八尾比丘尼校長はフェンスを設置したとのことでした。

しかし、その設置したフェンスもただのフェンスであり、高さも背が高い男子なら簡単に越えられるようなものです。飛び降りようとすれば、誰でも簡単に、『自由』に飛び降りることが出来るのが現状です。

確かに、死ぬのはあなたの『自由』です。ただし、あなたの命があなたの一人の『自由』に出来るわけではないことを、忘れないで下さい。もし、そのことを忘れて屋上に行ったら、あなたは抗えないかもれません。死という『自由』に。

そしてあなたは、あの犬のように……。なんてね。

1 - 6 ・文化祭午前の部（上機嫌と不機嫌）

八尾比丘尼高校 生徒棟屋上 鉄庭特設ステージ 11:00

「山梨さん、大丈夫？」

「え、な、何が？」

「何がって……なんか、さっき様子が変わったから」

「へ、変なのは鈴乃音さんの方だよ！どうしてあんな平然としてられるの!？」

おかしいのも変なものもそつちだー！という事にして、羞恥心を和らげようとする山梨小百合と、「ど、どうしてと言われても……」と山梨さんってこんな人だっけ。と、困り気味の鈴乃音真音は、生徒棟を回りながら、神社神裂のオススメに従い、特設ステージが作られている、鉄庭に向かっていった。

便箋に何かを書いて、風船で飛ばすことになった、小百合と真音。特に書くことも思いつかなかったため、小百合はテキストに『世界が平和でありますように』と、書いておいた。真音が何を書いたか気になったので、盗み見ると『姉さんがちゃんとなりますように』と書いてあった。見なかったことにした。

書いた便箋は風船にくくりつけられ、十一時くらいに空に旅だった。色とりどりの風船が、数十個、空に飛んでいくのは寂しいような、懐かしいような、不思議な感じだった。

金髪の女子生徒（天文部の部長さんらしい）は、「ハッハー！本当は一回だけにしようかと思ってただけ、なんかすっごい好評じ

やん！どうするどうするこれどうする？一時間毎やっちゃう？やっちゃうやっちゃう！その勢いで景品もいただきマウス！なんちゃってねー！」と、ご機嫌だった。

そんな感じでイベントが終わり、小百合と真音は他のところを回ることにしたわけだが、神裂は屋上に残った。

「特設ステージに行つてごらんさい。多分、楽しいものが見られるわ。若葉紅葉によるしくね」

子供たちのために、天文部が用意してあつた風船を使い、バルーンアート（犬とか）を作りながら、神裂が意味深な笑みを浮かべながら言ったその言葉に従い、二人は鉄庭を目的地として、生徒棟を回っているのだった。

四階で、巫女服でダーツをしてスナック菓子を手に入れ注目を浴び、三階で、巫女服で2-Bを再度覗きに行つたらすでに鈴乃音鈴音の姿はなく注目を浴び、二階で、巫女服で輪投げをして豚さん貯金箱を手に入れ注目を浴び、二人は今、生徒棟一階の廊下を歩きながら、注目を浴びていた。注目を浴びてはいるが、将棋部の方の宣伝になつているかは、定かではない。

「あの、鈴乃音さん？」

注目を浴びるのにも、だいぶ慣れてきたが、恥ずかしいことは変わらない。生徒棟一階は、一般入口があるためか、二階や三階よりも人が多い気がする。

心なし早足で、俯き加減で歩きながら、小百合は真音に聞く。

「か、神社さんが言つた若葉紅葉によるしくねって、どういう意味

なのかな」

「ああ、あれは」

真音は、横を通り過ぎたクーラーボックスをしんどそうに持っている女性を不思議そうに見ながら言う。

「神社さんの友達の名前が、確かそんな名前だった気がするから、鉄庭で若葉さんが待ってるってことじゃないかな」

「あの人の友達かあ……」

さぞ、凄い人だろう。と、小百合は思った。

「でも、何でその人が何で私たちを待ってるのかな」

「さあ、僕にもわかんない。そもそも、本当にいるのかな？」

そんな会話をしつつ、二人は生徒棟一階から、職員棟へ向かう渡り廊下へ。そこから鉄庭に入った。

「人、結構いるね」

「うん」

鉄庭に人が、結構いた。

鉄庭は段になっており、職員棟の方が少し下がっている。その下がついているところに、パイプで組まれた特設ステージが作られていた。ステージ前に設置されベンチは、ほとんどうまっており、段差に座っている人も多くいる。

ステージではちょうど何かのイベントの準備をしており、忙しく作業をしていた。

特設ステージから上がった場所には、金魚すくいやかき氷売り場など、少ないが屋台もあり、ベンチも多く置いてあるため、休憩している人も多い。

「とりあえず、かき氷でも食べる？」

「うん。そうしょっか」

若葉紅葉がどこにいるかわからないし、そもそもいるかもわからない。とりあえず二人はかき氷でも食べることにした。祭りといえば、焼きそばタコ焼きかき氷。暑くなくてもそれは変わらないのだ。

「あららら！その巫女さん！」

かき氷（小百合はメロン、真音はイチゴ）を買って、とりあえずどっかで座って食べようかなと思っっている二人に、声をかけた人物がいた。

「あ、猫猫先生」

「本当だ」

声がした方を見ると、生徒棟に近いとこのベンチに、白衣を着た保健医、猫猫子猫がいた。

「こんにちわ猫猫先生」

「こんにちわ」

「はい、こんにちわ カワイイわねえ。グッジョブ砂銀君」

小百合はあまり、猫猫と話したことはないのだが、猫猫の噂はよく聞いている。いつも元気で、どんな悩み事も真摯に聞いてくれて、ちよつと変だけど、いい先生。確かに、校舎内でたまに見かける猫猫は、いつも元気で、楽しそうだった。それは今も変わらない、というかいつも以上に元気で楽しそうで、幸せそうなのだが……。

「……あの、猫猫先生？」

「ん、なあに？」

隣の真音も、小百合と同じ疑問、というか気になってくれたらしく、「隣の子は……？」と、猫猫に尋ねてくれた。

そう、猫猫はベンチに一人ではなかった。隣に、おもちゃみたいなウサギのポーチを肩から下げ、絵本から飛び出して来たお姫様なんじゃないだろうかと思うような白いフリフリなドレスを着て、輝夜姫のような綺麗な黒髪をしている、小学校に入っているかどうかくらい、少女（童女でも可）がいたのだ。

そんな将来が楽しみな少女は、その幻想的な外見に似合わず、タコ焼きのパックを小さな膝に乗せ、右手に焼きそばパック、左手に割り箸、口の回りに青のり散らし、頬をめいっばいふくらませ、多分焼きそばをモグモグ食べていた。

「あ、この子？カワイイでしょ？」

猫猫は幸福の絶頂にいます。という感じの笑顔を浮かべ、少女の肩に手を回す。少女が鬱陶しいそうに猫猫を見たのを、小百合は見逃

さなかつた。

「えっと、猫猫先生の娘さん、ですか？」

結婚している、子供がいるという噂を聞いていなかったが、そんなのかな？と思って小百合は聞いた。

「違うわ」

「そ、そうですね……」

固い表情で、きっぱりと、バツサリと、否定され、少し戸惑う小百合。何か、悪いこと言ったかな。

「じゃあ、迷子か何かですか？」

真音が他の考えれる答えを聞くと、猫猫はまた、さっきのように楽しげな表情に戻り、「その通りよ真音ちゃん」と言った。

「私が校長から逃げてさ迷い、外の屋台ゾーン歩いていたら、この子が男子生徒に囲まれていたのよね。それを見て私は思ったわ。可愛い誘拐したい、じゃなくて、男子生徒の青春が暴走している！止めなければ！というわけで、男子生徒達に教育的指導をして、好きなもの買ってあげるから私をお母さんと呼んで？って言ったら、お母さん、タコ焼き食べたいとか言うもんだから、かーわーいーいー！」

キヤー！と、感極まった猫猫は少女に抱き着く。急に抱き着かれ「むぐっ」と、焼きそばがのどにつまる少女。焼きそばのパックは落とさない。しかし膝の上のタコ焼きも危ない。真音が気をきかせて

回収。

「まあ大変！大丈夫？」

猫猫に背をさすられ、白衣のポケットから出てきたオレンジのジュースパックを飲ませてもらい、ことなきを得た少女が、ふー。と一息ついて、膝の上が軽くなっていることに気付き、慌てて周りを確認して、真音が手に持つてるのを見つけ「んー！」真音を指差し「立腹。」

「こら真音ちゃん！こんなカワイイ子からタコ焼きを奪うなんて！」

「いや、奪ったわけではないんですけど……ごめんね？」

真音は理不尽に怒られた。しかし謝る真音は出来た人間である。タコ焼きを少女の膝の上、では、またさつきみたいな危険がありそうなので、少女の横に置く。少女は全くもう。というように膨れっ面のまま、先に食べる事にしたのか、食べかけの焼きそばを膝の上に置き、タコ焼きのパックを手に取った。そして結構大きなタコ焼きを一口で口に入れた。ハフハフした。まだ熱かったようだ。

「ああもう、ダメよ？ちゃんと冷まさないと。ほらほら、ここにペいっとやって」

「うー……」

「私が分解してフーフーして、食べやすくしてあげるからねー……はい、フーフー。あーんしてねー」

「んー……」

「おいちい？」

「おいしい」

「もう一個食べる？」

「ん」

猫猫と少女のやり取りは、それはもう、ほほえましい、心温まる系のやり取りなのだが……。

「ね、ねえ、鈴乃音さん？」

「ん？なに？」

プラカードを校舎に立てかけ、猫猫と少女ではなく、特設ステージの方を見ながら、かき氷を食べてる真音は、猫猫と少女については、もう考えないことにしてるように見えた。しかし小百合はそんなぱつぱと割り切れるもの人間ではないのだ。

「さっきの猫猫先生の言ってた事何だけど……」

猫猫には聞こえないよう小声で、真音に聞く。

「この子はつまり、迷子なのかな？」

「多分そうなんじゃないかな。もしくは、猫猫先生が誘拐してきたか」

クスツと真音は笑うが、笑い事じゃない気がする。

「迷子なら、放送かけた方がいいんじゃないかな？親御さんも、心配してるだろうし」

真つ当な提案である。

「んー、そうだけど。あの子目立つし、放送しなくても、ここにいれば見つかるかもしれないって、猫猫先生は考えてるんじゃないかな」

「確かにそうかもだけど……」

真つ当な意見である。意見であるが……。小百合はちらつと、後ろの猫猫と少女を見る。

「ねえ、お母さん」

「あん、お母さんだなんて……なあに？」

「わたし、かき氷も食べたい」

「今すぐ買って来るわー！」

「イチゴがいい」

「合点承知よ！やいこらてめえら邪魔だどけえー！！」

「……」

人を吹き飛ばしながらかき氷屋台に突撃していく猫猫が、そんな事を考えているようには見えない小百合であった。

「……………」

ベンチに座っている少女と目が合った小百合。少女はしばらく小百合を見つめた後、焼きそばに手を延ばし、食べ始めた。お前より焼きそばの方が価値がある。と言われたみたいで、ちよっとシヨックな小百合であった。

「Ladies and Gentleman!!お待たせしました!それではこれより、皆さま待ちに待った、あれを始めたいと思います!テンション上げて行こうぜ!Yeah!!!」

「……………イエイ!!!」

特設ステージで、何か始まるようだ。小百合は心の中で、イエイ。と呟きながら、かき氷を食べた。

八尾比丘尼高校 生徒棟一階 特別棟一階 11:30

「……………イエイ!!!」

「……………」

鉄庭の方から、若さに任せテンションを上げている声が聞こえたが、気にせず鼎棊は特別棟の方へ、足を進めた。

保健室でいくら待っても校長が現れないので、おかしいなと思った棊は、サイドテールの女子生徒に色々と質問してみたところ、一度たりとも明確な答えをもらえなかったため、あかんわこれ。と察し、保健室を後にした。

手掛かりを失った棊は、とりあえず一階からしらみつぶしに捜すことにした。なぜ一階からなのかというと、階段の上り下りはしんどいからだ。

保健室を出て、まずは、もしかしたらすでに戻っているかもしれないと考え、校長室のドアを少し開けたところ「一万じゃないとやです！」「約束と違うだろ！」教頭と女子中学生（仮）がまだ金額の事でもめていたので、気付かれないように静かにドアを閉めた。事務室にもいなかったため、生徒棟へ向かった棊。

途中、鉄庭にいるかもしれないと、渡り廊下から眺めたら、ありすが養護教諭と一緒にいるのを発見。校長は保健室に行ったらしいので、養護教諭に話しを聞けば、手がかりが掴めるかもしれないとも考えたが、ありすが側にいる時に、あの養護教諭に話しかけると、面倒なことになりそうだったので、話しかけずスルーして、生徒棟一階へ。

最初のうちは、廊下を歩いている暇そうにしている生徒に声をかけ、教室に入り暇そうにしている生徒に声をかけ、校長の情報を求め、お礼に名刺を渡すという事をしていただけだが、全く情報がない。そうこうしているうちに疲れはて、人に声をかけるのも面倒になった棊は、生徒棟一階の教室を回るだけになった。結果、見つからなかった。ので、特別棟へ行くことにした。

もう疲れた。しんどい。休みたい。

と、思いながら栞が、渡り廊下を歩いていると。

「ほら、ちゃちゃっと歩く！」

「うう、もつとお姉ちゃんと話してたかったですのに」

前から巫女服を着た二人組が歩いてきた。そういえば、さっきも巫女服の二人組とすれ違ったような。

「すみません」

力を振り絞り、声をかける。

「はい、何か！？写真撮影はNGですよ！？」

二人組の背の高い方、何だか機嫌が悪そうだが、そっちに声をかける。小さい方は、なんかダメそう。だってポップコーン抱えてるし。と、栞は直感で判断した。「その箱、お魚が入ってそうですのー」直感は正しい気がした。

「校長先生を見ませんでしたか？」

「文芸部に寄ったという話を聞きましたけど何か！？」

「いえ、何も。これはお礼です。解決して欲しい悩みがあったら、ご連絡ください」

栞は、背の高い方と、ついでに小さい方にも、名刺を渡し、二人が困惑している間に歩き出す。

なるほど、文芸部か。さすが巫女。神様と繋がってるだけはある。

栞は目的地を把握し、少し元気が出た足で、一路、文芸部を目指す。

1・7・文化祭午前の部〜二ツ目〜

八尾比丘尼高校 生徒棟屋上 鉄庭特設ステージ 11:30〜

「Ladies and Gentleman!!お待たせしました!それではこれより、皆さま待ちに待った、あれを始めたいと思います!テンション上げて行こうぜ!Yeah!!」

「『イエーイ!!』」

特設ステージで、何か始まるようだ。山梨小百合は心の中で、イエーイ。と呟きながら、かき氷を食べた。

「Yes!!お前らが頑張って盛り上げてくれて俺っちも嬉しいぜ!おっと、一応自己紹介しとくかな!三年生と、十時からここにいた奴らは知っていると思うが、この場の司会運営を生徒会長から頼まれた、実質二人の放送委員、放送委員会委員長!!北本十条!!きたほんじゅうじょう今日一日は俺が進行するから、そこんとこ、よ・ろ・し・くー!!」

「キヤー!頑張って十条くーん!!」

小百合の後ろから、黄色い声援が。

後ろを見て確認すると、いつの間に戻ってきたのか。かき氷を買いに行っていた猫猫猫がベンチに座っていた。隣にいる少女はかき氷(色からしてメロン)を持ち、目をギョツとつむって足をバタバタさせている。かき氷をかきこんだのだろう。

「まさか先生から声援をいただけるとは!しかし年上趣味がない俺は全然嬉しくありません!!」

「十条君、後で保健室に来てもいいわよー！」

「全力で遠慮します！」

猫猫と北本十条の掛け合いで、笑いが上がる。

「さてさて時間はさしておしてねえけども、猫先生の餌食になりたくないからさっさと始めていこうか。特設会場イベント第二段！お前ら何かはわかってるか？」

パンフレットを見ていないが、ステージを見れば、小百合にも何のイベントをするのかわかる。ステージ上には、五つの机。その机の上に、赤いお椀が一つ。そしてその後ろに同じお椀をたくさんのお盆を、やる気なさ気に持ち佇む男女五人。恐らくこれは。

「そう！これから行うのはかの有名な、わんこそば、早食い競争だー！！！」

うおー！という歓声があがる。サクラでもいるんじゃないかというテンションの上がりようだ。

しかしわんこそばか。有名だけど実際に見たことはないなあ。と、小百合は興味がわいた。横にいる鈴乃音真音も「わんこそばかあ」と、興味ありげな呟きをもらした。

「念のために説明するぜ！わんこそばを食べる！お椀に追加される！また食べる！それだけだ！わんこそばっていうのは、一般的には腹いっぱいになったら終了だが、どんだけ食うかわからねえし、時間もねえし、今回は五十杯。五十杯を一番早く食べた奴の勝ちだ。なぜ五十杯かというと、女性の平均数がそのくらいらしいからだ」

五十杯かあ。そんなに食べれるかな。と、小百合はかき氷を食べながら半信半疑。

「それじゃあ……っと、始める前に言っておかなきゃいけない事があつたな。えーっと、メモメモと……」

ポケットから紙をとりだす北本十条。

「今回このイベントで使うわんこそばは、本校体育教師、更科蕎麦先生の実家から格安で提供していただきましたー。あざーす。えー、更科先生の実家は、隣町で、更科蕎麦店を営業しており、盛り蕎麦を始め、各種、おいしい蕎麦をリーズナブルなお値段で販売しています。お近くにお寄りのさいは、ぜひ、お立ち寄りくださいとのことです。宣伝でしたー。あ、あと、更科先生からもコメントをいただいています。えー、メン類の中で、私は蕎麦が最も好きではない。メン類で一番好きなメンは……あー、自主規制！気にすんなー！」

「あの女あ、校長は私よりあつちに説教するべきだろ……」

後ろで怨念こもった呟きが聞こえたが、小百合は聞かなかったことに。「どうして自主規制なんだろうね」と、純真無垢な真音の疑問には、首を傾げて苦笑い。「お母さん、わたしラーメン食いたい」「そっかあ、でもさすがにラーメンは売ってないから、今度お家に来た時食べさせてあげるわね」という後ろの会話は、やはり聞かなかった事に。

「えっとそれから、今回使用するお椀は、本校美術教師、花畑絵画先生から一部提供していただきました。あざーす。花畑先生からもコメントをいただいています。えー、お椀は実家からかっぱらってき

たものです。高いらしいけど、ぞんざいに扱ってください。それから園芸部は文化祭中、中庭において花の販売をしています。興味がある方はお越しください。それからそれから、特別棟一階美術室において、美術部の作品展示もしているので、お立ち寄りくださいとのことです。えー、まあ、とりあえず、協力してくれたお二人の先生に拍手でもしとくか！はい、拍手！ありがとう先生！」

わー、パチパチー。と、まばらにあがる拍手。

「よし、宣伝も終わったんで早速始めたいわけなんだが。このイベントは先程の、即席カップルドキドキパラダイス同様、飛び入り参加全然オツケー！っか！誰か飛び入り参加して！いない場合は無理矢理連れてきたやる気が限りなく零に近い奴らだけだから！さあ！わんこそばに挑戦したい奴は天に向けて拳を上げる！先着五名までだー！！」

ざわざわとざわめく観客。お前参加してみればー。えー、お前がすればいいじゃん。とか、そんな事を言い合っている。

小百合が隣の真音を見ると、真音もこっちを見ていた。「参加する？」「私はいいや」「僕も」簡単な会話を終え、真音の視線はまたステージへ。小百合もそれに習う。

「あ、ちよつとどこ行くの」

猫猫の慌てた声。後ろを見ると、ベンチから立ち上がり、どこかへ行こうとしている少女を、猫猫が腕を掴んで止めている。

「そば食べる」

少女はステージを指差し、参加する意思を示した。

「ダメよダメ。急いで何かを食べるなんて、体に悪いわ。それにまだ、タコ焼きもかき氷も焼きそばも残ってるじゃない。ちゃんと食べないとダメよ」

「そば食べたら食べる」

「先にこっち食べてからにしないで」

「なくなっちゃう」

「大丈夫よ。なくならないわ。ほら、座ってね」

「やー!」

少女はどうしてもわんこそばに挑戦したいのか。座らせようとする猫猫に抵抗し、「たーべーるー!そば、たーべーるー!」と腕を振り回す。その必死な様子に、行かせてあげればいいのに。と、小百合は思った。

しかし「お母さんの言うこと聞きなさい!」と、言っている猫猫は行かせる気はないようだ。先生、この子のお母さんじゃないでしょ。と、小百合は心の内でツツコミ。

「いや、お母さんじゃないでしょ。何やってんだよあんたは……」

そこに、小百合の内心を代弁したかのような呆れ声。

いつの間になっていたのか、両手に水風船を装備した女性が小百合の横にいた。全然気付かなかったぜ。

「あ、紅葉さん。いつの間に?」

小百合同様、傍観者に徹していた真音が名前を呼ぶ。

「紅葉さん……あ！神社さんの友達っていう……？」

「そうだけど……何、神裂の知り合い？」

水風船をバンバンさせながら、女性、若葉紅葉は小百合を訝しげに見るが、「まあいいか。若葉紅葉。よろしく」すぐに見るのをやめ、猫猫に近づいていった。紅葉を見た小百合の印象は二つ。気が強そうと、あの人の友達っぽくはないな。

「あら、紅葉ちゃん。お久しぶりねー」

「どうもどうもーっ」と

紅葉は笑いながら猫猫に挨拶をしながら、左の水風船を猫猫の顔面に繰り出した。猫猫が反射的に顔を守った。その結果、少女を掴む力が弱まり、少女が抜け出す事に成功。しかし少女はその拍子に尻餅をついた。慌てて真音と小百合が駆け寄る。「痛い？」「大丈夫？」と、真音と小百合が聞くが、少女は答えず、うつむきフルフル震えている。泣くのを我慢してる気配がする。

「全く、何やってるんですかあ、猫猫先生。母親ごっちは相手の許可を得てやらないとダメでしょ〜？」

「ふん」

紅葉が明らかに馬鹿にし挑発したが、猫猫は腕を組み、そっぽを向くだけで何も言い返さなかった。

「あ、大丈夫？」

少女が立ち上がった。拳を握りしめ、涙をためた目で猫猫を睨んだ。あ、泣く。と、小百合は思った。

「はいはい！！参加しますよー！」

と、今にも泣きそうな少女の手を水風船をつけながら器用に掴み、紅葉が手を上げた。そしてそのまま引きずるようにステージへ向かう。

「おっと！まさか本当に参加者が出るとはー！！かわいらしい女の子と勇ましい感じのお姉様だー！勇気ある参加者に、盛大な拍手をー！」

わーわー、パチパチー。と、沸き起こる拍手の間を抜け、紅葉と少女がステージに上がった。遠目でわかりにくいですが、ステージに上がった少女の目に涙はないようだ。切り替え早いな。

「先生、行っちゃったけどいいんですか？」

真音が不機嫌そうにステージを見る猫猫に聞いたが、猫猫はノーコメント。

「さあ、後三人だ！わんこそばに挑もうという勇者はいないのかー！いないかー！いないのかー！いるだろー！いてくれよー！盛り上がって行こうぜー！」

「私も参加するわー！！」

十条の呼びかけに答えたのは、誰であろう猫猫だった。

「さあ行くわよ真音ちゃん。山梨ちゃん、荷物見ててね」

「…………え？」

何故か真音の手を取り、ステージへ向かう猫猫。引きずられる真音が、小百合の方を『え？何で？どうして？助けて』というように見たが、小百合は目をそらした。わかるわけがないし、ほら、荷物見ててと頼まれちゃったし。

「さらに二人の立候補！保健の先生が白衣を着ているのはわかるが、少女が巫女服を着ている理由は何だ！気になる、気になるが、とりあえず今は拍手ー！」

わーわー、パチパチー。と拍手が起こる。ステージ上がった猫猫は紅葉と何だか火花を散らし、この雰囲気で、僕は参加しません。とは言えない真音は恥ずかしいのか俯き加減で佇み、少女は赤いお椀を食い入るように見ていた。

「さてここまで来たらもう一人！もう一人出てきて欲しい！誰かいないかー！ロリータ、姉気質、白衣、巫女服の中で戦いたい奴、戦える奴はいないかー！」

何だその言い方。いないだろー。という空気が流れた会場に「ここにいるわ！」という勇ましい声が上がった。

人を掻き分け、ステージに上がったのはパンツルツクなスーツを来た女性だった。

「ま、またあんたか……つて、ちよつと!？」

ステージに上がった女性を見て、嫌そうな声をもらした十条から、女性はマイクを奪った。

「私の名前は南穂波!二年B組の若葉枯葉とお付き合いしている南奈美の母親です!さあ役者は揃ったわ!勝負よ未来の娘とエセ母性!まとめてかかってきなさい!にゃーはっはっはっはっ!」

そしてこのマイクパフォーマンスである。ポカーンである。

「おおお前はどんな名乗りを上げてんだこらあ!」

一瞬のフリーズの後、紅葉が女性の胸倉を掴んだ。

「お、落ち着きなさいよ、二年B組若葉枯葉の姉であり私の未来の娘である若葉紅葉さん!」

「とりあえずマイクを離せー!」

どうやらあの女性、南穂波は紅葉の知り合いらしい。が、二人の関係を知らない小百合を始め、多くの観客はポカーンである。え、なに、カップルの保護者同士のな?

「まあまあ落ち着きなさいな、小姑」

「お前は黙ってる犯罪者予備軍!」

「そつだそつだ!。これは私たち南家と若葉家の問題だ!。ごっこ遊びに興じてる子猫は黙ってる!」

「じつこ遊びに負けるお母さんの方が黙ってるべきではありません？」

「にはははは、なっぐりてえ」

「私は外堀から埋めようとするあんたを殴りたい」

「じゃあ私は紅葉ちゃんを殴るわ」

ステージ上で火花を散らす三人。「あ、まだダメだよ」待ちきれずわんこそばを食べようとすると少女を止める真音。「あーもう、どうすりゃいいんだよー」と、ぼやく十条。なんかわからないけど盛り上がってんな！という感じの観客たち。

「はいはいストップストップストップ！！」

勇気を出して一触即発な三人を止める十条。マイクは取り返しました。

「お三人！よくわからないが、勝負はわんこそばでつけるって事で一つよろしく頼みます！！」

「仕方ないわね。若さを戒めるのも年長者の義務よね」

「断る理由はないわ。真ん中が最強ってこと、教えてあげる」

「いい度胸だ。おばさん共には絶対に負けねえ」

穂波（四十代後半）と猫猫（ギリ二十代）と紅葉（二十代前半）は、

案外すんなりそれで収まってくれた。ホツとする十条。

「あーったく、割に合わねえぞ明石……えーっと、んじゃまあ！
！わんこそば早食い大会を始めんぞー！！」

仕切り直しとばかりに、十条は大声を上げた。それに呼応するように、観客が拍手。

小百合は拍手をしながら、食べ終わったかき氷を捨てるため、ゴミ箱がないか捜していた。

つまり小百合はステージから目を離し、別の事を考えていた。そのせいで、気付くのが遅くなった。

「それじゃあ、あー、一応自己紹介を」

十条が自分の一番近くにいた穂波、は、さっき勝手に自己紹介したので、紅葉から名前を聞いて行こうと思った。

その時異変が起きた。

最初に異変に気付いたのは、いや、最初の異変は、少女だった。

わんこそばが入ったお盆をよだれを垂らしながら見ていた少女が、急に上を、生徒棟の屋上を見た。見つめ始めた。

次に気付いたのは、その少女の近くにいた真音だ。少女に釣られるように見上げ「何あれ……」と呟いた。

次に猫猫、紅葉、穂波と、ステージにいた者が次々に、見上げた。

「何だありゃ」

そして十条の呟きがマイクを通し拡大され、異変が観客にも広まる。

ステージの方を見ていた観客が、振り返り、生徒棟を見上げる。そして、悲鳴が上がる。

少女が最初に気付いてから、悲鳴が上がるまで、数十秒。

小百合は悲鳴が上がった時、ようやく異変に気付いた。みんなが自分の上の方を、いや、生徒棟を見上げている。何だ？

「山梨さん上!!」

上？

真音は危ないという意味で叫んだのだろうけど、小百合はただ、上を見た。

上を見た小百合の目につつたのは、青い空ではなく、黒い影。

なに。

悲鳴は遠くに聞こえ、影はゆっくりと大きくなる。

「犬だ!」

その声だけが、不思議とはつきり聞こえ、ただの黒い影が、はつきりと犬に見えた。

ああ、犬が落ちてきているのか私の上に。

それを人事のように理解した途端、影が視界いっぱいに広がった。

ぽふん。

という軽い音と共に、小百合の顔面に、犬の形をしたバルーンが当たった。

1 - 8 ・文化祭午前の部々終わりと終わり々

八尾比丘尼高校 特別棟三階文芸部部室 11:30

「……死ねる」

巫女からの情報を頼りに、特別棟三階にやってきた鼎栞。三階までたどり着くので、すでに精魂尽きかけている栞の、廊下の壁にもたれかかりクーラーボックスを引きずりながら歩くその姿は、亡者に近かった。

文芸部にいなかったら休憩する。という決意を固めながら、栞は文芸部に辿り着ついた。ドアも開いていたし、疲れが極限だったので、ノックをせず入室。

「いらっしやいませー。あ、鼎先輩こんにちわー」

「……」

部室に入ると、ぼかぼかした声で出迎えられた。名前は忘れたが、栞が文芸部部长であった時にいた後輩の一人だ。もう一人は固い表情で会釈してきた。こっちも後輩だ。そしてこっちの名前は覚えていた。確か、冰山つらら。いつも人を警戒している女だったが、それは今も変わらないようだ。昔より臆病さが前面に出ているようだが。

部室にはその二人だけ。二人が並んで座っている前には長机が置かれ、その上には薄い文芸冊子の山が四つ。『一冊二百円』と書かれた紙が机に貼られている。

山一つが十冊として、四十冊。ずいぶん多く作ったものだ。去年、

栞が一人で作った文芸冊子は十冊。それでも売れ残った。まあどうでもいいが。

「鼎先輩、お久しぶりですー。そのクーラーボックスはなんですかー？お魚でも入ってるんですかー？」

ニコニコと話しかけてくる後輩（一年中春っばい方）。こんなにフレンドリーな奴だったろうか。

「いいえ、入ってません。ここに校長先生は来てませんか？」

「校長先生ですかー？一時間くらい前に来ましたけどー」

そくだよねー。と、隣の冰山つららに確認する後輩（何だか殴りたくなる方）。冰山つららは「うん」と、同意。なら、確かだろう。栞に、という事はあの巫女は一時間前の情報を言ったわけだふざけやがって。という怒りと、お腹空いたもうやだ帰りたい。という願望がわいた。

「……どこへ行ったかは、わかりますか？」

「えっとー、どこ行かって言ってたっけー？」

「……さあ」

後輩（調理実習で皿とか割りそうな方）は本当に忘れてるようだが、冰山つららの方は、覚えていながら話さないという感じだ。しかし、今の栞に冰山つららを問いたただす体力もやる気もない。

「そうですか。……一冊もらえますか」

まあ一応後輩の作ったもの。栞は一冊くらい買ってやることにした。

「いいですよー。先輩だから、タダであげまーす」

なんといいいい後輩（優しくて暖かそうで守ってあげたくなる方）。タダより安いものはない。栞は遠慮なく一冊もらい、代わりに「誰にも解決出来ない悩みがあればここに」名刺を二人に渡した。

「？先輩何ですかこれー」

「今私が勤めてるところです。では、さようなら」

まだ色々聞きたそうだったが、答えるのも面倒なので、さっさと立ち去る栞。

そして出てすぐ、横の部屋に入る。休憩する魂胆である。

「……………」

ドアを開けると、そこは取調室のような狭い部屋だった。そして、一人の男子生徒がいた。目があった。と、思ったら消えた。

幻覚を見るとは、疲れてるな私。

栞はため息をつき、クーラーボックスとバックを床に置き、椅子に座り、机に突っ伏し、羊を三匹数えたところで、夢の世界に突入した。

鉄庭はちよつとしたパニック状態となった。

『屋上から犬が落ちてきたと思つたら、それは風船の犬だった』

それが、その場にいた人間が見たものである。

見間違え。と、一言で片付けてしまうには不思議な現象だった。

まず一つ、『落ちてきた犬』は黄色だった。しかし、『見た犬』は茶色、黒色だった。黄色と茶色、見間違えるだろうか。

そしてもう一つ、『落ちてきた犬』はバルーンだったが、その落下スピードは『見た犬』に近かった。見間違えというレベルの差か。かといって、実際に落ちてきた犬は、バルーン犬。落下途中で入れ代わったなんて、ありえない。じゃあ見間違え？この場にいた全員が？ありえない。じゃあどうということ？わからない。

多くの人がちんぷんかんぷん。どういう事だどういう事だ。という状態の、その中心にいた山梨小百合は比較的、落ち着いていた。それは冷静だったというより、周りの人より状況がわかっていない、ついていけないからこそ、落ち着いていたのだ。手には、落ちてきて、自分に当たったバルーン犬を持ちながら、ほうけていた。

「山梨ちゃん、大丈夫？」

「……え、あ、はい」

集団をかきわけ、猫猫子猫がやってきた。若葉紅葉、鈴乃音真音、

南穂波、少女の姿もある。真音は心配そうに、紅葉と穂波はいぶかしげに小百合とバルーン犬を見ている。少女はバルーン犬だけを興味深げに見ている。

「痛いところない？平気？」

ぺたぺたと頭や体を触り、猫猫が聞いてくる。小百合は正直に「大丈夫です」と答えた。

「四階の高さとはいえ、風船何だから平気でしょ。ちょっと貸して紅葉はそう言っつて、小百合の手からバルーン犬を借りる。いつの間にか、水風船がその手にはない。

「……バルーン、よね？」

「そうねえ、バルーン以外の何物でもないわね。先生にはどう見えます？」

「私にもただのバルーンにしか、見えないわ」

紅葉、穂波、猫猫。三人はお互い探り合うように、バルーンであると認め合った。が、どこか納得がいかない様子だ。周りの人間も、そんな感じた。

「……でも、落ちてくるまでは、本物に見えましたよ、ね？」

真音のその言葉に、紅葉達は沈黙で答える。そう、紅葉達にも見えた。見えたが、実際はこれだ。疑うべきは、今か、記憶か。

「それほしい」

少女が手を延ばし、バルーン犬を欲しがった。紅葉は「ほれ」と、少女に手渡す。「危ないからダメよ」と、猫猫が言うが少女は無視である。無表情でぎゅっとバルーン犬を抱きしめる。「何この子カワイイ。別次元から来た子？」と、穂波が聞いたが、無視。

「見間違い……って事か」

「そうねえ……そう、なるでしょうね」

紅葉と穂波は、釈然としないが、そう納得し、猫猫と真音が「屋上から犬……聞いた覚えあるわよね」「そうですね……」と、まさか……。というようにコソコソと話している。

「あらら、珍しいような組み合わせ。また当事者なき争いでもしてたんですか？」

何も知らないような気軽さ、もしくは全て知ってる余裕さで、神社神裂が現れた。手には紙袋を持っている。

「神裂、説明」

紅葉は神裂を一瞥し、そう言った。今来たばかりの神裂に説明を求めらるなんて、普通ならおかしい事だ。しかし、普通じゃないなら、おかしくない。

神裂はニツコリと笑い、そして、まるでその場にいる全ての人間に言い聞かせるように、大きな声で、こう言った。

「皆さまお騒がせしました！ついさっき！私は誤って屋上で製作していたバルーンアートを一つ！こちらに落としてしまいました！ああこれですこれ！」

そう言つて神裂は少女の手からバルーン犬を取ろうとしたが、少女が頑なに拒否したので、少女ごと持ち上げて、これですよー。と示した。

「ただの平凡なバルーンアートを落とすただけなのでいいかなーと思つたんですけど下を見てまあ大変ー！何だかパニックになつてるじゃありませんか！これを落とすただけで何故に！？と思ひながらも慌てて」「んー！」「あ、ごめんなさいねー」

少女が、いつまで抱えてんじやー！と、暴れたので下ろしてから、再開。

「慌ててここにやってきたわけです！どうもすみませんでした！お詫びと言つては何ですが、この、落ちてきたバルーンアートと同じ、バルーンアートを配布したいと思います！」

神裂は紙袋から、バルーン犬（青）を取り出し、近くにいた子供に「はい、どうぞー」と渡す。さらにさらに紙袋から、バルーン犬（赤）を取り出し、女子学生に「はい、どうぞー」と渡す。

「神裂、本当にあんたがこれ落としたわけ？」

「当たり前じゃないですか！それ以外に何を落としたというんですか？それ以外に何か落ちてきたというんですか？」

そう言われたら何も言い返せない。実際、落ちてきたのは『バルー

ン犬』だ。

やっぱり見間違いだったのか。そういう事で、場が収まり始める。それ以外に納得出来る説明もないし、あの人がそう言うなら、そうなのだろう。そんな空気になった。一部の人を除いて。

「どうしたんですか？」

そしてさらに、もう一人。我らが校長、八尾比丘尼因幡が現れた。外見に似合わず、雰囲気は落ち着いた大人そのもの。そこにいるだけで、何だか場が落ち着くようだ。その隣にいるのは疲れた顔をしている北本十条。「まだ午前だつてのに、トラブルが多過ぎる………」と、ぼやいている。どうやら校長は、彼が連れてきたようだ。

「げっ、校長先生」

八尾比丘尼の姿を見て、やばっ。という表情になったのは猫猫だった。

猫猫がいる事に気付いた八尾比丘尼は「またあなたが何かをしたんですか………」と、呆れた。

「そういう考え方が差別や偏見を生むんですよー!!!」

猫猫はそう言つて、バルーン犬と睨みあっていた少女を脇に抱え、「また会いましょう!」と、逃げ出した。「やー!ー!ー!」と、少女は悲痛な叫びを上げた。かわいそうに。

「つたく、もう本当に犯罪者じゃないか」

猫猫が走っていった方を見ながら、呆れ声な紅葉。やれやれといった様子で、紅葉はさっきまで猫猫と少女が座っていたベンチに座り、

少女の食べ残しをモグモグ食べ始めた。「あ、タコ焼き一個ちょうだい」「ん。って、ナチュラルに何で隣座ってんだ!？」穂波はその隣に座った。

「あなたが噂の校長先生ですか。いやー、話しに聞いていたより、若々しいですね」

「ありがとうございます。どうやらあなたは詳しいことを知っていきそうですね。話を聞かせてもらっても?」

「はいはいわかりました」

神裂は八尾比丘尼に事情を説明し始めた。

「あ、山梨じゃん」

「ホントだ!って、マジ巫女服じゃん!」

「本当だ。カワイイ」

この騒動で、集まってきた中に、小百合の友人もいたようだ。小百合は友人にからかわれ、気恥ずかしさがぶり返してきた。

「へえー、ねえねえどんな感じ?」

「ど、どんな感じって?」

「だからー、こつこつという服着てどうなのって話。なんか目覚めそう?」

「な、何に目覚るっていつの?」

「山梨ー、ところでなんかあったの？なんか騒いでたけどー」

「というかさ、山梨って、午前中忙しかったんじゃないの？」

「あ、そうじゃんそうじゃん。もしかして暇なわけ？じゃあ一緒に回ろうよ。私たちずっと体育館にいてさー、いやー、演劇があまりにあれで、見るに堪えなくて出てきたんだよねー」

「それとも何か用事ある？」

「用事はないけど……」

鈴乃音さんが……。

と、周りを見回すと、いつの間にか真音の姿がない。プラカードもない。どこかへ行ってしまったようだ。

「どしたの？」

「あー……ううん。なんでもない。じゃあ、一緒に回ろっか」

「そこなくっちゃね」

こうして、小百合はクラスメートの友人達と、文化祭を回ることになった。

そして、部活の当番の時間になるまで、特におかしな事も起こらず、文化祭を普通に楽しく、堪能した。

2 - 1 文化祭午後の部々勝負と起床

八尾比丘尼高校 特別棟四階将棋部部室 13:00

山梨小百合は友人達と別れ、将棋部に戻ってきた。

部室にはすでに、鈴乃音真音、虹野光、冬季冬美の午後組は戻ってきており、秋春守、夏季夏美、香川智弘、バカップルの午前組はいなかった。

「またお前がビリかよ山梨」

小百合は部長、金銀砂銀に呆れ混じりの声に迎えられた。

「す、すみません……」

「まあそれは別にいいけどよ……。よくねえのはあっちだ」

あっち。と、砂銀が示したところにいるのは冬美だった。窓に肘をつき、憂鬱な雰囲気を外を眺めている。

「……なんすか。なんか文句あるんすか」

口調もやさぐれている。機嫌は直っていないようだ。冬美の機嫌を直すという大役は「先輩は常時プンスカしてましたのよ。わたくし大変で大変で、心がふにやりましたの」と、真音に話している光には、やはり荷が重かったのだろう。

「何にも文句ねえよ。まっ、全員揃ったし。午後始めんぞー」

砂銀のやる気なさげな掛け声と共に、小百合の午後の文化祭が始まった。

八尾比丘尼高校 特別棟四階将棋部室 13:30

「ほれ、これで詰みだ。山梨弱すぎ。もっと集中しろよ」

「集中したところで……部長は強すぎますよ……」

そして三十分後。小百合は砂銀と将棋をうっていた。そして負けていた。ようは、暇だった。

将棋部の部室は特別棟四階という、学校の隅っこという最悪の場所であり、将棋という若者にはさほど人気ではない出し物に加え、将棋は一局に時間がかかるのであれば、お客が少ないのも仕方がない。それをどうにかするための巫女服姿での宣伝のだが、巫女服はすでにそこで見れてるんだから、わざわざ将棋部まで来る人いないんじゃないかな。と、思わなくもない小百合であった。

しかし、お客が全くいないわけではない。というか今は、多い方なのではないだろうか。暇なのは砂銀と小百合だけで、他の三人は、お客の相手をしているわけなのだから。

「お嬢様、その駒はそこには動きませんよ」

「あ、そうだったのです。今の無しでいいですかしら」

「ほほほ、構いませんよ」

隣の席では、光がお婆さんの相手をしている。古きよき優しそうなお婆さんだ。光の事をお嬢様と呼んでいて、どうやら知り合いらしい。虹野さんって、本当にお嬢様だったんだ。と、小百合は驚いた。エセお嬢様かと思ってたのに。

「じゃあ、この時は、どこに王様を動かせば取られないか、わかる？」

「えっとねー、こーこー！」

「あと、こーこー！」

「うん、正解。よくわかったね。じゃあ、こーつすると、どうなるかわかるかな？」

「んー……こーこー？」

「あゆみちゃん、そこだとこれにやられちゃうよ。ここだよ」

「うん、のぞみちゃん正解。すごいね」

光の隣では、真音が子供二人の相手をしている。

将棋をさしているというより、将棋を教えている。本来そういう事はしないのだが、他に客もないので、やってきた子供に対して臨時将棋教室を開いているのである。教室にいる時は見せない優しい顔で、子供（小学二年であゆみちゃんとのぞみちゃんというらしい）二人に将棋を教えているその姿は、お姉さんのだった。やっぱり、

ああいうお姉さんを持つと、妹の方がお姉さんっぽくなるのかな。姉妹不思議。と、小百合は思った。一人っ子な小百合は、姉妹というのにちよっと憧れるのだ。

「はい、飛車いただきー。いいのかないのかなー？冬美さん、このままだと、後五十手で私の勝ちだけど？」

「……ちよっと黙っててくれますか」

「どうぞどうぞ。存分に悩んで？ま、悩んだところで冬美の負けは決まってるんだけどねー」

「くっ……！」

そして一番の問題で、砂銀との将棋に小百合が集中出来なかった大きな要因の一つであるのが、真音の隣で将棋をうってる冬美と、神社神裂である。

神裂は、まだお婆さんと小学生コンビがやってくる前に、ふらーっと部屋にやってきた。その時すでに砂銀と将棋をうっていた小百合は、その姿を見て、自然、姿勢を正した。

どうやら光と冬美も神裂を知っていたようで、「あ、神社さん！ホントに来てくれたのです！」と、光は喜び、窓の外、というより中庭を睨んでいた冬美は、その睨みを神裂に移行した。

唯一、神裂を知らない砂銀が、「何あの人。変なオーラ出てる……」と、女性口調で呟き、驚いていた。小百合的にはその反応が正しい反応だ。光のように人懐こく近づくのも、真音のように平静に会釈をするのも、冬美のように攻撃的な視線を送るのも、おかしい反応だ。「まっ、どうでもいいかな。おら山梨。さっさとつてよ」やっぱり砂銀も変だった。

「将棋しますのです?」

「ええ、そのつもり」

光と軽く会話した後、本を呼んで何か考え事をしている真音を一瞥し、将棋盤を見ている砂銀をちらつと見て、神裂を見ていた小百合はちらつとも見ず、自分を睨んでいる冬美を見て、ニヤリと、似合わない（小百合的には）好戦的な笑みを浮かべ、冬美を指差し、言った。

「冬美！勝負よ！」

その神裂の言葉に、言われた冬美はもちろん、部室内にいた全員が驚いた。

「ど、どうして私があなたと勝負しなきゃいけないんですか」

動揺した様子の冬美が聞く。

「勝負する事に理由なんかいらないだろー！！いつから冬美はそんなつまらない人間になっちまったんだ！」

小百合は違和感しか感じていなかった。午前中にあつた神裂は、こんな、こんな乱暴な喋り方ではなかった。こんな、こんながさつな雰囲気ではなかった。しかし、確かにそこにいるのは、あの、カリスマの塊のような神裂であった。

「な、な、な……何だつてんですかあなたはー！！」

冬美が混乱しながらも、立ち上がり、怒鳴り返す。

「私が誰かって？それは冬美、あんたが一番わかっているはずでしょ？」

「意味がわからない！」

「ならば勝負だ！」

「何で！？」

「もちろん、勝った奴が負けた奴の言うことを聞くというルールで！」

「……そのルール逆でしょ」

「ふ、よくぞ見破った。さすが冬美といっておこう。でも、これで勝ったと思わないでよね！さあ勝負よ！負けた奴が勝った奴の言うことを一つ何でも聞くというルールでね！これでオツケー？」

「それでオツケー」

「イエーイ」

「イエーイ……ハッ」

冬美が我に返った時にはすでに時遅し。気付いたら勝負を受ける事になっていた。神裂のしてやったりという顔を見て、冬美はぐぬぬぬ……である。

光と真音と小百合は、ポカーンである。何今のやり取り。神社さんどうしたの？である。

そして砂銀は「なんか、夏美みてえな人だな」と、呆れ混じりに呟いた。

そう言われると確かに。と、小百合も思った。今の神裂は、どこか夏美に似ている。雰囲気とか、口調とか。今のやり取りも、普段通りの夏美と冬美がやりそうなやり取りだった。

真音と光もそう思ったようで「何だか、夏季先輩っぽかったですの」「うん」と、言っている。

そして、この中で、夏美と誰よりも仲がよく、誰よりも夏美を知っている冬美は。

「……」

親の敵を見るような目で、神裂を睨んでいた。さっきまでの、攻撃的な睨みとは一線を隠す、殺意がこもった睨みである。

「どうしたの冬季さん。さあ、早く席につきなさい。勝負よ。何でも一つ、敗者に命令出来るゲームをしましょう」

神裂は将棋盤のある席に座った。その口調は、その雰囲気は、小百合が午前中にあつた神裂よりも、絶対的な存在に感じた。

「あなたは私に、何を命令したいの？」

「……二度と、私達の前に現れないで下さい」

冬美はそう、搾り出すように答え、乱暴に神裂の向かいの椅子に座る。その仕種の全てが、何かを我慢するためにやっているようだった。

「わかったわ。それじゃあ私が負けたら、あなた達の前に二度と現

れないし、関わらない」

神裂は駒を振った。表が三枚。神裂が先手だ。

「そして私が勝ったら」

神裂はそこで、冬美に微笑んだ。

「あなた、夏季夏美と仲直りしなさい」

「……は？」

は？である。言われた冬美はもちろん、近くにいた光と真音、耳をすましていた小百合と砂銀、いつの間にかやってきていたお婆さんさえ、固まった。

「動き出した時計は、止まらない。それは想いも同様に、とっ」

そんな周りの状況を、固まってしまった時間を動かす合図のように、高らかに、神裂の駒が鳴り響いた。

こうして、冬美の負けられない戦いが始まった。そんな重要な勝負、当たり前前の事だが小百合は一切、関与してはいない。当たり前前に普通に、無関係ではないが関係があるわけでも、なかった。

「ん……」

鼎菜は起きた。自然起床であったが、今自分がどういう状況でどこにいるかを思い出すのに、数秒かかった。

座って寝ていたので、体が痛い。ので、菜は伸びをする。すると、目の前に制服を着た男子生徒が座っていた。と、思ったらいなかった。

「……」

寝ぼけてんのかな。と、菜はあくびをしながら髪をかく。そして腕時計で現在時刻を確認。結構寝てたようだ。

念のために、鞆とクーラーボックスの中身を確認する菜。盗まれてはいないようだ。

「よっ、と」

気合いを入れてクーラーボックスを担ぎ、鞆を持つ。お仕事再開である。行き先は決まっている。この棟の一階、調理室だ。なぜならお腹が空いたから。

部屋を出て、少し考え、菜は隣の文芸部を覗くことにした。もしかしたら校長もいるかもしれないし、何か情報を持っているかもしれないし。というわけで、菜は文芸部を覗いた。

「ちょっと枯葉君。ホントどうしたんですか？」

「な、何が？全然大丈夫だし」

部室内には、栞が知らない男子と女子がいた。男の方は机に突っ伏しており、女の方は寄り添うように男の近くに座っている。入口から覗いている栞に気付いていないようだ。

カップルに用事はない。なぜならカップルは総じて馬鹿だからだ。栞は早々にそう結論づけ、立ち去った。向かうは一路、調理室である。

何かを忘れてる栞の文化祭午後の部は、こうして始まったのだった。

2・2・文化祭午後のおにぎりとお子様ランチ

八尾比丘尼高校

特別棟四階将棋部

14:00

「では、私はここで失礼致します」

「あ、はい……さ、さようならです」

とても綺麗なお辞儀に、少々面食らった山梨小百合は変な口調で、お婆さんに別れを告げた。

場所は特別棟三階踊場。金銀砂銀に二連敗した小百合は、罰として砂銀の昼食と、部員全員の飲料を買いに行くことになり、虹野光との対局を終え、文芸部に行くらしいお婆さんも、途中まで一緒になったのだ。

巫女服を着て、一人で出歩くのは出来れば遠慮したかったのだが、鈴乃音真音は小学生コンビと対局しており、冬季冬美は神社神裂と魂を燃やして対局しており、光と砂銀は暇人同士対局をし始め、ついて来てくれる人はいなかった。最後の二人はついて来てくれてもいい気がしたが、砂銀がついて来たら罰にはならないし、光がついて来てもちよつとなあ。なので、小百合は一人、一階にある調理室に向かっていた。

調理室では、料理部（小百合は今日始めてその存在を知った）が使用している。おにぎりやサンドイッチといった軽食から、昔懐かし給食セットやポップコーン、そしてもちろん飲料水も販売している。砂銀いわく、料理部の部長、各務七味かがみちちみが作るおにぎりは絶妙な味ら

しく、買ってこいとこの事だ。さらに光情報によると、ポップコーンも絶品らしい。ポップコーンは、小百合が友人達と回った時は混んでいたので断念したので、空いているなら買ってみよう。

「いらつしゃいませー」

何事もなく、周りの視線と知り合いの冷やかしはあったが、何事もなく調理室についた小百合。昼時は列が出来ていたが、今は出来ておらず、待たずに入ることができた。受付らしきエプロンを着た女子生徒は、巫女服を見てもあまり驚かず営業スマイルを浮かべた。調理室は一般教室より広く、授業で使う調理台が六つに、入口近くに大きな調理台が一つある。調理台四つは、テーブルとして使用しているようで、生徒やスーツを来た来賓らしき人や子供、七人くらいが今はそこに座り食事をしている。教室後方に暗幕が取り付けられており、暗幕の向こうで調理をしているのだろう。エプロンをつけた生徒が暗幕の向こうから料理を運んでいるのを見ても、間違いない。

大きな調理台には、炊飯器が三つばかり置いてあったり、サンドイツチが置いてあったりしている。火を使わない料理はここでしているようだ。

「料理は、お持ち帰り用とここで食べて行く用がありますけど、どちらに致しますか？」

「えーっと、お持ち帰り用で、おにぎり二つと、ポップコーン一つ、それとお茶を五つ下さい」

「はい、おにぎり二つと、ポップコーン一つ、それとお茶を五つです。ポップコーンとおにぎりは、十分程度お時間いただきますが、大丈夫ですか？」

「おにぎりにも十分かかるんですか？」

ポップコーンはわかる気がするけど、おにぎりにも十分かかるのかと、小百合は驚いた。

「ええまあ。でも、待つ価値はありますよ？」

ニヤリと笑う受付さん。その笑みからは、後悔はさせないぜ。という自信が滲み出ている。よほど、美味しいらしい。ごくりと小百合は喉をならした。

「じゃ、じゃあ、おにぎり一つ追加でよろしく願いします」

「ありがとうございます！おにぎり三つ、ポップコーン一つ、お茶五つ入りまーす！」

受付さんが営業スマイルでそう言うと、暗幕の向こうから、「りよーかーい！」という声が返ってきた。

小百合は料金を払い（おにぎり一個二百円、ポップコーン二百円、お茶一本百五十円）空いている席に座って、料理の完成を待つ。

「部長、おにぎり三つ。よろしく願いします」

受付さんが、大きな調理台で目をつむり腕を組んでいた人に、そう声をかけた。やはりあの人が部長さんか。と、小百合は思った。

料理部部长、七味は凛々しい女性だった。髪は真つすぐ腰近くまであり、背も高く、定規でも入ってるんじゃないかというくらいピシツと立っている。日本刀みたいに研ぎ澄まされた空気を纏っている。なんか凄そうな人だ。

受付さんに声をかけられても、七味はピクリともしなかった。聞こえなかったのかな。と、小百合は思ったが、受付さんはそれ以上声をかけず、お茶を五つ袋に入れて小百合に渡してから、受付さんに戻った。

少し心配しながら、七味を見たり、教室を見回したり小百合がしていると「ポップコーンが上手に出来ましたー！」という声が、後方から。気付けばもう十分。七味は動いていない。寝てる人でも、もう少し動くだろう。

「はい、落とさないように気をつけて下さいね」

運ばれてきたポップコーンは、アメリカンなサイズだった。でかつ。一人じゃ食べ切れないな。と、小百合は確信しながら受け取った。そして、後はおにぎり何だけどー。という気持ちを込め、七味を見た。その時、七味の目が、カツ！と開かれるのを小百合は見た。そして次の瞬間には、調理台に綺麗な三角おむすびが一つと、綺麗なハート形のおむすびが二つあった。小百合には何が何だかわからなかった。七味はそのトレーを持ち、ア然としている小百合に近づいてきた。そして、座っている小百合をしばらく見下ろすと、トレーを差し出し言った。

「ハートのおにぎりは、銀ちゃ、砂銀君にあげてね」

そう言った七味の声は、雰囲気からは想像出来ないほど、女の子だった。

「……」

鼎菜はオムライスを咀嚼しながら、入口にいる部長を見て、ホント、この高校で責任者という立場にいる奴らは人外だな。と、思った。何だあのおにぎりの作り方は。

予定通り、昼食を食べに調理室に来た菜。偶然ここで校長に会えないかな。とか思っていたが、世の中そんなに都合よく出来ていなかった。食べながら、今後の予定を考えようと思った菜が注文した料理は『大人様ランチ』という物で、巨大オムライス、大盛り焼きそば、なぜか小さいから揚げ、巨大ハンバーグ、大盛り豚汁、バケツプリンという、ボリュウム溢れる昼食だ。その量に見合う、なかなかのお値段だったが、菜は今日、仕事で来ているので、経費で落ちる。落ちなきゃこんな高いものは頼まなかった。

食べ始めて数十分。

大盛り焼きそばを菜がたいらげたくらいに、文芸部の後輩二人組がやってきた。菜に先に気付いたのは、柔らかい方で、会釈してきたので会釈仕返した。冰山つららは何か警戒しているようで、会釈すらしてこなかった。どうでもいい。同席しようともしてこなかった。菜は気にせず食事を続けた。

さらに数十分後。

菜がオムライスを大半たいらげたくらいに、調理室に巫女服が現れ

た。午前に会った巫女服とは違う巫女服だったが、午前の巫女服はなかなかの情報くれた。あの巫女服もいい情報あるかも。と、栞は思ったが、食事中なので話しかけるのはやめる。今は食事に集中しているのだ。

そして巫女服が立ち去った時、ちょうど栞はオムライスを食べきった。後は巨大ハンバーグと、豚汁それなり、バケツプリンだけだ。

「……」

ハンバーグを真ん中で真っ二つにした栞は、怪訝な顔をした。なぜなら、切ったハンバーグから赤い液体が出てきたからだ。

生焼けじゃないな。栞は冷静に考える。ハンバーグの断面に赤い部分は無い。それに肉汁より粘性があり、ドロツとしている。そう、まるで血みたいだ。血でないとしても、ハンバーグから出たはいい液体であるのは間違いない。しかも、どんどんハンバーグから流れでてくる。傷口から血が流れ出るように。今や、ハンバーグが乗っている皿は血の海だ。

栞は周りを見渡す。この事に気付いている人はいない。当たり前だ。客は自分の料理に夢中だし、店員は仕事に忙しい。栞が騒がない限り、気付くことはないだろう。

「……」

変えてもらうか。気持ち悪いので立ち去るか。栞は数秒考えて「……ま、いつか」と、呟いた。

そして栞は、この異様な状態のハンバーグを食べた。普通に美味しい。血みたいな液体は、味が一切しない。なら、気にせず食べれる。モグモグと、栞は数分でハンバーグをたிரらげた。

口元が真っ赤になってしまったかもしれない。栞はバックからティ

ツシユを取り出し拭いてから、豚汁にとりかかる。

「ん………？」

一気飲み勢いで豚汁を飲み込んでみると、菜は口の中に何か変なものがある事に気付いた。この豚汁の具材は、豚、人参、大根、コンニャク、ゴボウだったはずだ。それなのに、口の中に、うずらのタマゴのような、丸いものがある。

口の中にそれだけを残し、他のものを喉に流しこんだ菜は、もう後一口程度しか残っていない豚汁の中に、異物を吐き出した。

「……………」

それは、『目』だった。白目と黒目がある『魚の目』。大きさは、マグロの目くらいだろうか。なぜか豚汁の中に、それが入っていたのだ。

菜は数秒、その目と見つめあった後、箸で掴んで口に放り込んだ。確か、健康にいいんだよな。と思いつつ、かみ砕く。

そして豚汁を飲みきり、最後に残ったバケツプリンに取り掛かった。

「キャー！」

菜がバケツプリンをすくうというより、かじりつくように食べていると、悲鳴と食器を落とす音が調理室に響いた。

「つらら大丈夫!？」

「どうしたんですか!怪我は、なにこれ……………」

「気持ちわるっ……………とりあえず、先生呼んできて!…」

「……」

食べ物を粗末にして……。

騒然となる調理室において、栞は一人、そんな事を思いながらバケツプリンを食べ続けた。

2・2・文化祭午後の部々おにぎりとお子様ランチ（後書き）

七不思議？『食堂』

『食堂』

味は二の次でも、安価でお腹がいっぱいになれる場所がいい。そんな風に思う学生は、少なくともはないでしょう。そんな願いを叶えてくれる場所の一つが、学生食堂。

しかし、この高校には、大変残念なことに、パンを売っている購買はあれど、食堂がありません。なぜでしょうか。

この高校は皆さんご存知のように、『自由』が売りなわけですが、そんな高校に食堂がないなんて、食堂を利用するという自由がすでにこの高校では、約束されていないわけですから、どこがおかしい気がしませんか？ これには何か、深いわけがあるに違いがありません。そしていつしか、このような噂が流れ始めました。

『この高校が立っている土地は戦時中、病院だったらしく、食料も満足に食べれず死んでいった人たちが多かった。だからだろうか、食堂を作ろうとすると、事故が多発したため、食堂を作ることは出来なかった。』

『食堂を任せようとした会社が、八尾比丘尼校長の肉を狙ったので、校長が怒って食堂を作るのをやめた。』

そんな噂が、八尾比丘尼高校七不思議の一つ、『食堂』です。

私達はこの噂も、八尾比丘尼校長に真実かどうか確認に行きました。八尾比丘尼校長のお答えはこうでした。

『事実無根です』

八尾比丘尼校長曰く、食堂を作らなかったのはなんとなくで、特に意味はない。この高校が立っている土地が病院だったこともない。

とのことでした。

そうです。この噂、全くの嘘でした。食堂がないことに違和感を持った誰かが作った噂のようです。

しかし、八尾比丘尼校長は一つ、興味深いことを教えてくれました。それは、この高校が立っている土地は、昔、お墓だった。という事実です。

この土地には、お膳立ては出来ているようです。この噂は真っ赤な嘘でしたが、他の噂が嘘かどうかは、わかりませんね……。

2・3・文化祭午後の部々暇人と三ツ目

八尾比丘尼高校 特別棟四階将棋部部室 14:30

山梨小百合が、金銀砂銀のおつかいを終え部室に戻つてくると、部室内の人数と顔触れが変わっていた。

まず、冬季冬美と神社神裂の姿がなかった。一人、窓から中庭を見ている虹野光にちよっぴりの勇気を持つて聞いてみたところ、「敗者は勝者に拉致られる運命って言っていましたわ」とのお答えをもらった。恐らく、勝者とは神裂。敗者は冬美だろう。神裂が冬美を拉致した。あの人を止めれる人は世界中に誰もいないに違いない。

次に、小学生コンビもいなくなっていた。光に少しの我慢をもって聞いてみたところ「ジューズもらって、やふーいという感じでしたの」との事だ。本当なら、勝った人にだけプレゼントなのだが、このままだと余るだろうし、無問題だろう。鈴乃音真音なら、わざと負けた可能性もあるし。

そしてその、小学生コンビの相手をしていた真音は今、別の人と将棋をうっている。その人はわんこそば大会にいた人物で、小百合は名前はうる覚えだったが、あつちも小百合を覚えてたらしく「ハロ。体は平気？あ、私は若葉枯葉と交際している南奈美の母親、南穂波ですよ」と、自己紹介された。南穂波ですよ、だけでもいいよな気がした。真音と知り合いらしく「お姉さん元気？」「ええまあ」「あなたお姉さんに似てないわよね」「ええまあ」「将棋好きなの？」「ええまあ」という会話をしながら将棋をしている。真音はどうやら、穂波の事をよく思っていないようだ。

そして小百合が現在、絶妙な味のおにぎりをモグモグしながら、一番気になつてるのが砂銀と若葉紅葉の二人だ。

光いわく「紅葉さんはあの人と一緒に来ましたわ」との事だ。小百合が気になつて理由は、紅葉がああ神裂のお友達だからではない。なんか、部長の様子が変なのだ。

「何それ」

「へ、何がっすか」

まず口調がなんか変である。口調を、男っぽくしたり、女っぽくするのはよくあるが、『っす』という口調は初めて小百合は聞いた。中性的、という感じの口調だ。

「いや、そのおにぎり。ハートじゃん」

「あ、あー、これはあれっす。こういう悪ふざけが好きなんっすよねあいつは全くアハハハ」

次に言動がおかしい。砂銀は渴いた笑いを上げながら、慌てた様子でハート形のおにぎりを真っ二つにしたのだが、いつもの砂銀はもっと余裕がある気がする。そしてその半分を「食べます？」と、紅葉にすすめたのだが、目も泳いでいて、いつもより自信なさげだ。

「いらない。っつーか、もう一度聞くけどあんた男？」

「もう一度聞きますけど、どっからどう見ても男じゃないっすか」

「いや、外見も微妙だし。声も高いし。そして積んだ」

「げっ」

そして将棋が弱くなっている。小百合の隣にいる光が「まさかの二連敗ですのー」と、あくびをしながら呟いた。眠いのもかもしれない。

「そっちはまだ終わらないわけ？」

終始、退屈そうにしていた紅葉が、穂波にそう聞いた。

「まだかかりそうよ未来の娘」

「黙れ愉快犯。ったく、何で私がこいつと行動しなきゃいけないんだっつーの。神裂の野郎、騙したら承知しねえぞ……ほら、宝塚。もう一局」

「了解っす」

「今気付いたけど。一度会った事ある？」

「覚えていてくれたっすか。恐縮っす」

砂銀は嬉しそうに敬礼した。

「何キャラだよ」

紅葉が冷静にツッコミを入れた。

小百合もそう思ったので、内心同意した。「変な部長ですのー」光も思ったようで、口に出した。砂銀に睨まれた。目が、「おまえらあとで」と語っていた。小百合はとぼつちりであった。光は眠気を我慢するように、まぶたをこすっていたので気付いていないようだ。

「ポップコーンくれますのー？」

「え？うん。いいよ」

もう半分寝てるのでは。という感じでフニャフニャしてる光に、ポップコーンをあげる小百合。「ありがとうございますのー」と、光がふにやりとした子供っぽい笑み浮かべた。思わず頭を撫でたくなっただが、小百合は我慢した。

「暇ですのー」

「そうだねー」

光と一緒にポップコーンを食べながら、小百合の文化祭午後は、のほほんと過ぎていくのだった。

八尾比丘尼高校 特別棟一階調理室 生徒棟一階廊下 14:00〜

鼎菜は騒がしい調理室から抜け出し、生徒棟へ向かっていた。調理室が騒がしい理由は簡単な事で、ハンバーグから血のような液体が止まらないという怪奇現象が起きているからだ。それに加え、そのハンバーグを食べていた女子生徒、冰山つらがショックで倒れ、親友の柔らかい奴が慌てふためき喚き立て、周りもキャアキャ

アギヤアギヤア騒ぎたて、ギャラリーが増え、さらに騒ぎが増す。そんな場所はうるさくてたまらないので、栞はギャラリーをかきわけ調理室から脱出したのだ。もちろん、バケツプリンを完食してから。この状況で物食べるなんて頭おかしいだろ。というような目で見られたが、栞にはどうでもいい事だった。

生徒棟一階は人が多かったが、栞の捜し人、校長はいなかった。さて、どうするか。体育館にでも行くか、それとも校長室にもう一度行ってみるかな。

そんな風に栞が、職員棟へ行くか生徒棟から体育館へ行くかと悩んでいると、前方、職員棟から「はいどいてどいてー！」と言いながら、走ってくる人物がいた。

白衣を着たその人物は、この学校の養護教諭、いわゆる保健医だった。慌てた様子の彼女に道を開け、その後ろ姿を見ていて栞は「あ、ありすの事を思い出した。

すっかり忘れていたが、今日栞は、ありすと一緒に来たのだ。いや、ホント、すっかり忘れていた。今どこで何をやっているのだろう。何だか知らないが、午前中はあの保健医と一緒にいた。しかし今はいない。

栞はクーラーボックスを一瞥してから、歩き出した。

思い出さなかったら別にどうでもよかったのだが、不運にも思い出してしまった。ならば一応、待ち合わせ場所に指定した鉄庭に寄っておくべきだろう。いなかったらいなかったで、校長室へ行く。

そんな風に考え、栞が鉄庭の様子を見るため、職員棟に向かっていくと、偶然にも、このタイミングで、前方から校長が歩いてきた。校長はさっきの保健医とは違い、ゆっくりと悠然に、こちらに近づ

いてくる。その背中に正規でも入れてるんじゃないかというくらい背筋を伸ばし真っすぐ歩く姿は、毅然として凛々しい。まさに校長にふさわしい雰囲気をかもしだしている。

しかしそれよりも何よりも、そんな雰囲気がどうでもよくなってしまうほど、八尾比丘尼因幡は若々しかった。

ようやく会えましたか。

栞はありすの事は後回しにする事に決め、気を引きしめ「校長先生」声をかける。

「はい、何でしょうか」

八尾比丘尼は栞の目の前で立ち止まり、記憶を探るように数秒、栞の目を見つめた後「鼎さんですか。お元気でしたか？」と、聞いた。栞はまさか自分の事を覚えているとは思わなかったので、驚く。

「覚えて、いえ、私の事をご存知だったんですか？」

「在学生徒の名前と印象深い卒業生くらいは覚えていますよ。まだボケは始まってません」

「そうですね」それならそれでやりやすい。栞は本題に入る事にした。

「すいませんが、少々頼みたい事があるのですが。OGからの頼みという事で、一つお願いできませんか？」

「別に構いませんが、今は少々立て込んでいますので……」

八尾比丘尼は腕時計を見ながら「そうですね。15時30分くらいに、校長室へ来ていただけますか？」と、言った。出来れば今すぐ、お願いしたが、致し方ない。今日中までに手に入ればいいのだ。栞は「わかりました」と、答えた。

「では、後ほど」

八尾比丘尼はそう言って、特別棟へ向かっていった。その後ろ姿を見て、仕事のめどがついた安藤の息をつく栞。

さて、後一時間。面倒だが、ありすを捜すか。

栞は鉄庭に向かった。

2 - 4 ・文化祭午後の部々平和と提案々

八尾比丘尼高校 特別棟四階将棋部部室 15:00

「ほう、つまり二年に弟がいると」

「はい、そうです。部長も夏休みに会ってると思いますけど。ほら、夏休み最終日に」

「ああ、あいつか……?」

「ぐー」

「……ふあ」

若葉紅葉と南穂波がいなくなった将棋部はだらーとした空気が流れていた。

お客は誰もおらず、金銀砂銀と鈴乃音真音は将棋をうちながら、紅葉の話をしている。砂銀はどうやら紅葉の事が気になるらしい。真音が「どうしてそんなに聞くんですか?」と聞いたところ「別にそんなんじゃないし!」と、顔を赤くして怒鳴った。まさか好きなのかな。と、小百合は思ったが、他の二人はどう思ったかわからない。真音はキョトンとしていたし、虹野光は寝ていたからだ。

「むにゃー」

「……」

光は寝ている。窓際で。小百合の隣で。小百合の膝を枕がわりに熟睡している。重いけど、とても気持ち良さそうに寝てる光を起こすのは忍びないので、小百合我慢。

何でこんな状態になったのかと、小百合は思わなくもない。光と小百合はそんな会話もした事ない。仲がいいわけでもない。つまり今の状態は、電車で隣に座った見知らぬ人が寝てしまつて倒れてきた状態に似ている。しかし違ふ点は、二人が知り合いだという事だ。知り合いが偶然並んで座るなんて事は、まあありえない。しかも片方が人見知り気味ならなおさらだ。じゃあどうしてこうなつたかというと、人見知り気味な光が暇で、眠くて警戒心が薄くなつて、ポップコーンが美味しいからだ。もう一つ加えるなら、小百合がちよつぴりな勇気で話しかけたのもあるかもしれない。

小百合が座つてるそばにわざわざ光は椅子を持ってきて、ポップコーンもらつて、のほほんとしていたら、寝た。そんな感じだ。別に仲良くなつたわけではない、のかな？と、小百合は光の寝顔を見ながら思う。思いながら小百合は、眠気と、ある衝動を堪えるのに必死だった。

「じゃー」

「……」

虹野さんって子供みたいでかわいいな。と、感じる小百合は奇妙な寝言を言う光の頭を撫でたい衝動にかられていたのだ。しかし、子供っぽくても光は同じ年。

同じ年の頭を撫でるってどうよ。今のこの状態もどうよって感じなのに。あ、いやでも、頭撫でるくらい別に問題ないかな。髪を触るみたいなもんだもんね。同性同士ならやるよねよくやるよね。やる

に決まってるよ。よし撫でるぞ撫でてやるぞ。虹野さんがカワイイのがいけないだからね！鈴乃音さんが虹野さんのテンションに付き合えるのはカワイイからなんだね！ほっぺもプニプニするからね！小百合の自制心なんざ、光の天使の寝顔の前にはないも同然だった！禁断の果実に手を伸ばすイヴのように小百合は光に手を伸ばす！しかし！

「おい鈴乃音。山梨が息を荒くして虹野に手を伸ばしてるぞ……」

「へ！？あああああいやこれはちちち違っんですよ！？」

砂銀の、うわー、どんびきだわー。という感情がこもりにこもった声で、小百合は我に帰った。光の頭に伸びていた手を上げて、ノータッチをアピール。

「山梨さん……」

「あ、いや、その、」

罪を犯してしまった友人を見るような、憐れみと同情と侮蔑がこもった目の真音に、小百合は口をパクパクさせながら、フルフルと首を振り、無実をアピールした。

「寝顔に興奮する……そんな性癖が山梨にあつたとはな……お前だけには普通だと思ってたのに……」

「山梨さん……強く、生きてね」

「ち、違いますよ。私はただ頭を撫でようとしただけで、やましい気持ちはなくて……そう！保護者が子供の頭を撫でる気持ちと一緒に

だったんです！」

「いや、お前のは、ロリコンが子供の頭を撫でるそれだった」

「山梨さん……まだ、やり直せるよ」

「ち、違うんですよー！」

涙目な小百合のひざの上で、光は「お姉ちゃん」と、幸せそうな寝顔を浮かべるのだった。

八尾比丘尼高校 職員棟一階校長室 15:30

結論からいって、鼎菜はありすを見つけることは出来なかった。菜も頑張つて捜したのだが、待ち合わせ場所にも、職員棟一階にも、生徒棟一階にも、特別棟一階にもいなかった。残念だ。階段を上るのが億劫なので、一階しか捜していないが、残念だ。一階捜してもまだ校長との約束時間まで時間があつたが、捜すのをやめて体育館のギャラリース席でぐったりしていたのだが、本当に残念だ。見つからないなら仕方ない。ありす捜しは仕事が入付いてからだ。仕事が入付いた後捜しても見つからないかつたら……仕方ない。諦めよう。

「……」

ありすの件についてはそうする事にした栞は、校長室前で腕時計で時間を確認。ほぼ待ち合わせ時間ピッタリ。三回ノック。「どうぞ」と、言われたので「失礼します」

校長室には校長、八尾比丘尼因幡の他にもう二人いた。入って左手の応接スペースのソファに座ってるのが、何だかふてくされてる養護教諭（名前忘れた）。そして校長椅子に座ってる八尾比丘尼の前に、もう一人、栞が見知らぬ女性。

「お客さんが来たみたいですね」

入ってきた栞を見て、見知らぬ女性は微笑んだ。モナリザみたいに完璧な微笑みは気色悪かった。ので、無視した。

「では、私はそろそろおいとまさせてもらっても？」

「ええ、構いません。最後にもう一度聞きますが、何もしてらっしゃらないのですね？」

八尾比丘尼はその問いを、もう何度もしたのだろう。声と表情には、疲れと諦めの色が強く出ていた。

気色悪い女性は「ええ、何一つやましい事はございませんですよ。では、さようなら」と、うさん臭さしかしない否定をして校長室から出ていった。出てく時、意味ありげな視線を栞に向けたが、栞には全く意味がわからなかった。

「校長、行かせてよかったですか？」

不機嫌そうな養護教諭（馬鹿っぽい名前だった気がした）の言葉に

八尾比丘尼は、疲れたようにため息をつき「まあ、何の証拠もありませんし。自由にさせましょう」と、答えた。

「自由にさせたらダメな奴だと思えますけどね私は」

「その話はまたにしましょうか。鼎さん、どうぞそこに」

八尾比丘尼に促されたので、おとなしく養護教諭（動物っぽい名前な気もする）の対面に座る栞。座って初めて、栞の存在に気付きました。というように驚く養護教諭（猫か犬のどっちかだった）。

「あれ、もしかして鼎ちゃん？ やっだー、久しぶり〜」

「どうも、お久しぶりです」

なんか、さっきまでの不機嫌さが嘘のように、馴れ馴れしい口調で話しかけてきてうぜえー。と思いつつ、丁寧に挨拶を返す栞は大人である。

「相変わらずのポーカーフェイスに先生安心しました。何？ どうしたの？ 校長先生に用事？ というか今何してるの？ 就職もせず進学もせず卒業して、大丈夫かなーって思ってたんだけど、スーツ着てるって事は働いてるの？ どこで働いてるの？ どんな職種？ お母さんは元氣？ 病気の調子は？」

「猫猫先生、少し落ち着いたらどうですか」

養護教諭、猫猫（馬鹿っぽい名前だった）の怒涛の質問ラッシュに呆れながら八尾比丘尼は、猫猫（名前とは思えない）の横に座った。手にはお茶のペットボトルが三本。「どうぞ」と言われたので「ど

うも」と受け取り「込み入った話？私、いてもいい？」と聞いてきたので「構いません」と答えてから水分補給。

「それで、相談でしたか？何でしょうか」

「ええ、実は、校長先生の血を少々いただきたくて」

栞が単刀直入に用件を言ったら「ぶっはあ！」と、猫（もう猫でいいじゃない）がお茶を吹いた。正面にいた栞は大変な事になった。八尾比丘尼が冷静に行動しタオルをくれたので、事なきを得た。拭いている間、猫は騒がしかったが一切合切無視した。拭き終わってからも騒がしかった。

「猫猫先生。少し落ち着きなさい」

八尾比丘尼も呆れ気味だ。

「落ち着けと言われましても校長！今この時に、血をいただきたい言われて落ち着いている校長の方がおかしいと思いますよ！」

「あなたはいつになったら歳相応の落ち着きが出来るようになるんですか。いい加減にしなさい」

「まさか説教されるとは思いませんでしたよ！？それを言うなら、校長もいい加減歳相応の外見になって下さいよ！」

「ふむ、しかし血ですか……」

「無視はよくないと思います！」

八尾比丘尼は思案に入ったようで、猫を無視し始めた。すると猫は、やはり栞に標的を変えるのだった。

「鼎ちゃん、説明を要求します」

「わかりました」

どうせ説明しないといけないだろうと思っていたので、栞は説明要求に応える。ならなぜ事情を説明しないでいきなり血をいただきたと言ったかといえは、それですんなりもらえたらもらえただで楽だよなあと、栞は考えたからであった。

「私は今、こういう場所で働いております」

バックから名刺を取り出し、二人に渡す。名刺を見て八尾比丘尼は「……なるほど」と、納得がいったようだが、猫は「これ……！」と、驚愕した。

「これ、ありすちゃんも持ってたわ！それもたくさん！どういこうとなの！？あなた、ありすを知ってるの！？」

猫はテーブルから身を乗り出し、今にも栞に掴みかからんという様子だが、栞は、そういうえは社長はありすにも名刺渡してたな。と、冷静に思い出していた。

「落ち着きなさい猫猫先生」

「落ち着いてられますか！もしかしたらあの子、怪しげな事させられてるかもしれないですよ！？」

「飛躍し過ぎです。ほら、座りなさい。まずは鼎さんから話を聞きましょう」

「でも！」

「でももへつたくれもありません！いいから座りなさい！」

八尾比丘尼に怒鳴られ、しぶしぶ猫はソファーに戻った。栞はそのやり取りを見て、なんか親子みたいだなこの二人。と、場違いな事を思っていた。

「色々と聞きたい事がありますが、一つずつ聞いていってもよろしいですか？」

面倒だけど「はい、どうぞ」

「この名刺、悩み事、解決します。としか書かれていませんが、何でも屋、という事でよろしいですか？」

「はい。そう思っていたいただいて構いません」と、栞は答えてから、社長がいつも言ってる説明を覚えてる範囲で口にする。

「犬捜しから猫捜し。猫捜しから人捜し。人捜しから人殺し。人殺しから犬捜し。何でもやるから、どんな悩みも解決する事が出来る。という事を売りにしております」

「人殺しって……冗談よね？」

普通なら笑えない冗談と聞き流すところだが、こんな、表には『悩み事解決します』裏には『 県××市』としか書かれていないふ

ざけた名刺を作ってる会社だ。冗談じゃないかも？と、猫は思ったようだ。冗談じゃなかったら何なんだよ。面倒な奴だな。と思いつながら、「ええまあ」と、テキストに答える栞。猫の警戒レベルが上がった気がした。

「鼎ちゃん、何でこんな怪しいところで働いてるの？ちゃんと給料もらえてる？まさか、変なことさせられてないでしょうね？」

「給料は毎月ちゃんといただいています」

手取りで二十万円という、高卒の新人社員にしてはビックリな高額給料。

「本当に？」と、疑いの目を向ける猫とは違い、表情変わらずな八尾比丘尼は「そういえば」と、何か思い出したようだ。

「生徒が、校長を捜しながら変な名刺を配ってる人がいると言っていました、鼎さんの事だったわけですか」

「はい。社長から、ついでに宣伝しておけと言われました」

「宣伝って、連絡先もなく住所もこんなじゃ、どうしようもないじゃない」と、真つ当な事を言う猫は無視で「なるほど。苦労しているのでしょうか」「はい。依頼は少なくて」と、会話する二人。

「それで、あります？　さん、でしたか。その子とこの会社は関係があるんですか？」

次に八尾比丘尼が聞いたのはありすの事だった。「白状なさい！」と、猫はうるさいが無視の方向で、栞はお茶を飲みながら、少々考える。

正直言えば、ありすは会社の社員なのだが、そんな事言ったら、八尾比丘尼はともかく、猫はギャアギャアうるさいだろう。もしかしたら引き取るとか言うかもしれない。それはそれでいいかもと思うが、さすがにそれは社長の許可がいるだろうし。テキストに嘘をつく事にする。

「ありすは社長の娘で、文化祭に來たいというので連れてきたんですが、途中ではぐれてしまってます」

文化祭に來たいというので連れてきた。以外は嘘なのだが、嘘っぽくない不思議。

「なるほど。そして迷子になったその子を、猫猫先生が保護したわけですか」

「ま、まあそういう事みたいですけど、な、何で睨むんですか？私、悪い事してませんよね？」と、八尾比丘尼のお説教オーラに怯え気味の猫。

「小耳にはさんだんですが……あなた、その子にお母さんと呼ばせて喜んで連れ回していたようですね」

「そ、それは……な、何か問題ありますか？」と、猫は開き直り「問題あるに決まっていますでしょう！」と、八尾比丘尼は怒り「もうこんな時間か……」と、腕時計を確認し、早くしなさいと暗に伝える菜。

「迷子を見つけたら放送で保護者を呼びなさい！お母さんと呼ばせてどうする気だったんですか！どうせ、このまま連れて帰ろうかなとか考えていたんでしょ……全く、あなたに自由はまだ早いようで

すね」

「ちよ、ちよつと校長！そんな一人で解決しないで私の話も……」
と、猫が言い訳しようとしたが「では、考えてはいなかったと？」
という言葉と八尾比丘尼の鋭い眼光の前に「はい、すみません……」
撃沈。

「……それで、今その子はどこに？」

呆れ顔な八尾比丘尼のその言葉に、猫猫はキョトンとした。そのまま
ま朶に目を向ける。「私は知りませんよ」と、朶が答えると、見る
からに焦り始めた。

「ちよ、ちよつと待って……確か、つららちゃんを保健室に運んだ
時はまだ寝てたから……」

だからまだ保健室にいるはず。という甘い考えの猫猫に「私が三十
分前に行った時は、いませんでしたけど」と、現実を教える。
猫猫は慌ててソファアから立ち上がり、「さ、捜してきます……！」
と、部屋から出て行くとしたが、八尾比丘尼に手を掴まれた。

「離してください校長！」

「猫猫先生落ち着きなさい。闇雲に捜すより放送でここに呼びなさい。
わかりましたね？」

「わかりました！」

元気がいい返事が逆に不安を呼び起こすが、猫猫は校長室を飛び出
していった。

「全くあの子は……あなた程ではありませんが、もう少し落ち着くという事を覚えてもらいたいものです」

「そうですね」

まあ、どうでもいい。

「さて、それで……血が欲しい、でしたか？」

「はい。そういう依頼です」

重要なのは、それだ。

「血液ですか……そのクーラーボックスに入れて帰るつもりなんですかね」

「はい」

栞は、血液の持ち運び方はよく知らないが、社長が「冷やせばいいでしょ」と言っていたので、クーラーボックスに氷を入れて持ってきたのだ。

「なるほど。しかし、依頼ですか……一応聞いておきますが、その依頼人、さっきいた神社さんではないですよね？」

変なことを聞くなと思いながらも「違います」と、答える栞。守秘義務とかあるらしいけど、このくらい問題ない。

「そうですね、まあ、そうですね……これで七不思議は三つ、

いえ、不確定なものも入れれば四つ、ほぼ全てですか……」

八尾比丘尼はそう呟き、腕を組み、目をつむった。考え中のようだ。朶も、断られたらどうしようという事を、いまさらながら考える事にした。

数分、無言が続き、八尾比丘尼が口を開いた。

「……断った場合はどうなるのでしょうか」

「そうですね」考えてもいい答えが思いつかなかったので「明日も来ます」とりあえずそういう事でどうだろう「明日も断ったら？」と、言われてしまったので「その時は社長が来ます」と、社長に丸投げする事にした。

「そうですか。それはちょっと遠慮したいですね。社長さんは手段を選ばない気がしますので」

「手段を選ばないという事はないと思いますけど、私とは違い、力、という交渉手段があるのは間違いないです」

「やっぱりそうなりますか。となると、今ここで血を渡した方がいい、という考えもありますね。何も死ぬまで血液を採取する気はないでしょう？」

「はい、もちろんです。謝礼として、図書券も用意してあります」
奮発して千円分を用意しました。

「なるほど。ああ一応ですが、そちらが諦めるといふ事はありませんか？」

「ありえませんが」

「でしょうね。なら、渡しましょうか……いや、しかしここですんなり血を分けると、後々面倒な事になる気も……ああ、全く、選択に自由があるようで不自由ですね……」

疲れ気味にそう言ってから、八尾比丘尼はまた沈黙。栞は、ダメでも社長に丸投げすればいいやと決めたので、今回は何も考え事をせず、お茶を飲みながらゆっくり待つ。

「……こういうのはどうでしょうか」

八尾比丘尼が、目をつむったまま言う。

「将棋をして、あなたが勝ったら、私は協力をしましょう。負けたら、また後日挑戦に来て下さい」

どうですか？と、八尾比丘尼は目で栞に尋ねる。栞は、ふむ。と、考える。社長とありすが暇潰しで、将棋を打とうと誘ってくるので、出来ないわけではない。人並みには打てるが……。

「……私はそれで構いませんが、私に勝つて後日にしたところで、結局は社長が出てきますよ？そして社長がこの提案を受けるかはわかりません。私は受けない確率の方が高いと思います。受けないとなると、社長は手荒な方法に出る可能性もあります。結局、校長が血液を私達に渡すという結果は変わらないんですから、こんな面倒な事をせず、社長が出てくる前に、怪我をする前に、私に血液を渡した方がいいと思います」

私も楽し。

しかしこの碁の提案に対し八尾比丘尼は「そうしたいのも山々ですが」と、諦めが混じった声で、こんなめんどくさい提案をした事情を話し始めた。

「ここで、はいどうぞ。と、血液を渡せば、私もあなたも楽しんで。あなたは依頼をこなせて万々歳で、私は図書券をもらえてほくほくです。しかし、一人にでも、それも簡単に血を渡してしまったという事例を作ってしまうと、これから先、また似たような頼みをしてくる輩やからが現れた時、断りづらくなります。あの時は簡単に渡したのに、どうして今回は？という具合ですね。あの時はあの時、今は今といったところで、なかなか納得はしないでしょう。そこで、将棋で私に勝つたらという手順を踏む事で、これから先の面倒事への対処をしやすくしようと思ったわけです。それに、私はあなたとは違い、こんな遊び心がある名刺を作る社長さんは、この案を受け入れると考えています。どうですか？」

碁は試すかのような八尾比丘尼の言葉に、碁はぐうの音も出ない。ここで提案蹴つても、碁が他の手でどうにか出来るとは思えない。そしてさつき社長が受けないといったのは嘘だ。碁も八尾比丘尼同様、社長はこの案を受け入れるだろうと思っている。

「……わかりました。その提案を受け入れます」

「それは結構。ああ、一応言っておきますが、私は手加減はしませんよ。血をあげるなんて、本当は嫌なんですからね」

「わかっています」

「そうですね。ここには将棋盤はないので、移動しましょうか。ち

よっと待っていて下さいね」

八尾比丘尼はソファアを立ち、机の方へ向かった。栞はその間に、荷物を持ち、ドアの近くへ移動。

「では、行き……？」戻ってくるかもしれない猫猫に書き置きを残し、さあ行くかというタイミングで、スピーカーからノイズ音が響いた。
そして。

『ありすちゃん今どこにいるの！！保護者とお母さんが校長室で待ってるから今すぐ帰ってきて！お願いだから私をあんまり心配させないで！お母さんを一人にしないでー！！』

という放送が、校舎中に響き渡った。

「……行くのは、お説教の後でも構いませんよね」

八尾比丘尼は頭痛を我慢するように、こめかみに指を当てた。

2・5・文化祭午後の部々無関係者お断り

八尾比丘尼高校 特別棟四階将棋部部室 16:00

「一手何秒というのは決めませんが、17時までには終わらなかつたら、今日のところは帰っていただきますよ」

「わざとゆっくり打つのはなしですよ？」

「そんな卑怯な事はしませんよ。先手は……そちらですね。では、よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

山梨小百合はいまいち、今の状況を理解していなかった。金銀砂銀と鈴乃音真音からの疑惑を、なんとか払拭した後、虹野光の寝顔と暇のダブルパンチで、小百合もちよつと寝てしまった。そして起きたら、校長、八尾比丘尼因幡と、見知らぬ女性が対局の準備をしていて、砂銀と真音と猫猫子猫がそれを近くで座って見ている、猫猫の膝にはあの少女が座っているというか捕まっつていて、自分の膝にはまだ光が寝ていて、隣には神社神裂が座っていて、その膝にはシスター服みたいな黒いワンピースを来た人が、犬のバルーンアートを顔に載せ寝ていた。ちんぷんかんぷんである。

「おはよう」

「お、おはようございます」

神裂に声をかけられ笑みを向けられ、自分の側に何でこの人いるの
ー！と、小百合の混乱と緊張はとどまる事を知らない。

「おそろいね」

「え、あ、な、何がですか？」

「これ」と、神裂は膝で寝ているシスターさんの頭を撫でる。膝の上で人を寝かせてるといのがおそろいという事か。こんな凄い人とおそろいな物があるなんて恐れ多いけど、グッジョブ、虹野さん！と、小百合は光に感謝した。

「えっと、その、それで、」

どうしてここにいらっしゃるんですか。と、緊張しながらも、神裂に小百合は尋ねようとしたが「静かにね」と、言われたので、黙る。

「いい子ね」

ニツコリと微笑む神裂はまるで、あなたには関係ない事だから引っ込んでなさいね。と、言っているように見えた。

小百合の胸に、鈍い痛みが走った。

全く事情がわからないまま、三十分経った。

三十分の間に、部室内には変化があった。

まず、光がいなくなった。起きた光は、寝ぼけ眼のまま、小百合を見て、神裂を見て、最後にシスターさん見て、しばらく見て、ぼんやり見て、「チャンス!」と、急に覚醒して部室を出ていった。小百合にはどういう事かわからなかったが、神裂には聞けなかった。またあの笑顔を向けられたからだ。その笑顔に縛られるように、小百合はそこから動けなかった。

次に、秋春守、香川智弘の二人が戻ってきた。夏季夏美の姿はなかったが、その代わりに、真音と対局していた女性、南穂波と一緒にいた。守が砂銀にからまれている時より、嫌そうな顔をしているのが印象的だった。穂波と守は、八尾比丘尼の対局に興味を示さず、すぐに将棋を始めた。智弘は部長に、「何してるんですか?」と聞いたが、「黙ってる」と、一蹴された。親近感がわいた。

そして、決着もついた。

「私の勝ちですね」

「……」

どんな対局だったかは見えないので、小百合にはわからないが、勝ったのは八尾比丘尼のようだ。三十分。思ったより早く決着がついた。実力に差があったのか、お互い打つのが早かったのか。

「さて……どうしますか?もう一回、やりましょうか?」

八尾比丘尼には余裕がみえる。何回やっても負けない自信も、みえる。

「栞ちゃん弱い」

どうするか悩んでる女性に、少女がバツサリ、そう言った。女性は「ちゃん言つな」と言い返したが、弱いという部分は言い返さなかった。

「もう帰りたい」

少女は、もう飽きた！。という感じた。女性は「もう少し待ちなさい」と言つて、駒を並び直す。もう一回やるようだ。「私のお家に帰る？」と、猫猫は少女に聞いて、「猫猫先生！」と、八尾比丘尼に一喝された。

「栞ちゃんじゃ勝てないと思う。弱いから」

「ちゃん言つなと言つた。それでもやらなきゃいけない時が大人にはあるんです。そこでじつとしてなさい」

「やだ。わたしが代わりにやる」

少女がそう言つて、猫猫から離れようとした。が、「そんな事しちゃダメよ」と、猫猫は放さない。暴れる少女。捕縛する猫猫。泣き出す少女。周りから怒られる猫猫。さすがの猫猫も、少女を解放した。

「栞、どいて」

さつきまでわんわん泣いてたのに、すでにけるっとしている少女は未恐ろしかった。

「……仕方ありませんね。やるからには勝ちなさい。校長先生、よろしいですよね？」

席を譲り、八尾比丘尼に許可を問う女性。

「構いませんが、私は子供だからといって甘くは見ませんよ。手加減なんて、考えません」

「べつにいい。早く終わらせて、帰りたいから」

少女は、軽くそう答え、あくびをした。

八尾比丘尼高校 特別棟将棋部部室 17:00

十七時になった。文化祭一日目の終了の時間だ。校内放送もかかった。

冬季冬美と夏季夏美も戻ってきた。二人一緒にだ。夏美が神裂の側に来て、引き攣った笑みを浮かべながら「どうもでした」と、投げやりな感謝をした。拳を固く握りしめていたのが不思議だった。その後ろでは、冬美がニコニコと笑っていた。どうやら仲直り出来たようだ。二人も、将棋ギャラリーに混じった。

バカップルコンビも戻ってきたが、すぐに着替えて帰っていった。穂波も、守との対局を終え、帰った後、守は疲れたのか、机に突っ伏したまま動かなくなった。

光も戻ってきて、真音にギヤアギヤアワーワーと話しかけた結果、「黙ってる!」と、砂銀にげんこつをくらった。そして泣き出して、真音に連れられ、部屋を出ていった。で、一分もしないで戻ってきた時には、笑顔だった。慰めるのはやつ。と、小百合は真音の凄さを改めて知った。

そして、決着もついた。

「疲れた。お腹すいた」

「帰ったら社長に、美味しいものでも食べさせてもらいなさい」

勝ったのは少女だった。少女は何でもないような顔をしているが、女性と神裂を除き、他の全員は驚きを隠せない。

夏美と光は、何この子ばねえー。と、素直に感心し、砂銀と真音と冬美は、何この子。と、訝しげに感心し、猫猫は、「お母さんがハンバーグ食べさせてあげようか」と、幼女誘拐を企てた。

「猫猫先生、給料カットしますよ……」

そして八尾比丘尼は、疲れたようだ。色んな事で。

「しかし、甘くみないとは言いましたが、まさか負けるとは……そういうえば、あなたの名前を聞いてませんでしたね」

「見習ありす（みならいありす）」

少女、見習ありすの名前を聞いて、部室内に微妙な空気が流れた。何その、とってつけたような名前。

「そうですか。ありすさん、またいつか将棋を打ちましょうね」

八尾比丘尼が微笑んでありすの頭を撫でると「人魚さんがもつと強くなったら」と、生意気な事を言った。結果、「やつぱり我慢出来ない！」と、猫猫が抱き着いて、愛で始めた。すると、「やー！」と、ありすが嫌がり、「あなたという人は……」と、八尾比丘尼が怒りを通りこし呆れ、「それで校長、約束の血を」と、女性が血を求め始め、「で、夕ご飯どうする？」「安いところでお願いします」と、冬美と夏美がトークを始め、「いやあ、すげえ勝負だったな。こことかさー」「そうですね。まさかと思いました」と、砂銀と真音が感想戦を始め、「ねー真音ー、わたくしもう着替えて帰りたいですよ」と、光がまともな事を言って、「……一度奈美と話合おう必要がある」「あ、秋春くん？」と、離れた二人は不穏な空気を出し始め、対局中の張り詰めていた空気から、いつもの将棋部の空気になった。

「ま、こんな感じかな」

「え？」

そしてそんな空気から少し離れた場所にいる神裂と小百合。神裂は席を立ち、シスターさんをおんぶした。

「か、帰るんですか？」

帰るのは神裂の勝手なのだが、何だか、一人だけ置いていかれそうな不安にかられた小百合は、まるで帰らないでと、すぎるように聞

いてしまった。恥ずかしい。神裂はそんなあなたも受け入れます。というように微笑んで来るのも、恥ずかしい。

「ええ、もちろん。もう終わったしね」

「終わった……あの……」

「何？」

今日の午前中のあの騒ぎ、冬美と夏美が仲直りしていること、それから今の、八尾比丘尼とありすの将棋勝負。普通ではない。全員が同じ見間違えをするなんて、普通ではないし、冬美と夏美があんなにあっさり仲直りしてるなんて、普通ではないし、あんな小さい子がこんな短い時間であの校長に勝てるなんて、普通ではない。その全ての場に、神裂はいた。

「何が、あつたんですか？」

この人は、今日一日、この文化祭で何があつたか、その全てを知っている。

小百合はそれを、確信していた。そんなの普通ではなく、到底ありえない事なのだ。だからこそ、神裂に尋ねた。何が、あつたのかと。小百合は知りたかつた。今日一日、自分の知らないところで何があつたのか。

落ちてきた犬は何だったのか。

どうして冬季冬美と夏季夏美を仲直りさせたのか。

あの名前も知らない女性は、なぜ校長と将棋をする事になったのか。その背中にいるシスターさんは誰なのか。

それから自分の知らないところで起こった全てのこと。

小百合はそれを、知りたかった。

小百合は神裂の目を見つめた。神裂に自分の気持ちが届くように。自分がどれだけ真剣に聞いているのか伝わるように。

そしてそれが神裂に絶対に伝わると、小百合は確信していた。この人にわからない事なんて一つもない。自分なんかの気持ちなんて、簡単に理解出来るはずだ。と、信じていたし、理解していた。

「山梨さん」

「は、はい」

そしてそれは正しかった。

神裂は小百合の気持ちに気付いていたし、小百合がそう思う気持ちの意味も、小百合本人よりも、理解していた。そして何よりも、自分の事を信頼し、信じきっている事を、神裂は感じとった。

「山梨さん」

神裂は、小百合に今日一番の笑みを向けた。

小百合は、神裂が自分の気持ちを察してくれた。自分を理解してくれた。そんな風に思った。こんなちっぽけでどうでもいいどこにでもいるような自分を、神様みたいな人が理解し、気にしてくれた。その時確かに小百合は、生きてきた中で一番の幸福を感じていた。

「あなたには、関係ない事なのよ」

「……え」

小百合は、固まった。

「だから、教えない」

小百合は正しかった。

確かに神裂は、小百合の気持ちに気付いていたし、小百合がそう思う気持ちの意味も、小百合本人よりも、理解していた。そして何よりも、自分の事を信頼し、信じきっている事を、神裂は感じとった。小百合を今この時、この世で誰よりも理解していたのは、神裂だった。

しかし、小百合が間違っていた。いや、考えていなかった。考えれるわけもなかった。小百合にとって、神裂は今日初めてあったにも関わらず、神裂のような存在だったのだから。

神様の気持ちなんて、考えるわけがなかった。

その、自分の事を考慮しない盲信的な信頼が、神裂は一番嫌いだった。

「あなたの出番はね、午前中で終わっていたのよ」

神裂は、神様のような慈愛に満ちた笑みのまま、小百合に告げる。

「終わっていた……」

「そう、終わってた。だからね、あなたは午前中に帰っても、よかったのよ。舞台から降りても、よかったのよ。午後に起こった全ては、あなたには関係がない事だったんだから」

「関係がない……」

小百合はただ、神裂の言葉を反復するだけで、何も考えてはいなかった。話している意味も、反復している言葉の意味も、周りの事も、自分の事も、神裂の事も。何も考えてはいなかった。ただただ、呆然としていた。

「あなたがいなくても、午後の文化祭は、滞りなく進んだ。午後の舞台は、滞りなく進んだ。別に午前中だって、あなたはいなくてもよかったのよ。あなたの代わりは、いくらでもいるんだから」

「私の代わりは、いくらでもいる……」

「自分でも気付いてるじゃない。知ってるじゃない。理解してないじゃない。自分は大多数の一人だって。普通だって」

「普通……」

「欠けたら物語が進行しない人間ではなく、欠けたら補充すればいいだけの人間って、あなた自分で思ってるじゃない。それでいいのよ。事実、あなたはそうなんだから。そして、それは何も悪くないのよ」

「悪くない……」

「そうよ、正しいのよ。あなたのそういう生き方が正しくて、私たちが悪くて間違っていて気持ち悪いのよ。そして今日起きた出来事は、正しい生き方をしている人には、関わる事がない、無関係な出来事なの。午前中たまたま偶然巻き込まれたからって、あなたには無関係なの。あなたは、必要ないの。正しい生き方をしているあなたには、関係がない話なの。知る必要もない話なの。私とあなたは、

関係ないの。無関係なの。山梨さん。あなたはこれから正しく生きていってね」

神裂は、小百合の膝に、バルーン犬を置いた。小百合は錆び付いた口ポットののように、視線をそのバルーン犬に向ける。そのバルーン犬が、午前中、自分の頭に落ちてきたものだと、小百合には何故かわかった。

「じゃあね」

それが、神裂が小百合に口にした最後の言葉だった。簡単な、ありふれた、別れの挨拶。

その挨拶で、小百合は漠然と理解した。わかった気がした。今の挨拶も、さっき言っていた事も、私には無関係なんだ。

「あ
」

神裂がいなくなっても、部屋にはまだ、八尾比丘尼もいて、見知らぬ女性もいて、ありすもいて、猫猫もいて、砂銀も真音も光も冬美も夏美も智弘も守もいて、各々騒がしく、いつもの将棋部のような空気が流れていた。

それを一人離れた場所で見っていた小百合は、それが自分には全く関係なく、遠く見えた。

あちらが舞台上で、こちらは観客席。スポットライトで華やぐ世界を、暗い場所から見ているのだ。

ああ、私の文化祭はもう終わったんだ。

そんな事はない。明日も文化祭はあって、今日みたいに真音と巫女服で文化祭を回って、クラスの友達共回って楽しむだろう。そう思いながらも、小百合は、もう自分の文化祭は、祭は終わったと、理解していた。

自分があの人達のように輝く事は、もう二度とない。

「ああ
」

だけど私は、悲しくもないし、涙なんて流さない。それが当たり前で、普通の事なんだから。

「ああ、いい一日だったね」

小百合はバルーン犬を持ち上げ、自分が確かに一度はあそこに立ったという証に微笑んだ。

バルーン犬で顔を隠した小百合が、涙を流している事に気付いたのは、誰もいなかった。

小百合自身も、その事には気付かなかった。

何故ならそれは、小百合に無関係で目から溢れ、小百合に無関係に頬を伝い、小百合に無関係に流れ落ちるそれは、小百合には無関係な代物なのだから。

2・5・文化祭午後の部（無関係者お断り）（後書き）

ここで小百合と鼎の話は終わり、次回から時間は巻き戻り、文化祭一日目の冬季冬美のお話になります。思ったより長くなったので、冬美さんのお話は短めにしたいな。

以下、無関係者と部外者シナリオで登場した新キャラ一覧。登場人物紹介に載せておきます。

- 『我が儘娘』はるかぜめぐる 春風巡
- 『天文部部长』ほしありあ 星亜莉亜
- 『放送委員長』きたたせとじしじ 北本十条
- 『料理部部长』かがみしちみ 各務七味
- 『神に愛された子』見習ありす（みならいありす）

3 - 1 文化祭午前の部く想いと迷いく

冬季冬美は、自分が理不尽な理由で怒っていると自覚していた。

『私と冬美は幼なじみ。それ以上でもそれ以下でもない。恋愛関係とか、意味わからない事、言わないでくれる？』

夏季夏美のこの言葉は、どこをとっても間違っていない。

夏美はもちろん、誰だってそう思うだろうし、冬美自身もそう思う。だけど、冬美はその言葉に怒りを感じた。

夏美と冬美は幼なじみ。それ以上なんてなくて、それ以下になる事なんてない。恋愛関係なんて意味がわからないものになんか、なるわけがない。

誰にとっても夏美にとってもそれが間違いなくて、それが正しい事だ。

だから間違っているのは、私一人だけなのだろう。

冬美はそう自覚していた。

間違っているのが自分で、怒っている自分が悪いのだと。

だから早く、いつもの自分に戻って、いつものように夏美と接しよう。

それが正しい行動で、間違いがない行動。

そうわかっていたけれど、冬美はそれが出来なかった。

夏美に冷たい態度をとり、怒りを抑える事が出来なかった。

この怒りを、この想いを抑えたくはなかった。

文化祭前夜。

眠れぬベットの中で、冬美は決意した。もう、自分に嘘をつくのをやめる事にしよう。

もう、自分を騙すのをやめる事にしよう。

自分の中にあるその想いを、認め、向き合う決意をした。

しかしその想いを、言葉にして出す勇氣は、今の冬美にはなかった。だけど、その想いは、すでに内に秘めておける程、小さな物ではなかった。

だから冬美は、紙に書いた。その想いを文字として、自分の外に出す事にした。明確に、する事にした。

冬美は月明かりに照らされる部屋の中で、便箋に大きく力強く、それを書いた。

『私は、夏美を愛しています。好きではなく愛しています。ライクではなく、ラブしています。一人の女として、夏美を心の底から愛しています』

冬美は書いて、読んで、眺めて、顔を真っ赤にして、その便箋を、初めて書いたそのラブレターを、机の引き出しの奥にしまった。

その想いが、これ以上出て来ないように、誰にも見つからないように、しかし見失わないように、奥に、奥に。

少し気持ちが楽になった冬美は、明日、夏美と仲直りする事にした。

この怒りを抑えるの嫌だけど、夏美と文化祭を楽しめないのは、も

つと嫌だから。

八尾比丘尼高校

特別棟四階将棋部前

特別棟一階調理室

10:

00)

「おら行くぞ！もう夏美なんか知るか、バーカバーカ！！」

そんな、乙女チックな前夜を過ごしていた冬美は、想い人に暴言を吐いていた。

原因は夏美にある。いつだって、それを原因だとするのが理不尽だとしても、冬美が怒る原因は夏美にあるのだ。

せっかく、仲直りしようと思ったのに。こっちから歩み寄ろうとしたのに。午前中の自由時間に仲直りして、文化祭を楽しもうと思ったのに。夏美がそれを拒絶するような態度を取った。私に黙って当番の時間を交代した？そんなに秋春君と二人で居たいってか！？

「ふざけやがってー！！」

冬美は、四階分の階段を怒りを原動力に一気に駆け降りた。一段飛ばしがデフォルトであった。

文化祭が始まったばかりで、特別棟のこの階段を利用する人がいなかったのは幸いだった。暴走機関車のような勢いだった冬美にぶつかっていたら、死者が出ていてもおかしくはなかった。

「い、痛いのですー！」

本当に幸いだった。犠牲者が一人で。

「あ、ごめん。大丈夫？」

犠牲者、つまり虹野光の悲痛な叫び声を聞き、自分が光を引きずってきたのを思い出した冬美は本当に、夏美以外は眼中にない気がした。

「ぜんっぜん！大丈夫じゃありませんの！手も足も痛くたまりませんわー！」

「わかったわかった、見せてみて。大丈夫？」

涙目な光は、冬美を怒る。手は冬美に握られ、引っぱられたから痛かったのだろう。足は階段を自分のペースで降りられなかったので痛い痛いなのだろう。冬美が光の足を確認すると、弁慶さんがすでに青くなっていた。転げ落ちて全身打撲にならなかっただけ、よしとした。冬美は。

「もう最悪ですよ！何なんですのあなたは！」

もちろん、光はよしとしない。いつもは冬美にこんな強きな態度は取らないが、怒りの力は半端ない。

「だから、謝ったでしょ？ごめんなさい。ちょっとカツとなってやりました。今では反省してます」

「全然謝ってるようには見えませんの！もう！やっぱりわたくし真

音とがいいですわ！意味がわからない先輩とはいたくないですよ！」

「誰が意味わからない先輩だった？」

冬美は光の肩を掴んでニッコリ笑った。もちろん、怒りを示している。意味わからないとか、今の冬美にとってはちょっととした地雷ワードである。

「ヒッ！ご、ごめんなさいですかしら……」

冬美の怒気を受け、急激に光の怒りが萎んでいき、いつもの光に戻った。

「別に、謝らなくてもいいんだけどね……」

悪いのはこっちだし。間違ってるのは私だし。

冬美はため息をついて、光から手を離れた。

「うう……お姉ちゃん、真音え……」

冬美から怒気がなくなっても、一度刷り込まれた恐怖はすぐにはなくならないらしく、光は恐怖で涙目だ。

「……」

体を震わせ縮こまりながら、助けしてくれる人を捜すように目を泳がす光の姿は、昔、夏美の後ろに隠れてばかりだった自分の姿に似ている。冬美は懐かしさと苛立ちを感じた。

「……あ、ポップコーン食べる？」

どうしようかと悩んだ冬美は、視界にポップコーンという文字が入ったので、とりあえず食べ物で釣ってみる事にした。

「食べますの！」

「そ、そう……じゃ、行こうか」

「はいですの！」

一瞬にして怯えから期待に満ちた表情になった光の姿は、過去の自分とは全く似ていなかった。

「そういえば虹野さんってお姉ちゃんいたの？」

「はいですの！とっても優しいお姉ちゃん何ですの！」

「へえー、知らなかった……」

『ポップコーンとかおにぎりあります』と書かれた紙が貼られている調理室にはすぐについた。

「あ、いらっしやませー」

まだ始まったばかりだろう。室内にはエプロンをつけた生徒しかおらず、お客らしき人は誰もいなかった。

「うわ、初めてのお客様が巫女さんとは」

ありがたやありがたや。と、拝み始めた受け付けらしき女子生徒。

受付さんに指摘され「うつ」自分が巫女服を着ていた事を思い出し、
というか再認識し、冬美は怯んだ。

「ポップコーン一つ下さいですわ！」

しかし光は全く怯まず、恥ずかしがる素振りもせず、ポップコーン
を注文した。

「冬季先輩も買うのですの？」

「え？う、うん。二つ下さい。二つ」

こ、これが平民とお嬢様の違いか。と、冬美は戦きながら、受付さ
んに注文し、二つ分の料金を払った。

「ありがとうございます。みんな、初仕事だよー！」

受付さんの掛け声を受け、ガラガラしていたエプロン姿さん達が、
「おー！」と声を上げ、暗幕の向こうに消えていった。あつちで調
理しているのだろう。受付さんも「では、少々お待ちください」と
言って、消えていった。

残ったのは、プレゼントを待つ子供のようにそわそわしている光と、
巫女服変に見えないよね大丈夫だよねとそわそわしている冬美。そ
して、目をつぶって腕を組み、精神を集中している部長っぽい人。

「お待たせいたしましたー！」

しばらく待っていると、受付さんがアメリカンサイズなポップコー
ンと、お茶を二つずつ持って戻ってきた。

「ふわぁ……大きいですのー!」

アメリカンサイズなポップコーンを見て、光はさらに目を輝かせた。冬美はその大きさにげんなりした。

「はい、ポップコーン二つになりまーすこのお茶はサービスです。どうぞー」

「ありがとうございますですわ!」

「どうもです」

ポップコーンとお茶を受け取り、光は早速ポップコーンを食べた。

「おいしいですわ!」と、子供のように喜ぶ光を見て、受付さんと冬美は苦笑する。

「あなた達、巫女服着てるって事は、金銀君とこの子達でしょ?」

「そうですね……?」

そこで冬美は、自分がプラカードを持っていない事に気付いた。どこかで落としたのであろうか。

「その巫女服って、金銀君の提案で着てるんでしょ?」

「ええ、まあ」

「へえー、やっぱりそうなんだ。七味ー、やっぱり金銀君、巫女服が好きみたいだよー」

受付さんの言葉に、七味と呼ばれた目をつむり腕を組み続けた女子生徒が、「な、何で私に言うの!？」と、顔を真っ赤にした。雰囲気とは掛け離れた女の子っぽい声と態度だった。

「別になんたなくだよ、なんたなく」

「全くもう……」

七味は、気を落ち着けるようにため息を一度つき、また目をつむり腕を組んだ。

その七味を楽しげに見ていた受付さんは、楽しげな表情のまま冬美に小声で言った。

「七味は、金銀君が大好きなんだよ。本人は認めようとはしないけどね。ただの幼なじみよって、こればっか。ま、そういうところが七味のカワイイところだけだね」

「好き……幼なじみ……?」

他人事とは思えないその状況。冬美のスイッチが入った。

「ちょっと持ってた」

「ふぁい?」

ポップコーンをモグモグしていた光に、半ば無理矢理ポップコーンを持たせ、瞑想中に見える七味に近づく。

「七味さん!」

「は、はい!？」

そして肩を掴み、こちらを向かせ、真剣な表情な冬美。驚く七味。ポップコーンを喉に詰まらせる光。背中をさする受付さん。

「今の関係を変えようとするのは、世間一般から見たら間違ってるかもしれません。だけど！私も頑張りますからあなたも頑張ってください!」

「は、はあ……?」

言いたい事は言った。

伝わるかどうか、意味があるかは重要ではない。

その想いを口に出す事が重要なのだ。

「じゃ、お茶ありがとうございました。ほら、虹野さん行くよ」

「む、むぐぐぐ」

ポップコーンに苦しむ光の手を引き、冬美は調理室を後にした。

3 - 2 ・文化祭午前の部／好奇心と違和感

八尾比丘尼高校 特別棟一階 生徒棟一階 10:10～

調理室から出た冬季冬美と虹野光は、渡り廊下を通り、生徒棟一階に来た。特別棟とは違い人が多く、その巫女服姿に注目が集まったが、二人はその事を気にしなかった。

「冬季先輩が引つ張ったせいでポップコーン零れてしまいましたですわ！」

光は冬美を怒りながら、ポップコーンを食べるのに夢中だったし。

「はいはい。悪かったです。ごめんごめん」

冬美は壁に手をつきテキトーに謝りながら、反省するのに忙しかつたからだ。

冬美が反省しているのはもちろん、光のポップコーンに関してではなく、さっきの自分の言動の事だ。見ず知らずの人に、何だかとても生意気で、何よりも恥ずかしい事を言った気がする。今日の自分はどうかやらおかしいようだ。いや、おかしいのは今日限定ではないかもしれないけれど。

「先輩、そんなに反省しなくてもいいですわよ？」

今にも壁に頭を叩きつけ始めるのではないかという悶々としたオーラを放つ冬美を見て、首を傾げる光。変なのー。

「ああうん……まあとりあえず忘れる、忘れよう、忘れたい」

冬美は自分に言い聞かせ、気持ちを切り替える事にする。ポップコーンを口に放り込み、ポケット機能つきの袂たもとからお茶を取り出し一服。そして「よし！」と気合いを入れて、リセット完了。

「これからどうする？どっか行きたいところある？」

夏美と一緒に行きたいところはあれど、一人で行きたいところはそんなにない冬美は、光に用事があるか確認した。

「お姉ちゃんのとこに行きたいですわ！」

すると光は、目を輝かせそう答えた。

「ああ、虹野さんのお姉さんって在学生なの？」

てっきり他校の人と、冬美は思っていた。

半年近く同じ部活をしていて、今日初めて、冬美は光に姉がいる事を知った。お姉ちゃんと呼べるだけで幸せ満点といった表情を見れば、光が姉の事を大好きで大好きで堪らないの是一目瞭然。そんな光が半年近く、部活で姉の話題を出さなかったり呼ばなかったりしなかったのは不自然である。だから、この高校には通っていない高校の生徒、もしくは年が離れてたりするんじゃないのかな。と、冬美は思ったわけだ。まあそれでも、話題にくらいはあがりそうなものだが。

「三年生の人？」

「二年生ですわ」

「二年？へえー、同じ学年なんだ。知らなかった。部活は何してるの？」

「文芸部ですよ！だからわたくしは文芸部に行きたいですわ！」

「文芸部？ああ、だから夏休み文芸部に……」

光は夏休み最終日、文芸部に顔を出していた。冬美はてっきり、友人の鈴乃音真音に誘われて行ったと思っていたが、どうやら違ったようだ。確かあの日は、鈴乃音鈴音と三途舞歌も文芸部に行っていたはずだが、あの二人は部活に参加はしていなかったはずなのでお手伝いさんだ。となると、本物の文芸部員は誰なのだろう。

「まあ、行けばわかるか。場所はわかるんだよね？」

「当たり前ですよ！わたくしについてくるといいと思いますわ！」

意気揚々と歩き出す光の後についていき、冬美は文芸部に向かった。

八尾比丘尼高校 特別棟二階 特別棟三階文芸部部室 10:20〜

「先輩に頼みたい事があるので、よろしいですかしら？」

「頼みたい事？」

二人は今、特別棟二階の踊場にいた。光の手にはポップコーン。冬美の手にはポップコーンと、一階と二階の間の踊場で発見、回収したプラカードがある。

「わたくしはお姉ちゃんと一対一でお喋りしたいのですの」

「ああ、つまりその間どっかに行ってるって事？」

「そうですねどそうじゃないですわ！」

「どっちなのか……」

この子本当に高校生なんだろうか。と、呆れる冬美。

「これから行く文芸部には邪魔物がいるのです！」

「邪魔物？」

「そうですね！わたくしとお姉ちゃんの仲を邪魔する凶暴でこわい奴ですの！お姉ちゃんを騙してお姉ちゃんに擦り寄ってお姉ちゃんを独り占めしようとする嫌な奴ですの！」

「ちょ、ちょっと落ち着こうか虹野さん」

よほどそいつが嫌いなのか、光は興奮した様子で、冬美にどんどん近づきながら、嫌な奴だ！。最低だ！。いなくなつて欲しい！。と、言いまくる。

「先輩だつてそう思いますでしょ!？」

「そ、そうだね。虹野さんの言う通りならまさに悪魔のような人だね」

だつて、光の言う通りなら、女性に手をあげるのを全く躊躇しない性格で、光の姉と仲良くしているのは財産目当てという恐ろしい男のようだ。まさに悪魔。まさに外道。

「だから先輩はそいつと一緒にどっか行って欲しいですわ!よろしいかしら!？」

「え、そんな恐ろしい人と一緒にどっか行けと？」

財産目当てで近づき、さらに女性に暴力を振るうのを躊躇しないような男だ。出来れば近づきたくない。二人つきりも遠慮したい。

「よろしくですわ!邪魔する奴は馬に蹴られて死ねばいいんですわ!」

「待つて待つて!私まだ了承してないよ!?!それとそれは恋愛のあれだから!後もしかしてそれ私も入ってる!?!」

光は、話は終わった。さあ行くぞー!という感じで、階段を上り始めた。慌てるのは冬美だ。まだ心の準備やら色んな準備が出来てない。

しかし、人の話は聞かない我が儘お嬢様の素質がある光は止まらな。い。ぱっぱと階段を上り、さっさと三階についた。

「だから待つて」

「お姉ちゃん来ましたわー！」

そして冬美が止めるのを聞かず、文芸部部室に突入である。

「あ、光ちゃんおはよー」

部室にいたのは、冬美も知っている人物だった。

光に笑顔で手を振るのは桜木さくら。その横で光を見て顔が引き攣り、冬美を見て驚いたのは冰山つらら。両方、冬美のクラスメートだ。

「お姉ちゃん会いたかったですのー！」

「わっ、ちょ」

光は文芸冊子が積まれている机にポップコーンを置いて、さくらに飛びついた。さくらは慌てながらも、笑顔で光の頭を撫でる。

「え、虹野さんのお姉さんって、桜木さん……？」

「え、あ……と、と、冬季さん何でここにー!？」

冬美がドアのところで、驚いている事に気付いたさくらは、慌てて光をひっぺがした。光、シヨック。

「あ、いや、これは違って、あの、」

手をパタパタさせて、しどろもどろに冬美に何かを弁明しようとするさくら。まるで、光の姉と知られたくない、思われたくないとい

った態度に、「お、お姉ちゃん？」光、さらにシヨック。

「さくら……とりあえず落ち着こ。大丈夫だよ」

「あ、う、うん。だよね……落ち着けわたし」

つららに声をかけられ、落ち着くさくらを見て「む……」光、不機嫌マックス。

「えっと、おはようございます冬季さん。巫女服カワイイですねー」
そして仕切り直すさくら。若干、笑顔を無理矢理作ってる感があるが、落ち着いたようだ。

「おはよう。あ……桜木さんと冰山さん、文芸部だったんだね」

「冬季さんも将棋部だったんですねー。知りませんでしたー。将棋好き何ですかー？」

「ああうん、まあね……」

さくらと当たり障りない会話をしながら、冬美は光からの無言のプレッシャーをひしひしと感じていた。

光は親の敵でも見るような目で、冬美を睨み、ほら、早く消えろよ。約束はどうした。ああん？と、プレッシャーをかけてくるのだ。いつもの光からは想像出来ない敵意を感じる。

「将棋かー。わたしは全然できないんですよー」

光のその殺気レベルのプレッシャーに気付いていないのはさくらだ

けで、つららも、ちらちらと光を気にしている。

「そうなんだー……あー、実はですね桜木さん。冰山さんをちょっと貸してくれたら嬉しいなあって思うんですけど？」

「え？」

「えー！」

さくらはきよとんとして、つららは驚愕して、光はサムズアップを向け、冬美は後で光に教育的指導をする決意をした。

「わ、私ですか？」

「そう、冰山さん。ちょっと話があるんだけど、ダメ？」

「あー……」

つららは助けを求めるようにさくらを見る。さくらは「ん」「つららと目を合わせて首を傾げ、それからニコニコしてる光を見て「んー」逆に関首を傾げ、冬美を見て、「んー？」また逆に首を傾げる。

「つららと冬季さんって知り合いだったんですかー？」

「いや、違うけど、まあ、二人つきりで聞きたい事が、ね？」

冬美も首を傾げてみる。

「二人つきりですかー」

さくらは天井を見上げて、「ふーん」と、納得したような考えこむような呟きをもらした。

「つららがいいならいいんじゃないですかー？」

そして、冬美を見てニコニコそんな事を言う。冬美は、まあそりゃそうだと頷き、つららは無言で動揺し、光は無言でガッツポーズ。

「さ、さくらっ？」

つららは助けを求めるようにまたさくらを見る。さくらは笑顔を返す。

「えっと……」

つららは探るように冬美を見る。冬美は頬をかきながら、目をそらす。

「うっ……」

そして最後に光を見て、うめいた。頭の後ろに目がないさくらには見えなかっただろうが、光がつららにあっかんべーをしたのを冬美はバッチリ見た。

「……わかりました」

「やった！」

つららが渋々といった様子で頷いた途端、光がさくらに飛びついた。さくらは仕方ないなあというような笑顔を光に向けた。

「……」

じゃれ合う二人を見るつららの引き攣った表情は、何かを我慢しているように冬美には見えた。怒りなのか、悲しみなのか、それとも両方か。それは冬美には判断出来なかったが、これ、馬に蹴られるの私と虹野さんの方じゃないかな。とは、思った。さらに、私だったら両方だな。とも、思った。

そんな風に冬美は、つららに同情していた。だから光より、そしてさくらよりも、その時つららを見ていた。だから気付いた。つららが席を立つため、顔を伏せる形になり、そしてまた顔を上げるまでのその一瞬の表情に、冬美だけが気付いた。

つららは、笑顔を浮かべていた。満足気に、計画通りだと言わんばかりの、凄惨な笑みで、光ではなくさくらを見ていた。

「……どうかしましたか？」

「……ううん、何でもない」

立ち上がった時にはもう、その笑みはなく、少し緊張しているような固い表情のまま冬美の側にやってきた。

「それじゃ、さくらまたね」

「うん、話しが終わったらすぐ戻って来てねー」

「冬季先輩ごゆっくりどうぞですわー」

「はいはい……」

二人は部室を後にした。「ドアはちゃんと閉めて下さいですわー」と、言われたのでつらは後ろ手にドアを閉め、ため息一つ。

「なんか悪いね」

「いえ、別に……それでは」

「え、どこ行くの？私も一緒に行くけど」

「え？」

「え？」

冬美は首を傾げる。なんか現状の認識に違いが。

「あー……あ。私、あれです。適当に時間潰してから戻りますから、大丈夫です、よ？」

「ああ、そういう事ね」

つらは、さくらと光を一对一にするために、冬美が話しがあるなんていう嘘をついた事に気付いていたのだ。気付いていないわけではない。きっとさくらも気付いていただろう。うまくいったと思っているのは光くらいなものだ。

だからつらは、自分はちゃんと理解しているし、話す事もないのだから、ここで別れても問題ないだろうと、思ったようだ。

それは間違いではない。来た当初は、光曰く、財産目当てでさくらに近づく邪魔物がつららだとわかった当初は、冬美はそれでもいいかと思っていた。つららと、どうしても話したい事、聞きたい事も

なかったし。

「せっかくだしお話ししない？」

しかし、今は違う。あの笑みを見た時、つららに興味がわいた。つららとさくらの関係に興味を持った。噂にまでなっていた『桜木さくらと冰山つらら』を知ってみたくなった。

「ほら、こついう日って、一人で回っているとなんか寂しいし。ダメかな？」

「あー……そう、ですね……えっ、と……」

つららは声を漏らしながら、目をキョロキョロと動かす。目まぐるしく思考しているようだ。

「……いい場所、知ってるので、そこでなら」

しばらくそうしていたつららは、冬美の顔色を探るようにそう言った。どうやら、お喋りを快諾してくれたようだ。「ありがとう」「感謝」。

「いい、です」

つららが言っていたいい場所は、すぐそこだった。本当にすぐ。文芸部部室の左隣の部屋だ。なるほど、いざとなったらすぐ逃げられるいい場所だな。と、冬美は評価。

「あれ……？」

「ん？」

ドアを開け、部屋の中を見たつららが固まった。どうしたのだろうと、中を見た冬美は「うわ、何これ」と驚きの声をあげた。

その部屋は、一般教室の半分以下、四分の一程度の広さの部屋だった。中庭に面した壁には出窓が一つあり、床には高級そうな赤い絨毯が敷かれている。中央にはちゃぶ台が一つあり、これまた高そうな座布団が部屋の隅に積まれていた。壁には掛け軸がかけられていて、絨毯と窓以外は和風な雰囲気だった。こないだの部屋があったとは、冬美は全く知らなかった。早く入って、あの座布団に座ってみたい。

「……」

「あれ、入らないの？」

しかし不思議な事につららは、中には入らずドアを閉めた。そして何故か、部室の右側の部屋に向かう。

「どうしたの？」

「……」

冬美を無視して、つららはドアを開ける。その部屋は、さっきの部屋とは違い、部屋にある机と椅子の数が少ない事を除けば、一般的な教室だった。

「どっして……」

しかし、つららは何故か愕然としていた。顔が青ざめ、血の気が引

いていた。何か恐ろしいものを見たかのように、体験したかのように。自分には見えない何かが見えているのだろうか。冬美は寒気がした。

「大丈夫？保健室行く？」

「……いえ、大丈夫、です」

つららは震える声で、そう答えた。部屋に入った。

「……にするの？」

冬美としては、あつちの部屋がいいのだが、「こっちでお願いします」「つららから切羽詰まった様子でそう言われては、従うしかなかった。

3・3・文化祭午前の部／冬と氷柱／

八尾比丘尼高校 特別棟三階空き教室 10:30)

「あの、冰山さん？」

部屋の中央に、向かい合って置かれていた席に座り、話しを始めようかという冬季冬美だったのだが。

「ホントに大丈夫？」

「ええ……大丈夫、です」

と、対面の席に座っている冰山つららは言うが、顔は青白く、視線はさ迷い一定しない。肩は小刻みに震え、冬美が机に置いたポップコーンに手を延ばすだけで、小さく悲鳴をあげる。病的な雰囲気である。何をそんなに怯えているんだろう。と、疑問に思い、というか冰山さんって、こんなに怯えを見せる人だっけ。と、自問して、少なくとも去年は違ったよな。と、記憶を探り確認する。

冬美はつららと桜木さくらとは中学校が違うので、二人に出会ったのは高校だった。出会ったといっても、偶然同じクラスになっただけの縁であり、挨拶程度はしたかもしれないが、今、この時まで、会話した事はなかったと言ってもいいだろう。

それは、夏季夏美がいれば人間関係については満足して、積極的に他者に話しかけない冬美にも原因はあるかもしれないが、つらら側にも多いに原因があった。

去年のつららは、誰かに話しかけられたら無視がデフォルトであり、親友であるさくらに近づくものなら暴力を持って制裁するという噂が流れ、それが事実と受け入れられてしまうほど、さくら以外の人間関係を拒絶していた。まさに名前通り冷たい人何だな。と、冬美は思った覚えがある。夏である私が溶かしてやるぜ。と、夏美が馬鹿な事を言った覚えもある。チヨップを喰らわせた記憶は確かにある。

しかし、今のつららにその面影はない。何かに怯えている小動物のようで、攻撃性は感じられない。さっきのさくらとの様子も去年とは印象が違った。去年はつららがさくらを守っているように見えたが、今はつららがさくらを頼っているように見えた。

この一年で、二人の関係性が大きく変わったのは明らかだ。と、冬美は断言出来る。そしてこの一年で、自分と夏美との関係性がそんなに変わっていないのも、冬美は断言出来る。今までは、それでいいと思ってた。

しかし、今はそれを変えたいとも思っている。つららの話を聞き、その参考にしよう。きっと何か、ためになる、はずだ。うん、多分恐らく。だって、冰山さんと桜木さんの関係、私たちに似てなくもないし。親密さは似てる。けど、何か違う。その違いが、きっと私のためになる。私の勇気になる。自信になる。

「……………あの？」

「え、ああごめん。ちょっと考え事をつて……………冰山さん、なんかもう大丈夫みたいだね」

冬美が考え込んでいる間に、つららは本当に大丈夫になっていた。顔色はよくなり、緊張しているで表情は固いが、怯えはほとんど見えない。さっきまでは病的だったが、今は人見知りする普通の人に

見える。

「はあ……最初から大丈夫です、けど？」

困ったようにそう言うつららは、怯えを堪えているようには見えな
い。恐怖を隠し、無理しているようにも見えない。この短時間で、
気持ちを隠したのではなく、気持ちを切り替えたのだ。と、冬美は
直感的に理解し、内心驚いた。

さっきまでのつららは、本当に、救急車を呼んだ方がいいのではな
いかという程、顔色が悪かったのだ。しかし今はそれがなかったか
のように振る舞っている。例えるなら、インフルエンザにかかって
いると一目でわかる程の状態だったのに、少し目を離したら、健康
だと一目でわかる状態になっていたようなものだ。冬美は決して、
鈍感な人間ではない。空気を読めない人間ではない。人並みには人
の気持ちを察する事が出来る人間だ。だから、気付き、驚き、そし
て違和感を覚えた。そんなに簡単に、自分をコントロール出来るも
のなのか、と。

「あの……聞きたい事あるなら、早く、してくれませんか？私、
さくらのところに、早く戻りたい、から」

「……ああ、うん。ごめんね」

つららが口を開けば開くほど、冬美の違和感は大きくなる。言葉だ
けなら、つららは冬美を急かすように、強きな態度だが、実際のと
ころ、つららは冬美の顔色をうかがいながら、これでいいのかな？
大丈夫かな？と、不安げに言葉を口にしてている。まるで、誰かに言
わされているような……。

何かおかしい。

つららもそうだが、自分も何か変だ。

冬美は「ちよつと失礼」と、つららに断ってから、お茶を飲む。そして深呼吸して、首を回し、「冰山さんもポップコーン食べる？」笑顔でポップコーンおすそ分け。

「あー……じゃあ、少しだけ」

「少しと言わず、いっぱいどうぞ。どうせ一人じゃ食べ切れないから」

「はあ……わかりました」

恐る恐るという感じで、つららはポップコーンに手を延ばした。そしてしばらく冬美とつららは、ポップコーンを食べた。飲み物がないとつらいかと思い、飲みかけだがお茶もすすめたが、つららはそれは断った。

数分、二人の間に会話はなかった。その時間は、冬美がわざと作った時間だった。つららは冬美をちらちら見ていたが、冬美はそれに気付かないフリをして、ポップコーンを食べるのに夢中なフリをして、無視して、わざと何も喋らなかった。

「よっ」

「えっ？」

「うっん、何でもない。気にしないで」

その無言の時間で、冬美は気持ちを切り替えた。つららから感じる違和感はとりあえず忘れよう。つららの事は保留にしよう。横に置

いておこう。そういう形での切り替え。短時間でスイッチを切り替えたようなつららの切り替えとは、全くレベルが違う切り替えだが、切り替えは切り替えだ。冬美は落ち着いて、話しが出来るようになった。

「冰山さんも早くして欲しいみたいだから、単刀直入に言うね。私
が知りたいのは、あなたと桜木さんとの関係についてなの」

「私とさくらの関係について、ですか？」

つららは意味がわからないというように、首を傾げた。冬美も、いざ口に出してみると、自分でも何聞きたいのかよくわからないなと思った。

「えーっと、つまりね……二人は、いつからの付き合いなの？」

段々に聞いていく事にした。

「小学校の頃からですけど……」

「一年生から？」

「そうですね、けど？」

「へー、じゃあかれこれ十年間の付き合いなんだね」

「はあ、まあ………？」

質問の意図を計りかねるといった様子をつらら。

「ちなみに、私と夏美は生まれた時からの付き合いです」

「はあ……？」

だからなに？といった様子をつらら。まあ言った冬美も、何で張り合っただんだ私。と、苦笑い。

「あ、夏美って誰かわかる？」

「あー……あの、あなたといつも一緒にいる、人ですよね」

「そう。知ってたんだ」

「ええ、まあ……」

つららはやましいところもあるのか、顔を伏せた。それを見て、あ、やっぱりこの人、私の名前さえ知らなかったな。と、思った。顔くらいと、いつも二人組でいる奴だ。くらいの知識しかなかったのだろう。たまにいるのだ。どっちが夏でどっちが冬かいまいちわかってない人が。こっちが冬だから、あっちが夏。そういう感じで、つららは知っただらう。

「二人は、友達何だよね」

「友達っていうか、親友ですけど……」

「そっか。親友、親友ね……それ以上の関係になりたいとは？」

「は？」

「あ、いや、何でもない。忘れて」

冬美はパタパタ手を振り、忘れる忘れる。何を聞いているんだ私は。

「……親友以上の関係なんて、ない」

「え?」

つららの思いの外強い口調に、冬美は驚いた。

「いや、あると思うけど?」

「……例えば?」

つららは顔を伏せながら聞いた。

「例えば、家族と、か、なんとかあるようなないような気がしたけど気のせいかな?」

『家族』の『か』を口にした瞬間、つららの眼光が鋭くなり、冬美の言葉はうやむやになった。

「あ、恋人とかは?」

「はあ?」

「ちょ、ちょっと待とうか冰山さん。なんか去年のあなたを彷彿とさせる雰囲気か」

つららの、何言っただこいつ頭おかしいだろ。という仕種に、冬

美動揺。冬美の動揺に、ハツと我に帰ったように、緊張を取り戻すつらら。

「なんか私おかしな事言つたかな？」

「……男女なら、こ、恋人とかの関係もあるでしょうけど、同性なら、親友が一番深い、関係です……か？」

冬美の睨みで、今度はつららの言葉がうやむやに。

「別にあれじゃないかな。同性でもそういう関係になれる。だから、一番深い関係が親友つてのは考え直した方がいいと思うな。うん。可能性を自分で狭めちゃダメだよな」

冬美の独断と偏見による意見である。故に、強い口調で言い切る。

「それは、まあ、そういう人もいるかもですけど、そういうのはちよっと、特殊だから、やっぱり親友が一番かって」

しかし、つららもそこは譲れないらしく、否定。

「……つまり冰山さんは、桜木さんと親友以上の関係になる気はないと。そんな気持ちはないと。そういう事ですか」

「……だから、その上が、ないっていうか。あの……怒ってますか？」

「別に」

と、否定するが明らかに冬美は不機嫌だった。腕をくみ膨れっ面で、

恨めしげにつららを見ている。これで不機嫌じゃないと思う方が残念だ。

冬美が不機嫌になったのは、簡単な理由だ。つららに否定されたからだ。ただそれだけの話。つららは、さくらに恋とか愛とか、そういう感情を抱いた事はないとわかった。全く、微塵も。そういう事を考えた事すらないのだろう。それだけの話。

「失礼だけど、冰山さんって桜木さん以外に友達できた事ある？」

「……ない、ですけど」

「そう」

そういう事だ。つららは十年間、さくらにしか友情を感じてなかったし、友情を向けてはいない。なるほど、それは親友といっていいだろう。もしも友情を数値化したとしたら、つららの友情は100%さくらに向いていた。それは冬美との違いだ。冬美は昔から夏美を一番に信頼していたが、夏美以外に友達がいなかったわけではない。友情だけでいえば、つららは、冬美が夏美に感じているものよりも強く、さくらに感じているはずだ。

それが何を意味するかといえば、友情は友情、愛情は愛情という事。そんな当たり前の話。どれだけ友情を感じていたところで、それが愛情に変わる事なんてない。

「その違いが私にとって吉となるか凶となるのか」

冬美は脱力し、机に突っ伏した。距離が近くなったので、つららは椅子を引いて距離を取った。

「冰山さんさあ」

顔だけ上げて、急にやさぐれた感じの冬美につららは「な、何でしようか」若干困惑気味だ。

「幼なじみとか、どう思う?」

「お、幼なじみ、ですか?」

「そう。幼なじみ」

「あー……………小さい頃から、家族ぐるみで仲良くて、家族みたいに仲がいい人達の事、ですよな」

「うん、そんな感じ。どう思う?そういう関係性。桜木さんと氷山さんも、幼なじみといえれば幼なじみじゃない?」

小学生からの付き合い。生まれた時からの付き合いである自分たちには及ばないけれど、幼なじみともいえる。

「え?あー……………いえ、私とさくらは、家族ぐるみの付き合いでは……………ないから」

「そうなの?」

冬美は体を起こす。それは意外だった。

「ほら、授業参観の時、氷山さん、桜木さんのお母さんと一緒にバドミントンしてたでしょ?だからってつきりそうだと」

「あ、いや、それは、あの一、えっと……………」

「ふーん、まあいいけど……」

どうやら色々と複雑なようだ。慌てるつららを見て、冬美はとりあえず、そう理解した。

「つまり、幼なじみではないんだよね、二人は」

「はい、まあ……さくらと私は、親友で、幼なじみ……家族ではないから、家族には、なれないから」

そう言うつららは哀しげだった。

「だから、あー……と、あ、あなた達みたいに、幼なじみっていうのは、家族っていうのは……いいと思います、はい」

「家族、ね」

はあ。と、ため息をついて、冬美は背伸び。「食べる？」と、つららにポップコーンを向け「もう、いいです」と言われたので、一人で食べる。

「そうなんだよね。私と夏美はさー、幼なじみで、なんというか姉妹みたいに育てられたんだよねー。だからさ、私と夏美の間には、氷山さんと桜木さんとは違って、最初から友情以外があつたわけだよ。家族愛っていうか、姉妹愛的な？そこが私達とあなた達の違い何だよ。あなた達は純度100%の友情で出来ていて、私達はそこに愛情も入ってたんだよ。だから、私と同じくらい、ううん、私以上に一緒にいたあなたが、桜木さんに愛情を感じなくても、私が夏美に愛情を感じるのとは間違いではないはずだよ。そして夏美もそ

うに違いないよ、ね？」

ポップコーンを食べながら、冬美は自分の結論を述べた。ポップコーンを食べながらの理由は、勢いを得るためだろう。

「あーっと……」

つららは目線を冬美、机、天井、窓、壁、床、自分の手と動かし、「つまり……」冬美を見て首を傾げる。

「あなたは、その、幼なじみさんの事を、あ、愛してるっていう事……ですか？それを、私に、認めてもらいたい？」

「な、ななな何故わかったの！？」

冬美は驚き立ち上がった。椅子は倒れ、何故わかったんだこいつはまさかエスパーなのかと考えてしまうくらい動転している冬美は、つららにその事がバレないと心底考えていたわけである。恋に落ちると馬鹿になる現象は、同性愛とか関係なく襲いかかる。

「あ、いや、そ、そうよ？私は夏美を愛してますよ？ほら、あれ、家族愛的な意味でね！！そこんとこ、よーろーしーくっ！！！」

顔を真っ赤にして机をバンバン叩く冬美は、もうどうしようもない。

「わ、わかりました」

つららは身の危険を感じたのか。椅子を引いて、冬美から距離を取った。

「……何で逃げんの」

それを見逃さない冬美。

「何、私が襲うとでも？」

「あ、いや、そんな事は、全く……」

と、言いつつも、つららはさらに椅子を引く。じと目で睨みながら襲わないと言われて信じれないのはつららのせいではない。

「……勘違いしないでもらいたいけど、私は夏美が好きなだけであつて、同性愛者ってわけじゃないから。夏美以外の誰にもそういう感情抱いた事ないから」

「へ？あ、あー………そうですか」

「………私今なんつったあああ！！」

自滅した冬美は頭を抱え、悶絶した。その羞恥心は机に頭をたたき付けるといふ奇行を冬美にさせる程だった。つららは気付かれないように、静かに椅子から離れ、猛獣に出会った時の対処法のように、冬美から目を離さず、恐る恐る後ずさり。

「だから何故逃げる！」

「ヒッ………！！」

羞恥心を無くすための攻撃対象が、机からつららに移った。

「襲わないから！安心していいから！こっちに戻ってらっしやい！」
襲われると思って距離を置いているわけではないと気付いていない冬美である。

「そ、それは……遠慮しておき、ます」

「……あっそ。なら私から行って、失った信用を取り戻す！」

「ヒッ……！！！」

それが逆効果だと気付かない冬美は落ち着いて欲しい。

「ふふふ、もう逃げられないよ？」

「……」

恐怖で震えるつららを壁際に追い込んだ冬美。

「ほら、ね？大丈夫でしょ。私、こんな状況でも襲わない。そういう人間じゃない、ね？わかってくれたよね？」

現在の状況はすでに、襲っていると言われても仕方がない事に冬美は全く気付いていない。止める役がないから、一度暴走すると止まらなくなるのだ。

「わ、わかりましたから、こ、来ないで下さい。あ、あっち、行って下さい」

「だから大丈夫だってば！私、超安全な人間だから！普通だから！

変質者とかそういうものじゃないんだから！」

冬美はつららの肩に手を伸ばした。

「触らないでくれる？同性愛者とか、気持ち悪いから」

そしてその手は、強い言葉と共に弾かれた。

「え？」

驚く冬美。

「……………え？」

驚くつらら。

「……………」

「……………」

互いに驚き、しばらく硬直した後。

「今……………」

「は、はい」

「何て言った!？」

「す、すみません!？」

爆発した。

3 - 4 ・文化祭午前の部／不愉快と苛立ち

八尾比丘尼高校 特別棟三階文芸部部室 11：10

「お姉ちゃん、あーん」

「うーん、ホントにやったら買ってってくれるのー」

「わたくし嘘はつきませんですわよー。あーん」

「んー、あーん」

「美味しいですかしら？」

「ん、美味しいよー。はい、じゃー、これ買ってねー。まだ校長先生にしか売れてないんだよねー。光ちゃんが買ってよかったです」

「それより今度はわたくしの番ですわー！」

「えー、もう仕方ないなー、はい、あーん」

「あーん。んー、美味しいですよー！」

「……何をいちゃついでどこらあー！」

不機嫌な冬季冬美が部室に戻ると、そこには虹野光と桜木さくらの

仲睦まじい光景が広がっていた。不愉快である。何故か入口に背を向け、座っていたからといって、ドアを開けた音で気付くだるう普通。気付いた上でのイチャつきなのか。大変、不愉快である。

「ふわっ！先輩もう戻って来たですよ！？」

驚く光。

「おかえりー」

どこかホツとした様子のさくら。

「なんか文句あるかこらあ！」

心がやさぐれてる冬美。

「……………」

冬美の後ろで心身ともに疲れ果てている冰山つらら。

「こつちが大変な目にあってる時にお前はイチャイチャイチャイチャイチャと……………」

「なななな、何ですよ！！」

冬美に胸倉を掴まれた光は、手を上げてフルフルと首を横に振り、悪い事してませんよとアピール。

「さぞ楽しかったんでしょうねえ、お姉ちゃんとイチャつけて、ああん？それはよかったねえ、ううん？」

「今日の先輩怖いですわ!？」

「お前も私を怖がるのか!?!」

「ヒイ!？お、お姉ちゃん助けて下さいですの!」

光が助けを求めたさくらは、すでに二人から距離を取って、入口でぐったりしているつららの横でニコニコ手を振っていた。「お姉ちゃん!？」光、裏切られる。

「つららー、冬季さんヤンキーみたいになってるけど、何かあったのー?」

さくらはつららに事情を聞こうとした。さっきまでは普通だったのだから、別れてから何かあった、つららとの間で何かあったと考えるのが妥当である。

「桜木さん!?!」

つららが口を開く前に冬美が、さくらの名を呼んだ。光の胸倉を掴むのをやめ、つららを指差す。

「あなたの親友は性根が捻曲がってる!有り体に言うと性格が悪い!どうにかしなさい!?!」

「ち、違っつ!」

つららは慌てて否定した。「ち、違っからね?」そしてさくらだけには重ねて否定。

「そうですね！あなたは性格が悪いですわ！」

光は冬美に加勢した。

「んー？」

さくらは首を傾げ、つららと冬美を交互に見た。

「何でそんな事を言うんですかー？」

さくらは冬美に聞いた。

「そう思ったからそう言ったんです！冰山さんがあんな事を言う人なんて、私は思わなかった！！」

「だ、だから私は言ってない！」

「それ！そういうところが性格悪い！別にね？拒否されたから性格悪いなんて私は言わない。でも、言った事を認めないなんてのはどうかと思うな！」

冬美がつららに対してここまで怒ってるのは、『気持ち悪い』と言われたからではない。そう思われても仕方ないと、冬美はわかってる。だからこそ悩みもしている。だから冬美は、その事を言われたから怒っているわけではなく、その事を、そう口にした事を、つららが認めなかった事を、冬美は怒っているのだ。言いたい事があるなら言えとは言わない。気持ち悪いと思ったなら気持ち悪いと言えとは言わない。しかし、言った事を隠すなんてのは、気持ち悪いと言った事を隠すなんてのは、不愉快極まりない。

「だから私はそんな事言っていない……！」

「いいえ言いました！一回ならまだ聞き間違えかなって思うよ。でも二回も三回も！どついう事なわけ？そんなに言っておいて認めないなんてのは、往生際が悪いってレベルじゃないよ！」

一度ならば聞き間違えとも思えたが、あの後つららは、二度三度、『気持ち悪い』『頭がおかしい』『変態』と口にし、その全てを言っていないと否定した。こんな奴と二人でいられるか。と、我慢の限界を超えた冬美が部屋に来てみたら、イチヤイチャしてて、自分が決めた限界なんて本当の限界ではない事を知ったのだった。

「そうですねそうですね！よくわかりませんがそうですね！あなたみたいに性格が悪い人はお姉ちゃんに相応しくありませんわ！」

ここぞとばかりに、冬美の後ろからつららを糾弾する光。光も性格が悪いのは間違いない。後で暴力を振るう事に決めた冬美である。

「わ、私、本当に言っていないのに……嘘なんかじゃ、ないのに……！」

つららは俯き、体を震わせる。泣いているのかもしれない。しかし、冬美は言い過ぎたとは思わない。こっちだって泣いていいなら泣きたいのだ。

「んー、事情はよくわかんないんですけどー」

つららの背中を撫でながら、さくらは二人を見て言う。

「不愉快なので、出て行つてくれますかー？」

その顔は笑顔ではなかった。

八尾比丘尼高校 特別棟三階 生徒棟一階渡り廊下 11:30

「今日是最悪な日だ……！」

冬美は苛立ちながら校舎を歩く。

「全く、全く、全く……！」

せつかくの文化祭だというのに、全く散々だ。

夏美は仲直りをするチャンス無くすし。冰山さんに拒絶された時の痛みを教えられるし。

「あの、写真」「いいわけないでしょうが！よく聞けたな！」

巫女服は注目されるし。

「先輩のせいで散々ですわー」

後ろの後輩は自分も不愉快だと思われたと思ってないし。

「ほら、ちゃちゃと歩く！」

食べかけのポップコーンは忘れるし。プラカードも忘れるし。これからどうすればいいかわからなくなるし。最悪だ。全く、最悪だ。泣くぞこら。

「すみません」

「はい、何か！？写真撮影はNGですよ！？」

苛立ちながらも、ちゃんと応対する冬美は優しい子である。冬美に声をかけてきたのは、パンツルツクなスーツ姿にクーラーボックスを肩にかけていて、目に光がないのが特徴的な女性だった。今にも死にそうなオーラを漂わせている。「その箱、お魚が入っていそうですのー」と、暢気に言う光はそのオーラに気付いていないようだ。鈍感な奴め。

「校長先生を見ませんでしたか？」

「文芸部に寄ったという話を聞きましたけど何か！？」

冰山さんが言い合ってる時に、桜木さんがイチャついてる時に、なんかそんな事を言っていたような言ってなかったような！

「いえ、何も。これはお礼です。解決して欲しい悩みがあったら、ご連絡ください」

「何ですかこれ……」

女性が差し出した名刺を冬美は乱暴に受け取り、困惑。そこには『

悩み事解決します』としか書かれていなかったからだ。裏を見ると簡単な住所が書いてあったが、これだけで辿りつくのは警察でも無理だろう。

「いや、ホント何ですかこれって、あれ？」

気付くと女性がいなくなっていた。いなくなった気配が全くしなかった。慌てて周りを捜すと、ちょうど角を曲がる後ろ姿が見えた。

「……悩み事ね」

恋の悩みも解決出来るんだろうか。冬美はそんな事を考えながら「こ、これはまさか噂の火であぶると文字が浮き出る奴なのではないかしらー！」と、喜んでいる光の頭にチヨップを叩き込んだ。

3 - 5 ・文化祭午前の部へ提案が強制かへ

八尾比丘尼高校 生徒棟一階お化け屋敷 鉄庭特設ステージ 11：
50)

「なんか騒がしくない？」

冬季冬美がお化け屋敷から出てくると、何だか廊下が、さっきまでの楽しい賑やかさとは違う騒がしさに包まれていた。

「そ、そんな事よりわたくしの後ろ何かいませんかしら！何だか重い気がするんですけど！」

「……気のせいでしょう」

隣の虹野光はその違いに気付かないというか、それどころではない様子だ。そんなに怖かったのか。

お化け屋敷に行こうと提案したのは冬美である。光に、お化け屋敷とか好き？と聞き、好きなわけではないじゃないですか！。という答えを聞いた上での選択だった。散々な目に合わせてくれた光へのお礼である。

嫌がる光を連れて向かったお化け屋敷は、生徒棟一階の教室を二つ使った大掛かりなものだった。だったが、所詮はやはり学園祭レベル。よく出来てはいたが、そんなに怖くはなかった。冬美には。光には、十分怖かったらしく。もうわざとなんじゃないかと思うく

らい驚き、悲鳴をあげ、冬美の腕に縋りついた。そして最後に、盛大にポップコーンをぶちまけた。中身はそんなに入っていないからそこまで酷い事にはならなかったが、スタッフさんに謝るはめになった。結局、光に迷惑をかけられた形になった冬美である。

「あつちが騒がしいかな。ほら、行くよ」

「ど、どこにですの地獄にですの！？あなたもしや先輩の皮を被った化け物じゃないんですの!?」

「かもねー」

光を一々相手にするのは面倒なので、テキトーに流して手を引き、鉄庭の方に向かう。鈴乃音さん、よくこんなのに付き合えるなー。なんて考えながら。

「げっ」

鉄庭に出来ていた人ばかりを見て、冬美は顔を歪めた。嫌な奴がいたからだ。しかも人だかりの中心にいるグループに。そこには校長の、八尾比丘尼因幡の姿もあった。さつき捜してる人がいた事を伝えるべきかとも思ったが、あいつには近づきたくないねで、ここは見つからないうちに立ち去ろう「あ、紅葉さんですの!」と思ったが連れに邪魔された。ので、その頭にチョップを落とした。

「あら、光さんと……冬美ちゃんじゃない」

制裁を加えても時すでに遅し。冬美は神社神裂に見つかった。見つかっただけでなく、馴れ馴れしくちゃん付けで呼ばれ、手招きされた。ここで逃げるのは女が廃るので、手招きに応じる。

「また巫女さんとは。カワイイわー。今のところ一番あなたが好み。どう？タコ焼きあげるから私と専属契約しない？」

「なんか卑猥に聞こえるからやめんか腐れ狐」

「よくわかりませんがタコ焼きは食べたいですよ！」

光はベンチに座っている、秋春守の母親と、若葉枯葉の姉、若葉紅葉の方に寄っていった。

「夏美は一緒じゃないの？」

「……校長先生」

馴れ馴れしい神裂は無視して、八尾比丘尼に話しかける。

「さつき、スーツ姿で、クーラーボックスを担いだ人が捜してましたよ」

「ああ、それは聞いています。変な名刺を配りながら捜しているようです。そちらの方も考えなければなりませんね……」

ふむ、と顎に手を当て考える八尾比丘尼。横目で神裂を見て、冬美に聞く。

「冬季さんは、この方とお知り合いだったんですか？」

「いえ、違います」

きつぱりと否定。

「えー？私と冬美ちゃんは授業参観の時、一緒にバレエをした仲じゃない」

「敵同士でしたけどね！」

馴れ馴れしく肩に手を回してきたので、神裂を突き飛ばす冬美。何でこいつこんなに馴れ馴れしいんだ。

「もう、照れ屋さんね」

神裂が、仕方ないわね。というようにウィンクしてきた。パーフェクトなそれに、ドキツとしてしまった自分が憎い。

「なるほど、そういう仲ですか。それで神社さん、この騒ぎの事ですが」

どういう仲だと思われたのか冬美は気になったが、話しの邪魔をしてはいけないと思い黙る。

「本当にただ、風船が落ちただけだったんですね」

「ええ、もちろんそうですよ。それ以外に何があるっていうんですか？」

「風船……？」

どうやらこの騒ぎは、風船が原因のようだ。それだけにしては、騒ぎが大きい。なんとなく上を見上げると、空に風船らしきものが飛

んでいた。何故に？

「その落ちた風船はどこに？」

「幼女が持つていってしまいました」

「そうですか……本当はあなたが何かしたのでは？」

「だから、私が何をどうしたと？」

神裂は余裕がある笑みを浮かべ、それを八尾比丘尼は訝しげに見ながら思案顔。そして冬美はどういうこつちやねんで、「焼きそばうまーですよ」「何この子。高校生とは思えないピュアさ。お持ち帰りしたい」「お前、思考がああ猫と一緒にじゃねえか」という会話をしているお三人。

「……北本さん」

「はいはい、何でしょうか」

遠くに立っていた男子生徒が八尾比丘尼に呼ばれた。

「イベントを続けて下さい」

「え、いいんっすか？」

「問題ないでしょう。危険もなさそうですし。確か、今の時間は早食い大会でしたか？ちょうどいいじゃないですか。人も集まっていますし。なんなら、私も参加しましょうか？」

「え！？校長が参加してくれる！？なら余裕で盛り上げれます！準備してきますんで！」

男子生徒は元気よくステージへ走っていった。

「神社さん、お話ありがとうございました。もう結構ですよ」

「いえいえ、お手数おかけしました」

八尾比丘尼は神裂、そして冬美に軽く頭を下げ、男子生徒の後を追うようにステージの方へ。

「じゃあ、私もこれで」

「お待ちなさい」

冬美も立ち去ろうと思ったが、神裂に肩を掴まれ失敗。

「ねえ、夏美は一緒じゃないの？喧嘩しちゃった？喧嘩しちゃったの？」

「……さつきから馴れ馴れしいんですけど。私とあなた、他人レベルの関係ですよね」

バレエで、ちよつとばかり協力して夏季夏美をやっつけたくらいだ。

「あ、そんな事言っちゃうんだ！。私にそんな態度とっちゃうんだ！。いいのかな！。そんな事していいのかな！」

「な、なんですかあなたは」

ニヤニヤと笑う神裂は、底が見えなくて怖い。その笑みのまま近づき、冬美に小声で神裂は言った。

「あなた、夏季夏美の事、愛してるんでしょ？」

「はあ!？」

一秒、驚愕で後ずさり。

「なななな!？」

二秒、羞恥心で顔真っ赤。

「先輩どうしたのです？」

「超法規的措置な暴力!!」

三秒、近づいてきた憐れな後輩に理不尽な暴力を。

「ひど過ぎますわー!」

「い、いきなり何を……」

四秒、光が泣きながら紅葉の方へ逃げ帰り、冬美はようやく衝撃から立ち直った。

「何をつて、ただ事実を言ったんだけど？」

「じ、事実ってそんな、どうしてじゃなく、何の事やら、あ、うん、

まあ、姉妹愛的な意味で夏美は愛してますけどね。うん、それが何か問題ありますか。うん、ないよね。うん」

何で知ってんだこいつは！と思いつつも、必死にしらばっくれてみる冬美。

「そうね。問題ないわね」

「そうそう、問題ないって、え？」

まさか肯定されるとは思わず、驚く冬美。

「そう、問題ないから、これから夏季夏美にその事実をとつと」

冬美は口より先に、手が出た。神裂の顔面に向けて、本気の拳を繰り出した。神裂には楽々受け止められたが、「なかなかいいパンチね。ただ腰の入りが甘い」「神裂に拳を向けるとは、見所があるわね」「冬季先輩怖いのですの！」ギャラリーには大絶賛である。

「そんな事したら、殺してやる」

冬美は本気だった。そんな事したら、本気で殺してやる。それほどこの想いは本気だった。

「そう、いいわ。決めた」

神裂は掴んでいた手を離した。

「……………何を？」

もし、話すと決めたら、次は一撃では済まさない。

「若葉枯葉と南奈美にしようかと思ってけど、お前達に決めた」

「え」

それは一瞬だった。数歩先にいた神裂が、冬美が気付いた時には目と鼻の先にいた。

「冬季冬美」

それは正しい道へ導く天使の囁きでもあり、禁忌の道へ導く悪魔の囁きでもあった。

「夏季夏美と結ばせてやるから、私に協力しろ。わかったか」

「う、あ、は、？」

神裂の言葉は力強く、抗ってはならない気持ちに冬美をさせた。よくわからないが、理屈はわからないが、ここで頷かないと、この言葉に従わないと大変な事になる。これから先、大変な不幸になる。夏美と仲直りするためには従わないといけないんじゃないか。そんな恐怖が、冬美に纏わり付き、冬美は首を縦に振ろうとした。

「何してんだお前は」

しかし振る寸前に、助けが、いや、もしかしたら冬美にとっても邪魔だったかもしれないが、助けが入った。紅葉が二人の間に割って入ったのだ。

「何って、ただのお誘いよ？」

「ただのじゃないでしょうが……大丈夫？こいつたまにやるのよ。
言霊ことだまっていうの？多分、こいつ人間じゃないと思う」

紅葉が何か言ってるが、冬美は息を、心臓の鼓動を整えるのに忙しくてそれどころじゃなかった。今、自分に何があったのか、全く理解できない。

「ほら、邪魔しないでよ紅葉。私はもう少し彼女と話しがあるんだから。ね、冬美さん？あなたも私とまだ話したいでしょ？」

「う、あ……せ、」

冬美は、神裂に恐怖を感じた。神裂が、同じ人間とは思えない。その声すらも恐怖。その存在そのものが、畏怖の対象。だから冬美は

「せ、戦略的てつたーい！！」

戦略的撤退を敢行した。

「逃がすと思う？」

「逃がしてやれよ」

神裂が手を掴もうとしたが、紅葉がそれを止めた。そのおかげで、冬美は逃げる事に成功した。

「あ、冬季先輩！」

渡り廊下のところで、生徒棟からやってきた鈴乃音真音にあった。その後ろには何故か桜木さくらと氷山つららが。

「光」「虹野さんの事はよろしく!」「あ」「ありがとう!」「

すれ違い様に、真音に光の事を頼み、さくらが持っていた自分が忘れていったものであるうぷラカードを回収。そして出来る限り遠くへ、走る、逃げる。

この時冬美は、神社神裂という化け物から出来るだけ、遠くへ離れたかった。この時は。

3・6・文化祭昼の部、鈴の舞に癒されて

八尾比丘尼高校 鉄庭特設ステージ 生徒棟二階 特別棟三階 特
別棟一階 職員棟一階 職員棟二階 生徒棟二階 生徒棟一階 職
員棟一階 職員棟二階 図書館 12:00～

神社神裂から逃げた冬季冬美はすぐに、自分が取り返しのつかない失敗をし、自分を取り返しのつかない何かをされたのではないかという恐怖に襲われた。

「どろしようどろしようどろしようどろしようどろしようどろしようどろしようどろ……!!」

冬美は、どろしようどろしようどろしようどろしようどろと、爪を噛みながら早足で校舎内をさ迷っていた。その見るからに荒れていて焦っていて、狂っている冬美は目立っていたが、冬美はそんな事を気にする余裕はなかった。今の冬美の頭の中は、神社神裂と夏季夏美の事ではなかった。

神社神裂は理解を超える人間だったと、冬美は遅まきながら気付いた。

授業参観の時、あの体育の時、冬美は神裂がなんかすげえ人とは思っていた。何でも出来る人何だろうなど。人間離れた人何だろうなど。そうやって、ちゃんと認識していた。夏美は馬鹿だから、凄い人とは思ってなかったけど、神裂は凄いやという言葉では計れない人間だと。

ただ、冬美の認識も甘かった。冬美は、油断していた。普通の人より、頭がよかったからこそ、危険性を感じとり、油断した。危険だとわかれば、それなりになんとかかなると思いがっていた。

『夏季夏美と結ばせてやるから、私に協力しろ。わかったか』

「どっしりどっしりどっしりどっしりどっしりどっしり……！」

神社神裂の事が頭から離れない。

神社神裂の言葉が頭から離れない。

神社神裂の存在が頭から離れない。

どっしりどっしり。

冬美は今、神社神裂から逃げてしまった事を悔いていた。

どっしりどっしり。

冬美は今、夏季夏美の事より神社神裂の事が気になってしまっ自分に戸惑っていた。

どっしりどっしり。

冬美は今、夏季夏美の事を必死に考えないと想いを忘れてしまっそうで怖かった。

どっしりどっしり。

冬美は今、神社神裂に全てを委ねたい気持ちを必死に抑えていた。

どうしよう。

冬美は今、夏季夏美にこの想いを伝えたくて仕方がなかった。

どうしよう。

冬美は今、神社神裂に従わないとこの想いは崩れさる気がしていた。

どうしよう。

冬美は今、自分の事がわからなかった。

ただ一つだけ、冬美は理解していた。

自分の事もわからない冬美が、それだけは確かに理解していた。

神社神裂は冬季冬美が理解出来るものじゃない。

だからこそ、逃げ出したいし、縋りたい。

チリン

「……大丈夫ですか」

微かな鈴の音と、誰かの心配する声で、久方ぶりに冬美は内から外へ意識を向けた。意識を、向けた。

「三途さんと、鈴乃音さん……」

冬美は気付けば、図書館にいた。

どういう経路でここに来たのかは全く覚えていない。どうしてここに来たのかもわからない。ただ、意識は周りを気にする余裕はなかつが、無意識は静かな場所に、他者の視線がない場所に行きたかったのかもしれない。だから、文化祭中は使用されていないこの図書館に、無意識に来てしまったのかもしれない。そして何故か、目の前には、三途舞歌と鈴乃音鈴音がいた。

「顔、真っ青ですよ。保健室、行った方がいいんじゃないですか？」

「鈴音は保健室に行った方がいいの？」

「あなたじゃありませんよ……というか、さっさと下りろ」

「鈴音は嫌なの。舞歌はいいって言ったの」

「いいから、下りろ！」

二人の前には大量の食べ物がかけていた。そして鈴音は、舞歌の膝の上に座っていた。舞歌は鈴音を下ろそうとし、鈴音は抵抗する。すると、鈴音の服についている鈴が鳴る。

「……ぷっ」

冬美は、吹き出してしまった。舞歌が最初から拒否していれば、鈴音が膝に座れるわけがない。つまり舞歌は、鈴音に座る許可を一度は出したのだ。いいと言ったのだ。けれど冬美が来たから、見られるのが恥ずかしいので、下ろそうとしているのだ。なんとというか、

カワイイ。二人の平和なやり取りと、鈴音から聞こえる清んだ鈴の音は、憔悴していた冬美の心を、不思議と癒してくれた。

「……何を笑ってんですか」

「あ、ごめんごめん。なんか、いいなあと思って」

じと目な舞歌に笑いながら謝罪して、冬美は二人の向かいの席に座った。

「もし、この状況をいいなと思ったなら、頭がおかしいですから、さっさと保健室行くのを進めますよ」

「ん、もう平気だから。ありがとう」

「はあ？なに感謝してるんですか。私は感謝されるようなこと、何もしてないですよ」

「心配してくれてありがとうって」と

「心配なんかしてませんよ」

「でも、ありがとう」

「……ちっ」

舞歌は話しにならない。と、言わんばかりに冬美から顔を逸らした。そして、鈴音を下ろすのもやめた。

やっぱり、三途さんは根は優しい人だな。と、冬美は思った。その舞歌が、直球で、心配して保健室に行った方がいいと言ってきたと

いう事は、自分の顔色の悪さは相当だったのだろう。

「鈴乃音さんも、ありがとうね」

鈴音は直接、冬美に何かしてくれたわけではないけど、その鈴の音は何だか癒してくれたから。

「あなたは誰ですか？」

鈴音は、自分の居場所の安全が確保でき、そして話しかけられ、ようやく冬美に気付いた様子だった。

「いや、私だよ。同じクラスの、冬季冬美」

「鈴音はわかりません」

「忘れちゃったの？ほら、一学期……飴をよくあげたじゃない？」

「鈴音は思い出しました」

「私の存在、そんな薄かったかな……」

一学期、それなりに交流してたと思うんだけど。夏休み挟んで、二学期入ってから話してなかったけど、忘れちゃうって……ありえない。と、冬美は思ったが、鈴音ならありうる気もして、あまり傷つきはしなかった。

「あなたの服は何ですか？」

鈴音は何を考えてるかわからない表情で、冬美に聞く。

「何って？巫女服だけ。部活で着る事になったの」

幸い、プラカードは手放してなかった。立て掛けていたプラカードを、鈴音にも見えるようにする。

「将棋と巫女服……」

舞歌が、馬鹿じゃねえの。という目で見てきたが、その通りなので気にしない。

「あなたも鈴音をさらうんですか？」

「え？」

「はあ？」

冬美と舞歌は、鈴音の言った事に戸惑った。意味が、わからなかった。

「さらうって……何で？あ、三途さんをつて事？」

一学期、鈴音は冬美を、舞歌を奪う敵と見なしていた。とはいえ、さらうというのはよくわからない言い方だが。

「鈴音はあなたが怖いです。鈴音は何で怖いのか？」

「知りませんよ。って、おい？」

鈴音は舞歌からおりた。そして椅子を舞歌の後ろに運び、座った。

これで舞歌が壁になって、冬美も鈴音も、互いが見えなくなった。

「……どうしたんですか？」

舞歌が振り返り、訝しげに心配そうに、鈴音に聞いた。

「鈴音にもわからないの。鈴音はどうして隠れたの？」

「……」

舞歌は目で、冬美にどういふ事が聞いてきたが、冬美にわかるわけもなく、首を傾げるしかない。

「鈴音は焼きそばが食べたいの」

「焼きそばって……はあ、はいはい」

舞歌は、考えるのをやめたようだ。鈴音に焼きそばが入ったパツクと、割り箸を渡した。冬美としては、自分が怖がられる理由をもう少し追求したかったのだが、鈴音と付き合いが長い舞歌が諦めたなら、諦めた方がいいだろう。

「で」

「ん？」

「だから……なんか用ですか？」

舞歌は頬杖をついて、面倒そうだ。面倒なら聞かなきゃいいのに。

「用は特にないけど」

「はあ？じゃあ、さっさとどっか行ってくれますか？」

「何で？あ、鈴乃音さんと二人っきりの邪魔だから？」

「ちげえよ……死にそんな奴が目の前にいたら飯が美味しくないからですよ。ただそれだけです」

「え、私まだ顔色悪い？」

鏡がないので、わからないけど、そんなにだろうか。

「……目が死んでる」

ポツリと、舞歌は教えた。それはそんなに具体的に教えてくれなくてもいい事で、いつもの舞歌なら、ええ、悪いですよ。だからどっか行って下さい。とか言いそうなものなのに。

三途さんに気を使われるほど、まだ私はしんどいようだ。自分では気付かないようにしているだけで。

「……ねえ、ちょっと私も、もらっていい？お腹空いちゃった」

二人で食べ切れる量でもなさそうだし。

「ほとんどは私のじゃないんで……これ、あっちに譲ってもいいですか」

「鈴音にはよくわからないの。舞歌はあっちに譲ってもいいの？」

「……どうぞ」

そんなやり取りを経て、冬美にじゃがバターがゆずられた。

「これもどうぞ」

「え、いいの？」

「別にいいですよ。タダでもらった奴ですし」

「……ありがとう」

ついでに、未開封のお茶まで。至れり尽くせりである。冰山つららと神裂により掻き乱された冬美の心に染み渡る優しさである。

「いやあ、三途さんは本当に優しい人だね。うん」

「はあ？つて、何ですか」

鈴音が舞歌の服を引っ張た。

「舞歌は本当に優しいの」

「……ああもう、勝手にそう思っただけじゃありませんか。思っただけなら、どうぞ勝手に。ただ、わざわざ口に出すな」

それは冬美にも言いたい事だったらしく、舞歌は冬美を一瞥した。そして、もうやる事はやったと様子で、タコ焼きを食べ始めた。

「ところで、どうして二人は図書館にいるの？というか、図書館っ

て飲食していいんだっけ」

じゃがバターを食べてから気付く、一般的な規則。最近では、飲むくらいは許されるところが多いらしいけど、食べるのはダメなのではないだろうか。

「別に、本を汚さなきゃ問題ないでしょ……ここにいる理由は静かだからですよ」

タコ焼きを食べながら、そっぽを向いているという素っ気ない態度だが、ちゃんと答えてくれる舞歌。優しいな。と、思う。

「鈴乃音さんは、三途さんがいるから？」

「鈴乃音さんは三途さんがいるからです」

姿は見えないけど、ちゃんと答えてくれる鈴音。しかし優しいとは思わない。なんか、事務的に繰り返してるような感じを受けるから。

「タコ焼きも、もらっていい？」

「……このパックのなら」

舞歌は自分が突いてるパックを、冬美の方に近づける。冬美はそこから一個拝借。

「ありがとう。うん、おいしい……いや、ほんと助かったなあ。三途さんがここにいてくれてよかったよ」

ここで、舞歌と鈴音に会わなかったら。我に帰らなかったら。毒気

を抜かれなかったら。どうなっていただろう。後先考えずがむしやらに、夏美に告白していた可能性だってあった。自分を捨てて、神裂に全てを委ねる可能性だってあった。その二つの可能性は、決して低くなかった。だって今でも、そうしたいという気持ちが燻っているんだから。

「三途さんって、本当にいい人だよ。うんうん。だからこそ三途さんは鈴乃音さんと一緒にいてあげてるし、鈴乃音さんも三途さんが好きなんだね」

「……何だか気持ち悪いですねあなたは。さつさとどっか行つてくれませんか？……一応言っておきますけど、私はあなたのような趣味はありませんから。仲間だと思われると迷惑ですからね。気持ち悪い」

「言い方酷くない？」

つららに気持ち悪いと言われた時は、傷ついた。神裂に知られていると知った時は、驚いた。また今、舞歌に知られている上で気持ち悪いと言われた冬美は、苦笑した。

今思えば、最初に冬美をそういう人間だと認識したのは舞歌だった。冬美本人より先に、舞歌はそう結論づけ、そして受け流していた。一学期の時は、必死に否定したが、今は、舞歌に対してはそんなに否定する気持ちはない。知られてる事に焦る気持ちもないし、不安になる事もない。それはきつと、舞歌の手柄がそうさせるのだろう。鈴音のような人間と、側にいられるこの人間性が。

舞歌が気持ち悪いと思ってるのは、本当だろう。

それでも、つららのように拒絶された気は全くしない。

舞歌は冬美を同性愛者と本気で思ってるのだろう。それでも、神裂のように不安になる事は全くない。

「そのトウモロコシもちょうだい」

「……図々しい奴だな」

「と、言いつつ三途さんは私に手渡ししてくれるのだった」

「……じいじ」

舞歌は、冬美を同性愛者と認識して気持ち悪いとした上で、気にかけて心配してくれる。そして嫌ってもくれる。

「あのさ、三途さん」

「何ですか。さすがにもうやりませんよ」

「私、夏美の事、愛してるんだ」

「……はあ？」

それは唐突な告白。舞歌が戸惑うのも仕方ない。言った冬美も、言っただけから驚いた。

でも、後悔はないし不安は不思議となかった。初めて他人に自分から、ちゃんと言葉にして想いを伝えたのに。

それは相手が、受け入れてくれると確信した舞歌だったからだろう。でも理由はそれだけではなかった。やはりいつもの冬美なら、こんな事はしなかっただろう。神裂のせいで見失いそうになってしまっていたから今だからこそ。もう一度、昨日夜に文字にしたように。

今ここで、言葉にして確かにした。

冬季冬美は、夏季夏美を愛している。

「……………はあ」

それを受けて、舞歌は訝しげに冬美を数秒見つめた後、ため息をついた。

「ああそうですか。気持ち悪いですね。私の知らないところで、適当にやってる分にはどうでもいいですけどね。知らないところで、苦勞してて下さい。絶対に、私を巻き込まないで下さいよ。という事でもうどっか行け」

そして、冬美から目を逸らし、しっしっ。と、手を振った。

「気持ち悪いって、正直者だね三途さんは……………私、傷ついたんだけど?」

「知りませんよ。勝手に傷ついてて下さい」

「ひどっ。じゃあ、ちょっと恋の相談のってよ」

「はあ?意味わからん。絶対嫌ですよ」

「まあまあそう言わずに」

神社神裂のように理解不能な人ではなく普通の人に、冰山つららの

ように拒絶されなかった。

それだけで冬美は、苦笑でも笑えたり、救われた。それだけで冬美は、安心した。

ちなみに。

「鈴音にはよくわからないの。舞歌は何と話してる？」

「……あなたは静かにタコ焼きでも食ってなさい」

舞歌だけでなく、鈴音にも知られて、告白したのだが、冬美は鈴音については気にしていなかった。

鈴音は神裂とは違った意味で、理解出来ない存在だと、冬美は理解していたから。

3・7・文化祭午後の部／逃げ道を示す物

八尾比丘尼高校 職員棟二階図書館 12:30

冬季冬美が三途舞歌に、恋の相談と表してした事は、神社神裂のよ
うなよくわからない者に遭遇した場合の対処法である。舞歌に恋の
相談をするほど、冬美は切羽詰まっていなかった。それよりも、
鈴乃音鈴音という、神裂同様、冬美にはよくわからない存在とうま
くやっている舞歌に、そっちの相談をしたかった。

一応、『夏美と仲直りするにはどうすればいいのかなー』と、聞いて
はみたが、舞歌の返答は『知るか。馬鹿。勝手にしろ。何で私に
聞くんですか。仲直りしましょうと言えっただけじゃないですか。
馬鹿らしい』という投げやりなものだった。投げやりだけど、悩ん
でないで素直に言えというアドバイスのものだったのは、舞歌の
隠し切れないお人好しさである。

しかしまあ、案の定、対処法に関しても、舞歌の答えは投げやりだ
った。

まず、『逆らったら、いけない気がしちゃうんだよ。どうしよう』
と、聞いてみれば『気のせいでしょ。疲れてるんじゃないですか』
と、素っ気ない。

次に、『その人に全部任せれば、それで解決出来ると思うんだけど、
任せたくないんだ。どうしよう』と、聞いてみれば『任せたくない
なら任せなきゃいいでしょう。馬鹿ですか』と、罵倒される。

さらに、『でも、自分で解決出来るか不安なんだ。どうしよう』と、
聞いてみれば『なら頼めばいいじゃないですか』と、呆れられる。
そして、『もしも、自分の全ての悩みを解決してくれる、神様みた

いな存在が目の前に現れたら、三途さんならどうする?』と、聞いたら『機嫌が良かったら無視します。機嫌が悪かったら殺します』と、答えた。

ついでに、『鈴乃音さんの事、どう思ってるの?』と、聞いてみれば『うざったいと思ってますよ。本当にね』と、嫌がられた。

「でも、一緒にいるのは、楽しいからでしょ?」

「……もうどっか行ってくれますか。うざいんで」

舞歌とのそんなやり取りを経て、冬美は神裂に対して取るスタンスを決めた。

神裂に取るスタンス。

- 1・無視する。
- 2・無視出来なければ、怖がらず撃退する。
- 3・どれも出来なければ、成り行きに任せる。

冬美はそう決めた。それは、どうすればいいかわからない状態よりは、神裂を理解した証であり、神裂に歩み寄ったという意味でもあった。

冬美は神裂に対しての得体の知れない恐怖心が、薄まったのだ。だから、そう、仲直りさせてくれるというのなら、いいだろう。どういふ魂胆かは知らないけれど、のっかってやるうじやないか。そんな気持ちが生えたのだ。神裂に強制されるのではなく、自分から神裂の思惑にのってやる。そういう、強気になれた。

そうなれた理由は二つ。

そう想えた要因は、二つ。

「舞歌は鈴音がうざったいの？舞歌は鈴音が馬鹿だと思ってるの？舞歌は鈴音にもうどっか行って欲しいの？」

「……っだー！後ろも前もやかましい！！特にお前は私の背後霊かなんかです！服を引っ張るな！下らない事を聞いてくるな！あなたはそこで黙ってトウモロコシを食ってりゃいいんですよ！」

「鈴音はここで黙ってトウモロコシを食ってるの」

一つは、舞歌と鈴音のやり取りを見て、夏美がもつと恋しくなったから。夏美と早く、いつも通りじゃれあいたい。その気持ちが強くなったから。自分一人の力で仲直りしたいなんて、下らないプライドなんかどうでもいいくらい、そう想ったから。

そしてもう一つは。

「じゃあ、私はもう行くね……あ、最後だから鈴乃音さん、聞いていい？結局どうして、私を怖がってたの？」

「鈴音にはわかりません。鈴音は結局どうしてあなたを怖がってたんですか？あなたは結局誰ですか？」

「……あー、じゃ、バイバイ」

鈴乃音鈴音に比べたら、まだ、神社神裂は会話が成り立つという上で、理解出来る存在だと、そう、思ったから。

八尾比丘尼高校 特別棟四階将棋部部室 特別棟三階文芸部部室
特別棟一階調理室 14:00)

「手、離してください？逃げませんし」

「ふーん？」

で、なんやかんやあって、冬美は神裂と一緒にいた。

こうなったのは、一重に夏美のせいである。冬美が面倒事に巻き込まれたり、冬美が面倒になったりする理由は、たいてい夏美のせいである。

仲直りするぞー。今度こそ本気だぞー。と、意気揚々と図書館から部室に行ってみたら、すでにそこには夏美の姿はなかった。金銀砂銀によると、鈴乃音真音からプラカードを受け取ったらそそくさと出ていったらしい。

『まるでお前を避けるようになー!!』

と、言った砂銀には躊躇なく暴力を振るった。残念ながら、全て避けられ、冬美の機嫌はさらに悪くなった。せつかく、図書館で機嫌が悪くなったというのに、五分も持たなかった、情緒不安定な恋する乙女である。

そんな状態な時に神裂が現れ、無視なんか出来るわけもなく、3・成り行きに任せる事になったのだった。

「てつきりまだ困惑してると思ったけど、思ったよりメンタル強い
のね」

部室を出た廊下で、神裂が冬美をそう評した。

「褒め言葉として受け取りますけど。で、どうするんですか。仲直りさせるんですよね、私と夏美を。将棋で負けたから、仕方なく従ってやりますよ。仕方なくですよ、仕方なく」

舞歌を見て習った言い回しである。

「ふーん、なるほど？まあいいけどね。そういう建前でも何でも。仲直りしてくれるなら。ついてきなさい、じゃなくて、ついてきて」

言われなくても、冬美はついていく。

「ごめんなさい」

「はい？」

階段を下りながら、神裂が急に謝ってきた。

「ほら、さつき怖がらせちゃったから。それで、謝んなさいって紅葉に言われたから、まあ、一応ね」

自分は謝る気はなかったと言ってるようなものである。

「……別にもういいですけど。あれ、何だったんですか？」

言霊とかなんとか言ってたけど、マジ？

「動揺してる間に、高圧的な態度で一氣に従わせる交渉の常套手段のパワーアップバージョン。ちょっと文芸部寄ってくわよ」

拒否する理由もない冬美は、頷く。氷山つららがいたら、気まずいが、神裂がいれば平気な気がしたし。

「いらっしやいませ」

「いらっしやいましたよー」

幸いな事に、文芸部にはつららと桜木さくらの姿はなかった。代わりに、秋春守の関係者で図書委員で成績優秀という事しか知らない南奈美と、クラスメートで名前しか覚えてない若葉枯葉がいた。理由はわからないが、枯葉の方は机に突っ伏していた。

「神社さん。何しに来たんですか？」

奈美は神裂を睨んでいた。その後ろにいる冬美も睨まれた。神裂が嫌いなのもしれない。嫌いな神裂と一緒にいる冬美も嫌いになったのかもしれない。とんだ勘違いである。本当は、神裂が嫌いという事で仲良くなれるくらいなのに。

「何しに来たって、もちろん、様子を見に来たの。どう？売れてる？」

「おかげさまで……神社さんが何かしたみたいですから」

「だーから。私は何もしてないって」

二人の会話がいまいちわからない冬美は、黙って待機である。

「枯葉君は、ずっとそんな感じなわけね」

「ええ、視線を感じるとかどうとか。私だけを見てればそんなの気にならないって言ったら、恥ずかしいのか、寝てしまいました。全く……」

奈美はそう言っ、枯葉の頭を撫でた。その表情からは、今の状況はまんざらでもないと思っているのが伝わっ、バカップルがと、冬美は吐き捨てたくなっ。

「ふんふん、ちょっと失礼。んー、なるほど」

神裂は窓から中庭、もしくは生徒棟を見て、何か納得してた。

「じゃ、また遊びに来るから」

「買っしてくれないんですか？」

「昨日、つららちゃんにもらったから。ほら、行くわよ」

「え、はい」

結局何しにここに来たんだ。と、訝しんでた冬美は慌てて神裂についていく。

「それでまあ、私は悪い事したつもりなかったわけ。だって、交渉術の一つだし」

部室から出ると、入るまでの会話を当然の如く再開する神裂は、階段を下りる。困惑しつつ「はあ……そうっすか」と、相槌を打つ。

「でも、紅葉が謝っておけっというわけよね。紅葉は唯一私を対等もしくは自分以下に見る友人なわけよ。今までそういう友人がいなかったって言えば嘘になるけど、私に説教するような友人は紅葉が初めてというのは嘘じゃないから、大切にしたいと思ってる。だから、ま、言う事聞いておくかなって。まあ、これ以上邪魔されたら面倒だから、退場してもらったけど」

「はあ……？」

どうも神裂は、自分に話しているというより、独り言を言っているようにしか思えない冬美。だって、意味わからないし。意味をわからせる気がないようだし。

「調理室行くわよ」

「……お腹でも空いたんですか」

「あれを見て本気でそう思えるなら、あなたの評価をワンランク上げるけどね」

「……」

特別棟一階に下りてくると、午前中に来た調理室前に人が集まっていた。どうも何かあったようだ。

「ちょっとごめんね」

神裂がそう言つて、人だかりに割つて入る。不思議と簡単に人がどいてくれるので、神裂も冬美も楽に調理室に入る事が出来た。

「またあんたか……!!」

神裂が調理室に入ると、保健医猫猫子猫が真つ先に反応した。

「はい、どうも。つららさんは大丈夫そうですね?」

調理室内には、猫猫以外にも、冬美が知っている人がいた。つららと桜木さくらと、七味である。

つららは床に寝かせられており、さくらはつららに縋り付いて泣きそうな顔をしていて、その側で七味がオロオロしていた。

「ショックで気を失つてるみたい。あなたは どうしてここに?」

「そりゃ、人だかりが出来てたら何だろうと思って、覗き込むじゃないですか。そしたらビックリ!つららさんが倒れてて慌てて来たわけですよ!」

「……」

「……」

猫猫と冬美は、白々しい神裂に冷めた目をおくる。

「保健室に連れていけないんですか?」

「……ちっ、後で話し聞かせてもらいますからね。さくらちゃん、ちよつとどいて」

猫猫はつららを背負い、軽く神裂を睨み、冬美に「どうして一緒にいるか知らないけど、早く縁切った方がいいわよ」と助言し、足早に調理室を出ていった。その後ろを当然、さくらもついていった。

「あなたが部長さんね。何があつたの？」

神裂は、オロオロしていた七味に聞いた。

「それが……ハンバーグから血が出てきて、後、豚汁に目玉が入つてて。何がなんだか……」

「ハンバーグから血……？」

どういう事？と、冬美は首を傾げる。床に落ちているハンバーグは、なるほど確かに、血みたいなものに沈んでいた。豚汁にも、魚の目玉らしきものが浮いている。

「ふーん、生焼けだったのね」

「……は？」

どういふこつちやねん。と、冬美が考えていると、神裂が何でもないよつにそう言った。

「ほら、生焼けだと赤い肉汁が出るじゃない。それよそれ」

「え、いや、こんなには出ないですし、こんなじゃないですし……」

七味が、いや、それはないでしょ。と、反論。

「じゃあ、それ以外に何かあるっていうの？」

「それは……わかりませんが」

「なら、生焼けだったのよ！」

神裂はニツコリ笑って、大声で、廊下から見ているギャラリーにも聞こえるように、言い始めた。

「それでちよつと、血みたいなのが溢れ出てきた！それで驚いてしまった！私はあの倒れた子を知っているけど、繊細な子だから気を失いやすいのよね！そういう意味では災難だったわ！他の人だったら、何でもないように食べていたか、返品したでしょうしね！倒れちゃったからちよつと騒ぎが大きくなってしまった！それだけの話よ！それ以外に何の話があるというの！？」

ガヤガヤと、「え、そうなの？」「ただ、生焼けだっただけの話？」「いや、でもあれはありえないだろ」「確かにそうだけど、じゃあ、何なのよ」「それはわからないけど……」「そういや、普通に食ってる人いたな」「ああ、じゃあ食べれるのかあれ」「生焼けを？」「食べれない事もないだろ」と、ギャラリーが、『よくわからない事が起きた』という騒ぎから『こういう事が起きたらしいけど、どう思う？』という騒ぎに変わっていった。

「この目玉はあれでしょ？ちよつとしたサプライズのつもりだったんでしょ？魚の目玉は栄養豊富なものね？」

「え、いえ、そんな事は」

七味が、ない。と、言う前に、その口は側にいた受付さんに塞がれた。

「そう！そんなですよー！ちょっとしたサプライズに使ったんですけどねー！ちょっとやり過ぎだったみたいですね！生焼けについても、今度からは気をつけましょう！」

受付さんは大声でそう言った後、小声で七味に「そういう事にしておこつよ。このままじゃやばいつて」と、言ったのを冬美は聞き逃さなかった。

しかし、それが聞こえていなかった人は、目玉はそういう事だったと納得したようだ。そして、片方の不思議な現象が『サプライズ』という現実的な解釈がされたため、もう片方も『生焼け』という現実的なもので納得する空気になってきていた。

「さあ、早く片付けちゃいましょうね。いつまでもこのままって事はダメでしょ？」

「……そうですね。誰か、ゴミ袋持ってきて」

七味はまだ、納得しかねるといった様子だが、確かに、神裂の言うとおり、このまま血まみれハンバーグを床に落としておくのはよくない。

「待ちなさい」

しかしそれを止める声があった。

「今度は間に合ったようですね。申し訳ありませんが、七味さん。

もうしばらく、そのままです」

「校長先生……」

止めたのは、校長、八尾比丘尼因幡だった。

「ふむ……」

八尾比丘尼は興味深そうにハンバーグを、そして豚汁の目玉を見た後、神裂を一瞥した。

「それで……また、あなたが説明してくれるわけですか？」

そして、神裂を見定めるように、そう聞いた。

「……」

ちんぷんかんぷんだが、とりあえず、神裂が悪いとなんとなく思った冬美であった。

3 - 8 ・文化祭午後の部々引き込む物々

八尾比丘尼高校 特別棟一階調理室 生徒棟屋上 14:30

冬季冬美は一人、生徒棟屋上に向かっていた。

神社神裂は、八尾比丘尼因幡に校長室へ任意同行を求められ、それに従ったので、今頃校長室だろう。

いや、私はどうすれば。という冬美に対して、神裂はこう言った。

『ちょっと時間がかかりそうだから、屋上で待つてなさい。注意事項としては、そうね、惹かれ過ぎ……引っ張られ過ぎないように』

「どつという意味だつての……」

と、冬美は屋上の重い扉の前で愚痴る。

途中で夏季夏美に会ったら、そのまま仲直りして神裂は無視してやると考えていたのだが、残念ながら会えなかった。何だか、神社神裂に従わないと、仲直りだけでなく、今日はもう二度と夏美と会えないんじゃないか。そんなありえるわけがない事を、冬美は何故か感じていた。

屋上には子供がたくさんいた。バルーンアートを配ったりしているようなので、そのためだろう。

巫女さんだー。カワイー。すごい。いいなー。と、声をかけてくる子供達に、写真はNGですよー。と、軽くあしらいながら、さでどうしようと冬美が考えていると、金髪で眼鏡をかけた日本人っぽくない女子生徒が、声をかけてきた。

「ハロ―。また巫女さんじゃん。さつきはシスターさんが来たし、なに？東西宗教戦争でもすんの？神の威光を使って、特殊能力合戦を繰り広げるわけか。見たい！是非見たい！なんちゃってね。申し遅れたけど私は天文部部長の星麻理亜^{ほしまりあ}。だけど親しい人は私を星宮キラリと呼ぶ！キラリン！！星に代わってお仕置きよ！！はい、今拍手するところ！ありがとう！ありがとうちびっ子たち！！だけどあんまり近づかないで！！私はガキが大嫌いだから！なんちゃって！嘘だよー。私は星占いと子供が大好きさ。いやーん、君達はなんて愛くるしいの。もっとよってきなさい。よしよし、かーわーいーい。くくく、このまま持ち帰ってやるぜ。なんちゃってね。ところであなたがあのぱない人が言ってた巫女さんでいいのかないんだよね。さつき来た巫女さんは違うって言ってたからまあ君だよね。そういう事にした！いやー、ホントあの人はぱないよねー。あの人のおかげでこの企画は大成功さ！感謝感激雨霞！！あの人のぱなさは本当にはぱない！けどまあ、あまり一緒にはいたくないかな。何でも出来る人が一緒にいるって事は何でもやられちゃうって事だもんねー。なんちゃってね。はい、これ。ここになんか適当に書いて風船で飛ばそう。ゆつくりしてってねー」

「…………えつと？」

言いたい事だけ言って、便箋を渡して去っていった天文部部长星麻理亜。なんか色々言っはいたが、冬美の耳に残ったのは、『ぱない人』『ゆつくりしてってね』『なんちゃって』『くらいだった。』『ぱない人』というのは、恐らく神裂の事だろう。で、よくわからないけども、麻理亜は神裂に冬美が来る事を聞いていたらしい。つまり最初から、屋上に来させる予定だったという事だろう。

何考えてんだろう。

冬美は便箋に『自由になりたい』と書きながら、どこまで手の平の上何だろうな。なんて考えていた。氷山つららが倒れるとこまで計算づくだったなら、さすがに距離を置こう。

書いた便箋を風船にくくりつけた後（15時にまとめた飛ばすらしい）、冬美は、屋上の反対側にちよつと行ってみる事にした。

理由としては、屋上なんてあまり来た事がないので、歩いてみたかったという事と、神裂の注意事項は、麻理亜のマシングントークの事ではないかと思ったからだ。

反対側、つまり入ってきた後ろ側には出し物が何もないので、あまり人がいなかった。あまり、という事は、数人はいたという事だ。具体的には、三人。厳密に言えば、二人と一人がいた。

二人の方は、職員棟側のフェンス近くでいちゃついているバカップルだ。服装は、巫女服と袴姿。冬美も知っているバカップルだった。知らないバカップルだったら、冬美はすぐここから離れただろう。子供は見ちゃいけません。というレベルのいちゃつきっぷりである。こちら側に人がいないのは、あいつらがいるのも一つの理由かもしれない。と、冬美は二人を見ながら冷静に思った。慣れというのは恐ろしいものである。

そして一人の方は、特別棟の方のフェンス近くで、こちらに背を向け座っていた。ツインテールで八尾比丘尼高校の制服を着ていた。あんなとこで何してるんだろう。冬美が気になって見ていると、視線に気付いたのか、ツインテールの少女がこちらを向いた。

そして、目があつたようで、合わなかった。何故ならツインテールの少女は、双眼鏡を使っていたからだ。うわ、多分あの人、変人さ。と、冬美は遅まきながら察知した。

「あはっ」

距離はあったが、冬美はツインテールの少女が楽しげに笑ったのがわかった。双眼鏡を目から離し、冬美を手招きするツインテールの少女。少し悩んだ後、冬美はツインテールの少女に近寄った。そこで何をしていたか気になったし、何より、あのツインテールの少女はどこかで会ったような気もしていたからだ。後もう少しで思い出せそうで、もやもやしていた。だから冬美は、手招きに応じた。

「こんにちわ。いい天気ね」

「……こんにちわ」

ツインテールの少女は何故かとても楽しそうだった。

「私の名前は新月満」

ツインテールの少女、新月満の名前を聞いても冬美はピンと来なかった。近くで顔を確認しても思い出さないし、どこかで会ったのは気のせいだったか。

「私は冬季冬美だけど」

何はともあれ、自分も名乗る。

「冬美。冬美ね。あはっ、覚えてたわ。覚えちゃった。もう忘れないわよ?」

「はあ……?それはまあいいけど、えっと、新月さんは何をしていたの?」

「もちろん、愛してたの」

満は満面の笑みで、迷いなくそう答えた。
そしてその笑みのまま続ける。

「あなたと同じで、人を愛してたのよ。あはっ、あなたもようやく、愛というのがわかったのね。友情なんて下らない関係だって気付いたのね！あはっ！私、嬉しいな！今のあなたは、あの時よりも何倍も、愛に満ち満ちてるわ！素敵素敵とっても素敵！」

「……………はあ！？ってか、そう！夏祭りの時の！？」

冬美は思い出した。

同時に、自分が勘違いしていた事に気付いた。

『注意事項としては、そうね、惹かれ過ぎ……………引っ張られ過ぎないよう』

しかし気付くのは少し遅かったかもしれない。手招きに応じた時点で、冬美はもう惹かれていたわけだから。

3・9・文化祭午後の部／長話と本音／

八尾比丘尼高校 生徒棟屋上 生徒棟一階 15:30

「はあ……」

冬季冬美は階段を下りながらため息をついた。疲れからというよりは、開放感と自虐から出たため息だった。

『愛こそが、全てなの。それ以外は、なんにも価値がないの。愛があつて初めて、全ての物に価値が生まれるのよ』

新月満は、そんな事を延々と語った。

星麻理亜のように、会話というにはあまりにも一方的で、冬美はただただ、圧倒されていた。

『愛は永遠とかいう人がいるけれど、それは間違いなの。愛だけが永遠なの。それ以外はすぐに朽ち果て亡くなってしまうの。あなたがそれに気付いてくれて、私、嬉しいな』

いや、私はそこまで思っていない。と、冬美は言えなかった。満に圧倒されていたからという事もあったが、言ったところで無駄だろうとも思ったから。

満が何故、屋上にいたのか。何故、双眼鏡なんて持ち歩いているのか。結局、満は一切説明しなかった。冬美も聞きはしなかった。三十分という長いようで短い時間だったが、冬美には満がどういう人間かはわかった。

屋上にいた理由も、双眼鏡を持っていた理由も、全部、『愛』のため。きつと、そうだ。

『同性愛は私にはわからない愛だけど、それがとっても素晴らしいって事は、私、わかる。それにとっても難しいって事も、私、わかるわ。あはっ、私も今、難しい愛に挑んでるの。周りから見たらそれは間違ってるとかおかしいとか、そういう風に思われるかもしれないし、言われるかもしれない。でもね！そんな事気にしちゃダメよ？だって、愛に生きる私達が間違ってるわけないんだもの！愛は何よりも尊いのだよ！それが間違ってるって思っ言っちゃう周りが間違ってるんだから！私、あなたの愛を、応援してるからね！』

冬美は満が、正しいとは思わない。

満が言っていた事は、そのほとんどは極論のようで、到底受け入れる事は出来なかった。

だけど冬美はこの想いを、冰山つららのように否定せず、神社神裂のように利用せず、三途舞歌のように受容するだけでなく、応援するとまで言ってくれた満の言葉が嬉しかった。それと同時に、不安にもなった。

『私、愛してるの』

満の言ってる事は無茶苦茶だったが、そこには自信があった。ぶれる事のない、確固たる意志があった。誰に何を言われたって、愛を貫く覚悟が見えた。

それに比べて自分はどうか。

夏美の事を愛していると自認したというのに、それに気付いたつららをごまかそうとした。

異常で、気持ち悪いと言われるとわかっていたというのに、いざ、言われればそれに不快に思い、あまつさえ言ったつららに怒りをぶつける。

夏美を愛していると想いながらも、元の幼なじみの関係でもいいと思ってる。そのくせ、夏美がそういう態度を取れば不愉快に思う。

自分から仲直りをしようと思込んだくせして、結局、神裂に協力してもらってる。

自分の想いは、自分の愛は、彼女に比べたら、愛でもなんでもないんじゃないか。私は本当に、夏美を愛しているんだろうか。そう、勘違いしてるだけじゃないのか。

満の愛は、冬美には毒のようなものだった。自分を殺すような劇薬にもなるだろうし、自分を救う良薬にもなりうる毒だった。

『バイバイさよならまたいつか。グッドバイ』

満は、15時くらいに、唐突にそう言って、ひらひらと手を振って屋上からいなくなった。それを見計らったように、麻理亜が風船を飛ばすよー。と、呼びに来た。

15時を過ぎても、神裂は現れなかった。冬美はブーツと、愛について考えるでもなく考えながら、天文部のお手伝いをしていた。手伝いというのは、バルーンアートをする片手間に麻理亜の話聞き流すものだった。

『私はハーフなわけさ。麻理亜ってのはマリアなわけよ。っつーわけで私を崇めてもいいんだよ？なんちゃってね』

麻理亜の話は、やはり、一方的で、聞いてもらうのではなく、話すだけで満足しているようだった。それは満も似たようなものだった

が、麻理亜の話は、一貫性がなく、本当にどうでもいい話だった。それが、よかった。文字通り、毒気が抜かれた。

15時30分。毒気を抜かれたとはいえ、満の言葉はなかなか離れない。さすがに、冬美はもう、神裂を待てなくなっていた。

冬美は麻理亜に別れを告げ（別れの挨拶は短かった）神裂を、もしくは夏美を捜しに屋上を出た。

『愛があれば何でもできるのよ。逆に、愛がなければ何もできないの』

「……………ああ」

麻理亜のどうでもいい話がなくなると、満の話を思い出してしまい、冬美は不安になる。

本当に自分は夏美を愛しているのだろうか。

夏美は私の愛を受け入れてくれるのだろうか。

受け入れてくれない可能性を考えれば、もうしばらくこのままでもいいんじゃないだろうか。

幼なじみの関係でいいじゃないか。そこにも確かに愛があるんだから。

でも、そんなちっぽけな愛じゃ、私はもう満足できないんだろっなあ。

うだうだと悩みながら、冬美は生徒棟一階まで階段を下り、職員棟の方へ足を進める。とりあえず、神裂が行ったであろう校長室に行ってみる事にしたのだ。もちろんその途中で夏美を見つけたら、神裂を捜すのはやめにして、告白するつもりであった。

「アハハハハハ！！」

渡り廊下まで来ると、なるほど。これが狂ったような笑いなのか。という笑い声が聞こえた。

職員棟の方から聞こえるなあ。と、思つて冬美が立ち止まると、笑い声の主が職員棟の曲がり角から姿を現した。

「アハハハハハハハ！！」

「……冰山さん？」

つい、疑問文になつてしまつたが、それは冰山つららだった。狂つたように、というか狂つた笑いを上げながら、こちらに走ってくる。何故か、修道服を着ていた。もしかしたら、他人の空似かもしれない。

「冬季冬美！！」

冬美が頭にハテナマークを浮かべていると、今度は曲がり角から神裂が現れた。冬美は驚いた。遠目でもわかるくらい、神裂は必死な表情を浮かべていた。あの人、必死になれるんだ。それが冬美の率直な感想だった。

「そいつを捕まえる！！」

「へ？」

言葉を脳が理解するより先に、体が動いた。今まさに、冬美の横を駆け抜けようとしたつららの腕を、冬美は掴んだ。

「わっ！」

暴走列車のように走っていたつららを、無意識で掴んだのだから、その衝撃は倍だった。危なくそのまま引きずられそうだったのを、なんとか踏ん張って踏み止まる。

「あら」

腕を掴まれて、初めてつららは冬美の存在に気付いたようだった。

「あんたレスビアンじゃない」

「……え？」

冬美は、あまりにも直接的な言い方に固まった。しかしつららは、そんな事気にせず、妖艶に微笑み言った。

「なあに？そんな力強く掴んで。もしかしてあなた。あたしにホの字？」

「っっ！？」

冬美は掴んでいた手を離れた。目隠しをして物を掴んで、確認して見たらそれが生理的に受け付けない物だった時のように、素早い、危機感から来る反応だった。鳥肌が立ち、悪寒が走った。

つららに惚れたのかと言われたからではない。それが凶星だったからという事でも断じてない。『午前中に会ったあの冰山つらら』が『妖艶に微笑んで、あたしにホの字』と口にしたのが、『そんな事が出来る冰山つらら』が、気色悪かった。冬美には到底、理解出来ない心の機微だった。

「バイバ〜イ」

冬美が手を離れた隙を見逃さず、つららはまた駆け出そうとした。

しかし。

「必殺、首筋ドン」

足が止まったチャンスを見逃す神裂ではなかった。特別棟に向かおうとしたつららの首筋に、そんなふざけてるような事を口にしながら、ふざけた強さの手刀を喰らわせた。つららは呻き声一つもらさず、倒れた。

「ちっ、しくじった。今日こいつが現れるとは……想定外のストレスか、思ったより氷山つららの意識が弱くなってるのか、強くなってるのか……修道服……そういう事か」

神裂は倒れたつららを見ながら、ぶつぶつ呟いていると思ったら、早々に結論に達し、倒れているつららを軽々と背負った。

「あの……どついう事ですかこれ」

冬美はとりあえず、説明を要求した。周りで見ていた人達も、気になっっているようだ。

「え？ああ、うん。説明しよう！必殺、首筋ドンとは、漫画やアニメなどでよく見る首筋に手刀を当てて後遺症なく気を失わせる技を、現実にやるといふ技なのだ！」

「……」

どや顔の神裂を、冷めた目で見る冬美。

「冗談よ、冗談。移動しましょう。この説明は、納得させるのは難しいから」

「はぁ………?」

よくわからないが、人が多い場所では説明したくないという事だろう。

「上履きが汚れるの嫌とか、校舎を汚すなんてとんでもないとか、言わないわよね」

「まあ、はい」

冬美と神裂は、生徒棟と特別棟の間にある中庭、通称庭園に足を踏み入れた。土で汚れるが、まあ気にしない。

そこでは、花が売られているためか、奥様方が多いように思えた。人込みの中に、若葉紅葉と南穂波の姿が見えたが、こちらには気付いていないようだった。

「さっき手を離れたけど、あれはどうして?」

「いや、なんというか……気持ち悪かったの」

つららはまだ気を失っているようなので、正直に言った。

「ふーん、あなたって、思ったより感受性高いのね。小さい頃とか、

人の顔を気にして生活してたでしょ。夏美ちゃんの後ろをちょこまかついて行く幼いあなたが目に浮かぶわー」

「そうですけど、なんかそれが関係あるわけですか？」

「もちろん。それに、協力してくれたあなたに、感受性が高いって事は、他人の影響を受けやすいから気をつけなさいっていうアトバイスでもしてあげようかなって。今のあなたは、夏季夏美の影響から出来てるわけでしょ？あなたにとって夏季夏美はヒーローみたいなものだったんでしょ。子供はヒーローに憧れるもんねー。いや、今の状況を考えれば、ヒロインに憧れたのかな？」

「……不愉快なんで、分析するのやめてくれます？」

当たってるので、反論しづらいから腹が立つ。

「じゃあ、分析はやめて見解を。あなたにとってラッキーだったのは、夏季夏美よりあなたのスペックが高かったという事と、夏季夏美の性格がよかった事よね。スペックが低かったら、コンプレックスで性格歪んだでしょうし、夏季夏美の性格が悪かったら、やっぱりコンプレックスで歪んだでしょうしね」

「それ、今言わなきゃいけないような事なんですか」

「今しか機会がないしね。まあ、黙って聞きなさい。屋上の時のように、聞くでもなく聞きなさい」

「……わかりました」

確かに機会は今しかないだろう。今日が終われば、神裂とこんな風

に話す事もないだろう。冬美は神裂があまり好きではないが、神裂という人間に興味もあるのだ。だから行き先もわからないが、神裂についていきながら、話を黙って聞く事にした。

「あなたならわかってくれると思うけど、私にだって限界ってものがあるのよ。そりゃね。あなた達が私を見て、天才だとか、カリスマだとか、神様だとか、そう思うのは別にいいのよ。私は自分が普通だとは言わないし、凡人だとは思わない。人より優れてるのは否定しない。ただねえ、だからといって何でも出来るとか、何でもしてくれるかと思うのはどうなの？ふざけるなって話よ。私だって、天才で神様みたいだとしても、人間よ。やりたくない事や出来ない事がある。それを忘れる人が私は大嫌い。そういう奴らは、私が『大嫌い』っていう感情を持つてるって事さえ忘れてるし、受け入れない。その点あなたは、さっきの私を見て、必死になれるんだと、安心したでしょ。私を同じ人間だと感じたでしょ。好感度アップ。これでああなたがもう少し、確固たる価値観、つまりまあ、紅葉みたいに強かったら友達になれたんだけど。まあ、高望みよね。ああ、安心して。ただの愚痴じゃないわよ。ちゃんと話は繋がってる。ようは、私だけじゃちよつと、冰山つららに関しては何手にも回す事があるから、あなたには少し気にかけてもらいたいというお話。それをする前に、一応、私が何でも出来るわけじゃないって事を言うっておきたかったのよ。

あなたも薄々は気付いているでしょうけど、冰山つららはあなたよりも感受性が高い、言い換えれば繊細な子なの。あなたの場合はさっきも言ったように、生まれながらに側に、夏季夏美という保護者兼指針があったわけでしょ？夏季夏美に守られながら、自分を形勢出来た。でも、この子にはそういう存在が皆無だった。ガラス細工を幼児に注意せず与えるようなものね。もしあなたに、夏季夏美という幼なじみがいなかったらどうなっていたか想像してみなさい。今のよう強気なあなたには、決してなっていないでしょう。冰山

つららはつまりそういう子よ。そこにさらに、歪んだ教育がされている。この子は守られて強くなる子なのに、守る事を強いられた。丸い形の粘土に三角の型抜きを押し付ければ三角の粘土が出来るけど、丸い形で使われていた粘土の一部が欠けてしまう。あなたは優しく捏ねられて三角になったから欠けはしなかった。冰山つらは、欠けた。欠けているのよ、この子。ただ、欠けたその粘土も、元は一部の粘土だった。そこが重要で、問題なわけなのよねえ。

理解しなくてもいいし、意味がわからなくてもいいわ。冰山つららをどうにかして欲しいとも、友達になれとも、もちろん言わない。ただちよつと、冰山つららを気にかけてあげて欲しい。さつきみたいに、『冰山つらら』らしからぬ行動をしたら、殴つても止めてとは、言わないけど、フォローくらいはしてくれたら、私としては嬉しい。まあ、言わなくてもいいとは思うけど、一応、さっきの事は内緒ね。桜木さくらにも、今のところは内緒にしといて。さて、ついたわ」

神裂が立ち止まったのは、開会式を行った第二体育館の裏だった。第二体育館の裏には、急斜面の土手があり、その上にテニスコートがある。そのため平地、コンクリート部分は狭く、倉庫等を置いてしまうと通れなくなってしまうため、テニス部が使っているであろうロッカーが置かれているだけで、大きな倉庫は置かれていない。そういうものは、第一体育館と第二体育館の間に置かれているのだ。

「ここに座って待ってなさい」

「……ベンチ？」

それは木製の古いベンチだった。校舎側からはロッカーが陰になって見えず、校庭側からは、体育館の裏口がある関係で、体育館自体が邪魔になって見えない。体育館裏にこのように来るか、テニスコ

トトからでしか見えない場所に、隠れるように置かれていたベンチだった。こんなところにベンチがあるなんて、冬美は初めて知った。座ってみると、雨に当たらないところに置かれているためか、古そうだが腐ってもおらず、不思議と落ち着く、座り心地がいいベンチだった。

「それじゃあ私は夏季夏美を連れてくるから。あなたはその間に、仲直りの言葉でも考えときなさい」

「仲直り……」

神裂の手助けは、ここまでのようだ。シチュエーションは用意してくれたが、そこまではやってくれない。

冬美は考える。自分は、仲直りがしたいのか、それとも告白したいのか、と。

「……まだ、ダメなようね。だから注意したのに」

神裂は、やれやれ。と、言った様子でため息をつき、つららを背負いなおして、諭すように優しく言った。

「いい？冬美。よく聞きなさい。愛が全てではないわ。愛がなくても、一緒にいる人なんて珍しくもないし、愛がない家族だって存在する。逆に、愛があっても一緒にいられない人も珍しくもないし、愛があるのに一緒になれない家族も存在する。今のあなたはもしかしたら、それは愛が足りないからだとか、愛の想いが弱いだとか、愛じゃないだとか、そう思ってしまうかもしれない。だから今ここで、告白しようとか、ただの幼なじみという関係じゃなくそうとか、思うかもしれない。だけどね、冬美。焦ることなんかない。愛が全てなんて、愛にしか価値がないなんて、寂しいと思わない？あなた

達の今までの関係は、幼なじみという関係は、友情と愛情が入り混じったその関係は、価値がない。あなたはそう断じてしまうの？」

「……………結局」

冬美は、神裂の言った事を考えながら、一番気になっていた事を聞く事にした。

「結局……………あなたはどのようにしてここまでしてくれるんですか？」

シチュエーションを用意して、忠告までしてくれる。その理由は？

「……………最初は、つららさんのためだけだったんだけどねー。今は、そうね。五割くらいはあなたのためかな。最初はあなた達じゃなくてこの役は、南奈美と若葉枯葉にしようと思ってたわけだし、あなたを見た時も、こいつの方が都合いいかもって、その程度だった。でもまあ、話してみたら、あなたは思ったよりも優秀で、弱かった。夏美さんと一緒にいる時は、もっと強そうで、馬鹿そうだったから見誤ってたわ。つららさんやあなたのような子を見ていると、んー……………何だかほつとけないのよね。もしかしたら神無に必要なのは、さくらさんみたいに癒される優しい子じゃなくて、夏美さんみたいに強くて真つすぐなヒーローみたいな子なのかな。その可能性を教えてくださいあなたに対するこれはお礼みたいなものよ。ありがとう。そんな感じ。頑張っつてね」

最後の方は早口で、照れたように笑い、神裂は逃げるように去っていった。会った時のあの、強迫的なまでに絶対な印象を冬美に与えた神裂からは想像が出来ないほど、人間らしいその行動に、冬美は呆気に取られた。そして、自分が感じた第一印象なんて当てにはならないな。と、そう思えた。

「愛は全てじゃない……焦ることはない、か」

麻里亜のどうでもいい話、神裂な意味深な話、そして、神裂の思いがけない人間らしい行動で、冬美は今口にした事を、そうだよな。と、思えるようになった。満と自分を切り離れた。今日一日、図書館にいた時以外は、ずっと不安定だった冬美は、ようやく落ち着けた。

「……………」

今は何もイベントがされていないのか、体育館からも音は聞こえず、校舎の喧騒もここには届かない。

冬美は今日一日合った事を思い出しながら、静かに落ち着いた気持ちで、夏美を待った。

『ありすちゃん今どこにいるの！！保護者とお母さんが校長室で待ってるから今すぐ帰ってきて！お願いだから私をあんまり心配させないで！お母さんを一人にしないでー！！』

「……………」

なんか変な放送が聞こえたが、聞かなかった事にして、冬美は落ち着いて、待つ事にした。

3 - 10 ・文化祭午後の部〜素直になれば簡単な話〜

八尾比丘尼高校 第二体育館裏 16:00〜

夏季夏美は思ったよりも早くやってきた。あの変な放送があつてからまだ、数分も経っていない。

「やあ」

「……やあ」

冬季冬美が笑いながら挨拶すると、夏美は憮然とした表情で挨拶を返した。

「こんなところで奇遇だね」

「……そーですね」

夏美は不機嫌なようだ。しかし、冬美の気持ちは落ち着いていた。自分でも驚くくらい冬美は落ち着いて、しっかりと夏美を見ることが出来ていた。夏美を見ても、理不尽な怒りも漠然とした不安も、今の冬美にはわからない。代わりに、今まで感じた事のない物が体中に広がってくるのを感じていた。

「なんか、久しぶりに夏美の顔を見た気がするよ」

「私はそんな気にはならないよ」

「うん、そうだと思った。とりあえず、座ったら？」

冬美が自分の隣を叩くと、夏美は仏頂面なまま、素直にそれに従い座った。

「なんか夏美、機嫌悪そうだね」

「そっちは機嫌いいみたいだね」

冬美は夏美を見るが、夏美は冬美を見ない。正面の土手を敵のように睨んでいる。

「今日一日、何してた？」

「別に。何も。冬美は？」

「私は、そうだな。色んな人に会って話したかな」

「ふーん……どんな人に会ったわけ？」

「まずは、虹野さんに会ったかな」

「虹野なんて、毎日会ってるじゃん」

「いや、よく考えると、夏美がいない時に虹野さんと話したりするのは、初めてだった気がする」

「……」

夏美は訝しげに横目で、冬美を見た。冬美は夏美を見ておらず、楽

しげに足を揺らしながら、正面を向いて微笑んでいた。

「虹野さんは思った以上に我が儘で、自分の気持ちに正直な人だったなあ。多分、純粹何だろうね。鈴乃音さんも桜木さんも大変だ」

「鈴乃音はわかるけど、何で桜木まで大変なわけ？」

「んー、それは秘密。夏美は口を滑らす時があるから、教えてあげない」

「……あっそ」

夏美はそう呟いて、土を蹴った。いじけたみたいだ。冬美はクスツと笑った。

「桜木さんと冰山さんにも会ったよ。あ、その前に部長の幼なじみさんにも会った。私は幼なじみっていうのは、私と夏美みたいにいっしょにいるものなのかなって思ってたけど、そうでもないんだよね。まあ、当たり前だけど、なんかそう思っちゃうんだよね。私、夢見がちかな？」

冬美は探るように夏美を見たが、夏美は地面を見ながら「ノーコメント」と、投げやりに答えた。

「その幼なじみさんはね。部長が好きみたいだよ」

「へえー、まっ、ありがちでしょ。漫画とかでよくあるシチュエーションじゃん。幼なじみの片方が好きで、もう片方はそうじゃなくて、家族だとか思ってるようなの」

「うん、そつだね。ありがちだ」

「……」

「……」

無言。

今の冬美は、その無言も心地よかった。

「……で、桜木と冰山がどうしたって？」

しかし夏美には居心地が悪かったのか、続きを促す。

「うん。虹野さんが桜木さんと二人で話したいっていうから、私は冰山さんと二人つきりで話すことになったんだ」

「ふーん、冰山、怖くなかった？あ、そついやなんか知らんけど、黒いワンピース着てなかった？ってか、何であいつに背負われてたわけ？」

「その辺はよくわからないけど、全然怖くわなかったよ。思ったより性格は悪かったけどね。後、ちよつと私に似てるかもって感じたね」

「ああ、冬美、性格悪いからね」

「桜木さんがいないとダメなところが似てるって話」

「……」

夏美は冬美をまた、訝しげに見たが、やはり目は合わなかった。意図はわからなかった。

「その後は、神社さん……は、まあいいか。三途さんと鈴乃音さんに会ったよ」

「……いや、もうそういう話はいいんだけど」

「まあ聞いてよ。三途さんと鈴乃音さんは、何だか癒された。あの二人、とってもお似合いだね。我が儘とはちよつと違うかもしれないけど、我が儘な鈴乃音さんと、捻くれてるけど優しい三途さん、凹凸がピッタリ合ってる感じがしてさ。まあ、三途さんが合わせてるって感じだけ。ホントに三途さんはいいい人だなあ。話せば話すほど、そういう風に思う。色々と相談にのってもらっちゃった」

「……私は三途、あんまり好きじゃないけどね」

「え、何で？」

冬美が夏美を見ると、夏美は上を向いて暇そうに足をぶらぶらさせながら「なんかめんどくさそうだからー」と、めんどくさそうに答えた。

「うん、まあ、めんどくさそうではあるけど、それがまた、三途さんのいいところだと思うな。夏美も話してみればわかるよ」

「次」

「ん？」

「次行こうぜ、次。私、冬美と違って忙しいんだから」

「なんか予定あるの？あぁ、秋春君を待たせてるの？って、何、そんな睨んで……」

夏美は冬美を睨んだ。何か地雷でも踏んだかなと、冬美は思ったが、全く焦ってはいなかった。むしろ、久方ぶりに目があった事が嬉しかった。すぐに夏美が目を逸らしてしまったので、その嬉しさは長続きはしなかったが、冬美は落ち着いていた。自分でも驚くくらい、今の冬美は心が穏やかだった。

「……つまらない言われた」

「ん？」

「だからあ、秋春君に今の夏季さんはつまらないからどこかに行ってくれないかなって言われたの！笑顔で言われてすっげえショックだった！」

夏美は苛立ちを発散するように、手足をバタバタさせた。

「ショックでとぼとぼ歩いてらあいつが来るし！事情一切話してなのににさんざん笑いやがるし！冬美は預かった返して欲しければとか言っし！なんか他にも色々意味わからん事言っし！来てみたら冬美はなんか落ち着いてるし！なんか今日一日楽しそうだったみたいだし！なんか私だけ焦ってるみたいでさ！なんか私だけバカみたいでさ！なんかもう最悪だよ！今日一日何も楽しい事なかった！」

鬱憤を全て吐き出すようにバタバタして、大声を出す夏美の目には涙が浮かんでいた。それを見て冬美は何故か、あ、今だなんて、思

った。

「ねえ夏美」

「何！？何泣いてんのか聞く気なら悪いけど！これは泣じゃなくて心の汗だからって答えるからね！！」

「仲直りしようよ」

「だからこれは泣じゃなくて、はあ！？」

夏美は急にそんな事を言われて驚いたようだが、冬美はとても気分がよかった。とても清々しい。憑き物が落ちたような気分だ。何でこの言葉が言えなかったのか。何で小難しく色々と考えていたのか。今の冬美には不思議でしようがなかった。

夏美の事は好きだし、愛してるし、いつかキスとかしたいなという想いはある。

しかし、夏美がこの想いを受け入れてくれないかもという恐怖もある。

だけど、夏美とこのままただの幼なじみで、ただの親友で、ただの友達で、ただの友情だけで、ずっと一緒にいられないかもしれないという不安もある。

「え、いや、今なんて？」

「だから、仲直りしようよ」

だから、冬美はこれまでの関係に戻って、このままの関係を続けていっていいのか疑問だった。だから、『仲直りしよう』たったこれだけの言葉を口にする事が出来なかった。

なんてバカらしい。

「……何、私達、喧嘩とかしてたっけ」

「してなかったかもしれないし、してたかもしれない。でも、そんなの重要じゃないし、どうでもいいじゃん」

今思えば本当に、何で怒っていたんだろう。夏美に友達だとはつきり言われたから怒っていた。くだらない、本当にくだらない。そんな事、どうでもいい。

「いや、どうでもよくはないと思うんだけど……」

「うっん、どうでもいい。重要なのはさ」

新月満は、愛が全てだとそう言った。愛以外は無価値だと。あなたはこのままではいけないと。あなたは変わるべきだと。あなたはそれに気付いたと。それは素晴らしい事だと。確かにそうかもしれない。満の言う通り、愛は尊く愛が全てで、自分もそれに気付いているのかもしれない。だけど、そんな事はどうでもいい。

「重要なのは、原因はよくわからないけど、私と夏美が仲たがいでるってこと」

「原因は冬美にあるとわかってるんですけど……」

「原因はよくわからないけど、私と夏美が仲が悪くなってるってこと。だからね」

愛だとか、不安だとか、恐怖だとか、疑問だとか、これまでの事とか、これからの事だとか、そんな事を全部取っ払って、忘れてしまつて、素直になつて考えてみれば、残るのは単純な事で、大事な事。

「だからさ、仲直りしようよ」

冬季冬美は夏季夏美と仲直りしたいって事と。

「やっぱりあれだ。夏美がいないとどうもダメだ。なんか色々難しく考えちゃう」

冬季冬美は夏季夏美が側にいないとダメだという事。

そんな事はわかっていたのに。何をしていたんだろう私は。こんなに時間をかけて、こんな場所を用意してもらつて、ようやくスタート地点に戻れた。ダメだな。本当にダメだ。私は今も、夏美がいないとダメなんだ。夏美がいないと私は、うまく生きていけないよ。

「だから、仲直りしたいんだけど、ダメかな？」

「……ダメなわけないじゃん」

冬美が握手を求めると、夏美はどこか釈然としなないといった様子で、握手に応じてくれた。冬美は、ホッとした。肩の荷が下りたような、失ったものが戻ってきたような、そんな気持ちだ。

「ありがとう」

「……いいよ」

冬美が笑うと、夏美は苦笑いを浮かべた。昔、保育園で似たようなやり取りをした気がして、何だかおかしかった。

「……これで、いいわけ？」

「夏美は不服なわけ？」

「不服ではないけど、なんつーか……拍子抜けっていうか」

「お互いに素直になれなかったただだからね。素直になれたらこんなもんだよ。素直になるまでに無駄に時間がかかっただけ。そう、漫画の回想みたいなものだったんだよ。今日、これまでの事はね」

「いや、私は素直じゃなかった覚えがないし、その例えはわかりづらいし……何だかなあ」

どうも夏美は不満があるようだ。冬美は仲直りが出来て今は満足だというのじ。

「仕方ないなあ。ほら、夏美。立って」

「何さ、急に」

「いいから、起立」

冬美に促され、夏美は渋々立ち上がる。そして向き合う。

「つまり夏美は、イミテーションが足りないって思ってるわけだ」

「イミテーション？」

「そう、イミテーション。というわけで、ハグしてあげる」

ニツコリ笑って冬美は、「パグ?」とかふざけた事をぬかしてる夏美に、抱き着いた。

「……………なんじゃこりゃあ!」

夏美が状況を認識するのに数秒かった。

「何って、ハグ。欧米じゃあ仲直り、もしくは親愛のアピールとしてよくやるじゃん」

「ここはジャパニーズですよ!」

「今度は英語を念入りに勉強しようか」

「ギャー!」と、夏美が何かに対して悲鳴を上げたが、冬美は気にせず、ハグを続行。触覚と嗅覚で、久しぶりの夏美を感じる。

「恥ずかしい! 恥ずかしいよこれはさすがに冬美っぺ!」

「何をいまさら。昔、よくしたじゃん。寝る時とか、夏美から抱きしめてくれたじゃん」

「あれは冬美が寒い言うから仕方なくですよ!」

「じゃ、私、今、寒い」

「片言の理由がわからない!」

何も冬美は、自分の想いを捨てる決意をしたわけではない。ただ、この想いをどうにかするにしても、それは、夏美の側にいて考えるべき事なのだ。夏美がいないとこで、色々考えるなんて、間違いだし、無駄だ。冬美はそれに気付いたのだ。冬美はそれを、思い出したのだ。

「あ」

「何！？ UFOかなんかに見られた！？」

「いや、神様に見られた」

「お天道様にかー！！ 恥ずかしさで死ねる！」

もちろん、お天道様に見られたのではなく、神裂だ。ロッカーの陰からこちらを覗いていた。背中をつららが起きているかは定かではない。神裂は冬美が気付いた事に気付いたらしく、ニツコリ笑い手を振ってきた。どうやら祝福してくれているようなので、冬美も笑ってサムズアップで感謝を伝えた。何だかんだで、冬美にとって神裂は『いい人』という評価で落ち着いたのだ。神裂はもう一度手を振って、顔を引っ込ませた。

「ふ、冬美さん冬美さん。さすがにもうそろそろいいんじゃないかな？」

「んー、もうちょっと。なんか夏美、いい匂いするね」

「あー、昨日、新しいシャンプーにしたからかな。そういう冬美もいい匂いがするって違うわボケ！ 羞恥心で殺す気か！」

「もう、仕方ないなあ」

冬美は渋々、夏美から離れた。

真つ赤な顔を手で仰ぎ「ああ、恥ずかしかったあ」と、呟く夏美を見て、冬美は笑う。とても気分がいい。とても楽しい。夏美が近くにいるだけで、こんなにも幸せになれる。それは愛してるからか、それともまた別の理由でか。それはわからないけど、幸せなのは間違いないかった。

「ほら、行こうよ夏美」

冬美は夏美の腕に手を回した。夏美はそれを、ため息一つで受け入れた。

「行くつとどこに」

「どこって、今日が何の日か忘れたわけ？文化祭。お祭りだよ。文化祭を回るつよ、一緒にさ」

「……まあ、別にいいけどさ。でももう、後一時間くらいしかくない？」

「大丈夫。明日もまだあるし。明日も一緒に回るつよ。ダメ？」

「いや、まあ……冬美がそういうなら、別にいいけどさ」

「よかった」

冬美と夏美は腕を組みながら、校舎へ向かった。

こうして冬美は、色々と寄り道したが、ようやく本当の文化祭、夏
美と一緒に楽しむ文化祭を、始める事が出来たのだった・・・

3 - 10 ・文化祭午後の部（素直になれば簡単な話）（後書き）

七不思議？『校舎裏の少女と少年』

これは校長先生から聞いたお話です。

創立当時、特別棟の校舎裏、駐輪場の横に、古い木製のベンチが置かれていました。このベンチは、校長先生が通っていた今はもう廃校になってしまった高校からわざわざ持ってきたものらしいです。

高校時代。校長先生には親友がいました。その少女は、校長先生と家が近く、小学校の頃から仲が良かった幼馴染で、互いに何でも気楽に相談しあう仲でした。ある日のこと、少女は校長先生に泣きついてきました。その少女がそんなに取り乱すことは今までなかったらしく、校長先生は大変驚いたそうです。とりあえず落ち着かせ話を聞くと、クラスのある少年を好きになってしまったとのことでした。それは少女の少し遅い初恋だったようで、少女は自分のこの想いに戸惑い、どうすればいいかわからず、何でも相談できる間柄であった校長先生にも打ち明けることが出来ず、ずっと一人悩み苦しみ、しかし耐え切れず、校長先生に打ち明けた。ということらしいです。

校長先生は高校時代からああいう人だったらしく、あなたの望むようにしなさいと助言したらしいです。少女は、告白したいと言いました。しかし、少女は少年に嫌われるのが怖いと、少年に他に好きな人がいたら迷惑になってしまうと、だから告白するのは怖いのだとも言いました。それならば、その想いは秘めておきなさいと校長先生が言つと、もうこの想いを秘めて置く事は出来そうにないとも少女は言つのです。そこで、校長先生は手助けをすることにしました。いわゆる、愛のキューピットになったのです。

少年と少女を、校庭の隅にあった目立たないベンチに呼び、舞台を整えてあげました。次の日、少女は少年と一緒に、校長先生に感

謝を伝えにきました。二人は相思相愛だったらしく、互いに素直になれなかっただけなのです。それからというもの、少年と少女は放課後、いつもそのベンチで愛を育んでいました。付き合いが悪くなつた少女に対して寂しさを感じつつも、校長先生はその二人を見守っていました。

しかし、二人のその関係は長くは続きませんでした。高校卒業後、彼らは離れ離れになることになりました。今のように携帯電話があれば、遠く離れても何も問題ないかもしれませんが、これは五十年前の話。遠距離というのは、二人にとって大きな壁でした。二人は泣く泣く別の道を進むことを決意しました。そしてこのベンチに自分達の名前を彫り、十年後、まだ相手を愛していたらここに戻つてこよう。そして結婚しよう。そう、校長先生の前で約束しました。校長先生はその二人の誓いの、見届け人になつたのです。

結局、二人は十年後、このベンチにはやってきませんでした。それは、その約束を忘れたわけではありません。愛を失つたからではありません。二人共、十年経つ前に死んでしまったのです。事故だつたようです。しかも不思議なことに、二人は同じ年に、事故で亡くなつてしまったのです。校長先生は二人の死を悼みました。そしてそれから、数年後。校長先生は同窓会に出席しました。そこで、当時の担任で、今もその学校で働いている教師から、ある話を聞いたのです。グラウンドの隅にあるあのベンチに、放課後、少年と少女の幽霊が出るという話を。校長先生は、なるほど。と、ただ、納得しました。

そのような思い出があるベンチだったので、校長先生は、その高校が廃校になったとき、そのベンチを譲り受け、この高校に置いたのです。しかし、不思議なことに、置いてすぐに、そのベンチはなくなつてしまいました。誰かが持ち去つたのか、それとも、そのベンチが自ら元の場所に戻つたのかは、わかりません。ただ、もしかしたらそのベンチはまだこの高校にあるのかもしれませんが。放課後、私が遅くまで特別棟に残っていると、窓から、いつもはないそこに、

ベンチを見かけるときがあります。慌ててその場所に行ってみても、ベンチは影も形もありません。そのベンチの目撃証言は多くあり、出現する場所はどうかやら校舎裏だけではないようです。目撃証言だけでなく、ベンチに片思いの相手の名前を刻んだら両想いになれたという話や、偶然見つけたそのベンチで告白したら、自分でも驚くほど落ち着いて出来たという話もありました。

そんな恋のベンチ。あなたは見つけたら、どうしますか？

4 - 1 . 文化祭最終日〜朝食〜

南家リビング 朝食風景 6 : 00〜

「え、来ない？」

南奈美は母親、南穂波の言葉に驚き、箸をとめた。

「そ、今日は文化祭行けないのよ。日曜日だというのにお仕事があるという事はそれだけ大変だという事なのよ。でも、奈美がどうしてもというならお母さん、頑張つてサボタージュしちゃうかな！」

「頑張つてサボるつて、矛盾してませんか？」

てつきり来るのかと思って驚いたが、まあ別に来なくてもいいか。というか来ない方がいいような。と、考え直した奈美はご飯を再開する。

「矛盾なんてしてないわよ。サボタージュが楽なんてのは幻想なのよ。」

「はあ、そうですね。わかりませんがどわかりました。サボタージュは頑張らなくてもいいので、仕事を頑張つて下さい」

「奈美ちゃんも枯葉君と頑張つてね。今日は昨日より大変な予感があるわ。ほら見て！この穂波レーダーがこんなに逆立っている！」

「昨日……」

穂波が「見て見てー」と、どこからか取り出した下敷きで髪の毛を逆立てるのを当然無視して、昨日の事を思い出す。

昨日の文化祭は楽しいというより、おかしな事が多い一日だった。奈美は確認していないが、どうやら七不思議に関する奇妙な事が起こっているらしい。それに加えて、奈美の周りもおかしかった。

屋上から犬が落ちてきた事と、八尾比丘尼校長の血をもらいに来た変な人達がいた事を教えてくれた鈴乃音真音は、別にいつも通りだった。いつもを知らないからかもしれないが。

調理室で食べた料理の中に魚の目玉が浮いててハンバーグから血がさらさら隣の部屋が見たことないのに変わってたとかどうとかこうとか教えてくれたのは桜木さくらだった。それを聞いたのは、文芸部の最後の一時間、全員で当番しましょうという時だったのだが、何故か氷山つらは一緒にではなく、さくらは浮かない表情だった。つらははどうしたか聞いても、曖昧な答えしか返ってこず、事情を聞いてみようか、いや、あまり深入りしてもと悩んでると、虹野光がきてしまって、結局、聞けずじまいだった。

その全ては神社神裂が仕組んだ物だと騒いでいた猫猫子猫も変だったが、あの人が変なのはいつものも事だったので、気にしないとして一番おかしかったのは若葉枯葉である。

昨日は終始、おどおどしており、何かに怯えているようだった。理由を聞いても、「視線が、悪寒が……」とか、自分でもよくわかっていないようだった。ずっとそんな感じで、自分を気にしてはくれず、話しかけても上の空。そんな枯葉と文化祭を回っても対して楽しくはなく、しまいには寝てしまう始末である。大変不愉快だったが、腕を組んでも振りほどかれなかったし、「キスしていいですか？」と、当番中に聞いたら上の空で「ああ、うん」と、言ってくれたので頬にキスをする事が出来たので、いい事もあった。その瞬間を、交代に来た三途舞歌と鈴乃音鈴音に見られて顔がトマトになったの

は忘れる事にする。

それから「奈美ちゃんが冷たい……」と、嘆いている穂波もおかしかった。同情を誘うなら髪の毛を逆立てるのをやめてからにして欲しい。

「昨日も聞きましたけど、昨日は何をしてたんですか？」

昨日、穂波は文化祭に来ていたようだが、奈美の前にはほとんど、顔を出さなかった。一度、文芸部に来た時もすぐに出て行ったし。枯葉が寝ていたからからかうのをやめたのか、それとも一緒に若葉紅葉といたの関係あったのか。

「だから、昨日も言ったけど、普通に文化祭を楽しんだのよ。もう奈美ちゃん。お母さんが構ってくれなかったからって、怒っちゃダメよ？」

「怒ってるんじゃないでして訝しんでるんです。何か紅葉さんと悪巧みでもしてたんじゃないですか？」

「悪巧みなんて酷いわ……そんな猫みたいなのはしないわよ。にやはははー」

猫みたいない笑い方をして……。と、奈美が冷めた目で見てみると、穂波が微笑んだ。ごくたまに浮かべる、娘を安心させる母親の笑みだった。

「企んでいたとしても、奈美。それはあなたのためという事を忘れないでね」

「……やっぱり企んでるんじゃないですか」

奈美はため息をつき、それ以上聞くのをやめ、みそ汁を飲んだ。
相変わらず、美味しい。

若葉家 若葉枯葉自室 6:30

「おはよう枯葉」

「……」

朝起きたら、目の前に新月満がいた。もちろん、満は寝る前にはいなかったわけだし、ここは自分の部屋だ。つまり不法侵入。それが若葉枯葉の現在の状況であり、目覚めた直後だというのに枯葉はそういう状況である事を刹那に理解して。

「チユ」

「ギャアアアア!!」

悲鳴を上げた。

「何だあ!?!」

その悲鳴を聞きつけやってきた若葉紅葉が、泡吹きそなたと抱き着いてほお擦りしている不法侵入者を見て「何だあああ!？」絶叫を上げて満のツインテールを引っ張った。

若葉家リビング 朝食中 6:45

「全く、朝から騒がしいわよ二人共。満ちゃんを見習ったらどう？」

「こいつから見習うべき事が全く見当たらないんだけど!!」

と、紅葉は言うが、若葉家の全てを把握している母親であり満を招き入れた張本人である若葉花恋は、冷静にみそ汁を飲み「うん、美味しいわ」耳元で大声を出されたというのにこの落ち着きよう。さすが紅葉の母親である。

「はい、枯葉、あーん」

「い、いや、みっちゃん？みそ汁をあーんは、な、ないんじゃないかなーって」

「私が作ったおみそ汁、飲みたくないの……?」

「そういうわけじゃなくて、ほら、普通に、一人で飲めるわけです

ので……」

「……悲しいな、私、とっても悲しい」

「やっぱり飲ませていただきます」

「何でそこで折れるんだ!!」

「あらあら、仲良しさんね」

「お母さぁん!?!」

弟を意のままにする泥棒猫と性根が支配されてる弟と呑気な母親。前に横にと、紅葉は朝から大忙しである。

「で、何でお前はここにいるんだ?」

「枯葉、美味しい?」

「おい」

「お、美味しいです、はい」

「あはっ、私、嬉しい。これから毎朝、おみそ汁を作ってあげるね」

「おいこら」

「そ、それはちょっと……」

「ダメなの……?」

「無視すんな」

「ダメというか、なんというか、ねえ？」

「私、悲しいな。哀しくて、悲しくて……あはっ、愛してる！」

悲しげに顔を伏せていた満が、急に抱き着き「……！！」枯葉は顔面蒼白で膠着し「無視すんなあああ！」紅葉が満のツインテールを思いつきり引つ張り「朝から楽しいわねえ」花恋が和んだ。

若葉家は朝から賑やかである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3790m/>

暗中模索で色々探求

2012年1月13日00時46分発行